大日山 35 号墳発掘調査報告書

－特別史跡岩橋千塚古墳群　発掘調査・保存整備事業報告書２－

2013 年 3 月

和歌山県教育委員会

序　　文

岩橋千塚古墳群は、千塚の名のごとく狭い地域に約800基の古墳が密集し、石棚・石梁を有する「岩橋型」と称される特徴的な横穴式石室をはじめ多種多様な埋葬施設が存在することから昭和6年に国の史跡指定を受け、昭和27年には特別史跡に指定されました。

「木の国」と称された本県は自然が豊かで、先人が遺した文化遺産である史蹟・遺跡等が数多く存在します。なかでも、「岩橋千塚古墳群」は国内最大規模を誇り、古墳群として特別史跡に指定されているのは当古墳群と宮崎県西都原古墳群のみです。

和歌山県立紀伊風土記の丘は、この全国にも比類ない貴重な歴史遺産である古墳群を保護し、かつ文化財の学習の場として活用するために、昭和46年に開館しました。昭和48年に取りまとめられた「基本計画」をもとに「第1期整備計画（平成15～26年）を策定し整備に努めてきたところです。

平成21年度には、平成15年度から20年度までの発掘調査および整備事業を実施した古墳について『特別史跡岩橋千塚古墳群　発掘調査・保存整備事業報告書１』として刊行しました。本年度は大日山35号墳の墳丘部分の発掘調査成果について『特別史跡岩橋千塚古墳群　発掘調査・保存整備事業報告書２』として刊行します。

調査と整備を経て報告書をまとめるにあたり、関係者の方々のご支援とご協力を得ましたこと、ここに深く感謝申し上げます。

本書が整備報告書として広く活用されますれば幸いであります。

平成25年3月29日

和歌山県教育委員会

教育長　西　下　博　通

１．岩橋千塚古墳群　全景（平成２年２月撮影）

２．大日山 35 号墳から和歌山平野をのぞむ（東から）

巻頭カラー図版２

３．大日山 35 号墳　全景（西から）

４．東造出　全景（東から）

５．東造出　埴輪検出状況 (北から）

６．東造出　埴輪出土状況（北西から）

巻頭カラー図版４

７．東造出　円筒埴輪樹立状況（西から）

８．東造出　家形埴輪・人物埴輪・須恵器大甕　出土状況（南西から）

９．東造出　翼を広げた鳥形埴輪出土状況（北から）

10. 東造出　人物埴輪（力士）出土状況（北から）

巻頭カラー図版６

11. 西造出　全景（東から）

12. 西造出　埴輪検出状況（南から）

13. 西造出　埴輪出土状況（南東から）

14. 西造出　埴輪樹立状況（東から）

15. 西造出　人物埴輪出土状況（北西から）

16. 西造出　人物埴輪台部出土状況（北から）

例　　言

1　本書は和歌山県教育委員会（以下「県教育委員会」という。）が実施した和歌山市に所在する特別史跡岩橋千塚古墳群の整備報告書である。

2　事業期間は平成15～26年度の計画で、現在継続中である。整備報告書は分冊にして刊行する。今回は２分冊目にあたり、平成15～20年度までの整備事業については、『特別史跡岩橋千塚古墳群　発掘調査・保存整備事業報告書１』（平成22年３月）としてすでに刊行している。

3　当報告書はそのうち平成15～17年度に実施した大日山35号墳の発掘調査について報告する。ただし、石室の調査については、整備事業の最終年度に刊行する整備報告書において報告する予定である。

4　発掘調査は平成15～17年度、遺物整理は平成16～24年度に実施した。事業は、平成15・16年度は県教育委員会文化遺産課、平成17～24年度は県立紀伊風土記の丘が担当した。

5　本書の執筆分担は下記のとおりであるが、遺構の報告については調査担当者による実績報告を元にして仲原が加筆・修正して作成した。

第１章：丹野、冨加見、仲原、萩野谷
第２章：仲原、萩野谷
第３章：黒石、丹野、仲原、藤井、萩野谷
第４章：仲原
第５章：仲原
第６章：仲原
第７章：冨加見
第８章：仲原

6　本書の編集は仲原がおこなった。

7　調査・整理業務で作成した図面・写真及び台帳等の記録資料及び出土遺物は県立紀伊風土記の丘が保管している。

8　調査・整備・報告書刊行にあたり、下記の方々と機関からご指導・ご協力を賜った。

文化庁・和歌山市教育委員会
青柳泰介・有馬義人・井上裕一・犬木努・今西康宏・小栗明彦・賀来孝代・鐘方正樹・河内一浩・車崎正彦・設楽博己・杉山晋作・関真一・高橋克壽・忽那敬三・辻川哲朗・花熊祐基・坂靖・藤藪勝則・前田敬彦・松田度・宮崎康雄・山田隆文・丸山真史・若松良一

凡　　例

1　本報告は、平面直角座標系第Ⅳ系（世界測地系）に基づき、図示した北方位は座標北を示す。

2　基準高は、東京湾標準潮位（T.P.）を使用した。

3　土器及び調査時の土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人二本色彩研究所色票監修小山正忠・竹原秀雄著『新版標準土色帖』を使用した。

調査組織

和歌山県教育委員会

教育長　小関洋治（平成 15 ～ 18 年度）　山口裕市（平成 19 ～ 22 年度）　西下博通（平成 23･24 年度）

生涯学習局長　松永宣詔（平成 15 年度）　西畑行庸（平成 16・17 年度）　板橋孝志（平成 18 年度）
山路正雅（平成 19 年度）　宮下和己（平成 20 年度）　井上誠（平成 21 ～ 23 年度）
喜多英夫（平成 24 年度）

文化遺産課（平成 15 ～ 24 年度）

文化遺産課長　西畑行庸（平成 15 年度）　前山哲雄（平成 16 年度）
藤井保夫（平成 17 ～ 18 年度／平成 15・16 年度副課長）
木下淳（平成 19 ～ 20 年度）　津井宏之（平成 21 ～ 23 年度）　川端真理（平成 24 年度）

副課長　額田誠規（平成 15・16 年度）　武内雅人（平成 17 年度／ 15・16 年度調査班長）
祇園知宏（平成 17・18 年度）　永光寛（平成 19 年度／ 16 年度専門員、18 年度教育企画員）
田中亨（平成 19 年度）　吉田政弘（平成 20・21 年度）　濱口洋（平成 22・23 年度）
松本幸久（平成 24 年度）

専門員　吉田宣夫（平成 15 年度）　冨加見泰彦（平成 15・16 年度）

調査班長　渋谷高秀（平成 19 ～ 22 年度）　黒石哲夫（平成 23･24 年度／ 22 年度主任／ 17･18 年度主査）

主査　佐々木宏治（平成 22 ～ 24 年度／ 15・16 年度技師）　藤井幸司（平成 24 年度／ 7 ～ 23 年度副主査）

副主査　高橋智也（平成 21 ～ 23 年度／ 19・20 年度技師）
萩野谷正宏（平成 20・21 年度／ 17 ～ 19 年度技師）
瀬谷（渡辺）今日子（平成 23・24 年度／ 17 ～ 22 年度技師）

技師　仲原知之（平成 15・16 年度）　津村かおり（平成 20・21 年度）　田中元浩（平成 24 年度）

紀伊風土記の丘（平成 17 ～ 24 年度）

館長　和田正（平成 17 ～ 19 年度／ 20 年度副館長館長職務代理者）
高瀬要一（平成 21・22 年度）　水田義一（平成 23・24 年度）

副館長　山本新平（平成 17 年度）　武内雅人（平成 18 年度）　酒部三依（平成 19 年度）
辻本勝（平成 21 ～ 23 年度）　中野一三（平成 24 年度／ 22・23 年度教育企画員（22 ～ 24 年度総務課長事務取扱）／ 20・21 年度総務課長／ 19 年度学芸課長）

総務課長　畑中伸之（平成 17 ～ 18 年度）

主査　井上佳典（平成 18 ～ 21 年度）　大藤久信（平成 24 年度）

副主査　平田育子（平成 17 年度）　額田誠規（平成 24 年度）　志水敦（平成 23･24 年度／ 22 年度主事）

主幹　山本高照（平成 22 年度（学芸課長事務取扱）／平成 20･21 年度学芸課長／ 17･18 年度主任）
冨加見泰彦（平成 23・24 年度（学芸課長事務取扱）／ 17 年度専門員）

学芸員　萩野谷正宏（平成 22 ～ 24 年度）　仲原知之（平成 22 ～ 24 年度／ 20・21 年度副主査）

副主査　丹野拓（平成 18 ～ 21 年度）

技師　岩井顕彦（平成 19 年度）　佐竹智光（平成 20 年度）

本文目次

巻頭カラー写真
第１章　整備事業の経緯と経過 …… 1
　第１節　整備事業の経緯 …… 1
　第２節　整備事業の経過 …… 1
　第３節　整備委員会 …… 3
第２章　大日山 35 号墳の調査概要 …… 4
　第１節　大日山 35 号墳の位置と環境 …… 4
　第２節　発掘調査・整理作業の経過 …… 8
　第３節　調査の方法 …… 11
第３章　調査の成果 …… 16
　第１節　調査の目的 …… 16
　第２節　後円部の調査 …… 16
　第３節　前方部の調査 …… 17
　第４節　東造出の調査 …… 20
　第５節　西造出の調査 …… 23
第４章　東造出の形象埴輪 …… 43
　第１節　家形埴輪 …… 43
　第２節　人物埴輪 …… 44
　第３節　動物埴輪 …… 44
　第４節　器財埴輪 …… 46
　第５節　不明形象埴輪・形象埴輪基部 …… 46
第５章　西造出の形象埴輪 …… 149
　第１節　家形埴輪 …… 149
　第２節　人物埴輪 …… 149
　第３節　動物埴輪 …… 150
　第４節　器財埴輪 …… 151
　第５節　不明形象埴輪・形象埴輪基部 …… 151
第６章　円筒埴輪・朝顔形埴輪 …… 205
　第１節　円筒埴輪 …… 205
　第２節　朝顔形埴輪 …… 205
第７章　東造出・西造出の須恵器・土師器 …… 211
　第１節　東造出出土の須恵器 …… 211
　第２節　西造出出土の須恵器・土師器 …… 211
第８章　総括 …… 218
遺物観察表 …… 220
写真図版
遺物写真図版
報告書抄録

図版目次

＜巻頭カラー図版＞

1. 岩橋千塚古墳群全景、2. 大日山 35 号墳から和歌山平野をのぞむ
3. 大日山 35 号墳全景、4. 東造出全景
5. 東造出埴輪検出状況、6. 東造出埴輪出土状況
7. 東造出円筒埴輪樹立状況、8. 東造出家形・人物埴輪・須恵器出土状況
9. 東造出翼を広げた鳥形埴輪出土状況、10. 東造出力士埴輪出土状況
11. 西造出全景、12. 西造出埴輪検出状況
13. 西造出埴輪出土状況、14. 西造出埴輪樹立状況
15. 西造出人物埴輪出土状況、16. 西造出人物埴輪台部出土状況

＜図版目次＞

図 2-1. 岩橋千塚古墳群および大日山 35 号墳位置図・・・5
図 2-2. 大日山 35 号墳調査区配置図・・・10
図 2-3. 大日山 35 号墳墳丘測量図・・・13
図 2-4. 調査グリッド図・・・14
図 2-5. 1・5 トレンチ調査グリッド割付図・・・15
図 3-1.17・18 トレンチ平面図・土層断面図・・・25
図 3-2. 2 トレンチ平面図・土層断面図・・・26
図 3-3. 3 トレンチ平面図・土層断面図・・・27
図 3-4.15 トレンチ平面図・土層断面図・・・28
図 3-5.15 トレンチ埴輪出土状況図（平面図・立面図）・・・29
図 3-6. 6・9 トレンチ平面図・土層断面図・・・30
図 3-7. 7 トレンチ平面図・土層断面図・・・31
図 3-8. 8 トレンチ平面図・土層断面図・・・32
図 3-9.10・12 トレンチ平面図・土層断面図・・・33
図 3-10.11 トレンチ・1 トレンチ南側サブトレンチ・16 トレンチ平面図・土層断面図・・・34
図 3-11. 1・11 トレンチ平面図・・・35
図 3-12. 1・13・14 トレンチ平面図・土層断面図・・・36
図 3-13. 1 トレンチ東造出埴輪出土状況平面図 1・・・37
図 3-14. 1 トレンチ東造出埴輪出土状況平面図 2・・・38
図 3-15. 5 トレンチ平面図・・・39
図 3-16. 5 トレンチ西造出埴輪出土状況平面図 1・・・40
図 3-17. 5 トレンチ西造出埴輪出土状況平面図 2・・・41
図 3-18. 5 トレンチ断面図・埴輪出土状況断面図・・・42
図 4-1 ～ 4-26. 東造出家形埴輪 1-1・・・47 ～ 72
図 4-27 ～ 4-30. 東造出家形埴輪 1-2・・・73 ～ 76
図 4-31 ～ 4-35. 東造出家形埴輪 1-3・・・77 ～ 81
図 4-36 ～ 4-38. 東造出家形埴輪 1-4・・・82 ～ 84
図 4-39 ～ 4-40. 東造出家形埴輪 1-5 ～ 1-8・・・85 ～ 86
図 4-41 ～ 4-42. 東造出家形埴輪（千木）・・・87 ～ 88
図 4-43. 東造出家形埴輪（各種部材）・・・89
図 4-44 ～ 4-46. 東造出人物埴輪（盛装男子・巫女）・・・90 ～ 92
図 4-47 ～ 4-51. 東造出人物埴輪（力士）・・・93 ～ 97
図 4-52 ～ 4-56. 東造出馬形埴輪 1-1・・・98 ～ 102
図 4-57 ～ 4-62. 東造出牛形埴輪 1-1・・・103 ～ 108
図 4-63 ～ 4-64. 東造出猪形埴輪 1-1・・・109 ～ 110
図 4-65 ～ 4-66. 東造出犬形埴輪 1-1・・・111 ～ 112
図 4-67. 東造出動物埴輪・・・113
図 4-68 ～ 4-84. 東造出翼を広げた鳥形埴輪 1-1・1-2・1-3・・・114 ～ 130
図 4-85 ～ 4-91. 東造出水鳥形埴輪 1-1・1-2・1-3・・・131 ～ 137
図 4-92 ～ 4-93. 東造出器財埴輪（大刀・靫）・・・138 ～ 139
図 4-94 ～ 4-102. 東造出蓋形埴輪・・・140 ～ 147
図 4-103. 東造出不明形象埴輪・形象埴輪基部・・・148
図 5-1 ～ 5-4. 西造出家形埴輪 5-1・・・152 ～ 155
図 5-5 ～ 5-6. 西造出家形埴輪 5-2 ～ 5-5・・・156 ～ 157
図 5-7 ～ 5-8. 西造出人物埴輪（双脚輪状文形冠帽をかぶった人物 5-1・5-2）・・・158 ～ 159
図 5-9. 西造出両面人物埴輪・・・160
図 5-10 ～ 5-15. 西造出人物埴輪（武人・盛装男子）・・・161 ～ 166
図 5-16 ～ 5-17. 西造出人物埴輪（両手をあげる人物）・・・167 ～ 168
図 5-18 ～ 5-19. 西造出人物埴輪（巫女）・・・169 ～ 170
図 5-20 ～ 5-27. 西造出馬形埴輪 5-1・・・171 ～ 178
図 5-28 ～ 5-35. 西造出馬形埴輪 5-2・・・179 ～ 186
図 5-36. 西造出翼を広げた鳥形埴輪・・・187
図 5-37 ～ 5-39. 西造出胡籙形埴輪 5-1・5-2・・・188 ～ 190
図 5-40 ～ 5-41. 西造出靫形埴輪 5-1・・・191 ～ 192
図 5-42 ～ 5-52. 西造出蓋形埴輪・・・193 ～ 203
図 5-53. 西造出不明形象埴輪・形象埴輪基部・・・204
図 6-1 ～ 6-5. 円筒埴輪・朝顔形埴輪・・・206 ～ 210
図 7-1 ～ 7-2. 東造出須恵器・・・212 ～ 213
図 7-3 ～ 7-6. 西造出須恵器・土師器・・・214 ～ 217

＜表目次＞

表 2-1. 大日山 35 号墳発掘調査・整理作業一覧・・・9
遺物観察表・・・220 ～ 230

＜写真図版＞

写真図版 1 ～ 3. 岩橋千塚古墳群航空写真・遠景、大日山 35 号墳全景
写真図版 4 ～ 5. 調査前風景
写真図版 6. 後円部墳頂 17・18 トレンチ
写真図版 7 ～ 9. 後円部東側 2 トレンチ
写真図版 10 ～ 11. 後円部北側 3 トレンチ
写真図版 12 ～ 14. 後円部北西側 15 トレンチ
写真図版 15 ～ 17. 前方部東側 11 トレンチ
写真図版 18 ～ 19. 前方部東側 10 トレンチ
写真図版 20 ～ 21. 前方部南東側 16 トレンチ
写真図版 22. 前方部南東側 9 トレンチ
写真図版 23 ～ 25. 前方部南側 8 トレンチ
写真図版 26 ～ 27. 前方部西側 7 トレンチ
写真図版 28 ～ 29. 前方部墳頂部 6 トレンチ
写真図版 30 ～ 34. 東造出埴輪検出状況・出土状況 1 トレンチ
写真図版 35 ～ 40. 1 段目テラス（東造出側）円筒埴輪列 1 トレンチ
写真図版 41 ～ 45. 東造出北辺円筒埴輪列 1 トレンチ
写真図版 46. 東造出 1 トレンチ南側サブトレンチ
写真図版 47 ～ 60. 東造出埴輪出土状況 1 トレンチ
写真図版 61 ～ 62. 東造出須恵器大甕出土状況 1 トレンチ
写真図版 63 ～ 64. 1 段目テラス埴輪出土状況 1 トレンチ
写真図版 65 ～ 67. 東造出東斜面～基壇テラス埴輪出土状況 1 トレンチ
写真図版 68 ～ 73. 基壇テラス（東造出側）円筒埴輪列 1 トレンチ
写真図版 74. 2 段目斜面北壁断面 1 トレンチ
写真図版 75. 東造出北斜面 13 トレンチ
写真図版 76 ～ 78. 基壇テラス（東造出側）円筒埴輪列 14 トレンチ
写真図版 79 ～ 83. 西造出全景・埴輪出土状況 5 トレンチ
写真図版 84 ～ 86. 1 段目テラス（西造出側）円筒埴輪列 5 トレンチ
写真図版 87. 西造出西辺円筒埴輪列 5 トレンチ
写真図版 88. 西造出北辺円筒埴輪列 5 トレンチ
写真図版 89. 西造出南辺円筒埴輪列 5 トレンチ
写真図版 90 ～ 100. 西造出埴輪出土状況 5 トレンチ
写真図版 101. 西造出須恵器出土状況 5 トレンチ
写真図版 102. 西造出西斜面埴輪出土状況 5 トレンチ
写真図版 103 ～ 104. 基壇テラス（西造出側）円筒埴輪列 5 トレンチ

＜遺物写真図版＞

遺物写真図版 1 ～ 21. 東造出家形埴輪
遺物写真図版 22 ～ 25. 東造出人物埴輪
遺物写真図版 26 ～ 31. 東造出動物埴輪
遺物写真図版 32. 東造出器財埴輪
遺物写真図版 33. 西造出家形埴輪
遺物写真図版 34 ～ 39. 西造出人物埴輪
遺物写真図版 40 ～ 43. 西造出動物埴輪
遺物写真図版 44 ～ 45. 西造出器財埴輪
遺物写真図版 46. 東造出・西造出蓋形埴輪

第１章　整備事業の経緯と経過

第１節　整備事業の経緯

和歌山県教育委員会は、平成 15 年度から紀伊風土記の丘にある特別史跡岩橋千塚古墳群の保存修理事業に着手した。この事業は、古墳群を保存修理ならびに整備することによって、貴重な文化財を後世に伝えるとともに、その価値を広く国民が享受できるようにすることを目的とするものである。加えて、この事業は和歌山県の「紀ノ川緑の歴史回廊推進事業」の一つとして、特別史跡岩橋千塚古墳群を紀ノ川流域の文化遺産を連ねるための重要なポイントとして位置づけることも考慮された。事業は年度毎に下記のとおり委員会を設置し、その指導の下に行われた。事務局は平成 15・16 年度が文化遺産課で、平成 17 年度以降は紀伊風土記の丘に置いて実施している。なお、当該事業は現在も継続中である。

第２節　整備事業の経過

＜平成 15 年度＞　発掘調査等支援業務として、（財）和歌山県文化財センターに委託して、大日山 35 号墳の墳丘測量、墳丘調査、後円部横穴式石室の調査、応急遺物整理を実施した。東造出の発掘調査で、翼を広げた鳥形埴輪や大形の家形埴輪など、注目すべき埴輪群を発見した。また、大日山 35 号墳の石室の保存修理をおこない、写真・図面等を焼き付けたセラミック製の説明板を２基設置した。石室の保存修理は、玄室の石棚・両袖部・玄門部を対象にエポキシ樹脂による接着・補填と欠落部の石材を補填し、樹脂部については近似色で着色した。大日山 35 号墳では、墳丘上に生育している危険木を伐採した。なお、特別史跡整備の基本的考え方や追加指定方針等を内容とする「特別史跡岩橋千塚古墳群整備計画」を策定した。

＜平成 16 年度＞　発掘調査等支援業務として、大日山 35 号墳、前山Ａ２号墳、前山Ｂ 41 号墳の発掘調査を(財)和歌山県文化財センターに委託して実施した。大日山 35 号墳では東側のくびれ部･墳丘基壇裾部にトレンチを設けて調査した。Ｔ字形石室の前山Ａ２号墳では墳丘測量、墳丘調査、石室調査をおこなった。また、前山Ｂ 41 号墳については、墳丘測量、石室調査、石室埋め戻し、墳丘修景作業を実施した。なお、前山Ａ２号墳では、調査終了後、石室の樹脂強化措置、セラミック製説明板の設置をおこなった。古墳上に生育している危険木の伐採として、大日山 35 号墳と、その他 21 基の古墳を対象に実施した。

＜平成 17 年度＞　発掘調査等支援業務として、（財）和歌山県文化財センターに委託して、大日山 35 号墳と前山Ａ 67 号墳の発掘調査を実施した。大日山 35 号墳の西造出より、両面人物埴輪や胡籙形埴輪、馬形埴輪等が出土した。また、大日山 35 号墳の出土遺物整理ををおこなった。前山Ａ 67 号墳については、羨道部の調査を実施した。発掘調査の結果をもとに、大日山 35 号墳と前山Ａ 67 号墳の保存公開施設の実施設計をおこない、前山Ａ２号墳の石室上部にはガラス覆屋を設置した。前山Ｂ 53 号墳 (将軍塚) 他 29 基の危険木を伐採し、前山Ｂ 67 号墳 (知事塚) 他８基の墳丘盛土保存修景工事も実施した。

＜平成 18 年度＞　発掘調査等支援業務として、、前山Ａ 13 号墳の横穴式石室の排水機能回復等を目的とした発掘調査を（財）和歌山県文化財センターに委託して実施した。大日山 35 号墳出土遺物整理も引き続きおこなった。危険木伐採は前山Ａ 46 号墳他 12 基で実施した。保存修景工事は

前山Ａ 51 号墳他 27 基を対象とし、露出した石室の埋め戻し保護等の整備を実施した。前山Ａ 67 号墳については、玄室奥壁を修復し、墓道に保存公開施設を設置するとともに、玄室にソーラー発電による照明装置を設置した。

＜平成 19 年度＞　発掘調査等支援業務として、（財）和歌山県文化財センターに委託して、前山Ａ 9 号墳・Ａ 17 号墳の発掘調査を実施した。大日山 35 号墳東西造出等の盛土整備工事を実施し、大日山 35 号墳等の出土遺物整理も継続しておこなった。危険木の伐採は大日山 35 号墳他 43 基で、保存修景工事は前山Ａ 16 号墳他 14 基で実施した。また、説明板を大日山 35 号墳、前山Ａ 67 号墳、前山Ｂ 53 号墳 (将軍塚)、前山Ａ 46 号墳の 4 基に設置した。

＜平成 20 年度＞　発掘調査等支援業務として、前山Ａ 9 号墳・Ａ 13 号墳周辺の古墳状隆起部の発掘調査を（財）和歌山県文化財センターに委託して実施し、古墳でないことを確認した。大日山 35 号墳等の出土遺物整理も引き続き実施している。危険木伐採は前山Ｂ 114 号墳他 9 基を対象とした。石室公開古墳のうち、見学者が特に多くて岩橋千塚古墳群における代表的な横穴式石室をもつ前山Ｂ 53 号墳 (将軍塚) と前山Ａ 46 号墳にソーラー発電による照明装置を設置するための実施設計書を作成した。前山Ａ地区に岩橋千塚古墳群全体の説明板 2 基と各古墳の説明板 10 基、古墳群の案内標識板 10 基を設置した。

＜平成 21 年度＞　古墳保存修景工事として、毀損の進む石室を保護するため、前山Ｂ地区の 11 基の古墳について、砂・真砂土で埋め戻しをおこなうとともに、削平された墳丘の盛土による修景を実施した。岩橋型横穴式石室の代表的な石室の公開に便宜を図るため将軍塚古墳と前山Ａ 46 号墳について、ソーラーパネルを利用した照明施設設置工事を実施した。また、次年度に前山Ａ 13 号墳に照明施設設置工事を実施予定で、そのための実施設計をおこなった。知事塚古墳や郡長塚古墳など主稜線上にある古墳を中心に説明板 10 基、案内標識 15 基を設置した。発掘調査等支援業務として、（財）和歌山県文化財センターに委託して、前山Ａ 58 号墳の発掘調査と大日山 35 号墳の整理作業を実施した。平成 15 年度からはじまった整備事業のうち、平成 21 年度まで実施した内容について整備報告書を作成した。

＜平成 22 年度＞　古墳修景工事は、前山Ｂ地区 2 基・大日山地区 3 基の古墳について実施した。園内に説明板 4 基と案内標識 32 基を設置した。岩橋千塚古墳群を代表する公開古墳である前山Ａ 13 号墳にソーラーパネルを利用した照明施設を設置した。発掘調査等支援業務として、前山Ａ 58 号墳の発掘調査を（財）和歌山県文化財センターに委託して実施し、墳形および埴輪樹立状況の確認をおこなった。引き続き大日山 35 号墳の出土遺物整理作業を実施した。

＜平成 23 年度＞　古墳保存修景工事は、前山Ｂ地区の 5 基の古墳について実施した。また、前山Ａ・Ｂ地区に地区説明板 7 基、案内標識 3 基を設置し、既設案内標識 5 基に標識板を追加して取り付けた。大日山 35 号墳整備に伴う造出に設置するための形象埴輪等のレプリカとして、蓋形埴輪および円筒埴輪 9 点、翼を広げた鳥形埴輪 2 点、家形埴輪 1 点、須恵器大甕 1 点を製作した。継続して大日山 35 号墳の出土遺物整理を実施し、平成 23 年度から整理補助員・整理作業員は直接雇用した。

＜平成 24 年度＞　古墳保存修景工事は、前山Ｂ地区・大日山地区の 5 基の古墳について実施した。園内の排水路工事のため実施設計をおこなった。引き続き整理補助員・整理作業員を直接雇用し、大日山 35 号墳の出土遺物整理を実施した。

第３節　整備委員会

当整備事業は、整備委員会の指導のもとで実施している。整備委員会の開催日と委員の構成は以下のとおりである。

＜整備委員会開催日＞

平成 15 年度大日山 35 号墳保存修理委員会	：第 1 回目平成 15 年 8 月 21 日
	第 2 回目平成 15 年 10 月 10 日
平成 16 年度特別史跡岩橋千塚古墳群保存整備委員会	：平成 16 年 11 月 1 日
平成 17 年度特別史跡岩橋千塚古墳群整備委員会	：平成 17 年 11 月 15 日
平成 18 年度特別史跡岩橋千塚古墳群整備委員会	：平成 18 年 9 月 7 日
平成 19 年度特別史跡岩橋千塚古墳群整備委員会	：平成 19 年 10 月 31 日
平成 20 年度特別史跡岩橋千塚古墳群整備委員会	：平成 20 年 10 月 29 日
平成 21 年度特別史跡岩橋千塚古墳群整備委員会	：平成 22 年 1 月 20 日
平成 22 年度特別史跡岩橋千塚古墳群整備委員会	：第 1 回目平成 22 年 5 月 26 日
	第 2 回目平成 23 年 2 月 22 日
平成 23 年度特別史跡岩橋千塚古墳群整備委員会	：第 1 回目平成 23 年 6 月 10 日
	第 2 回目平成 24 年 2 月 22 日
平成 24 年度特別史跡岩橋千塚古墳群整備委員会	：第 1 回目平成 24 年 7 月 27 日
	第 2 回目平成 25 年 1 月 24 日

＜整備委員＞

和田晴吾	立命館大学教授（平成 15 年度～）
森　郁夫	帝塚山大学客員教授（平成 15 年度～／平成 15 ～ 21 年度は同大学教授）
菅谷文則	奈良県立橿原考古学研究所所長（平成 15 年度～）
	（平成 15 ～ 19 年度は滋賀県立大学教授／ 20 年度は同大学名誉教授）
増渕　徹	京都橘大学教授（平成 15 年度～／平成 15 ～ 17 年度は橘女子大学教授）
高瀬要一	奈良文化財研究所計測修景調査室長（平成 15 年度）
内田和伸	奈良文化財研究所景観研究室長（平成 18 ～ 20 年度）
小野健吉	奈良文化財研究所文化遺産部長（平成 21 年度～）

平成 22 年度第 1 回整備委員会写真

平成 24 年度第 1 回整備委員会写真

第２章　大日山 35 号墳の調査概要

第１節　大日山 35 号墳の位置と環境

１．大日山 35 号墳の立地

和歌山県の北端を西流する紀ノ川の河口部には、和歌山平野が開けている。この和歌山平野の東側、紀ノ川南岸には岩橋山塊があり、その周辺の東西 3km、南北 2.5kmに広がる範囲には、5 世紀から 7 世紀までの古墳が群集しており、「岩橋千塚古墳群」と呼称される。ここでいう岩橋千塚古墳群の名称は、前山Ａ地区、前山Ｂ地区、大日山地区、大谷山地区、井辺地区と、これに寺内古墳群、花山古墳群、井辺前山古墳群を含めた広義の意味で用いている。また、これに和佐古墳群（前山Ｃ地区、天王塚山古墳群含む）、山東古墳群を含めると、岩橋山塊周辺の古墳の総数は 800 基超にも及ぶ。大日山 35 号墳は、この岩橋千塚古墳群の西端にあり、最も標高が高い大日山（標高 141 m）の山頂に所在する。この大日山からは、和歌山平野や紀伊水道が一望でき、晴天の日は遠く淡路島まで見渡せる眺望の地である。

２．大日山 35 号墳の既往調査

岩橋千塚古墳群の調査の歴史は、明治期にまで遡る。江戸時代にはすでにその存在が知られていたが、当時は「陶器山」「トツキ山」と呼ばれ（『紀伊名所図会』）、「誰の墳なるや詳ならず」（『紀伊続風土記』）であった。江戸時代には紀州藩家老安藤家（田辺藩主）の所領であったが、明治 4 年（1871）に西和佐村の共有地となった。明治期には徳川頼倫、大野雲外の踏査や現地調査が実施され、さらに大正 7 年から 10 年（1918 ～ 1921）の和歌山県の委嘱を受けた内務省嘱託田沢金吾・岩井武俊、東大教授黒板勝美による前山Ａ地区の調査が実施された（和歌山県 1921）。その報告で初めて「岩橋千塚」の名が公式に登場する。このように岩橋千塚古墳群の実態が明らかになった結果、明治末から大正にかけて大規模な盗掘がおこなわれるようになった。昭和 7 年（1932）には大日山山頂部隣接地で整地作業中に石室から鏡・刀身・馬具・須恵器などが出土したと報告されている（勝田 1933）。

昭和 38 年（1963）から 41 年（1966）に和歌山市教育委員会の委嘱を受けた関西大学によって岩橋千塚古墳群の学術調査が実施されるが、その際に大日山 35 号墳についても墳丘の測量と石室の実測がおこなわれ、墳丘および石室の実測図が公表されている（関西大学考古学研究室 1967）。この調査時に、墳丘東側のくびれ部から前方部にかけて土取りなどの大きな改変が確認されている。また、墳丘西側の横穴式石室開口部を中心に大日如来を祀るための施設が造られ、それにともない西側くびれ部では土取りによって削平されたうえに、後円部から前方部にかけて平坦面が造成されていた。さらに前方部墳頂部では高圧線鉄塔の工事により大きく撹乱された箇所があった。このように昭和 30 年代までに墳丘は、大きく改変を受けていたことがわかっている。ただし、全体的には前方後円墳の形状を保っており、墳丘測量の成果から墳長は約 73 mと推定された。測量図では西側くびれ部が造出状になっているが、改変による平坦面の造成のため、この時点では造出とは想定されていなかった。その後、大日山 35 号墳においては、岩橋型横穴式石室には関心が向けられるが、墳丘に対する認識はこの調査報告を踏襲するのみであった。昭和 46 年（1971）に県立紀伊風土記の丘が設立され、それ以降、園内の古墳群を日常的に管理し、大日山 35 号墳周辺も草刈りなどを実施するようになった。その結果、墳丘の観察が容易になってくると、墳長が 73

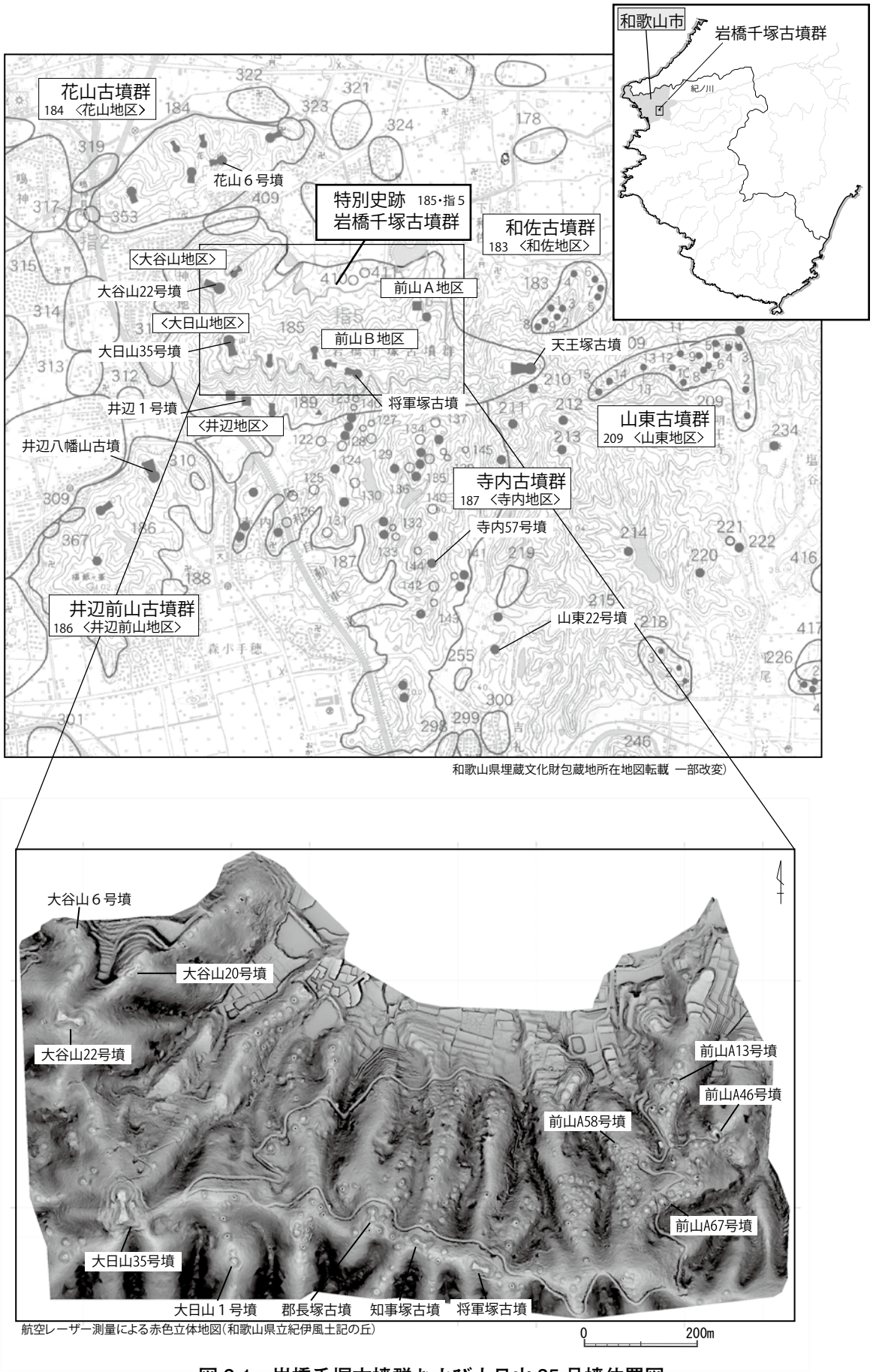


図 2-1　岩橋千塚古墳群および大日山 35 号墳位置図

mよりも大きくなることや西側に造出が存在することなどが想定されるようになってきた。ただし調査開始までに東側の造出は想定されていなかった。このように墳丘測量によって墳形などは想定できていたが、造出の存在や何段築成といった墳丘構造は不明であった。

【岩橋千塚古墳群調査関連報告書】

大野雲外 1907「紀伊海草郡岩橋古墳発見祝部土器」『東京人類学会雑誌』第 22 巻 (258)(第一書房)

大野雲外 1908「紀伊国古墳石槨構造に就て」『東京人類学会雑誌』第 23 巻 (259)(第一書房)

(大野雲外 1925「紀伊国海草郡古墳石槨構造に就て」『日本古代　遺物遺跡の研究』(磯部甲陽堂))

NEIL.GORDON.MUNRO　1911『PREHISTORIC　JAPAN』

和歌山県 1921「岩橋千塚第一期調査」『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会報告書』第一輯

大野雲外 1925「甲冑と埴輪土偶」『日本古代　遺物遺跡の研究』(磯部甲陽堂)

勝田良太郎 1933「大日ノ古墳」『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会報告』第 12 輯

宮田啓二 1962「岩橋千塚前山北麓古墳」『和歌山市文化財現地調査記録』第 2 集 (和歌山市教育委員会)

和歌山市教育委員会 1964『花山古墳 (花山古墳緊急調査報告)』

和歌山県教育委員会 1966「井辺前山三十二号墳発掘調査報告」『和歌山県文化財学術調査報告』第一冊

関西大学考古学研究室・和歌山市教委 1966『和歌山市花山西部地区古墳群調査概報』

大野嶺夫 1966「和歌山市の形象埴輪の窯址」『古代学研究』46(古代学研究会)

関西大学文学部考古学研究室 1967『岩橋千塚』

和歌山県教育委員会 1967「井辺前山 6 号墳発掘調査概報」『昭和 41 年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』

和歌山県教育委員会 1967「森小手穂 (猪塚) 古墳緊急発掘調査略報」『昭和 41 年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』

関西大学考古学研究室編 1967『花山西部地区古墳』(和歌山市教委・市水道局)

関西大学考古学研究室編 (和歌山市教委)1967『和歌山市東部地区埋蔵文化財 (古墳) 第一次分布調査概報』

和歌山県文化財研究所 1968「寺内 35 号墳発掘調査報告」『和歌山県文化財学術調査報告書』第三冊

関西大学考古学研究室編 (和歌山市教委)1968『和歌山市森小手穂・寺内 59・60 号墳緊急調査概報』

関西大学考古学研究会 1968「和歌山市森小手穂寺内 59・60 号墳調査報告　付載　吉礼砂羅谷之須恵器窯跡群調査報告」『関西大学考古学研究年報』 2

関西大学考古学研究室編 1969『和歌山市晒山・総綱寺谷古墳群調査概報』(和歌山市教委)

森　浩一 1969「和歌山市井辺前山 10 号墳調査概報」『古代学研究』55(古代学研究会)

和歌山県教育委員会 1970「花山 50 号墳」『近畿自動車道和歌山線関係遺跡　第 1 次発掘調査概報』

中野栄治 1971「花山古墳群の破壊と保存の記録」『和歌山史学』第 13 号 (和歌山史学会)

和歌山市教育委員会 1972『和歌山市における古墳文化』

同志社大学考古学研究室編 1972『井辺八幡山古墳』(和歌山市教委)

和歌山県教育委員会 1972『大谷山 4・ 5・ 6・39 号墳発掘調査概報』

(社) 和歌山県文化財研究会 1973『大谷山古墳群現地説明会資料』(大谷山 27・28 号墳)

紀伊風土記の丘管理事務所 1976『特別史跡岩橋千塚古墳群花木園地区古墳群調査概報』

紀伊風土記の丘管理事務所 1976「花木園東部地区の古墳」『紀伊風土記の丘年報』 3

大野嶺夫 1981「紀伊風土記の丘万葉植物園出土黥面埴輪について」『和歌山県埋蔵文化財情報』15((社) 和歌山県文化財研究会)

和歌山県 1983『和歌山県史　考古資料』

和歌山県教育委員会 1987『広域遺跡群詳細分布調査 1 井辺前山古墳群とその関連遺跡』

(財) 和歌山県文化財センター 1992『山東 22 号墳』・1993『山東 22 号墳 (Ⅱ)』

松下　彰 1993「前山Ｂ 53 号墳出土の土器」『紀伊風土記の丘年報』第 20 号
(財) 和歌山市文化体育振興事業団 1996「寺内古墳群確認調査」『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報３』
和歌山県教育委員会 2000『岩橋千塚周辺古墳群緊急確認調査報告書』
大野嶺夫 2003『岩橋千塚ところ・どころ』
和歌山県教育委員会 2004「保存処理鉄器の再実測及び平成６年度調査の出土遺物」『和歌山県埋蔵文化財調査年報平成 14 年度』
藤井幸司 2005「大日山 35 号墳の調査成果」『日本考古学』19(日本考古学協会)
和歌山市教育委員会 2005「和坂南垣内古墳群発掘調査」『和歌山市内遺跡発掘調査概報－平成 15 年度－』
佐藤純一・清水邦彦・関真一・辻川哲朗・松田度 2007「井辺八幡山古墳の再検討－造り出し埴輪群の配置復原を中心に－」『同志社大学歴史資料館館報』10
藤井幸司 2008「岩橋千塚古墳群の埴輪群像－和歌山　大日山三五号墳の調査成果から－」『埴輪群像の考古学』(青木書店)
和歌山県立紀伊風土記の丘 2008『岩橋千塚』(平成 20 年度特別展図録)
文化庁編 2009「特別史跡岩橋千塚古墳群大日山 35 号墳」『発掘された日本列島 2009　新発見考古速報』(朝日新聞社)
植田法彦・前田敬彦 2009「和歌山市井辺前山 36 号墳について」『和歌山市立博物館研究紀要』第 23 号
和歌山県立紀伊風土記の丘 2011『大王の埴輪・紀氏の埴輪－今城塚と岩橋千塚－』(平成 23 年度特別展図録)

＊平成 15 年度からの保存整備事業の概要は以下の文献にも掲載している。
和歌山県教育委員会：2005「特別史跡　岩橋千塚古墳群 : 大日山 35 号墳 (現状変更)」『和歌山県埋蔵文化財調査年報 平成 15 年度』、2006「特別史跡岩橋千塚古墳群 : 大日山 35 号墳・前山 A2 号墳・前山 B41 号墳 (現状変更)」『年報 平成 16 年度』、2010『特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書１』
和歌山県立紀伊風土記の丘：2007「大日山 35 号墳の第３次発掘調査・出土遺物整理と保存整備実施設計」『平成 17 年度　紀伊風土記の丘年報』第 33 号、2007「大日山 35 号墳西造出出土の埴輪」『平成 18 年度　年報』第 34 号、2009「特別史跡岩橋千塚古墳群の整備」「特別史跡岩橋千塚古墳群の踏査」「前山 B117 号墳の墳丘測量と遺物表採」『平成 19 年度　年報』第 35 号、「大日山 35 号墳の埴輪の整理」「前山 A9･13 号墳周辺の発掘調査」『平成 20 年度　年報』第 36 号、2011「前山 A58 号墳発掘調査・大日山 35 号墳出土遺物整理業務」「平成 21 年古墳保存修景工事に係る立会調査」『平成 21 年度　年報』第 37 号、2012「前山 A58 号墳第２次発掘調査及び大日山 35 号墳・前山 A58 号墳出土遺物整理」「平成 22 年古墳保存修景工事に係る調査」『平成 22 年度　年報』第 38 号、2013「大日山 35 号墳の出土遺物整理」「平成 23 年古墳保存修景工事に係る調査」『平成 23 年度　年報』第 39 号
(財) 和歌山県文化財センター:2004「大日山 35 号墳の保存修理に伴う支援業務」『(財) 和歌山県文化財センター年報 2003』、2005「平成 16 年度岩橋千塚古墳群の発掘調査」『年報 2004』、2006「特別史跡岩橋千塚古墳群の保存修理事業に伴う第３次調査」『年報 2005(平成 17) 年度』、2007「特別史跡岩橋千塚古墳群前山Ａ 13 号墳の発掘調査」『年報 2006(平成 18) 年度』、2008「大日山 35 号墳等の出土遺物整理」『年報 2007』、2009「特別史跡岩橋千塚古墳群の発掘調査・出土遺物整理」『2008』、2010「特別史跡岩橋千塚古墳群の発掘調査・出土遺物整理」『年報 2009』

第２節　発掘調査・整理作業の経過

１．測量調査

平成 15 年度に大日山 35 号墳の発掘調査に先立って墳丘の測量調査を実施した。平板測量により大日山 35 号墳およびその周辺の 12,484㎡の範囲の測量図（S=1/200）を作成した。

２．発掘調査

大日山 35 号墳の発掘調査は、平成 15 年度に１次調査、平成 16 年度に２次調査、平成 17 年度に３次調査を実施した。１・２次調査は県教育委員会文化遺産課、３次調査は県立紀伊風土記の丘が担当し、現地調査を支援するため（財）和歌山県文化財センターに発掘調査等支援業務を委託した。

１次調査では、墳形や埴輪樹立の有無などを確認するため、１～12 トレンチ（４トレンチは未実施）を設定して調査をおこなった。調査面積は約 670㎡で、墳丘裾や各段のテラス面、円筒埴輪列や形象埴輪群の確認といった成果が得られた。特に東造出を調査した１トレンチでは、多量に形象埴輪が出土し、井辺八幡山古墳に匹敵するような豊富な種類の形象埴輪群として注目された。西造出を調査した５トレンチでも旧表土を掘削中に多量に埴輪が出土し、東造出と同様な状況が予想されたため、調査体制や期間などの問題もあり、翌年以降に再調査することを前提に養生して埋め戻した。

なお、石室の調査も実施し、石室床面および排水溝の確認、石室実測図の作成をおこなったが、今回は墳丘の調査についての報告とし、石室については平成 26 年度刊行予定の整備報告書３で報告する。

２次調査は、１次調査で明らかにできなかった東造出北斜面からくびれ部の状況を確認することと、最下段の基壇テラスが前方後円墳形であるか盾形であるかの確認を目的として調査を実施した。調査の結果、14 トレンチで基壇テラスの円筒埴輪列が直線的に続いている状況を確認することができ、基壇が盾形の形状をしていたことが判明した。

３次調査では、１次調査で調査途中になっていた５トレンチを再調査し、西造出の形状および埴輪群の確認をおこなった。また、墳丘規模や形状を確定するため 15・16 トレンチを設定し調査した。さらに後円部の墳頂部に 17・18 トレンチを設けて調査をおこなった。

１～３次調査で 18 箇所の調査区を設定し、約 985.5㎡を調査した（石室除く）。墳丘の調査では、最下段の基壇は盾形を呈しており、その基壇上に２段築成で前方後円墳形の墳丘が築かれている状況が確認できた。墳丘規模は、最下段の基壇の総長は約 105 m、前方後円墳形の墳丘の墳長は約 86 mであることが判明した。

３．整理作業

発掘調査によってコンテナ 300 箱近い量の遺物が出土し、平成 15 年度から整理作業を継続している。平成 15・16 年度は県文化遺産課、平成 17 年度以降は紀伊風土記の丘が整理作業を担当した。平成 15 ～ 22 年までは（財）和歌山県文化財センターに発掘調査等支援業務を委託して実施し、平成 23・24 年度は紀伊風土記の丘が直接整理補助員・整理作業員を雇用して作業をおこなった。

表2-1. 大日山35号墳　発掘調査・整理作業一覧

年度	次数	調査区	面積（㎡）	期間	調査箇所	目的・成果	調査主体	業務支援	担当者
15	1	墳丘測量	12,484	平成15年7月1日～平成16年3月30日	墳丘全体	大日山35号墳およびその周辺の測量図作成（S=1/200）	県文化遺産課	県文化財センター	藤井
		１トレンチ	109.10		東造出	東造出から多数の形象埴輪群出土、基壇テラス円筒埴輪列検出			
		1トレ南側サブトレンチ	8.25		東造出南斜面	1・11トレンチ間、調査時は文化遺産課トレンチ、東造出南辺円筒埴輪列			
		２トレンチ	42.0		後円部東側	基壇テラス円筒埴輪列検出、基壇裾確認			
		３トレンチ	46.0		後円部北側	基壇裾確認			
		４トレンチ	未調査			横穴式石室入口付近の調査を予定したが実施せず			
		５トレンチ	138.0		西造出	多数の形象埴輪出土、養生・埋戻後、平成17年度再調査			
		６トレンチ	49.0		前方部墳頂	前方部の撹乱土を掘削、墳丘盛土単位を確認			
		７トレンチ	40.0		前方部西側	基壇テラス円筒埴輪列検出、兆域外周平坦面確認			
		８トレンチ	36.0		前方部南側	基壇裾・兆域外周平坦面確認			
		９トレンチ	16.0		前方部南東側	前方部南東隅の調査			
		10トレンチ	50.0		前方部東側	１段目テラス～２段目斜面の確認			
		11トレンチ	58.0		前方部東側	１段目テラス・基壇テラスで円筒埴輪据付坑を検出			
		12トレンチ	80.0		古墳より東側尾根	大日山35号墳から東へのびる尾根の調査、古墳確認できず			
		1次調査合計	672.4			＊石室調査面積除く			
16	2	13トレンチ	10.64	平成16年7月1日～平成17年1月31日	東造出北斜面	東造出北斜面・くびれ部の調査	県文化遺産課	県文化財センター	黒石
		14トレンチ	3.6		東造出側基壇テラス	基壇テラス円筒埴輪列の調査、基壇が盾形であることを確認			
		2次調査合計	14.2						
17	3	５トレンチ	185.0	平成17年9月2日～平成18年3月28日	西造出	西造出から多数の形象埴輪出土、基壇テラス円筒埴輪列検出	紀伊風土記の丘	県文化財センター	丹野
		15トレンチ	37.0		後円部北西側	１段目テラス・基壇テラスで円筒埴輪列を検出、基壇裾確認			
		16トレンチ	36.4		前方部南東側	基壇テラス円筒埴輪列を検出、基壇裾部の溝状遺構検出			
		17トレンチ	23.25		後円部墳頂	墳頂部の調査、埴輪片・須恵器片出土			
		18トレンチ	17.25		後円部墳頂	墳頂部の調査、埴輪片・須恵器片出土			
		3次調査合計	298.9						
		発掘調査合計	985.5						

15		応急整理		平成15年7月1日～平成16年3月30日		埴輪等の洗浄・台帳整備	県文化遺産課	県文化財センター	藤井
16		整理作業		平成16年7月1日～平成17年1月31日		埴輪の接合・復元（翼を広げた鳥形埴輪等）	県文化遺産課	県文化財センター	藤井
17		応急整理		平成17年9月2日～平成18年3月28日		埴輪等の洗浄	紀伊風土記の丘	県文化財センター	丹野
18		整理作業		平成18年6月1日～平成19年3月28日		埴輪の復元・実測（両面人物埴輪等）	紀伊風土記の丘	県文化財センター	丹野
19		整理作業		平成19年8月16日～平成20年3月14日		埴輪の復元・実測（胡籙形埴輪等）	紀伊風土記の丘	県文化財センター	丹野
20		整理作業		平成20年12月2日～平成21年2月22日		埴輪の復元・実測（双脚輪状冠帽を被る人物埴輪等）	紀伊風土記の丘	県文化財センター	丹野
21		整理作業		平成21年10月27日～平成22年3月25日		埴輪の復元・実測（水鳥形埴輪、ゆぎ形埴輪等）	紀伊風土記の丘	県文化財センター	丹野
22		整理作業		平成22年9月30日～平成23年3月25日		埴輪の復元・実測（３分割焼成の家形埴輪等）	紀伊風土記の丘	県文化財センター	丹野
23		整理作業		平成23年4月1日～平成24年3月30日		埴輪の復元・実測（牛形埴輪等）	紀伊風土記の丘		萩野谷
24		整理作業		平成24年4月10日～平成25年3月31日		埴輪の復元・実測・トレース・報告書刊行	紀伊風土記の丘		仲原

図 2-2　大日山 35 号墳　調査区配置図

第３節　調査の方法

１．調査次数と調査コード

発掘調査は平成 15・16・17 年度に実施し、調査次数はそれぞれ１次調査、２次調査、３次調査とした。１次調査は「03-01・185-132」(03 = 2003 年度、01 =和歌山市、185 =岩橋千塚古墳群、132 =大日山 35 号墳)、２次調査は「04-01・185-132」、３次調査は「05-01・185-132」の調査コードを付した。出土遺物の注記や記録類の管理などにこのコード名を記している。

２．基準点と墳丘測量

基準点は、大日山山頂の三等三角点「岡崎」(X = -196720.367m、Y = -71794.061m)、紀伊風土記の丘設置の三級基準点 No.324（X = -196765.441m、Y = -71166.305m）をもとに P1 ～ 15 の平板測量用基準点を算出した。ただし、No.324 のデータは旧日本測地系データ X = -197112.732m、Y = -70904.777m を変換ソフト TKY2JGD により世界測地系（日本測地系 2000）変換した数値を用いた。水準測量は、三等三角点「岡崎」(H = 141.78m）の標高値をもとに水準測量を行い、測量用基準 P1 ～ 15 に標高を付与した。

平板測量により大日山 35 号墳およびその周辺について､墳丘測量図 (S=1/200) を 25cm コンターで作成した。

３．調査区・調査グリッド設定

墳丘の調査では、P1 ～ 15 を基に作成した墳丘測量図から後円部に任意の中心（0.0）点および主軸を設定し、主軸の方向に（S36.0）点を木杭により打設した。この主軸を南北軸（NS0）とし、これと直交する方向に東西軸（EW0）を設定し、この２つの軸を基準として４ｍ四方のグリッドを設定し、グリッドの四隅のうち（0.0）点に近い隅を地区名として付与した（例：S0.E0、S4.E12 など)。この４ｍ四方のグリッドを基準として遺物を取り上げ、実測図の作成もこのグリッドを基準にした。ただし、後述するように１トレンチの一部で造出を検出し、埴輪が多量に出土したことから、４ｍ四方グリッド内を 50cm 四方グリッドに分割して遺物の取り上げを実施した。50cm グリッドの名称は、４ｍ四方グリッドの（0.0）点に近い隅から南北方向に（0.0）点から離れる方向へ１～８を設定し、(0.0）点から東西方向へ離れる方向へ９～ 16、17 ～ 24･･･64 と順次名称を付与した。なお、主軸は座標北より N-4° 26′ 13″ - E の方向を示す。

４．図面作成

調査区内の図化については 1/20 の平面図・立面図・土層図を基本として、必要に応じて 1/10、1/50、1/100 で作図した。また、遺物出土状況の一部については 1/10 の平面図･立面図を作成した。土層断面図は 1/20 で作成した。

５．写真撮影

４×５判カラーポジフィルム･モノクロームフィルム、６×７判カラーネガフィルム･モノクロームフィルムを使用して撮影した。調査年度によっては 35mm カラーポジフィルム・カラーネガフィルムも使用した。また、適宜デジタルカメラで撮影し、JPEG 形式で CD-R に保存した。６×７判の一部は Kodak ProphotoCD (64BASE) により写真資料のデジタル化 (PCD 形式で保存) を実施し、

CD に保存した。

古墳全景写真は、平成 15 年 11 月５日に６×６判カラーポジフィルムを使用してラジコンヘリにより航空写真撮影を実施した。航空写真の一部はスキャンして TIFF 形式で CD-R に保存した。

６．掘削の方法・出土遺物の取り扱い

今回の調査は、特別史跡地内の調査であったため、調査に際しては重機類の使用は極力制限すべきであったが、表土や撹乱土などの掘削や埋め戻し、養生用砂搬入などについては 0.1㎥相当のバックホーとキャリヤダンプ２ｔを導入した。いずれも未掘削の地下に影響を与えない軽量なものを選択した。

調査に際しては、基本的に幅２ｍのトレンチ掘削をおこない、東西の造出など一部については適宜拡張して面的な調査を実施した。調査は、機械掘削により表土・撹乱土除去後、堆積層ごとに人力掘削により掘り下げ、墳丘盛土面や埴輪列などの検出に努めた。これらが直ちに認識できなかったトレンチについては、トレンチ内半分の幅１ｍをサブトレンチ状に設定し、再度検出に努めた。これらを検出後、写真撮影・図化・測量を実施した。図化後、遺物の取り上げをおこなったが、原位置を保持する造出（１・５トレンチ）の円筒埴輪は図化・写真撮影後に埋め戻し、その他の形象埴輪は取り上げた。それ以外のトレンチについては、原位置を保持する円筒埴輪は、造出の形象埴輪同様に取り上げた後、その据付坑の検出をおこなった。

７．養生・埋め戻し作業

すべての作業完了後にトレンチの埋め戻しを排土により実施した。ただし、原位置を保持した埴輪と埴輪据付坑が検出された範囲には、遺構面保護のため砂（海砂・細目）により 10cm 以上の厚さで養生したのち埋め戻した。養生をおこなった範囲は、原位置で確認され埋め戻した円筒埴輪および埴輪据付坑である。

各トレンチの埋め戻しには１トレンチ、５トレンチを除いてバックホウを使用しておこなった。なお、墳丘の復元・修景及び造出の整備については別途報告する。

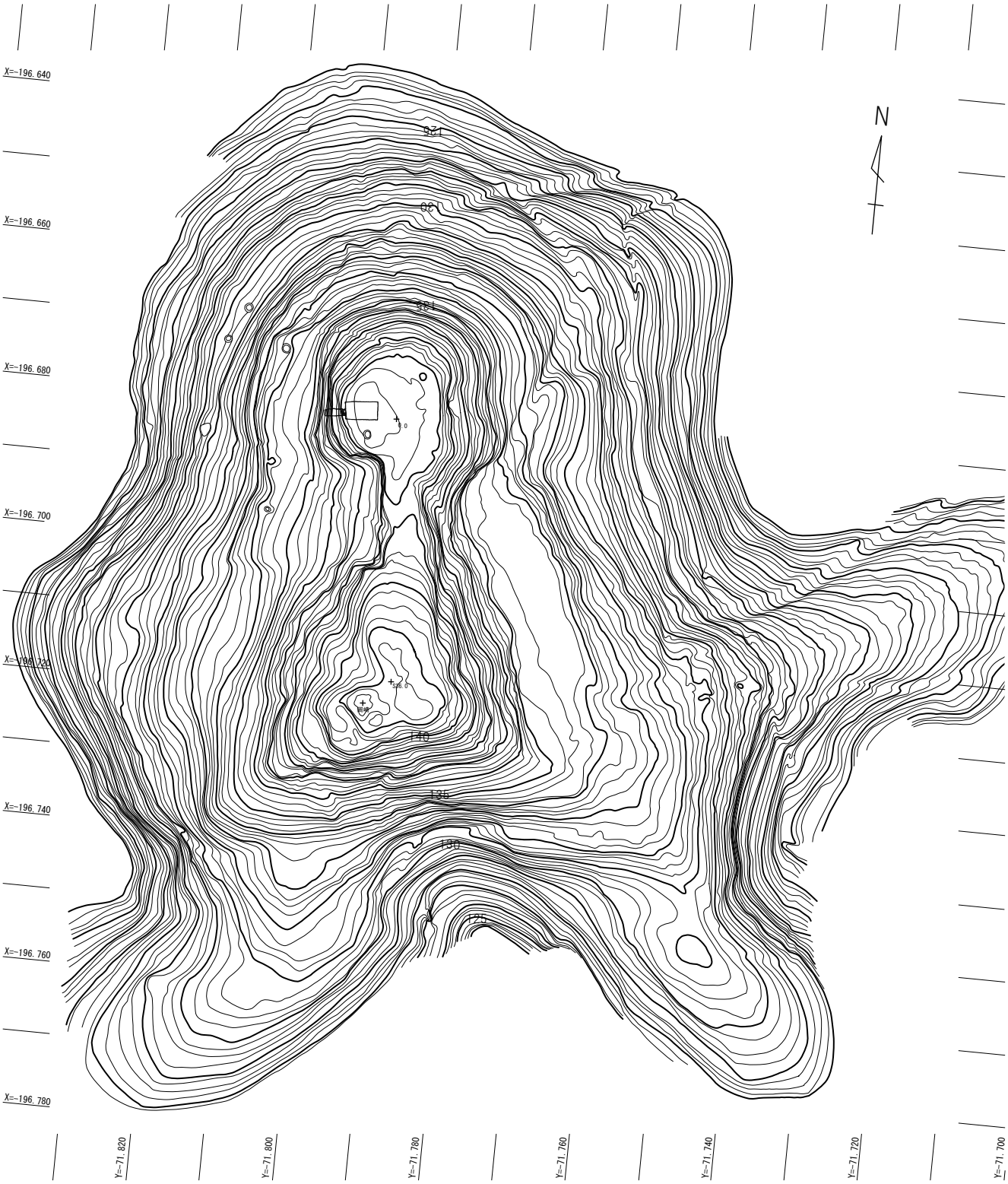


図 2-3　大日山 35 号墳　墳丘測量図

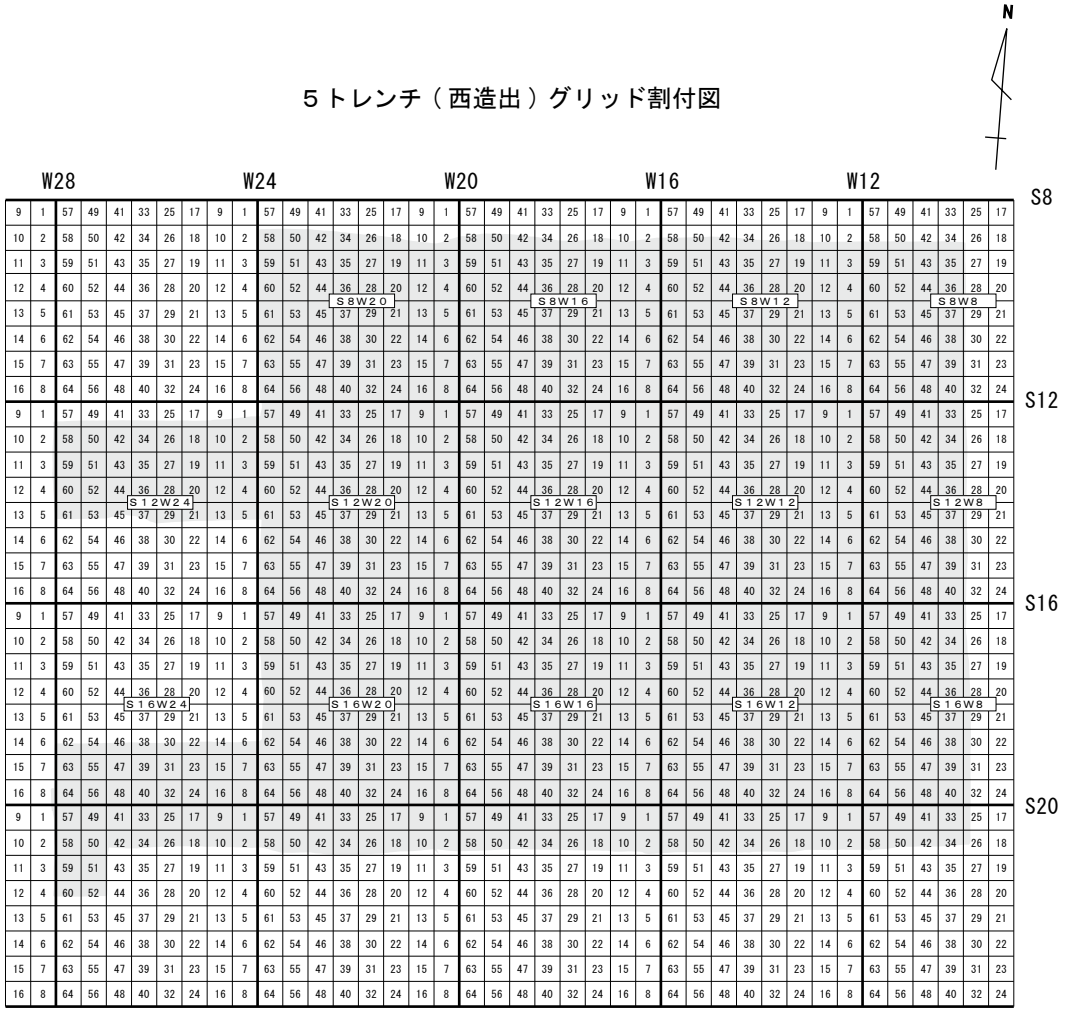
0　20m
(S=1/800)

X=-196.640
X=-196.660
X=-196.680
X=-196.700
X=-196.720
X=-196.740
X=-196.760
X=-196.780
W44 W40 W36 W32 W28 W24 W20 W16 W12 W8 W4 0 E4 E8 E12 E16 E20 E24 E28 E32 E36 E40
N36 N32 N28 N24 N20 N16 N12 N8 N4 0 S4 S8 S12 S16 S20 S24 S28 S32 S36 S40 S44 S48 S52 S56 S60 S64 S68 S70
15トレンチ
3トレンチ
17トレンチ
18トレンチ
横穴式石室
2トレンチ
13トレンチ
14トレンチ
西造出
東造出
1トレンチ
1トレンチ南側サブトレンチ
7トレンチ
5トレンチ
11トレンチ
10トレンチ
12トレンチ
6トレンチ
9トレンチ
16トレンチ
8トレンチ
Y=-71.820
Y=-71.800
Y=-71.780
Y=-71.760
Y=-71.740
Y=-71.720
墳丘裾復原ライン
発掘調査区
0
20m
(S=1/800)

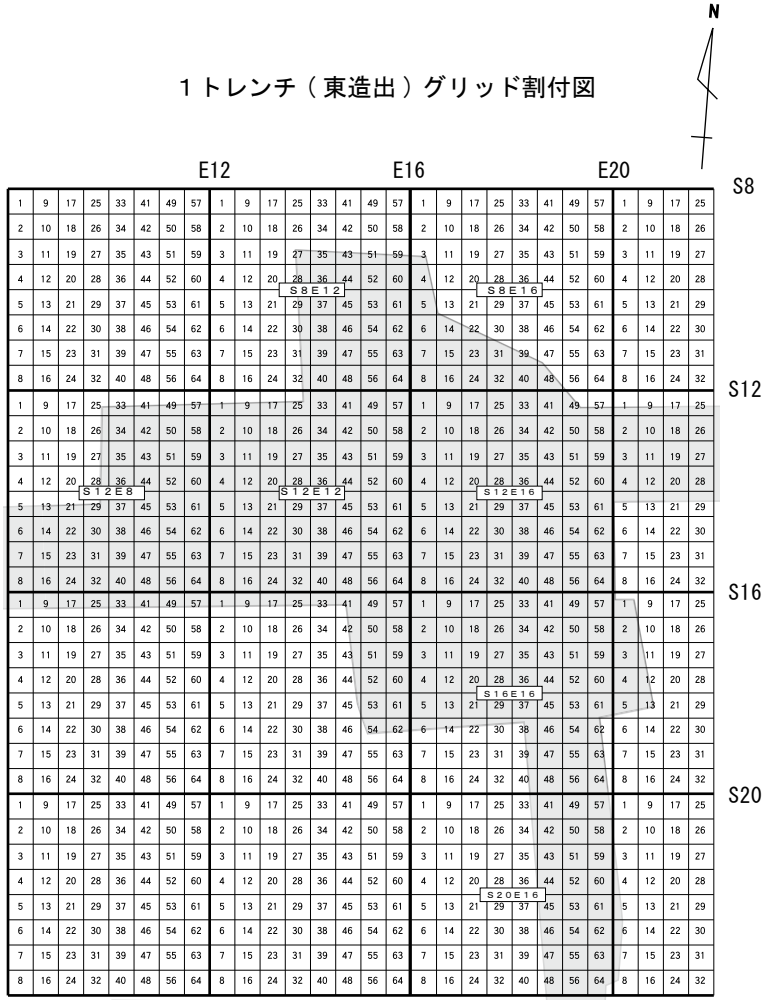
図 2-4　調査グリッド図

図2-5　1・5トレンチ調査グリッド割付図

５トレンチ（西造出）グリッド割付図



１トレンチ（東造出）グリッド割付図



S＝1/150

は調査範囲

第３章　調査の成果

第１節　調査の目的

墳丘の形状および規模・構造の把握、造出の確認などを目的として、墳丘各地点に調査区を設定して発掘調査を実施することとなった。以下、後円部、前方部、東造出、西造出の順に調査の成果を報告する。なお、調査の結果、墳丘は３段構成であることが判明したが、最下段については前方後円墳形ではなく盾形を呈すること、最下段のテラス面の幅が広いこと、前方部南半では最下段の斜面が造成されていないこと、最下段ではなくその上の中間段に造出が取り付くことなどから、最下段を「基壇」とし、造出が取り付く中間段を「墳丘１段目」、その上が最上段の「墳丘２段目」と認識した墳丘復原案が発掘担当者によって提示され（藤井 2005）、この復原案に基づいて記述していく。各調査区の結果から、基壇の総長は約 105 ｍと想定できるようになった。

第２節　後円部の調査

１．17・18 トレンチ（後円部墳頂）

後円部墳頂部における埴輪の有無などの検証を目的とした調査区で、17 トレンチは後円部の中心点（0,0 点）から幅 1.5 ｍで、北へ 10 ｍ・西へ７ｍ、面積 23.25㎡の範囲を設定した。18 トレンチは中心点から幅 1.5 ｍ、東へ６ｍ・南へ７ｍ、面積 17.25㎡の範囲を設定した。墳丘盛土の上に表土が１～５cm、第２層（暗褐色シルト層）が５～ 10cm ほど堆積する。17 トレンチの中央から西にかけて年代不詳の遺構があり、焼土塊が１点出土した。これらの遺構は、大日山 35 号墳にまつられていた大日如来に関係する遺構の可能性がある。古墳時代の遺構は確認できなかった。17 トレンチの北端・西端とも、墳頂から墳丘斜面への傾斜変換点上に円筒埴輪片が集中的に散布している。18 トレンチでは南側で円筒埴輪片が少量出土している。墳頂部の平坦面では形象埴輪片の出土は認められず、須恵器片が若干出土し、細片ではあるが、高杯や壺類などの器種が確認できる。後円部墳頂では、形象埴輪は確認できなかったものの、円筒埴輪が墳丘斜面への傾斜変換点付近で多く出土することから、円筒埴輪に囲繞された空間があったと推察できる。また須恵器片が出土することから、墳頂部におい る須恵器の使用が確認できたことは重要な成果である。

２．２トレンチ（後円部東側）

後円部の墳丘裾および各段の状況を調査する目的で、１トレンチの北側に設定した。この調査区では、盛土とみられる７層を E28 区で検出した時点で、掘削深度が深くなることが予想されたため、トレンチ北半１ｍ幅で遺構の検出に努めた。E28 ライン付近で、後述する１トレンチで検出した基壇テラス円筒埴輪列の延長にあたるとみられる原位置の円筒埴輪を１個体検出した。この基壇テラス円筒埴輪および７層（盛土）は、旧表土とみられる６層の堆積により、その上の層位とは分離できる。６層は調査区東端から E24 ライン付近まで確認され、埴輪の出土が一程度認められることから、E24 ライン以東では墳丘面が残存していたと判断できる。また、基壇テラス円筒埴輪の東側はすぐ傾斜し、その４ｍ東側で傾斜変換点が認められたため、これを墳丘裾（基壇裾）と認識した。E24 ライン以西では現地表から 1.5 ｍ以上掘削したところで岩盤を検出したが、３～５層は６層との層位の重複関係から墳丘盛土ではなく撹乱土と判断でき、墳丘が破壊されてい

たことを確認した。そのため、１段目テラス円筒埴輪列など墳丘築造時の状況は判明しなかった。以上のように、２トレンチでは幅 4.5 m以上の基壇テラスと円筒埴輪、基壇斜面を検出したものの、１段目斜面より上の状況はすでに墳丘が破壊されていたため明らかにできなかった。

３．３トレンチ（後円部北側）

後円部北側の墳丘主軸ライン上に設定した３トレンチでは、１・２トレンチで検出したような円筒埴輪列、据付坑などの墳丘外表施設は検出できず、墳丘築造時の状況は不明である。結果的には、土層観察により、墳丘盛土と判断される層を一部掘削してしまったことが判明し、盛土単位をいくつか確認できた。また、N32 ラインと N36 ラインの間で岩盤が露出した斜面を検出し、位置関係から基壇斜面と考えられ、その傾斜が緩慢となる傾斜変換点を後円部の墳丘裾（基壇裾）と判断した。なお、４層は埴輪の出土もなく、土層観察から盛土の可能性が高い層位である。３層では、３ｇ～ｉ層は盛土である可能性を残すが、他の３層を細分した層位は盛土起源の土壌と考えられるものの、埴輪を包含する層、その層との重複関係から盛土ではないと判断している。

４．15 トレンチ（後円部北西側）

後円部の北西側の状況を確認するため、長さ 18.5 m、幅２m、面積 37.0㎡の調査区を設定した。調査の結果、１段目テラスと基壇テラスを検出することができ、１段目テラスでは原位置を保つ円筒埴輪を６個体、基壇テラスでは円筒埴輪を２個体確認した。また、墳丘裾（基壇裾）では、傾斜変換点となる岩盤と地山を削った溝状の掘り込みを確認した。基壇テラスでは、Ⅴ群系（Ⅳ・Ⅴ群系については第６章参照）の円筒埴輪が据付られていた。南側の１本が須恵質で、北側が土師質であった。他のトレンチの検出状況を考慮すると、この２本の中間にもう１本円筒埴輪があったことが推定されたが、円筒埴輪の底部や据付坑は確認できなかった。１段目テラス円筒埴輪列は密に並んでいるが、トレンチ北側では残存していなかった。この円筒埴輪列周辺には埴輪はほとんど散布していなかったが、これより墳頂側には多数の円筒埴輪片が散布している。これらは墳頂部から転落してきた円筒埴輪片と考えられる。１段目テラスで出土した円筒埴輪はすべてⅣ群系であった。

第３節　前方部の調査

１．６トレンチ（前方部墳頂）

前方部墳頂付近で墳丘測量図の等高線からやや凹んでいる範囲に調査区を設定した。この凹みが盗掘の痕跡である可能性が考えられたため、前方部埋葬施設の有無の確認を目的とした調査区である。現地表面から約１m掘削した時点でも調査区の大半は撹乱土であったため、S32 ライン付近に幅１mのサブトレンチを設定し、慎重に機械により掘削した。その結果、東西幅約４m、深さ約２m以上の撹乱を確認した。撹乱埋土の３a～c 層では埴輪が出土し、撹乱底面では岩盤を検出した。また、サブトレンチ東端では墳丘盛土の単位が確認できた。本来ならば、撹乱内にさらにサブトレンチを設定し、埋葬施設の有無を追及すべきであったものの、掘削深度や期間上の問題から、これ以上の作業を実施しなかった。そのため前方部埋葬施設の有無については不明のままであるが、今回の調査では少なくとも石室などの施設に関する痕跡は発見できなかった。

２．７トレンチ（前方部西側）

前方部西側の状況を確認するため設定した調査区である。掘削してすぐに全面で岩盤を検出した。W28 ライン付近で円筒埴輪３個体を確認したが、北端の１個体は底部ではなく、原位置の円筒埴輪ではなかった。しかし、円筒埴輪据付坑１箇所、原位置の円筒埴輪２個体を検出したことにより、円筒埴輪列が確認できた。この円筒埴輪列は、５トレンチの西造出よりも下段に位置することから、基壇テラス円筒埴輪列と考えられる。円筒埴輪列が据え付けられていた地点は、東側の平坦面が幅５ｍ以上を測る基壇テラスで、西側斜面が基壇斜面となる。基壇斜面は、円筒埴輪列から西側約４ｍで傾斜変換点があり、さらにその西側には幅５ｍほどの平坦面が認められた。この平坦面より西側は緩やかに傾斜していて、埴輪の出土もほとんどないことから、この平坦面は兆域内外を明示するために岩盤が整形された範囲と推察される。以上のように、７トレンチでは岩盤を整形した基壇テラスと円筒埴輪列、岩盤を整形した兆域外周の平坦面などが検出できた。

３．８トレンチ（前方部南側）

前方部前端の検出を目的とした調査区で、東半は過去に鉄塔のアース線およびアンカーが埋められていたため、撹乱が及んでいた。S56 ライン以北では岩盤を一部で検出したが、土層観察から盛土（４ａ～ｏ層）を掘り込んでしまったことが判明した。しかし、円筒埴輪据付坑などは土層観察でも確認されず、墳丘外表は残存していないと判断できる。S56 ライン以南では岩盤が検出され、S56 ラインと S60 ラインの中間で岩盤の傾斜変換点があり、埴輪が多量に出土した。この傾斜変換点から南側６ｍは平坦面であったが、ここでは埴輪はほとんど出土せず、さらに円筒埴輪列なども確認できない、７トレンチで検出した兆域外周の岩盤を整形した範囲と同様の平坦面と考えられる。このことから、埴輪が多量に出土した傾斜変換点が前方部前面の墳丘裾（基壇裾）と判断した。このように、墳丘自体は撹乱により残存状況は良くないものの、前方部前面の墳丘裾（基壇裾）とみられる傾斜変換点と岩盤を整形した兆域外周の平坦面を検出した。

４．９トレンチ（前方部南側）

８トレンチ同様、前方部前面の墳丘裾の検出を目的とした調査区である。この調査区でも円筒埴輪列は検出されず、岩盤も確認できなかった。４ｇ層で埴輪の出土があったため、５ａ～ｅ層が墳丘築造時の層位と判断している。ただし、３・６・８トレンチで検出されたような異なる土質の小さな単位による盛土とは様相が異なるため、ただちに５層を盛土と判断するのは躊躇される。現段階では、古墳築造時に大日山にすでに堆積していた地山であった可能性が考えられる。

５．10 トレンチ（前方部東側）

前方部東側の状況を確認することを目的とした調査区である。E16 ラインと E20 ラインの中間から東では岩盤を検出した。E24 ライン付近では埴輪が集中して出土し、岩盤がやや凹んでいたため、１トレンチで検出した１段目テラス円筒埴輪列や 11 トレンチで検出した円筒埴輪据付坑の可能性も考えられるが、それらを直線的にのばした延長上よりもやや東側に位置している点から、その可能性を指摘するに留めておきたい。この箇所以外は、緩慢な傾斜で東側へ下がっていくだけで、明確な平坦面や傾斜は確認できなかった。E16 ラインやや東側にある傾斜変換点は、位置関係から１・11 トレンチで検出した１段目テラスから２段目斜面への傾斜変換点と推測され、２段目斜面

では盛土単位を確認した。以上のように、10 トレンチでは１トレンチや 11 トレンチで検出したような基壇テラス、基壇斜面は確認できず、東方向への尾根へと継続している。

６．11 トレンチ（前方部東側）

１トレンチと 10 トレンチの間に設定した前方部東側の状況を確認するための調査区で、調査区内全域で岩盤が検出でき、盛土や原位置を保持する円筒埴輪は確認できなかった。ただし、１トレンチで検出した１段目テラス円筒埴輪列の延長線上の岩盤に溝状の凹みが検出でき、布掘り状の円筒埴輪据付坑である可能性が高い。また、１トレンチで検出した基壇円筒埴輪列の延長線上の岩盤には径 50cm 前後の不整形な２つの坑が痕跡的に検出できた。これらは、その位置関係から基壇テラス円筒埴輪の据付坑と判断している。１トレンチ同様に、１段目テラスでは布掘り状に、基壇テラスでは個別に据付坑が掘削されており、両者の据付方法が異なっていたことがわかる。これらの据付坑や１トレンチ南側サブトレンチ（文化遺産課トレンチ）の成果を加味して、岩盤の傾斜変換点をテラス面と斜面の変換点として認識すると、基壇斜面は幅約７ｍ、基壇テラスは幅約 9.5 ｍを測り、非常に幅広になるのに対して、１段目斜面は幅２ｍ程度、１段目テラスも幅３ｍ前後と狭くなる。ただし、基壇テラスについては、平坦面というよりも、１段目斜面や基壇斜面よりも緩慢な傾斜の範囲という程度で、岩盤を整形して基壇テラスを形成する際に、充分な平坦面化が達成されていない。なお、造出南斜面の裾にもあたる S24E20 区の４層では他の範囲に比べて多量の埴輪が出土し、これらの埴輪は１トレンチ南側サブトレンチ（文化遺産課トレンチ）の出土埴輪とともに、すでに削平されていた東造出南半に樹立されていた埴輪が落ち込んでいると推測される。以上のように、11 トレンチでは原位置を保持する埴輪は確認できなかったが、１トレンチの成果から円筒埴輪据付坑とみられる遺構とともに、岩盤を整形することにより形成された基壇斜面、基壇テラス、１段目斜面、１段目テラス、２段目斜面を確認することができた。

７．16 トレンチ（前方部南東隅）

前方部南東隅に長さ 16 ｍ、幅２ｍの調査区を設定した。基壇テラスを検出し、円筒埴輪２個体を確認した。また、基壇テラスと斜面、裾の位置を確認するために、西側と南側の拡張区を加えて、調査面積は 36.4㎡となった。南側拡張区では、基壇斜面裾部を明示するものと考えられる溝状遺構を確認した。溝状遺構は、幅 50 ～ 70cm、深さ 10 ～ 14cm で、墳丘主軸にほぼ直交している。溝状遺構は埴輪片を覆う第２層で埋まっている。前方部端の溝状の掘り込みを確認したことにより、大日山 35 号墳の基壇の総長は約 105 ｍであることが判明した。

８．12 トレンチ（墳丘東側の尾根）

大日山から東へ通じる尾根上に設定し、この尾根上に古墳の有無を確認することを目的とした調査区である。調査区西端から 10 ｍくらいまでの範囲で埴輪が少量採集される以外ほとんど遺物は出土していない。現地表面から 60cm 前後で岩盤が検出でき、緩やかな東側への傾斜が認められたのみである。古墳の存在は確認できず、岩盤上に土壌が自然に堆積した状況が認められ、出土した埴輪は大日山 35 号墳から流出したものと考えられる。

第４節　東造出の調査

１．１トレンチ

東側くびれ部付近の前方部に配置したトレンチで、墳丘測量の時点で形象埴輪片が採集され、造出の存在が予想されたことから、造出の有無の確認を目的としたトレンチである。さらに、前方部東側面の墳頂から墳丘裾までの各段のテラス、斜面などの検出も目的とした。

掘削開始後すぐに、従来墳丘裾と認識されていた箇所よりも東側で円筒埴輪列が検出されたため、この時点で従来考えられていた墳丘規模より大きくなることが想定された。この円筒埴輪列は原位置で５個体を確認し、樹立間隔は中心間で 0.7 ～ 1.1 ｍを測り一定せず、まばらに樹立されている。樹立に際しては、各々据付坑が掘削され、いずれも円筒埴輪設置後その内側に径 10cm 程度の結晶片岩を配置して固定している。この円筒埴輪据付坑が掘削された盛土が円筒埴輪列のすぐ東側で傾斜しはじめ、そこから 3.5 ｍ東側でその斜面がやや緩慢になる傾斜変換点が墳丘裾とみられ、検出された円筒埴輪列は最下段テラスの円筒埴輪列と考えられる。この最下段テラスは、基壇テラスと位置づけられることから、その東側斜面は基壇斜面と考えられる。この基壇テラス面は幅約２ｍを測り、多数の埴輪片とともに馬形埴輪が横転した状況で出土した。ただし、この馬形埴輪は昼神車塚古墳（高槻市）のように墳丘テラスに列状に樹立された形象埴輪ではなく、墳丘盛土面よりもやや浮いたレベルで出土する点、馬形埴輪の部材が本体部分から斜面の方向に流れて発見されている点などから、東造出に樹立されていたものが転落したものと判断している。なお、この馬形埴輪は整理作業の結果、横座り用の短冊形水平板を装着していることが判明した。

基壇テラスから幅約５ｍ、高さ約２ｍほどの斜面を西側へ上がると平坦面が広がる。この平坦面は、調査前には墳丘が破壊されたことにより形成されたものと予想していたが、先述したとおり墳丘測量時に形象埴輪が多量に採集されたことから、造出の存在が想定された。この平坦面の範囲では、他のトレンチと異なり当初から幅４ｍの調査区を設定していたが、その範囲でほぼ南北の方向性をもつ円筒埴輪列、人物埴輪２体、家形埴輪３棟、水鳥形埴輪、須恵器甕のほか、多数の埴輪片を検出したことにより、東造出の存在が確認できた。この南北方向の円筒埴輪列は、検出時には２段目テラス円筒埴輪列と認識していたが、調査の進展により先述の最下段テラスが基壇テラスと位置づけられたことに伴い、１段目テラス円筒埴輪列と認識するに至った。

保存整備委員会終了後、東造出の範囲を確定するために１トレンチを南北に拡張することになったが、１トレンチ南側は１・11 トレンチの排土置き場であった。そのため、排土の移動および拡張区の表土掘削は期間短縮のためバックホウでおこない、拡張は当初の調査区から南北にそれぞれ３ｍの範囲で実施した。拡張する範囲は、後述する５トレンチにおいて、その時点で明らかとなりつつあった西造出の南北長を参考とした。

南側拡張部分では、岩盤が当初の調査区に比して高くなっていたため、１段目テラス円筒埴輪列も途中で途切れ、原位置での形象埴輪や造出の範囲を明示する南辺円筒埴輪列も検出されなかった。北側拡張部分では、当初の調査区の検出面よりも若干低くなっていたため、埴輪の残存状況は良好で、１段目テラス円筒埴輪列の延長部分、東造出の北辺円筒埴輪列が検出できた結果、１段目円筒埴輪列で 27 個体、北辺円筒埴輪列で９個体の原位置の円筒埴輪が確認できた。

造出の規模確定のため、１トレンチ南側の拡張部分と 11 トレンチの間に１トレンチ南側サブトレンチ（調査時は文化遺産課トレンチと呼称）が設定され、造出南辺円筒埴輪列の据付坑と円筒埴輪底部の３個体が確認できた。

東造出の造出上面の復原される規模は、西側の南北長 12 m、東側の南北長７m、東西幅５m前後の台形状の平面プランである。ただし､北辺円筒埴輪列は直線ではなく途中で屈曲することから、造出の平面プランも同様であったと推察される。また、造出上面では東辺は残存していなかったものの、北辺、南辺の円筒埴輪列、西辺を１段目円筒埴輪列により囲繞した範囲に形象埴輪群の樹立、須恵器大甕の据付などをおこない、埴輪祭祀が執りおこなわれていたとみられる。造出中央から北側では、須恵器の甕が原位置で出土し、家形埴輪 1-3、水鳥形埴輪 1-3 基部も原位置での出土の可能性がある。さらに横転した状況で出土した人物埴輪（力士 1-1）や翼を広げた鳥形埴輪 1-1・1-2、蓋形埴輪の一部なども原位置に近いものと推測できる。また、人物埴輪（力士 1-1）の脇では犬形埴輪の頭部が出土しており、近くで動物埴輪の脚部が出土することから、本来の樹立位置に近い場所での出土と推測できる。これに対し、造出南半では岩盤が露出し、やや高くなっていたため、原位置の埴輪は検出できず詳細は不明である。出土した形象埴輪の数量に比べて、形象埴輪基部の出土や形象埴輪据付坑は少なく、造出上面が削平されている可能性があり、本来形象埴輪が樹立されていた地点を示す状況証拠は少ない。造出上面は南高北低の状況で､南側では岩盤を整形し、中央から北側では盛土をおこなって埴輪祭祀の空間を創出していると推察できる。そのため、１段目テラス円筒埴輪列の南半や造出南辺円筒埴輪列の据付坑は岩盤を削り込んで掘削されていた。

これら形象埴輪群を囲繞する円筒埴輪列は、１段目円筒埴輪 1-9 の１本のみがⅤ群系円筒埴輪であったが、それ以外はすべてⅣ群系円筒埴輪である。また、一部で朝顔形埴輪が含まれており、円筒埴輪列近くでは蓋形埴輪がまとまって出土する箇所がある。この円筒埴輪列は、基壇テラス円筒埴輪列とは異なり、中心間で 30 ～ 50cm 間隔で樹立されており、円筒埴輪樹立当初は口縁部が接するほど密に並べられていたものと推測される。また、据付坑も各々掘削されておらず、布掘りによるものであり、基壇テラスで認められた各々掘削された据付坑や円筒埴輪内部への結晶片岩の据付がないなど、基壇テラス円筒埴輪の据付状況とは異なるものである。さらに、１段目円筒埴輪列は南半では直線的であったものが、後円部へ向けて北半部では徐々に方向が変化しはじめており、後円部へと続いていく。北辺円筒埴輪列は、先述したとおり途中で屈曲しているが、１段目テラス円筒埴輪列との接続部分には円筒埴輪が確認できず、岩盤の露出部分でも明確な据付坑は検出できなかった。

１段目テラス円筒埴輪列の西側には４mほどの平坦面があり、２段目斜面裾に至る。この平坦面でも埴輪が出土しているが、原位置での検出とみられる埴輪は認められない。また、据付坑は検出できず、造出内ほどの出土量もないことから、墳頂部や造出に樹立されていた埴輪群の一部が転落や横転などによりこの範囲で出土したものとみられ､現時点では井辺八幡山古墳（和歌山市）のように造出外への埴輪の樹立はおこなわれていなかったと判断している。ただし、水鳥形埴輪 1-1 の基部や人物埴輪（力士 1-1)、須恵器甕の一部がこの平坦面で一定量出土している点は埴輪樹立状況を復元するうえで考慮しなければならない。

２段目斜面から墳頂部では明確な遺構は検出できなかったが、２段目斜面の標高 137 m前後までは岩盤を整形することにより斜面を形成し､それ以上では盛土されていた状況が確認できた。なお、墳頂部に樹立されていた円筒埴輪列を確認できなかったものの、２段目斜面裾では全容がわかるⅣ群系の円筒埴輪が出土し､墳頂部に樹立されていた円筒埴輪が転落したものと考えられる。また、この空間では蓋形埴輪片や家形埴輪 1-5 の破片も出土することから、墳頂部には蓋形埴輪や家形埴輪が樹立されていたことが推測できる。

以上のように、１トレンチでは東造出の規模および造出上でおこなわれた埴輪による祭祀の概

況、基壇テラスおよび基壇円筒埴輪列の状況など多数の成果を得ることができた。調査の結果、２つのテラス面と３つの斜面が検出でき、墳丘が３段構成になっていることが判明した。

２．13 トレンチ（東造出北斜面）

墳丘東くびれ部に設定した東西 1.9 m、南北 5.6 mの調査区で、１トレンチの北側に接続する。土層堆積は５層に分かれ、すべての層から円筒埴輪の破片が出土したが、４・５層からの出土が顕著であった。すべて上部の造出から流失したものだと推定され、少数ではあるが家形埴輪の破片もみられる。２層からは瓦器椀の破片が出土した。

検出した地盤は、後円部と東造出の接合部と推定される。等高線は北北東方向に緩やかに下がっていて、西側ではやや軟質の結晶片岩の岩盤が露出する。岩盤の板状節理面はほぼ東西方向である。接合部の斜面地点で、長さ 50cm、幅 15cm ほどの結晶片岩の石材２つが連なって水平方向に据えられていた。土留めのための作業であると推測される。

３．14 トレンチ（東造出側基壇テラス）

１次調査の時点では基壇テラス円筒埴輪列が前方後円墳形か盾形に巡るか判明していなかったので、２次調査において東造出側の基壇テラスに樹立された円筒埴輪列を確認する目的で１・２トレンチ間に設定した長さ 6.0 m、幅 0.6 mの調査区である。

円筒埴輪は８個体検出し、南側から円筒埴輪 14-1 ～ 8 とする。円筒埴輪は、基底部で直径 25cm 前後の小形のもので、上部は削平されていた。円筒埴輪列はほぼ直線状に並ぶが、北側ではやや外側に開き気味になる。埴輪の据付面は南側が高く、北側が低くなっており、検出面で約 40cm の比高差がある。このため埴輪の遺存度は南側のものほど低い。埴輪の間隔は中心間で、南から 85、75、78、90、78、66、75cm である。布掘りではなく、埴輪据付坑は各々掘削されている。

第５節　西造出の調査

１．５トレンチ

西側くびれ部および西造出の検出を目的として、当初より面的な調査区として設定した。１次調査で調査を開始したが、多量に埴輪が出土したことや東造出など他の調査区の調査を優先したことなどから、埴輪出土状況を確認した時点で埋め戻して調査を終了し、３次調査で改めて調査を実施することにした。

１次調査では、表土と２層の一部である現地表面から最大約 30cm を機械により掘削し、その排土を５トレンチ東側の西くびれ部の修景作業に利用した。この調査区では、２層を除去し、旧表土とみられる３層を掘削しはじめた時点で、原位置を保持するとみられる埴輪群が確認されはじめており、この時点で埋め戻すこととなった。３次調査では、12 × 12 mの調査区に加えて、東側に２× 12 m、北西側に２× ４ m、南西側に２× ４ m、さらに南西側に再拡張１× １ mの範囲を拡張して計 161㎡の調査を実施した。西造出の円筒埴輪列および形象埴輪の検出を目的とし、北西側・南西側では基壇テラス円筒埴輪列の検出も目的とした。

５トレンチの調査では、調査区全体が結晶片岩の岩盤上にあたり、部分的に盛土をすることにより造出が造成されている状況を確認した。西造出は基本的に岩盤がベースとなっており、南斜面は岩盤を少しだけ削り、北斜面は地山を深く削りこむ。造出の遺物は厚手の均質なシルト層（３層）で埋まることから、長い時間をかけて埋没していった状況がうかがえる。その層の上には墳丘盛土を主体とする再堆積層（２層）があり、後世に石室入口の平坦面と同一の高さまで平坦面が造られている。この平坦面は石室に祀られている大日如来に関連する造成と考えられ、瓦や陶器が散布していることから、墳丘を切り崩して西造出上に盛った土を２層と認識した。地表面の土壌化した部分は１層とした。

５トレンチでは、１層（表土）、２層（２a ～ o 層）、３層（３a ～ e 層）を掘削対象とし、４層（４a ～ e 層）は盛土と考えられたため掘削をおこなっていない。東側拡張部分で４e 層を検証のため一部掘削し、無遺物層であることを確認した。また、４a・４b 層上面では形象埴輪や須恵器甕の据付坑のほか、円筒埴輪列を検出した。

西造出の形状は、造出上面に南北 6.5 ～ 9.0 m、東西 6.0 ～ 7.0 m程度の平坦面が造られている。四方を円筒埴輪列で囲繞しており、１段目テラス円筒埴輪列は原位置で円筒埴輪 38 個体を検出し、東造出同様に密に樹立されていた。１段目テラス円筒埴輪列はやや弧状に配列されている。また、造出北辺および南辺、西辺円筒埴輪列もそれぞれ 14 個体、17 個体、７個体の原位置の円筒埴輪が確認できた。出土した破片などから円筒埴輪列には数本に１本の割合で朝顔形埴輪が含まれている可能性がある。また円筒埴輪列に沿って蓋形埴輪が数個体出土している。

北辺円筒埴輪列は、途中で屈曲しており東造出と同様の形態を示す。ただし、東造出北辺円筒埴輪列が１段目テラス円筒埴輪列から８個体目で屈曲するのに対して、西造出北辺円筒埴輪列では６個体目で屈曲し、細部で異なる。また、北辺円筒埴輪 5-11 および南辺円筒埴輪列 5-3・16 でもやや屈曲しており、北辺円筒埴輪 5-15 の地点でも屈曲している可能性がある。西辺円筒埴輪列は残存状況がよくないが、やはり一直線ではなく曲線ないしは屈曲を描くものと推測される。１段目テラス円筒埴輪列と北辺・南辺円筒埴輪列とが接続する部分の南北長は約８ mを測り、東造出より約４ m短く、規模も異なる。円筒埴輪列は、浅い布掘り状の溝を掘削して据付られており、さらに溝内に１個体ずつ据付坑を掘り下げていた箇所があり、据付坑を掘り下げることによって、

１段目の突帯下部まで埋めようとした状況が想定できる。

造出下端のラインは、北西隅と南西隅は等高線の最も張り出した地点がやや鋭角的になっており、旧状が判明した。造出北斜面も北辺円筒埴輪 5-6 の屈折点から北西へと明確な谷となっている。造出南斜面は岩盤がベースであるためあまり急傾斜に削られていない。南辺円筒埴輪 5-3・16 といった造出上面の屈折点に対応して、斜面下の円筒埴輪片がたまっている地点があり、屈折している状況が観察できる。このことから、造出南辺は上端と下端が対応した形をとっているものと推定できる。造出西斜面は、急角度の斜面となっており、造出から転落した埴輪片が散乱している。これらの埴輪片がまとまって出土する標高 132.0 ｍの等高線に沿ったラインが造出の下端と認識される。

円筒埴輪列に囲繞された範囲では、特に造出南半を中心に馬形埴輪２体、人物埴輪の草摺部分およびその下部にあたる人物の台などの形象埴輪が原位置とみられる状況で検出できた。形象基部および据付坑と判断できるものは 10 個体程度確認できているが、その上部がどのような形象埴輪になるのか判別できたものはほとんどない。馬形埴輪２体は飾り馬で、検出面では前脚２本と後脚２本を据えた楕円形の坑となっているが、その下部はそれぞれ脚部が４本ずつ据付られる形状になっている。近くでは杏葉などの馬具やたてがみなどの破片が散乱していた。家形埴輪 5-2 は基部が剥離した状態ではあるが、調査中の認識では据付坑に据え置かれた可能性が考えられていた。また胡籙形埴輪や靫形埴輪といった器財埴輪も倒れた状態で出土している。さらに両面人物埴輪や双脚輪状文形冠帽をかぶった人物 5-1･2、冑を装着した武人、巫女などの頭部が出土しているが、これらの頭部は体部や基部が判明していない。

西造出北半では須恵器の甕が２個体据えられた状態で出土している。また、据付坑は確認できなかったが、付近ではもう１個体の須恵器甕の破片が集中して散布しており、大形の甕が３個体据付られていた可能性が高い。この周辺には原位置をとどめる埴輪が認められず、埴輪の出土数も少ないことから、須恵器を設置したエリアであったと想定でき、飲食物供献儀礼の場となっていた可能性がある。

この他、造出上には小さなピット状の遺構が検出されており、須恵器高杯や土師器などの破片が出土したものがある。確実な掘り込みと認識できないものが多いが、馬形埴輪や胡籙形埴輪が出土した周辺および造出西側にみられる傾向にある。

西造出西半については削平を受けており判然としないが、家形埴輪 5-1 の破片が散乱している。また、西造出西斜面に転落した形で翼を広げた鳥形埴輪の破片がまとまって出土しており、おそらく造出の北西部付近に樹立していたものが転落したものと推測できる。なお、西造出では馬形埴輪２体と翼を広げた鳥形埴輪以外の動物埴輪は確認できていない。

北西および南西拡張部分では基壇テラスと円筒埴輪列を検出した。北西拡張部では原位置をとどめた円筒埴輪を２個体と据付坑１箇所、南西拡張部では円筒埴輪３個体と据付坑１箇所を確認できた。据付坑は径 30 ～ 45cm で各々掘削されており、残存する深さは約 15cm 程度である。据付坑の中心間の距離は 60 ～ 70cm 程度であった。この基壇テラス円筒埴輪列で検出した円筒埴輪は、いずれもＶ群系円筒埴輪であった。

以上のように５トレンチでは西造出を検出し、円筒埴輪、形象埴輪群の残存状況は良好であった。

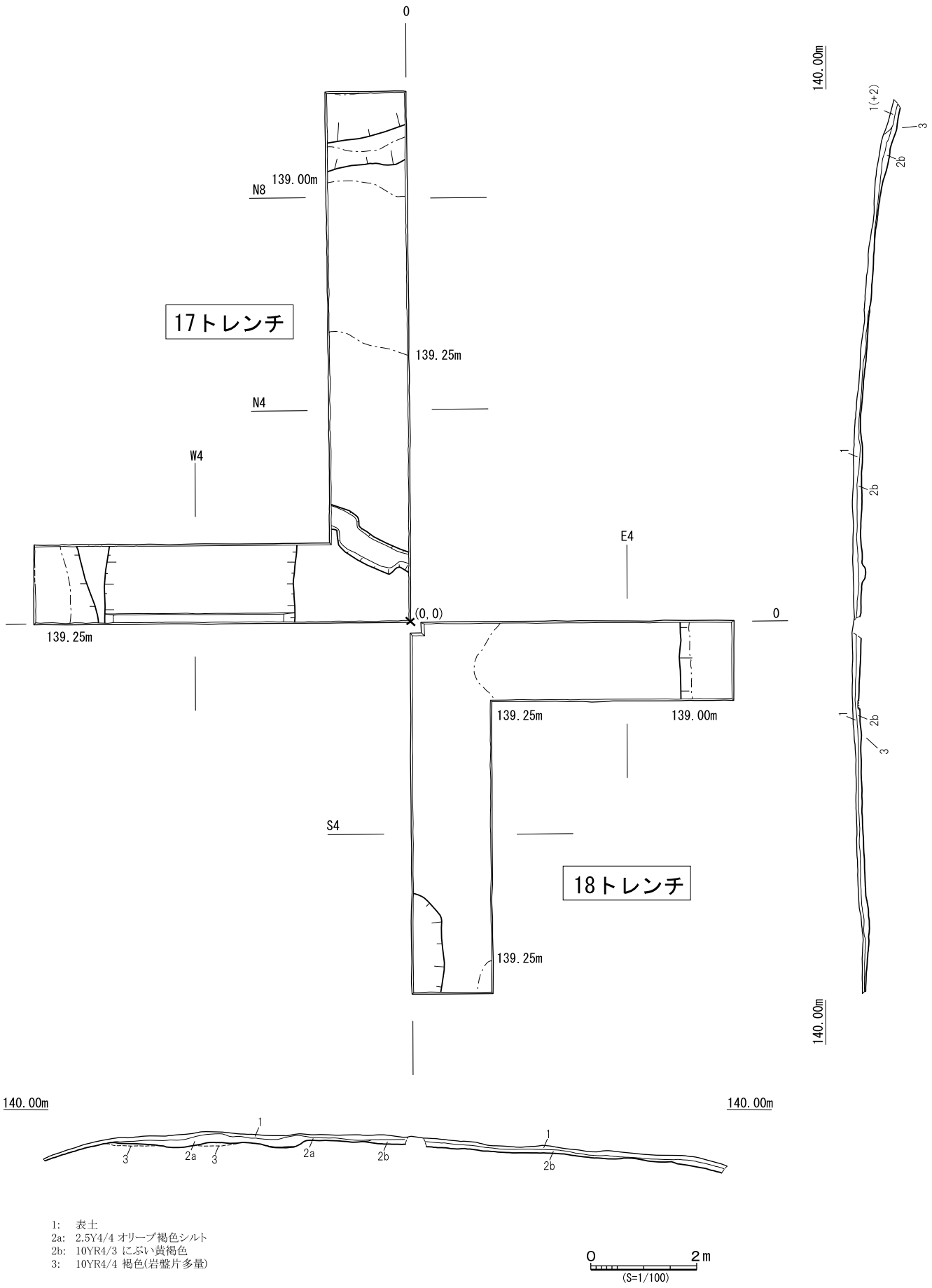


図 3-1　17・18 トレンチ　平面図・土層断面図（S=1/100）

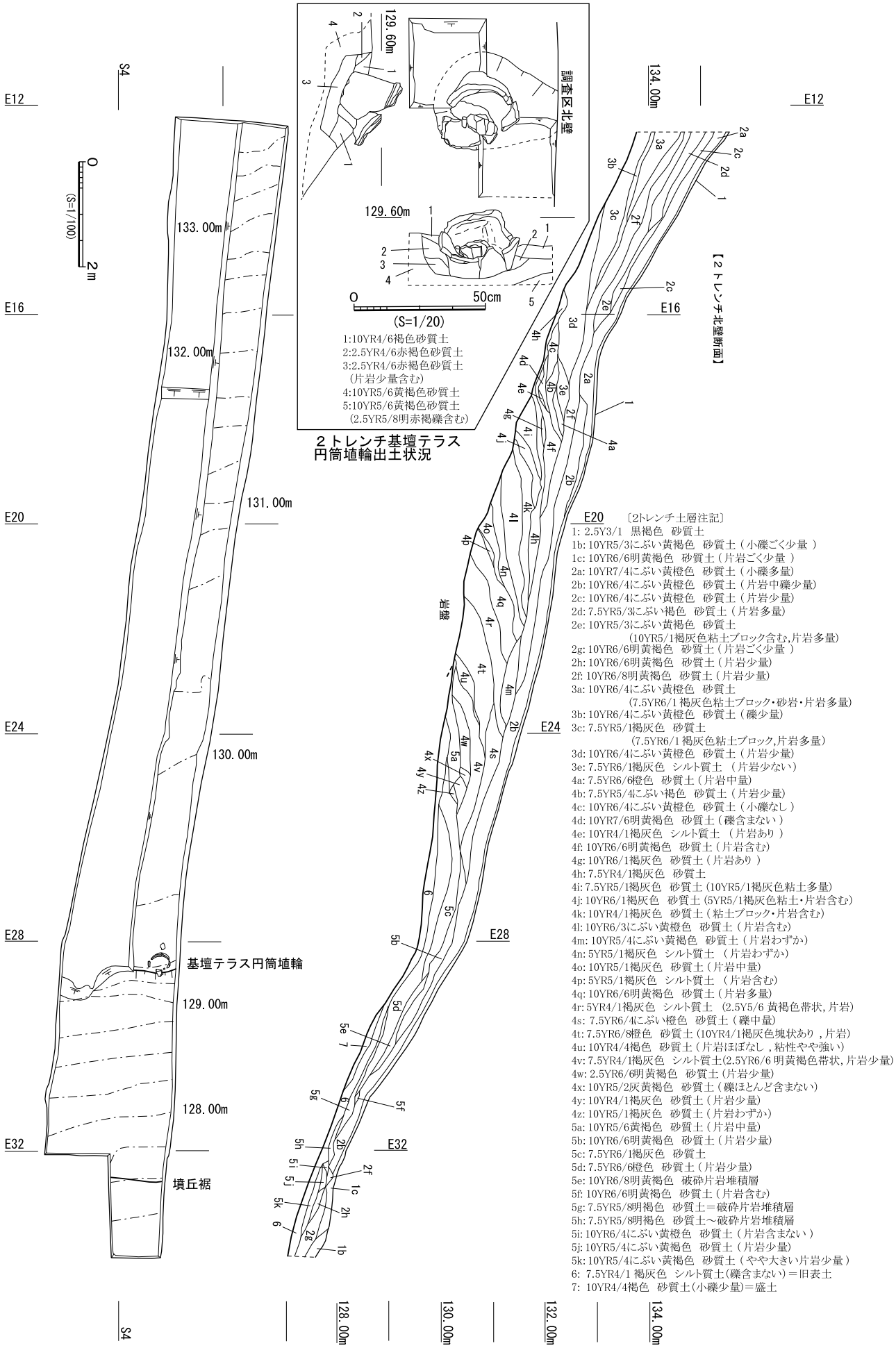


図 3-2　２トレンチ　平面図・土層断面図（S=1/100）

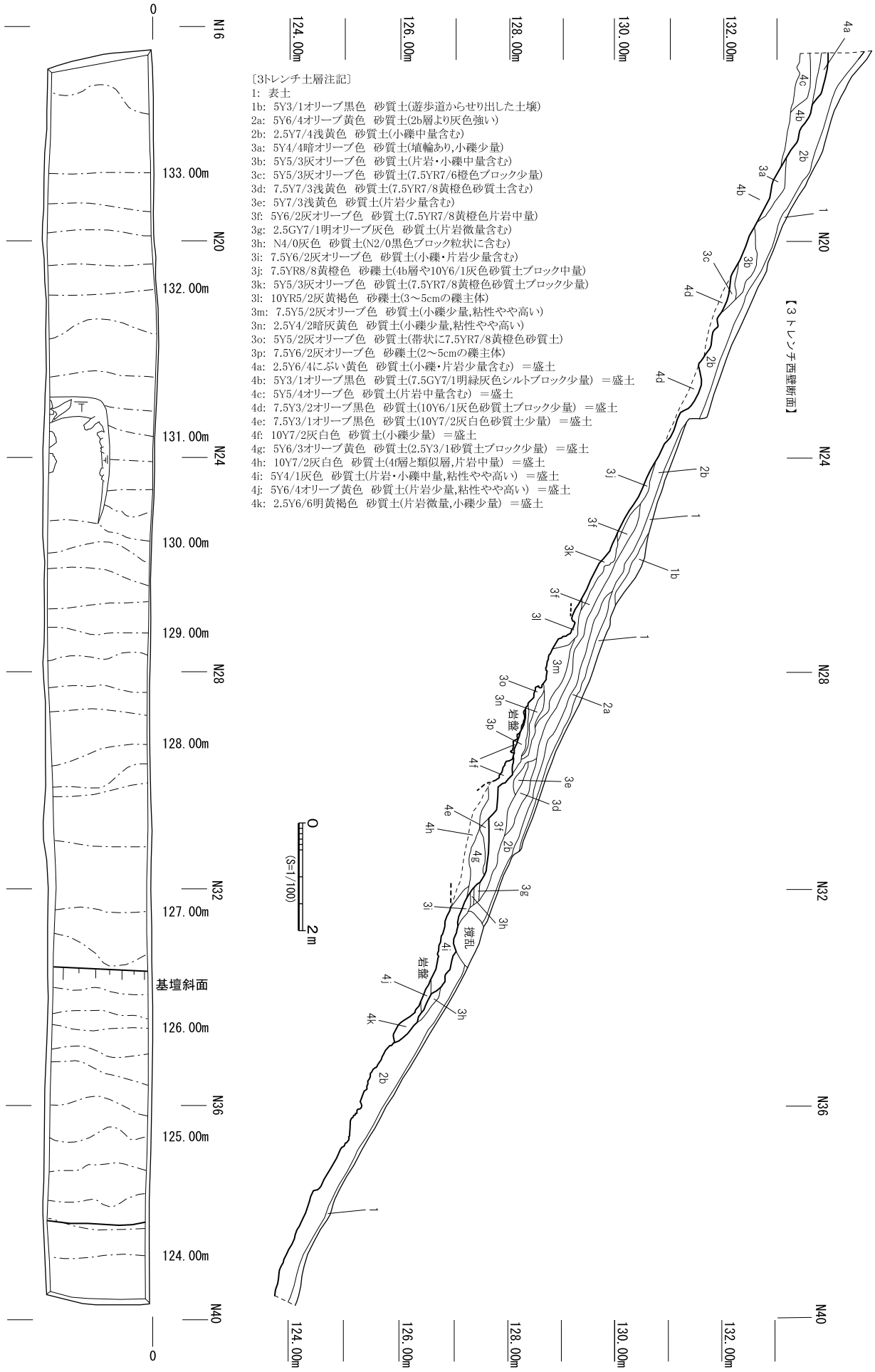


図 3-3　3トレンチ　平面図・土層断面図（S=1/100）

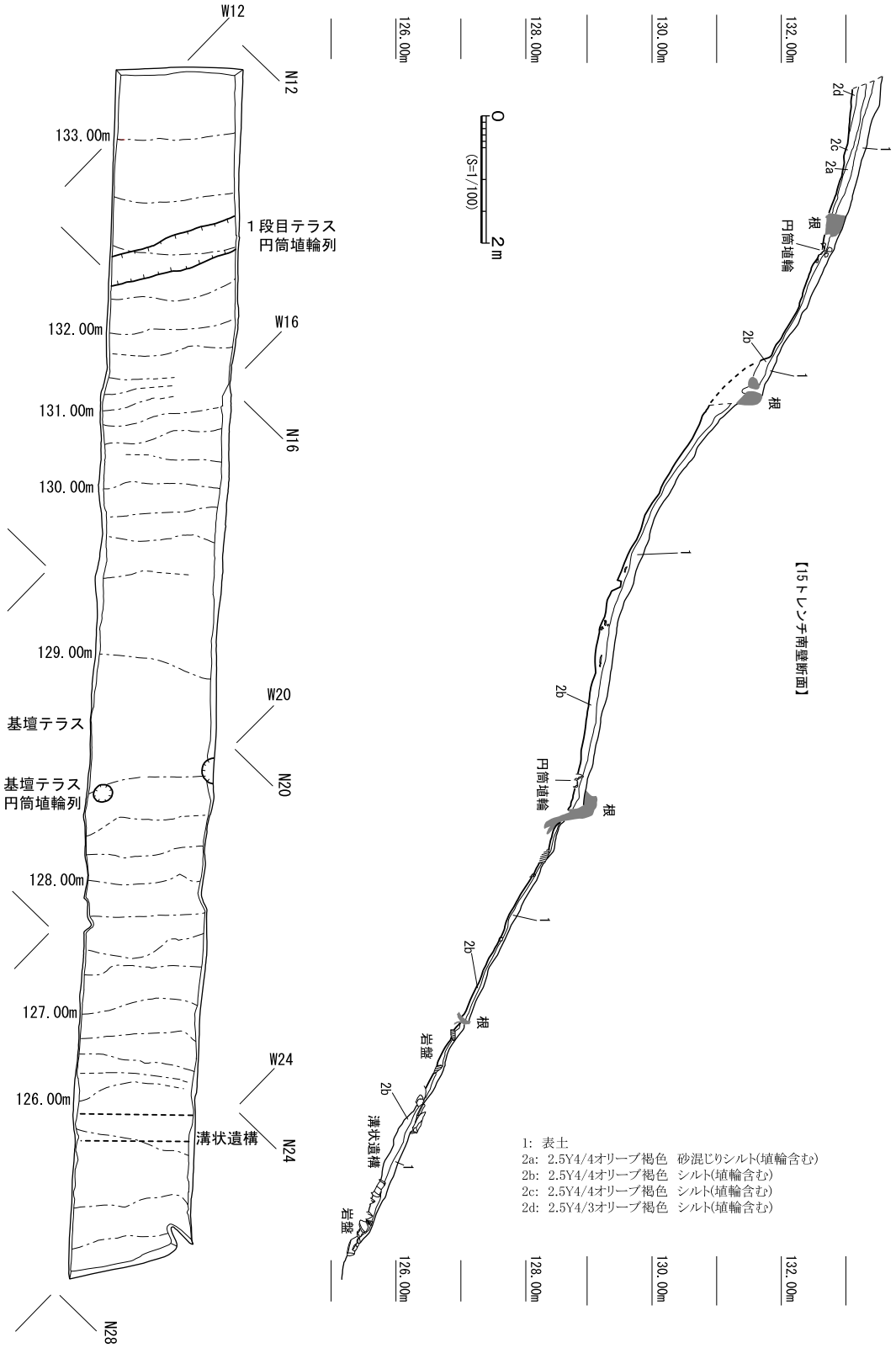


図 3-4　15 トレンチ　平面図・土層断面図（S=1/100）

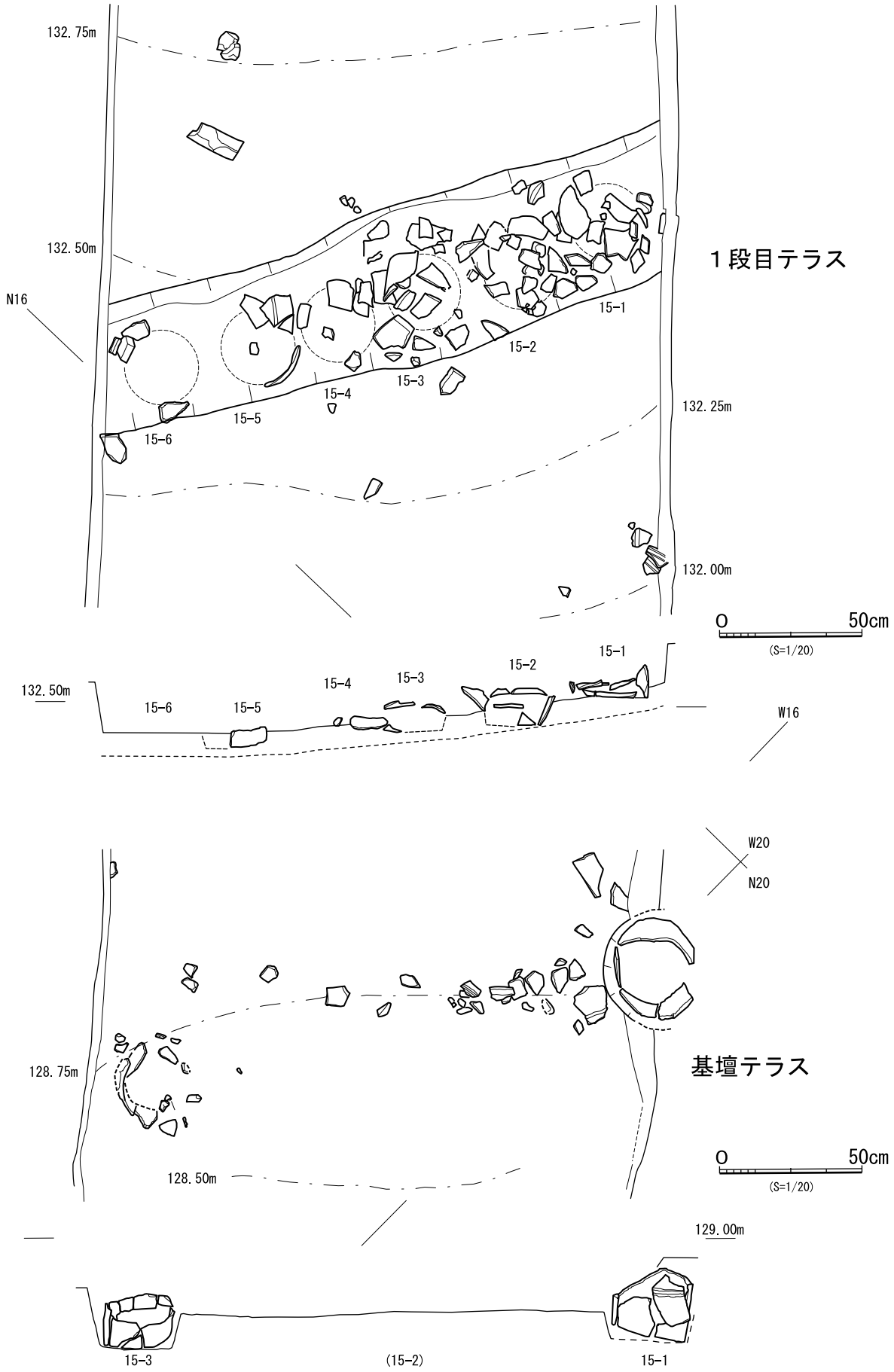
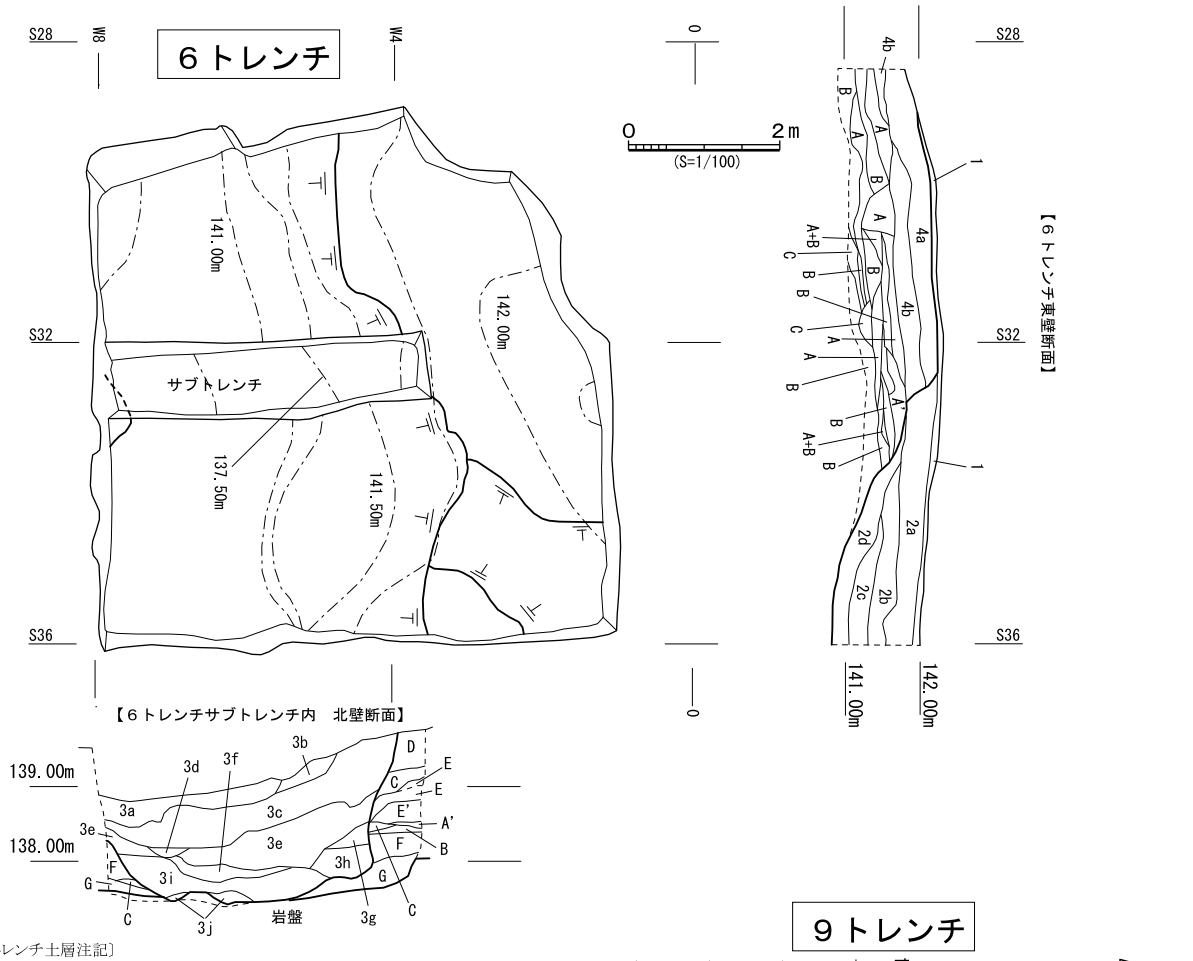
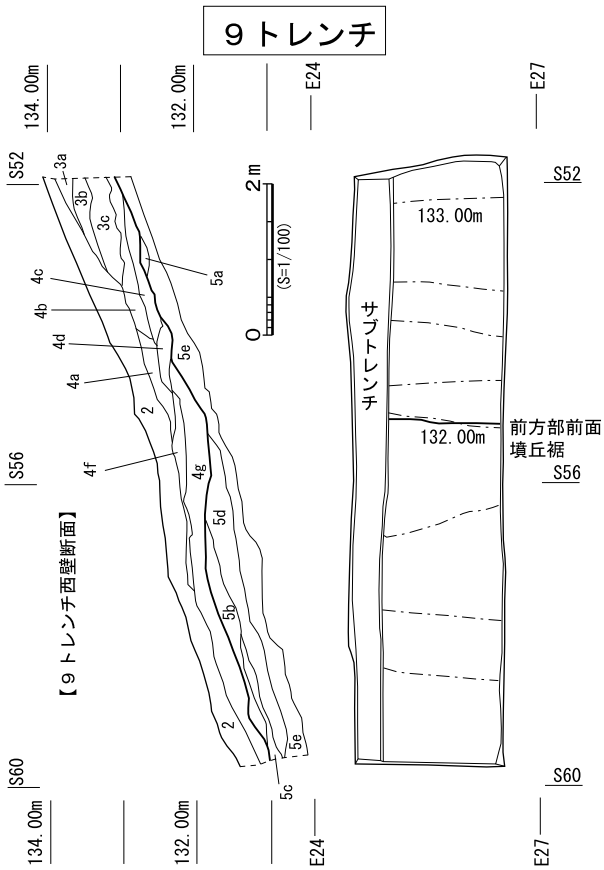


図3-5　15トレンチ　埴輪出土状況図（平面図・立面図）（S=1/20）



〔6トレンチ土層注記〕
1:　5Y3/1オリーブ黒色　砂質土　＝表土
2a:　2.5Y4/6オリーブ褐色　砂質土(小礫・片岩中量,粘性やや高い)＝撹乱埋土
2b:　2.5Y6/1黄灰色　砂質土(小礫・片岩中量,粘性高い)＝撹乱埋土
2c:　5Y5/3灰オリーブ色　砂質土(小礫少量,粘性高い)＝撹乱埋土
2d:　2.5Y4/3オリーブ褐色　砂質土(2a～cより礫・片岩多量,粘性高い,埴輪あり)＝撹乱埋土
3a:　2.5Y6/3にぶい黄色　砂質土
　(片岩中量,粘性ややあり,2.5Y3/1黒褐色シルトブロック中量)＝撹乱埋土
3b:　10YR8/3浅黄橙色　砂質土(A層ブロック中量,片岩少量)＝撹乱埋土
3c:　2.5Y3/1黒褐色　砂質土(A層にB層混ざる,粘性なし)＝撹乱埋土
3d:　7.5YR5/1褐灰色　砂質土(B層に少量のA層混ざる)＝撹乱埋土
3e:　10YR5/4にぶい黄褐色　砂質土
　(B層に帯状のA層2.5Y3/1黒褐色シルト中量,片岩中量,粘性低い)＝撹乱埋土
3f:　10YR4/1褐灰色　シルト質土(片岩中量,A層が帯状に少量,粘性低い)＝撹乱埋土
3g:　2.5Y6/3にぶい黄色　砂質土
　(5Y3/1オリーブ黒色シルトブロック・片岩少量,粘性低い)＝撹乱埋土
3h:　2.5Y6/3にぶい黄色　砂質土＝撹乱埋土
　(10YR5/8黄褐色～2.5Y4/1黄灰色シルトブロック多量,片岩・小礫少量,粘性低い)
3i:　10YR5/3にぶい黄褐色　砂質土
　(10YR4/1褐灰色シルトブロック少量,片岩・小礫少量,粘性低い)＝撹乱埋土
3j:　5Y5/2灰オリーブ色　シルト質土
　(C層に類似する片岩風化層,A・F・G層ブロック少量,粘性低い)＝撹乱埋土
4a:　10YR5/8黄褐色　砂礫土(砂は粗砂主体,礫は片岩主体,粘性やや低い)＝墳丘盛土
4b:　5Y5/2灰オリーブ色　砂質土(中砂～細砂主体,礫は片岩主体,粘性低い)＝墳丘盛土
A:　10YR5/8黄褐色　砂礫土(4a層類似層,片岩多い)＝墳丘盛土
A':　2.5Y6/1黄灰色　シルト質土(片岩・炭化物少量,粘性高い,Aより色調青い)＝墳丘盛土
B:　5Y5/2灰オリーブ色　砂質土(4b層類似層,片岩多い)＝墳丘盛土
C:　5Y5/2灰オリーブ色　砂質土(片岩風化層,A層ブロック少量,粘性なし)＝墳丘盛土
D:　2.5Y6/4にぶい黄色　砂質土(A層ブロック少量,片岩多量,粘性低い)＝墳丘盛土
E:　5YR5/6明赤褐色　砂質土(片岩中量,A+B層ブロック少量,粘性やや高い)＝墳丘盛土
E':5YR5/8明赤褐色　砂礫土(E層に破砕片岩混入,粘性やや低い)＝墳丘盛土
F:　10YR5/1褐灰色　シルト質土(片岩・橙色ブロック・炭化物少量,粘性高い)＝墳丘盛土
G:　2.5Y4/1黄灰色　シルト質土(橙色ブロック・炭化物少量,片岩なし,粘性高い)＝墳丘盛土



〔9トレンチ土層注記〕
1:　表土
2:　2.5Y6/4にぶい黄色　砂質土(片岩中量,埴輪あり,粘性なし)
3a:　2.5Y6/3にぶい黄色　砂質土(片岩中量,粘性なし)
3b:　2.5Y5/4黄褐色　砂質土(小礫多量,粘性ややあり)
3c:　2.5Y3/3暗オリーブ褐色　砂質土(小礫多量,片岩中量,粘性あり)
4a:　2.5Y5/3黄褐色　砂質土(片岩少量,砂岩少量,粘性あり)
4b:　5Y5/3灰オリーブ色　砂質土(片岩・小礫・砂岩微量,粘性あり)
4c:　2.5Y4/2暗灰黄色　砂質土(片岩少量,小礫中量,粘性あり)
4d:　10YR5/4にぶい黄褐色　砂質土(片岩・小礫中量,粘性あり)
4f:　2.5Y6/6明黄褐色　砂質土(片岩主体の礫含む,粘性やや低い)
4g:　2.5Y4/4オリーブ褐色　砂質土(片岩・小礫中量,埴輪あり,粘性あり)
5a:　5Y4/4暗オリーブ色　砂質土(片岩・小礫多量,粘性やや低い)＝地山か
5b:　2.5Y4/3オリーブ褐色　砂質土(片岩中量,粘性やや高い)＝地山か
5c:　2.5Y5/2暗灰黄色　砂質土(片岩・小礫・砂岩微量,粘性あり)＝地山か
5d:　5Y3/1オリーブ黒色　砂質土(小礫微量,10YR4/3にぶい黄褐色砂質土微量含む,粘性あり)＝地山か
5e:　2．5Y4/2黒灰黄色　砂質土(小礫・片岩少量,粘性高い)＝地山か

図 3-6　6・9トレンチ　平面図・土層断面図（S=1/100）

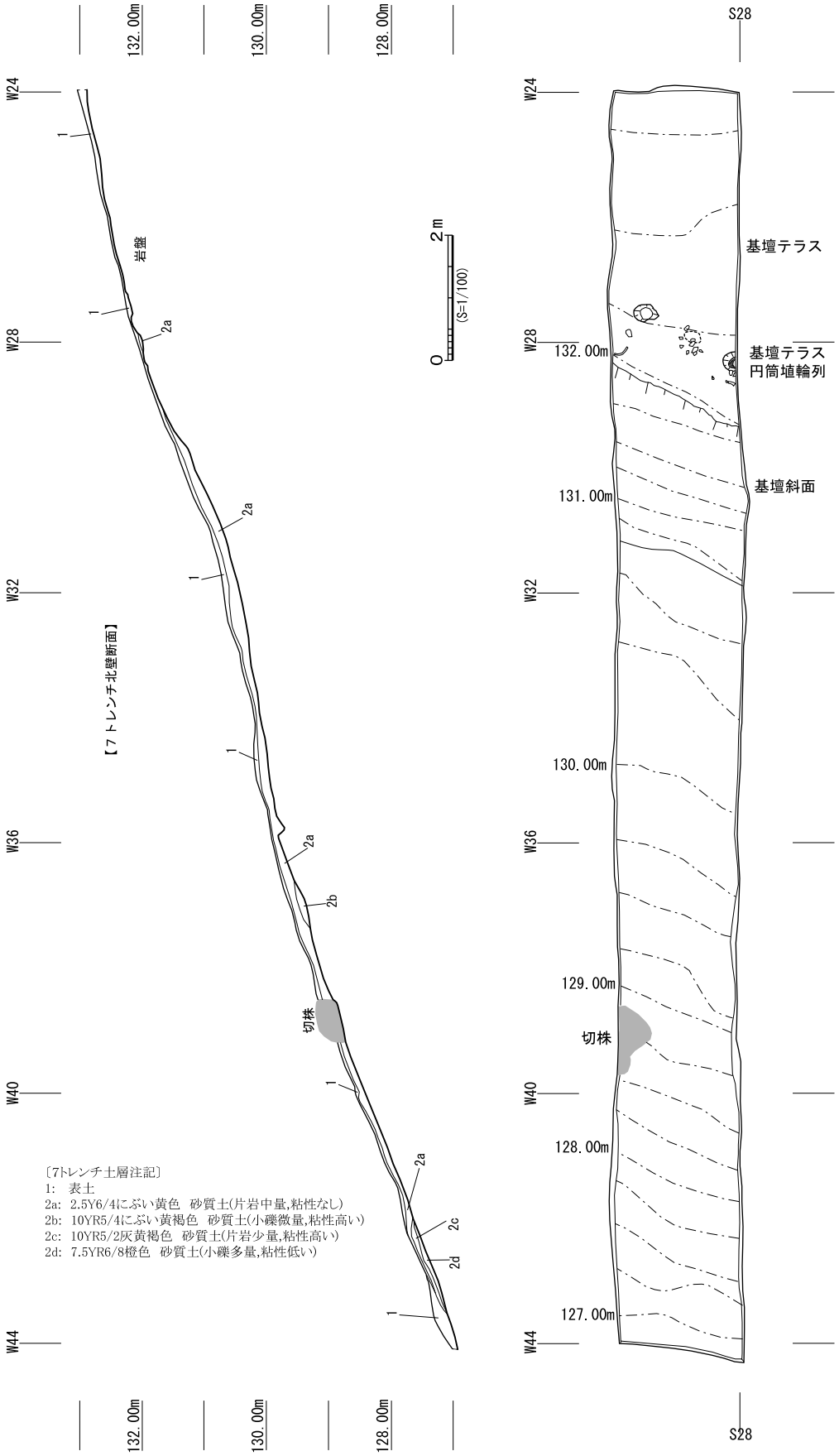
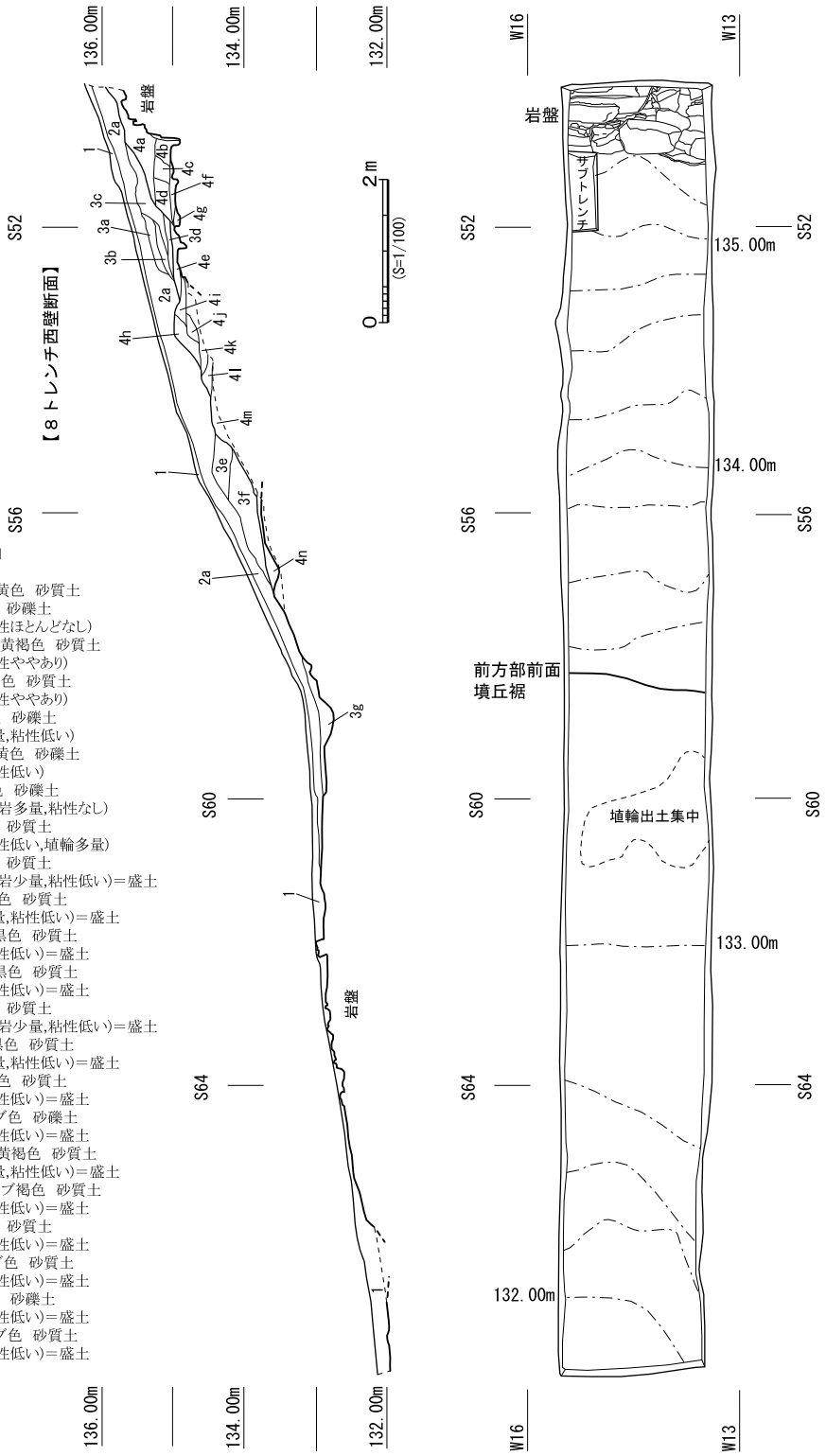


図 3-7　7トレンチ　平面図・土層断面図（S=1/100）



〔8トレンチ土層注記〕
1:　表土
2a:　2.5Y6/4にぶい黄色　砂質土
3a:　2.5Y5/3黄褐色　砂礫土
　(片岩多量,粘性ほとんどなし)
3b:　10YR5/3にぶい黄褐色　砂質土
　(片岩微量,粘性ややあり)
3c:　10YR4/2灰黄褐色　砂質土
　(片岩多量,粘性ややあり)
3d:　10YR3/2黒褐色　砂礫土
　(橙色片岩多量,粘性低い)
3e:　2.5Y6/4にぶい黄色　砂礫土
　(片岩多量,粘性低い)
3f:　5Y5/4オリーブ色　砂礫土
　(橙色・緑色片岩多量,粘性なし)
3g:　2.5Y6/1黄灰色　砂質土
　(片岩少量,粘性低い,埴輪多量)
4a:　2.5Y3/2黒褐色　砂質土
　(緑色・橙色片岩少量,粘性低い)＝盛土
4b:　2.5Y4/2暗灰黄色　砂質土
　(緑色片岩中量,粘性低い)＝盛土
4c:　5Y3/2オリーブ黒色　砂質土
　(片岩多量,粘性低い)＝盛土
4d:　5Y3/2オリーブ黒色　砂質土
　(片岩中量,粘性低い)＝盛土
4e:　2.5Y4/1黄灰色　砂質土
　(緑色・橙色片岩少量,粘性低い)＝盛土
4f:　5Y3/2オリーブ黒色　砂質土
　(橙色片岩中量,粘性低い)＝盛土
4g:　2.5Y4/2暗灰黄色　砂質土
　(片岩少量,粘性低い)＝盛土
4h:　5Y5/3灰オリーブ色　砂礫土
　(片岩中量,粘性低い)＝盛土
4i:　10YR5/4にぶい黄褐色　砂質土
　(橙色片岩多量,粘性低い)＝盛土
4j:　2.5Y3/3暗オリーブ褐色　砂質土
　(片岩中量,粘性低い)＝盛土
4k:　2.5Y3/2黒褐色　砂質土
　(片岩少量,粘性低い)＝盛土
4l:　5Y4/2灰オリーブ色　砂質土
　(片岩少量,粘性低い)＝盛土
4m:　2.5Y4/1黄灰色　砂礫土
　(片岩多量,粘性低い)＝盛土
4n:　5Y4/2灰オリーブ色　砂質土
　(片岩少量,粘性低い)＝盛土

図 3-8　８トレンチ　平面図・土層断面図（S=1/100）

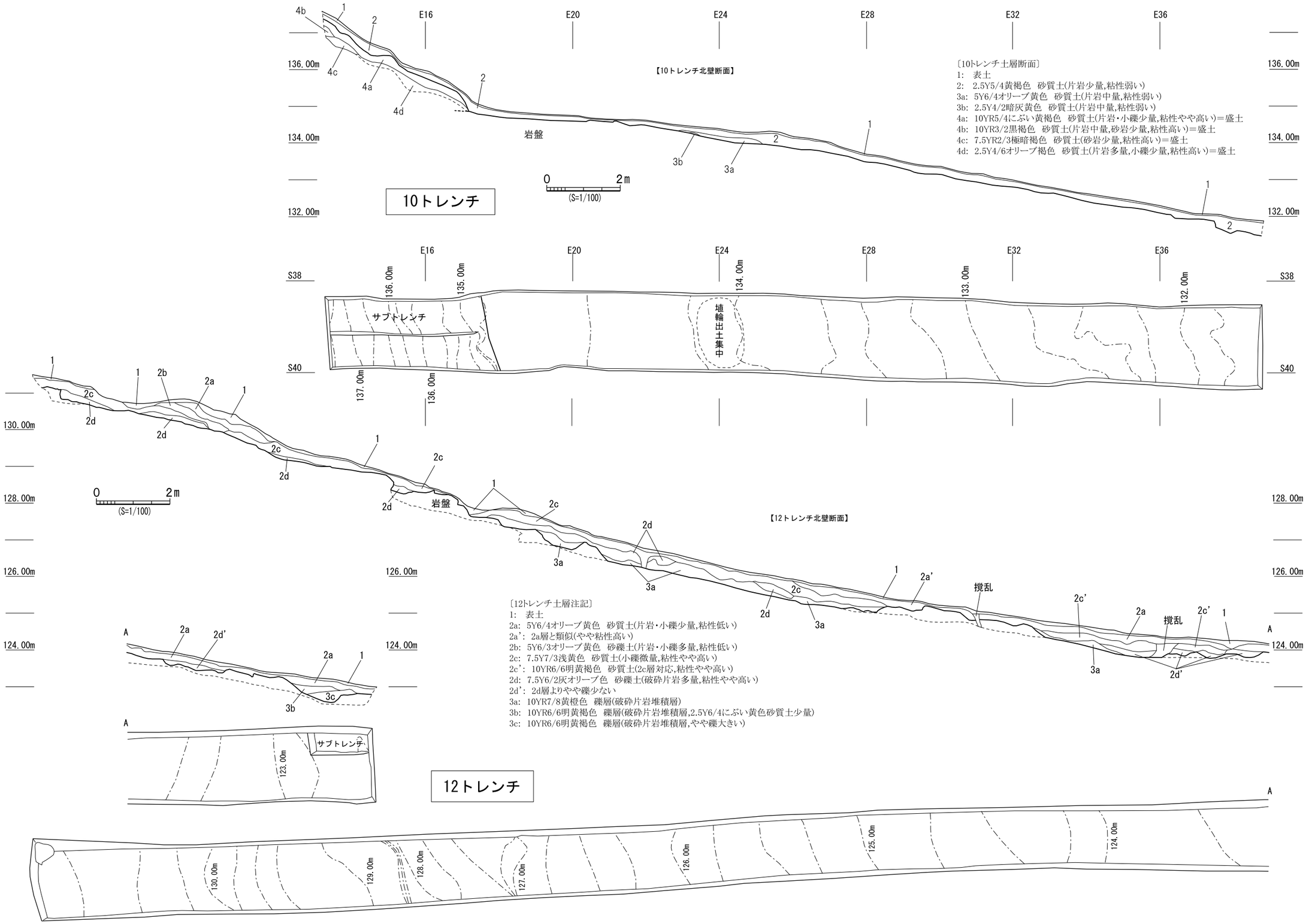
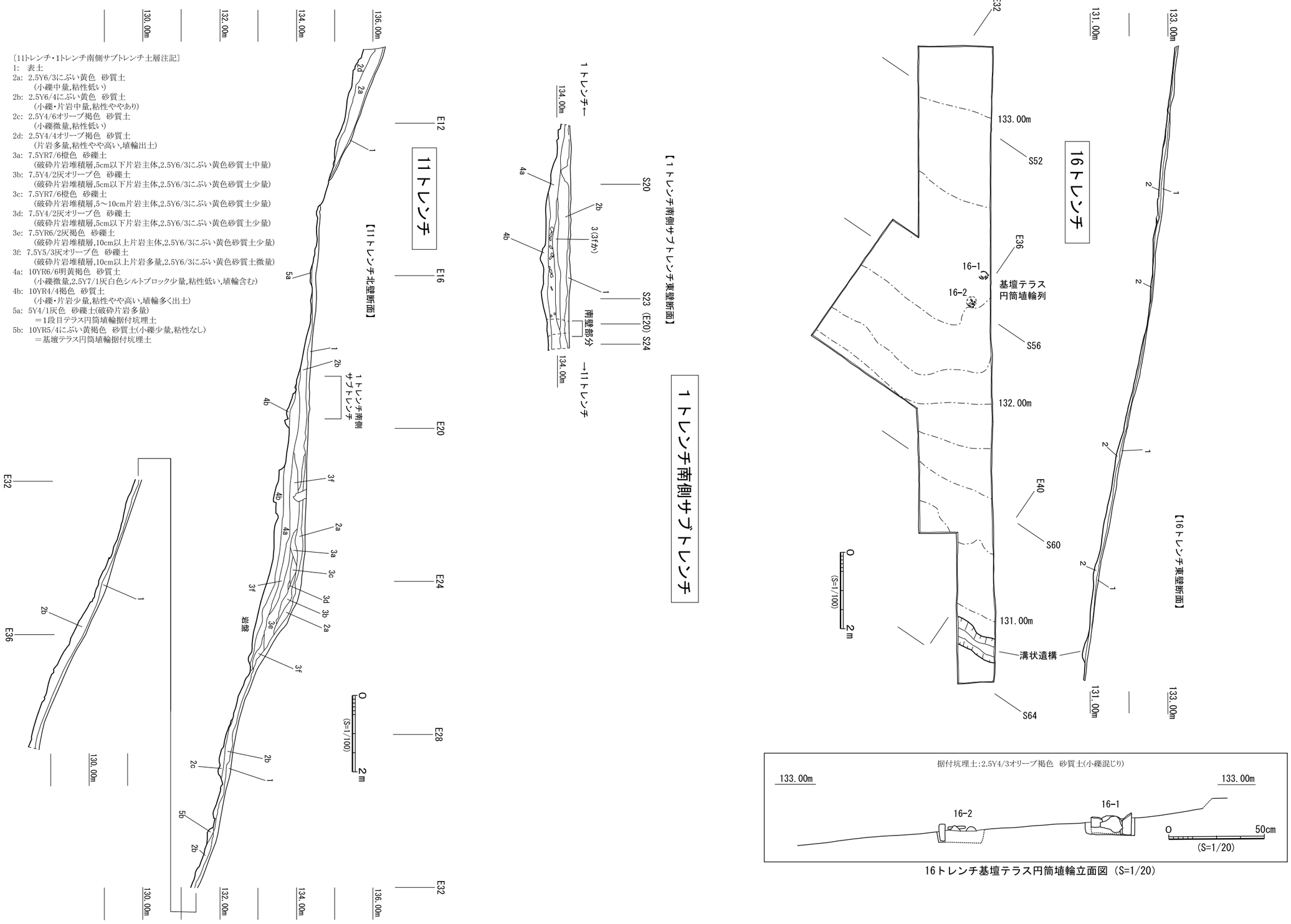


図3-9　10･12トレンチ　平面図･土層断面図(S=1/100)



16トレンチ基壇テラス円筒埴輪立面図 (S=1/20)

図3-10 11トレンチ・1トレンチ南側サブトレンチ・16トレンチ 平面図・土層断面図(S=1/100)

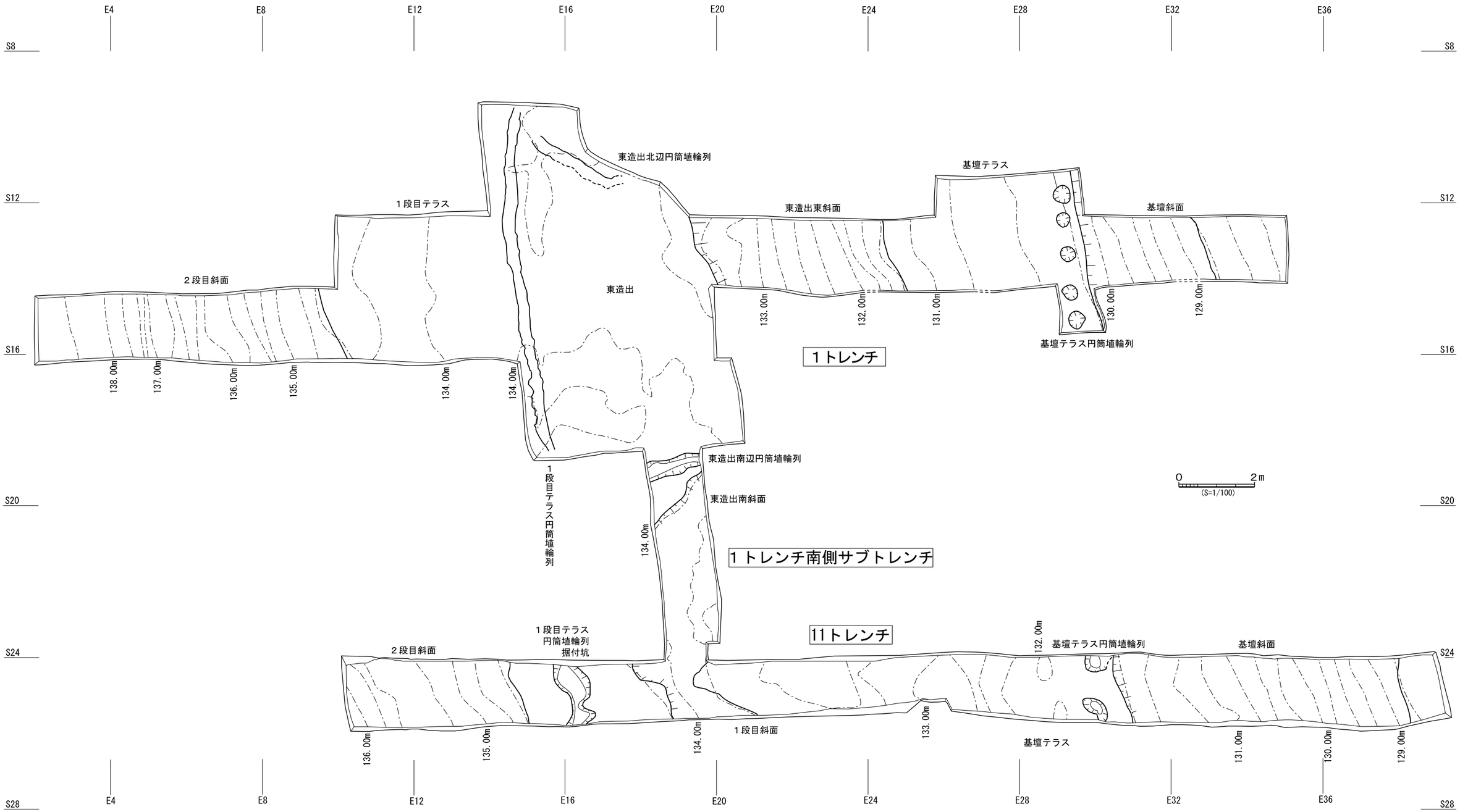
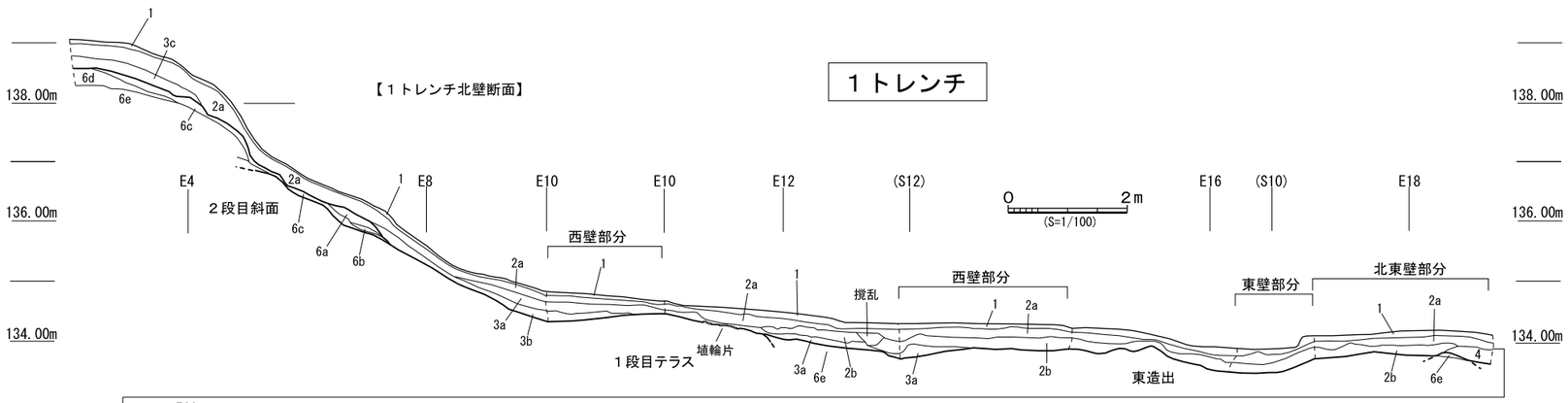
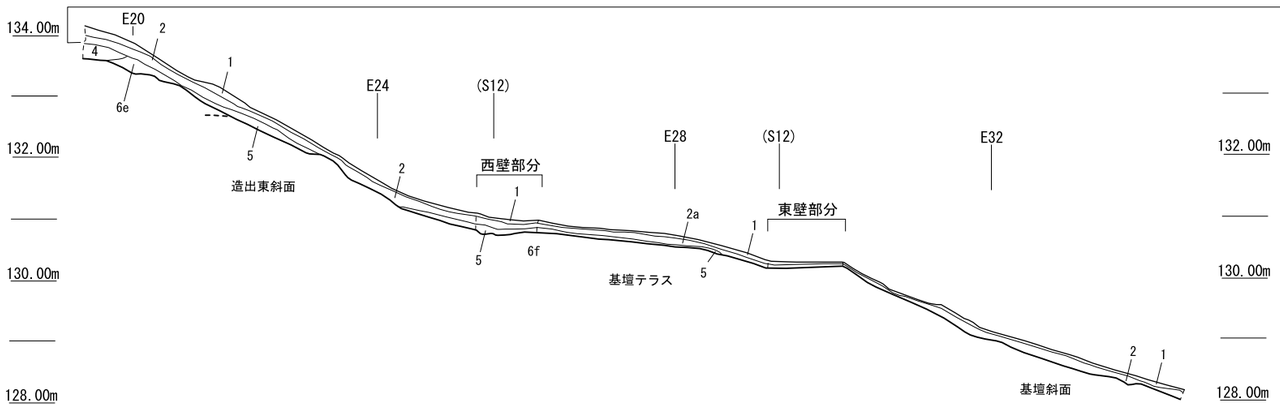


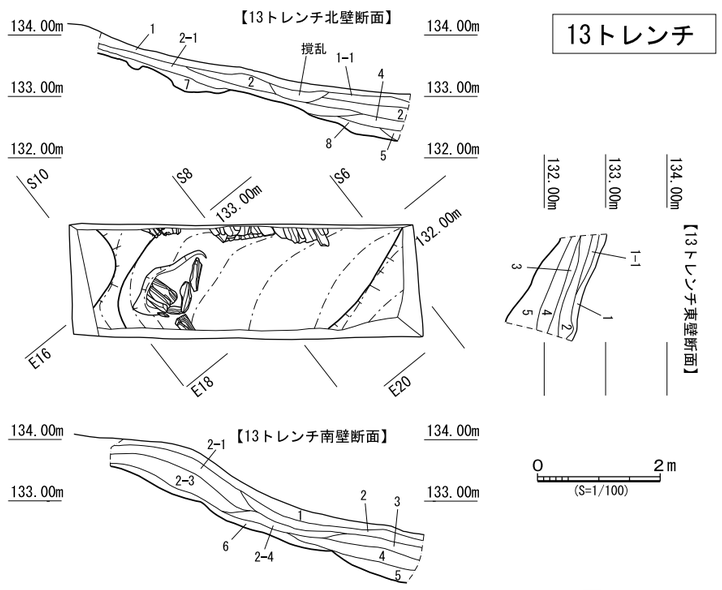
図3-11　1･11トレンチ　平面図(S=1/100)

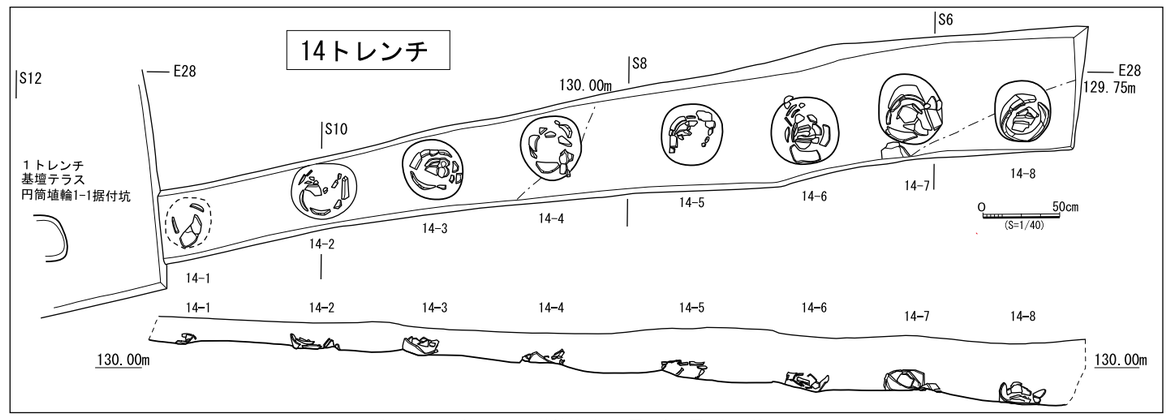




〔1トレンチ土層注記〕
1:　表土
2a:　2.5Y6/6明黄褐色　砂質土(小礫・片岩中量,粘性なし)
2b:　2.5Y4/4オリーブ褐色　砂質土(小礫中量,片岩少量,粘性低い)
3a:　2.5Y4/2暗灰黄色　砂質土(小礫・片岩中量,粘性やや高い)
3b:　10YR4/1褐灰色　砂質土(小礫・片岩多量,長石少量,粘性低い)
3c:　5Y6/3オリーブ黄色　砂質土(片岩中量,粘性なし,埴輪あり)
4:　破砕片岩層(2.5Y6/4にぶい黄色砂質土含む)＝11トレンチ3層対応
5:　2.5Y6/4にぶい黄色　砂礫土(片岩中量,粘性低い)＝11トレンチ4a層対応
6a:　2.5Y6/4にぶい黄色　砂礫土(片岩少量,白色礫微量,長石微量,粘性低い)＝盛土の可能性
6b:　10YR5/8黄褐色　砂質土(片岩・小礫少量,長石微量,粘性やや高い)＝盛土の可能性
6c:　5Y6/3オリーブ黄色　砂質土(小礫・片岩少量,3c層より片岩少ない,粘性低い)＝盛土
6d:　2.5Y4/2暗灰黄色　砂質土(5Y5/8明赤褐色粒少量,小礫・片岩微量,粘性低い)＝盛土
6e:　2.5Y6/4にぶい黄色　砂礫土(橙色ブロック少量,橙色・緑色片岩多量,粘性低い)＝盛土

〔13トレンチ土層注記〕
1:　表土　7.5YR3/2黒褐色土(腐食土)
1-1:　10YR7/4にぶい黄橙色土(山土)
2:　表土　10YR7/6明黄褐色土(山土)
2-1:　10YR6/3にぶい黄橙色土(山土)
2-3:　10YR6/4にぶい黄橙色土(山土)
2-4:　10YR6/6明黄褐色土(山土)
3:　10YR6/4にぶい黄橙色土(山土,埴輪含む)
4:　10YR5/4にぶい黄褐色土(山土,埴輪含む)
5:　10YR4/2灰黄褐色土(埴輪・炭化物混じり)
6:　10YR4/6褐色土(埴輪・炭化物混じり)
7:　10YR6/6明黄褐色土(山石・埴輪混じり)
8:　10YR6/8明黄褐色土(山石混じり)





14トレンチ基壇テラス円筒埴輪列平面図・立面図（S=1/40）

図3-12　1･13･14トレンチ　平面図･土層断面図(S=1/100)

図3-13　1トレンチ　東造出　埴輪出土状況平面図1(S=1/30)

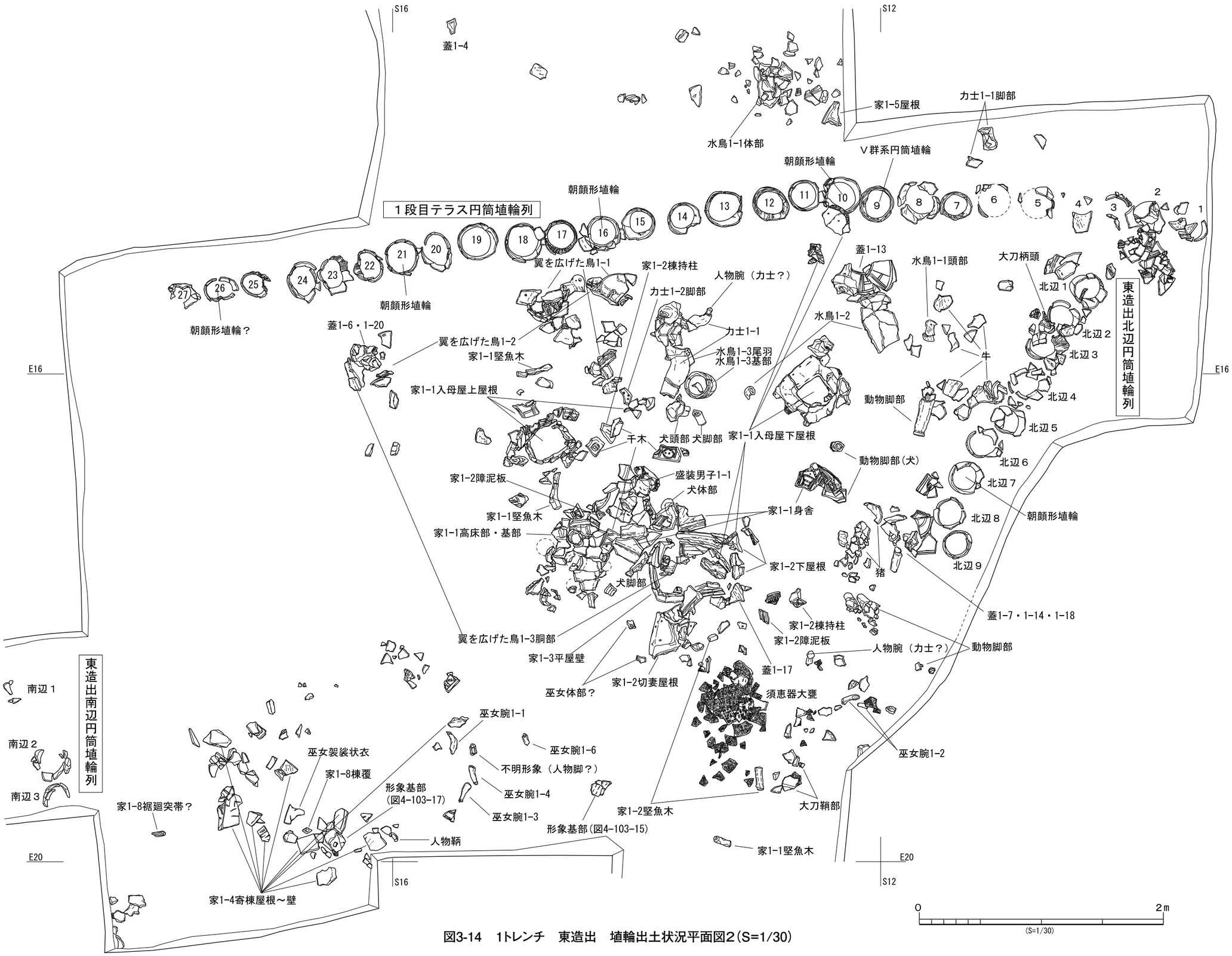


図3-14　1トレンチ　東造出　埴輪出土状況平面図2（S=1/30）

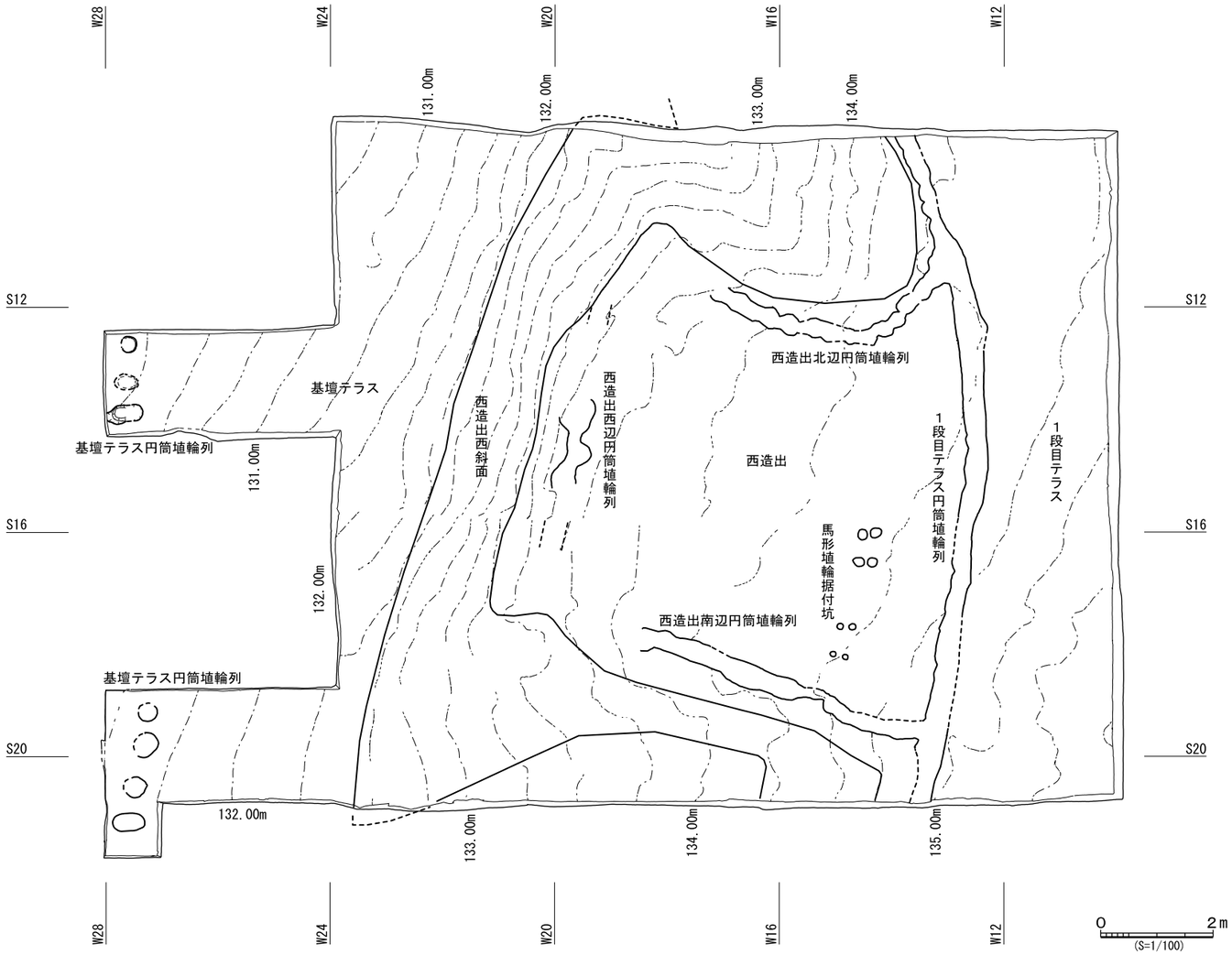


図3-15　5トレンチ　平面図(S=1/100)

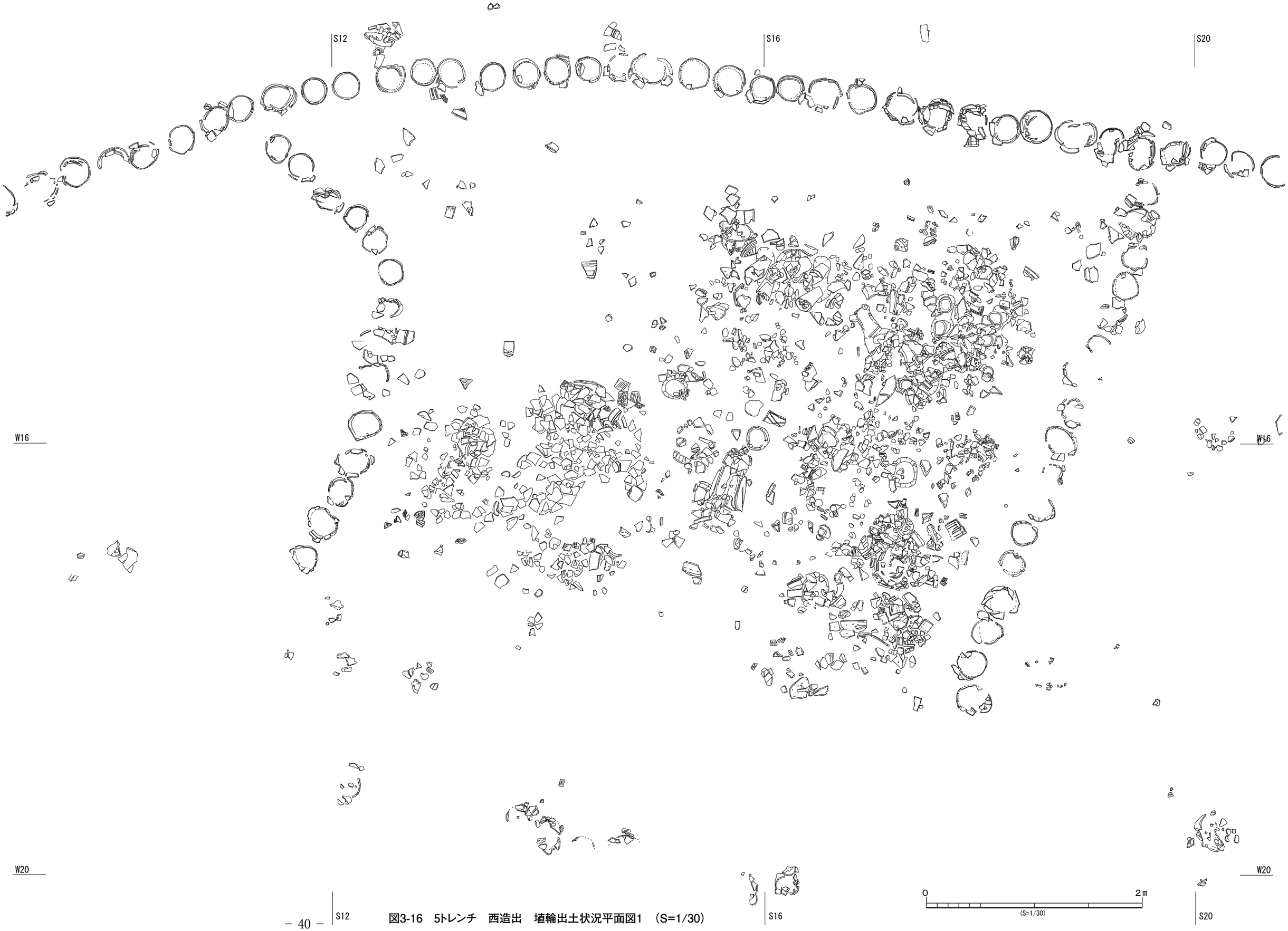


図3-16　5トレンチ　西造出　埴輪出土状況平面図1　(S=1/30)

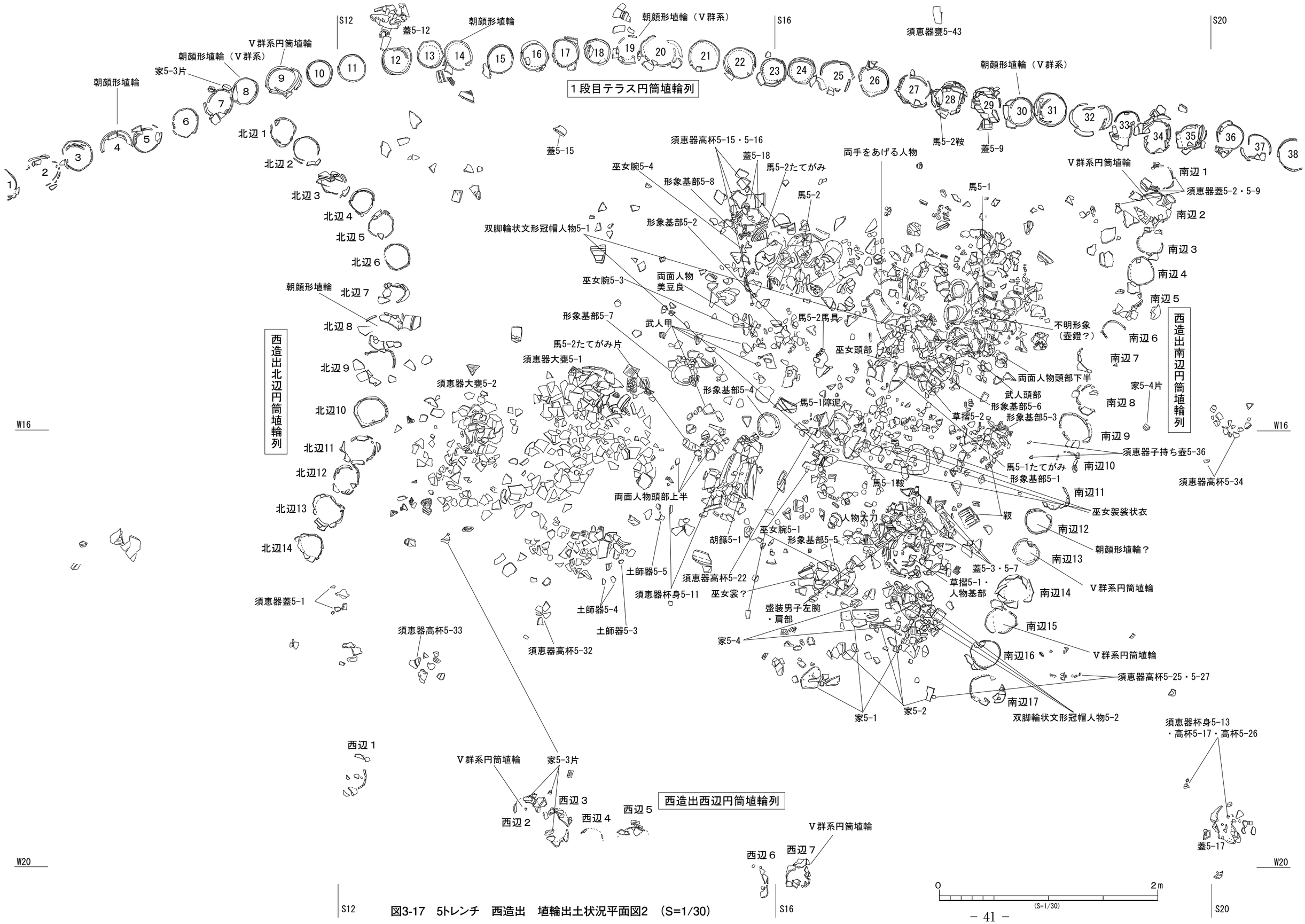
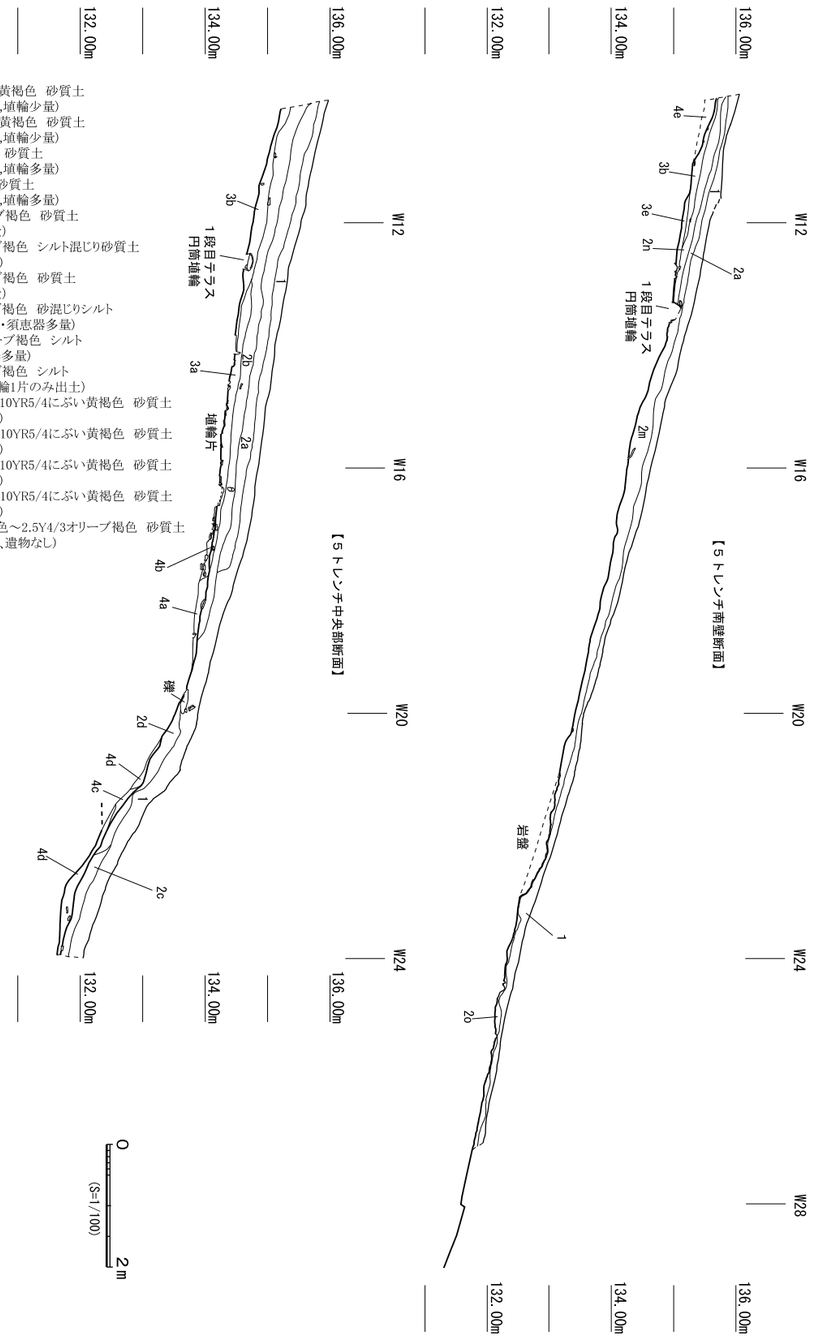


図3-17　5トレンチ　西造出　埴輪出土状況平面図2　(S=1/30)



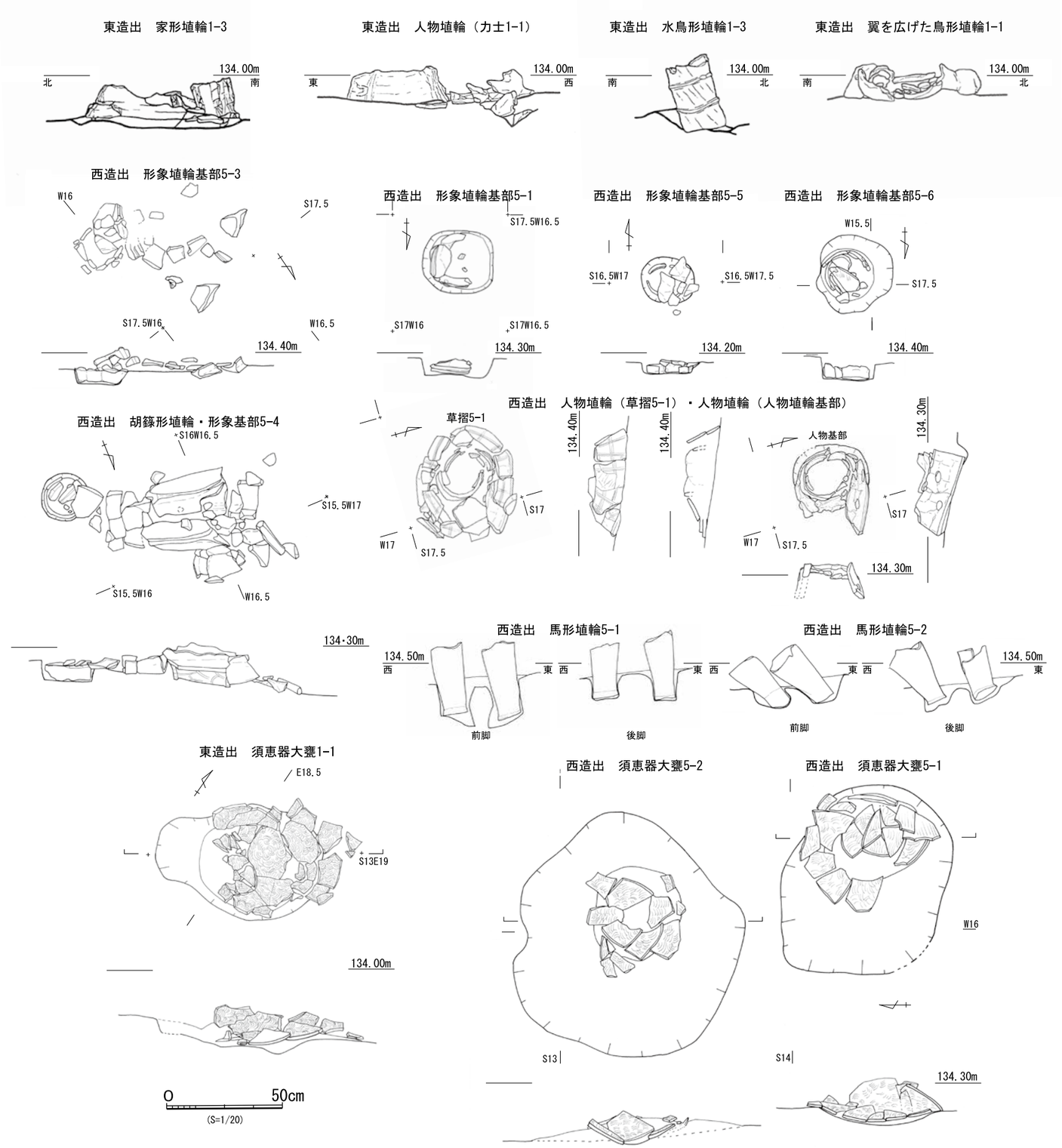


図3-18　5トレンチ　土層断面図（S=1/100）　／　東西造出　形象埴輪・須恵器　出土状況立面図（S=1/20）

第４章　東造出の形象埴輪

第１節　家形埴輪（図 4-1 ～ 4-43）

東造出中央部から３分割焼成された高床式入母屋造（家 1-1）、入母屋造上屋根の切妻部（家 1-2）、平屋の身舎（家 1-3）が出土している。家 1-3 は基部を下にして出土し、原位置であった可能性がある。家 1-1 は屋根部分がひっくり返されたように大きく動いているが、基部が出土した付近に樹立されていた可能性がある。平屋の寄棟造（家 1-4）は造出南東側で集中して出土した。

家 1-1（図 4-1 ～ 26）は、入母屋上屋根（切妻部）、入母屋下屋根（寄棟部）と身舎の壁、高床部・基部の３つに分けて成形して焼成されている。上屋根は破風上部が欠損し、千木が取り付くか不明である。大形の堅魚木が４本のせられる構造であり、３本が残存する。屋根には鰭飾り状の棟覆いを格子形に貼り付けている。妻側の壁にはスカシ孔が２つあり、方柱状の棟持柱が取り付けられる。破風にはわずかに線刻が確認できる。入母屋下屋根（寄棟部）は、上屋根がのる部分に板状の平坦面を作り出している。妻側には沈線と刺突文で盾の文様が表現された方柱状の棟持柱が取り付けられ、その上部に上屋根の棟持柱がのる構造となる。平側には２条一括沈線と１点刺突文による文様が施された障泥板を貼り付けている。軒先にも２条一括沈線による文様があるが、刺突文は施されていない。内面には身舎の壁が接続された部分が確認できるが、実際には身舎の壁とは接合せず、身舎の壁の高さは未確定である。身舎の壁には外面四隅と壁中央に粘土の板を貼り付けて柱を表現する。その柱部分には２条一括沈線と刺突文による盾状の表現と×に－を加えた文様が施されている。出入口は各面とも２つずつ設けられる。内面には四隅と壁中央に縦方向の補強突帯が貼り付けられ、柱表現の可能性もあるが、指押さえが強く残り丁寧に貼り付けられていないことから、補強材であったと推察する。３分割焼成の最下部は、高床・９本総柱の円柱・基部で構成される。円柱の残存状況は悪く、２本が一部残るのみである。本来円柱は基部の下にも続いていたと推測できるがその部分は残存しない。図 4-43-1・2 は家形埴輪 1-1 の棟木、図 4-43-3 ～ 5 は大棟の堅魚木がのる部分、図 4-43-6 は大棟の可能性がある破片である。

家 1-2（図 4-27 ～ 30）は、分割焼成の入母屋造の上屋根と考えられ、２条一括沈線を２つ重ねた４条沈線で格子状に施文する。大棟から破損している側の一部に破断面ではなくいきている箇所がある。穴があいていたか、整形の際に粘土を埋めた痕跡であろうか。大棟部分は堅魚木が取り付く構造で、接合しないが、同一個体と考えられる堅魚木２本と入母屋下屋根の軒先、棟持柱、障泥板が出土する。家 1-2 は出土地点が近く家 1-3 の身舎に組み合う可能性は否定できない。

家 1-3（図 4-31 ～ 35）は平屋の壁で、基部には半円形のスカシがあり、一部は円形にあけられている。出入口部は２箇所あり、外面中央には縦方向に粘土を貼り付けて柱を表現している。内面の四隅と中央に補強突帯を貼り付けており、柱を表現していた可能性もある。

家 1-4（図 4-36 ～ 38）は、全体像を復元できていないが、屋根や壁の形状から平屋の寄棟造と考えられる。２箇所の円形のスカシ孔がある部分（妻側か）と方形の出入口部がある部分が確認できる。造出東斜面で出土した家 1-7 とした寄棟部の軒先（図 4-39）は、家 1-4 と同一個体と想定できるが、直接接合しないことと出土地点が少し離れることから可能性をとどめるにしておく。

この他、これらとは別個体でやや小形の破風と棟木（家 1-5）が１段目テラス（円筒埴輪列より墳丘側）で出土している（図 4-40-1・2）。同一個体の破片が少ないことや出土した地点から、造出ではなく、墳丘上に樹立していたものが転落した可能性もある。これ以外に小形の棟木や笄がつ

く棟覆、身舎基部の破片があり、家 1-1 ～ 1-5 の部材とは考えにくいため家 1-6、1-8 としている（図 4-40-3 ～ 14）。家 1-8 は家 1-4 もしくは家 1-6 と同一個体の可能性がある。

いずれの家に取り付くか確定できない大形の千木（図 4-41・42）があり、現状では家 1-1 と家 1-2 は破風上部が未確認のため、これらに取り付く可能性がある。ただし、これらの破風にはこの千木と同じ文様がないため、別個体の大形の家形埴輪があった可能性も否定できない。

以上のように東造出および 1 段目テラスから複数の家形埴輪が確認できた。東造出では 4 個体（家 1-1、1-2、1-3、1-4）、墳丘側で 1 個体（家 1-5）を確認できたといえる。部位不明の家形埴輪と考えられる破片もあり（図 4-43-7 ～ 11）、家 1-6 ～ 8 も別個体であればさらに個体数が増えることになる。

第２節　人物埴輪（図 4-44 ～ 4-51）

東造出の人物埴輪の種類としては、盛装男子、巫女、力士があげられる。

盛装男子 1-1（図 4-44）は頭部や脚部を欠損するものの、体部はほぼ残存しており、沈線と浮文で施文された衣服をまとい、手には手甲を付けている。この個体とは直接接合しないが、大刀を取り付けた腰部分の個体（図 4-45-6）がある。盛装男子と同一個体と考えていたが、取り付く角度を考えると別個体である可能性がある。この他、冠や鞆、草摺など（図 4-45-1 ～ 5）、男子像に関連する埴輪が出土しているが、盛装男子 1-1 に取り付く可能性もあるが判然としない。

巫女は、それぞれ接合しないが頭頂部の島田髷部分と袈裟状衣、腕などの部位が出土している（図 4-45-7 ～ 9、図 4-46-1 ～ 7）。腕の数から少なくとも 4 体以上の巫女がいたと推測できる。

力士 1-1（図 4-47 ～ 50）は、頭部と腕、脚台部を欠損するが、ほぼ全身がわかる個体で、左手をあげる姿勢で、胸は円形の粘土を貼り付けてふくらみを表現する。まわしを付けて、ひざ付近では紐状のもので結び、それより下部には足玉状の浮文を貼り付けた痕跡がある。左腕にも紐状の貼り付けが残る。脚部内面には補強突帯がある。同一個体の可能性が高いくるぶし付近と足先の個体（図 4-51-1・2）があり、くるぶし付近にも足玉状のものを貼り付けている。足先は素足で、５本指が表現される。この力士 1-1 とは胎土が違うくるぶし付近と足先の破片（図 4-51-3 ～ 5）があり、別個体（力士 1-2）と判断した。くるぶし付近には足玉状の浮文が貼り付けられ、足の甲にも同様に貼り付けられている。足先の浮文は、突起状のものが付いた靴などの想定もあるが、指が表現されており、素足であったとすれば、素足に何らかの形で玉類を装着した状況を表現したものと想定することもできる。器や玉類、手甲などが取り付かない腕が 2 個体（図 4-46-8・9）出土し、形状から同一人物のものと推測できる。このうち図 4-46-9 は力士 1-1 と同一地点で出土しており、また形態や胎土などからもこれらの腕は力士 1-1 のものである可能性が高い。

第３節　動物埴輪（図 4-52 ～ 4-91）

東造出の動物埴輪は、四足動物（馬形埴輪、牛形埴輪、猪形埴輪、犬形埴輪）と鳥（翼をひろげた鳥形埴輪、水鳥形埴輪）が出土している。

馬形埴輪 1-1（図 4-52 ～ 56）は、基壇テラスから転落した状態で出土したが、本来は東造出上の樹立と推測している。欠損部が多いものの、たてがみから背中、尻尾、頬、脚部 1 本などの部位が出土し、西造出の馬形埴輪とほぼ同形のものと推察できる。注目すべき点は、右側面の障泥に水平方向に取り付けられた粘土板で、これは横座り用の短冊形水平板と考えられる。左側面に

は輪鐙が取り付けられる。たてがみは断面Ｔ字状で、側面には線刻が施される。頭部は板状の形状をした側面のみ残存する。体部内面下部には補強突帯が貼り付けられる。脚端部はハ字状に開く形態である。帯や障泥は２条一括沈線・２点一括刺突文、鞍は円形浮文・竹管文が施される。

牛形埴輪 1-1（図 4-57 ～ 62）は、脚部を欠損するもののほぼ全身がわかる個体である。頭部に３箇所の穴があり、目・耳・角に相当すると考えられる。角がある動物埴輪には鹿も存在するが、短く太い首、少し盛り上がる背中など全身のプロポーションから牛と判断した。差込式の耳と角が出土し、外側前方へのびる角の形状や平らな額なども牛の特徴を捉えているといえる。

猪形埴輪 1-1（図 4-63・64）は、たてがみの剥離痕跡が残り、馬または猪が候補にあげられる。両頬の口部分に牙の表現の可能性がある痕跡が認められるため猪と判断した。ただし、牙の痕跡が不明瞭で、また、頬から下あご部分に馬形埴輪と同じように粘土板を貼り付けた痕跡があることなどから、馬形埴輪の可能性も残る。鼻部分は犬形埴輪同様に平らに作り出されている。

犬形埴輪 1-1（図 4-65・66）は、猪形埴輪と同様に鼻部分を平らに製作している。背中部分が残存していないため、猪形埴輪である可能性も残る。ただし、猪形埴輪に比べて頭部がスリムで首が立つことから犬形埴輪の可能性が高いと判断している。脚端部は馬形埴輪と違って、突帯を貼り付けている。牛、猪形埴輪とは違って明褐色の胎土をしている。

牛、猪は４本、犬は２本の脚部が欠損している状態であるが、この他に四足動物の脚部が出土している。いずれも端部に突帯状の粘土を貼り付けており、内面の観察から、切開再接合技法により製作されている。このうち図 4-67-7 は胎土から犬形埴輪である可能性が高い。牛、猪形埴輪は胎土が似ていることから、その他の脚部（図 4-67-4 ～ 6）についてはどちらに属するかは判断できない。この他、四足動物の破片として、耳の破片（図 4-67-1）、耳と角の穴の可能性がある破片（図 4-67-2）、牛ののど袋の可能性がある破片（図 4-67-3）などが出土している。他にも牛形埴輪の可能性がある部位が認められることから、牛形埴輪が２体存在したことが示唆される。

翼を広げた鳥形埴輪は、全国的に類例がないものである。全身を復元できたものが２羽で、いずれも同じ形態で、４段の円筒台部上にのる。翼を広げた鳥形埴輪 1-1（図 4-68 ～ 74）は、左羽以外は全体が残存している個体である。頭部・体部上面と頭部側面、体部側面、羽・尾羽側面に小孔があけられる。体部前面と後面にはスカシ孔がある。羽の下面には補強突帯を３条貼り付けている。翼を広げた鳥形埴輪 1-2（図 4-75 ～ 82）は全体の残存状況はよくないが、体部前面と後面以外に側面にもやや大きめのスカシ孔があけられている。また、羽の下面に２条の補強突帯が貼り付けられるほか、羽の上面から体部上面にかけて補強突帯の痕跡を残す。

この他に翼を広げた鳥形埴輪 1-1・1-2 とは異なる頭部（図 4-83-1）、体下半部（図 4-83-2）、体部上面から羽部（図 4-83-3）、尾羽（図 4-83-4）、羽（図 4-84-5 ～ 7）などの破片が出土している。これらの中には胎土の違うものがあり、１個体ではなく２～３個体の破片が含まれると推測できる。つまり、東造出では計４個体以上の翼を広げた鳥形埴輪が出土していることになる。

水鳥形埴輪は、同形態のものが３羽出土した（図 4-85 ～ 91）。1-1・1-2 はほぼ全体を復元でき、1-3 は頭部、尾羽、円筒台部が出土している。長い首、細長く丸いくちばし、水平に取り付く尾羽で、脚の表現はない。目は竹管文で施され、貫通していない。翼の部分は粘土を貼り付けて段差を作って表現する。埴輪で確認できる種類で考えれば、白鳥やカモなどとはくちばしの形態が違うため、形態的にはツルやサギ類がモデルと推定できる。ただし、体部の形態が水平を保ち、ツルなどが立っているというより、白鳥などが水に浮かんでいる形態に近いともいえる。したがって、ツルやサギ類を想定したいが、実際の鳥を忠実にモデルにしたかは疑問が残る点である。

第４節　器財埴輪（図 4-92 ～ 102）

東造出から出土した器財埴輪は、大刀、靫、蓋形埴輪がある。盾形埴輪は確認できなかった。

大刀形埴輪は、各部位が出土し、ほぼ１個体分を確認できるが、文様の施文方法や工具が異なるものが含まれるため、２個体以上あった可能性がある。護拳部（図 4-93-3）は、断面台形状の貼り付けが２箇所あり、両辺を２条一括沈線と１点刺突文で施文する。沈線による区画内部の刺突文は外側の刺突文とは違う小さい工具で２点一括刺突文を施す。柄頭部分（図 4-93-1）は、２点一括刺突文と２条沈線で外周を施文し、内部は細い沈線で施文する。護拳部が剥離した部分に多数の沈線状のキズが付けられている。鞘口（柄口）部（図 4-93-2）は、２条一括沈線による縦方向と斜め方向の線刻が施され、一部に護拳部が剥離したと推測できる箇所が残り、柄頭部と同様に沈線状のキズが付けられる。鞘部（図 4-93-4）は、縦方向の２条の沈線と３点一括刺突文、４条の×形の文様が施される。３点一括刺突文は、大刀形埴輪と考えられる個体ではこの部材にだけ施される。鞘部両側面に取り付く盾部（図 4-92-6・7）が２つ出土し、大きさや文様構成などは類似して同一個体の可能性があるが、若干胎土が異なるように見えるので別個体の可能性も残る。外周は２条一括沈線と１点刺突文で施文し、中央には斜め上方から小孔があけられる。盾部に使用された工具は、鞘部や柄部の工具とは違ってやや太いものである。鞘部と円筒台部の部位（図 4-93-5）には盾部が剥離した痕跡が残り、施文工具も盾部のものに類似する。

靫形埴輪 1-1（図 4-92-8）は、左上方部の破片が確認できる。外周は２条一括沈線と２点一括刺突文で施文し、内部は直弧文風の文様になっている。裏面には円筒部から続く補強突帯が残存する。この他には、靫・大刀とは区別できない破片（図 4-92-9 ～ 13）が複数出土している。形態、文様構成とも似ており区別は難しいが、大刀形埴輪の盾部と靫形埴輪は外周の施文が１点刺突文と２点刺突文で異なっており、１点のものは大刀形、２点のものは靫形の可能性が高い。

蓋形埴輪の立飾部は、施文方法や胎土などから２種類に分けることができる。１つは３条一括沈線を用いて、胎土は明褐色である（図 4-94・95）。もう一方は、１条ずつ沈線を施すもので、外周は２条帯、内部は３～４条帯で構成される。黄褐色の胎土で、ハケ目を残すものが多く、やや幅広である（図 4-96 ～ 101）。蓋形埴輪の笠部（図 4-102）は、軸受部の口縁部に突帯を貼り付けている。突帯を貼り付けていない口縁もあるが、蓋形埴輪以外の形象埴輪基部の可能性も残る。

第５節　不明形象埴輪・形象埴輪基部（図 4-103）

図 4-103-1・2 は弧状を描く板状の個体で、弧状の沈線が施される。力士形埴輪のまげ部分の可能性がある。図 4-103-3 ～ 6 は、大刀形埴輪や靫形埴輪に比べ薄く、器財埴輪ではなく、人物の服や馬形埴輪の障泥などが考えられる。図 4-103-7 は人物埴輪のかかと部分もしくは鳥形埴輪の首、図 4-103-8 は巫女などのスカート部分などが想定できるが、いずれも確定的な根拠はない。図 4-103-9 ～ 12 は、円板状になった埴輪片で、周囲が削られて円形を呈する。非人為的に円板状になっただけかもしれない。図 4-103-13・14 は鈴で、馬形埴輪 1-1 に取り付く鈴に比べてかなり小形で、人物埴輪または小形の馬形埴輪の部品であろう。図 4-103-15 ～ 17 は形象埴輪の基部で、17 は器財埴輪もしくは人物埴輪の基部である可能性がある。

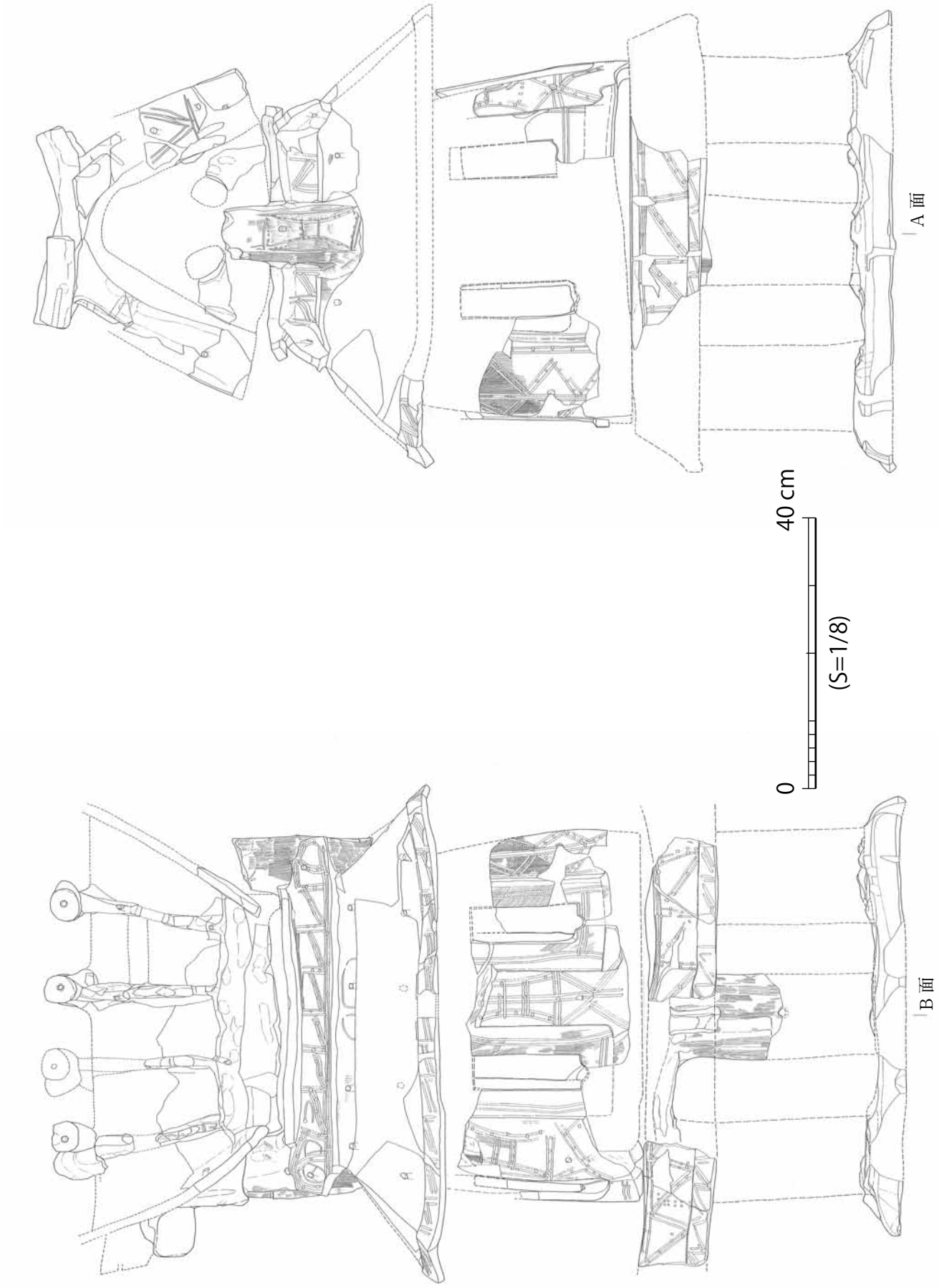


図 4-1　東造出　家形埴輪 1-1　全体①(S=1/8)

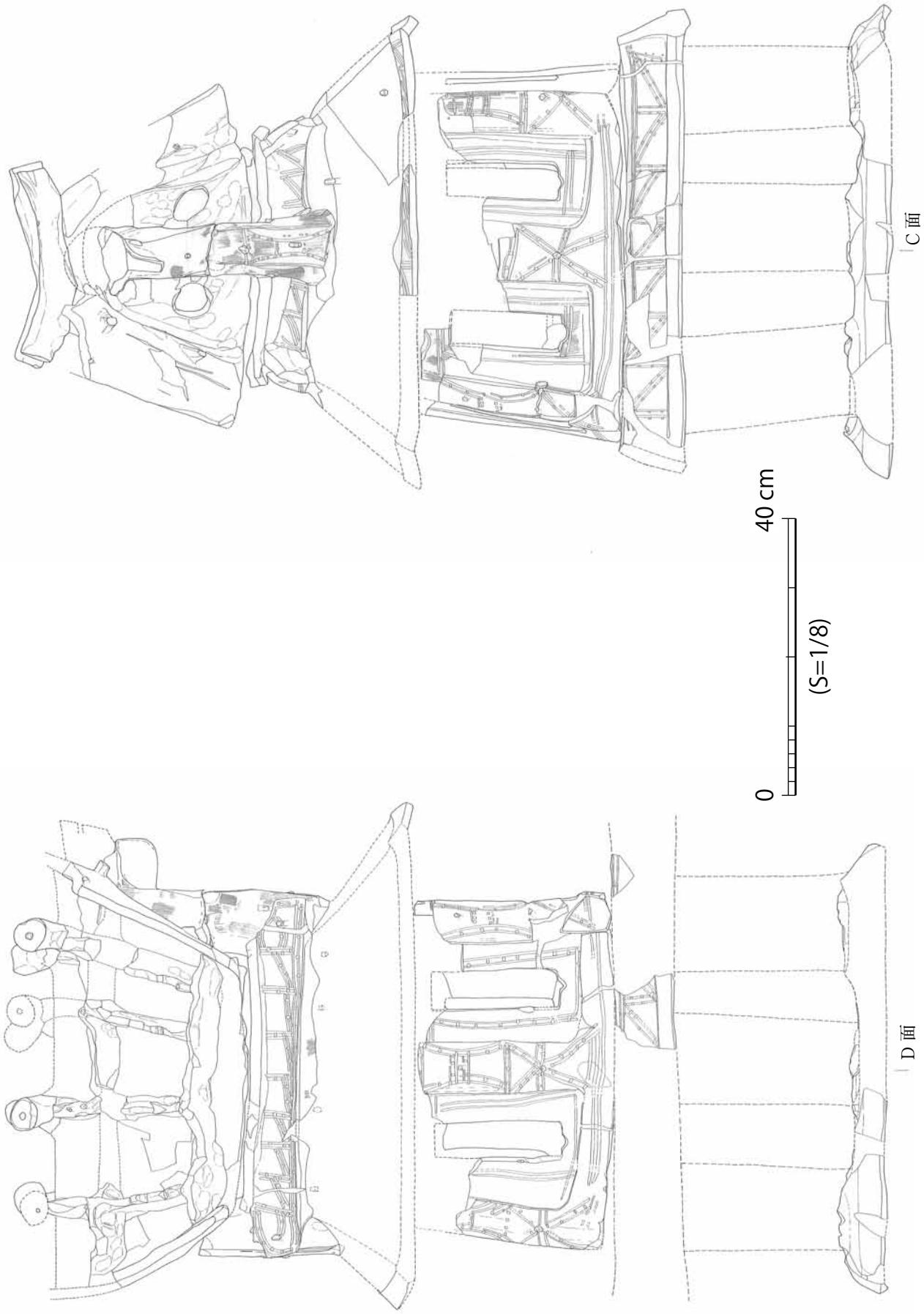


図 4-2　東造出　家形埴輪 1-1　全体②(S=1/8)

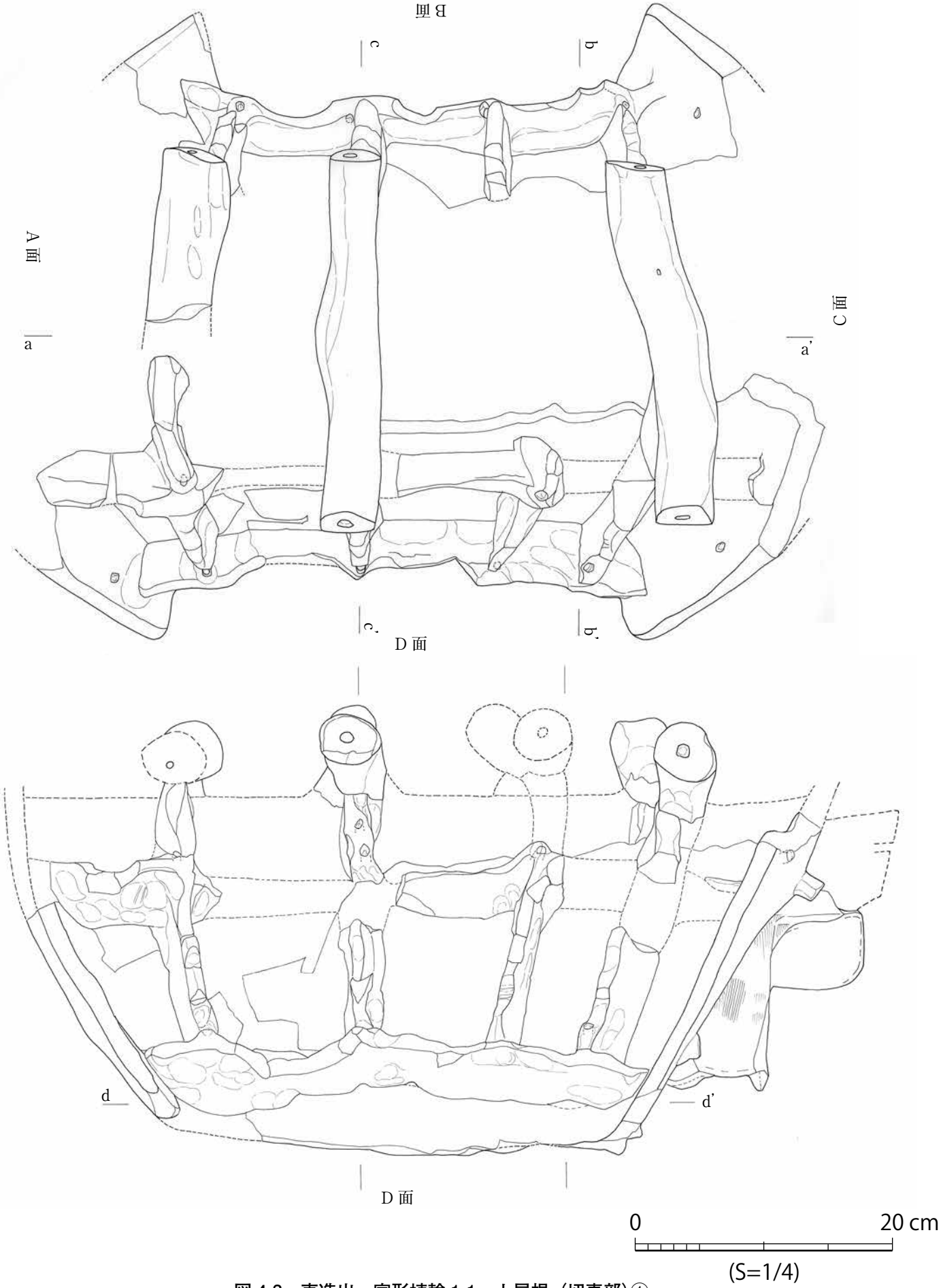
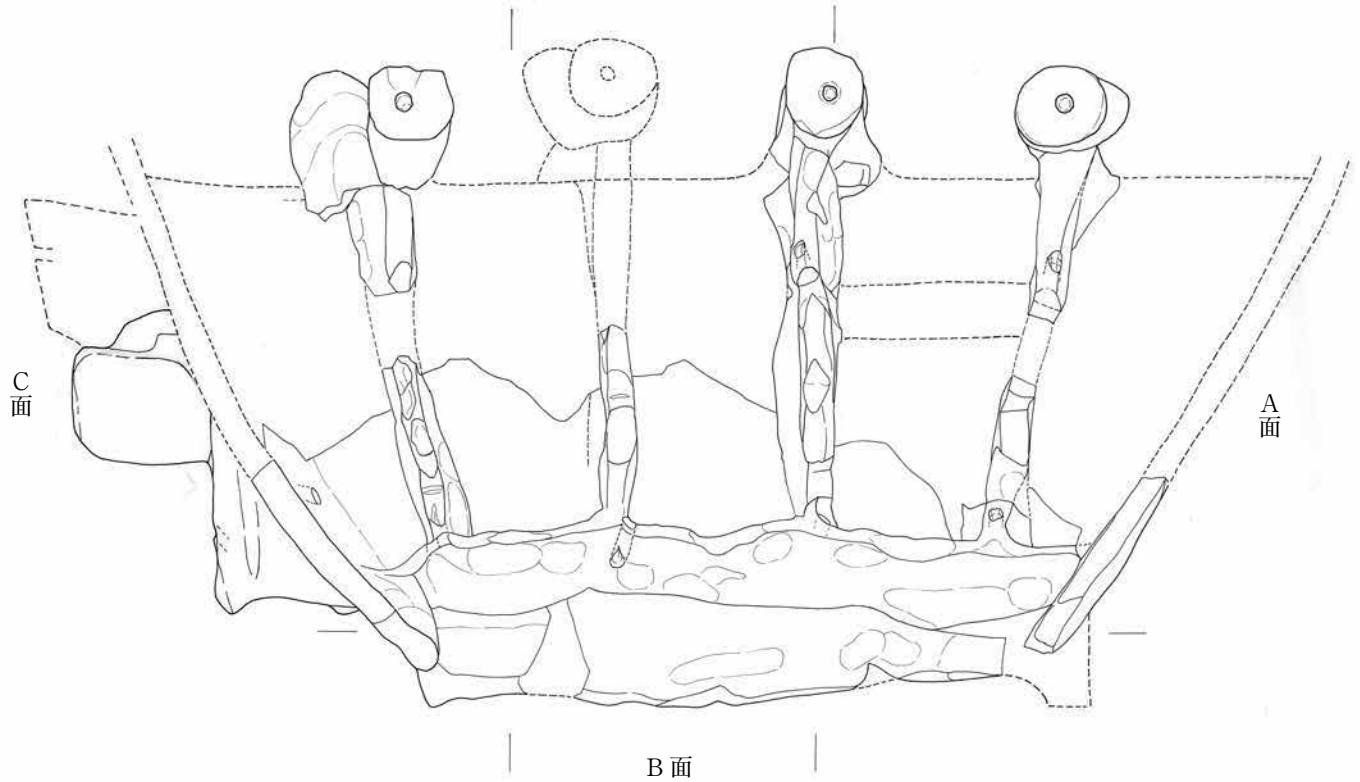
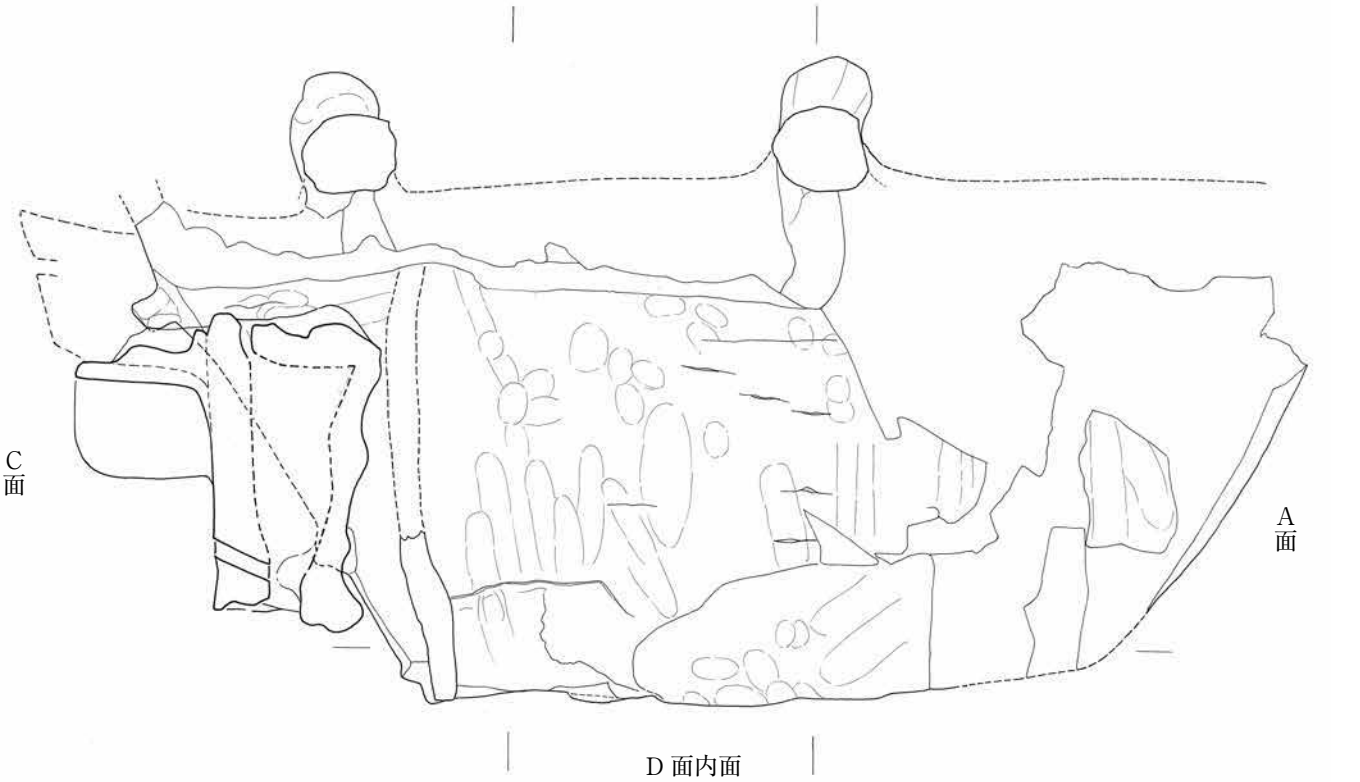


図 4-3　東造出　家形埴輪 1-1　上屋根（切妻部）①

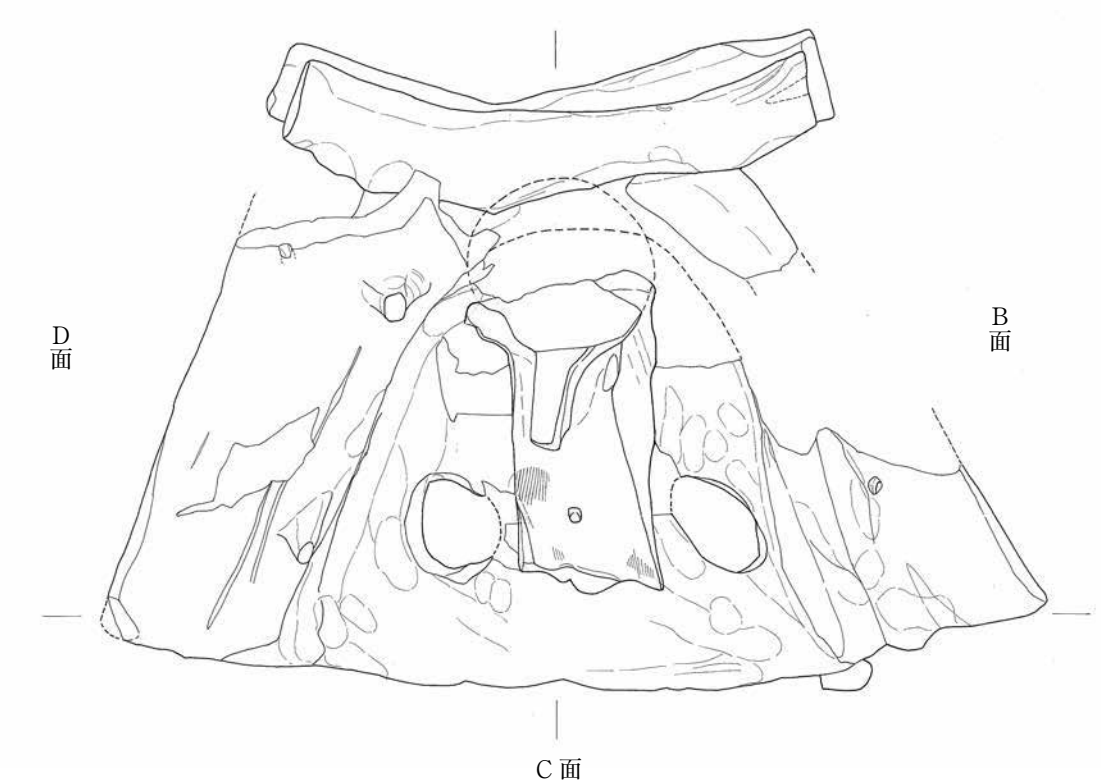


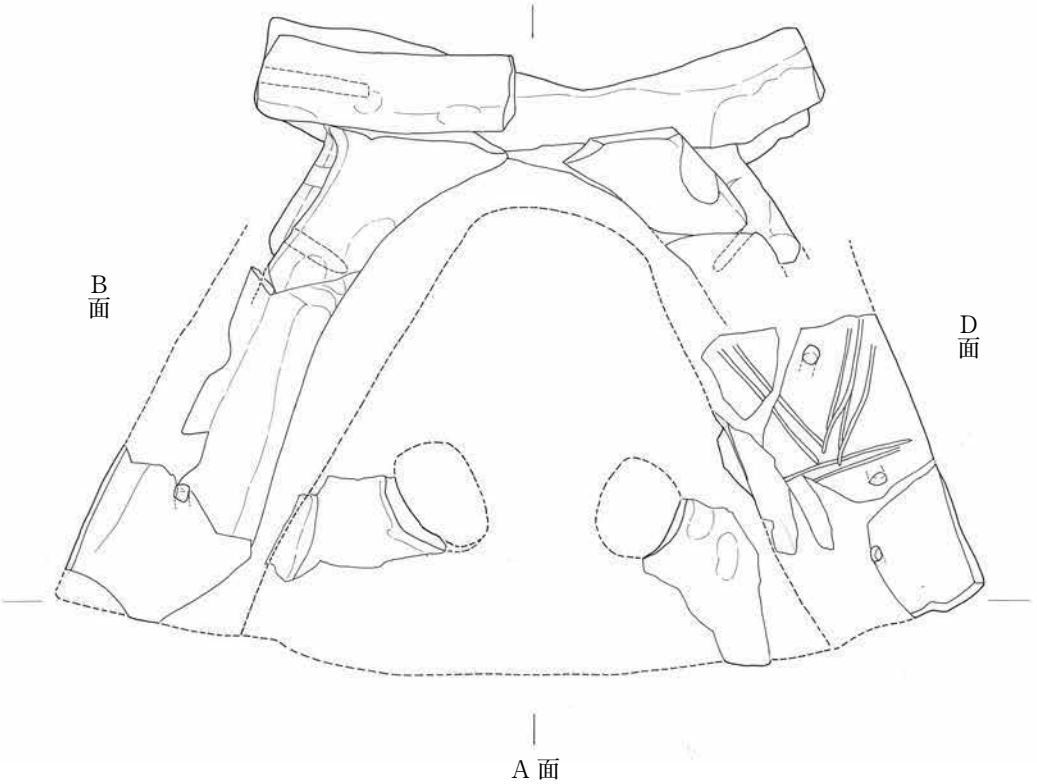


0 20 cm

(S=1/4)

図 4-4　東造出　家形埴輪 1-1　上屋根（切妻部）②

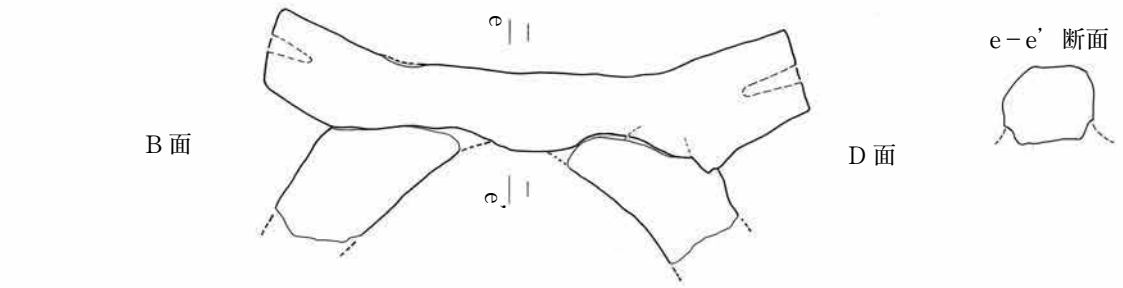


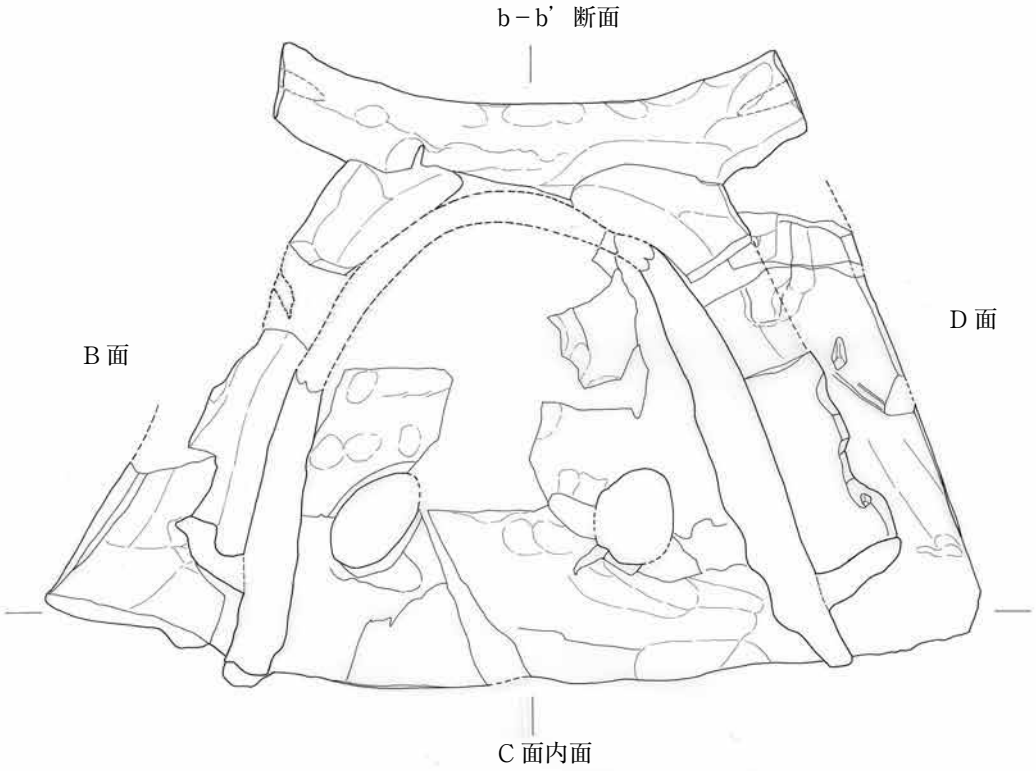


0 20 cm

(S=1/4)

図 4-5　東造出　家形埴輪 1-1　上屋根（切妻部）③





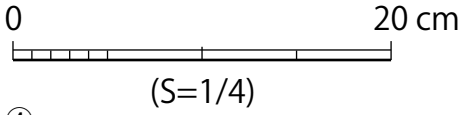


図 4-6　東造出　家形埴輪 1-1　上屋根（切妻部）④

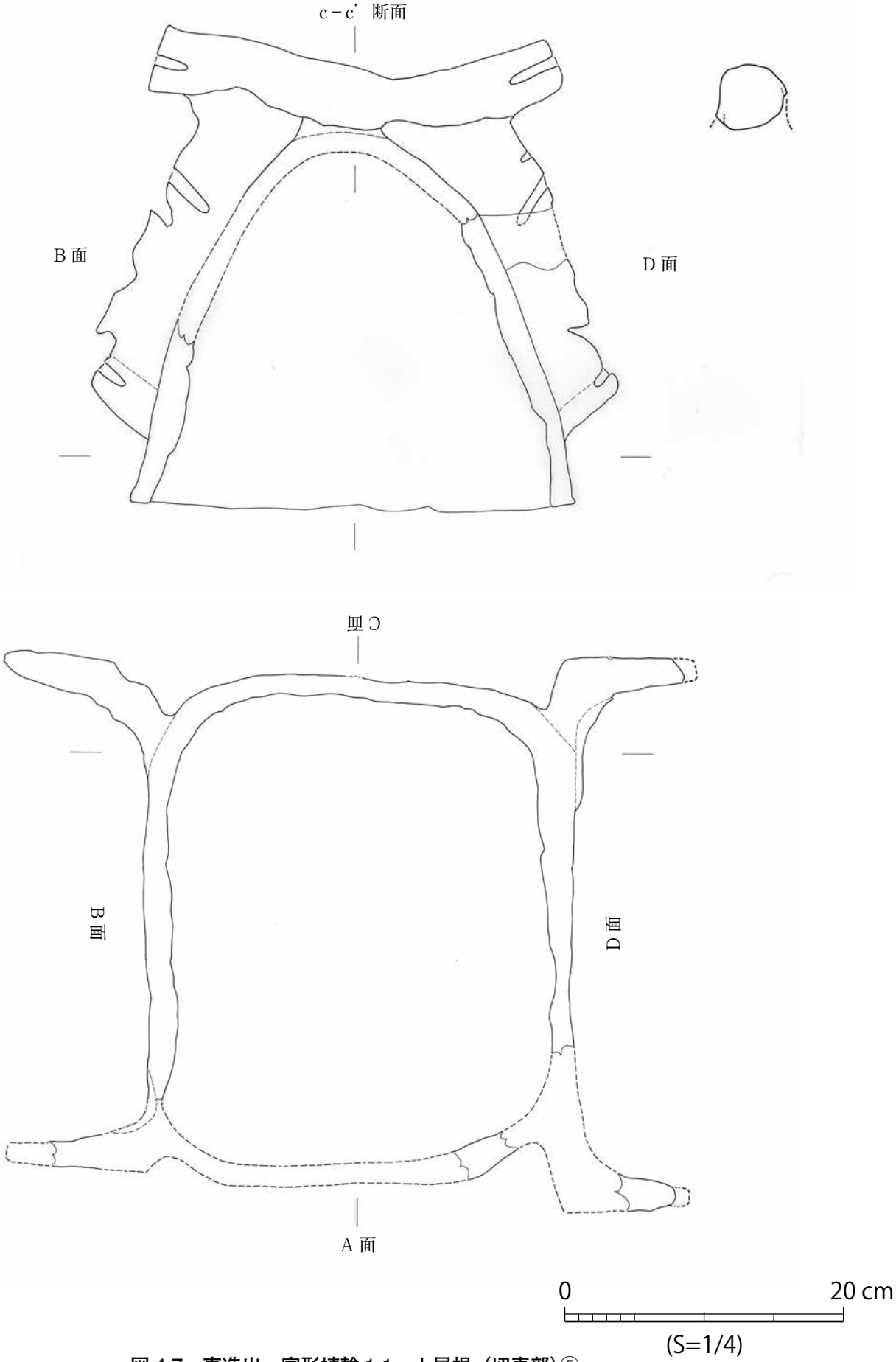


図 4-7　東造出　家形埴輪 1-1　上屋根（切妻部）⑤

図 4-8　東造出　家形埴輪 1-1　上屋根（切妻部）⑥

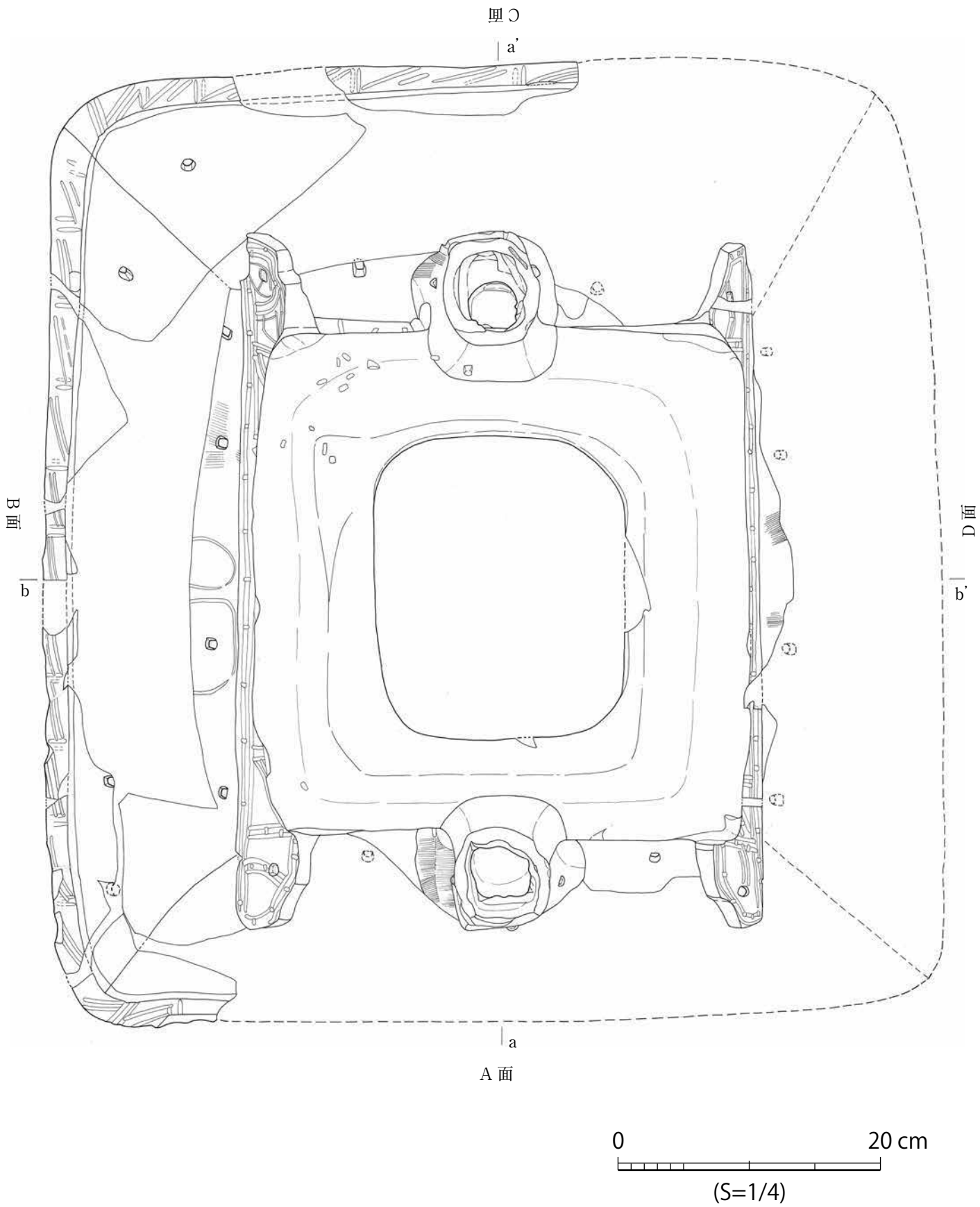


図 4-9　東造出　家形埴輪 1-1　入母屋下屋根（寄棟部）①

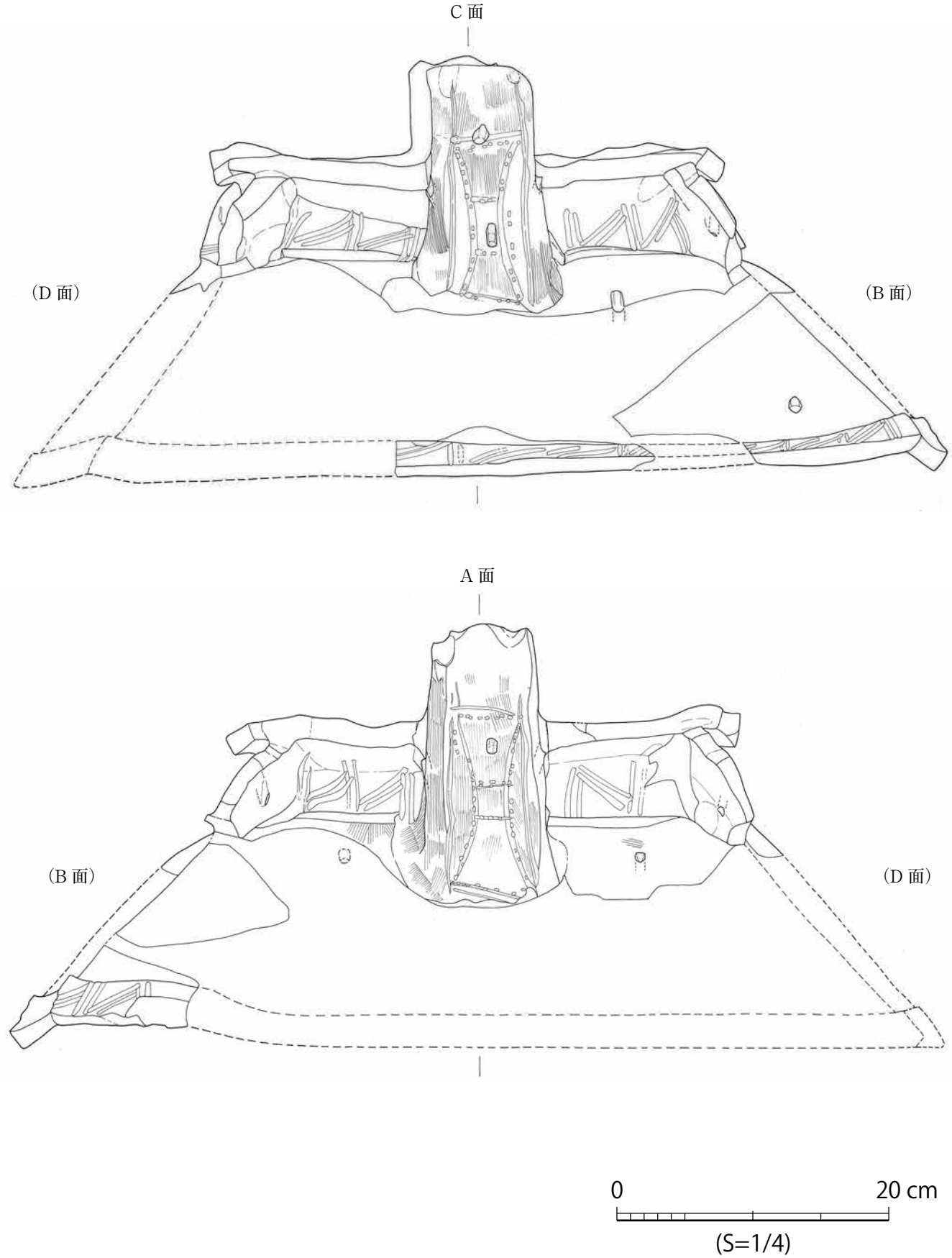


図 4-10　東造出　家形埴輪 1-1　入母屋下屋根（寄棟部）②

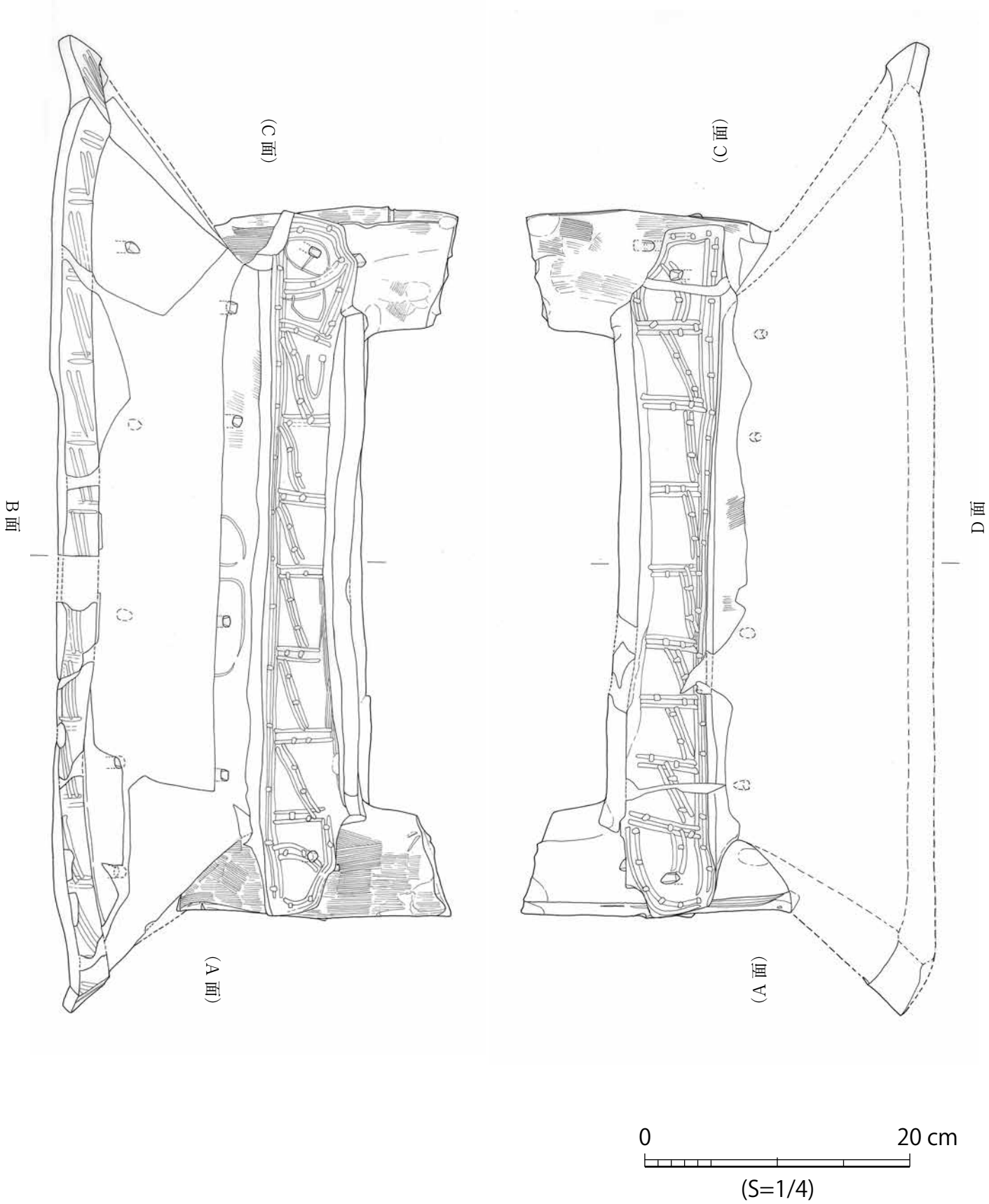


図 4-11　東造出　家形埴輪 1-1　入母屋下屋根（寄棟部）③

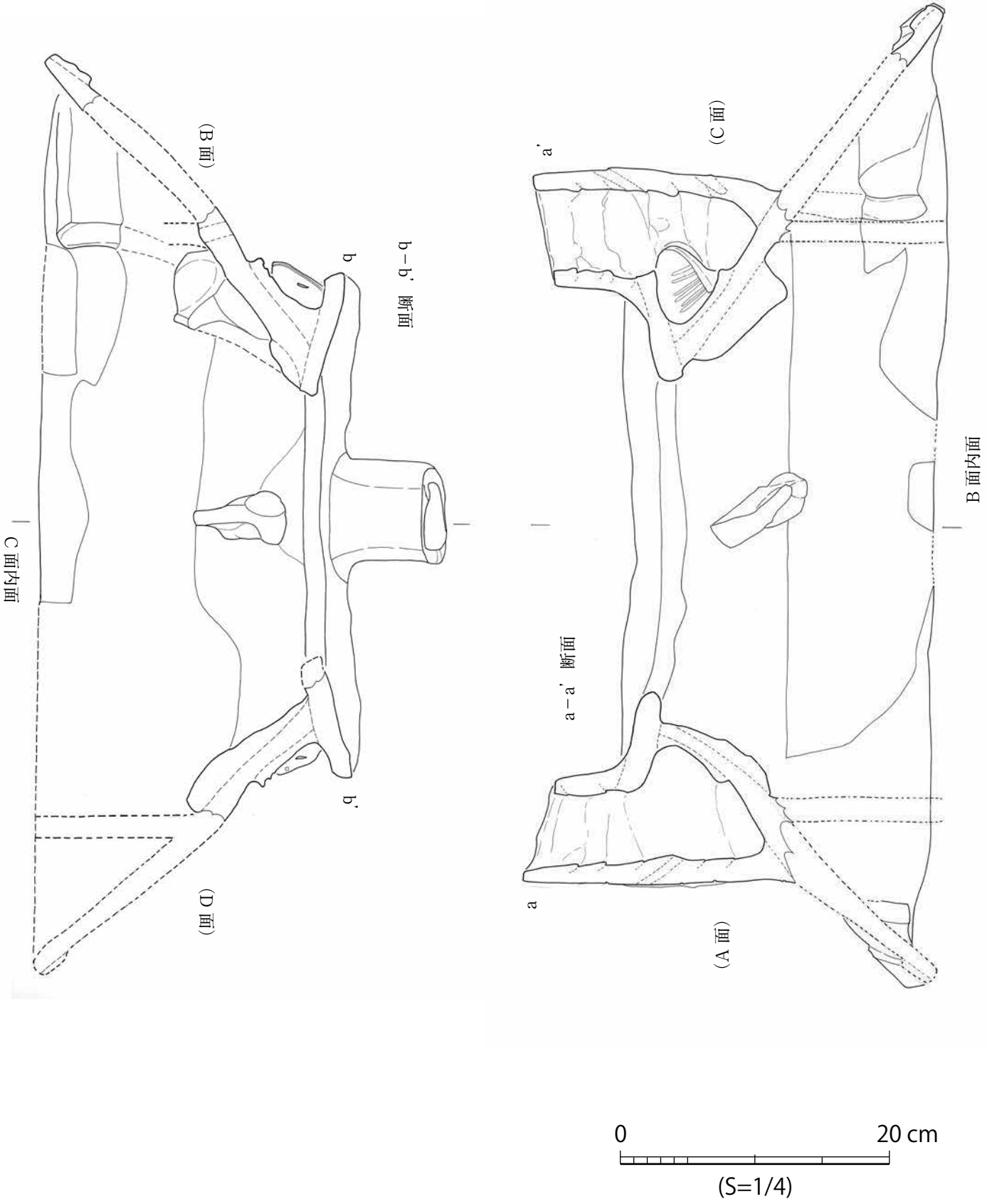


図 4-12　東造出　家形埴輪 1-1　入母屋下屋根（寄棟部）④

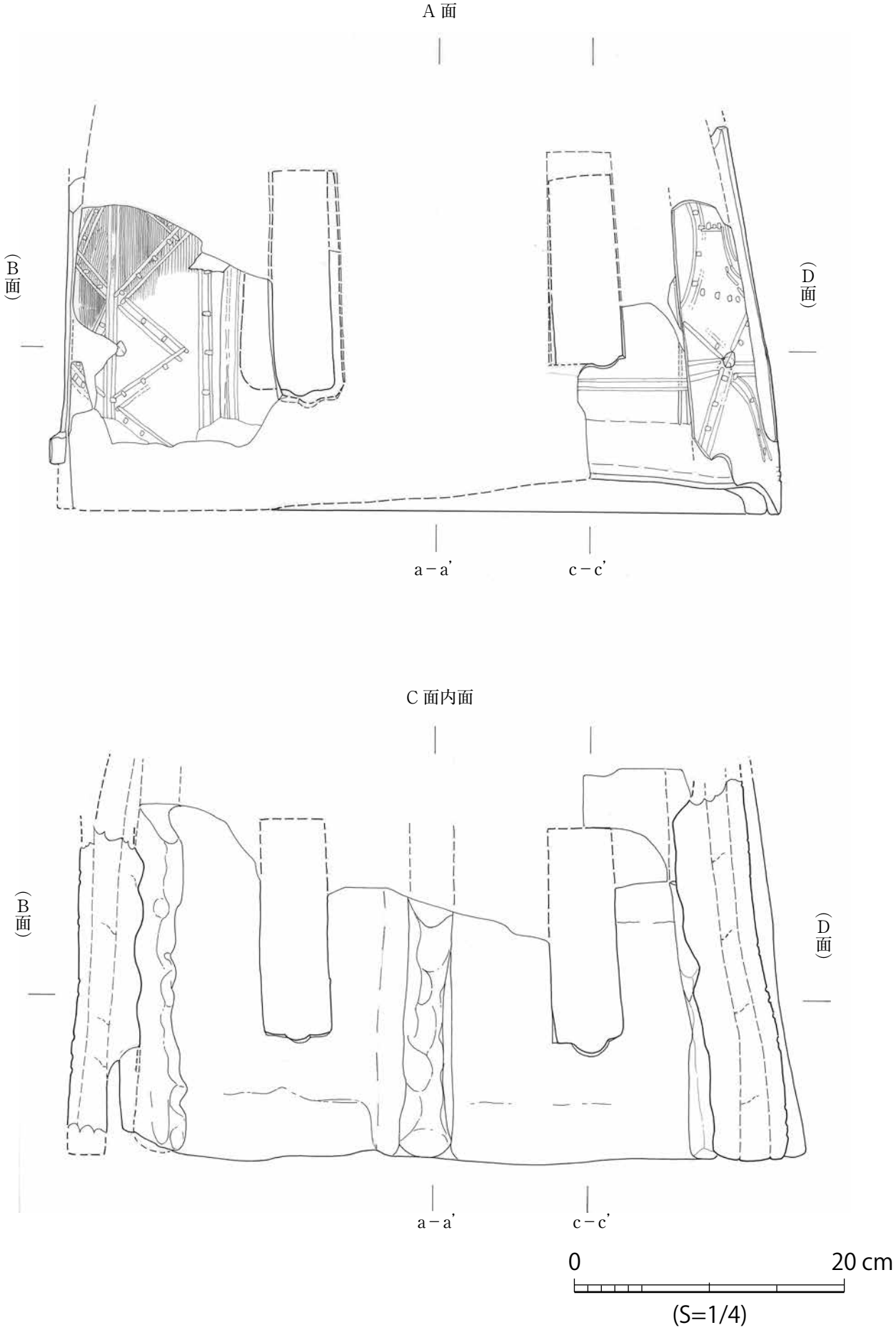


図 4-13　東造出　家形埴輪 1-1　身舎　壁①

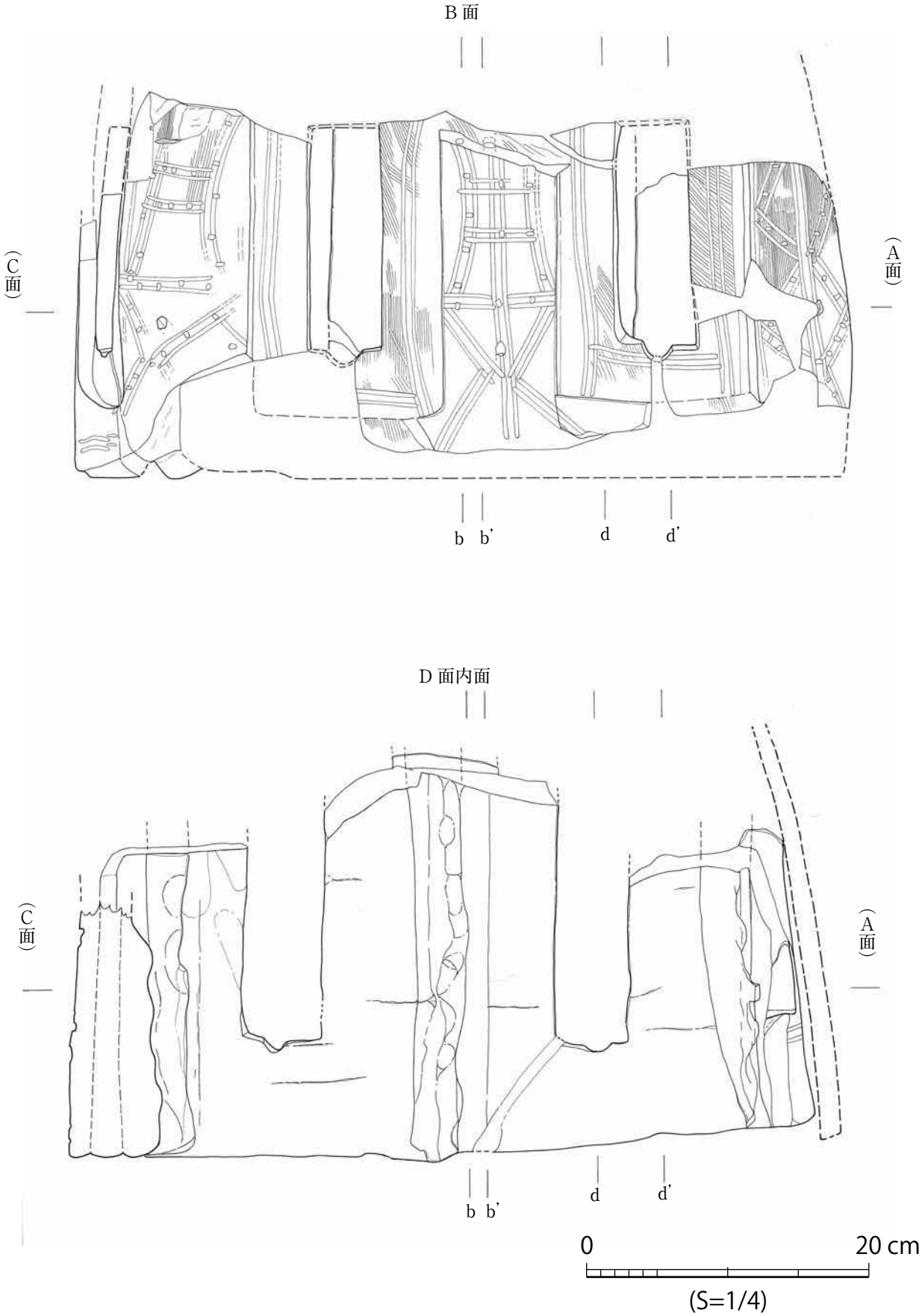


図 4-14　東造出　家形埴輪 1-1　身舎　壁②

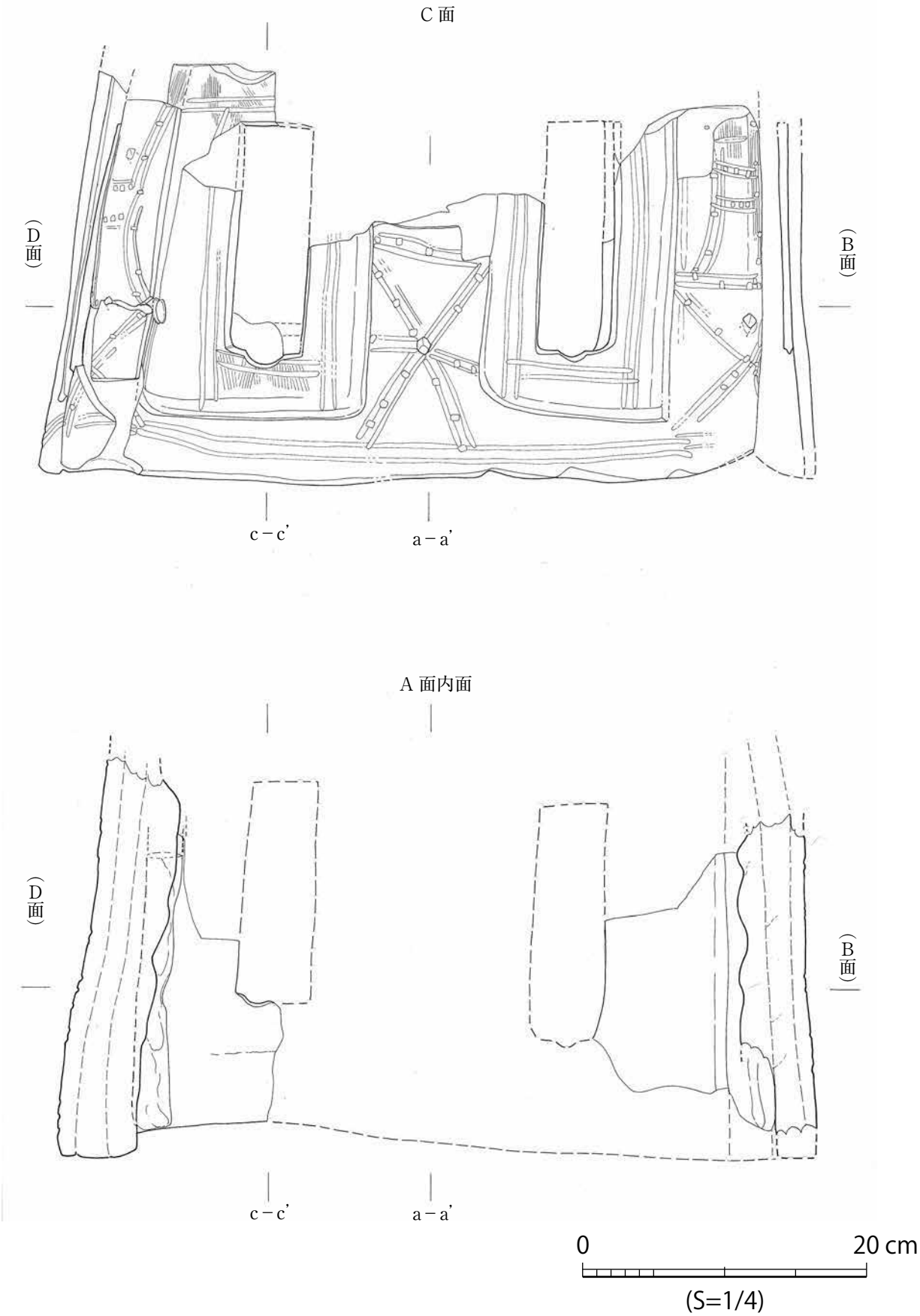


図 4-15　東造出　家形埴輪 1-1　身舎　壁③

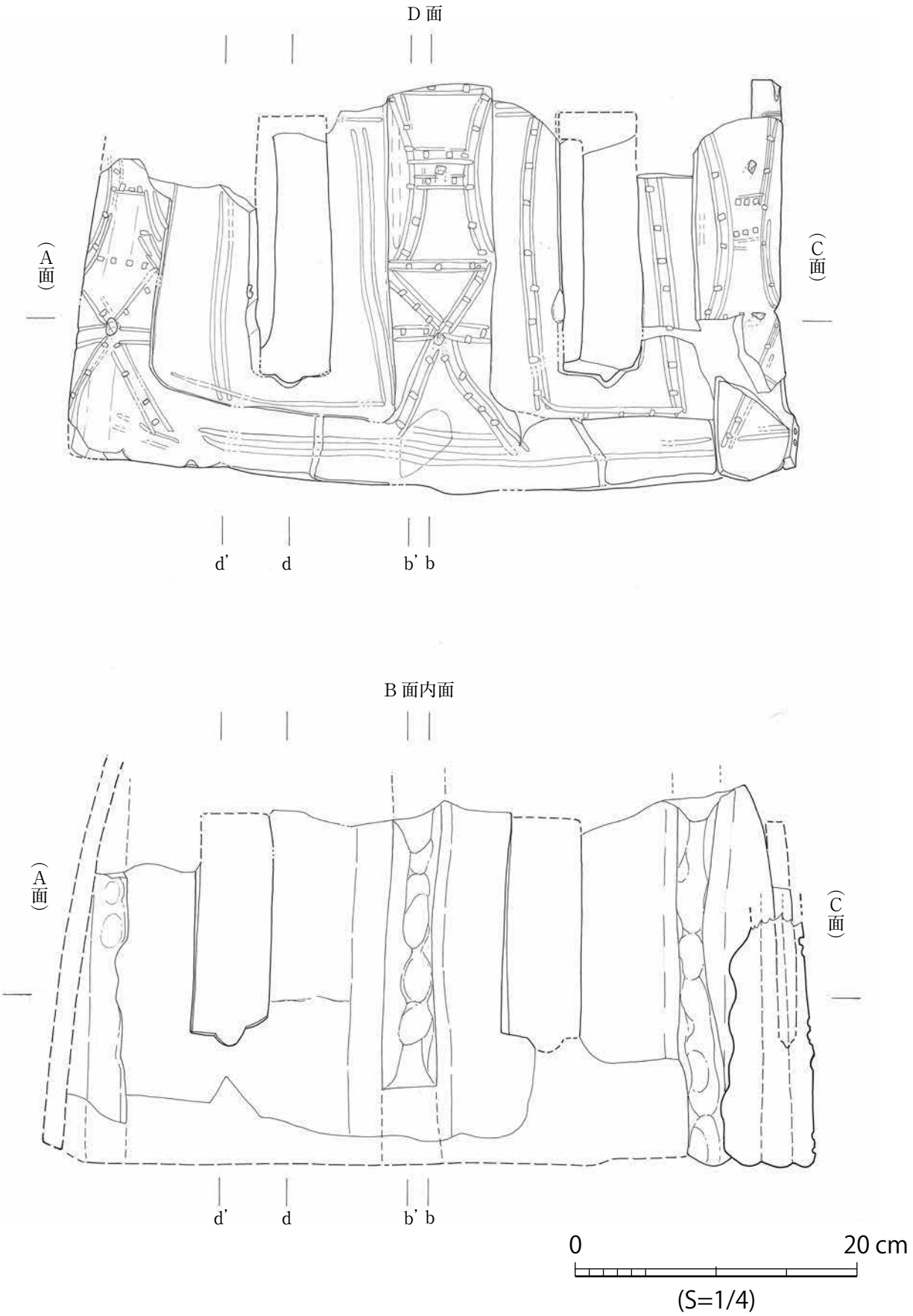


図 4-16　東造出　家形埴輪 1-1　身舎　壁④

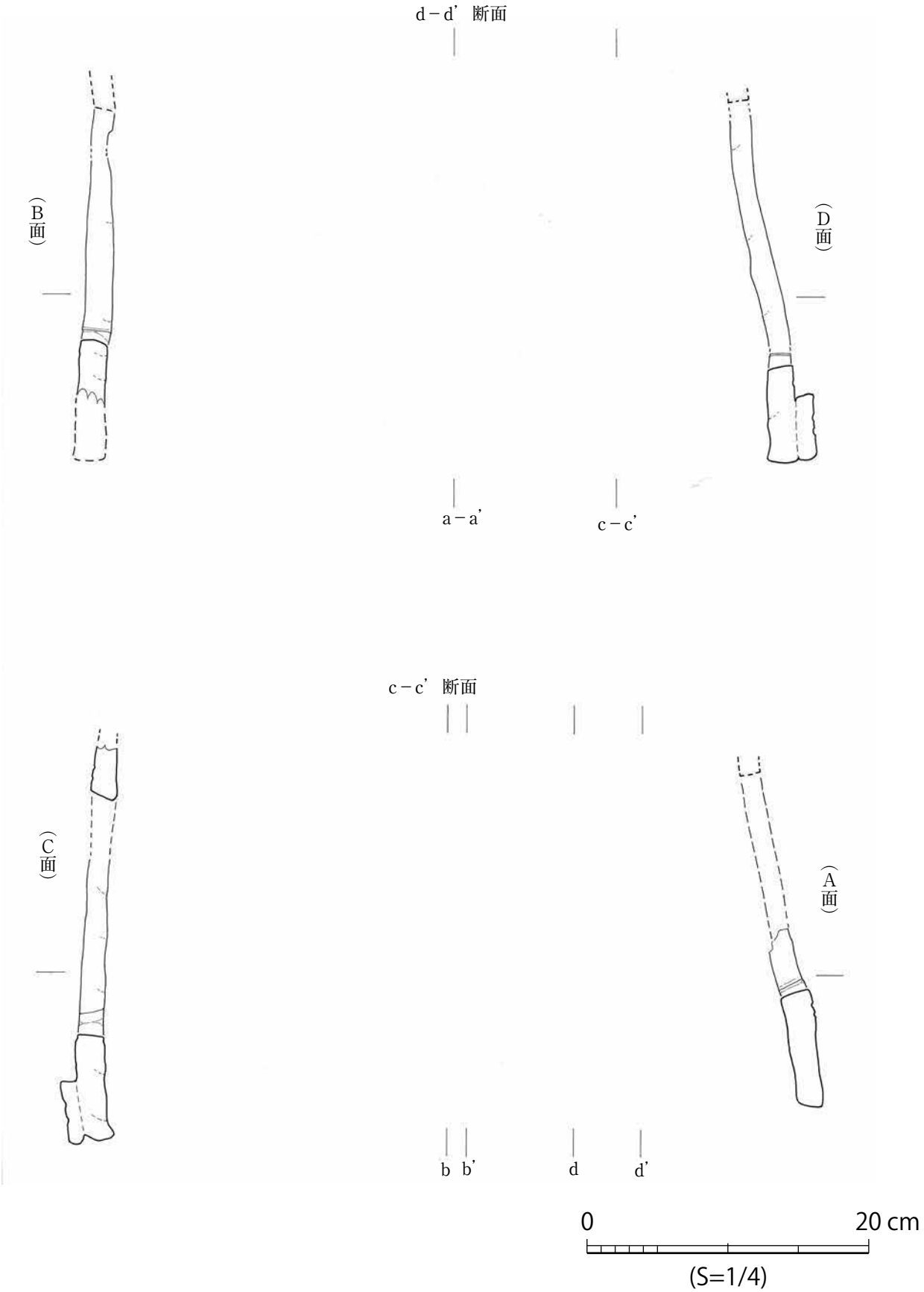


図 4-17　東造出　家形埴輪 1-1　身舎　壁⑤

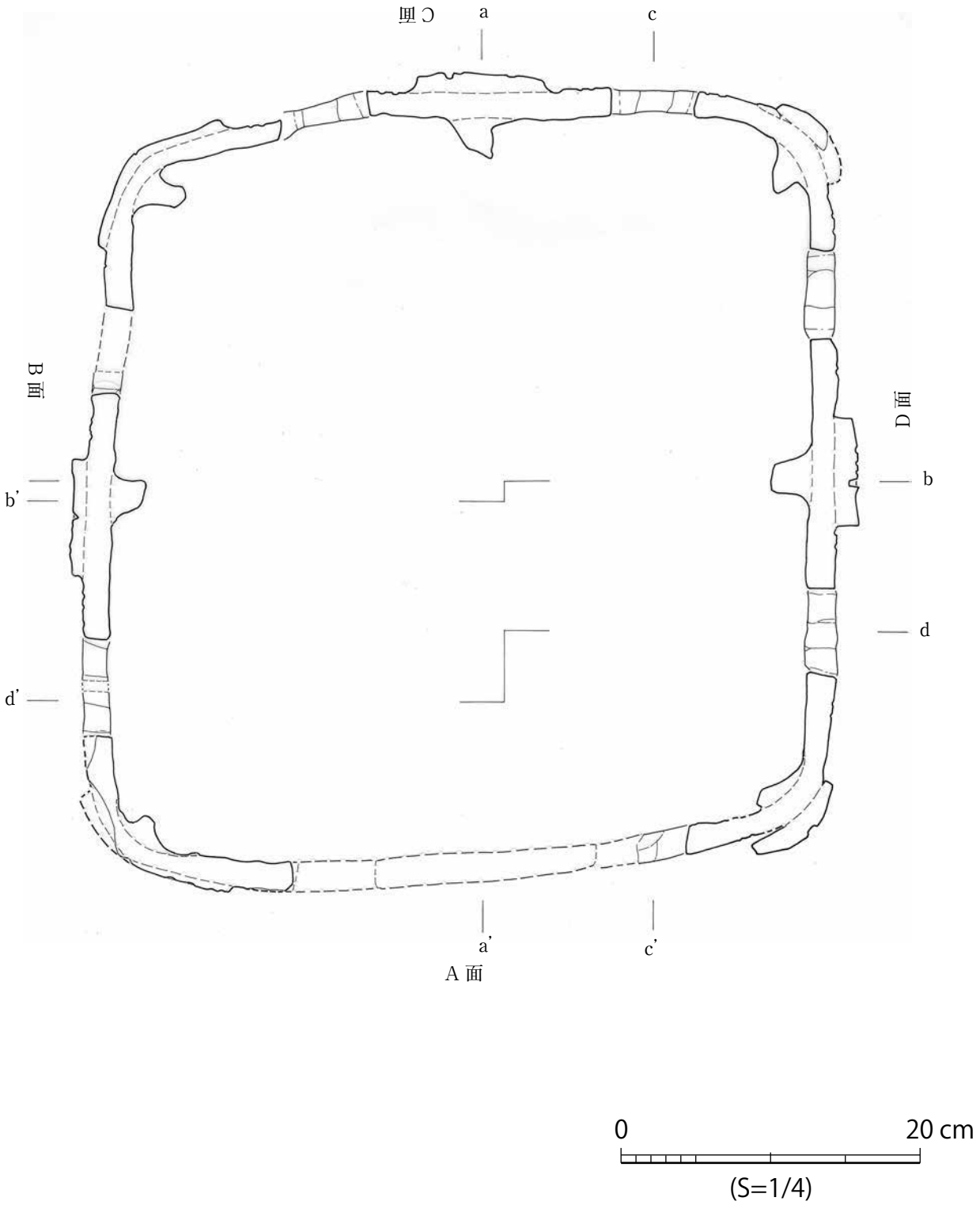


図 4-18　東造出　家形埴輪 1-1　身舎　壁⑥

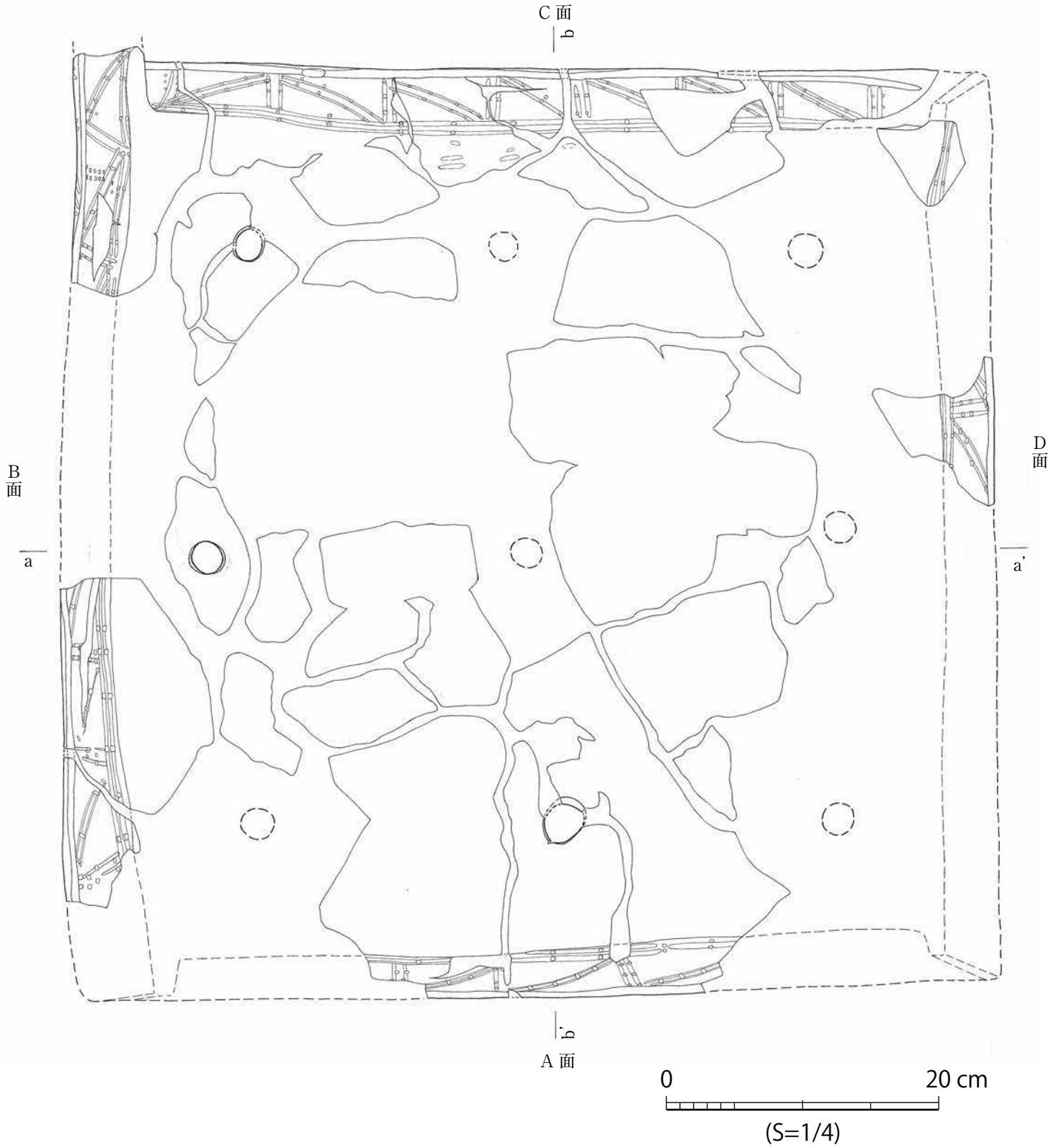


図 4-19　東造出　家形埴輪 1-1　高床部①

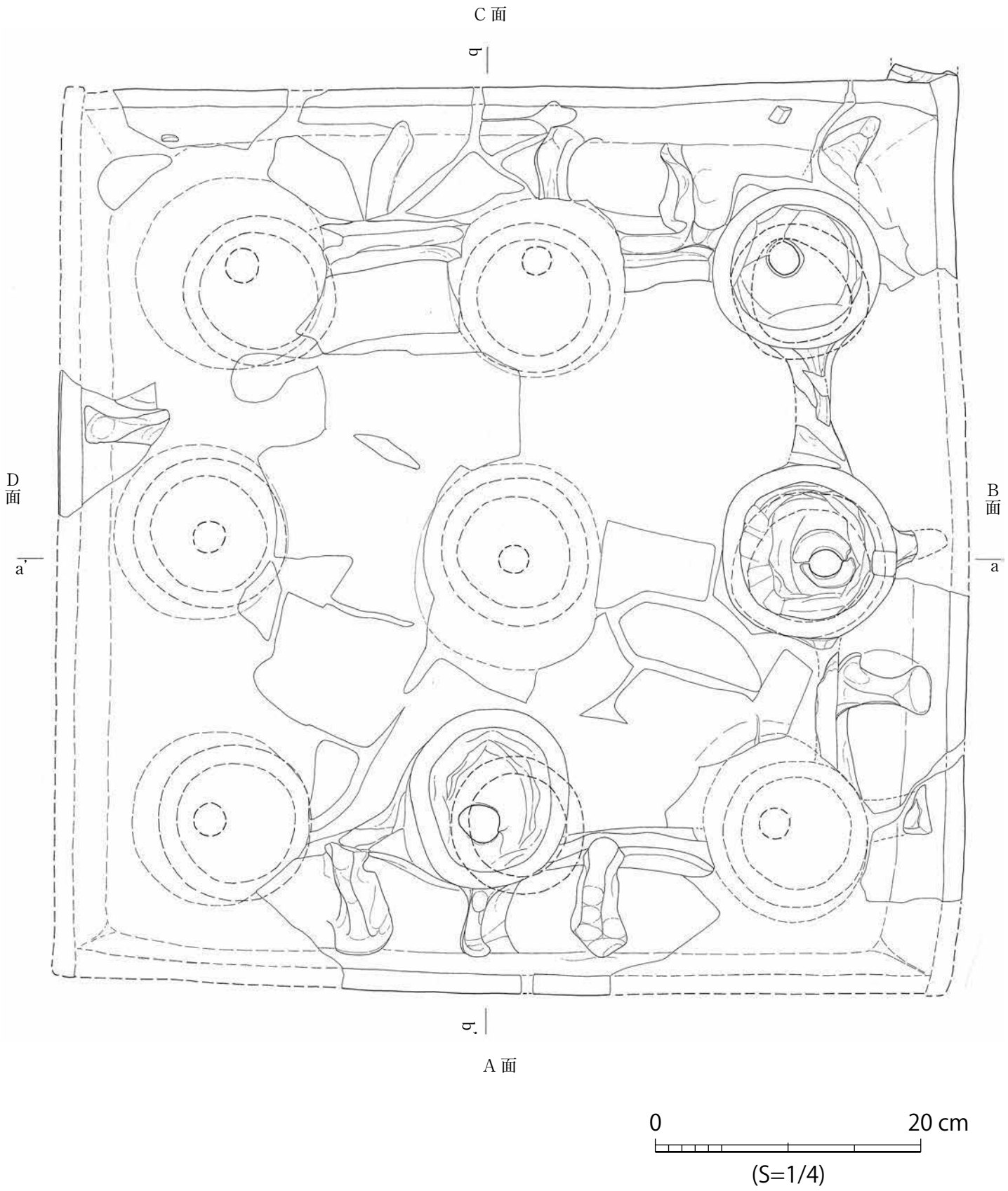


図 4-20　東造出　家形埴輪 1-1　高床部②（裏面）

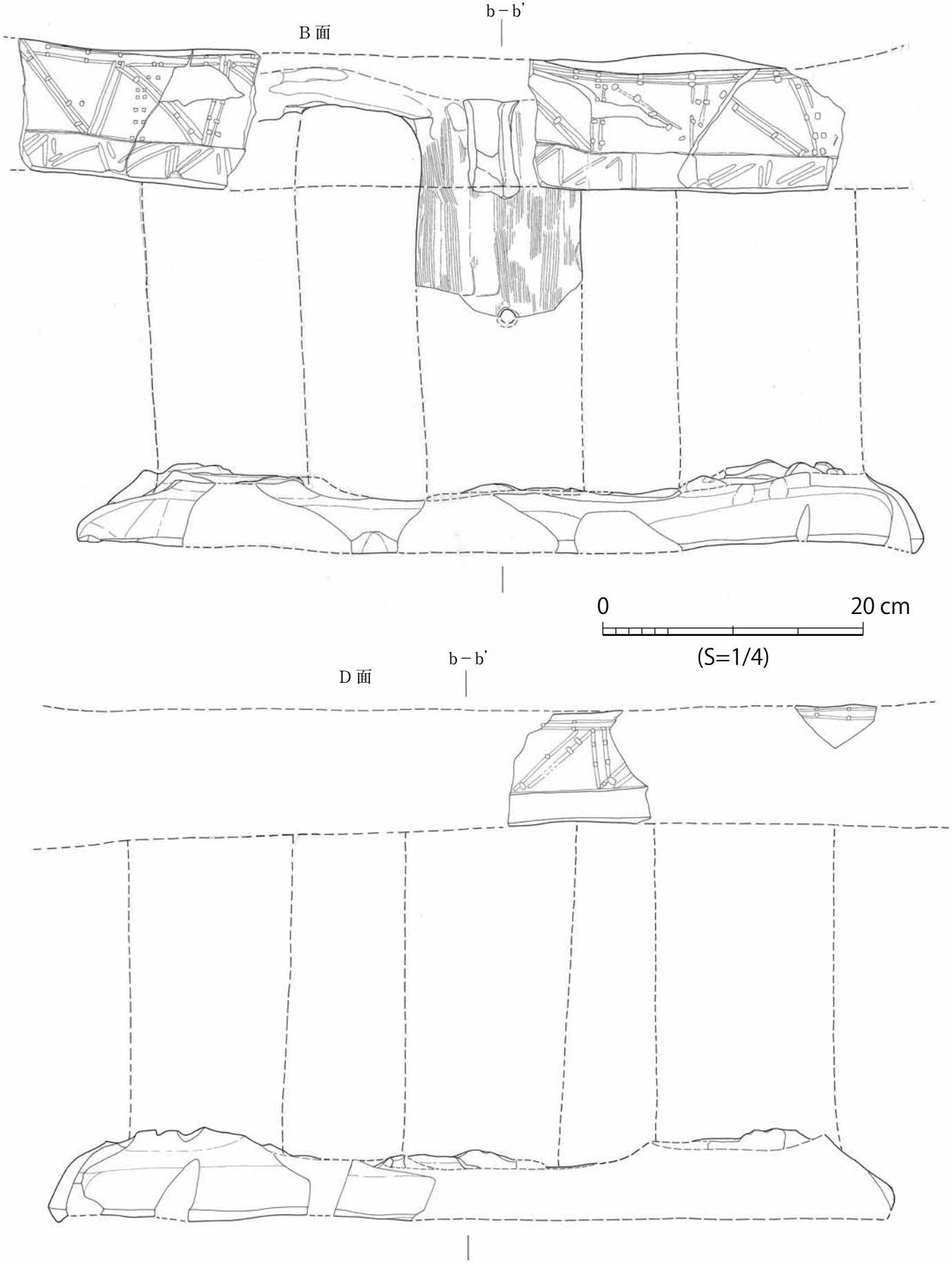


図 4-21　東造出　家形埴輪 1-1　高床部③

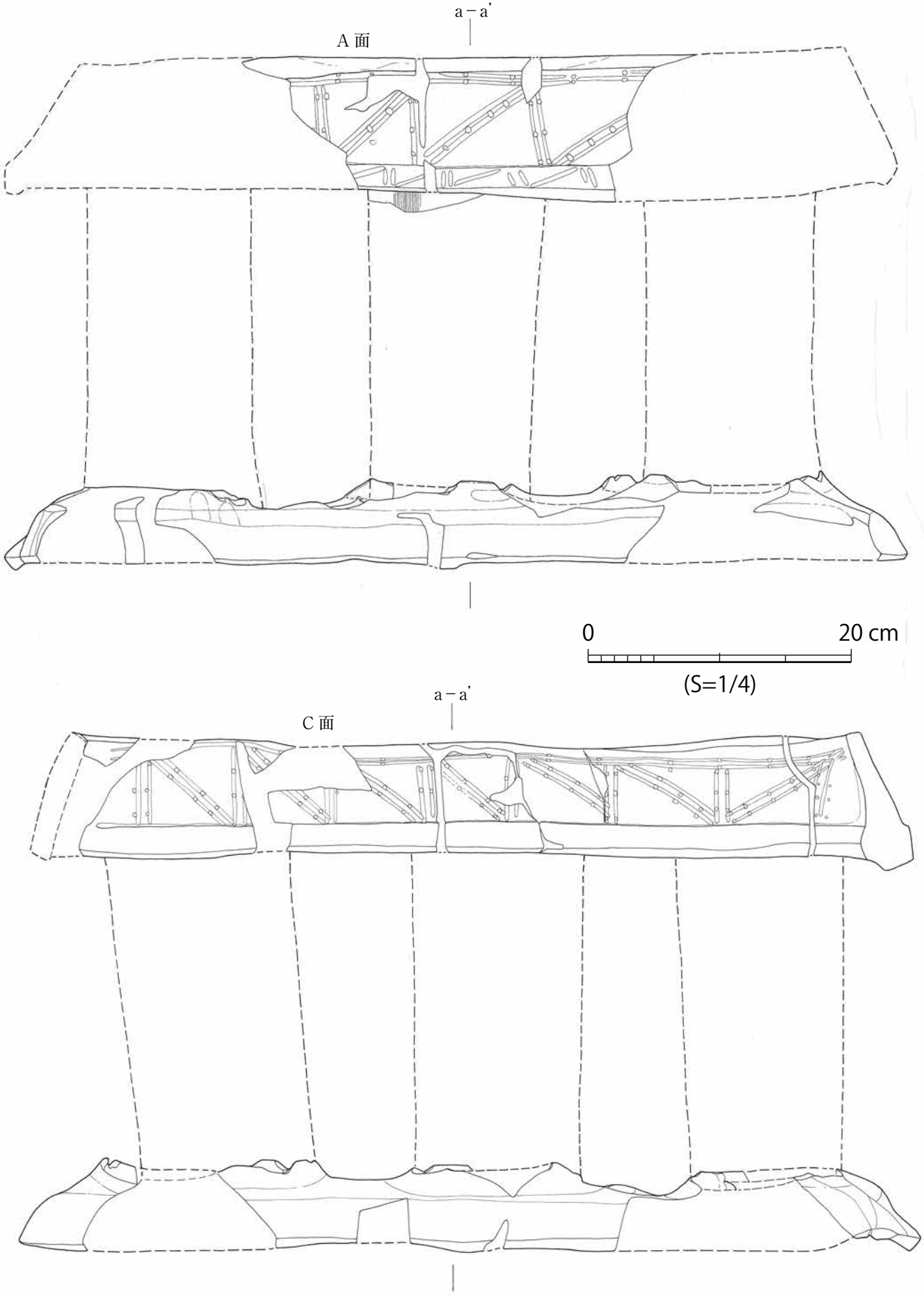


図 4-22　東造出　家形埴輪 1-1　高床部④

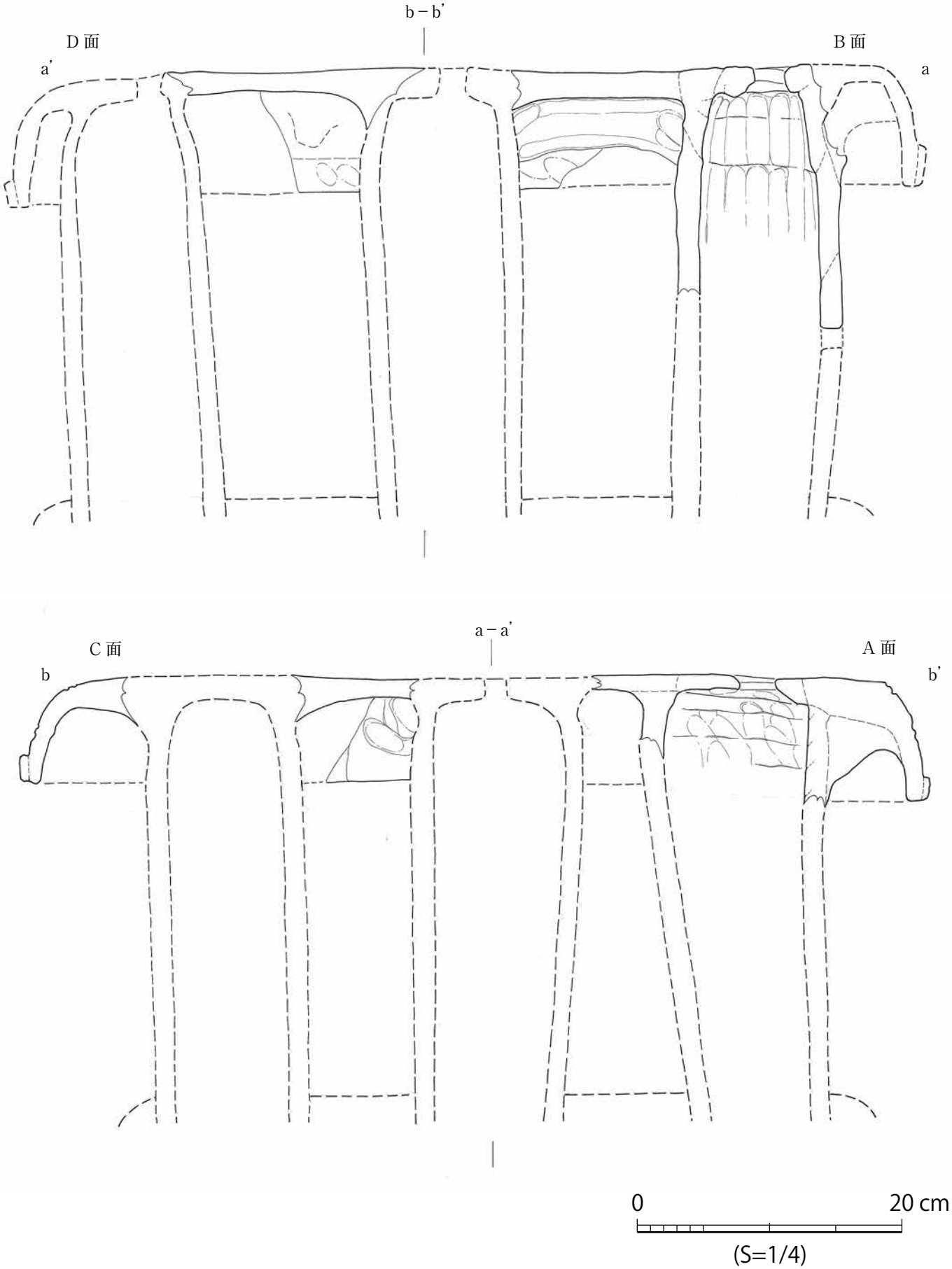


図 4-23　東造出　家形埴輪 1-1　高床部⑤（断面）

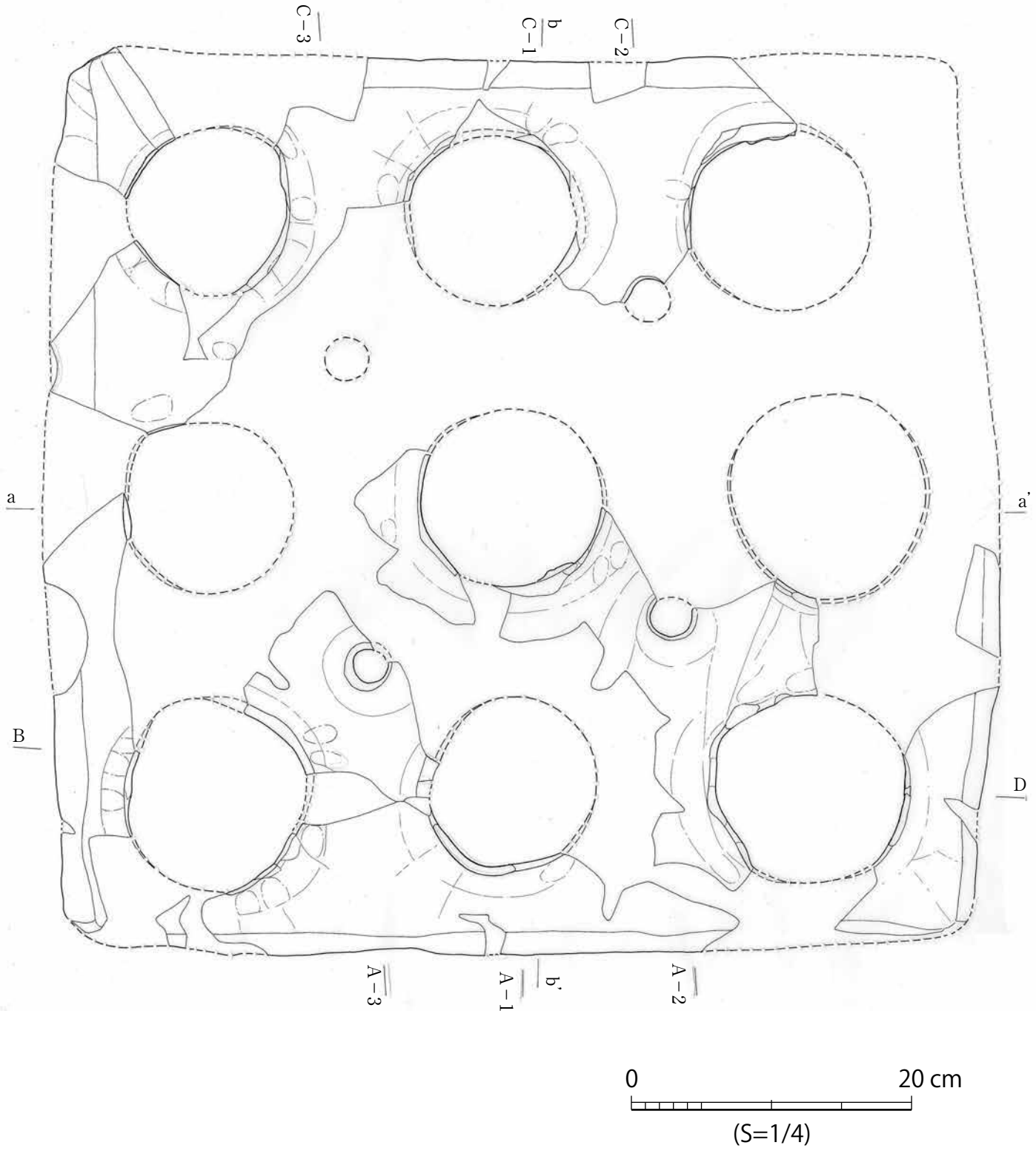


図 4-24　東造出　家形埴輪 1-1　基部①

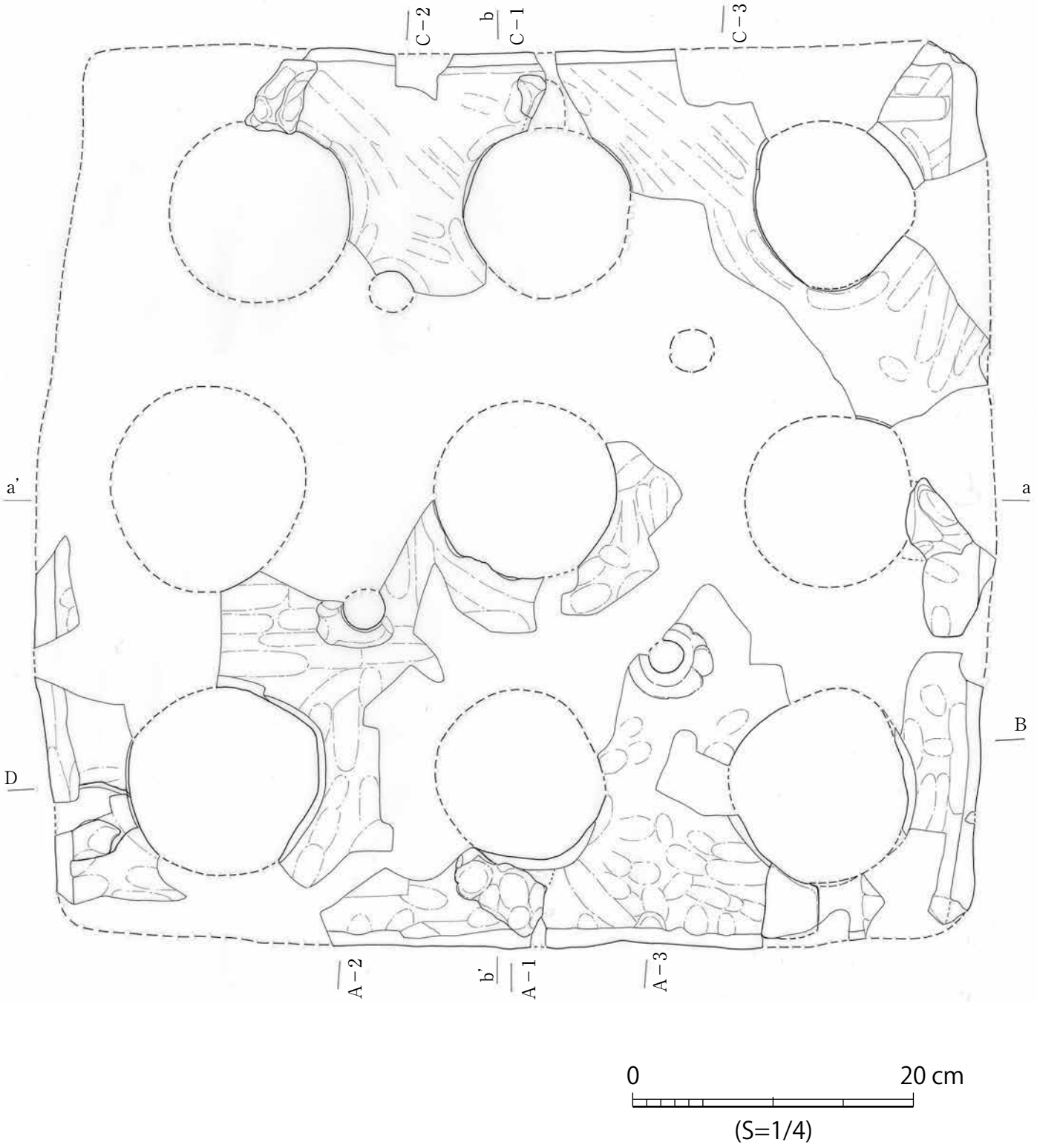


図 4-25　東造出　家形埴輪 1-1　基部②（裏面）

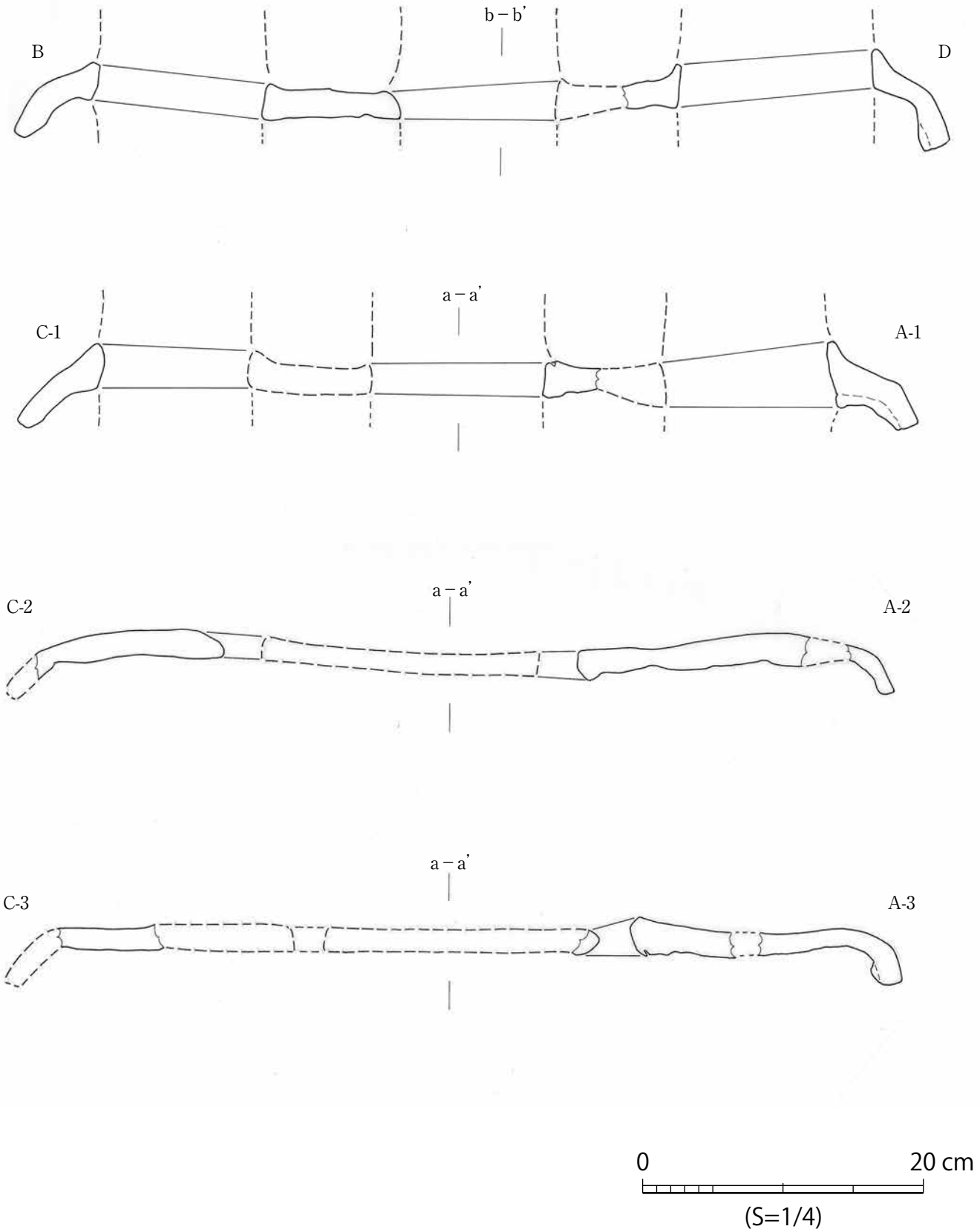


図 4-26　東造出　家形埴輪 1-1　基部③(断面)

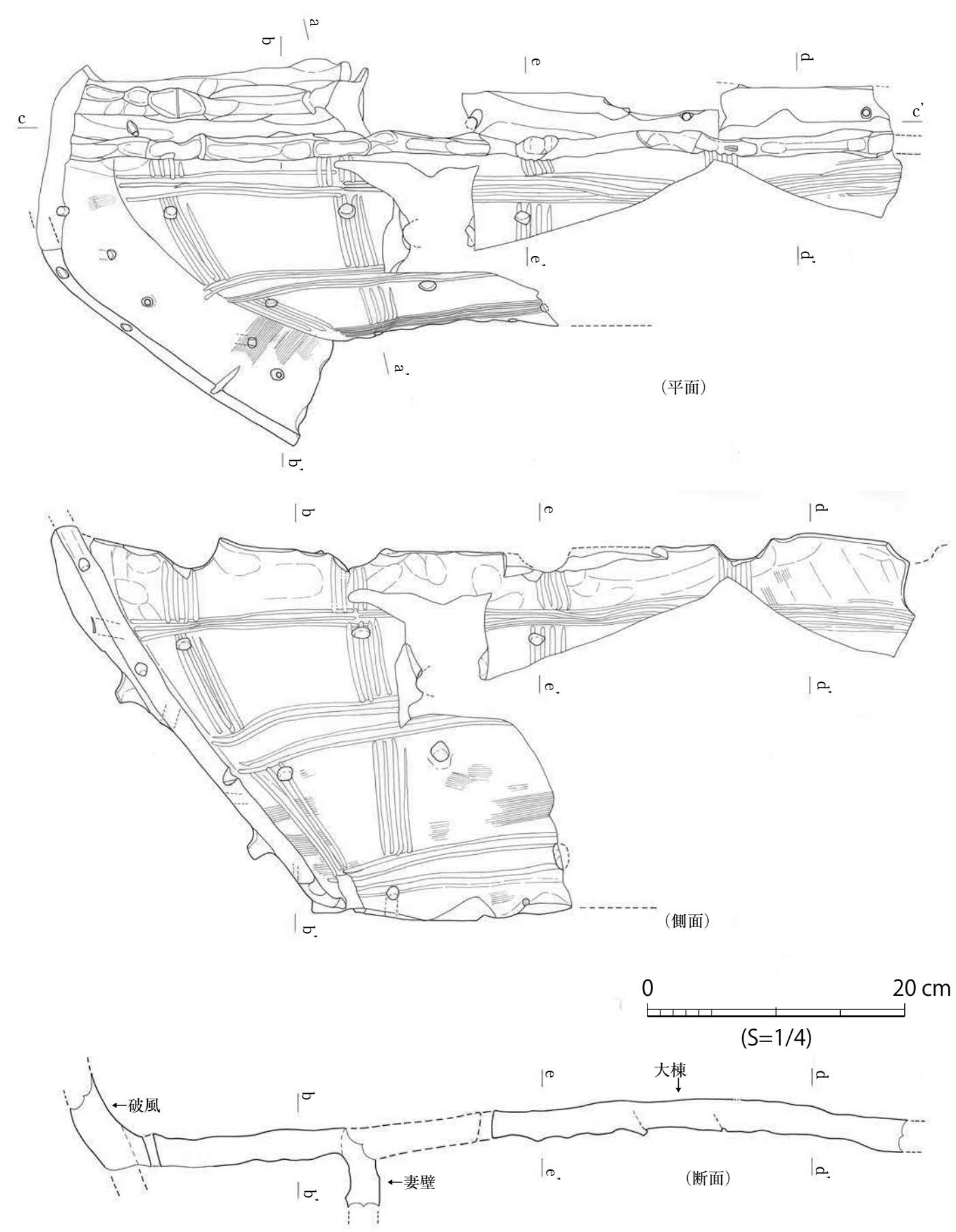


図 4-27　東造出　家形埴輪 1-2①

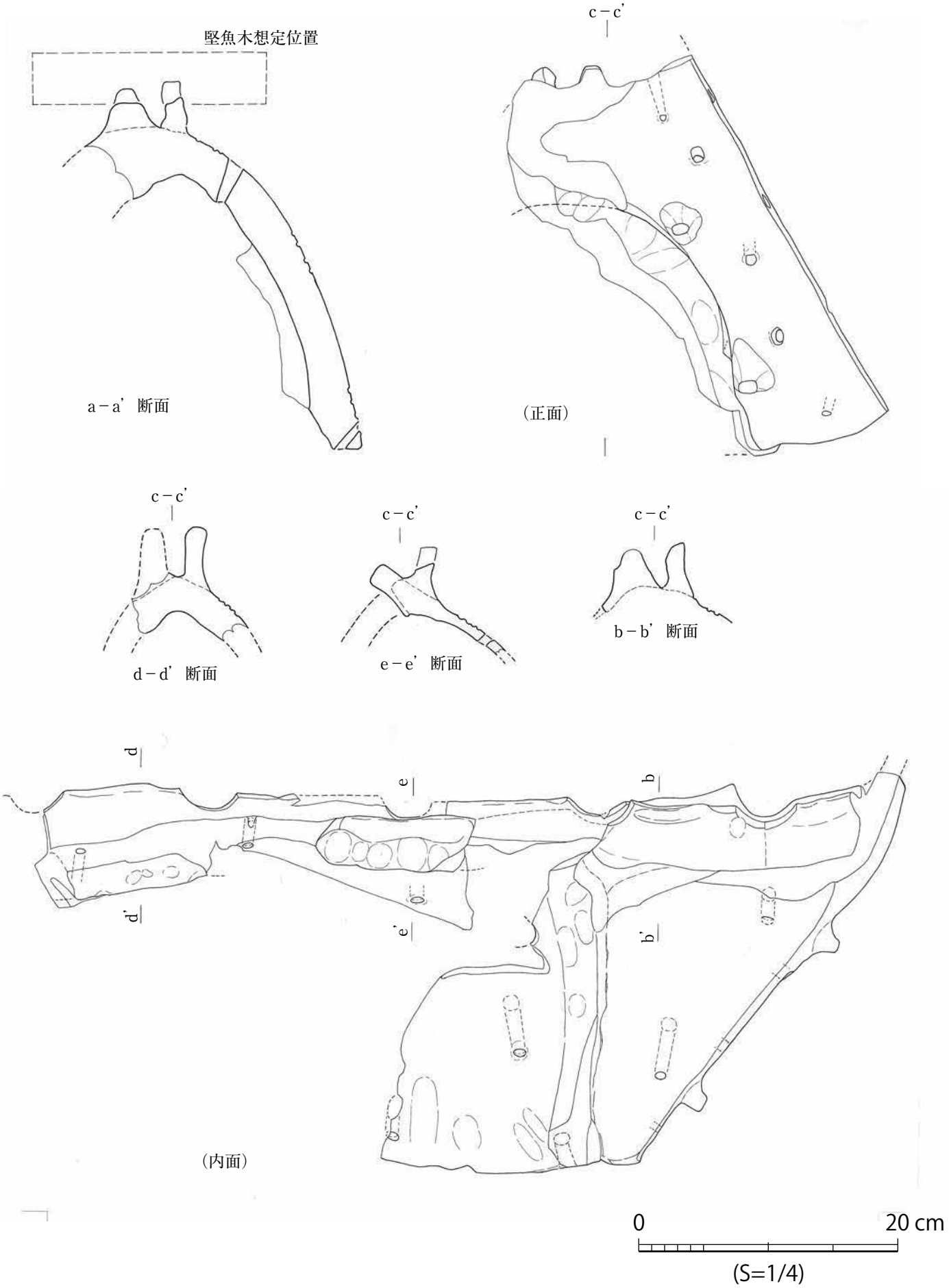


図 4-28　東造出　家形埴輪 1-2②

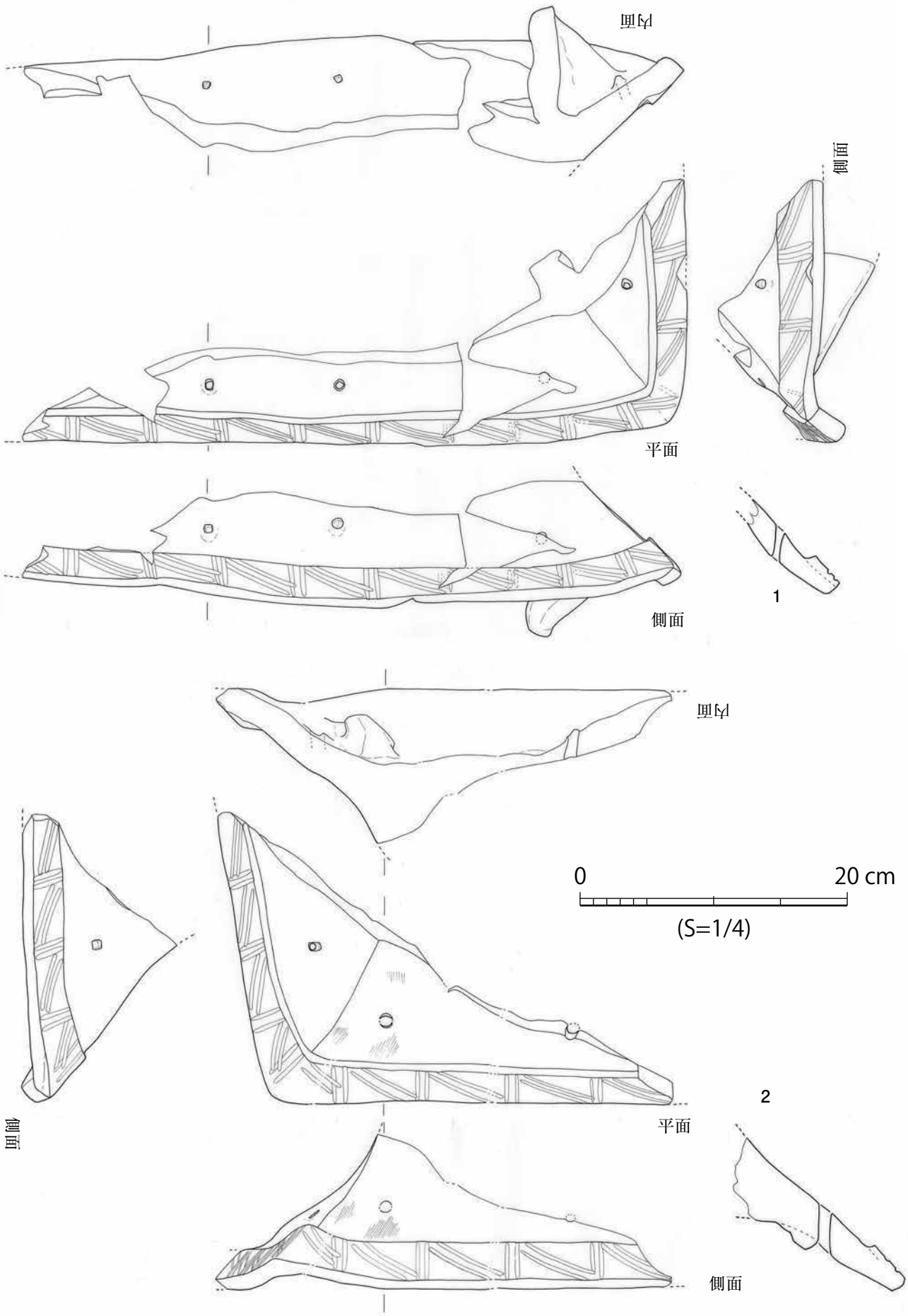


図 4-29　東造出　家形埴輪 1-2　入母屋下屋根（寄棟部）

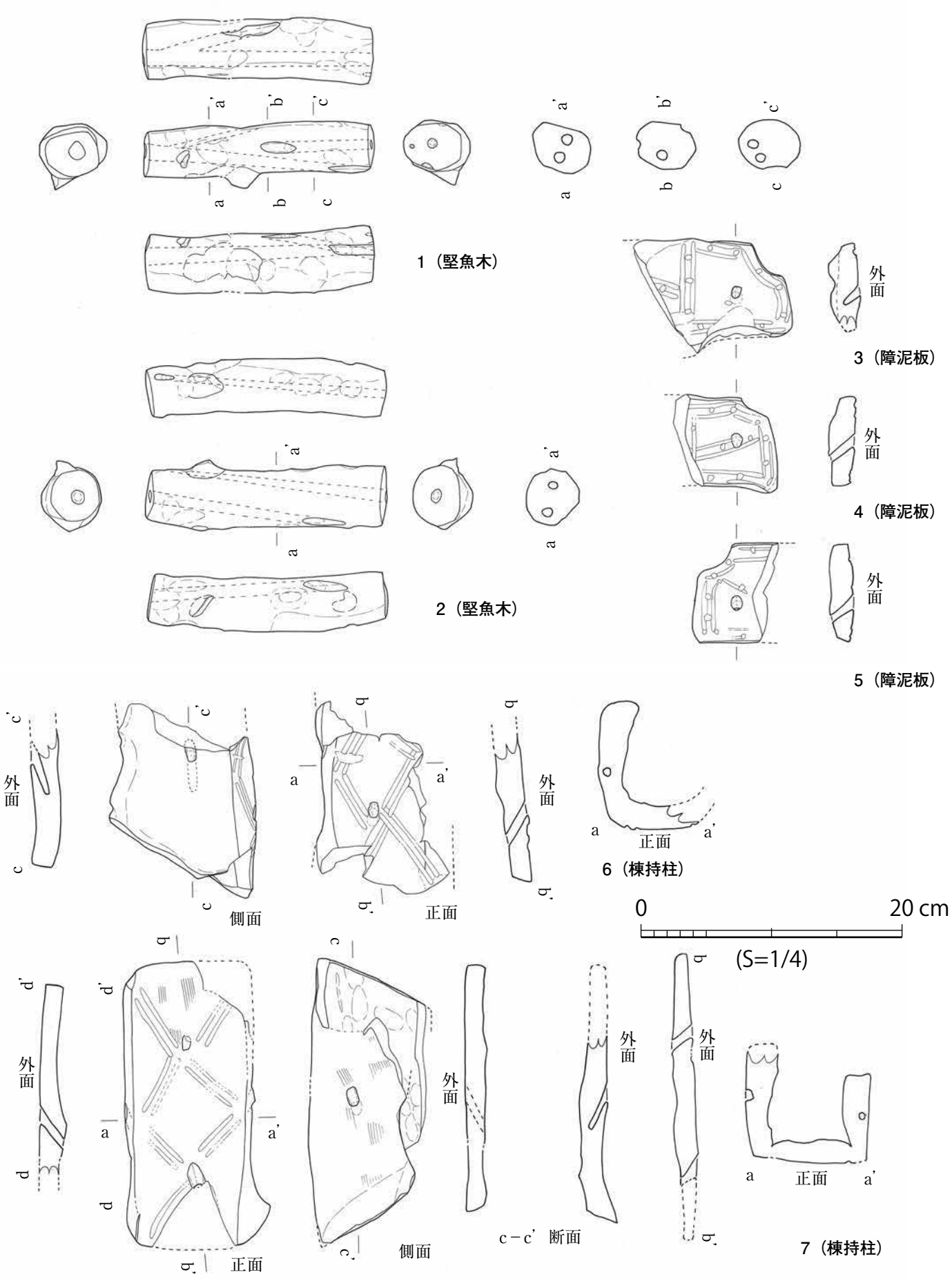


図 4-30　東造出　家形埴輪 1-2　関連部材

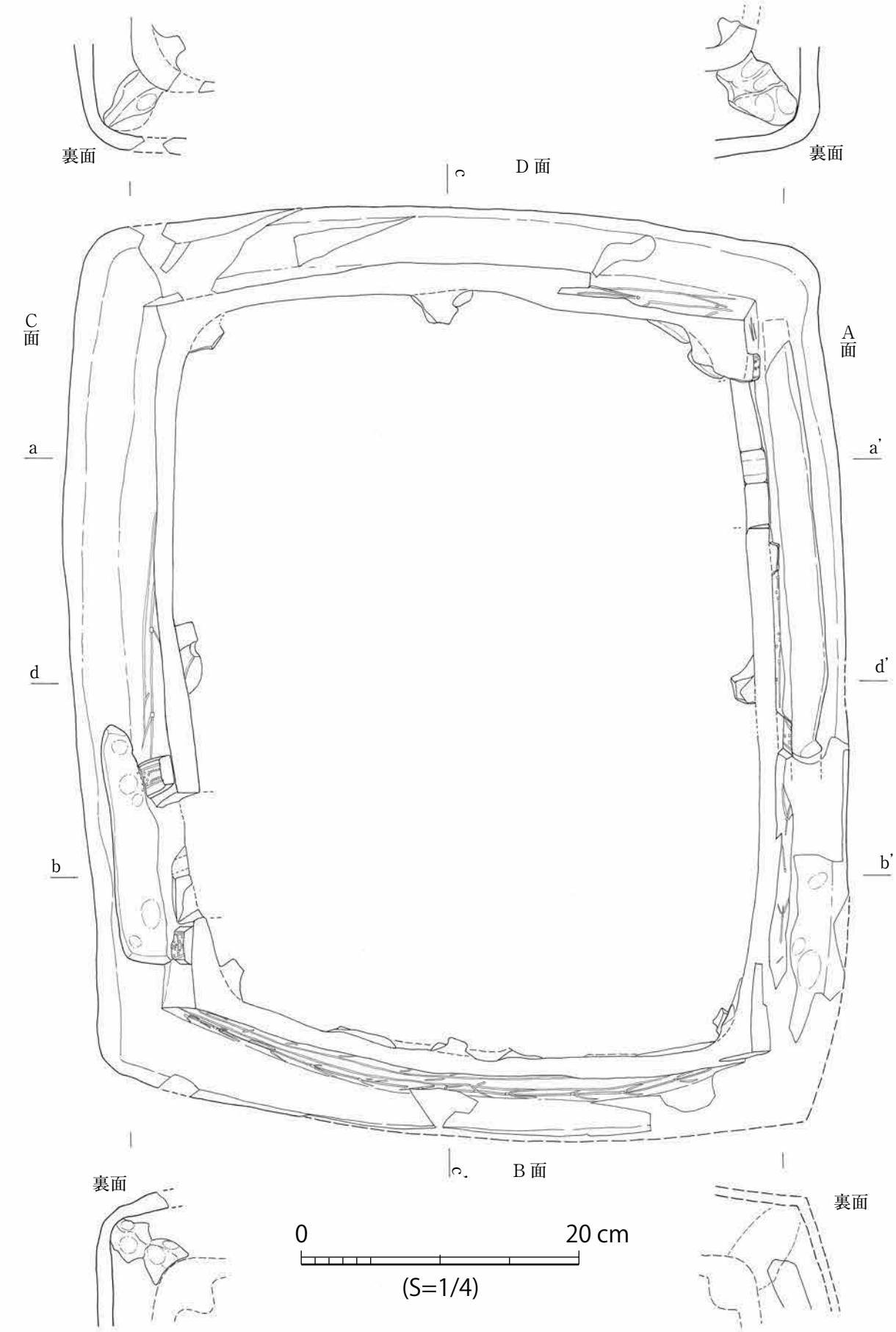
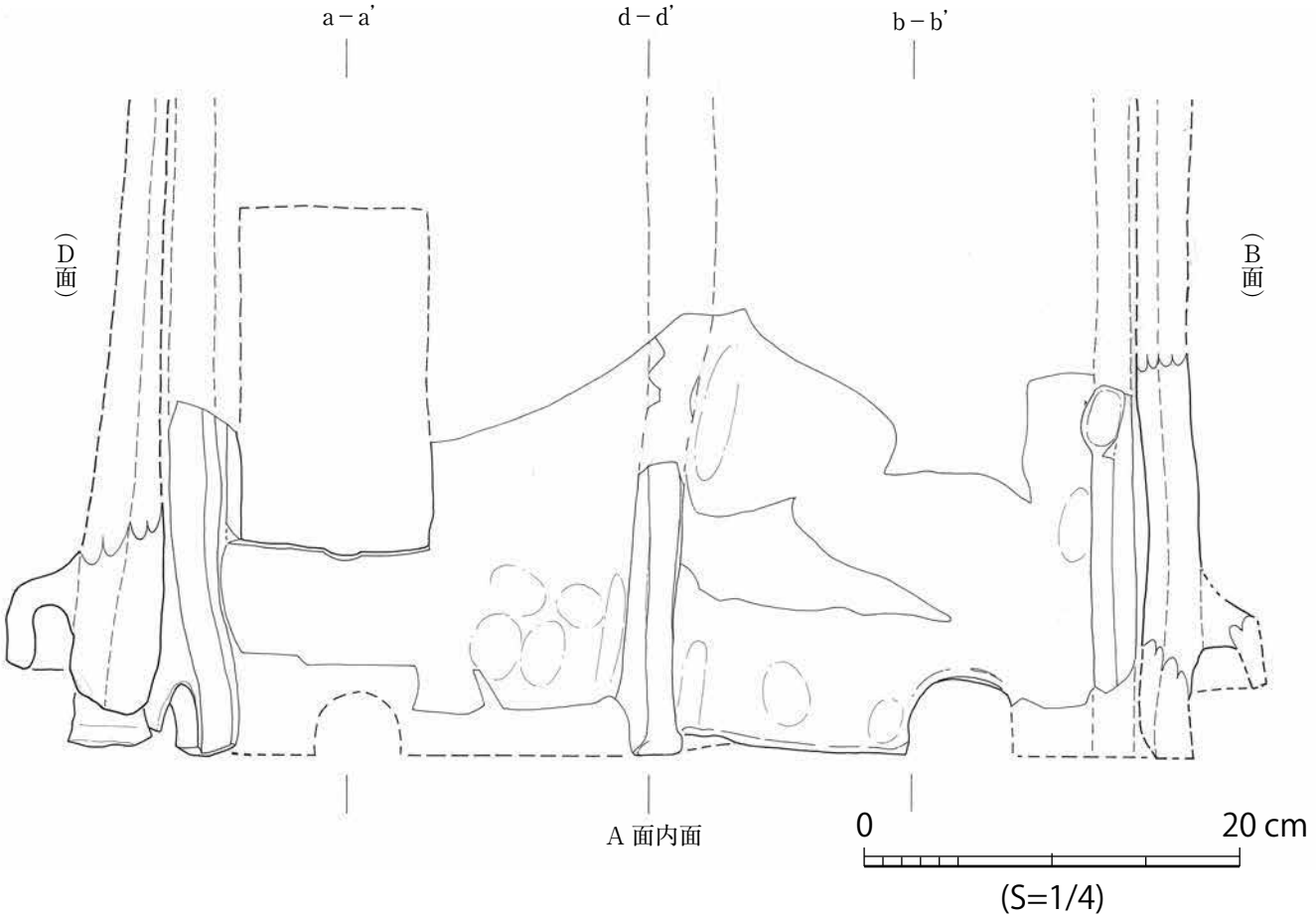


図 4-31　東造出　家形埴輪 1-3①



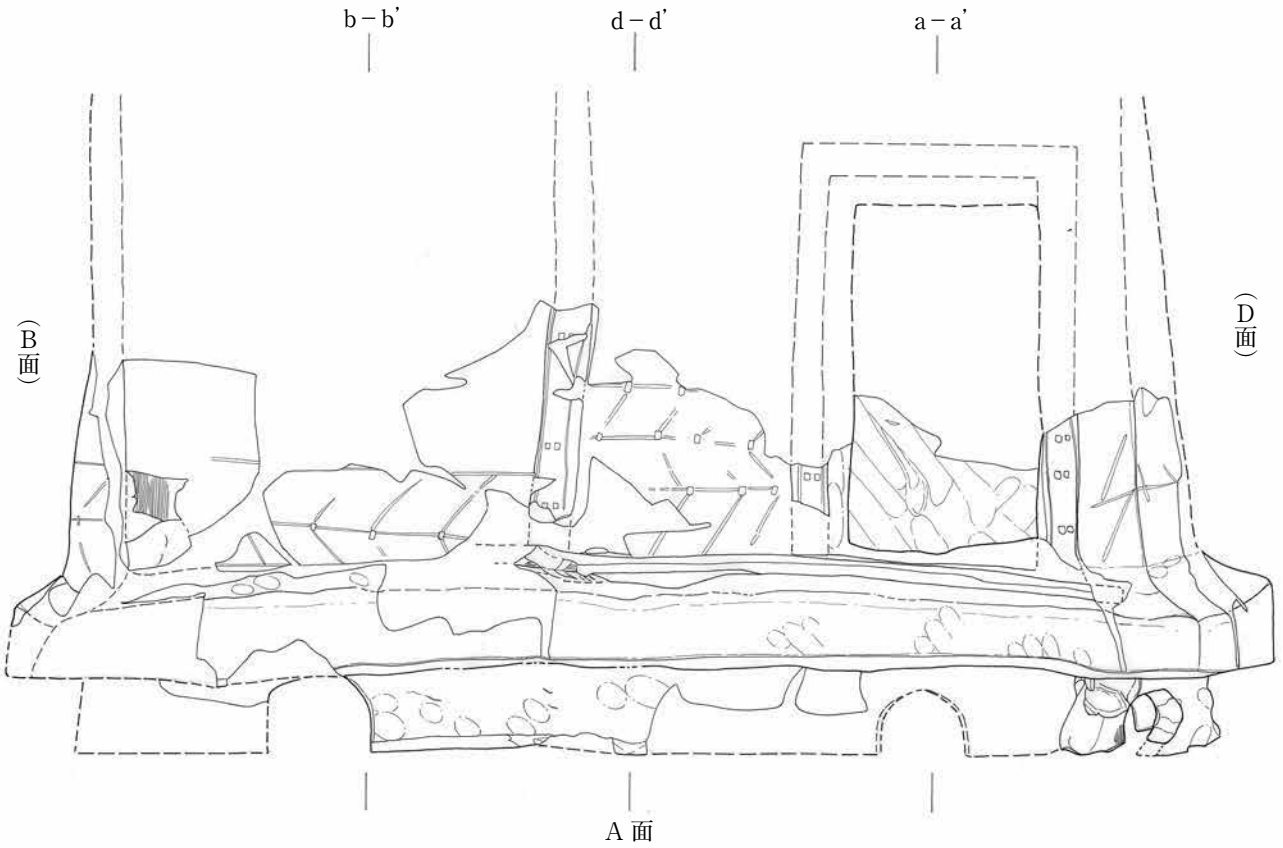
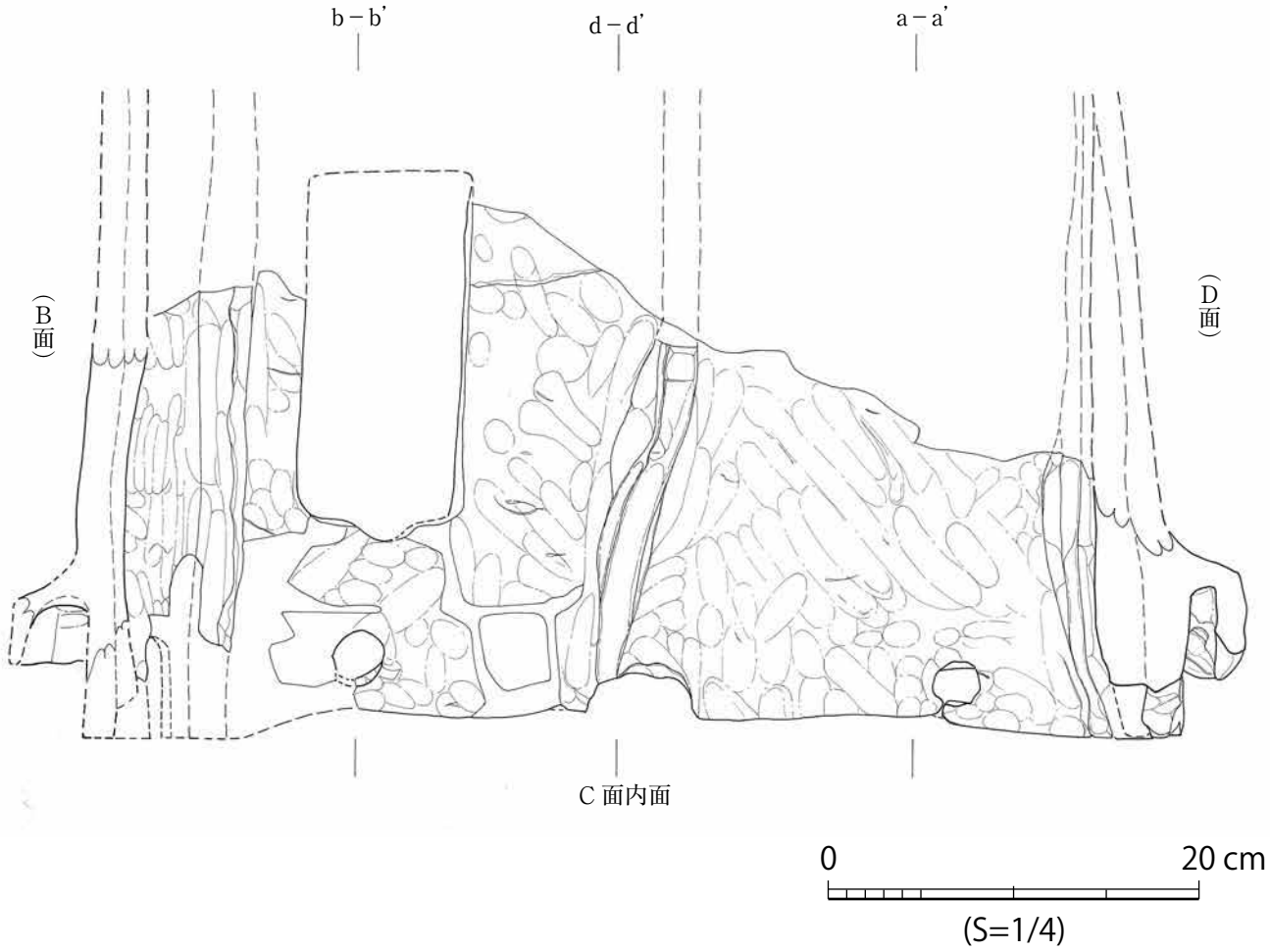


図 4-32　東造出　家形埴輪 1-3②



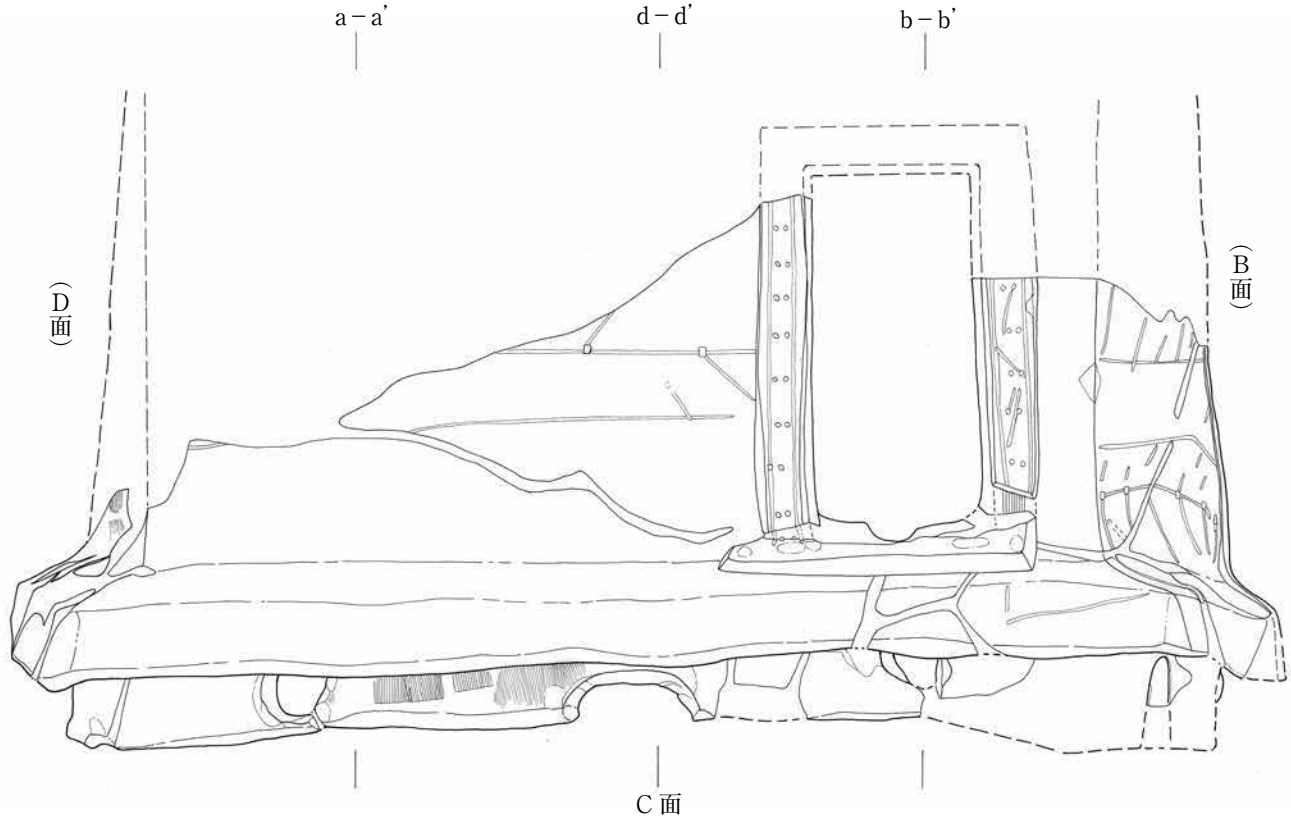
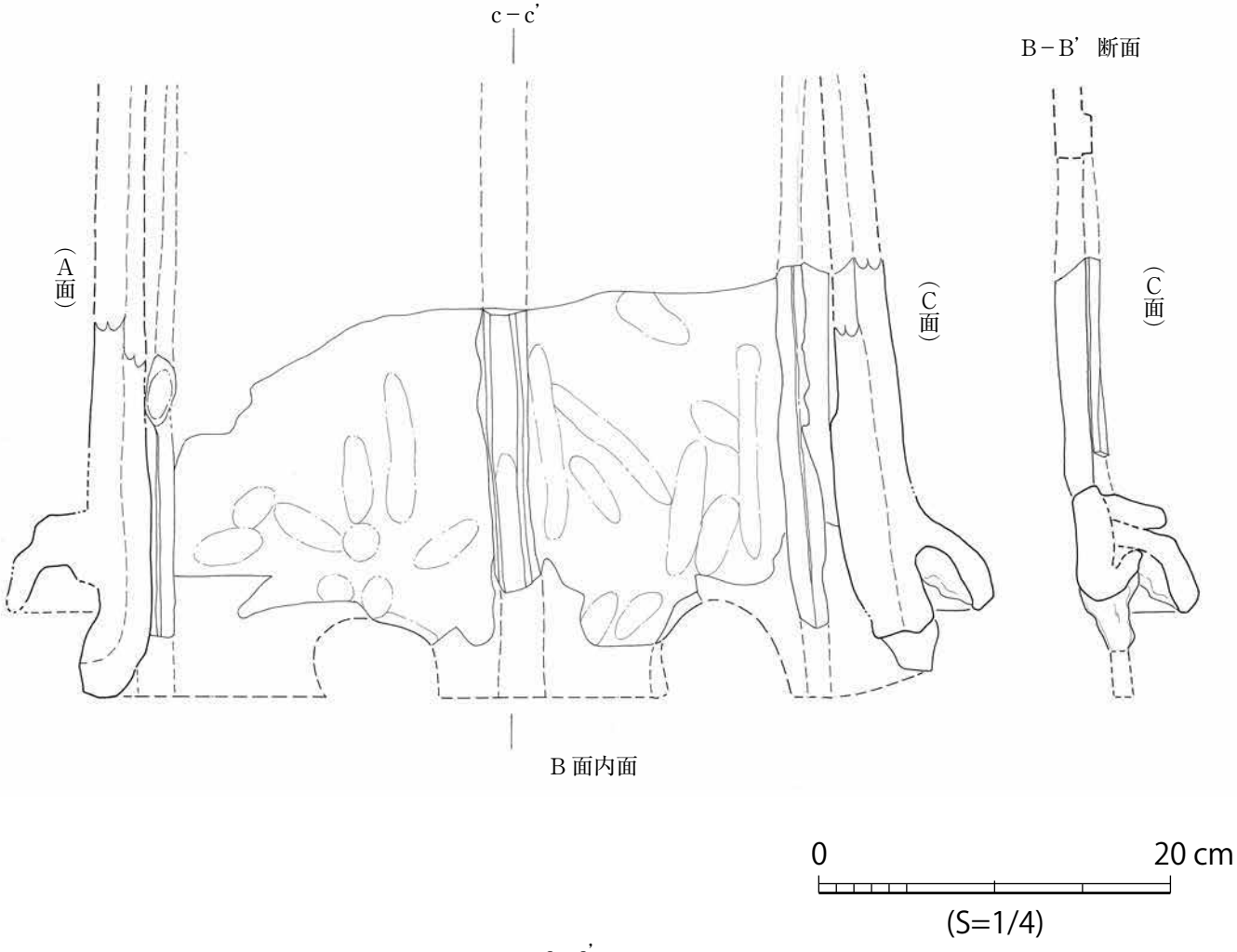


図 4-33　東造出　家形埴輪 1-3③



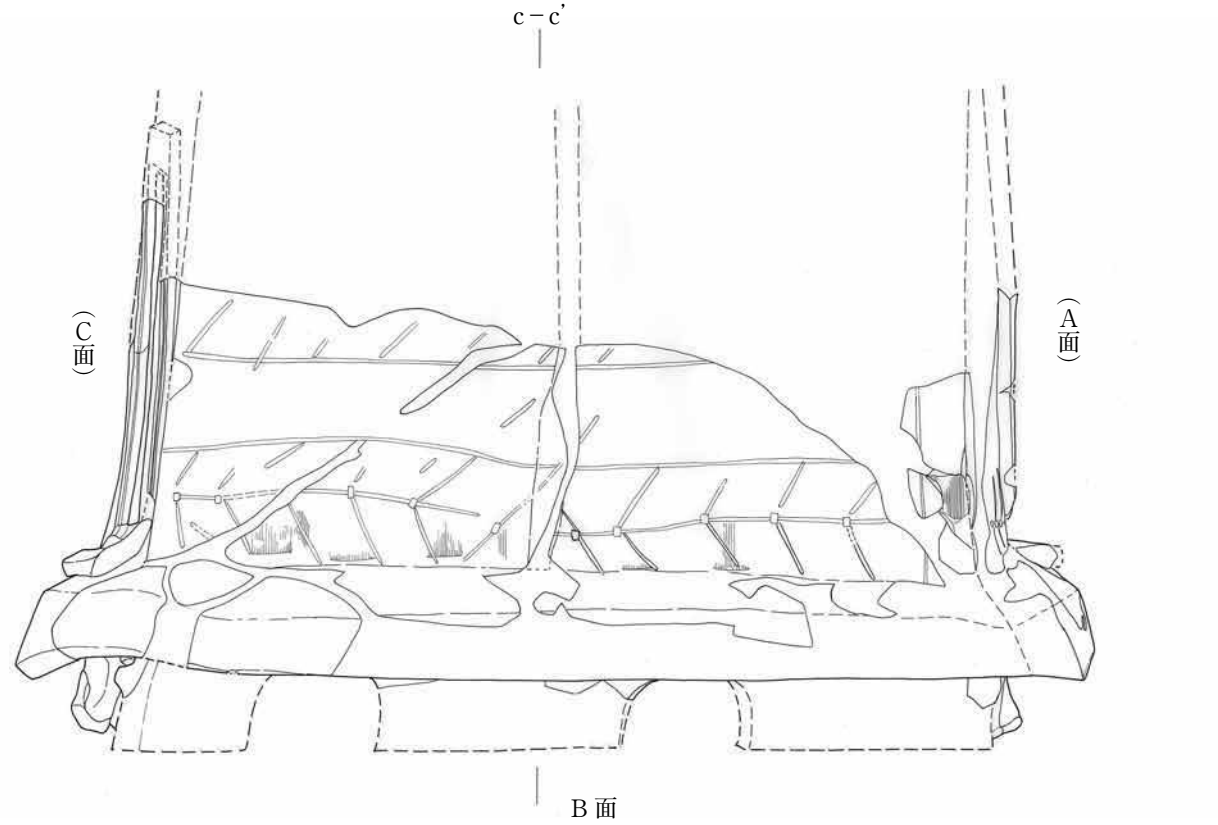
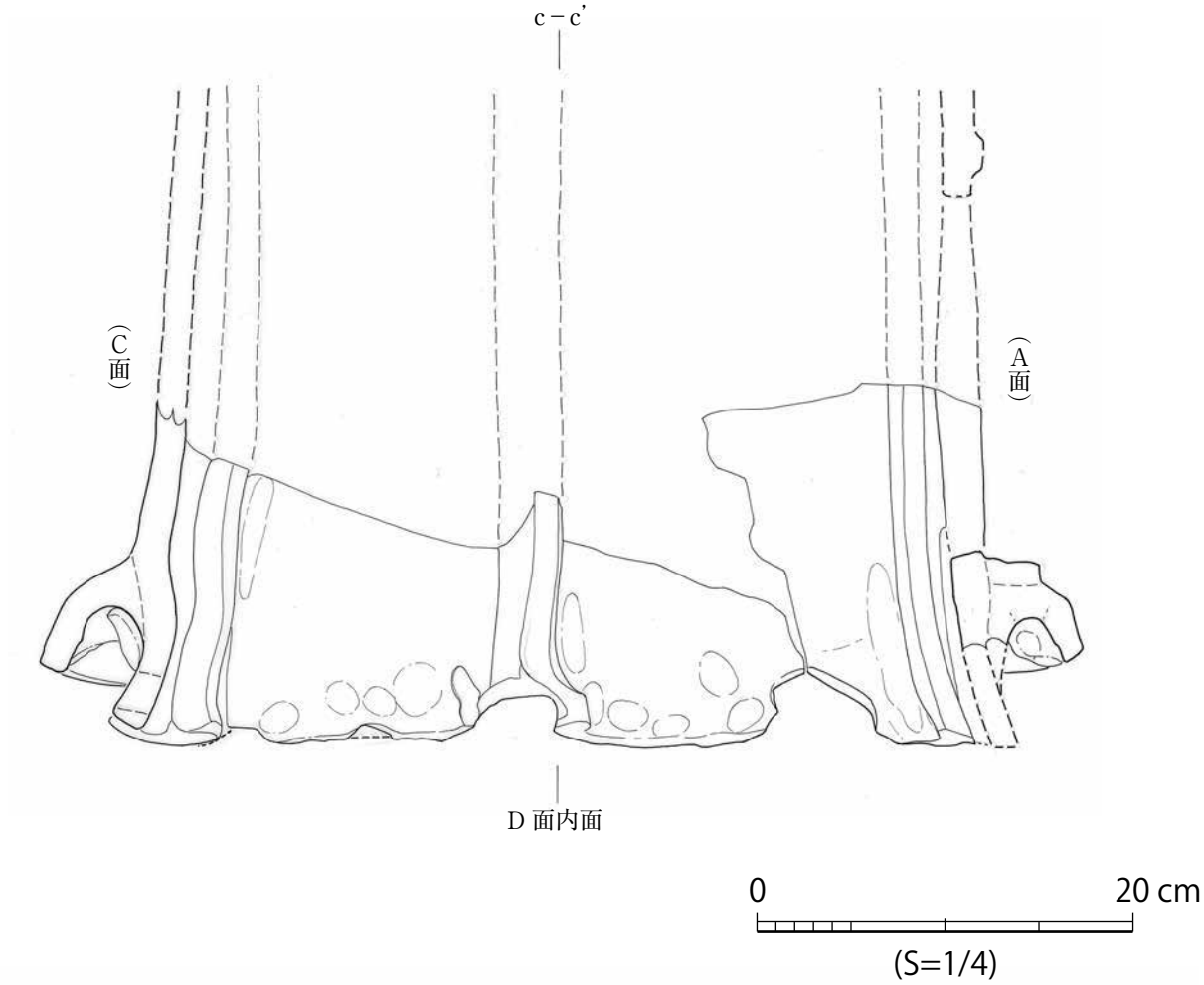


図 4-34　東造出　家形埴輪 1-3④



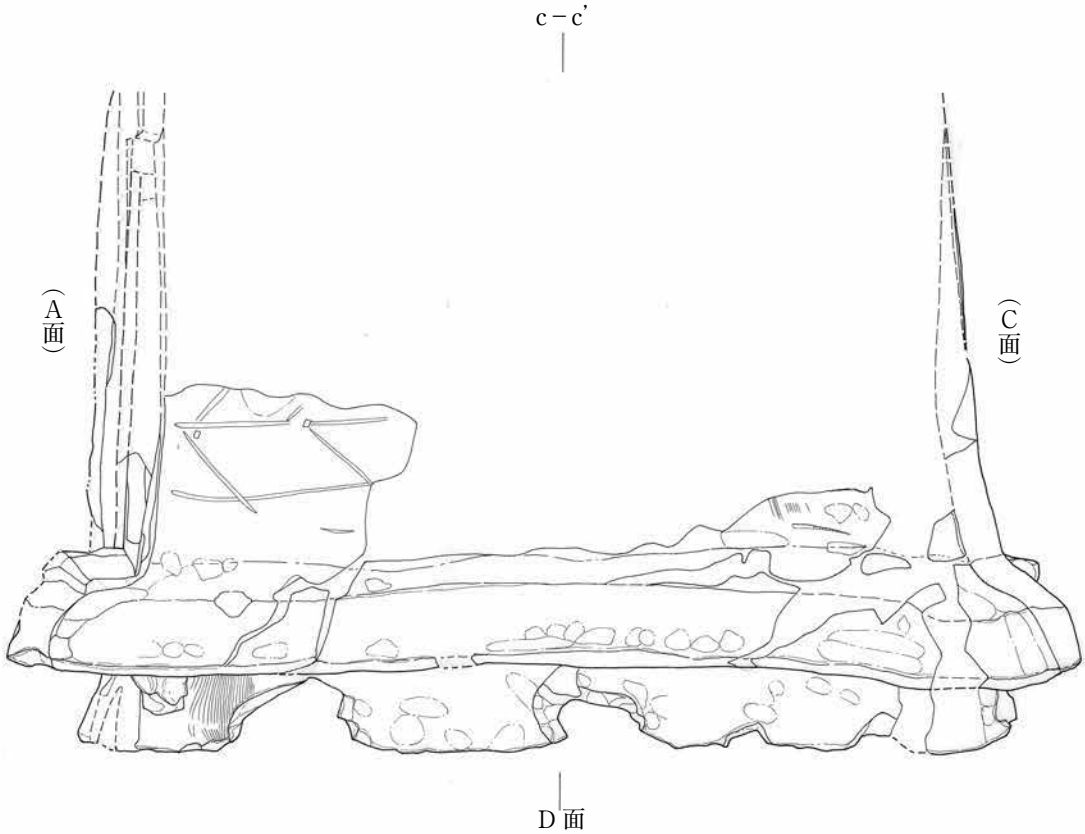


図 4-35　東造出　家形埴輪 1-3⑤

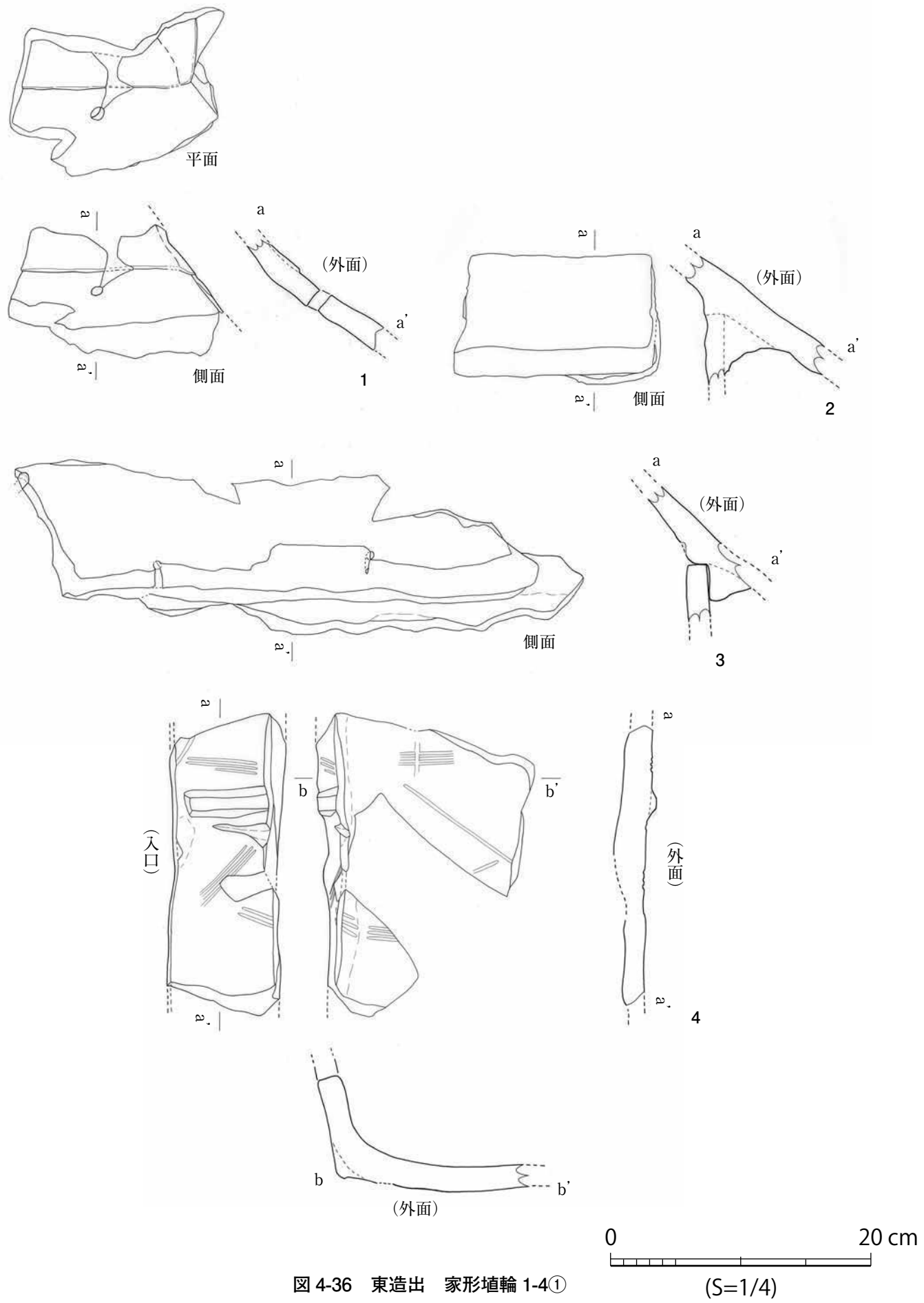


図 4-36　東造出　家形埴輪 1-4①

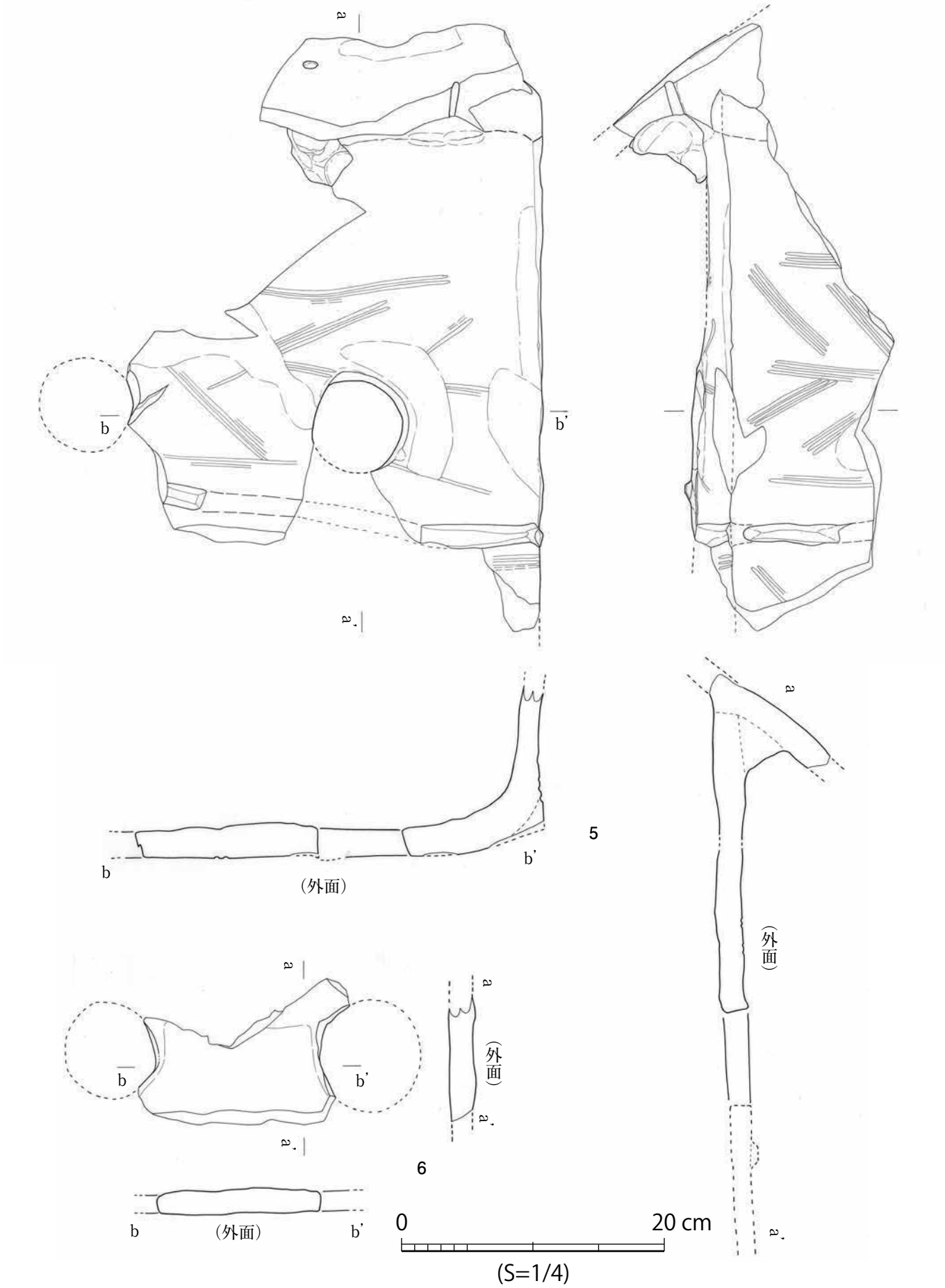


図 4-37　東造出　家形埴輪 1-4②

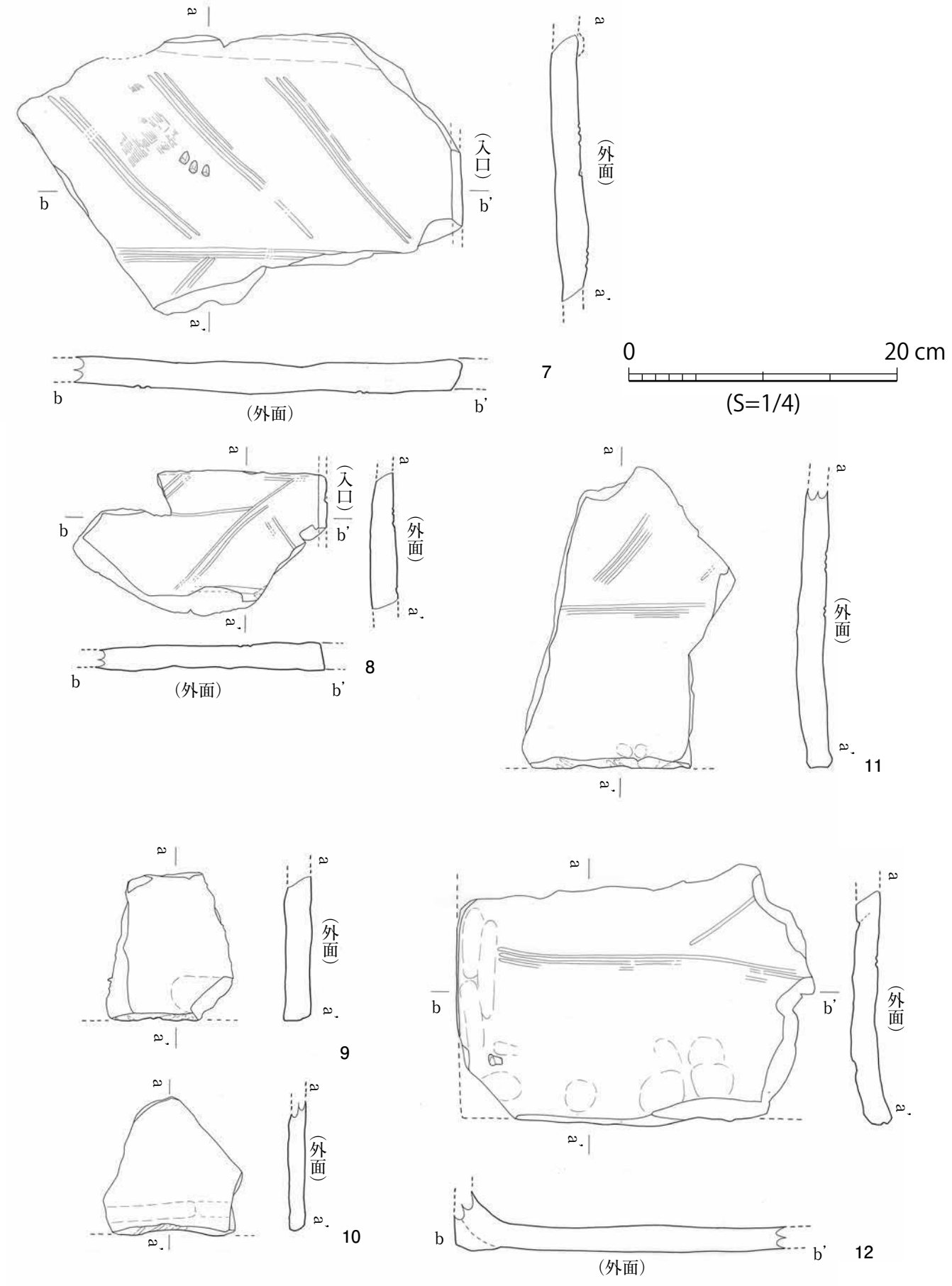


図 4-38　東造出　家形埴輪 1-4③

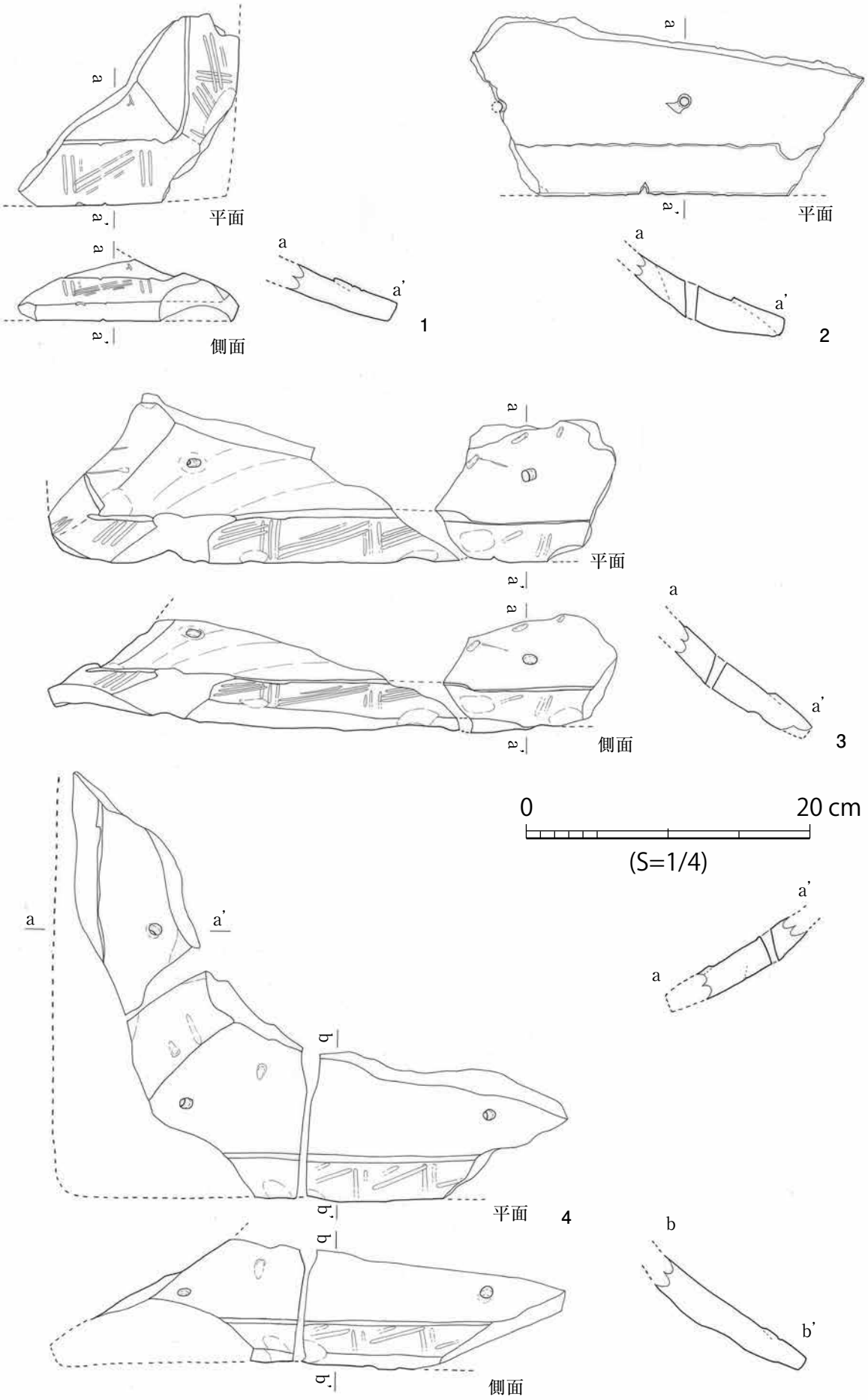


図 4-39　東造出　家形埴輪 1-7

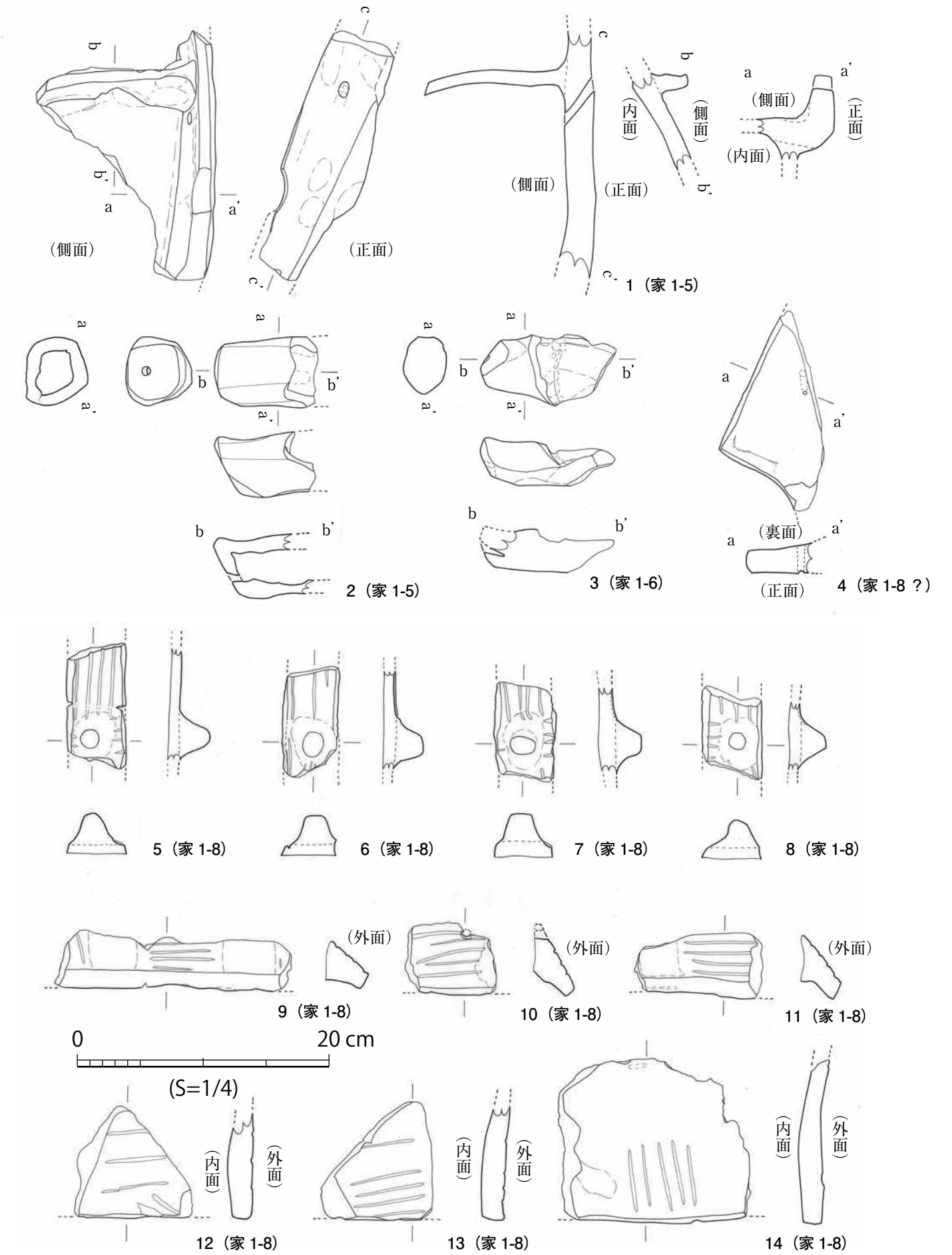


図 4-40　東造出　家形埴輪 1-5、1-6、1-8

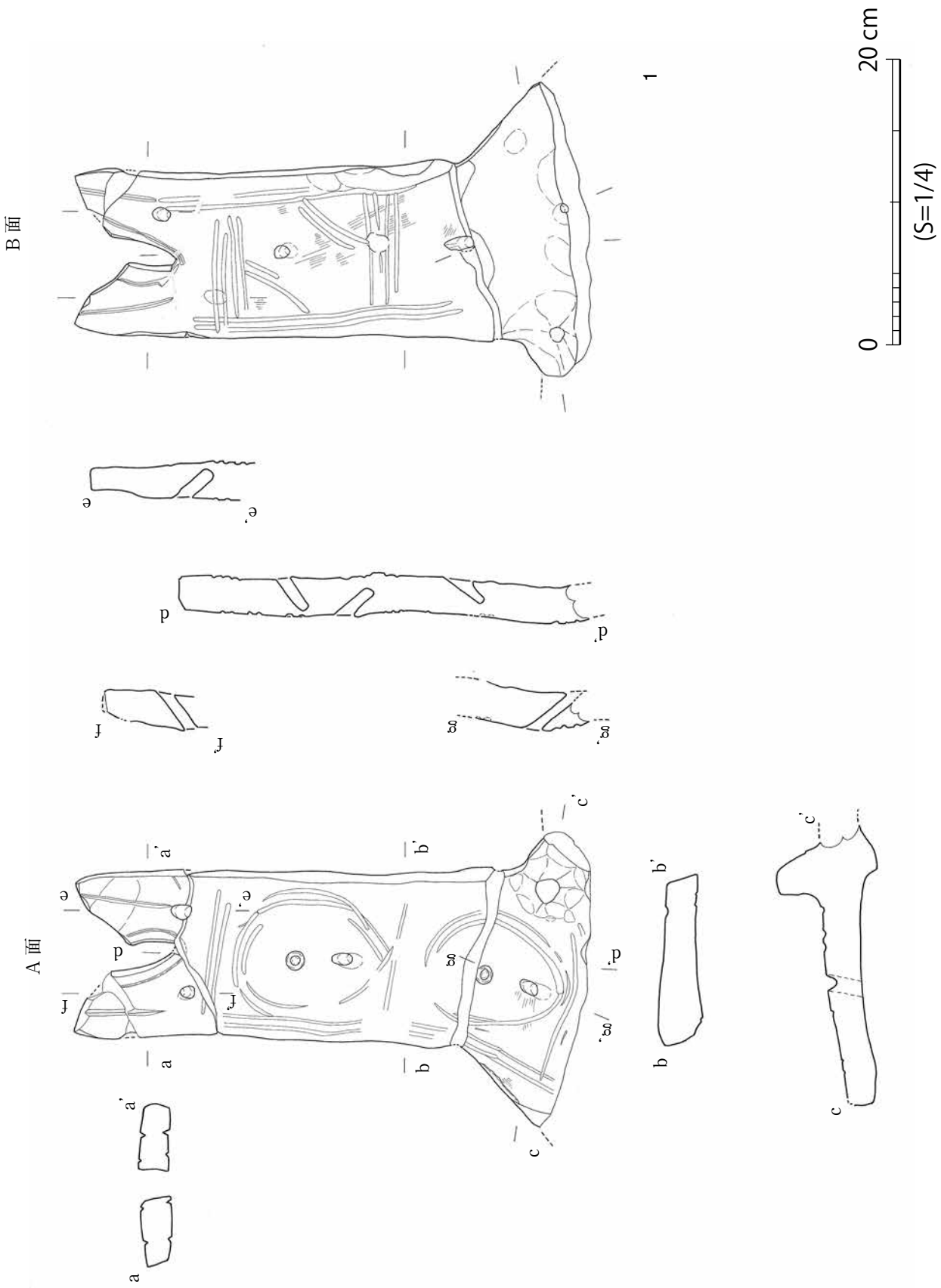


図 4-41　東造出　家形埴輪（千木①）

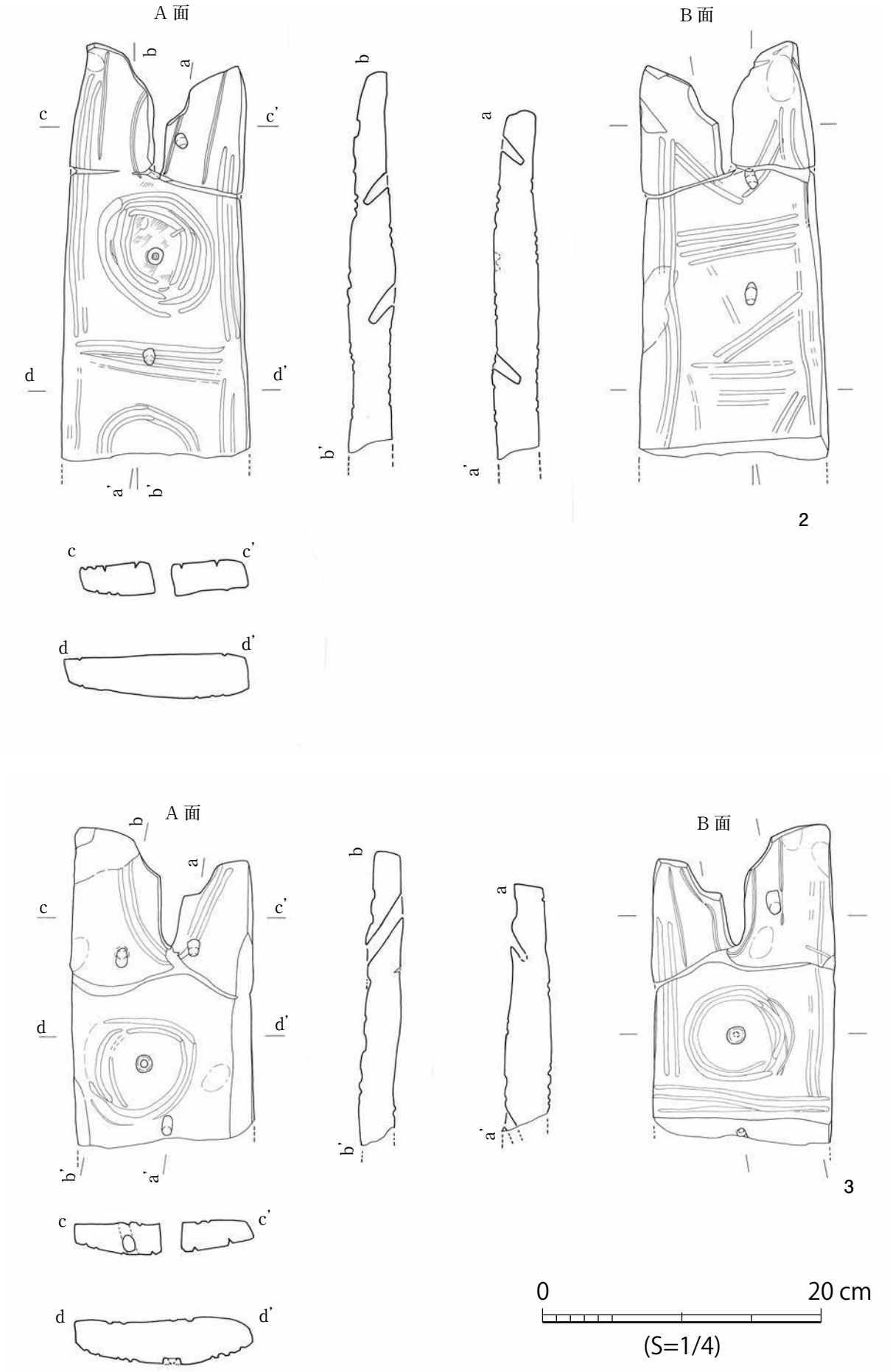


図 4-42　東造出　家形埴輪（千木②）

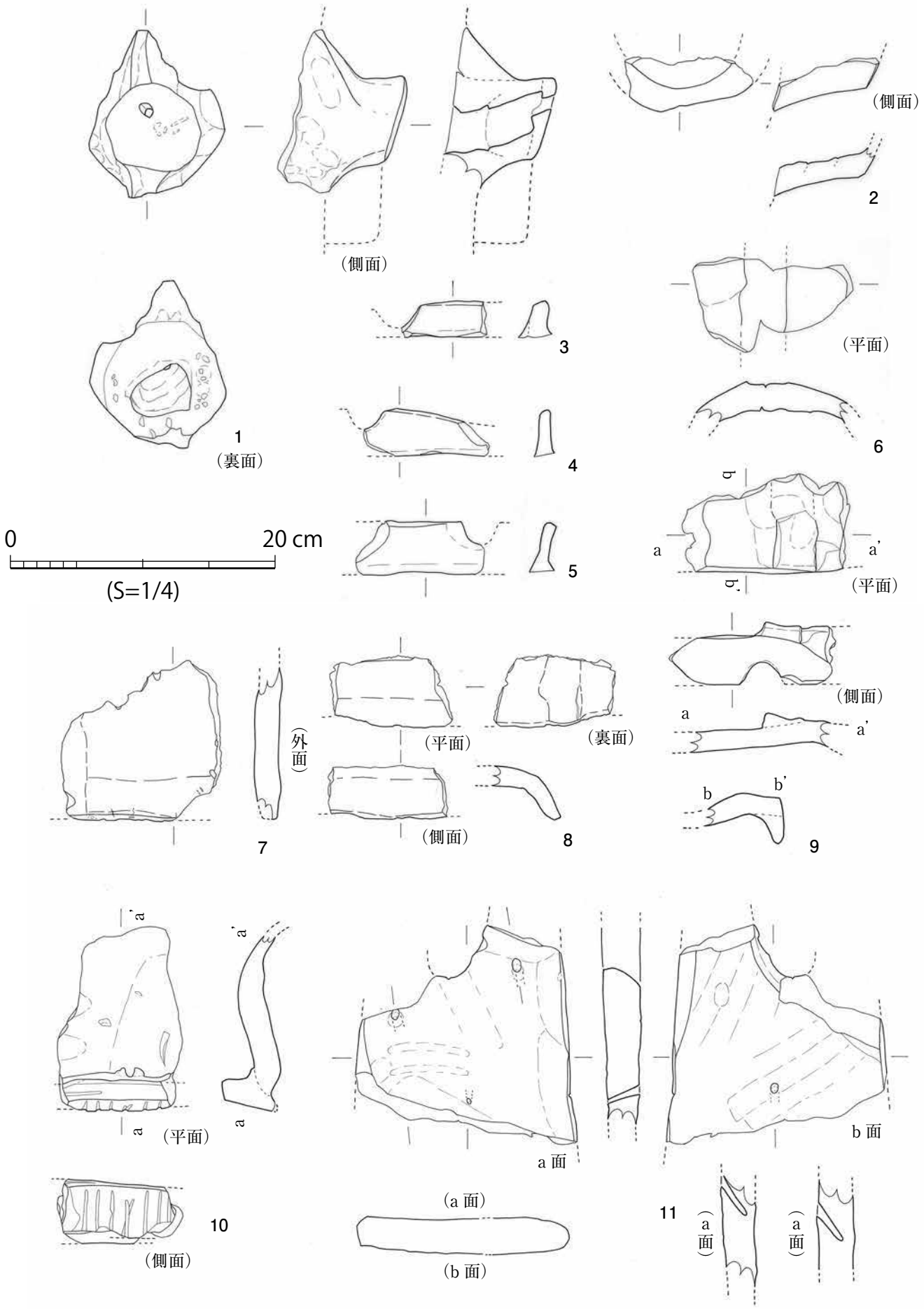


図 4-43　東造出　家形埴輪（各種部材）

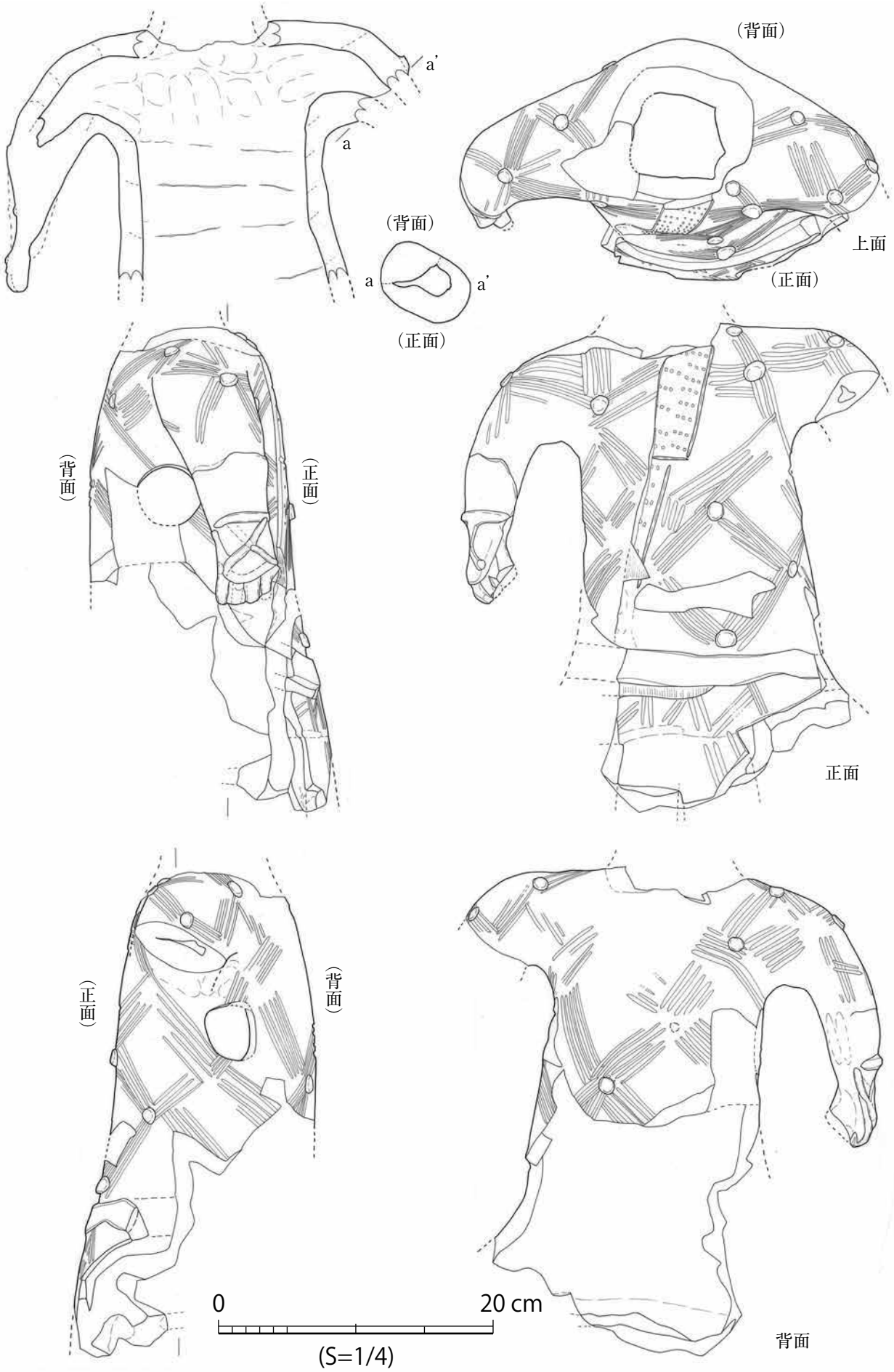


図 4-44　東造出　人物埴輪　盛装男子 1-1

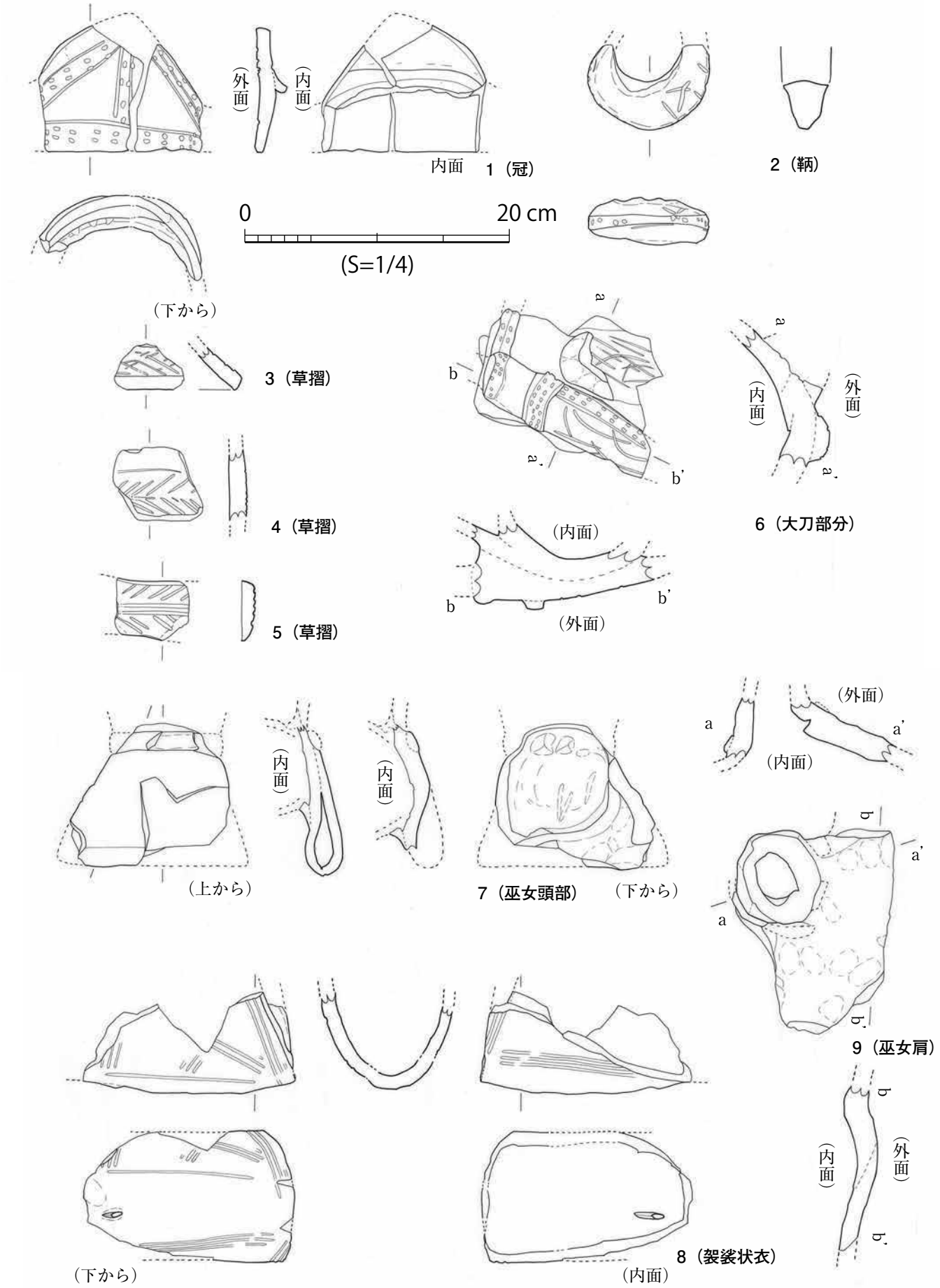


図 4-45　東造出　人物埴輪（盛装男子・巫女）

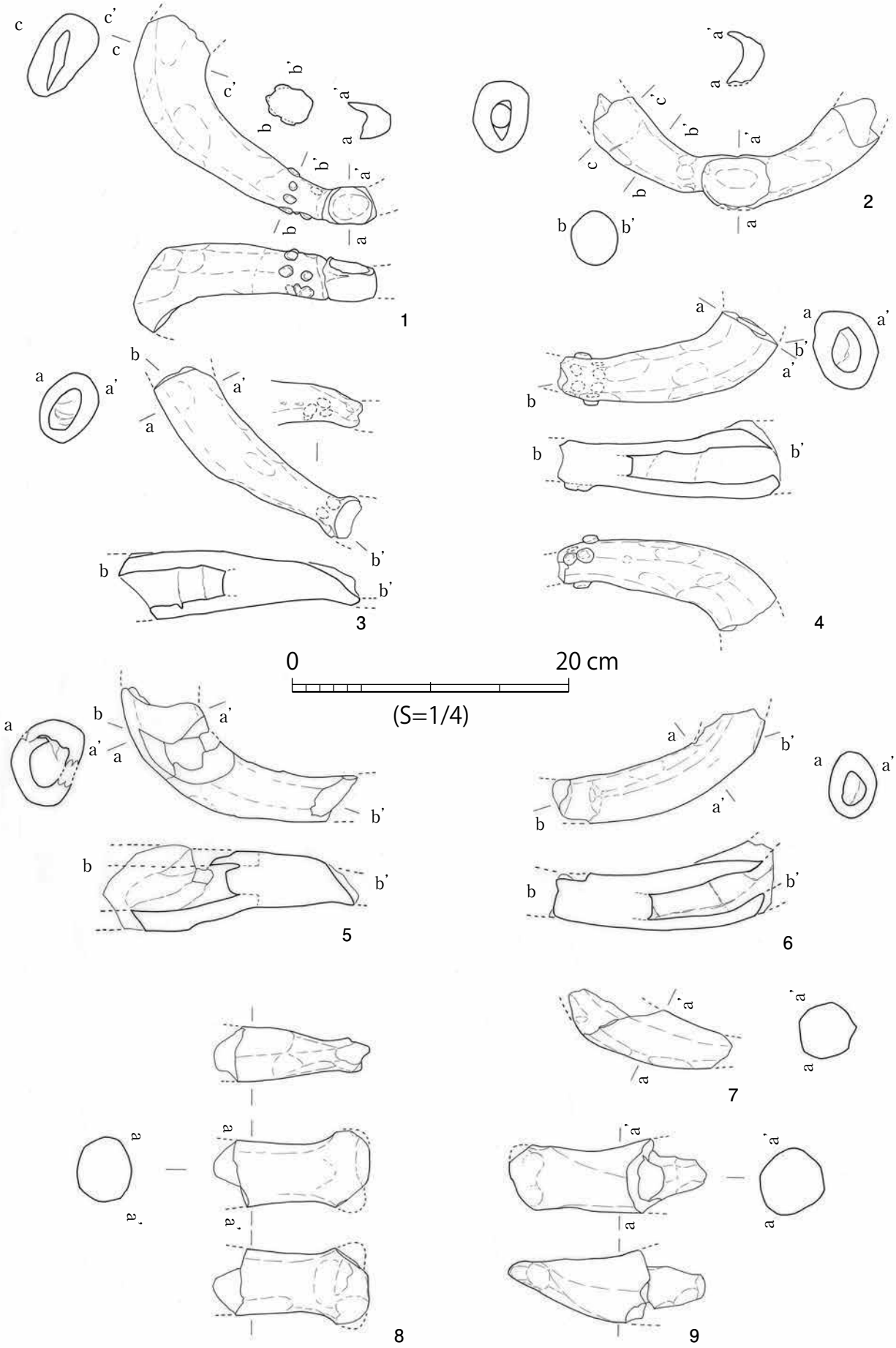


図 4-46　東造出　人物埴輪（腕）

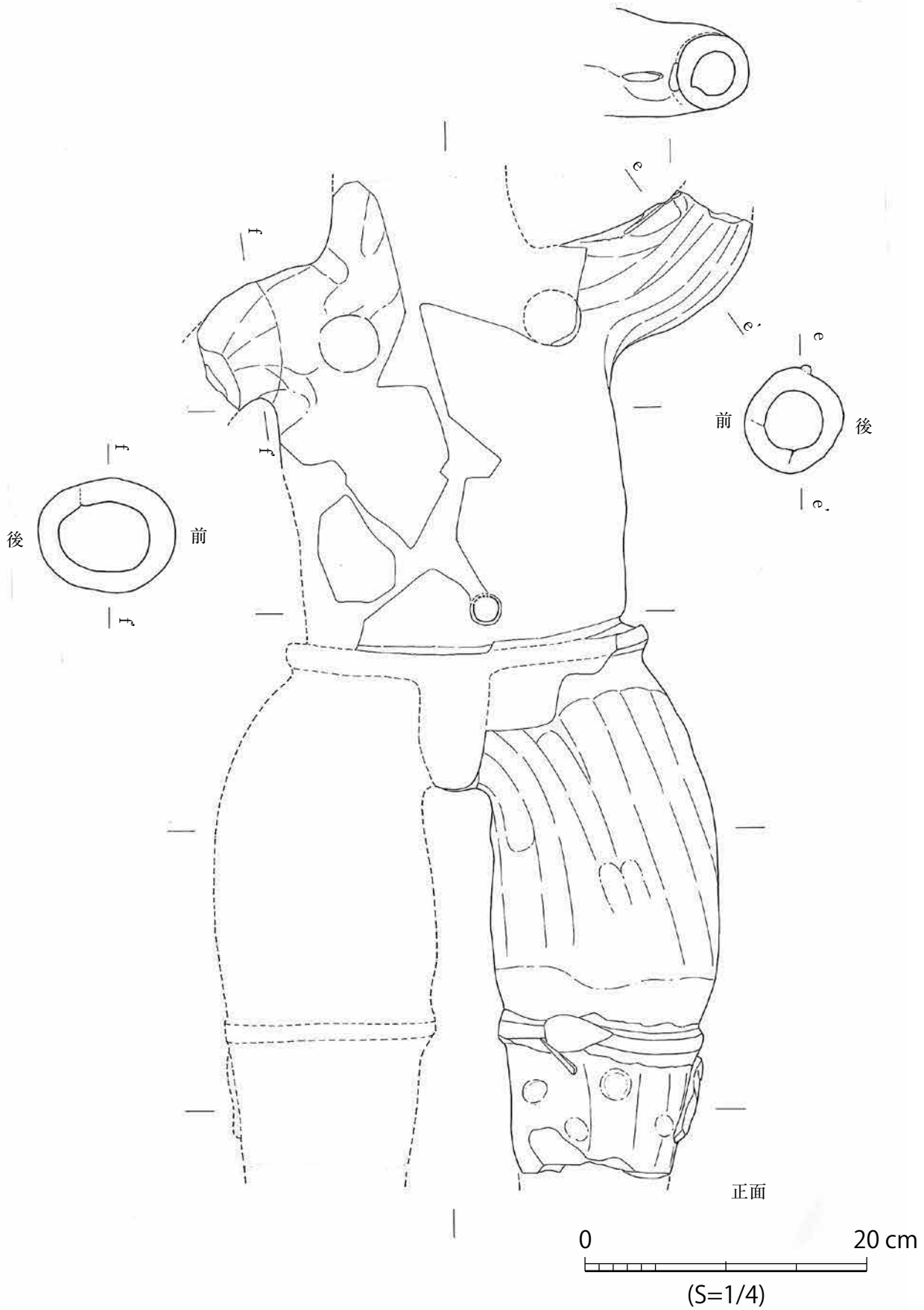


図 4-47　東造出　人物埴輪（力士 1-1）①

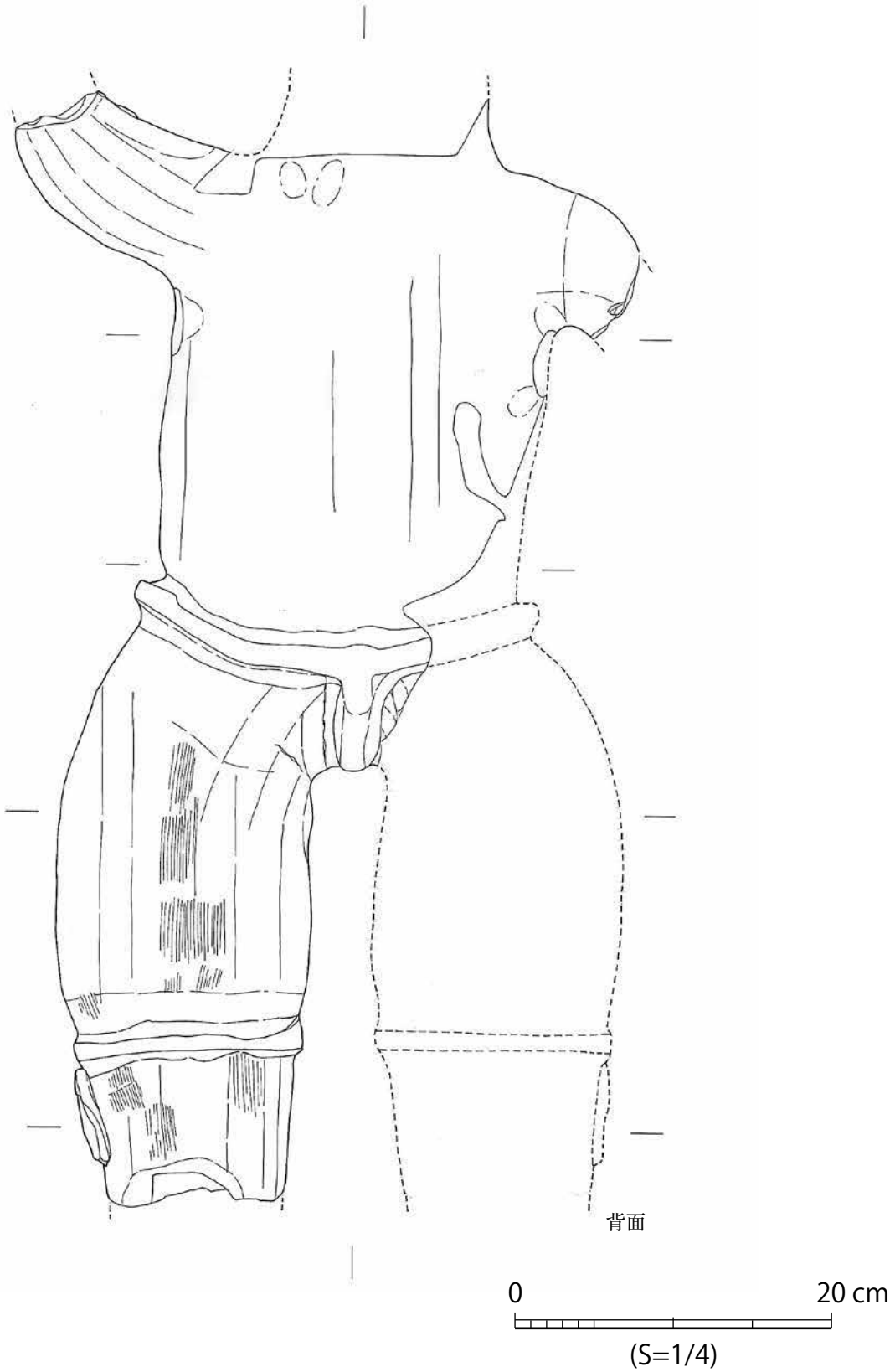


図 4-48　東造出　人物埴輪（力士 1-1）②

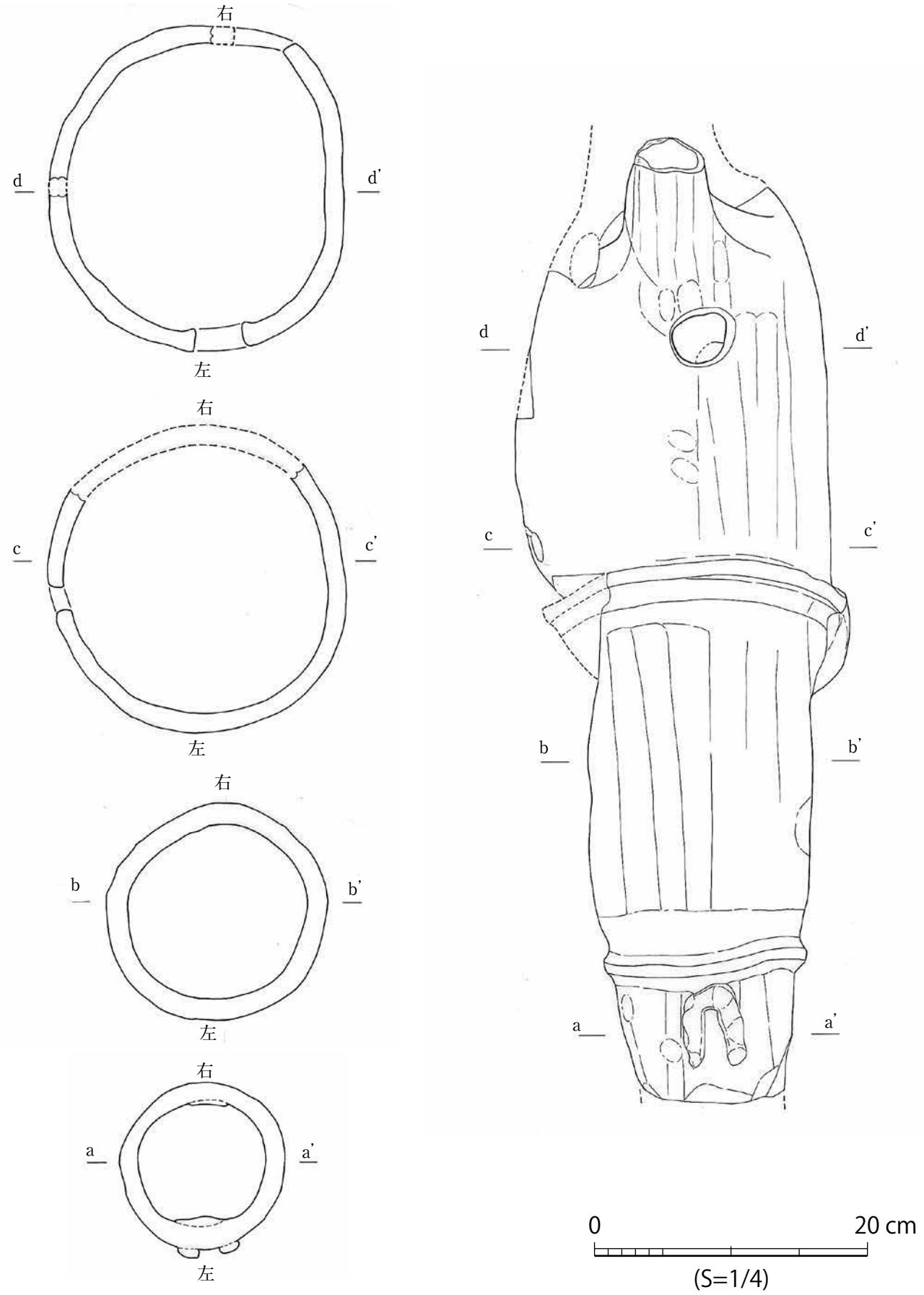
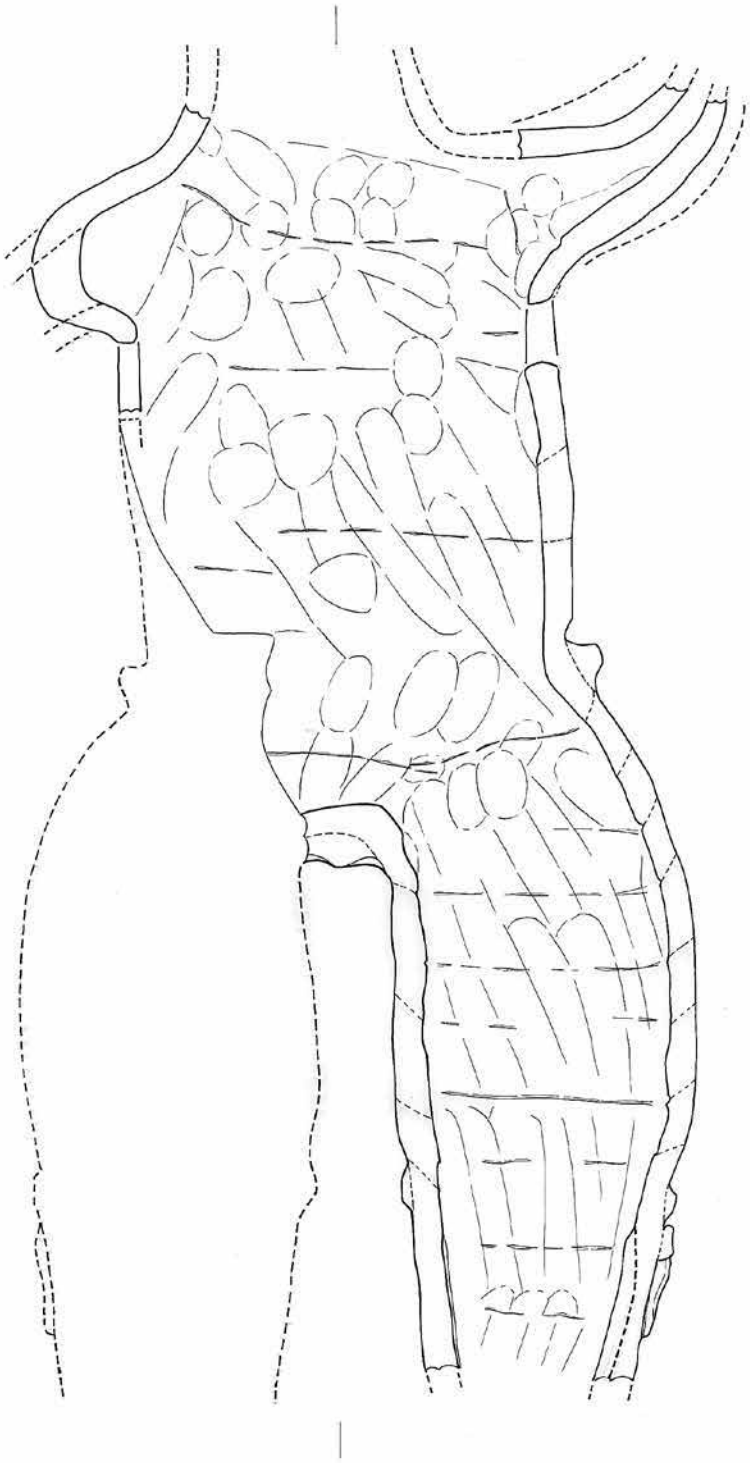


図 4-49　東造出　人物埴輪（力士 1-1）③



0　　20 cm

(S=1/4)

図 4-50　東造出　人物埴輪（力士 1-1）④

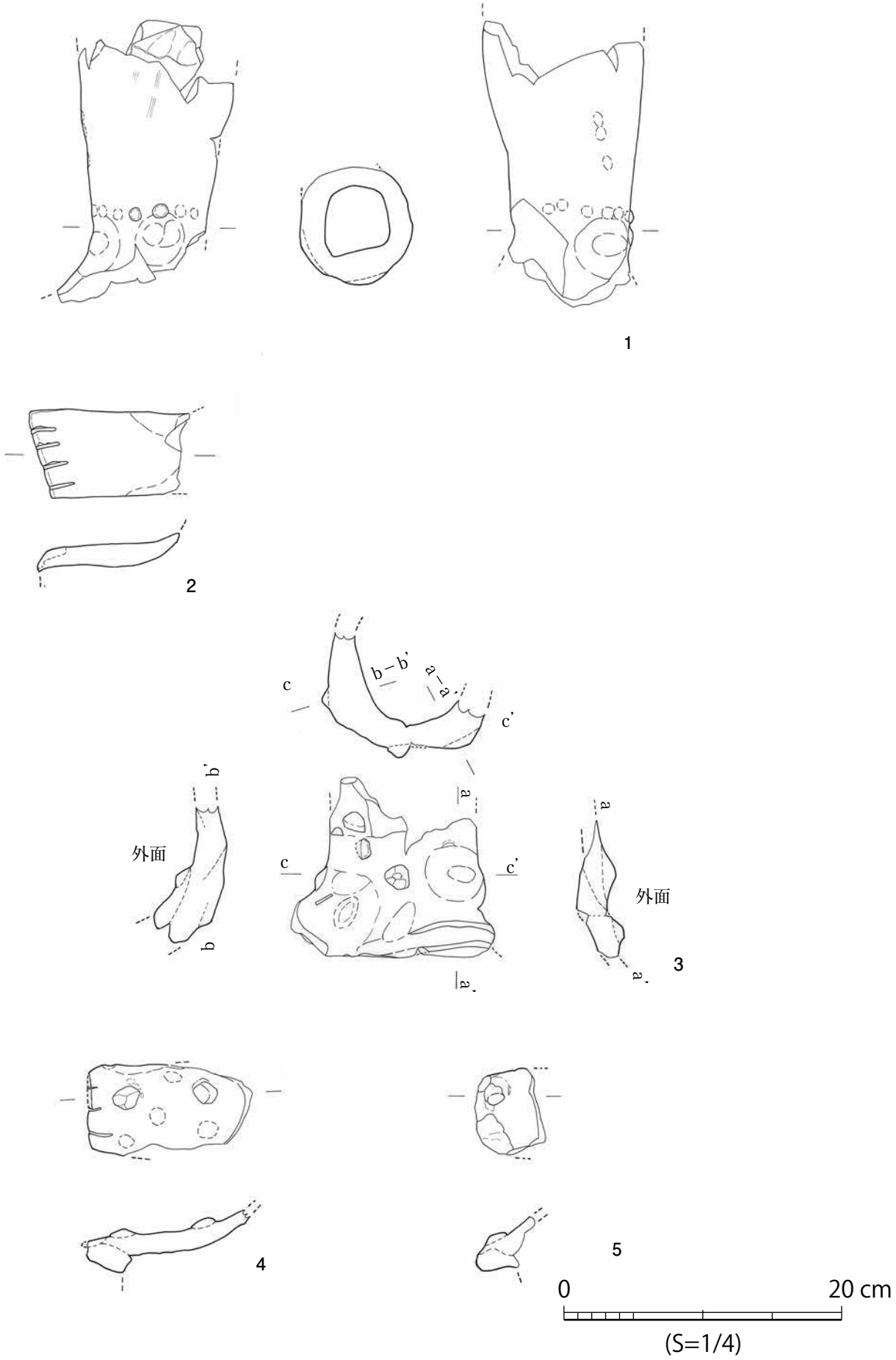


図 4-51　人物埴輪（力士脚部）

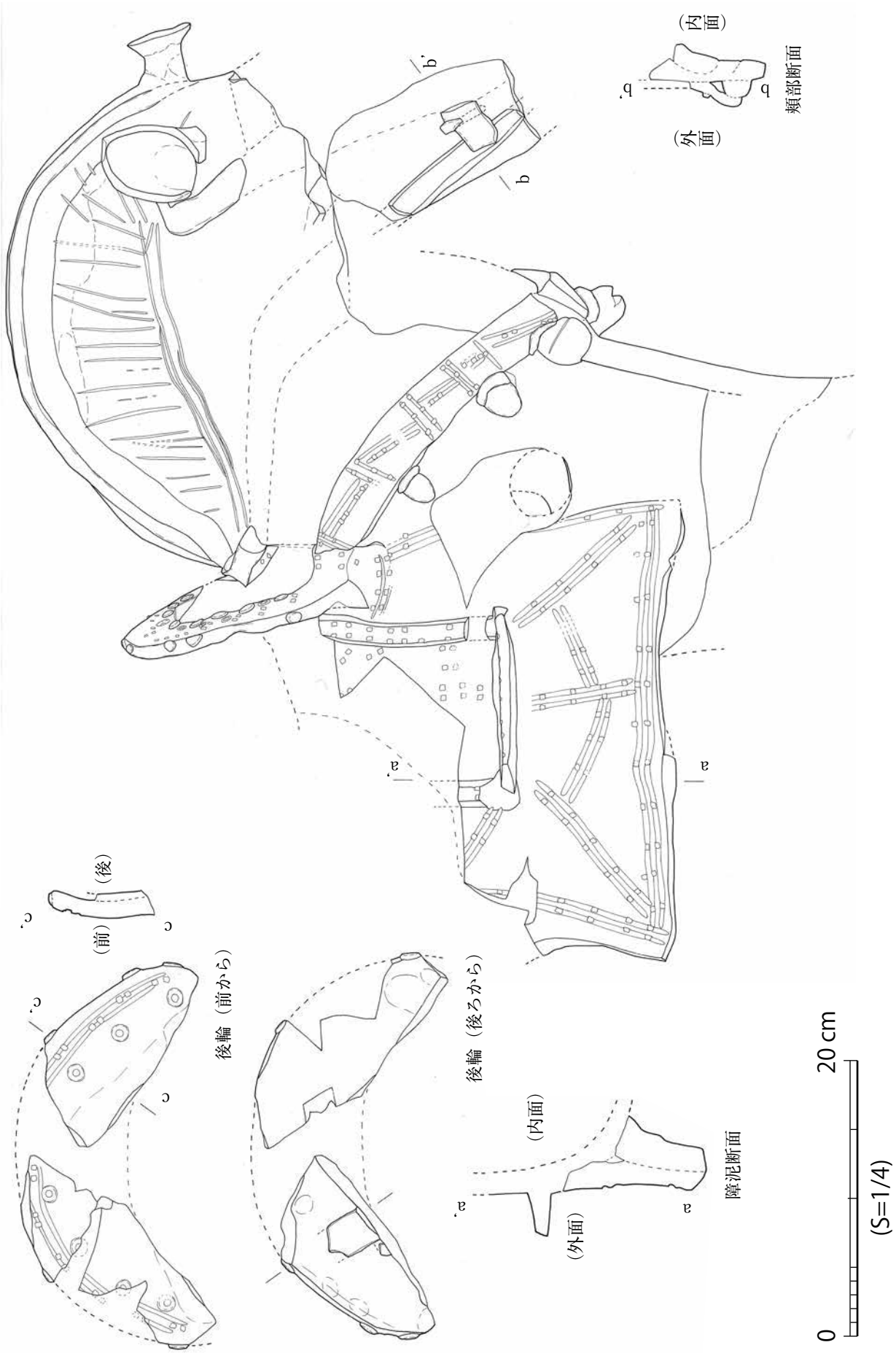


図 4-52　東造出　馬形埴輪 1-1①

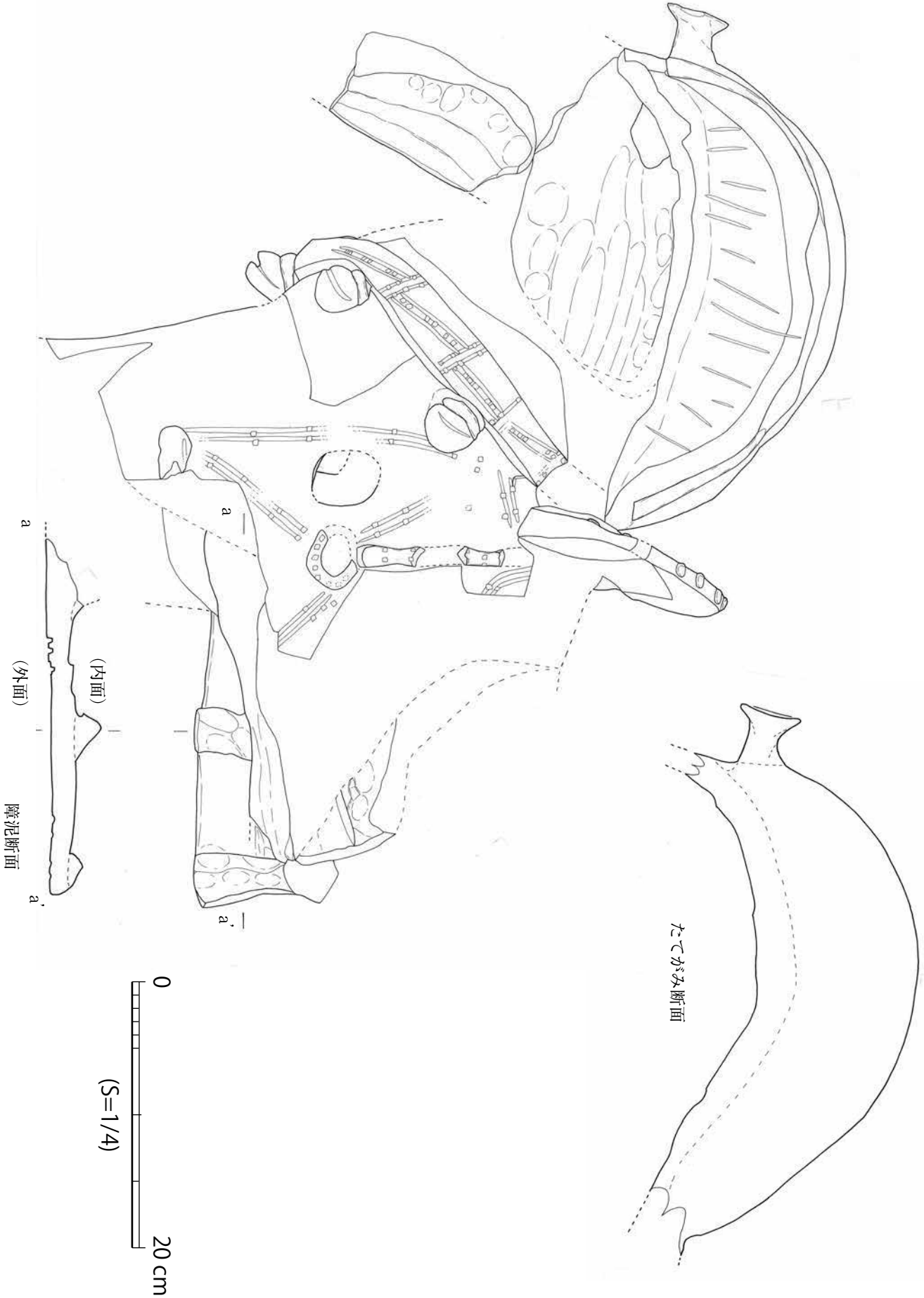


図 4-53　東造出　馬形埴輪 1-1②

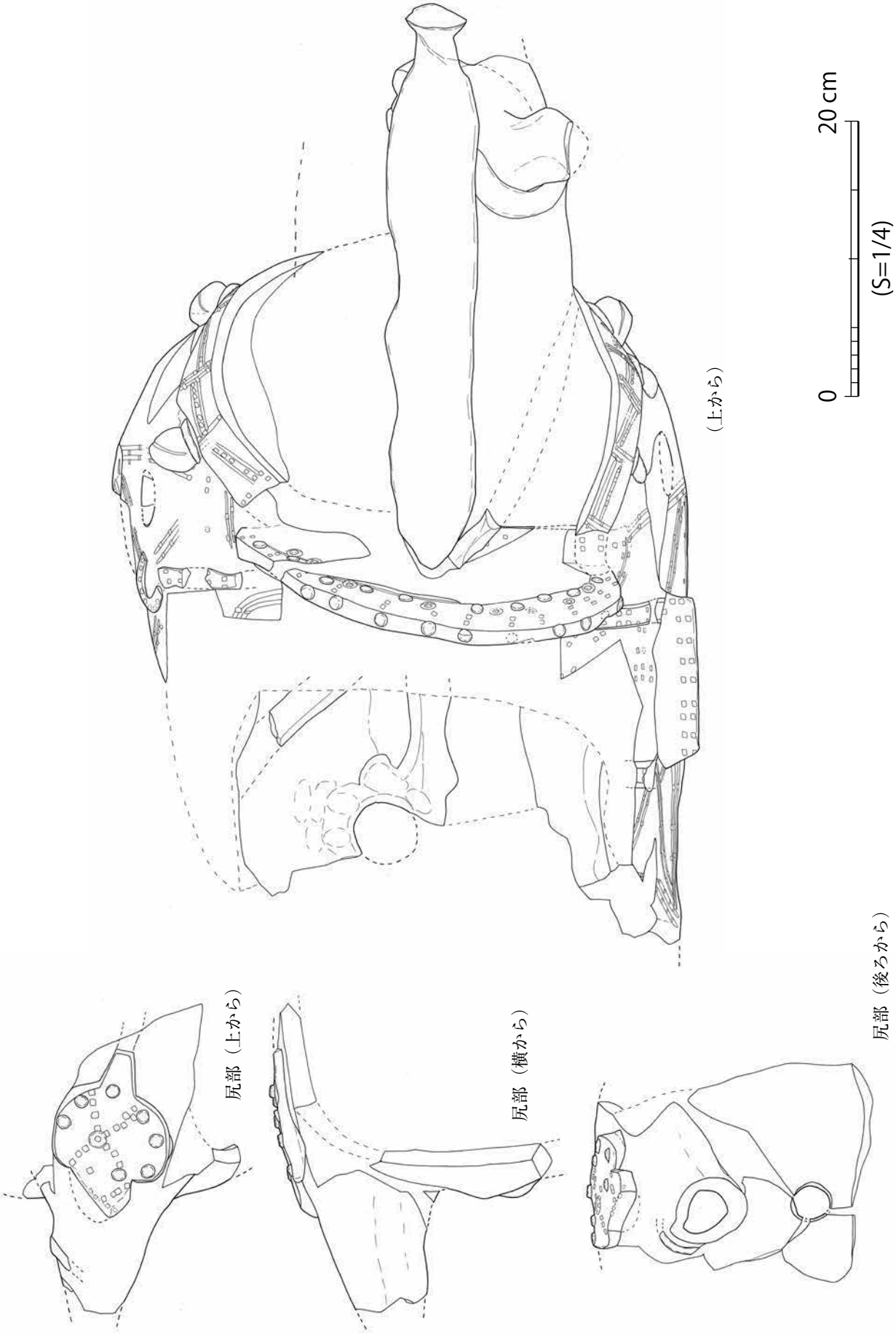


図 4-54　東造出　馬形埴輪 1-1③

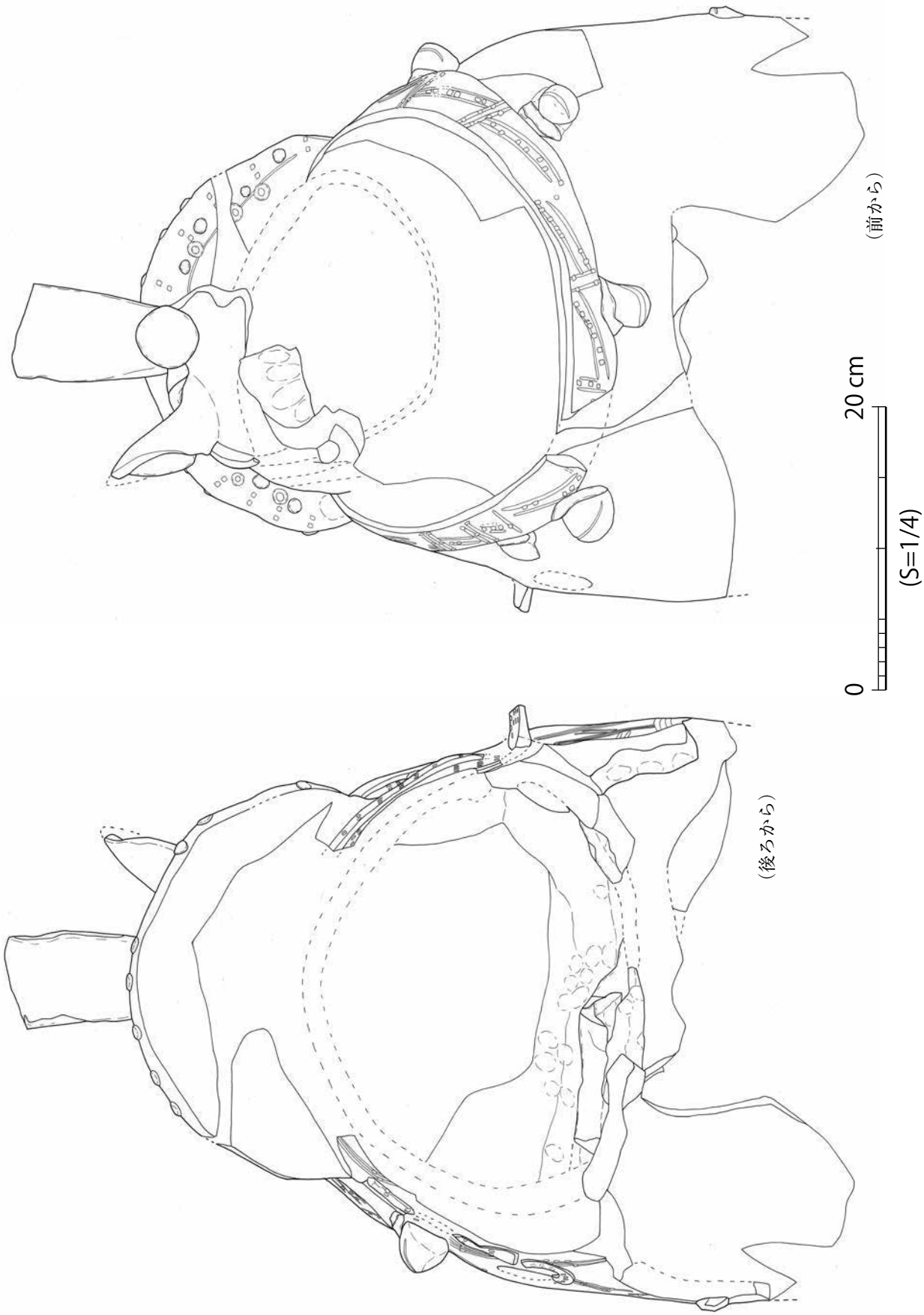


図 4-55　東造出　馬形埴輪 1-1④

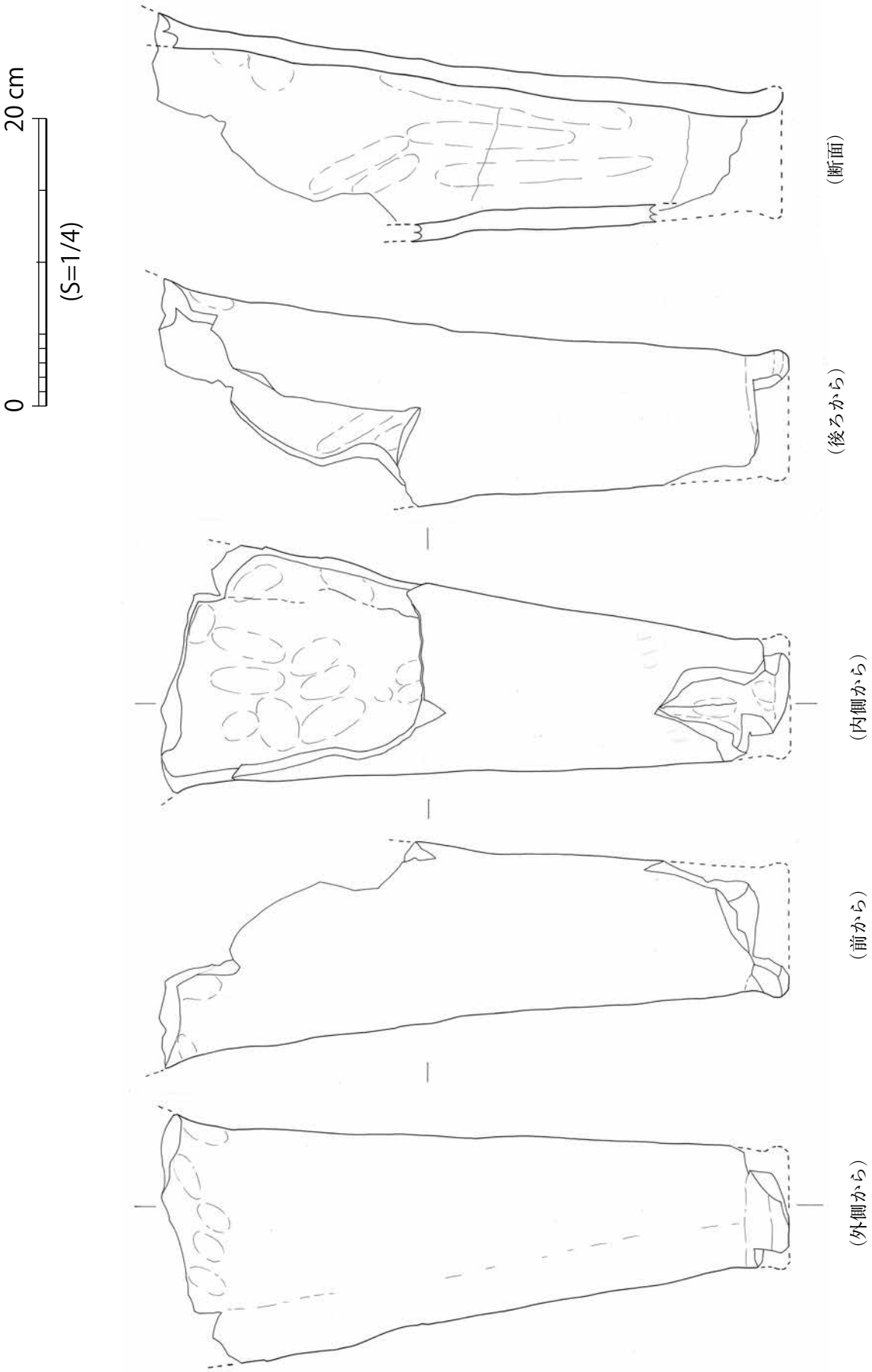


図 4-56　東造出　馬形埴輪 1-1⑤（右前脚）

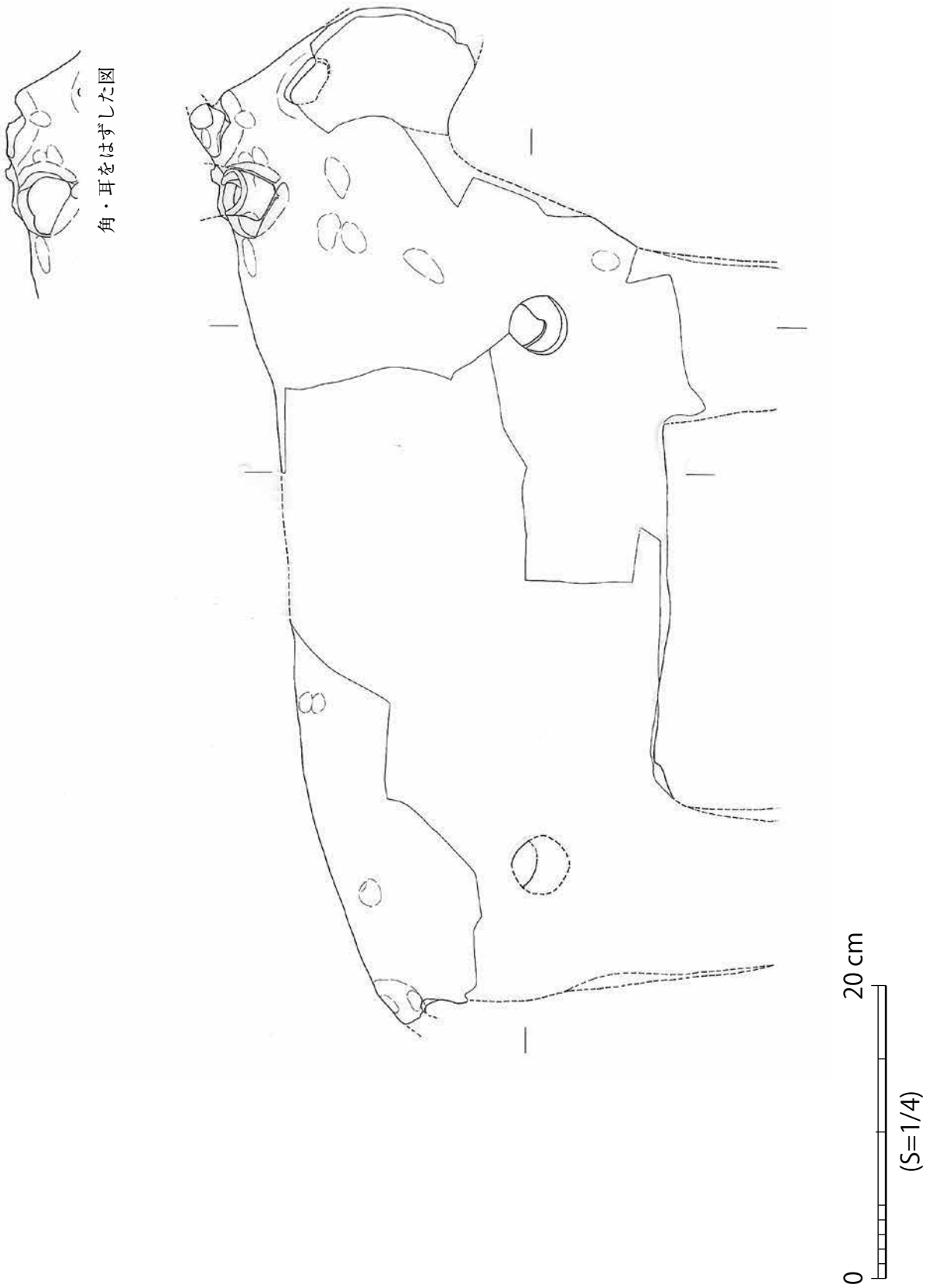


図 4-57　東造出　牛形埴輪 1-1①

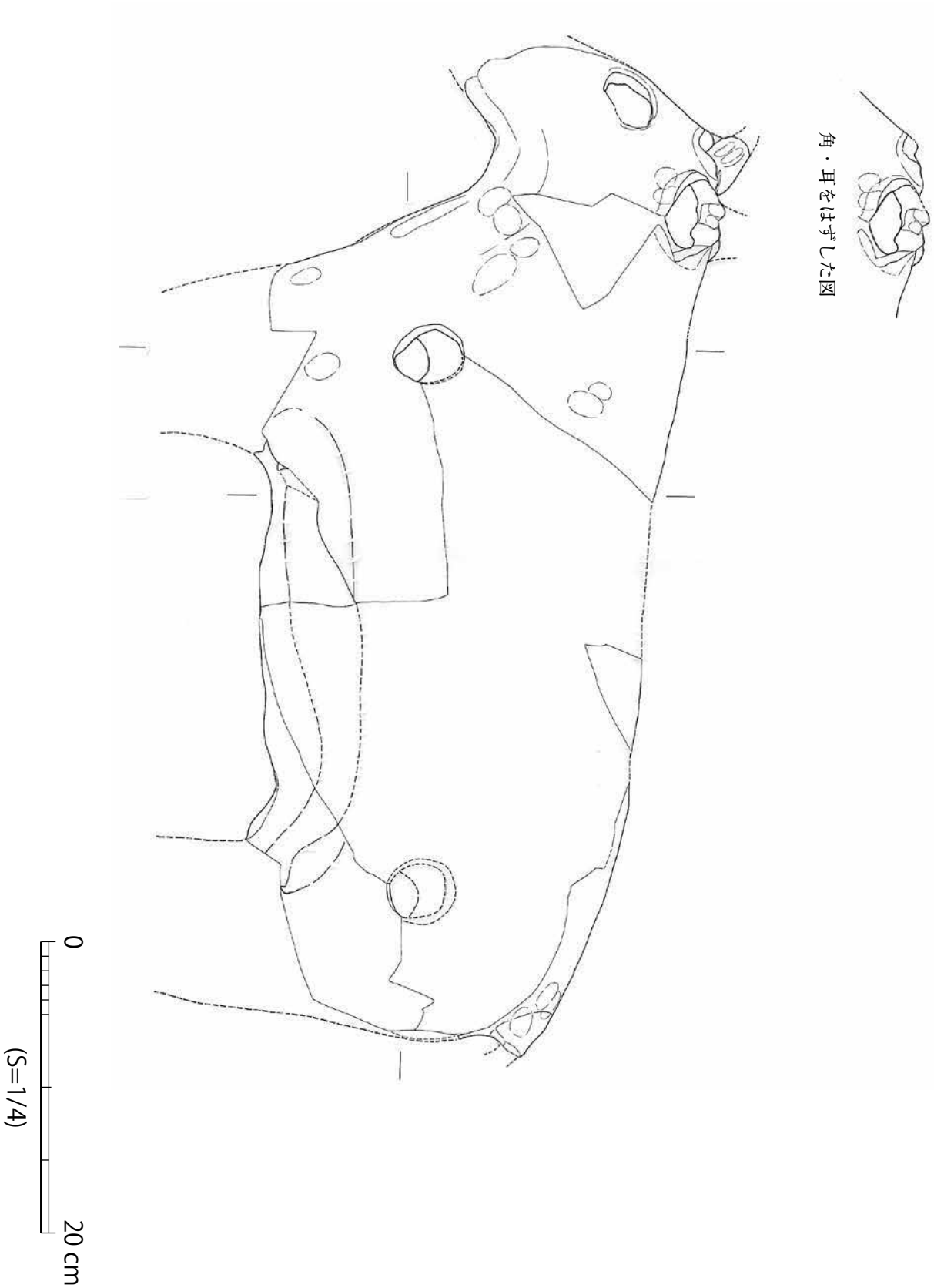


図 4-58　東造出　牛形埴輪 1-1②

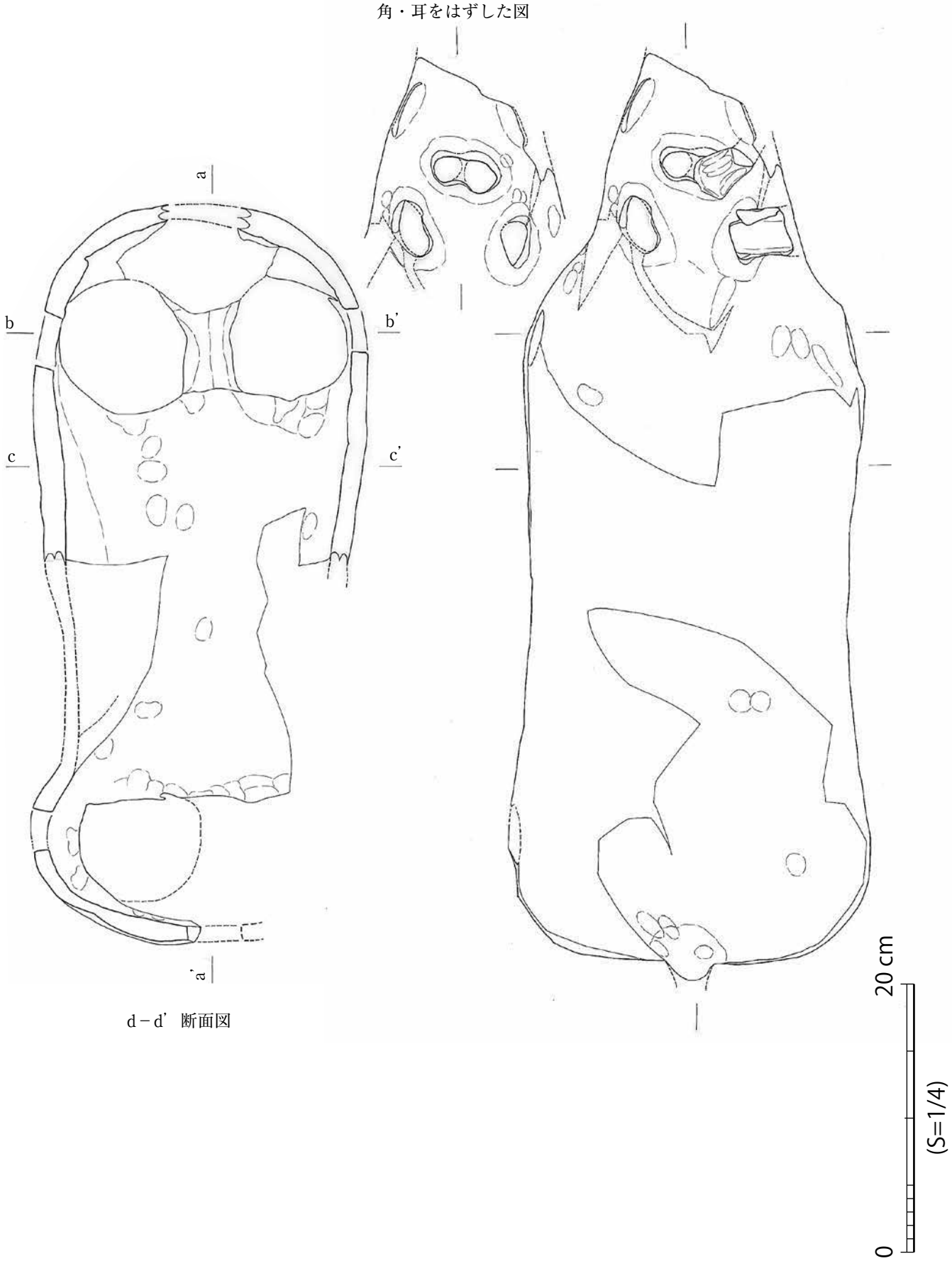


図 4-59　東造出　牛形埴輪 1-1③

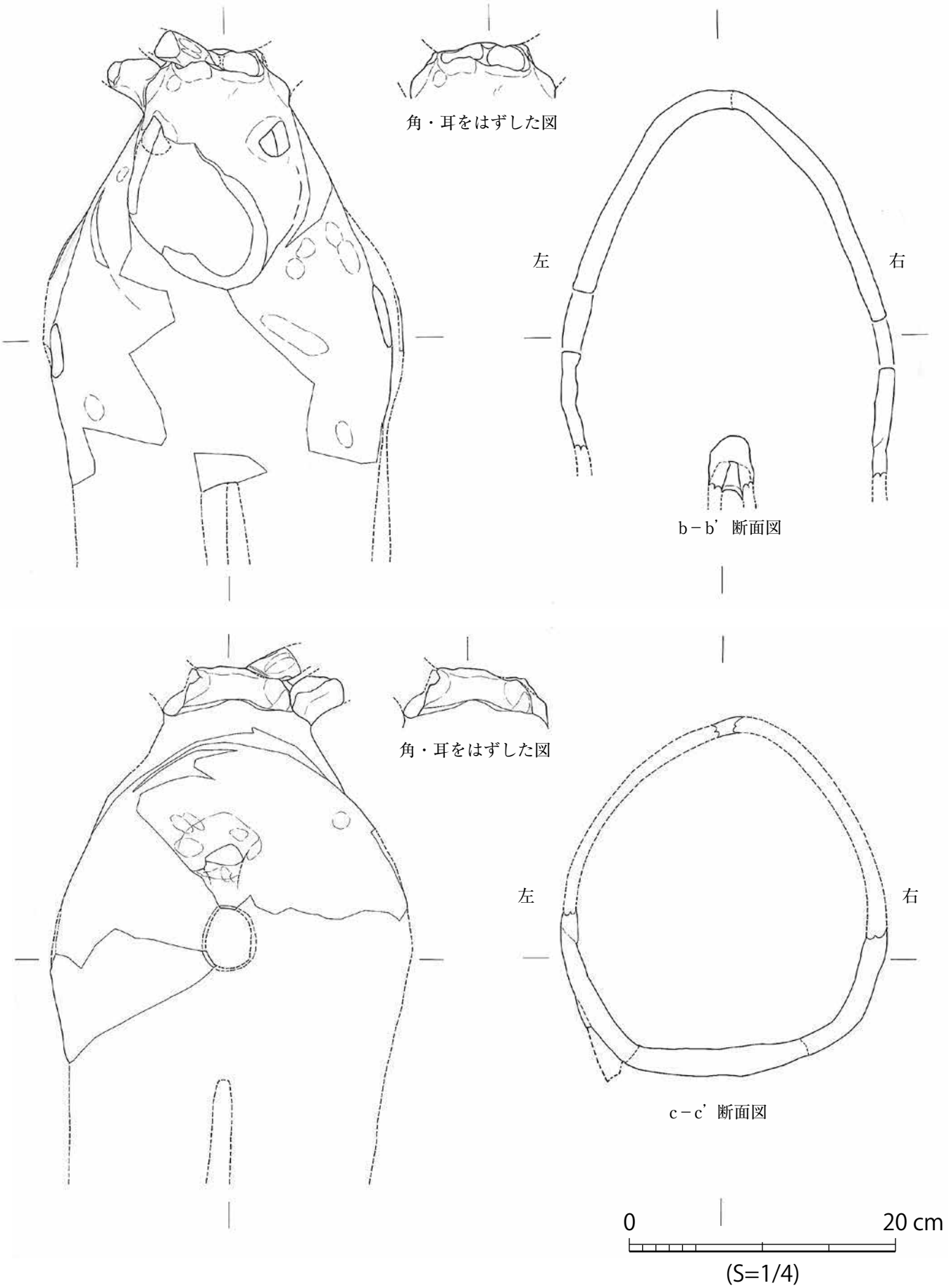


図 4-60　東造出　牛形埴輪 1-1④

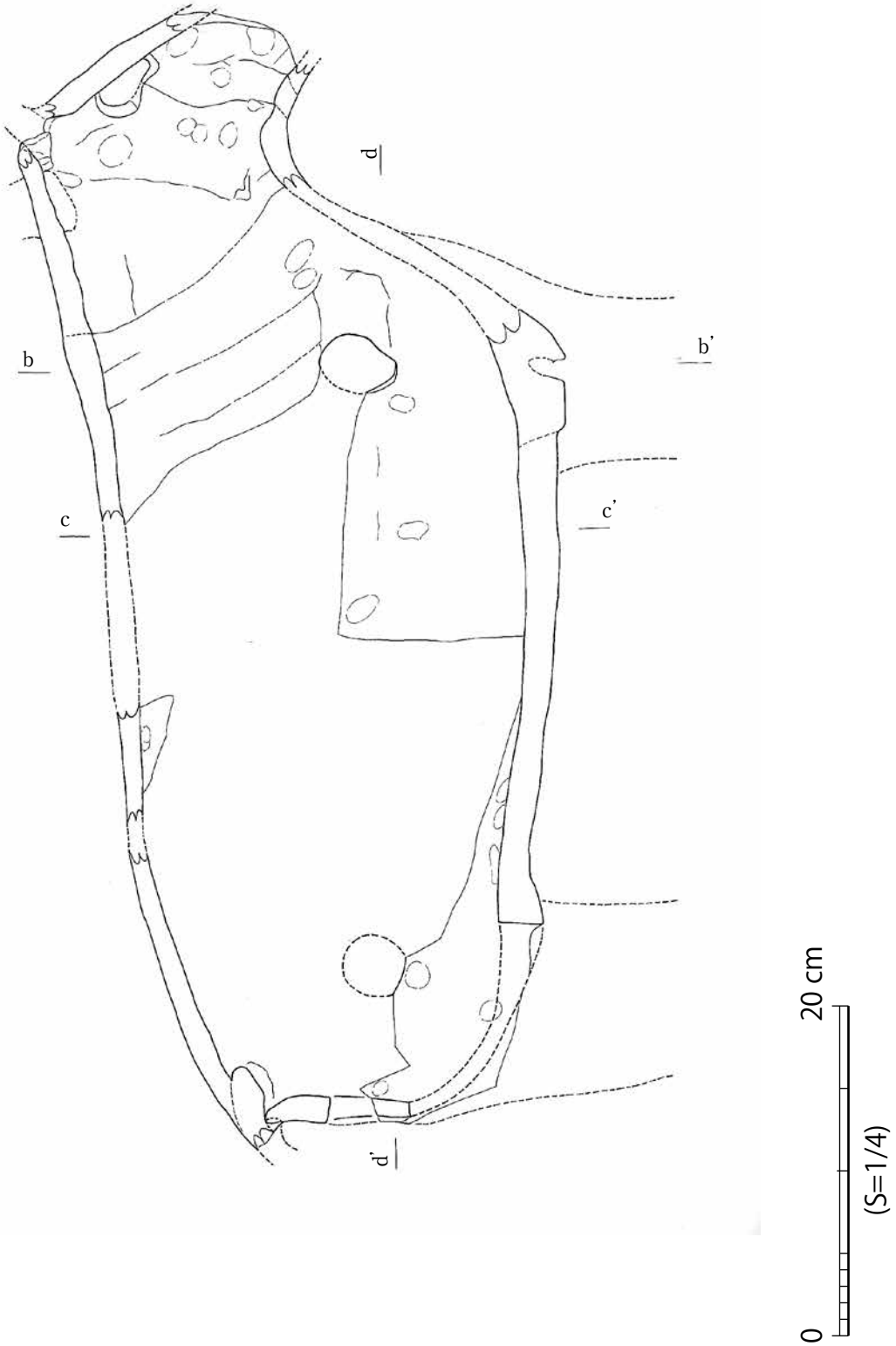


図 4-61　東造出　牛形埴輪 1-1⑤

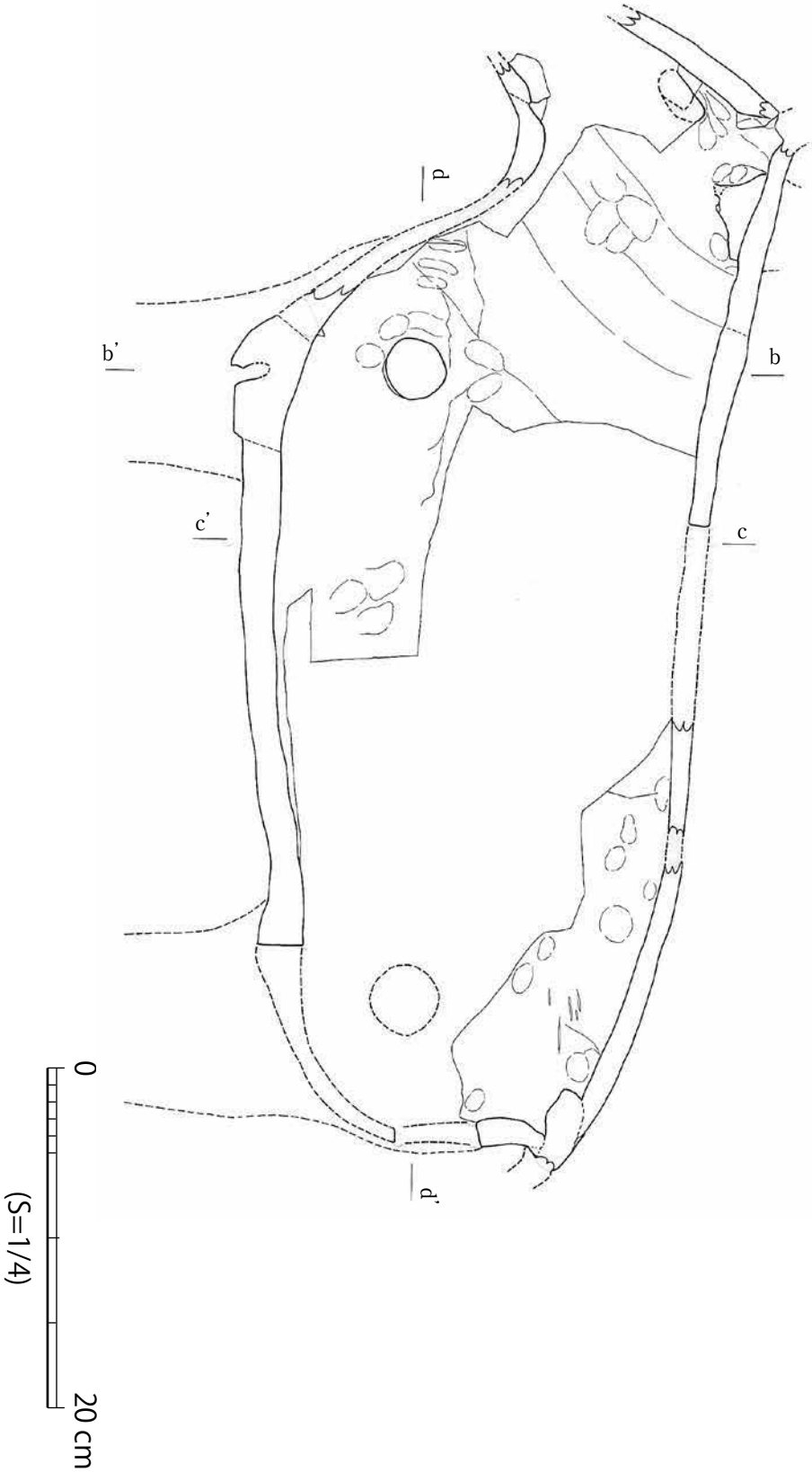


図 4-62　東造出　牛形埴輪 1-1⑥

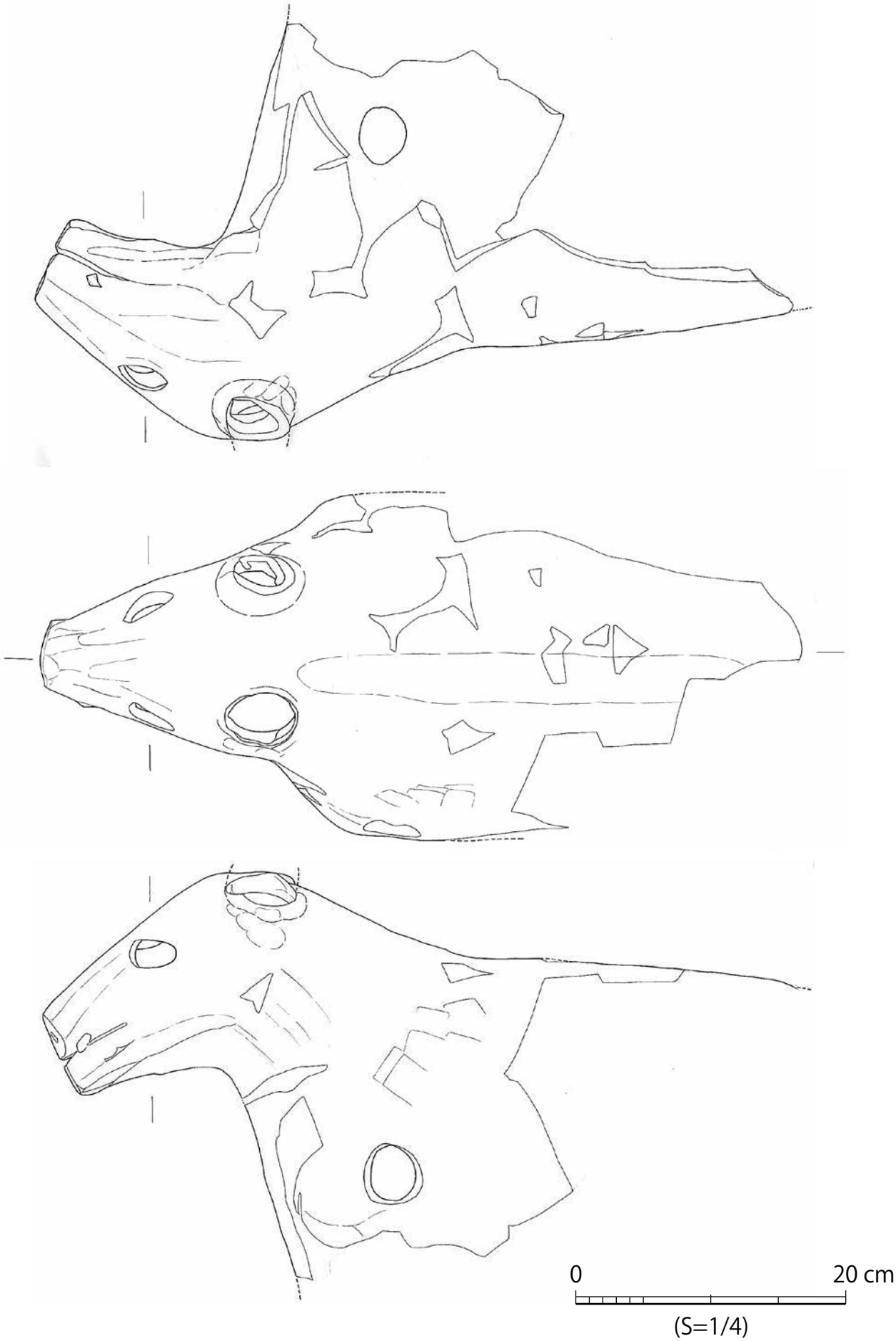


図 4-63　東造出　猪形埴輪 1-1①

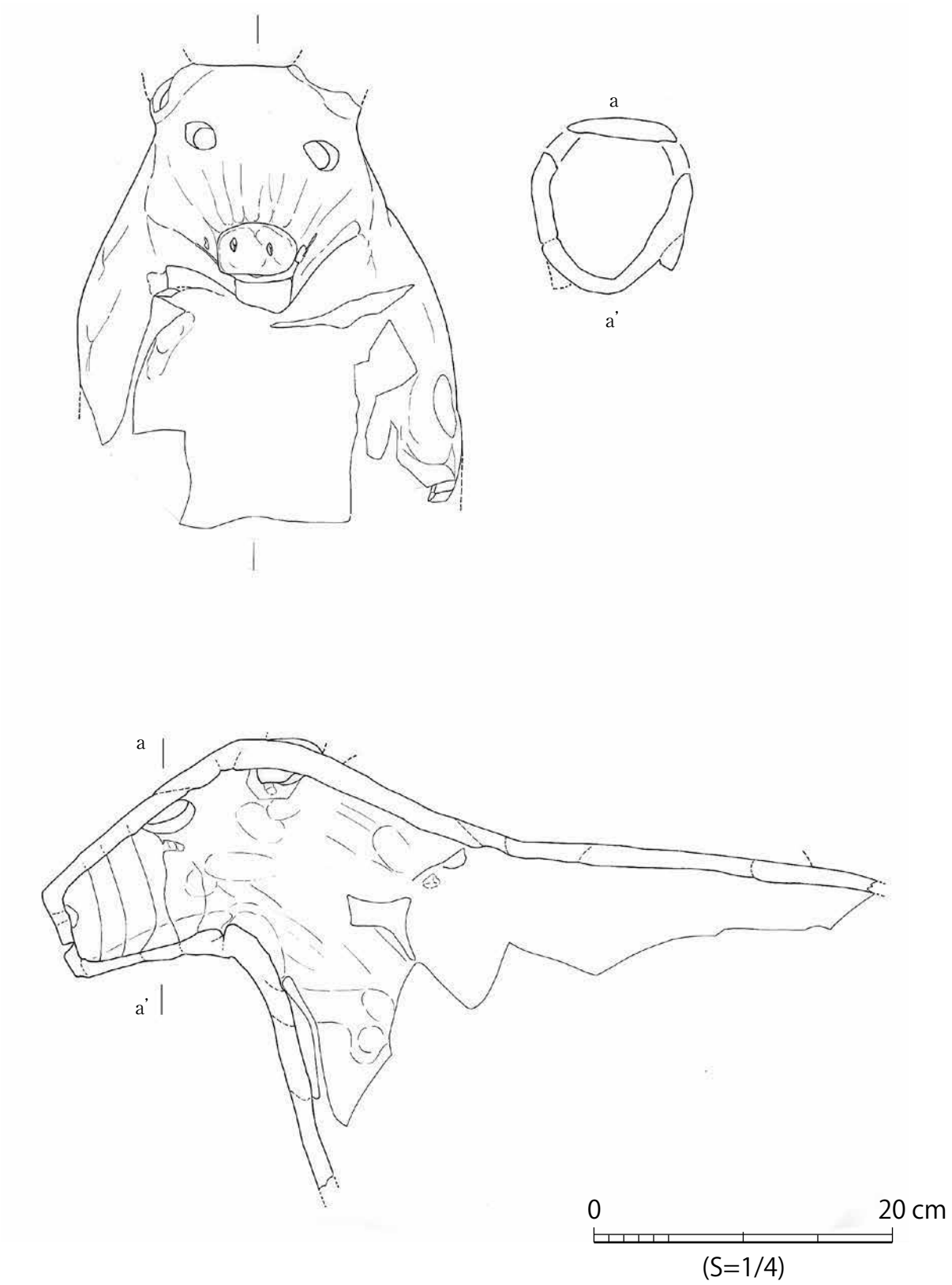


図 4-64　東造出　猪形埴輪 1-1②

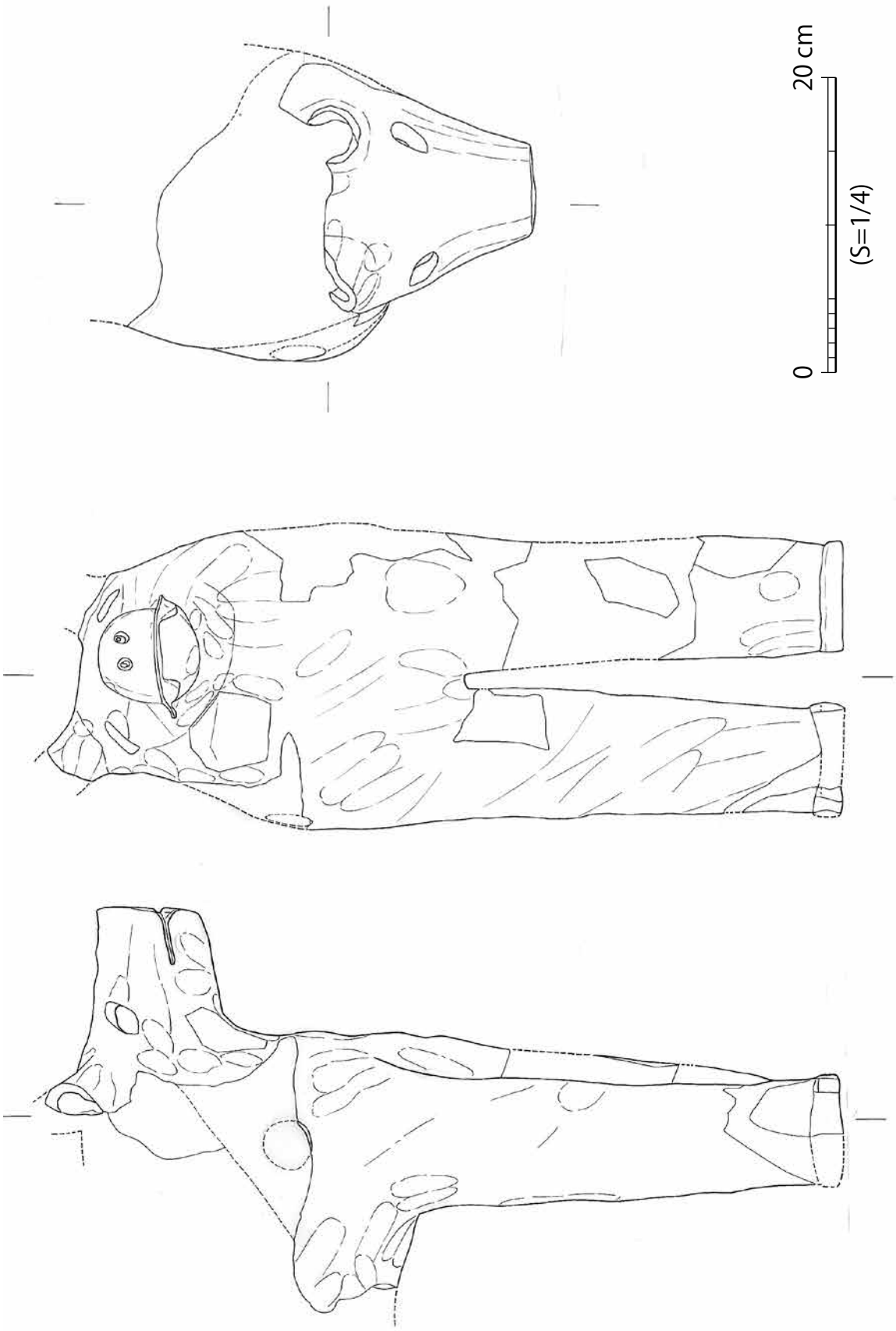


図 4-65　東造出　犬形埴輪 1-1①

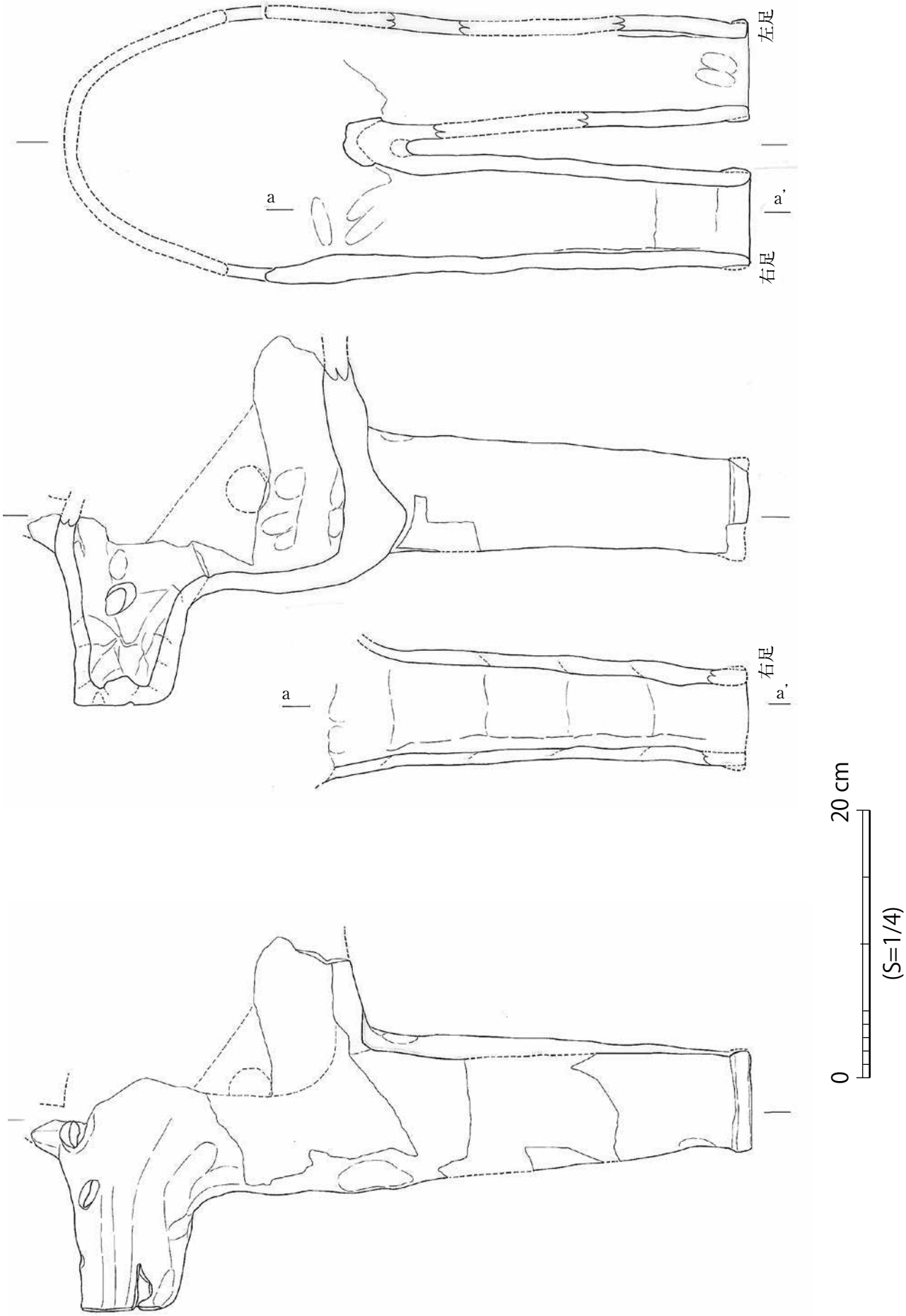


図 4-66　東造出　犬形埴輪 1-1②

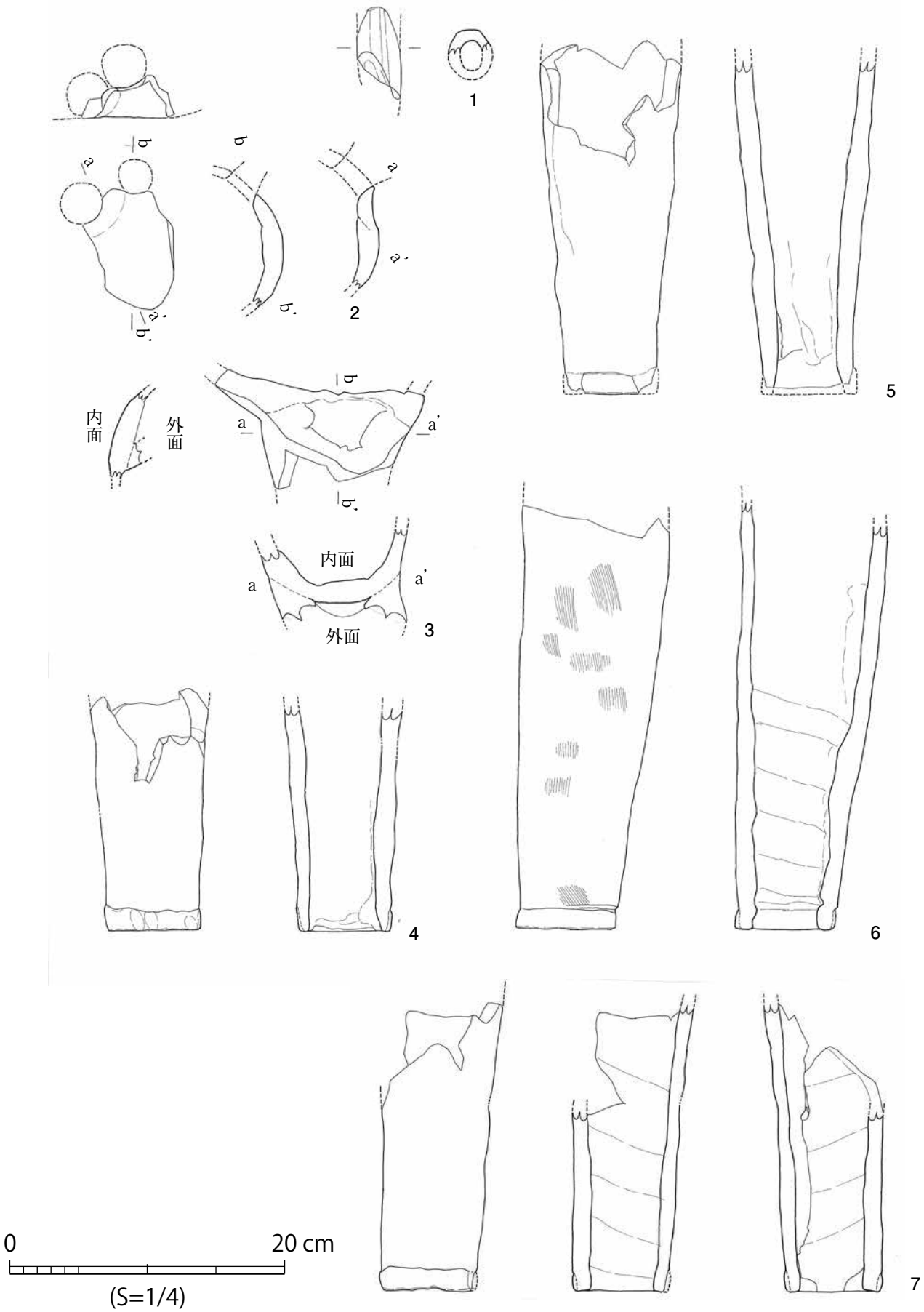
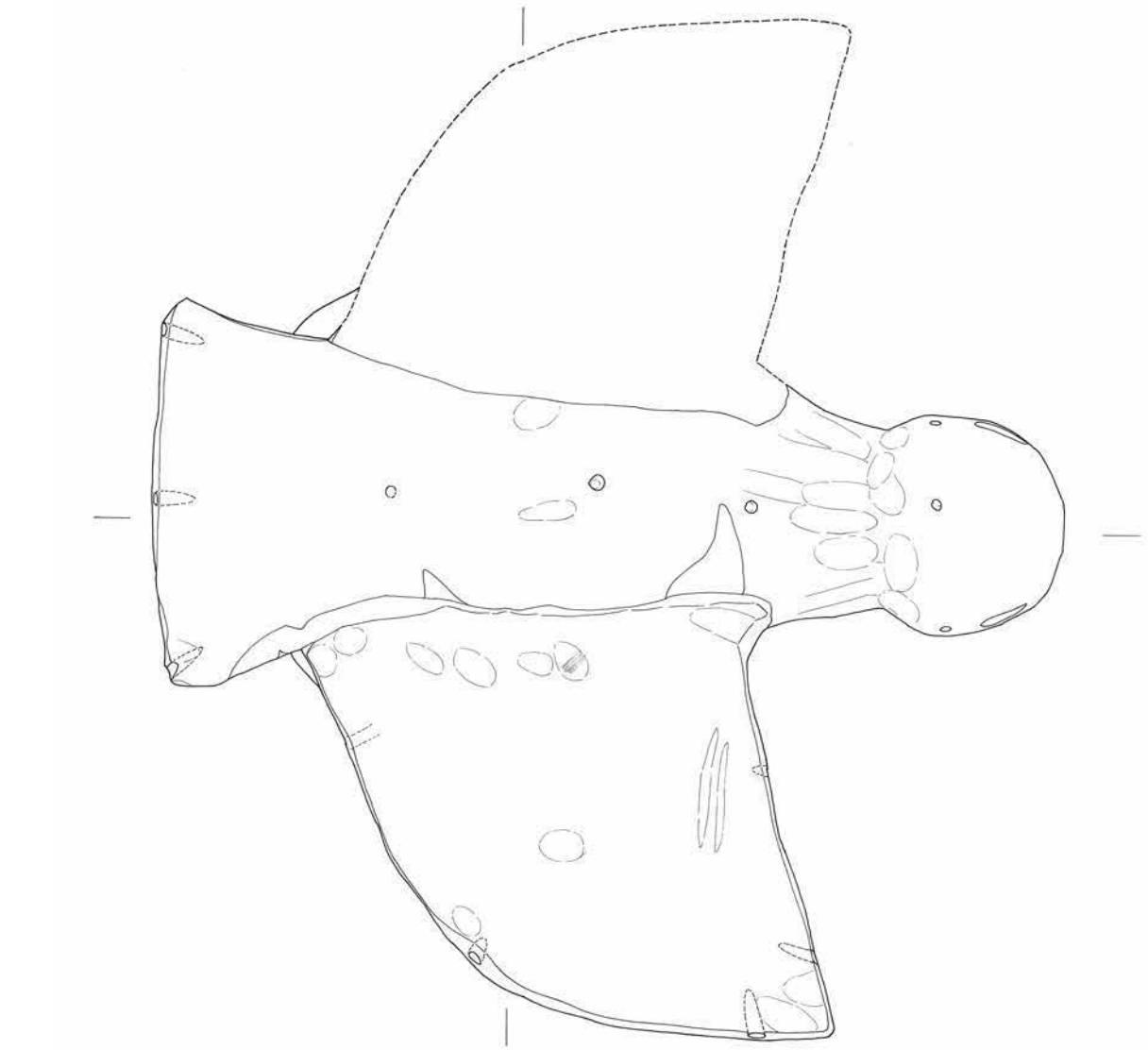


図 4-67　東造出　動物埴輪



0　　20 cm

(S=1/4)

図 4-68　東造出　翼を広げた鳥形埴輪 1-1①

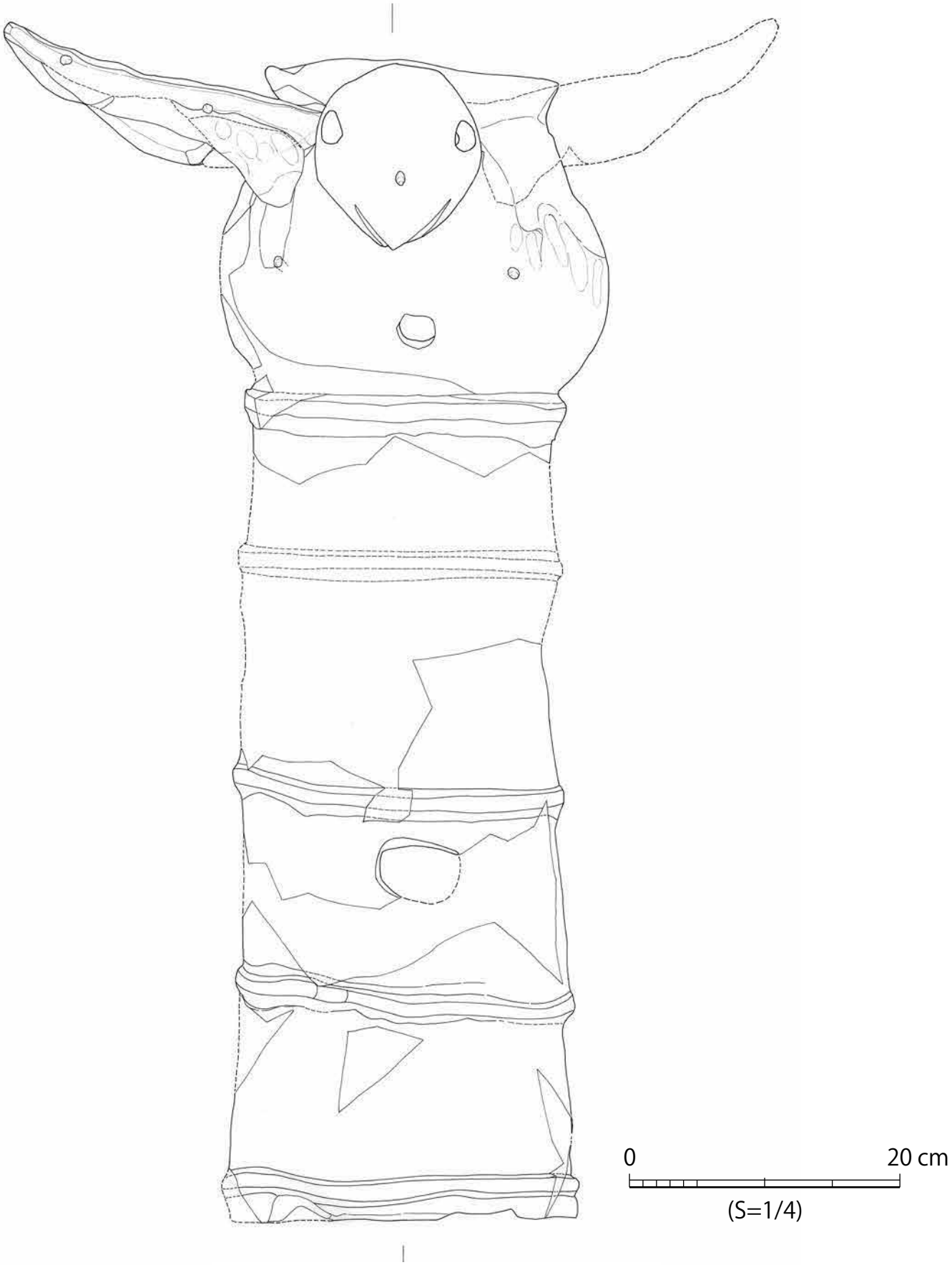


図 4-69　東造出　翼を広げた鳥形埴輪 1-1②

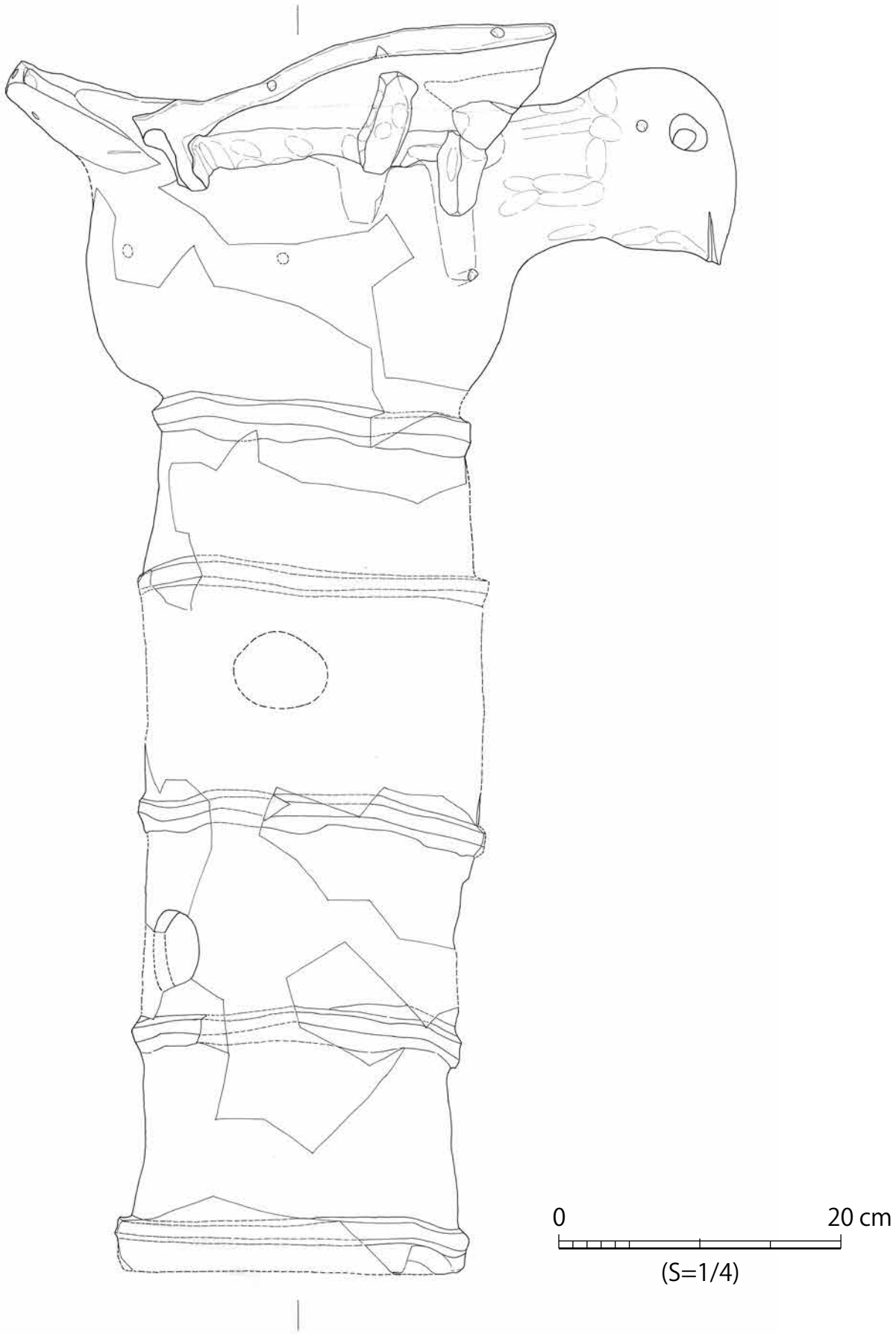


図 4-70　東造出　翼を広げた鳥形埴輪 1-1③

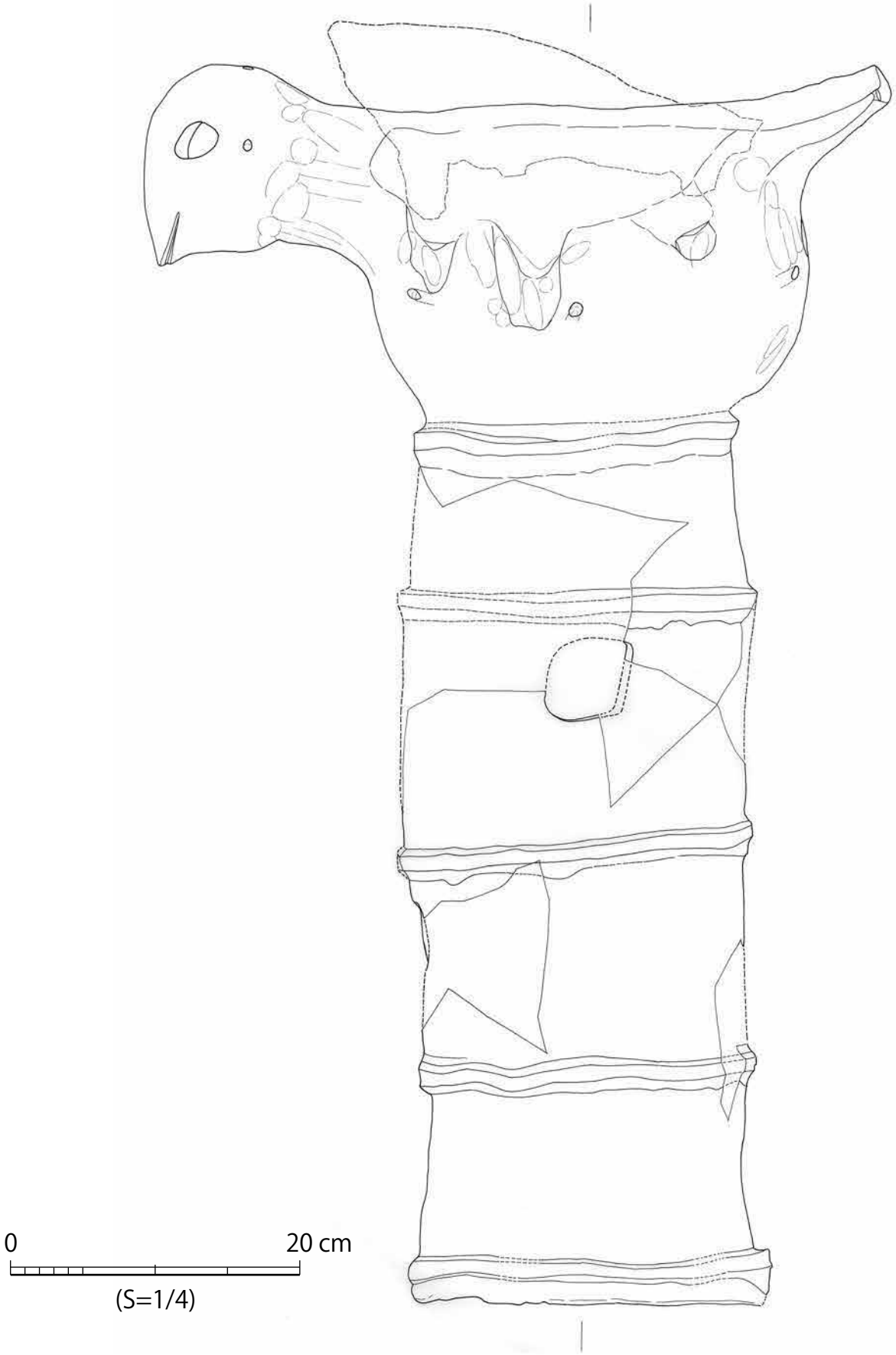


図 4-71　東造出　翼を広げた鳥形埴輪 1-1④

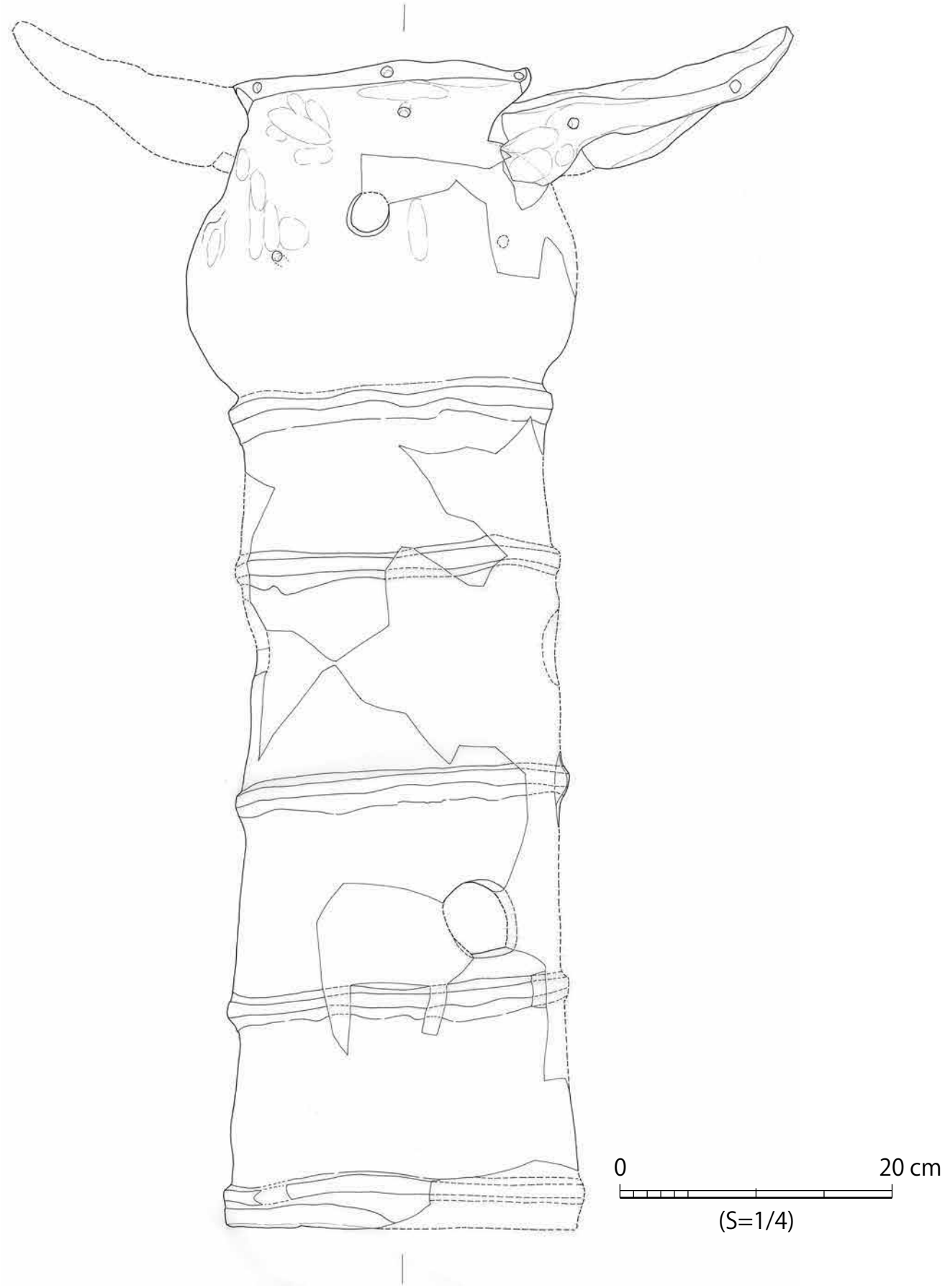


図 4-72　東造出　翼を広げた鳥形埴輪 1-1⑤

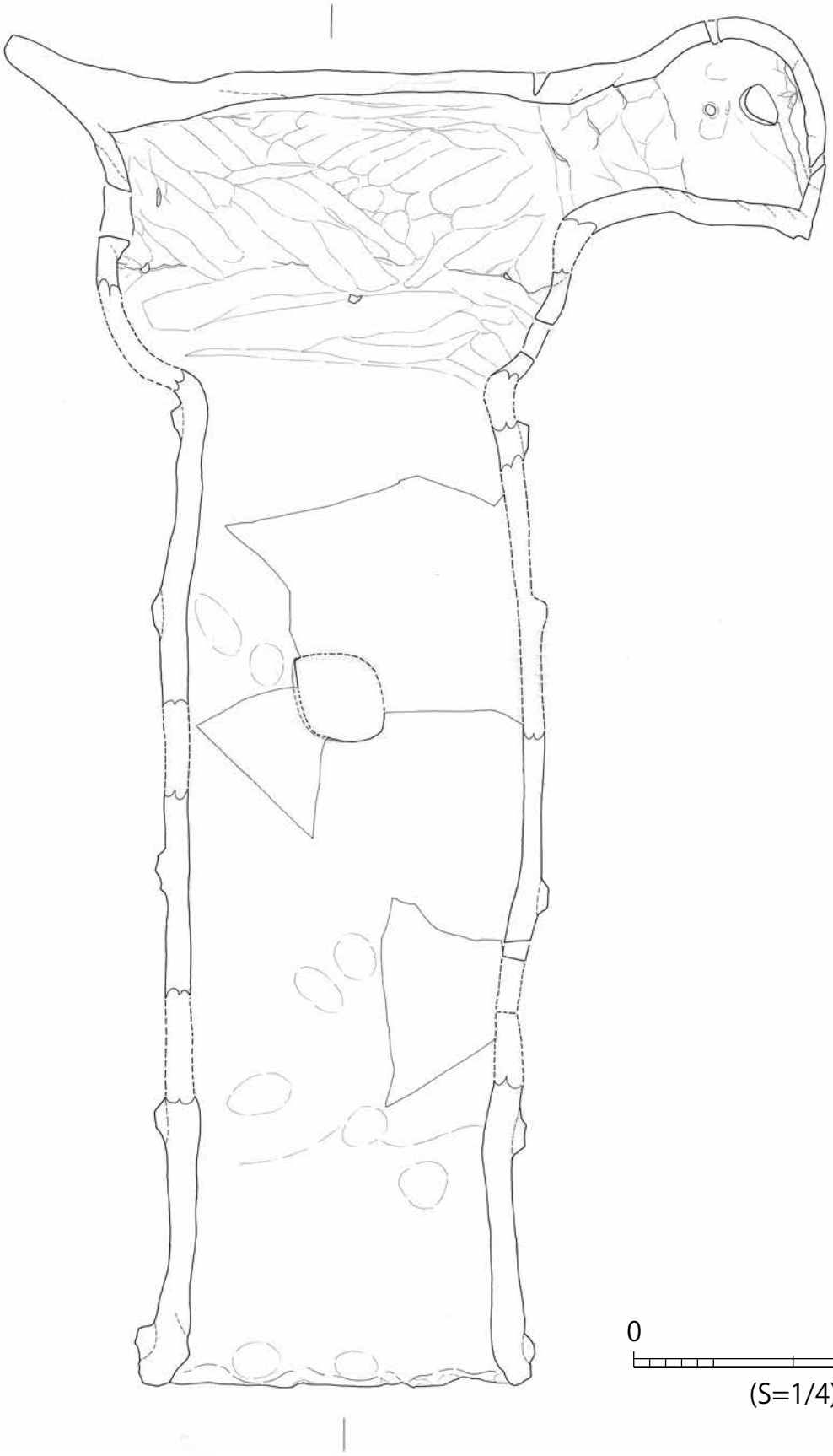


図 4-73　東造出　翼を広げた鳥形埴輪 1-1⑥

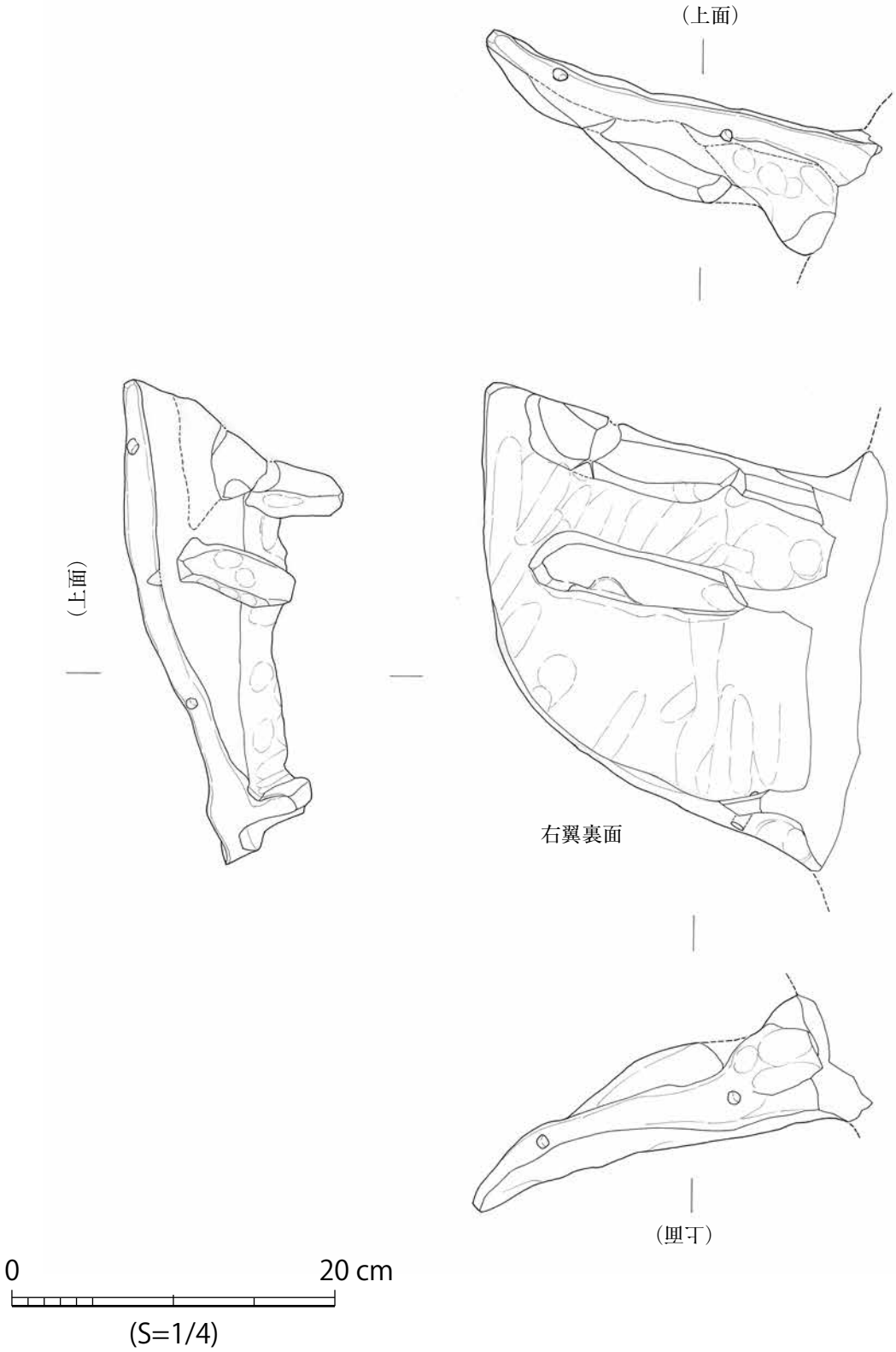


図 4-74　東造出　翼を広げた鳥形埴輪 1-1⑦

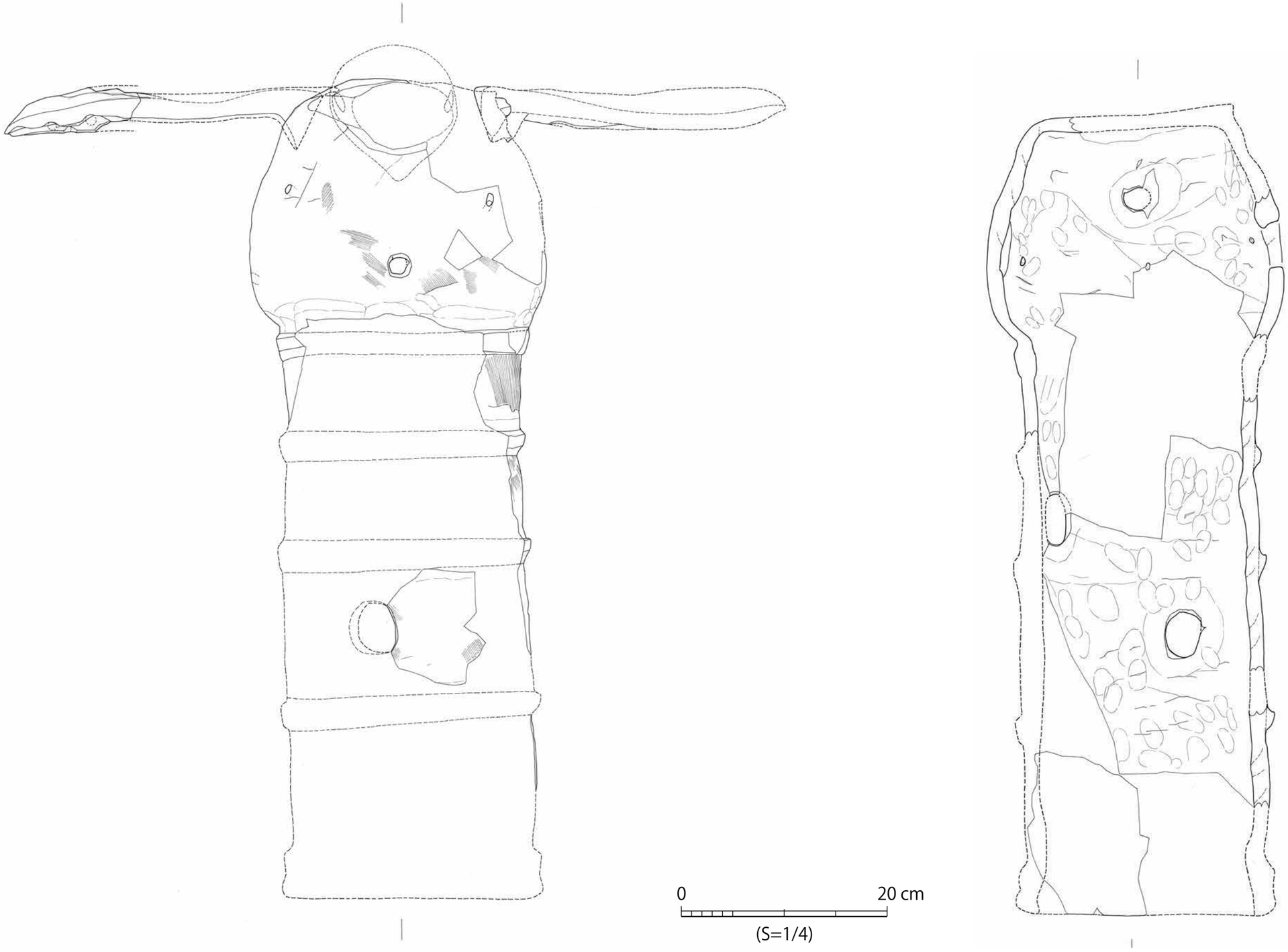


図 4-75　東造出　翼を広げた鳥形埴輪 1-2①

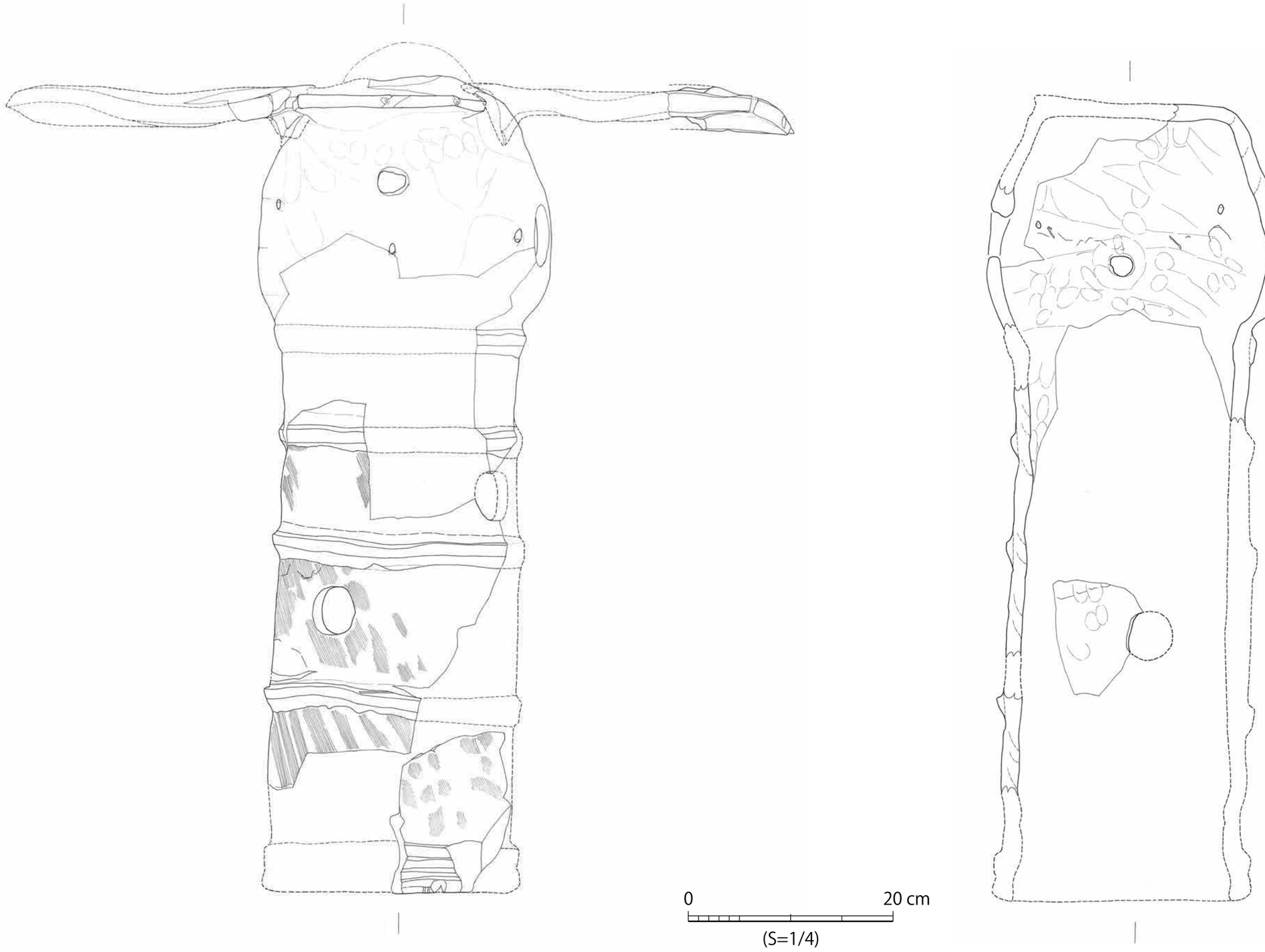


図 4-76　東造出　翼を広げた鳥形埴輪 1-2②

図 4-77　東造出　翼を広げた鳥形埴輪 1-2③

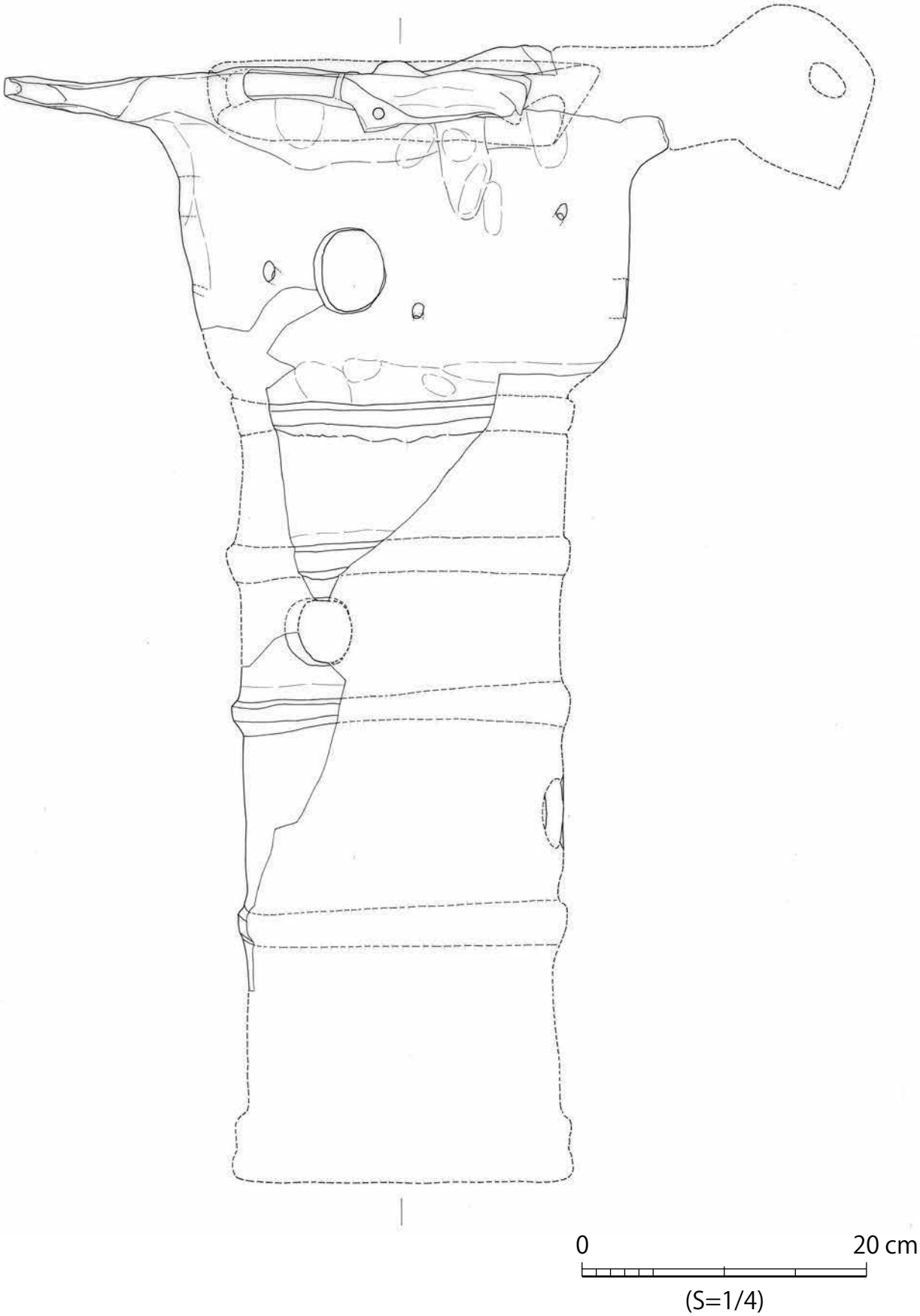


図 4-78　東造出　翼を広げた鳥形埴輪 1-2④

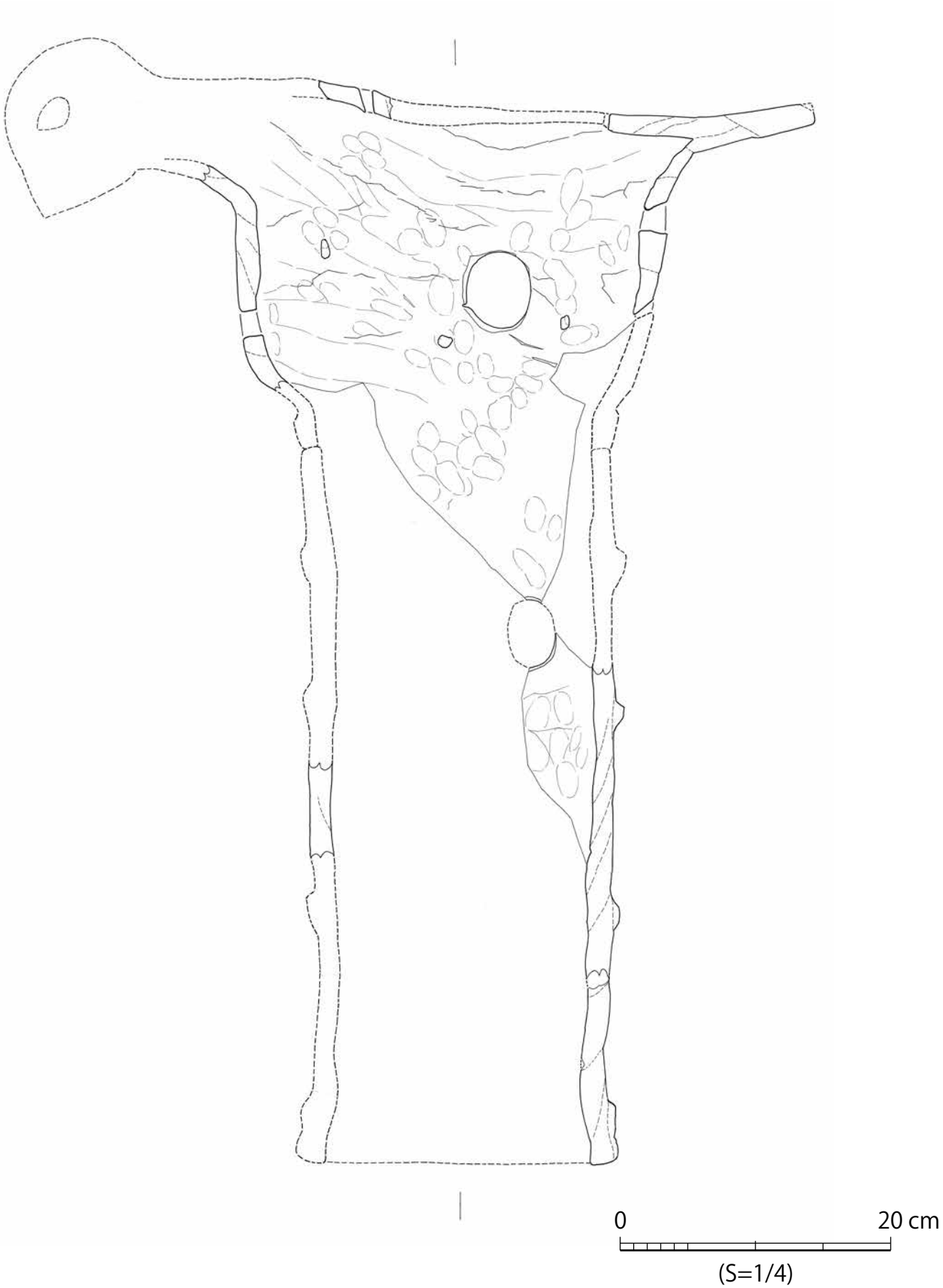


図 4-79　東造出　翼を広げた鳥形埴輪 1-2⑤

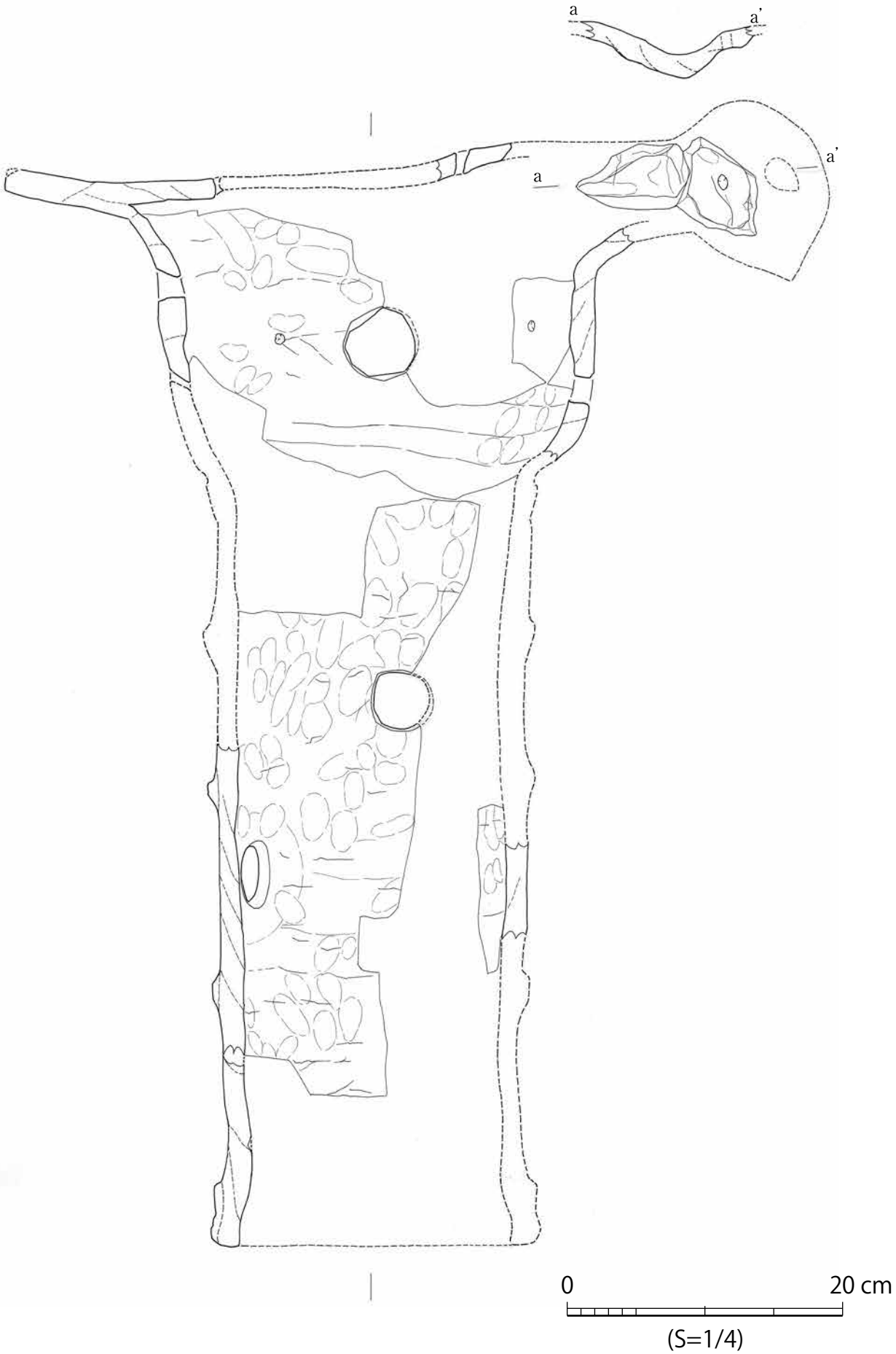


図 4-80　東造出　翼を広げた鳥形埴輪 1-2⑥

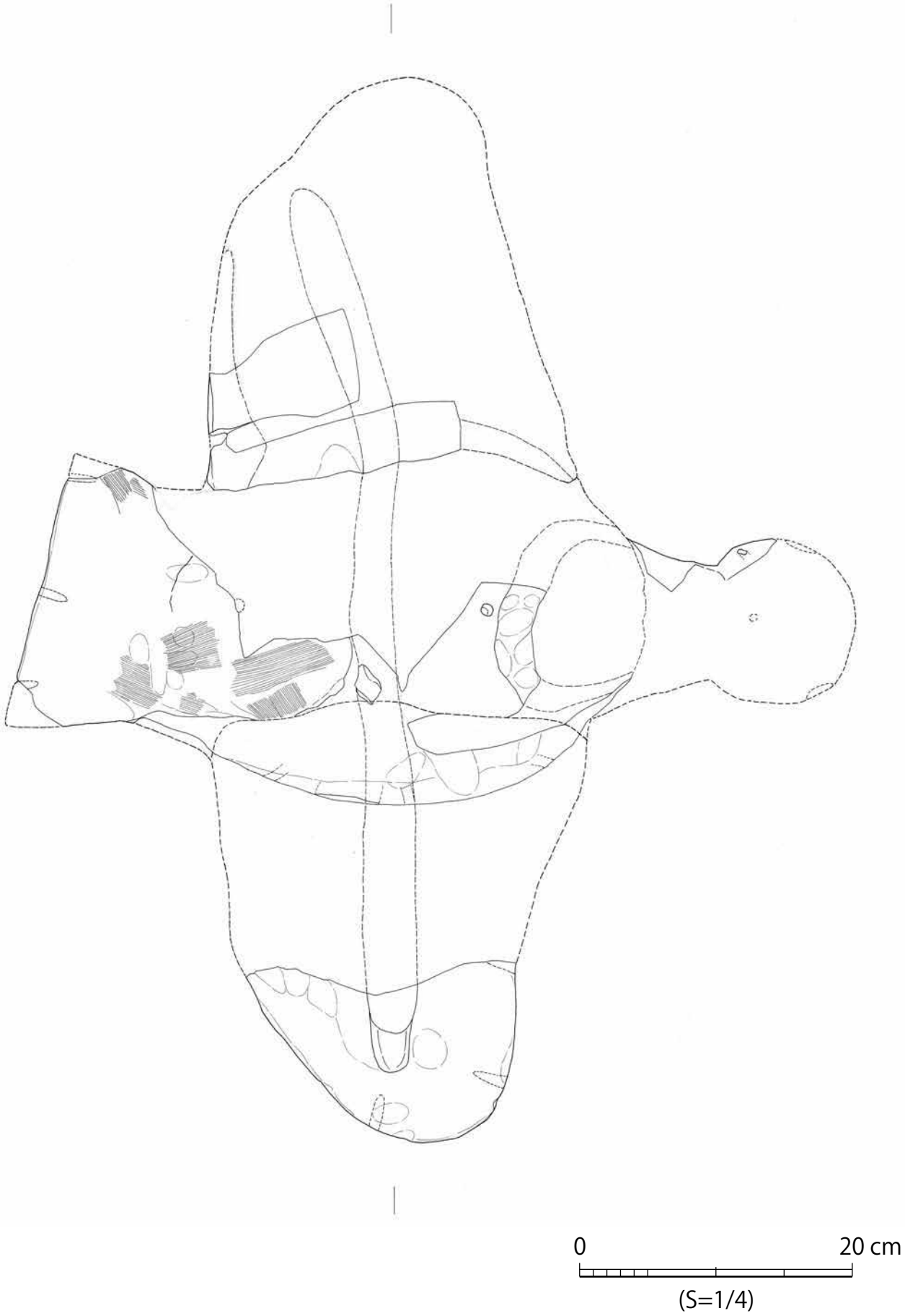


図 4-81　東造出　翼を広げた鳥形埴輪 1-2⑦

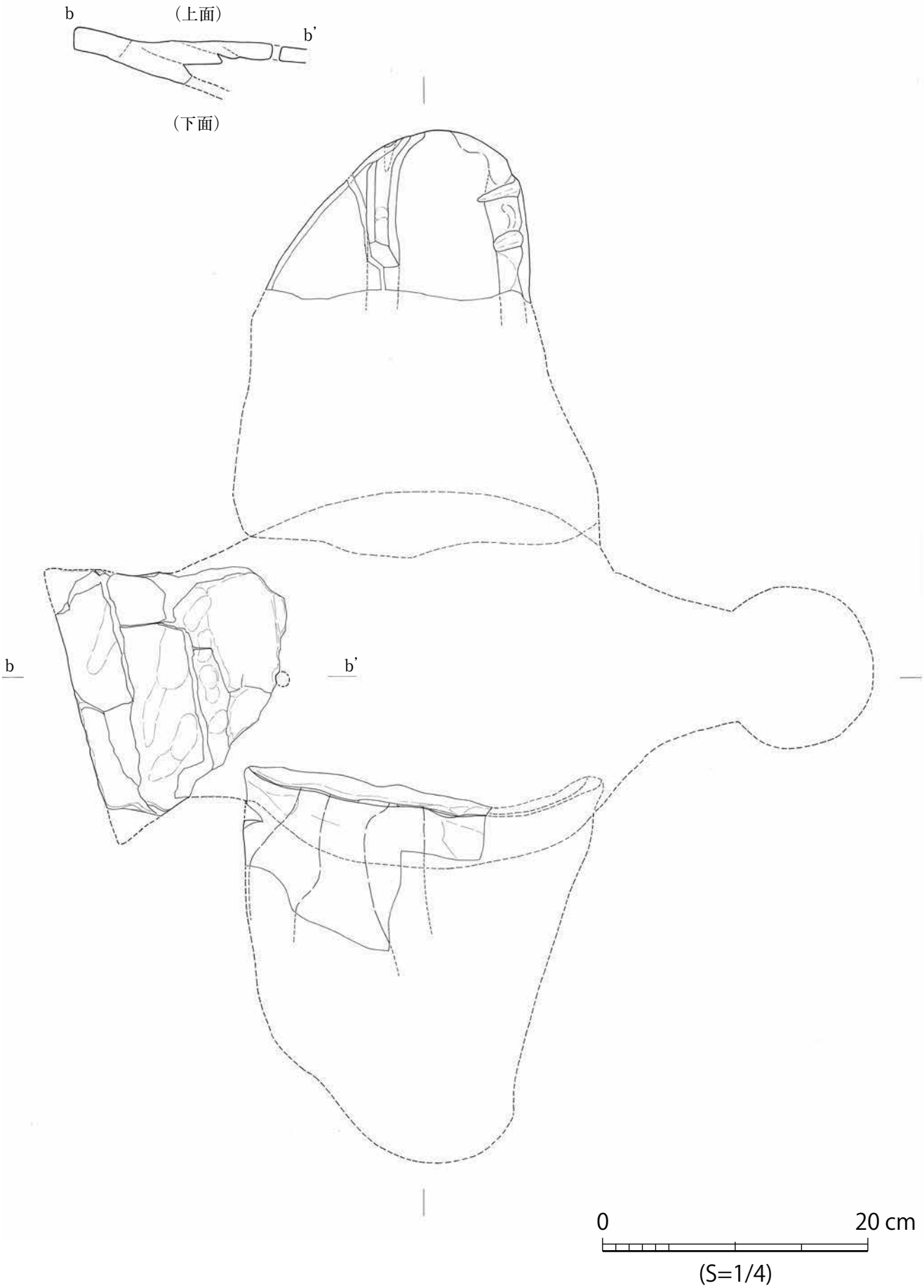


図 4-82　東造出　翼を広げた鳥形埴輪 1-2⑧（裏面）

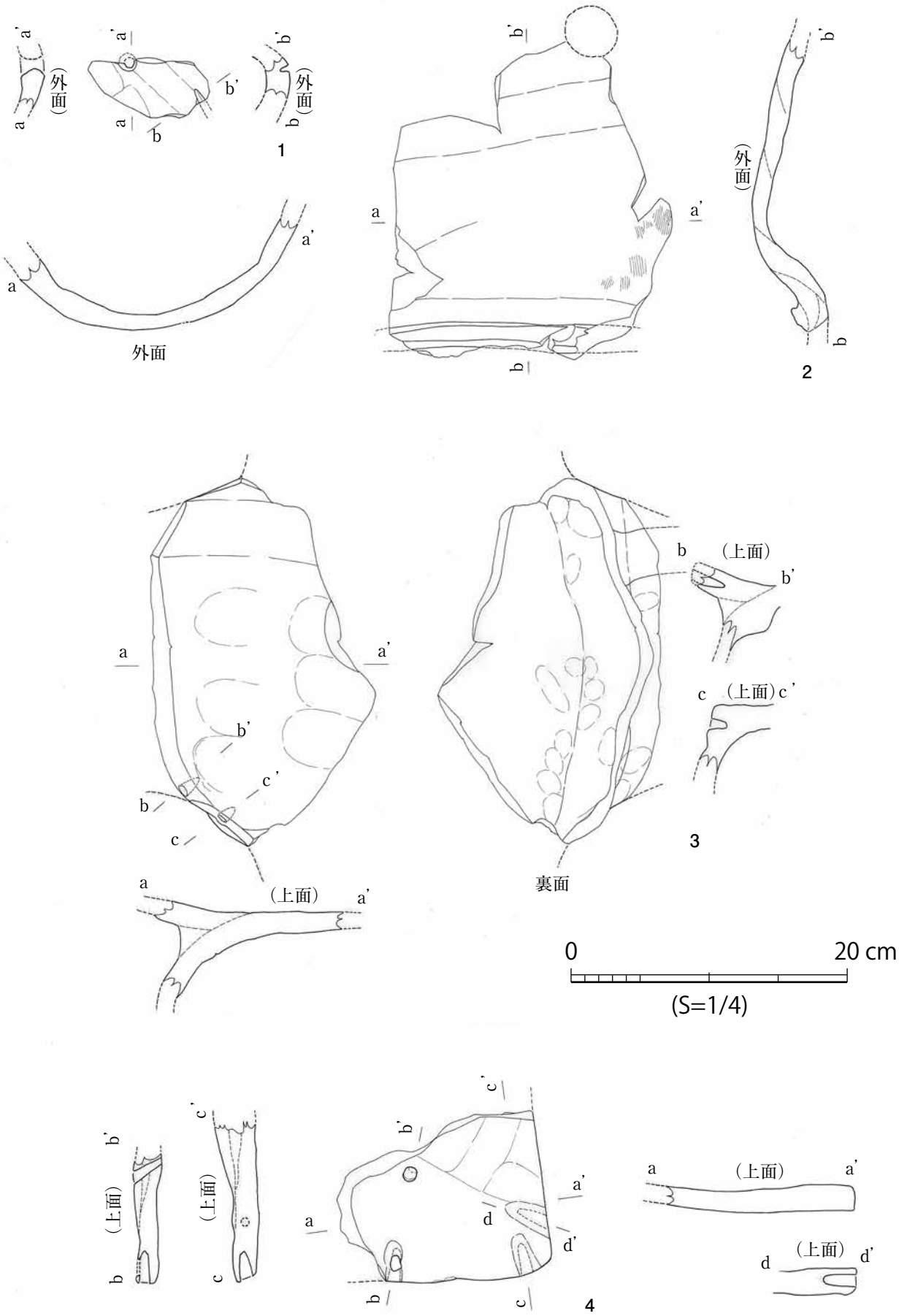


図 4-83　東造出　翼を広げた鳥形埴輪 1-3 ほか①

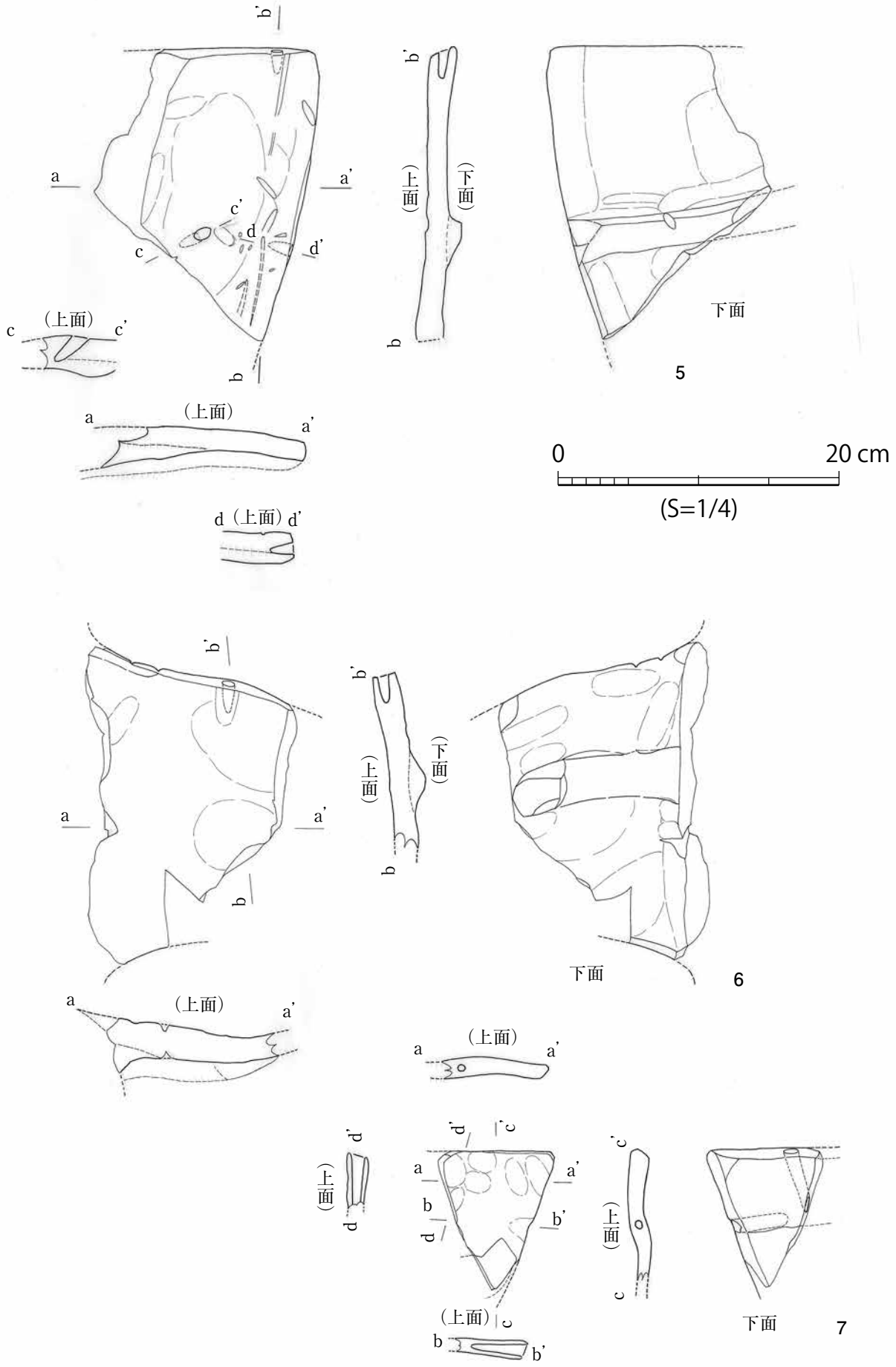


図 4-84　東造出　翼を広げた鳥形埴輪 1-3 ほか②

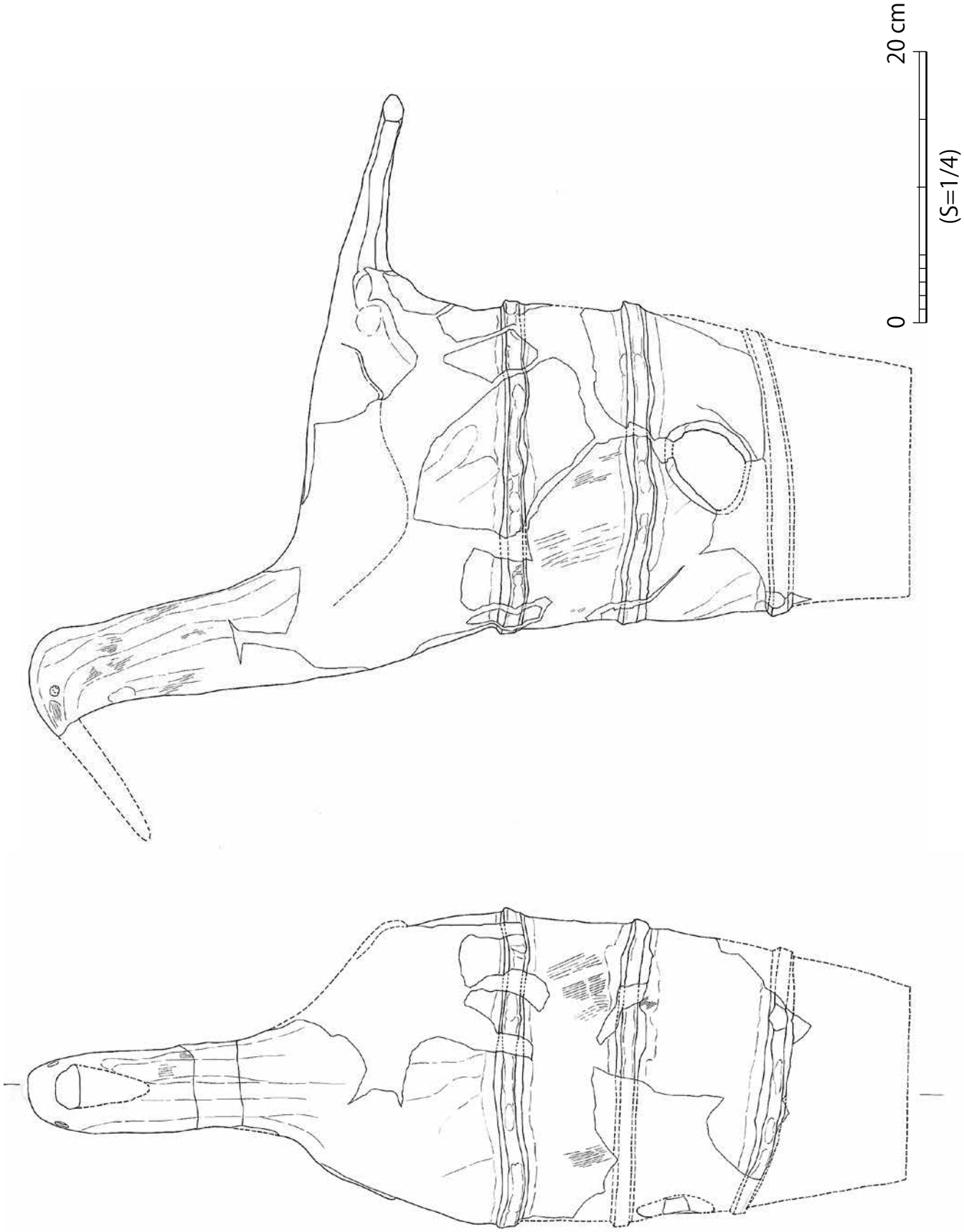


図 4-85　東造出　水鳥形埴輪 1-1①

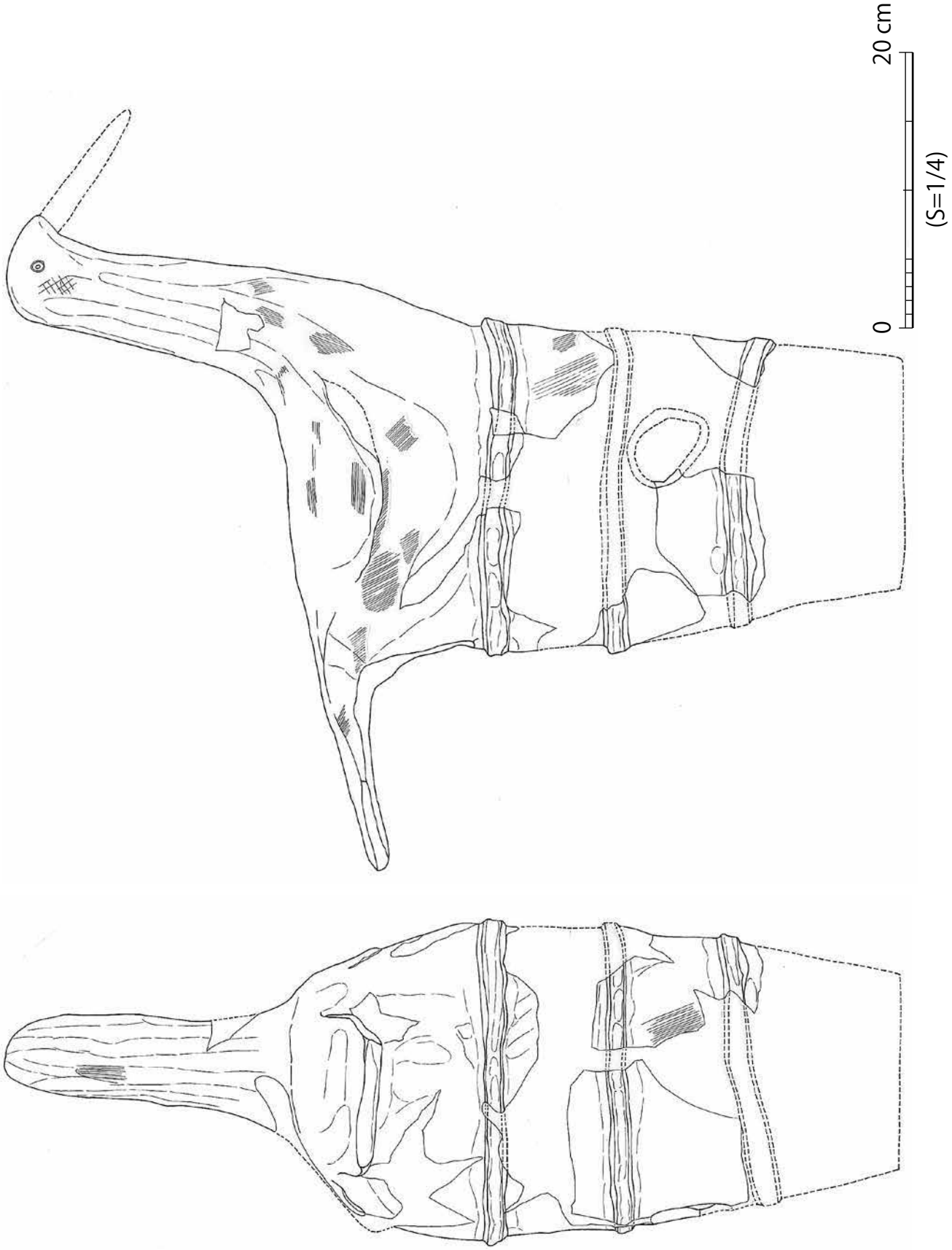


図 4-86　東造出　水鳥形埴輪 1-1②

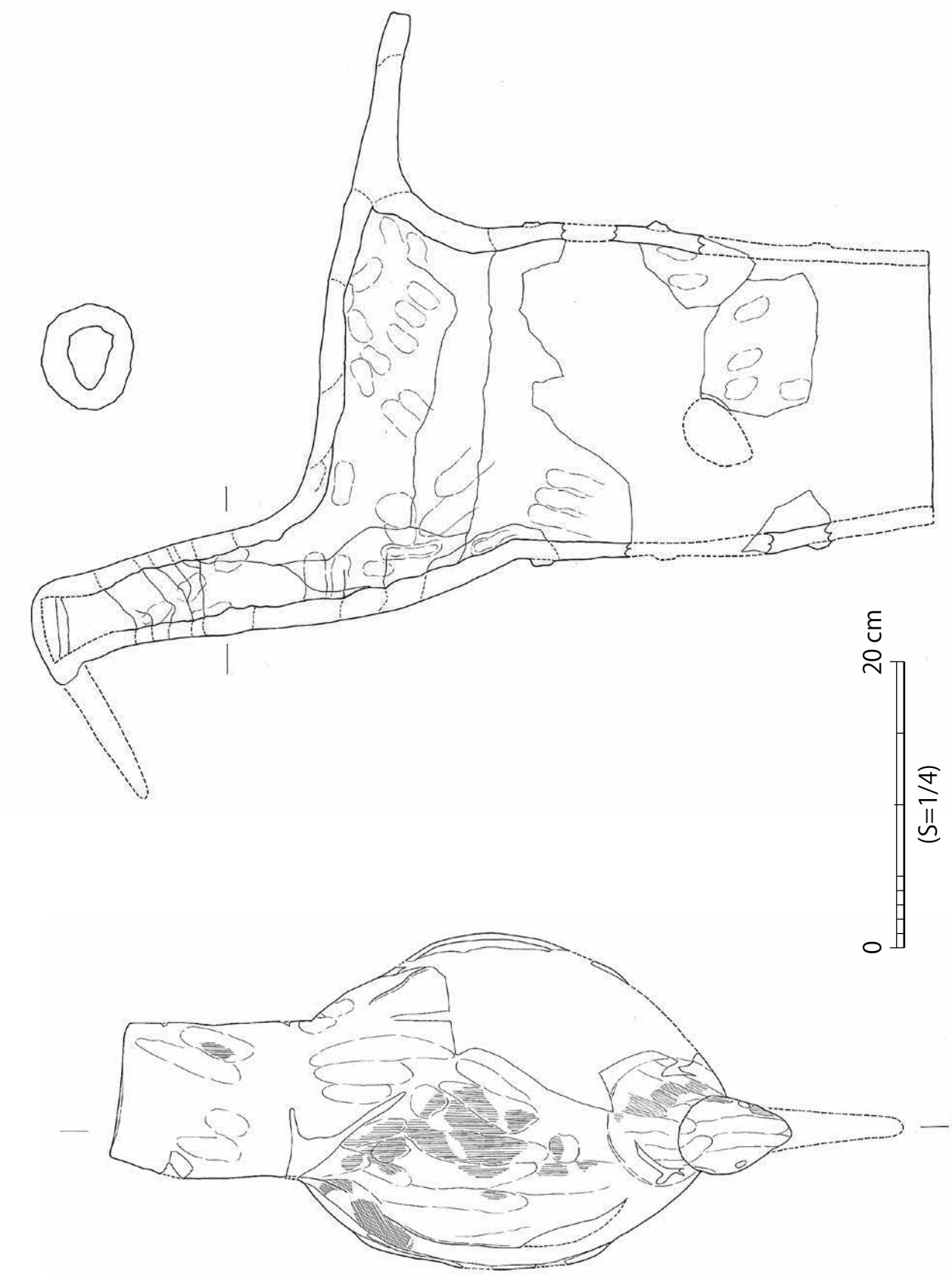


図 4-87　東造出　水鳥形埴輪 1-1③

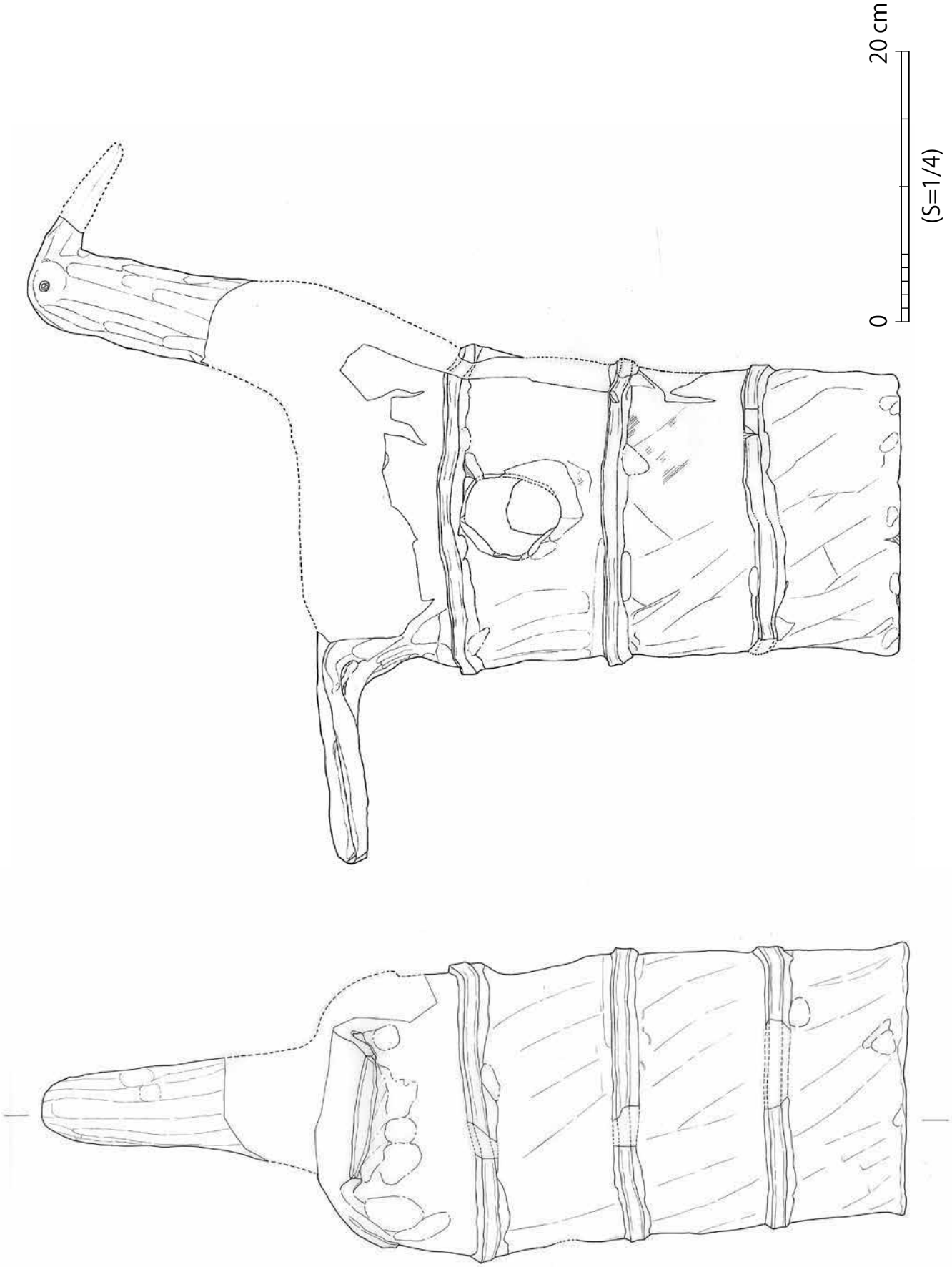


図 4-88　東造出　水鳥形埴輪 1-2①

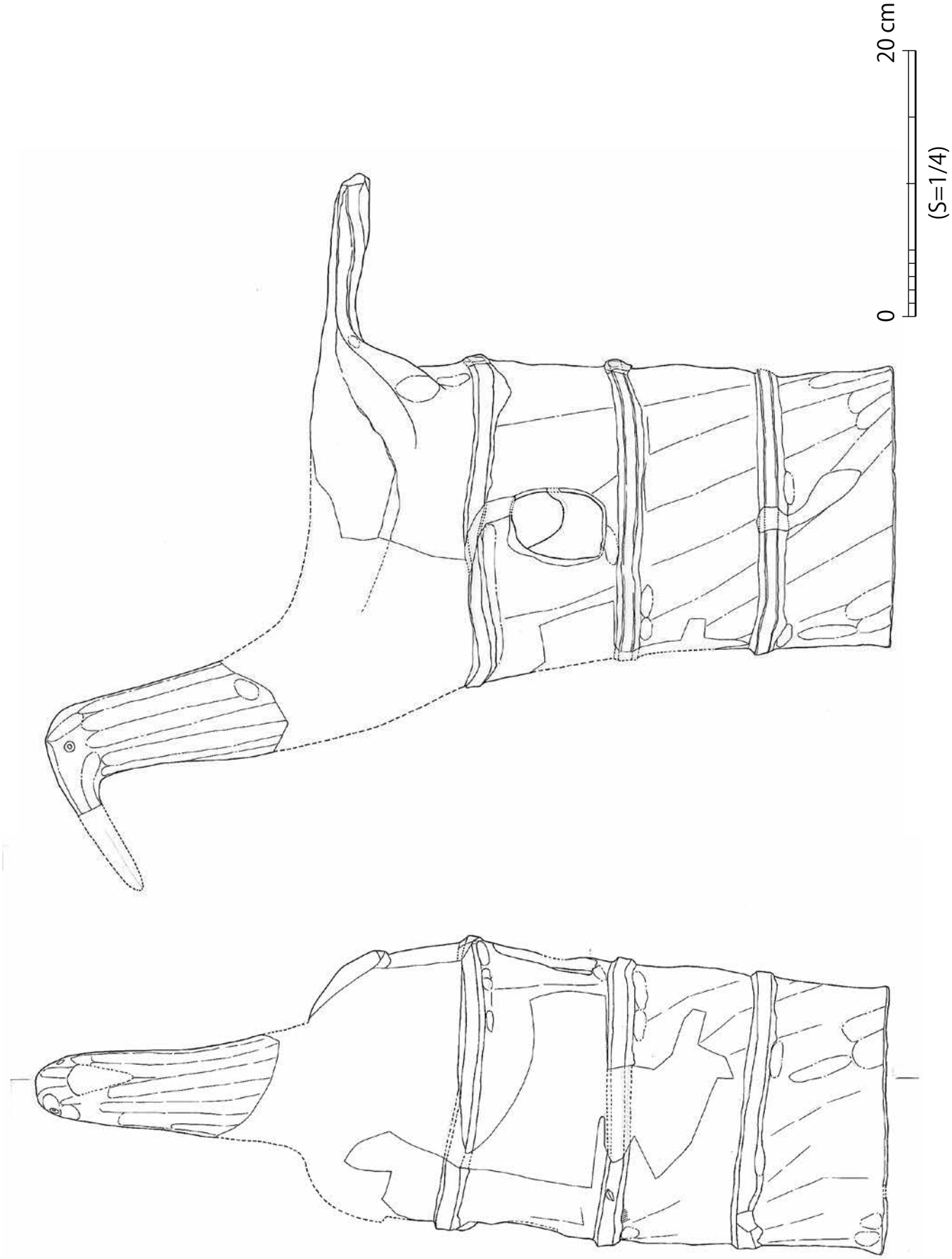


図 4-89　東造出　水鳥形埴輪 1-2②

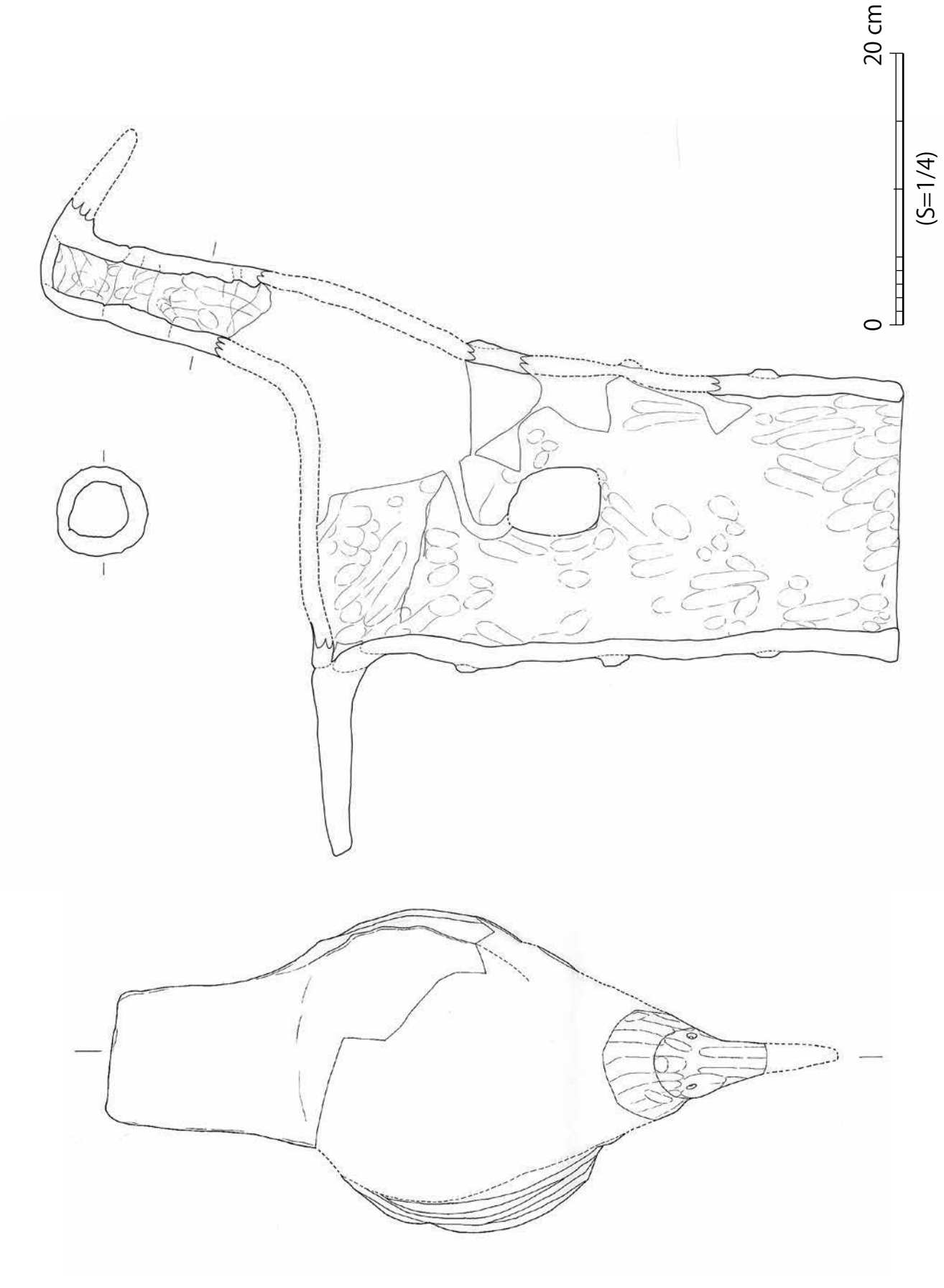


図 4-90　東造出　水鳥形埴輪 1-2③

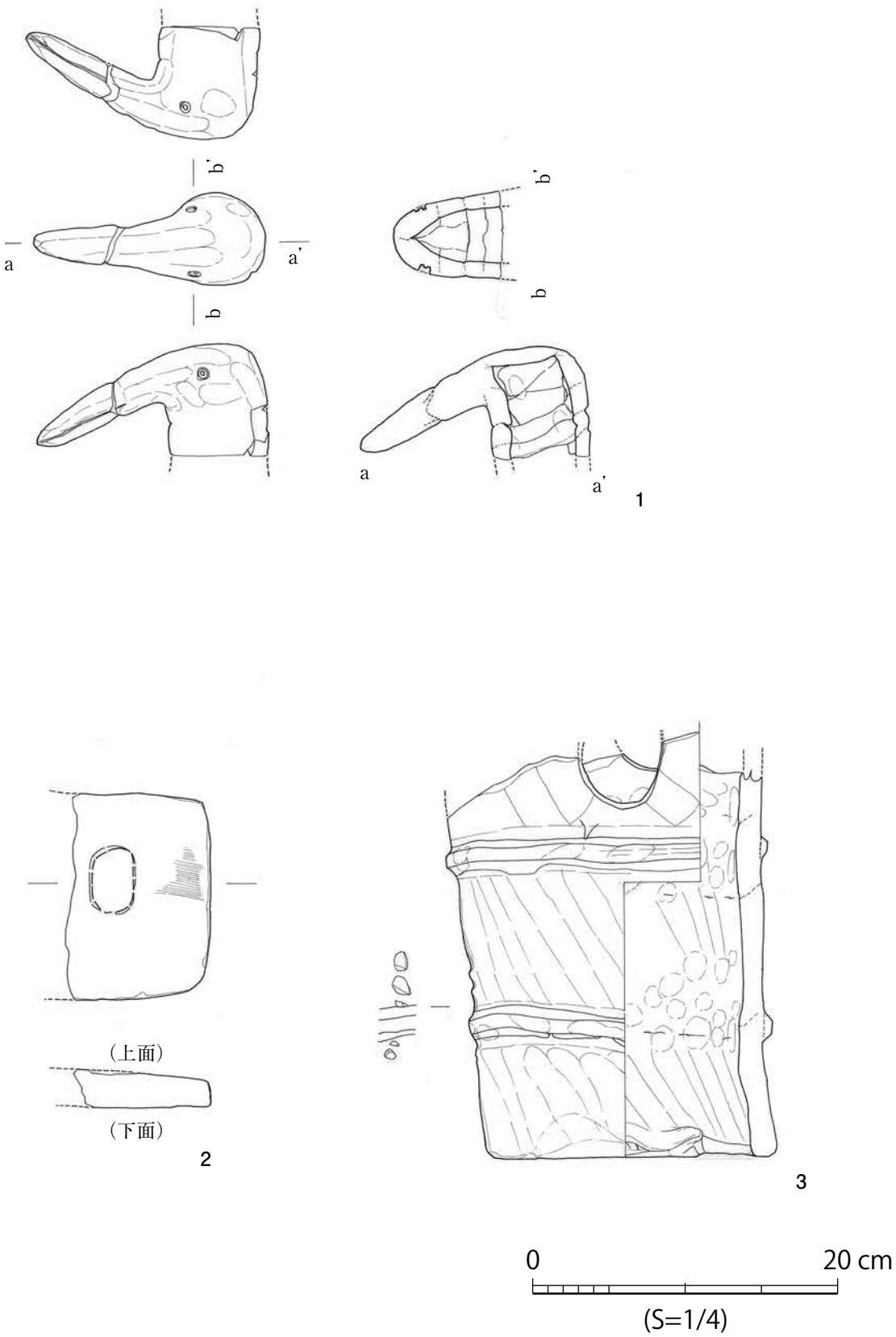


図 4-91　東造出　水鳥形埴輪 1-3

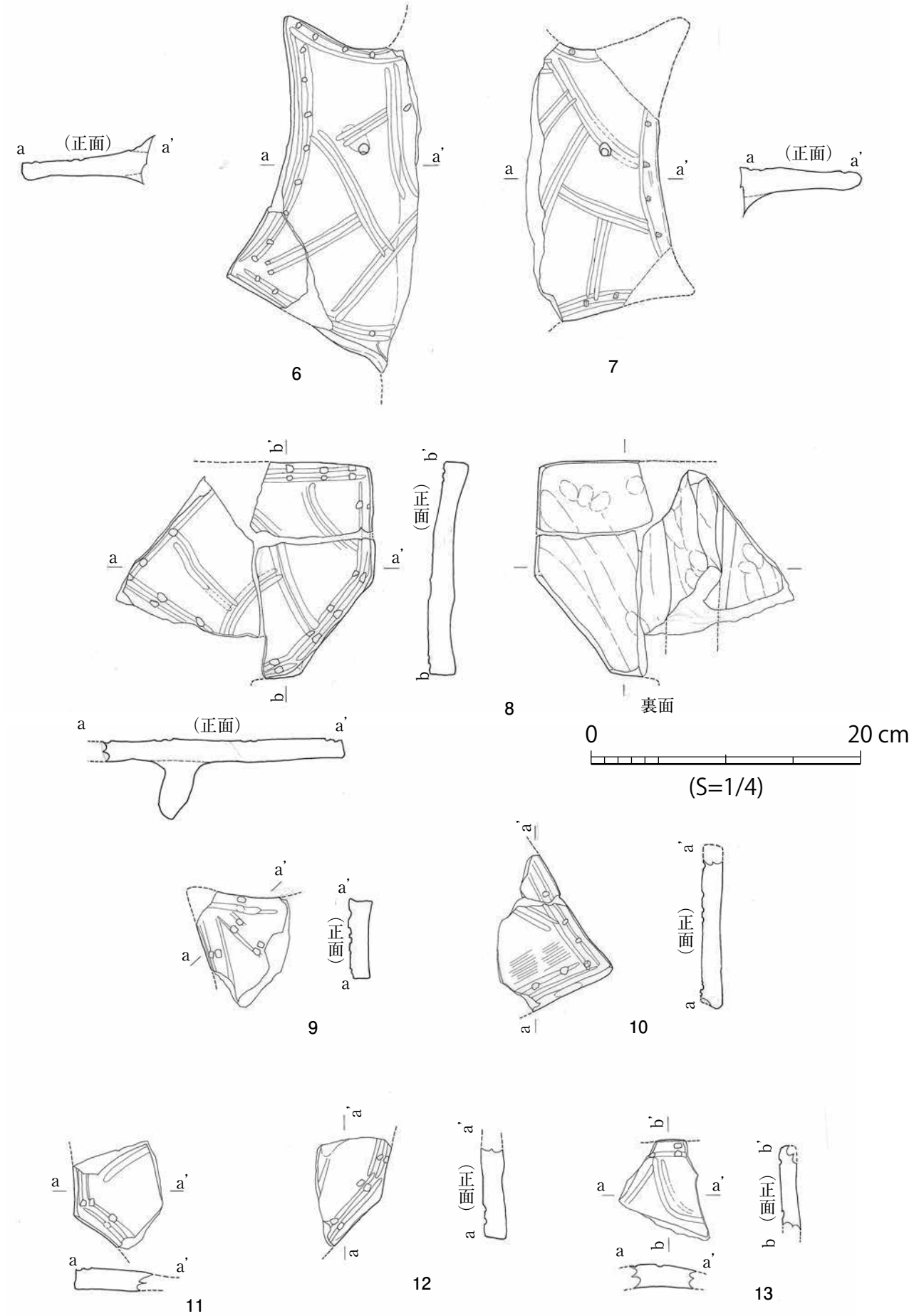


図 4-92　東造出　器財埴輪①(大刀・靫)

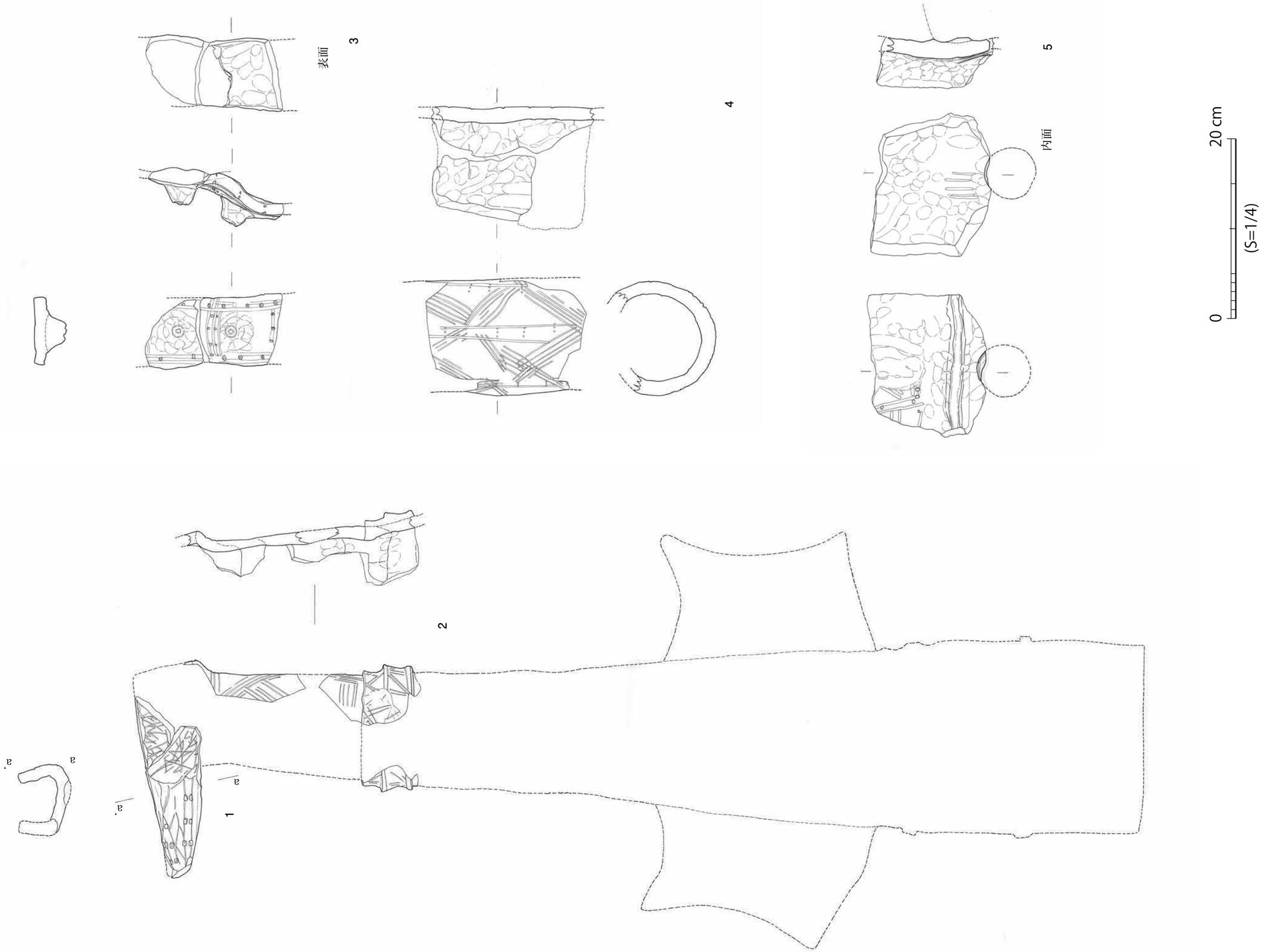


図 4-93　東造出　器財埴輪②（大刀）

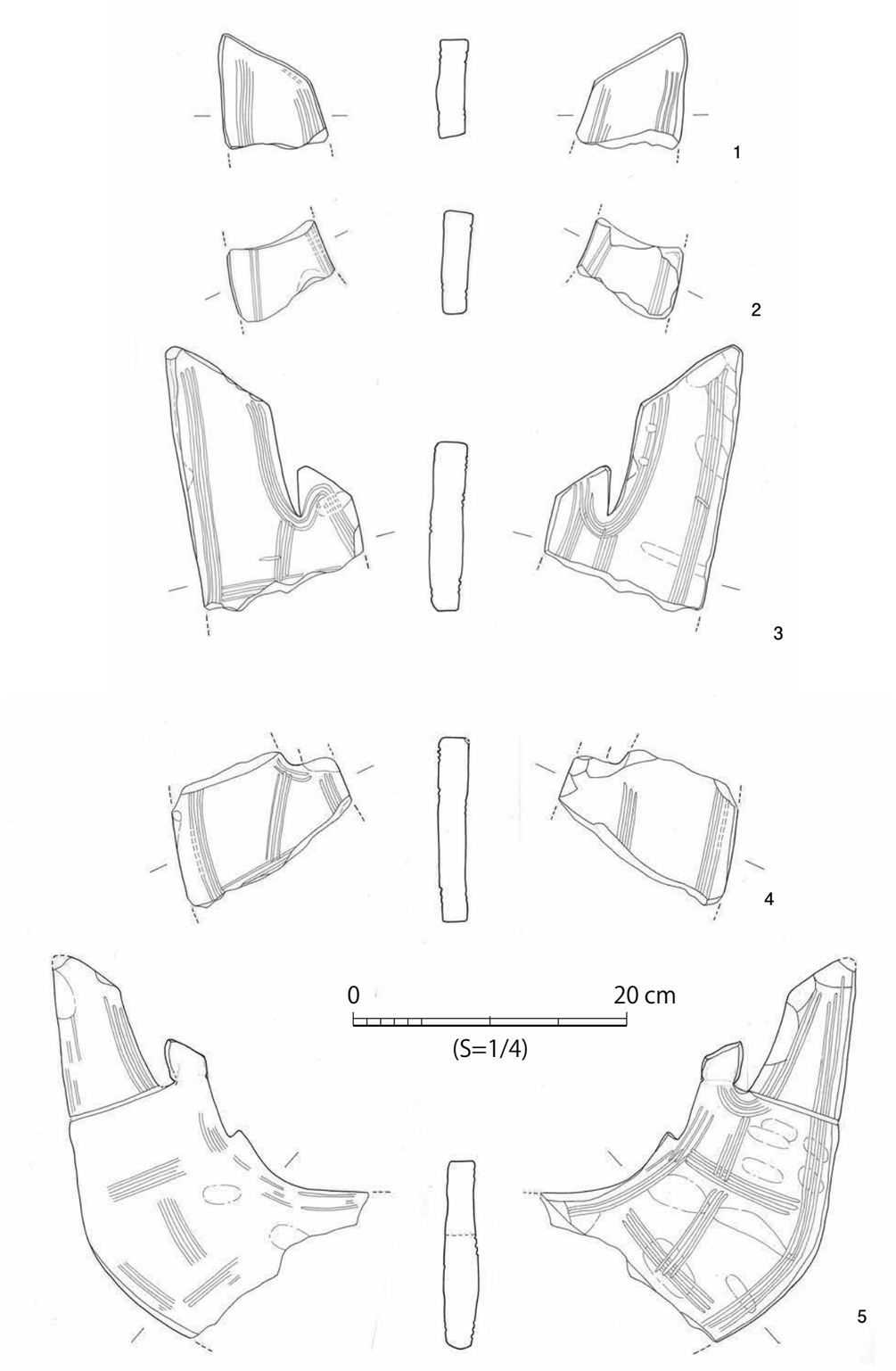


図 4-94　東造出　蓋形埴輪①

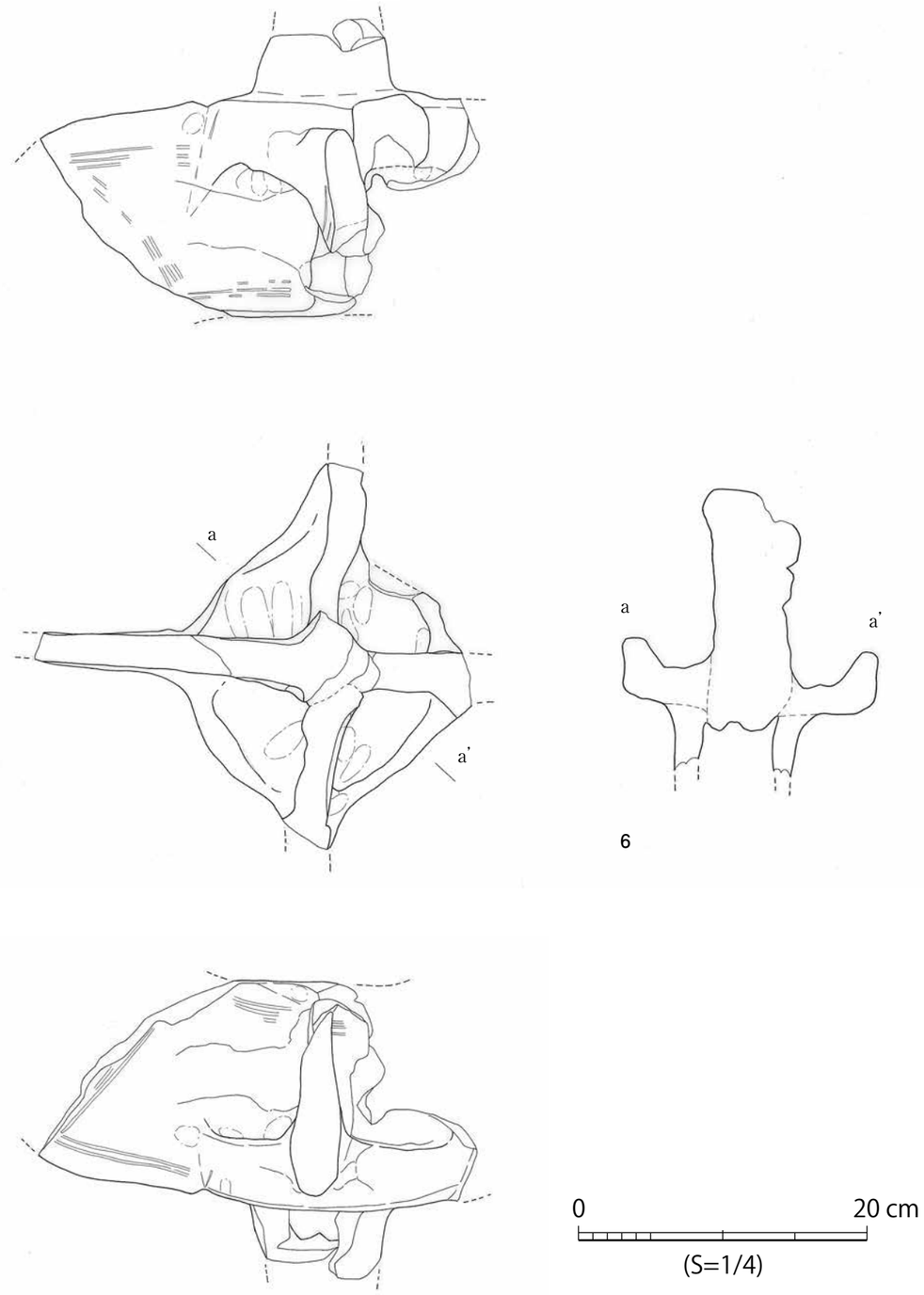


図 4-95　東造出　蓋形埴輪②

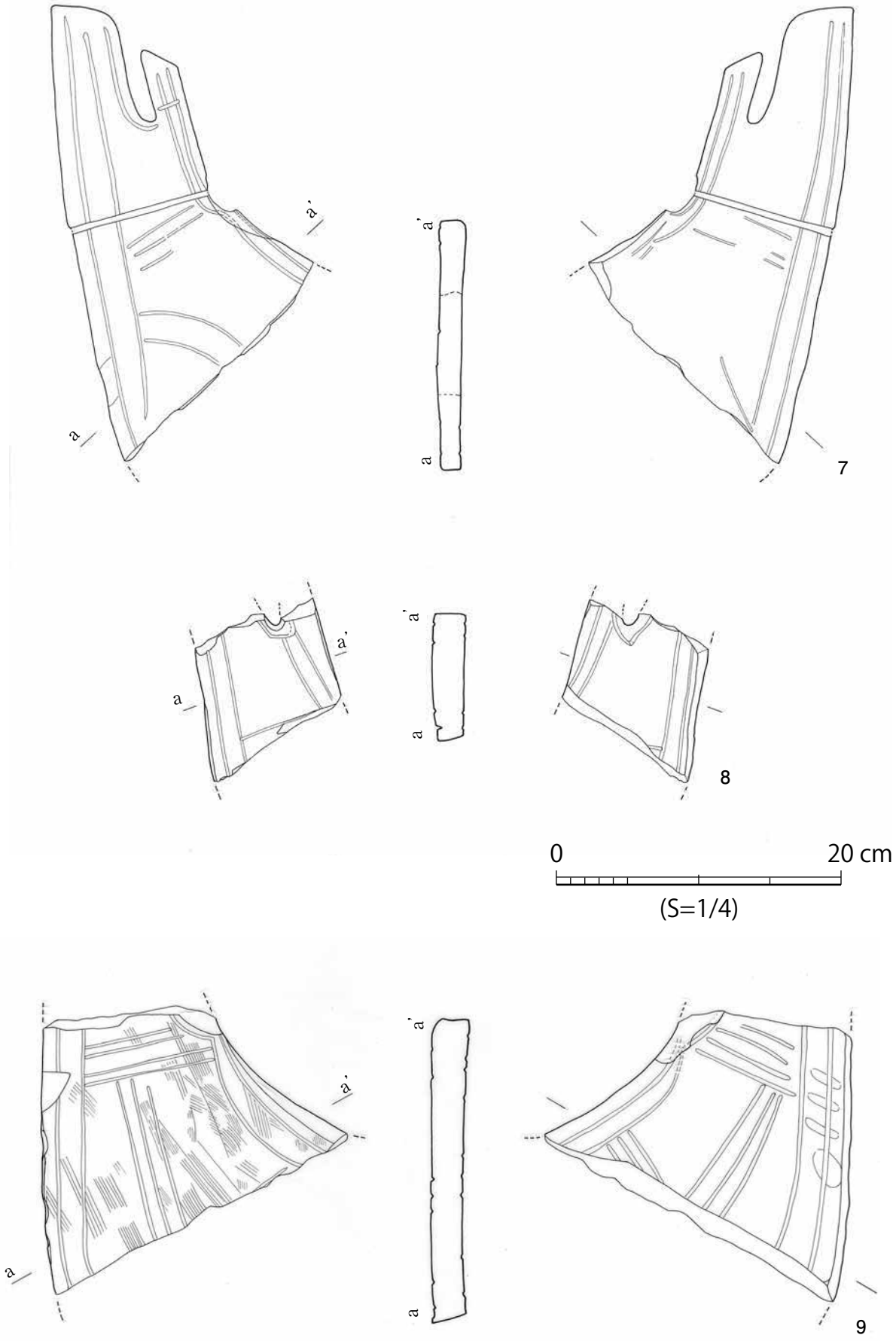


図 4-96　東造出　蓋形埴輪③

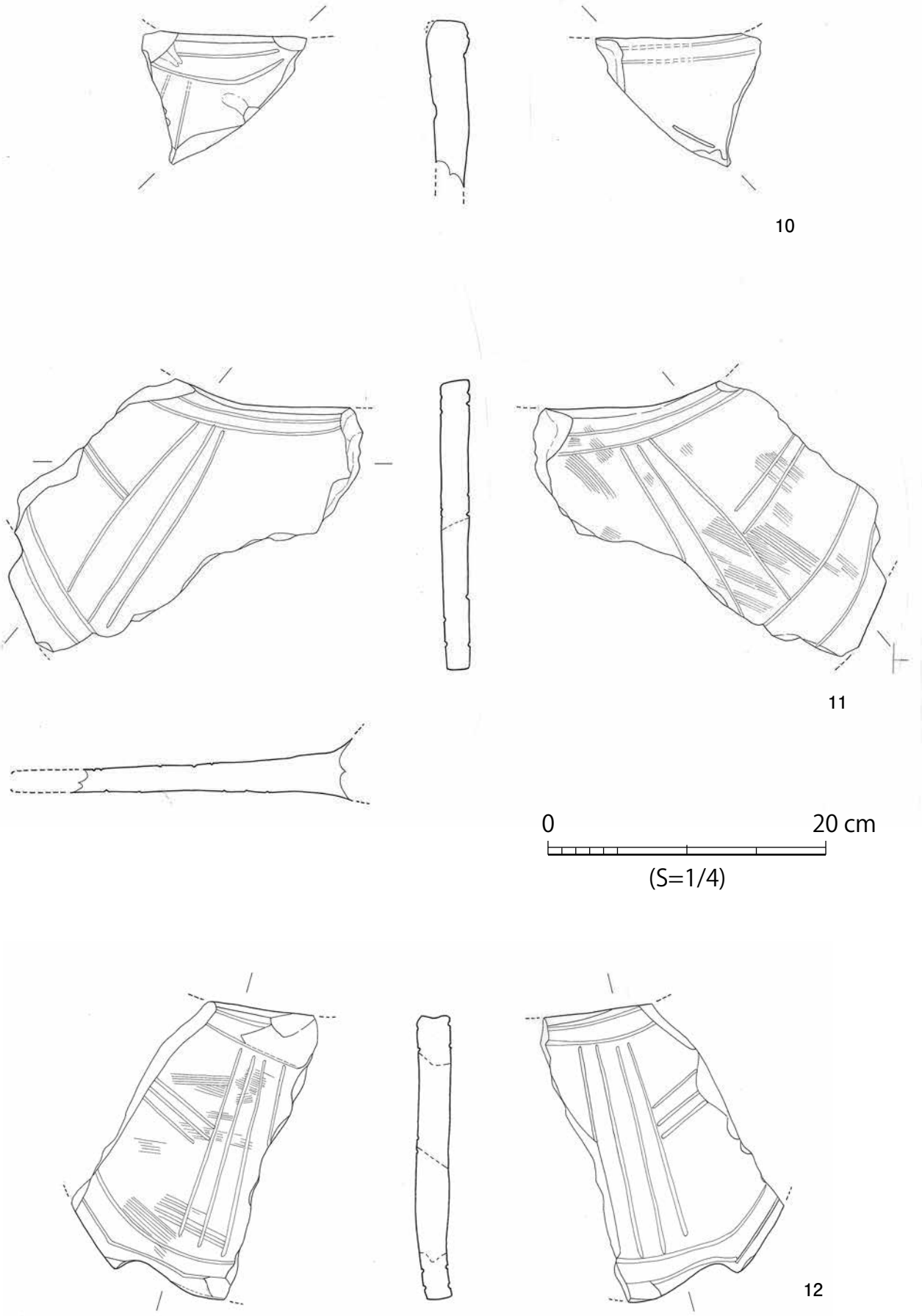


図 4-97　東造出　蓋形埴輪④

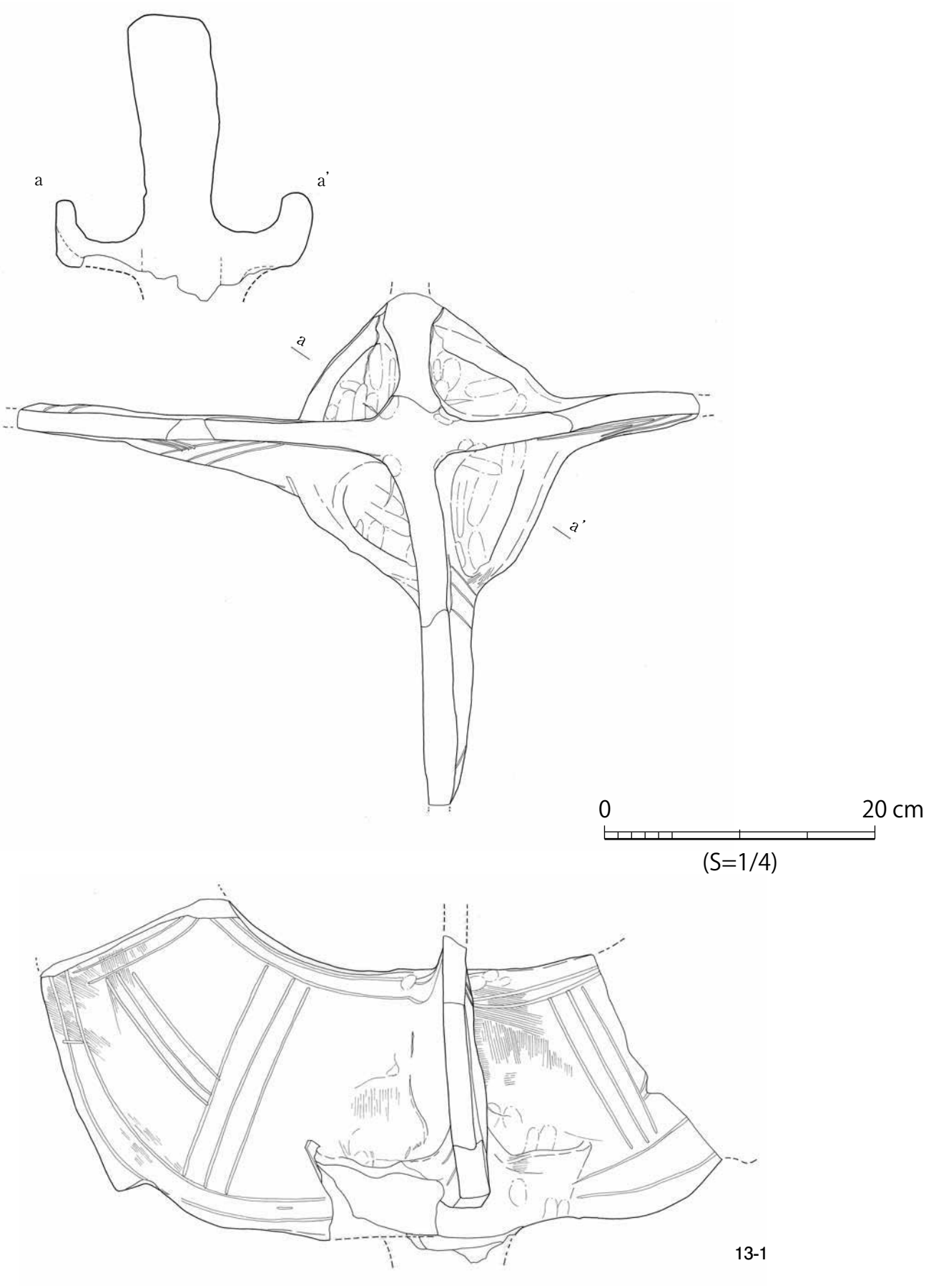


図 4-98　東造出　蓋形埴輪⑤

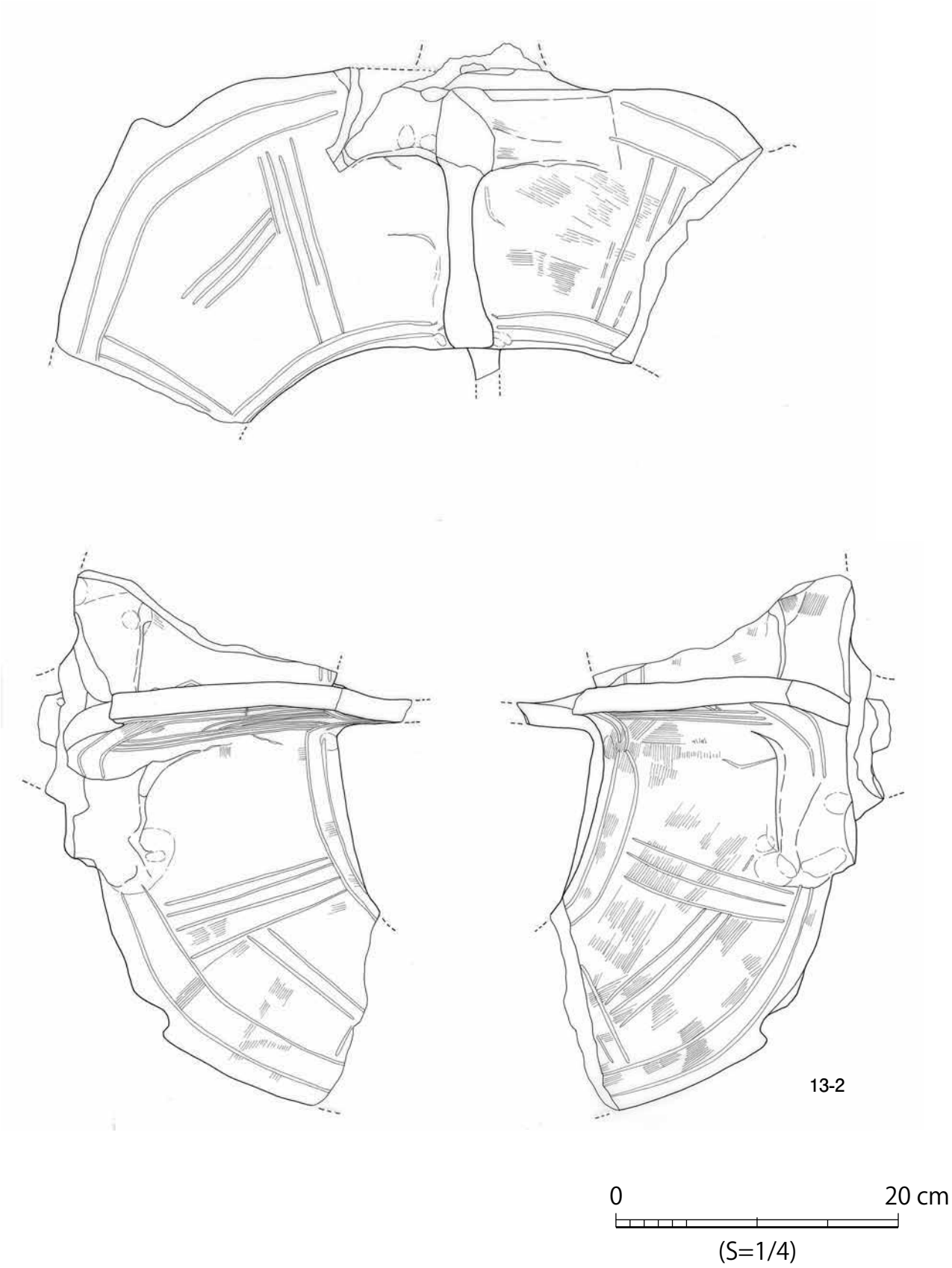
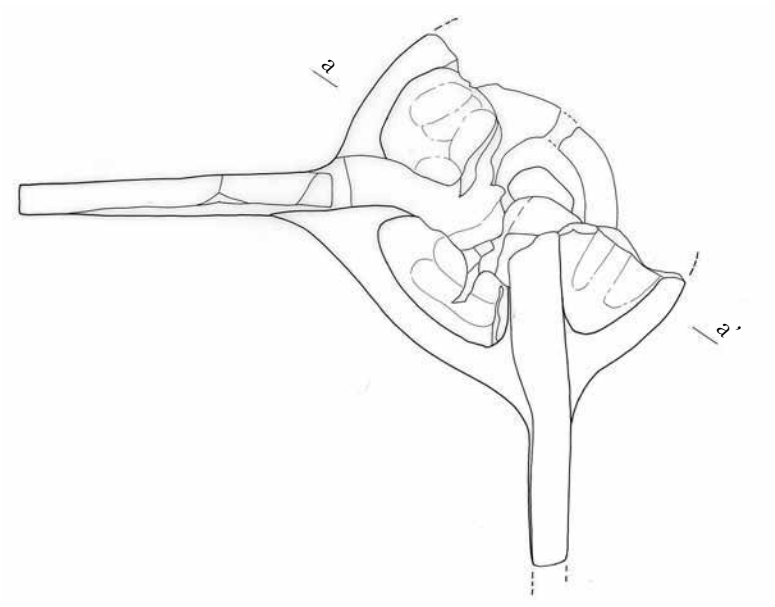
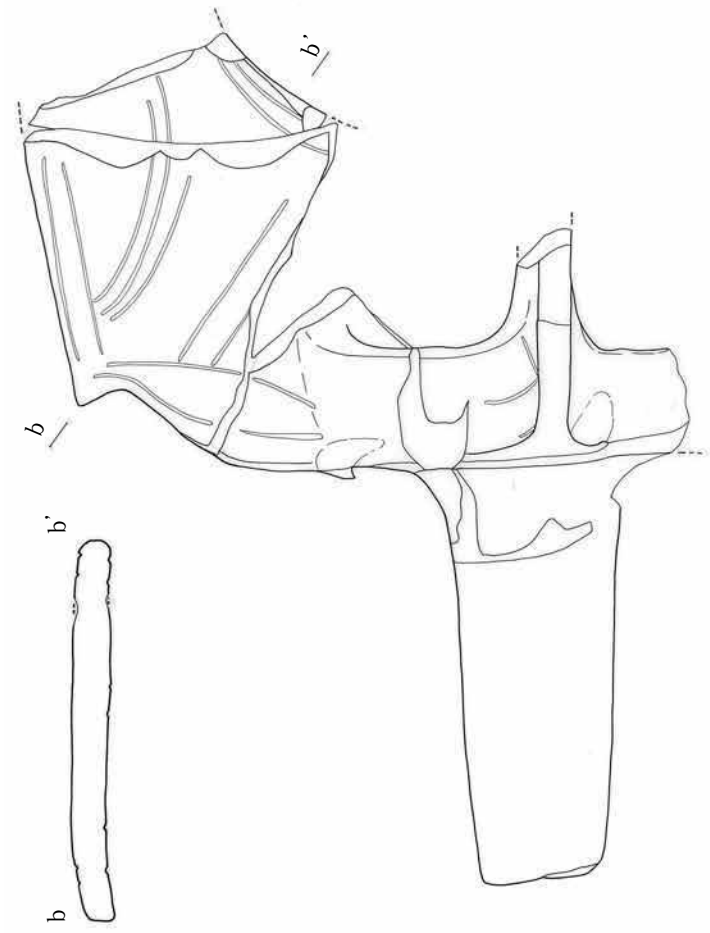
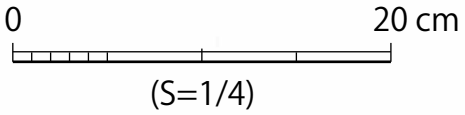
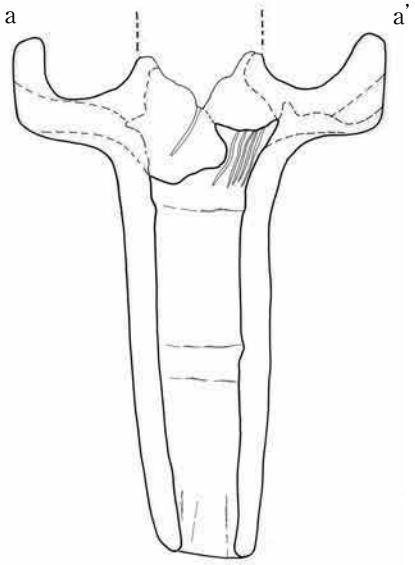


図 4-99　東造出　蓋形埴輪⑥









14-1

図 4-100　東造出　蓋形埴輪⑦

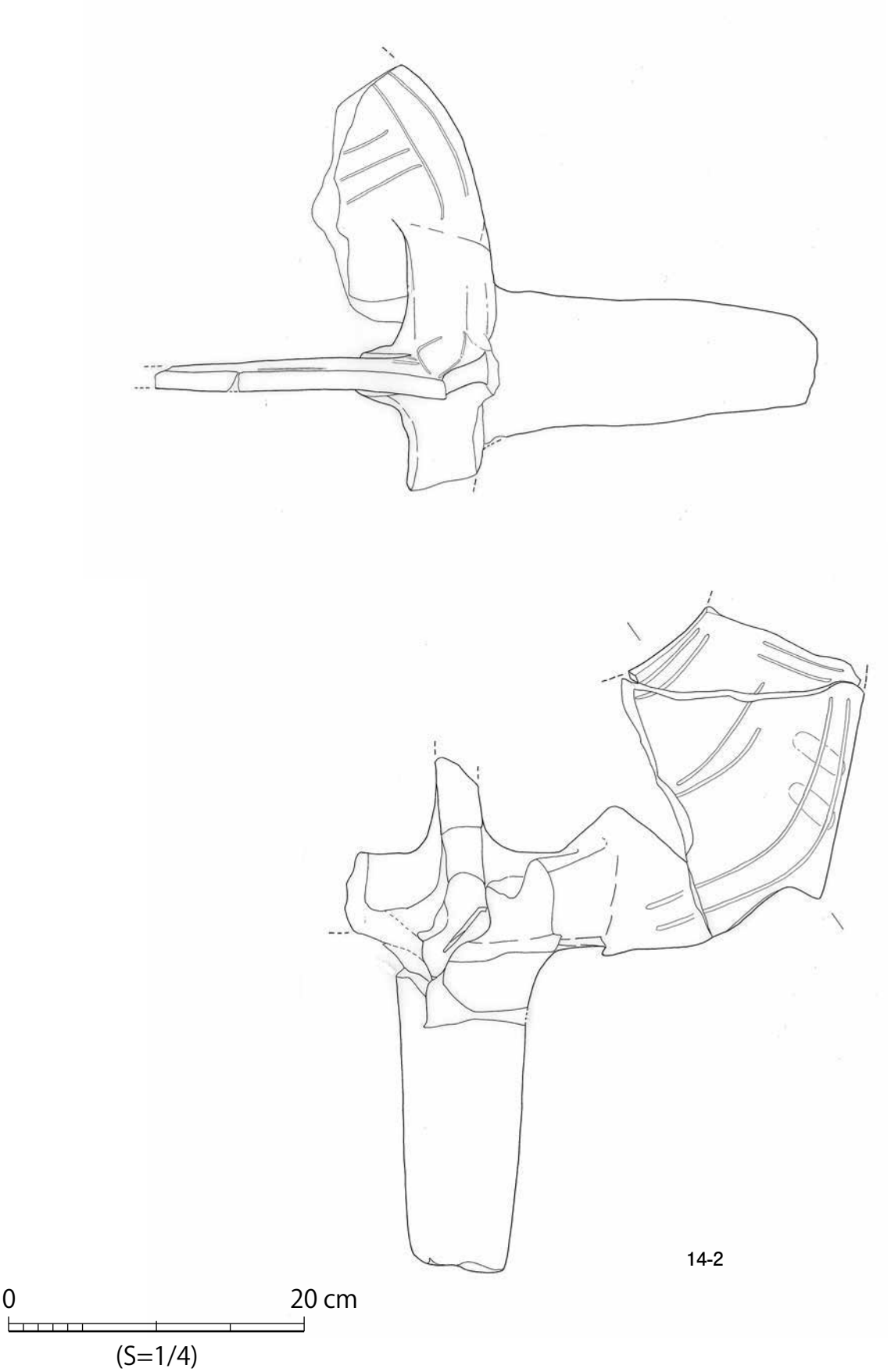


図 4-101　東造出　蓋形埴輪⑧

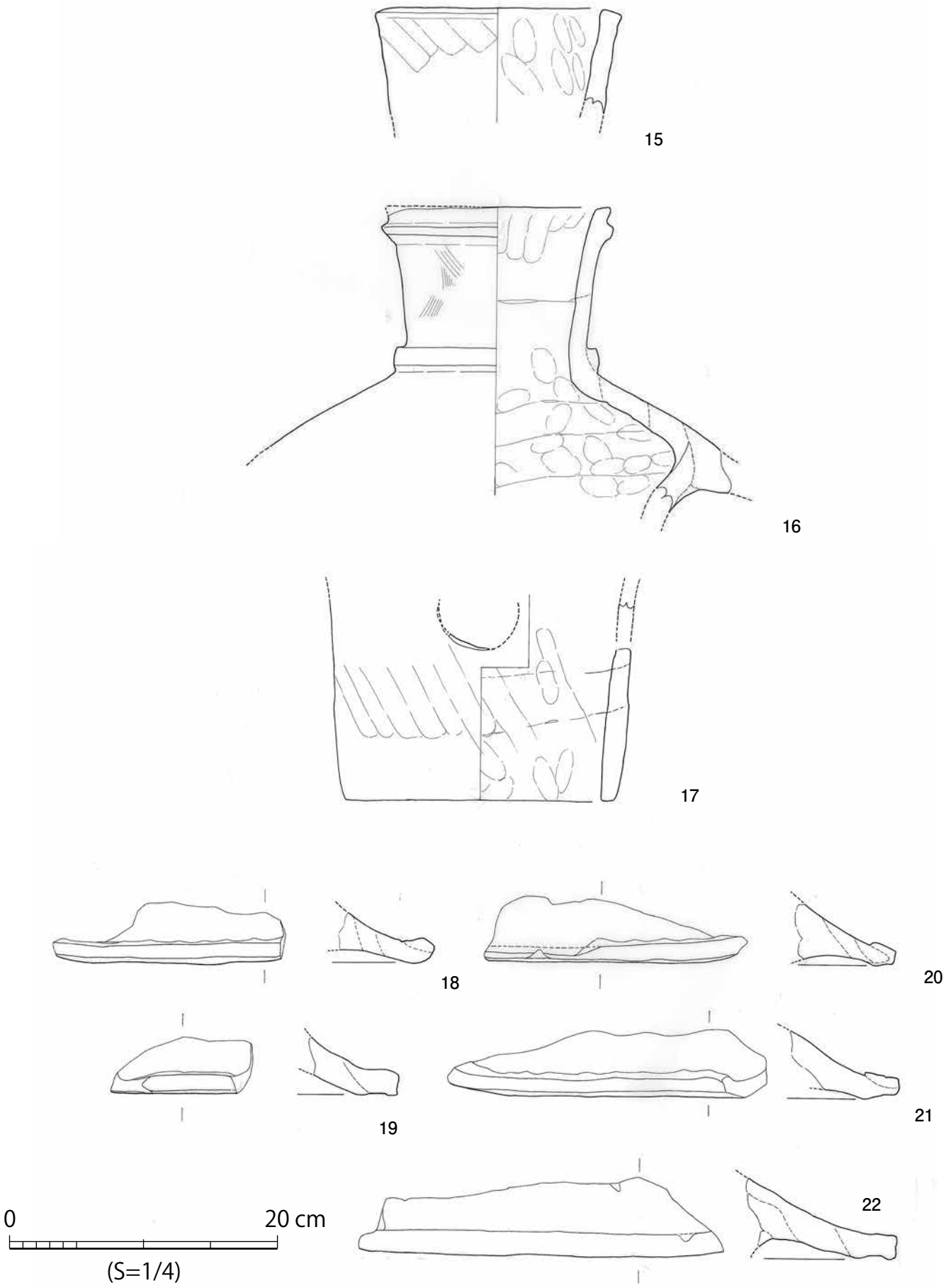


図 4-102　東造出　蓋形埴輪⑨

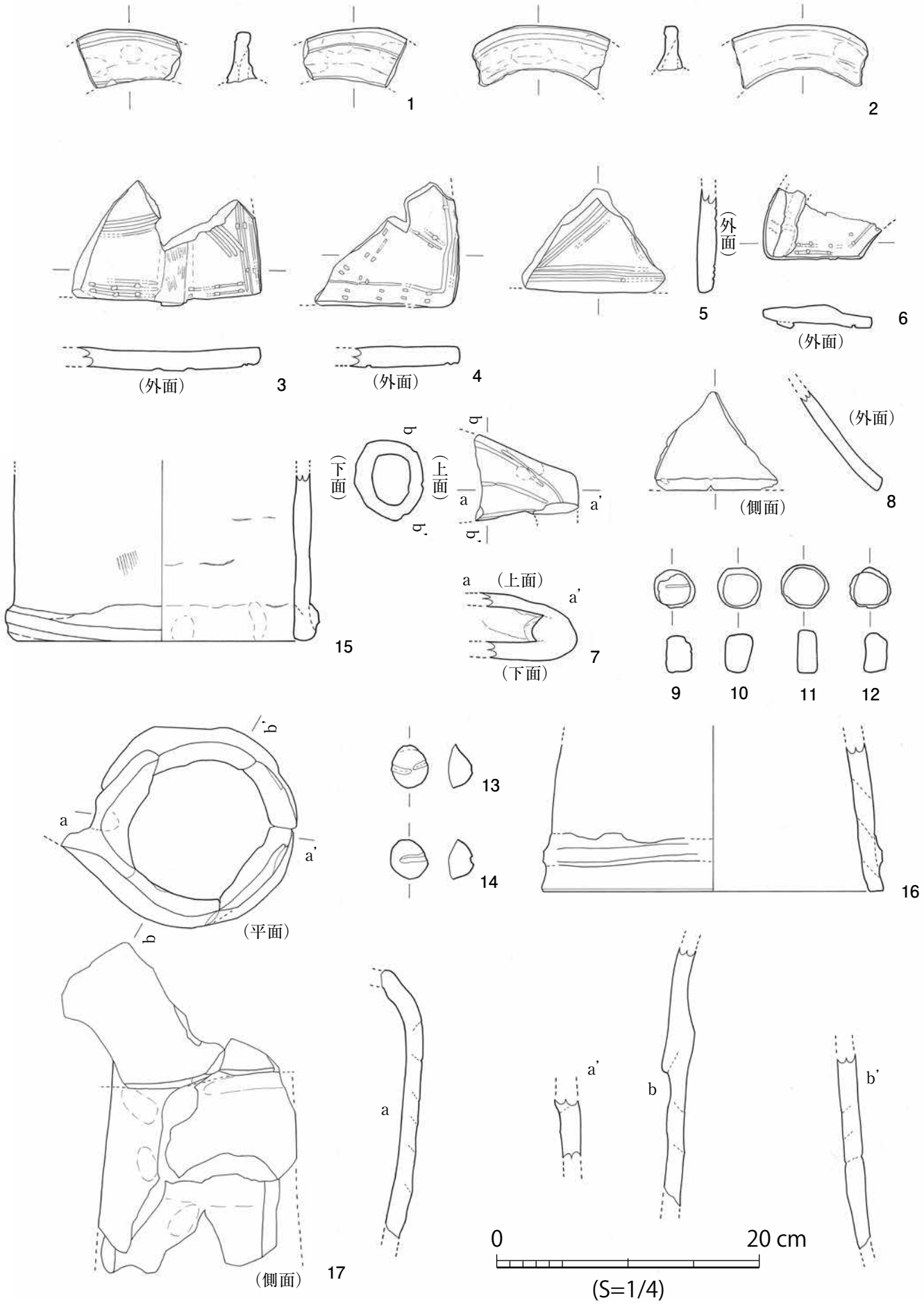


図 4-103　東造出　不明形象埴輪　形象埴輪基部

第５章　西造出の形象埴輪

第１節　家形埴輪（図 5-1 ～ 5-6）

西造出からは入母屋造の上屋根（家形埴輪 5-1）をはじめ、家形埴輪の壁（家 5-2）のほか、多数の破片が出土している。家形埴輪 5-1（図 5-1 ～ 5-4）は、入母屋造上屋根部分（切妻部）で東造出のような分割焼成の家形埴輪で、３分割になるのか、２分割になるのかは不明である。破風上部には千木が取り付かない形態で、破風には小孔と円形の線刻が施され、鞭懸状の突起が取り付く。中空の棟木にも小孔と円形の線刻が認められる。妻側の壁には一部円形のスカシ孔が残存する。大棟上には鰭状の棟飾りがあり、堅魚木は取り付かない。棟飾りと屋根部分には斜め上方からの小孔と２条一括沈線による格子状の線刻が施され、線刻の一部は破風の裏面にまで及ぶ。この家形埴輪に取り付くと推測できる方柱状の棟持柱（図 5-2）があるが、直接接合しない。

家形埴輪 5-2（図 5-5-6 ～ 9）は、身舎の壁部分で、長方形の出入口が確認でき、平屋身舎あるいは分割焼成の高床上の身舎の可能性がある。沈線と刺突文で施文している。調査では現地に据え付けられた状態と考えていたが、基部は接合面で剥離した形状である。基部が剥離後に偶然正置の状態になった、もしくは基部を打ち欠いた後に据え付けた、などの可能性が考えられる。

家形埴輪 5-4（図 5-5-1 ～ 5）は、２条一括沈線で線刻を施した障泥板、寄棟の屋根軒先の破片で、胎土や出土地点から家形埴輪 5-2 と同一個体の可能性がある。家形埴輪 5-3 としたものは、笄の付いた棟押さえ（図 5-6-1 ～ 7）や屋根軒先（図 5-6-8）、身舎基部（図 5-6-11）、裾廻突帯の可能性がある個体（図 5-6-9・10）、高床の円柱とそれが取り付く高床部または基部の破片（図 5-6-12 ～ 18）が出土し、胎土や出土地点から同一個体と推測するが、同じような特徴の家形埴輪が複数存在することは否定できない。家形埴輪 5-3 や 5-4 の軒先は２条沈線の線刻であるが、３～４条の線刻の屋根軒先があり、胎土も異なるため、家形埴輪 5-5 とする（図 5-6-19・20）。

西造出では、全体像を復元できる個体がなく、個体数の把握は難しい。家形埴輪 5-1 と 5-2 は胎土が違うため別個体と推測できるが、出土地点が近いため、家形埴輪 5-2（身舎）の上に 5-1（入母屋上屋根）がのっていたことを完全に否定することはできない。家形埴輪 5-3 と 5-5 は 5-1・5-2 と出土地点が違うため別個体の可能性が高い。したがって、西造出では少なく見積もると、家形埴輪 5-1・5-2、家形埴輪 5-3、家形埴輪 5-5 の３個体の把握しかできないことになる。

第２節　人物埴輪（図 5-7 ～ 5-19）

西造出の人物埴輪には、双脚輪状文形冠帽をかぶった人物、両面人物、武人、盛装男子、両面人物をあげる人物、巫女がある。双脚輪状文形冠帽をかぶった人物は２体確認でき、5-1（図 5-7）は、美豆良と垂髪を付けた男性像で、美豆良には線刻で髪を束ねた表現をするが、垂髪には線刻は施されない。沈線のみで施文された双脚輪状文形の冠帽をかぶる。5-2（図 5-8）は、5-1 と同様の冠帽をかぶるが、冠帽は沈線と刺突文で施文される。線刻表現の美豆良が確認できるが、5-1 と違って垂髪には線刻が施されている。5-1・5-2 ともに首以下の体部は不明である。

両面人物埴輪（図 5-9）は、頭部の前後に顔を作り出した全国初例の人物埴輪で、美豆良がある男性像で、体部は不明である。頭頂部には表現がないことから、冠帽などをかぶっていた可能性もある。一方の頬には矢羽の線刻、もう一方には矢尻の線刻があり、両面とも額に線刻が確認できる。武人頭部（図 5-10）は、眉庇付冑と衝角付冑の両方を合わせた形態の冑をかぶる。頭頂部

は円形のスカシ孔状になり、何らかの部材が差し込まれていた可能性がある。全体的に沈線と円形浮文が施される。直接接合する体部は確認できない。盛装男子と考えられる個体は、首から肩部（図 5-11-1）、腕２本（図 5-11-2・3）があり、同一個体であると推測している。東造出の盛装男子 1-1 に類似する特徴を持つが、線刻も少なく、円形浮文も認められない。腕には手甲をはめている。武人の甲部分（図 5-12-1）は、沈線と刺突文で小札状の表現を描いている。図 5-12-2 は甲の一部と推測でき、図 5-12-1 と同一個体の可能性もあるが、弧状の線刻の向きが異なる。草摺部分は２個体確認でき、図 5-12-3 は綾杉文の線刻が施される。図 5-13 は格子状に３条一括沈線と２点一括刺突文で施文する。刺突文と沈線で施文された方形の貼り付け部分があるが、何を表現したものか判然としない。図 5-12-4 は人物の腰部分のスカート状になった箇所で、上部に沈線が確認できる。男性と女性のいずれのものか確定できない。板状の両側面が前方へ張り出す形態の人物埴輪基部（図 5-14・15）は、草摺（図 5-13）の下層より出土し、草摺と組み合う可能性があるが、直接接合しない。板状の両側面と、円筒状の台部両側面には円形のスカシ孔があり、台部側のスカシ孔は円周上に粘土を貼り付けている。円筒部の背面右側に突起状の貼り付けがあり、形状から足（かかと）の表現である可能性がある。かかとの表現とすると、埴輪上部はひざまづいた人物となる。ただし、この上部に草摺がのると、草摺の形状からひざまづいた格好は少し想定しづらくなる。井辺八幡山古墳でも同形態の基部が出土しており（佐藤ほか 2007）、基部を椅子とみなして、坐像の人物とする想定もあり（若松 2012）、検討の必要がある。

両手をあげる人物は（図 5-16・17）、東造出の力士のようなしっかりとした両足を作り出し、両手は上方にあげる姿勢をしている。文様のない比較的簡素な服を着ているが、３条一括沈線で装飾された帯をしている。帯正面の下側は何か剥離した痕跡がある。調査時点では馬形埴輪の近くから出土したことから、馬曳き（馬子）という想定もあったが、しっかりとした両足や両手をあげること、立派な帯を巻くことなどから、馬曳きではなく、少し地位の高い人物であろう。巫女は、頭部（図 5-18）、腕（図 5-19-1 ～ 5）、袈裟状衣（図 5-19-6）があり、腕の数から４～５体の巫女がいたことがわかる。袈裟状衣下部にはヘラ状工具で切り込んだ穿孔が認められる。

第３節　動物埴輪（図 5-20 ～ 5-36）

西造出の動物埴輪は、四足動物（馬形埴輪）と鳥（翼を広げた鳥形埴輪）が出土している。馬形埴輪は、西造出中央に樹立されていたもので、ほぼ完全な形で２頭復原できた。細部に違いがあるものの、たてがみから背中、尻尾、頬、脚部の作り方など２頭はほぼ同形・同大のものと推察でき、東造出の馬形埴輪とも同形態と考えられる。馬形埴輪 5-1（図 5-20 ～ 27）は、ほぼ全身が残存するが、尾や鏡板など一部を欠損する。杏葉は３箇所確認でき、３個の鈴が取り付けられ、沈線と竹管文、円形浮文、刺突文で施文する。障泥は２条一括沈線と２点一括刺突で施文し、鐙を貼り付けた痕跡を残すが、鐙自体は両面とも剥離する。後述する刺突文を施す不明形象埴輪片（図 5-53-11）が壺鐙であるとすると、剥離部の大きさから、この馬形埴輪に取り付いていた可能性がある。帯や鞍（前輪・後輪）は沈線と竹管文で施文し、鞍などの刺突文は２点一括である。脚端部はハ字状に開き、一部縦方向に接合痕が観察できるので、切開再接合技法による可能性がある。体部両側面に２箇所ずつスカシ孔があり、頭部下側に２箇所、体部下側（腹部）に１箇所スカシ孔がある。頬部分は板状に作り出す。体部内面には補強突帯が貼り付けられる。

馬形埴輪 5-2（図 5-28 ～ 35）は、5-1 とほぼ同じ形態・特徴をもつが、頭部は大きく欠損する。

鐙は貼り付けではなく、線刻によって輪鐙が表現される。また、鞍の前輪と後輪は沈線と竹管文で施文し、２条一括沈線と２点一括刺突文で施文される障泥を除いて、鞍や帯などは３点一括刺突文で施文する。障泥内部の表現も右側面は 5-1 と同様に２条一括沈線と２点一括刺突文で施文するが、左側面は１条ずつ描いた２条沈線内に２点一括刺突文を施すなど違いをみせる。杏葉の形態も 5-1 とは異なっている。尾は紐状のものを巻きつけて束ねている。脚端部はハ字状に開き、内面には切開再接合技法の可能性がある縦方向の接合痕が観察できる。体部内面には補強突帯が貼り付けられる。両側面のほか、尻部、背中後ろ寄りの部分、腹部にスカシ孔が存在する。

東造出の翼を広げた鳥形埴輪に類似する尾（図 5-36-1）とスカシ孔のある体部（図 5-36-2 ～ 4）があり、体部や尾などには小孔が確認できる。図 5-36-4 は補強突帯があるため、羽が取り付く部分と推測でき、東造出の翼を広げた鳥形埴輪 1-2 と同様に体部側面にスカシ孔があることがわかる。これらは数個体とも考えられるが、重複する部位がないため１個体の可能性もある。

第４節　器財埴輪（図 5-37 ～ 5-52）

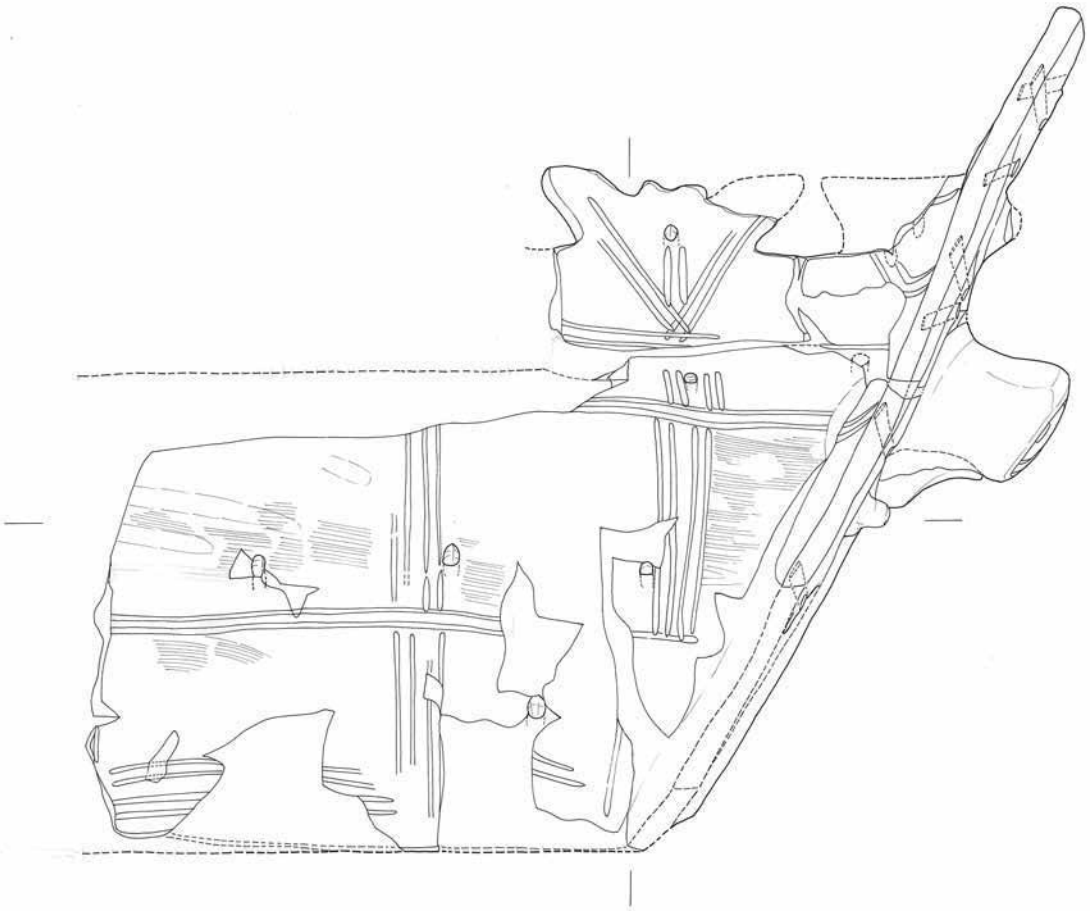
西造出の器財埴輪には、胡籙形埴輪、靫形埴輪、蓋形埴輪がある。胡籙形埴輪（図 5-37・38）は２個体確認できる。胡籙形埴輪 5-1 は全身が復原でき、上半部には５本の矢羽の線刻がある。裏面には中央部の補強突帯と左右に円筒部から続く補強突帯があり、中央部の補強突帯から円筒部に取り付く棒状の補強材が確認できる。外周部は沈線と３点一括刺突文で施文する。矢の収納部は、外面に直弧文風の文様を施し、上端面は３点一括刺突文を施す。収納部外面には勾玉状金具の可能性がある貼り付けがあり、収納部外面上端には紐状の結び目が貼り付けられる。胡籙形埴輪 5-2（図 5-39）は、下半部を欠損する。5-1 と類似しているが、矢羽の線刻は７本である。外周部の刺突文は、左側・上側には 5-1 と同様のやや大きめの刺突、右側には小さい刺突を用いて３点一括で施文される。裏面には縦方向に３条の補強突帯が貼り付けられる。同一個体と推測できる収納部があり、外面には直弧文風の文様、上端面には２点一括刺突文が確認できる。

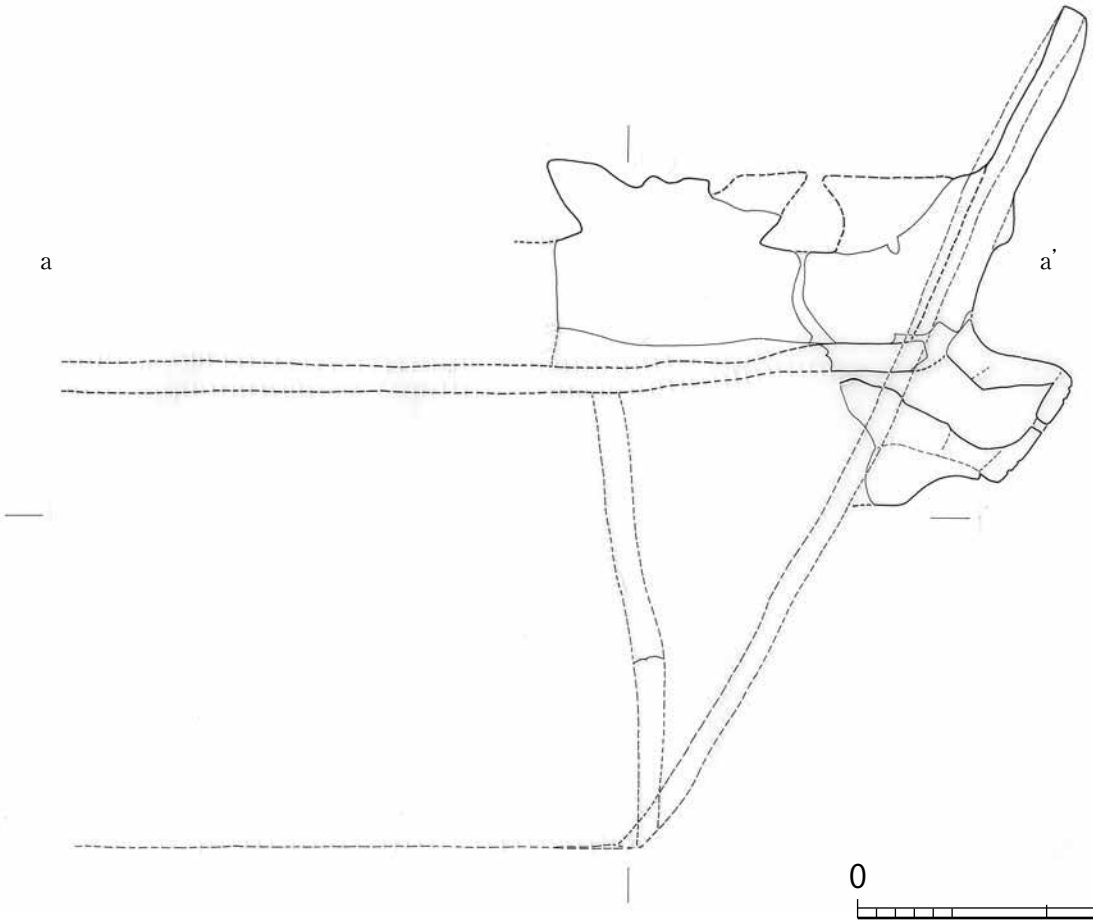
靫形埴輪 5-1（図 5-40・41）は、欠損部が多いものの、全体が把握できる個体である。矢尻を上に向けた５本の矢の線刻があり、外周は２条一括沈線と２点一括刺突文で施文する。上半部の内部は直弧文風の文様で、下半部は格子状の文様となる。裏面には補強突帯が確認できる。

蓋形埴輪の立飾部は、３条一括沈線で、胎土は明褐色のもの（図 5-42 ～ 48）と、１条ずつの沈線で、外周は２条帯、内部は３～４条帯で構成し、黄褐色の胎土で、表面にハケ目を残し、幅広のもの（図 5-49・50）の２種類が確認できる。笠部（図 5-51・52）も東造出と同様の形態である。

第５節　不明形象埴輪・形象埴輪基部（図 5-53）

線刻のある細長い板状の個体（図 5-53-1 ～ 4）は、人物埴輪などの帯と推測できるが、屈曲部がある１は人物の垂髪の可能性もあり、２・３は一端が三角形状で、帯の先端部と推察できる。図 5-53-5 は細い帯状の粘土を輪にして押しつぶして作り出すもので、人物や馬などに取り付く部材であろう。図 5-53-6 ～ 8 は美豆良の可能性があり、６・７は形状から同一個体と推測できる。図 5-53-9 は家形埴輪の基部の可能性がある。図 5-53-10･11 は２点一括刺突文を施す個体で、10 は尖った帽子の先端、11 は馬形埴輪の壺鐙の可能性が考えられる。西造出では形象埴輪の基部は現地調査で複数確認されたが、実測できたのは３点のみである（図 5-53-12 ～ 14）。

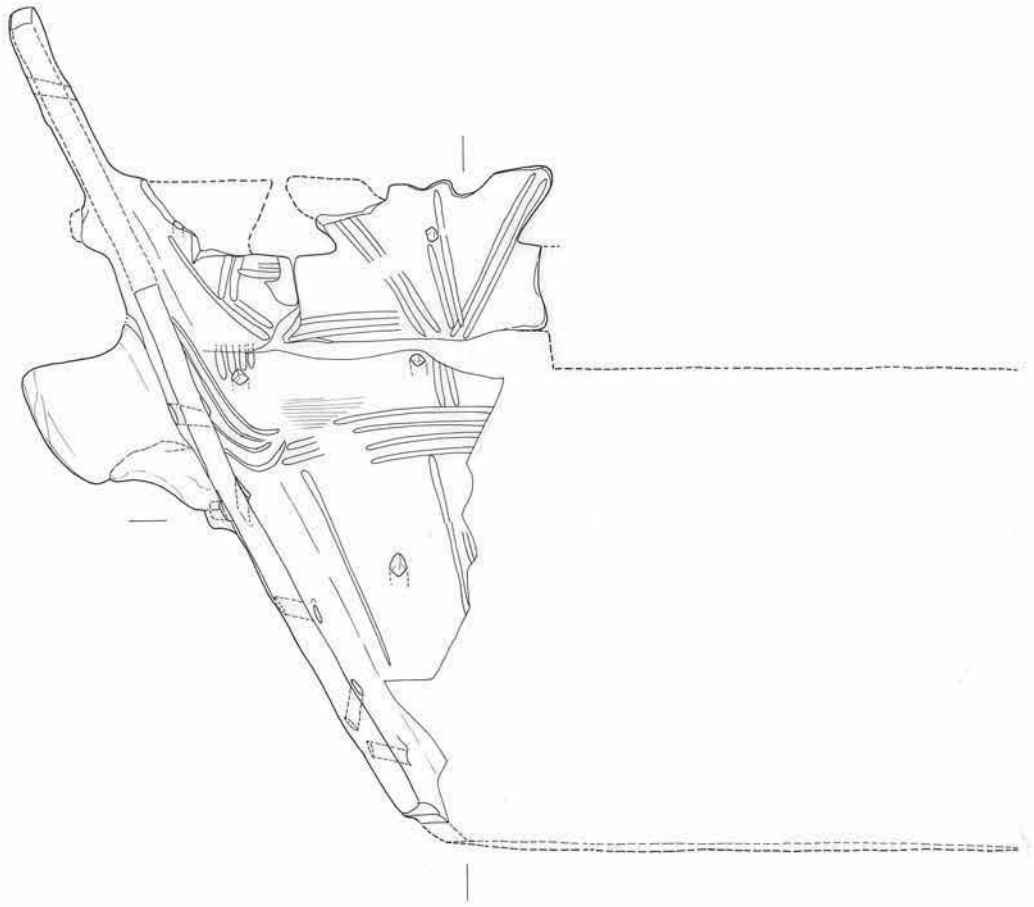


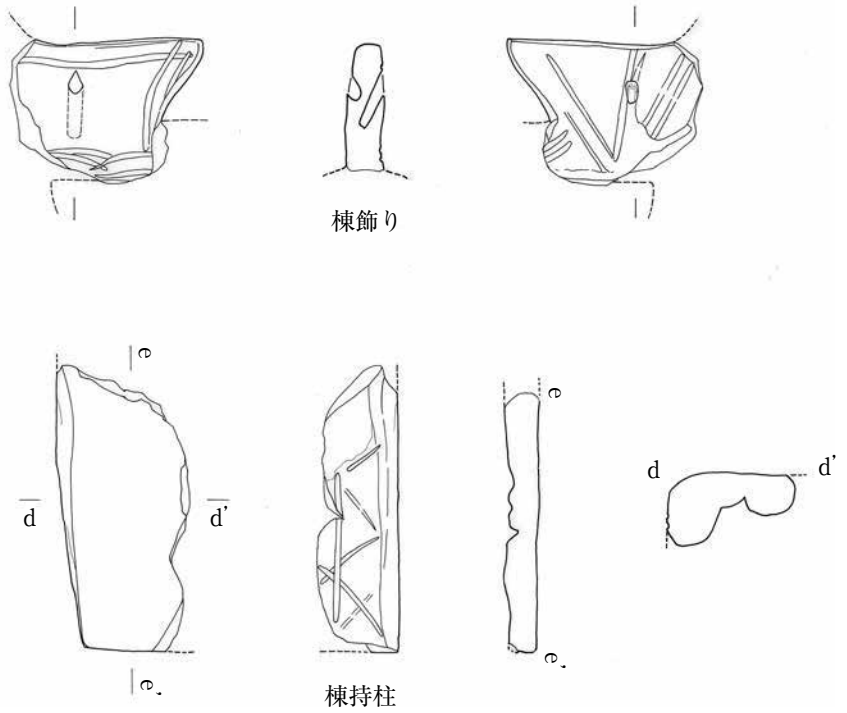


0 20 cm

(S=1/4)

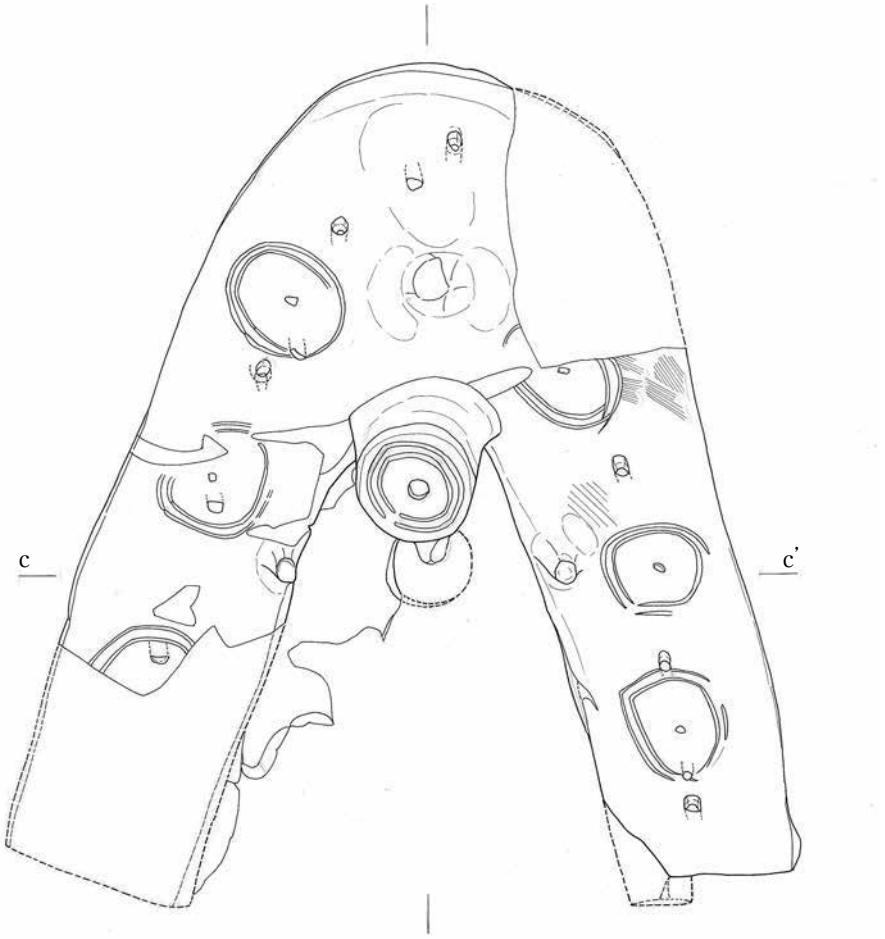
図 5-1　西造出　家形埴輪 5-1①

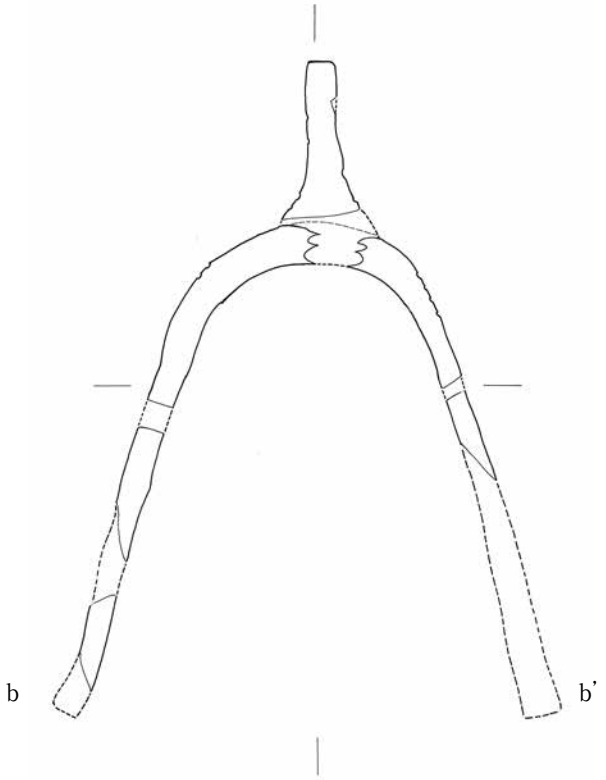




0 20 cm
(S=1/4)

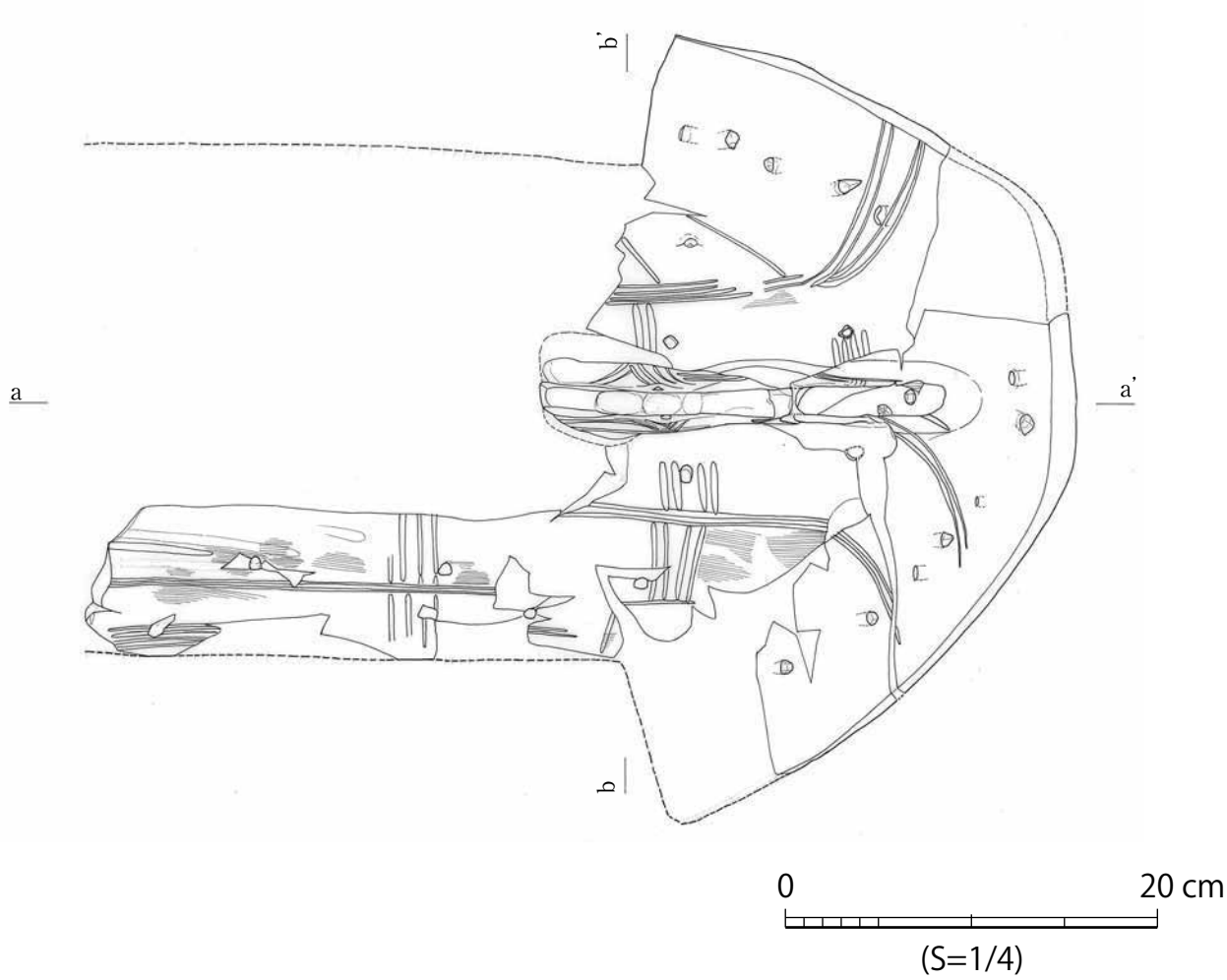
図 5-2　西造出　家形埴輪 5-1②





0 20 cm
(S=1/4)

図 5-3　西造出　家形埴輪 5-1③



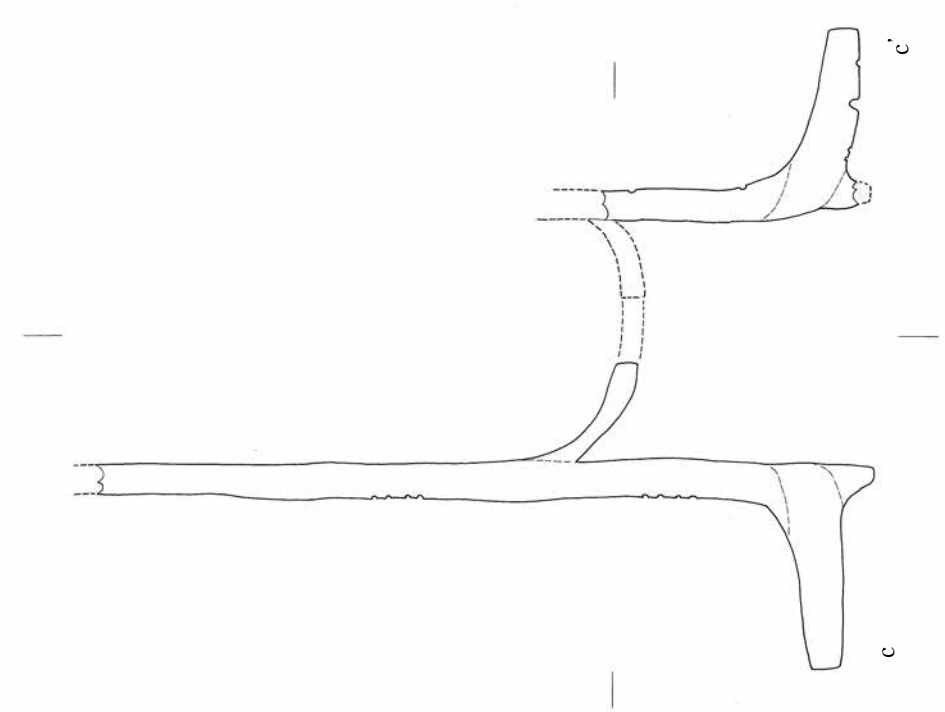
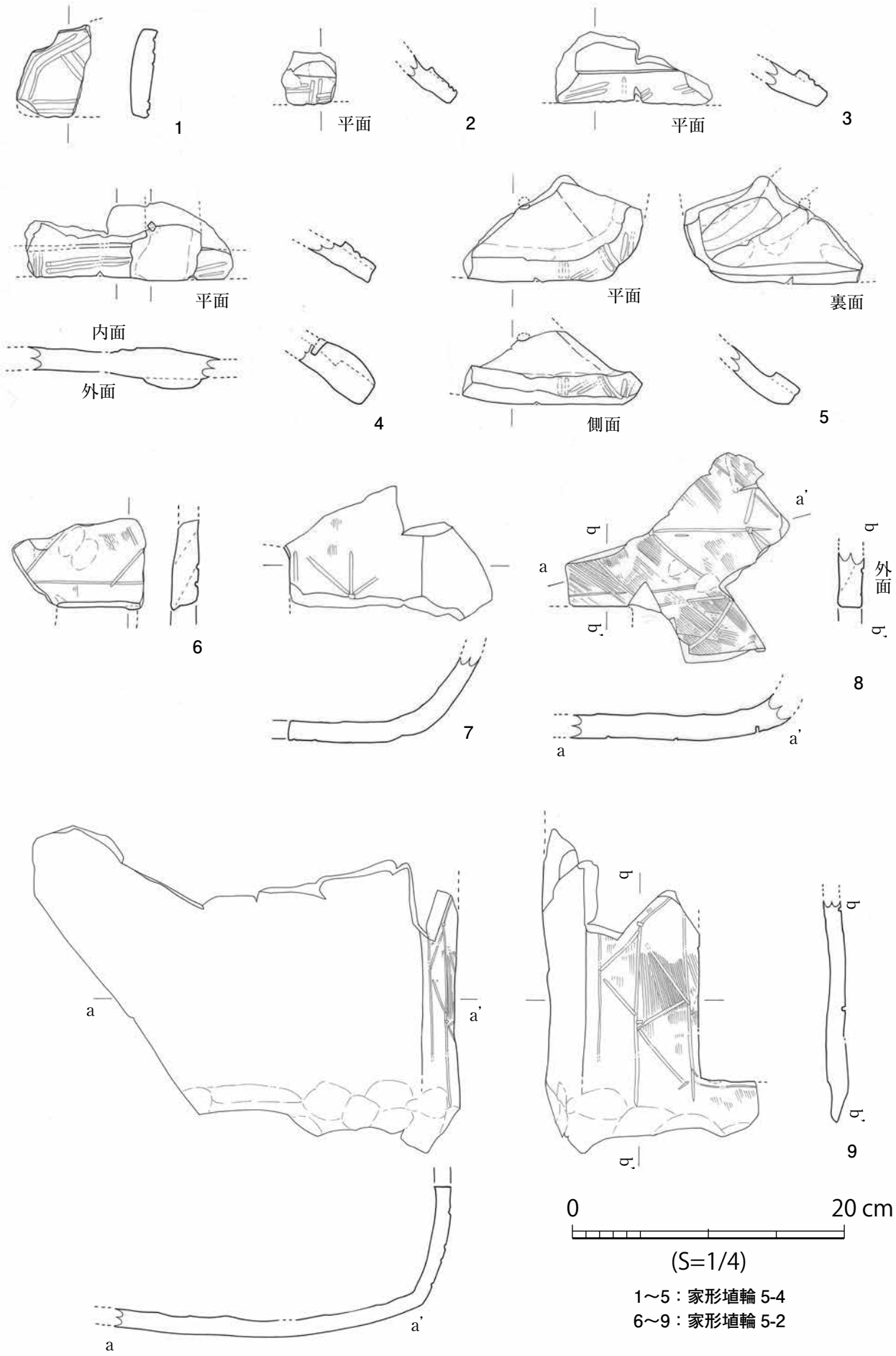


図 5-4　西造出　家形埴輪 5-1④



1～5：家形埴輪 5-4
6～9：家形埴輪 5-2

図 5-5　西造出　家形埴輪 5-2、5-4

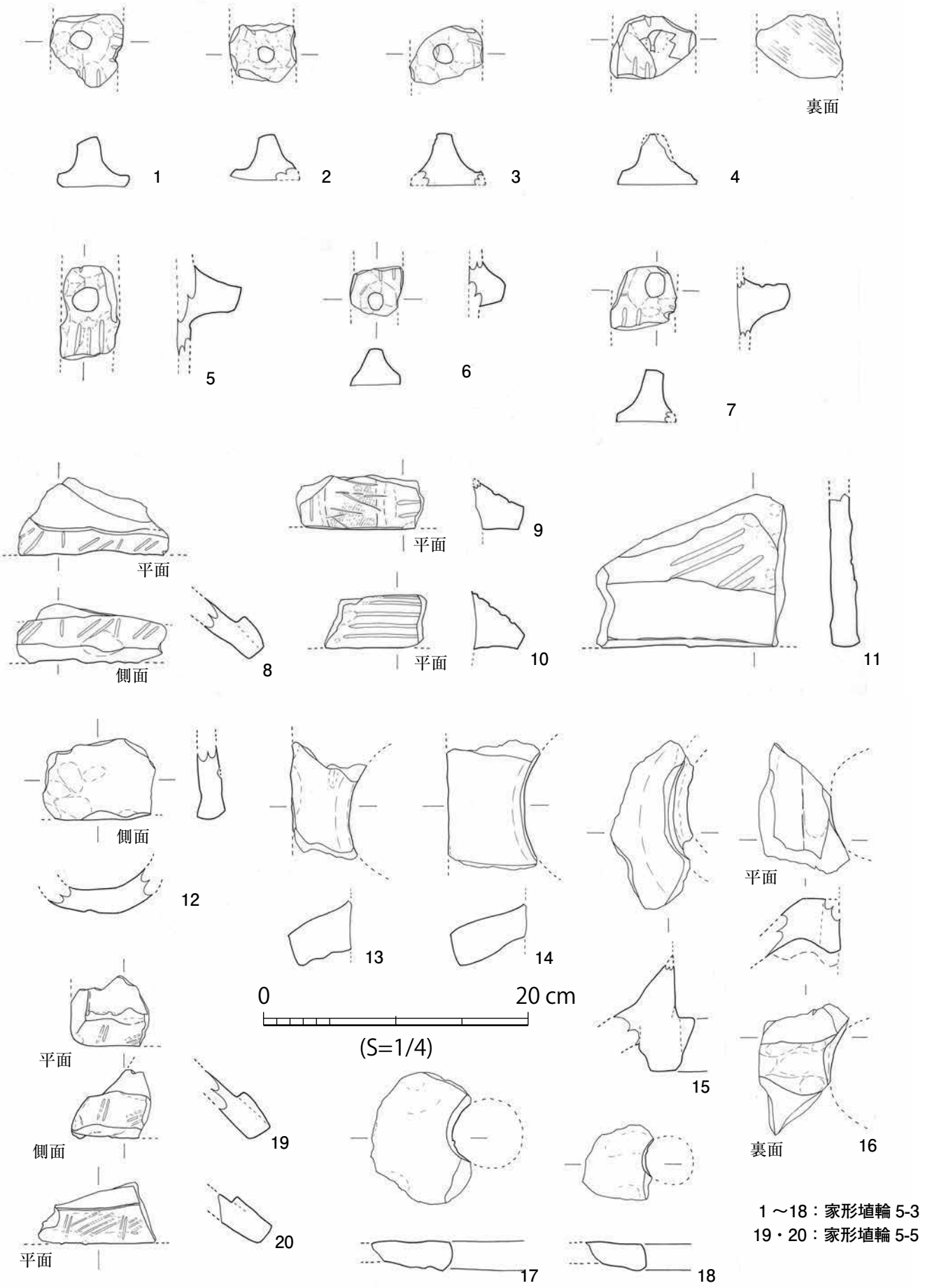


図 5-6　西造出　家形埴輪 5-3、5-5

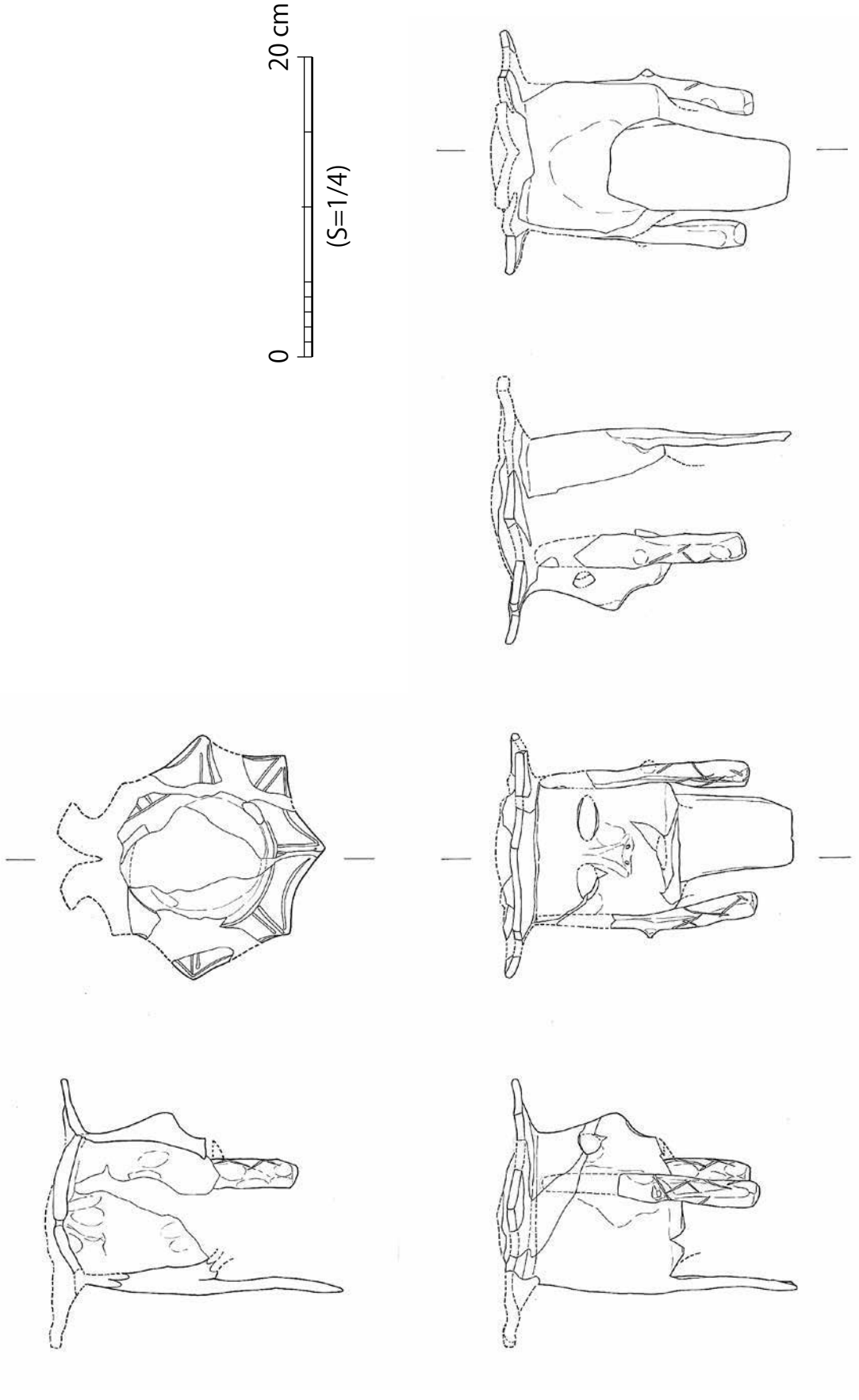


図 5-7　西造出　人物埴輪（双脚輪状文形冠帽をかぶった人物 5-1）

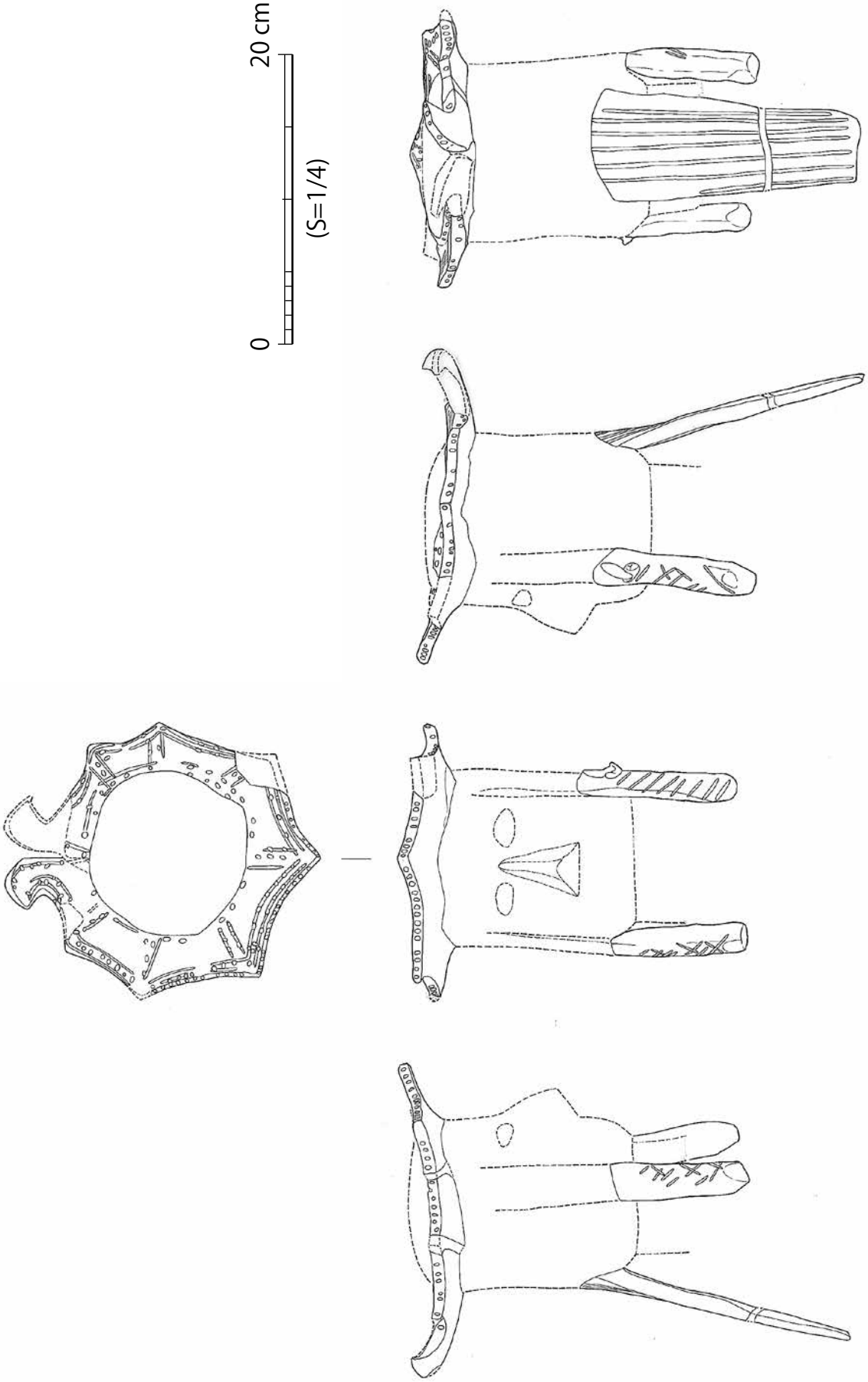


図 5-8　西造出　人物埴輪（双脚輪状文形冠帽をかぶった人物 5-2）

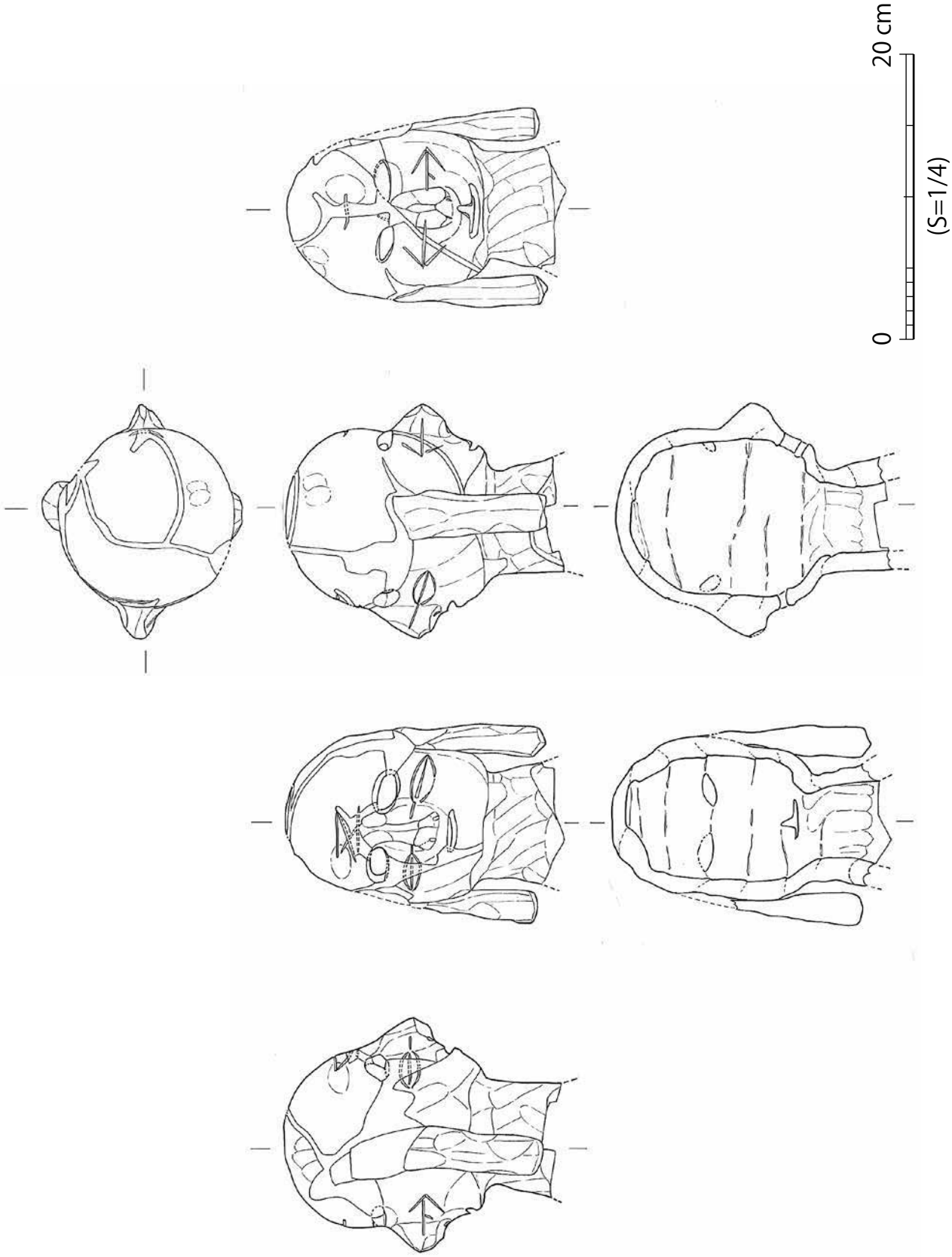


図 5-9　西造出　両面人物埴輪

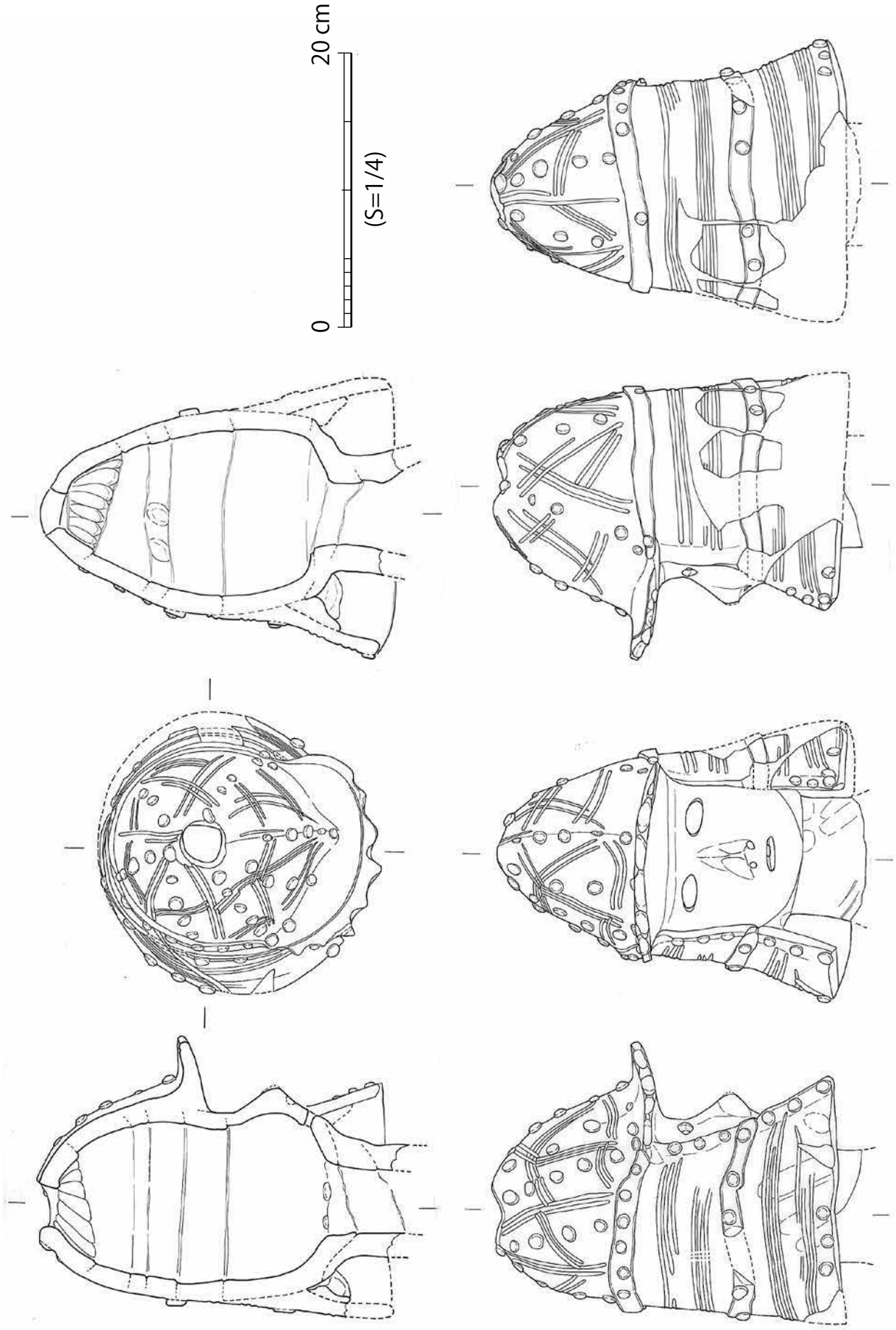


図 5-10　西造出　人物埴輪（武人頭部）

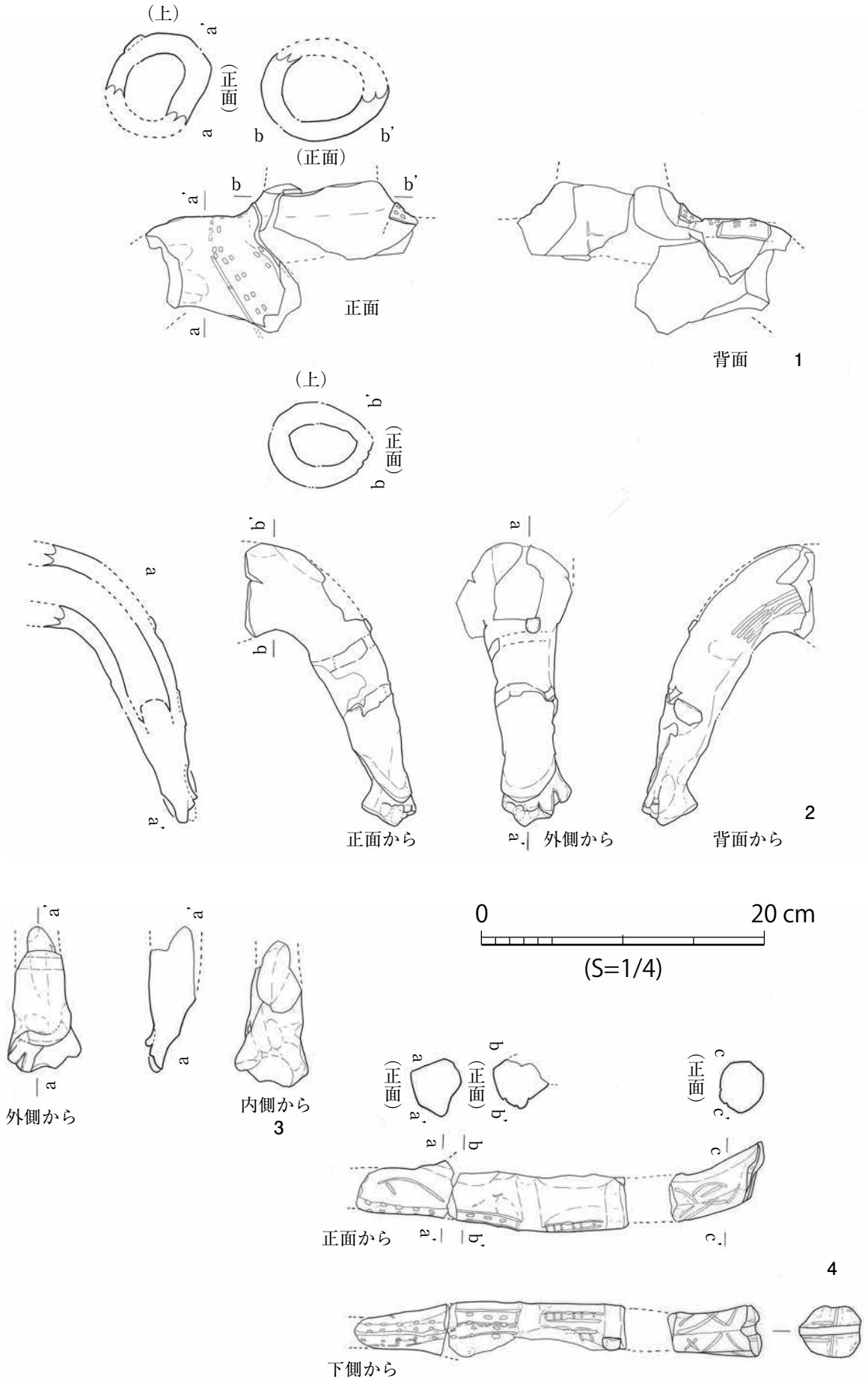


図 5-11　西造出　人物埴輪（盛装男子・大刀）

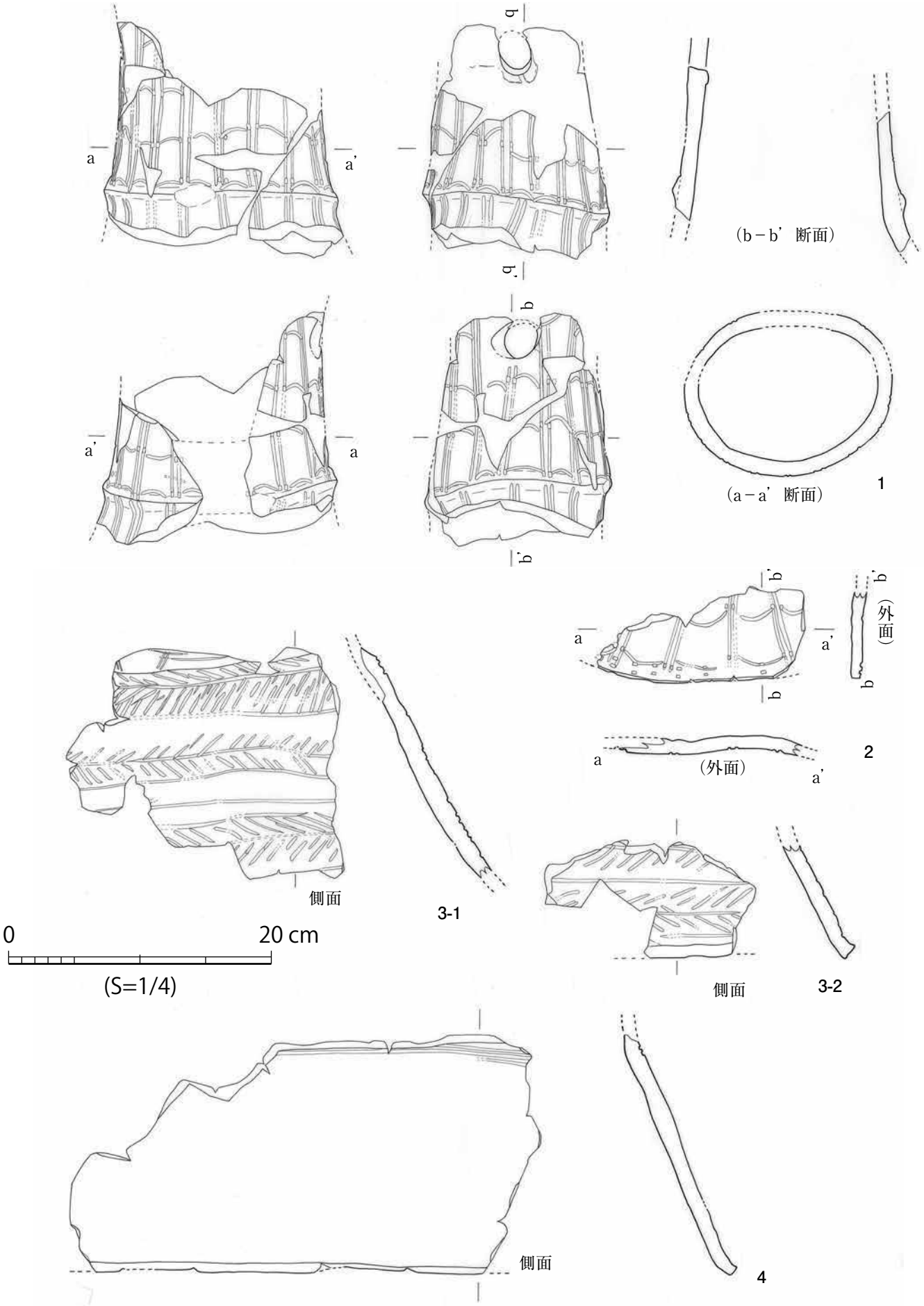


図 5-12　西造出　人物埴輪（武人ほか）

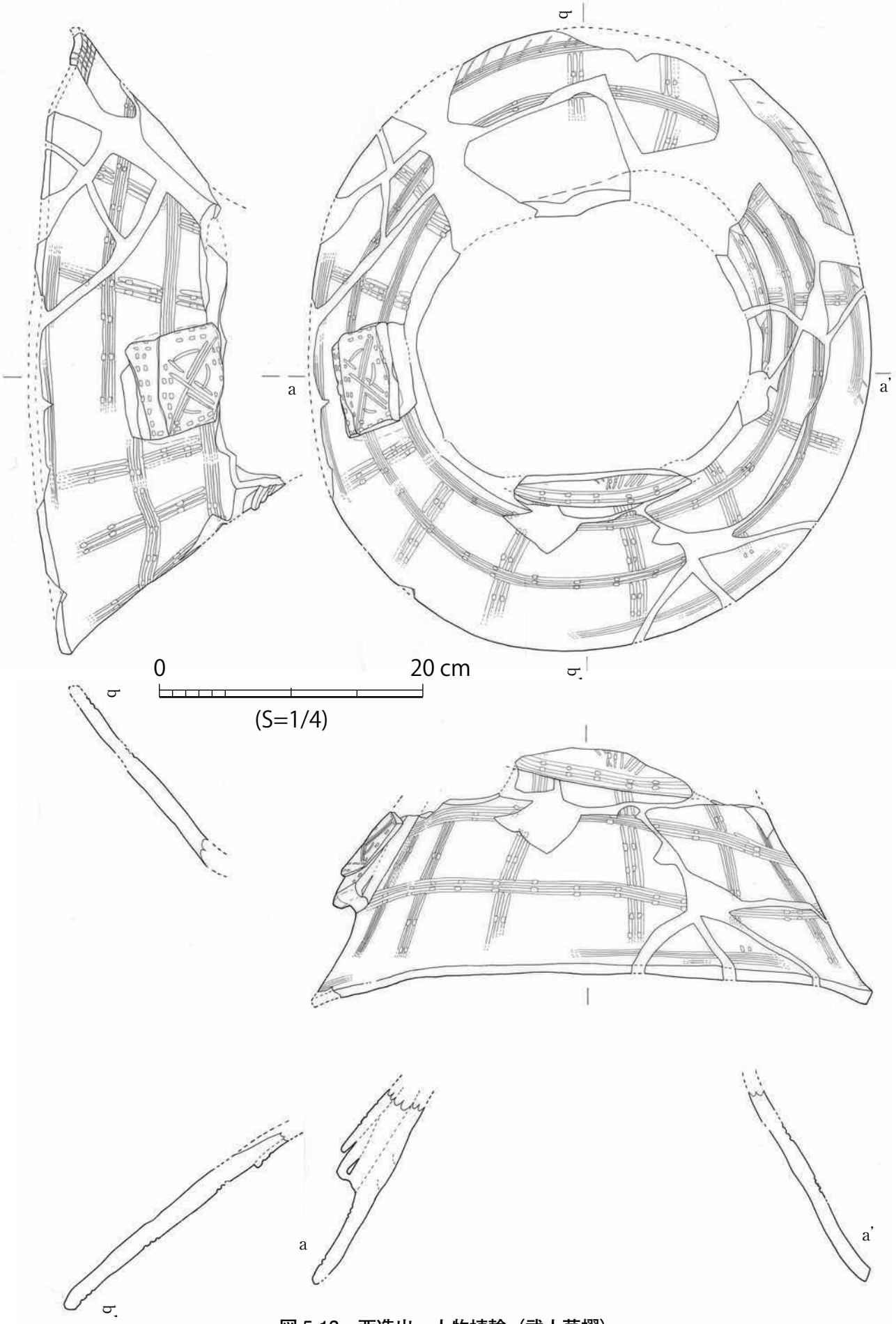


図 5-13　西造出　人物埴輪（武人草摺）

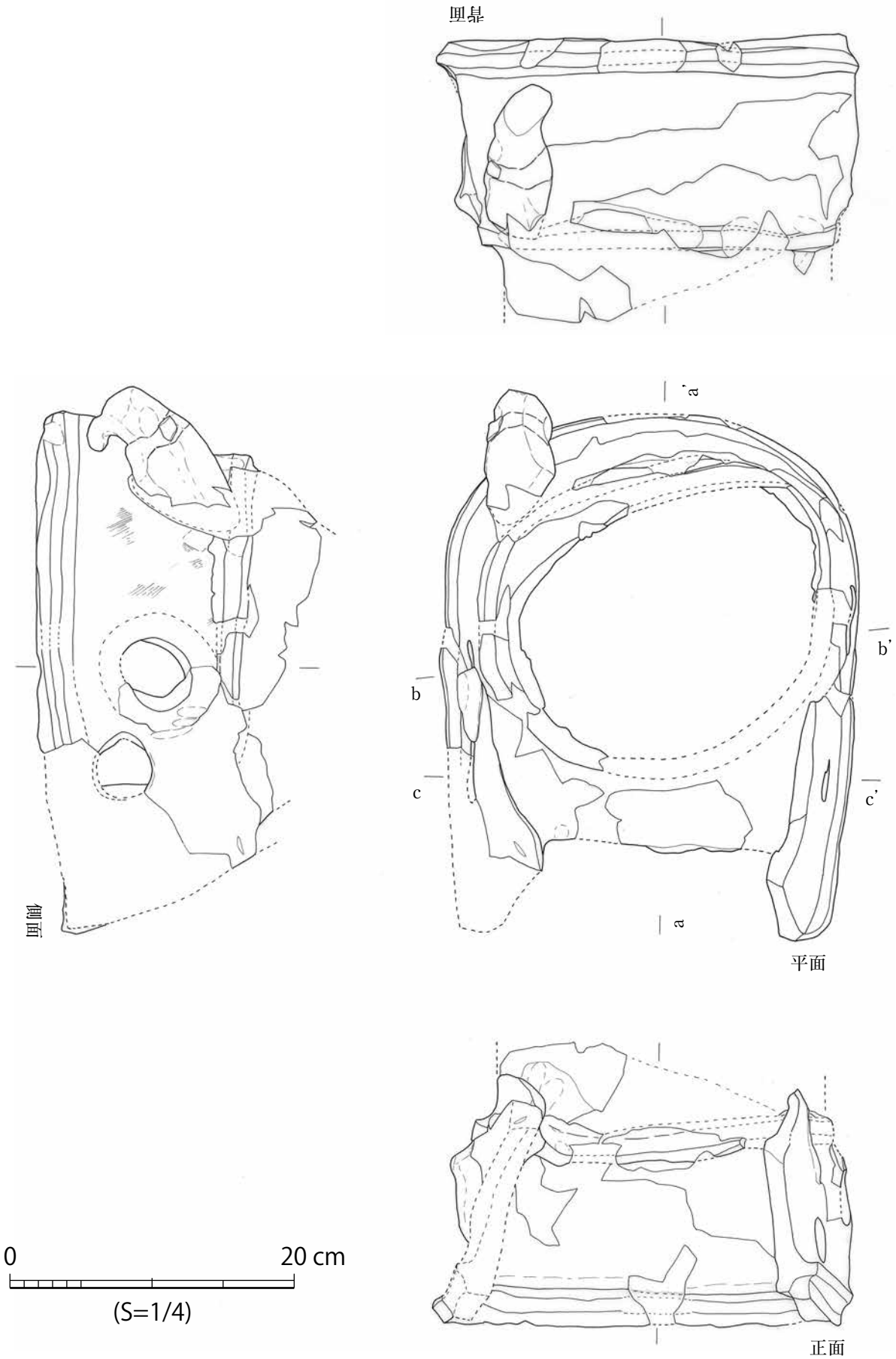


図 5-14　西造出　人物埴輪（人物埴輪基部①）

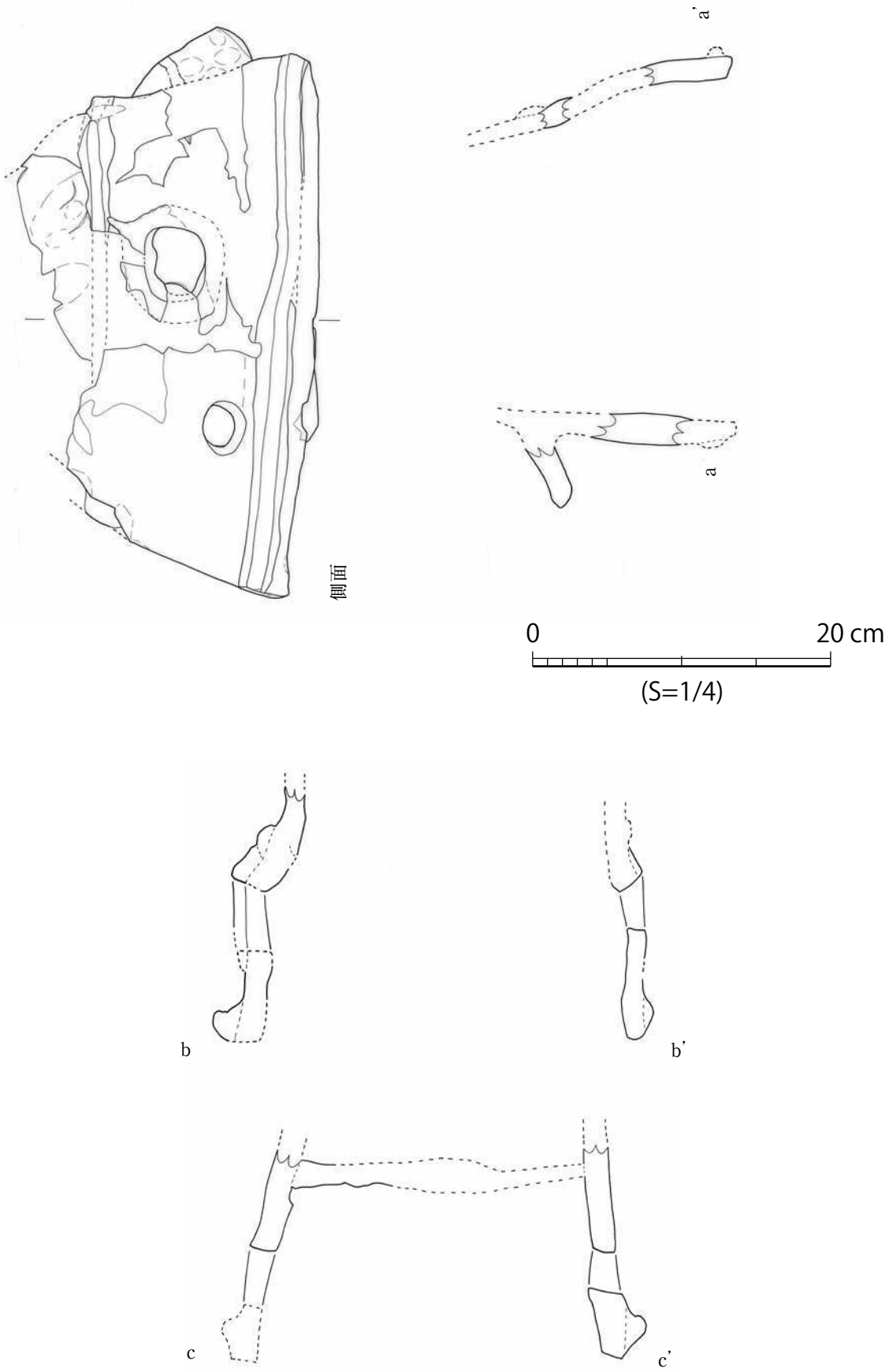


図 5-15　西造出　人物埴輪（人物埴輪基部②）

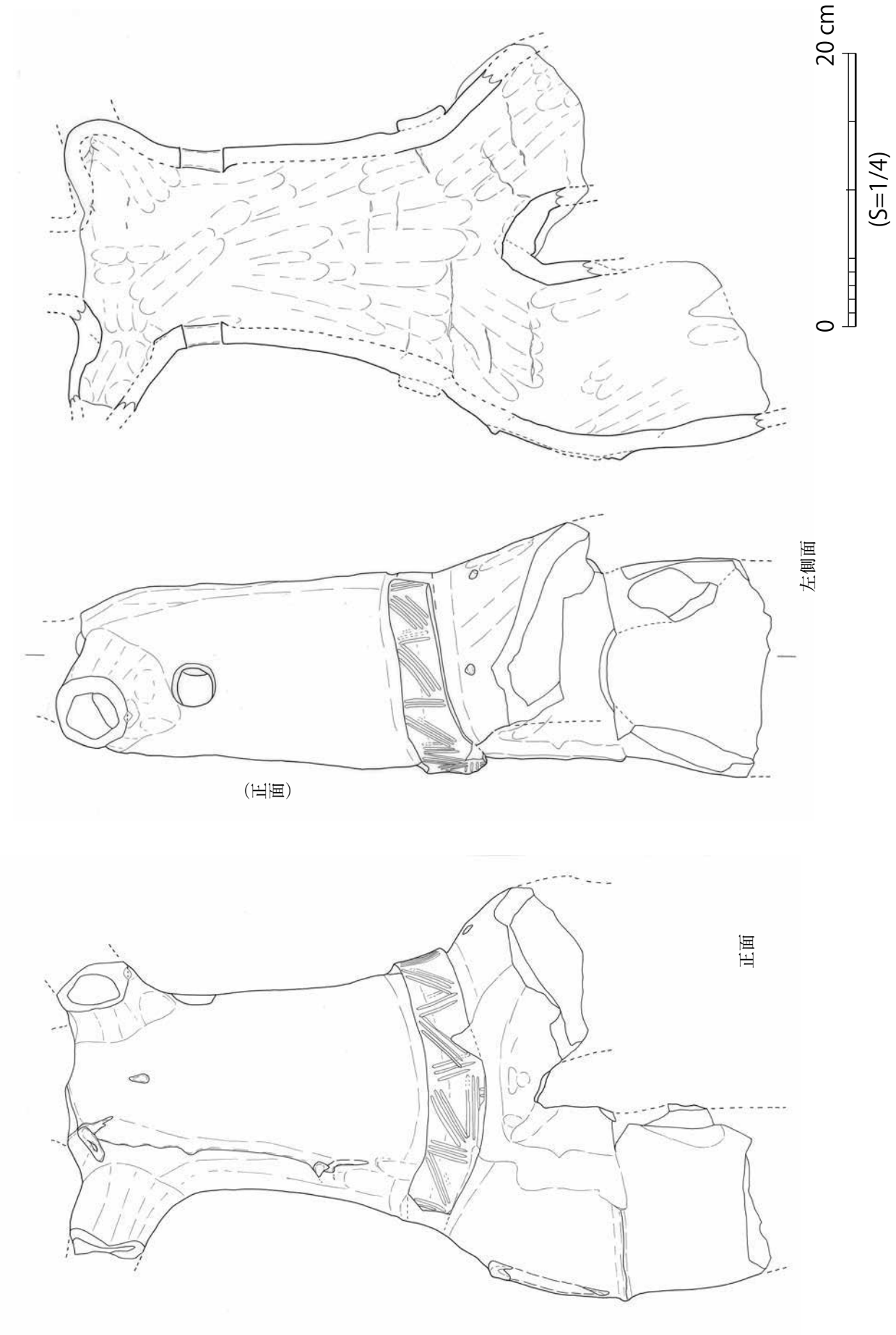


図 5-16　西造出　人物埴輪（両手をあげる人物①）

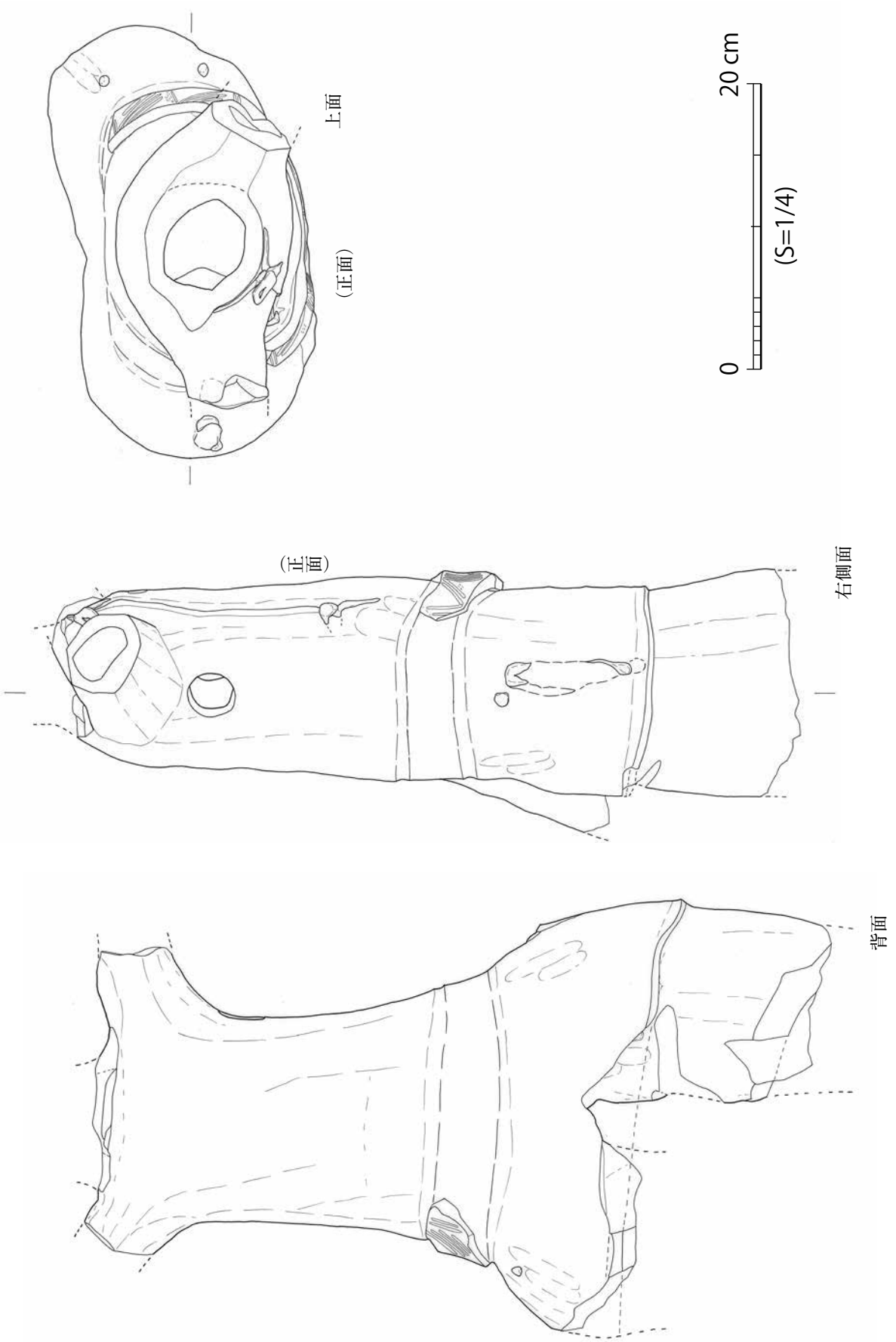


図 5-17　西造出　人物埴輪（両手をあげる人物②）

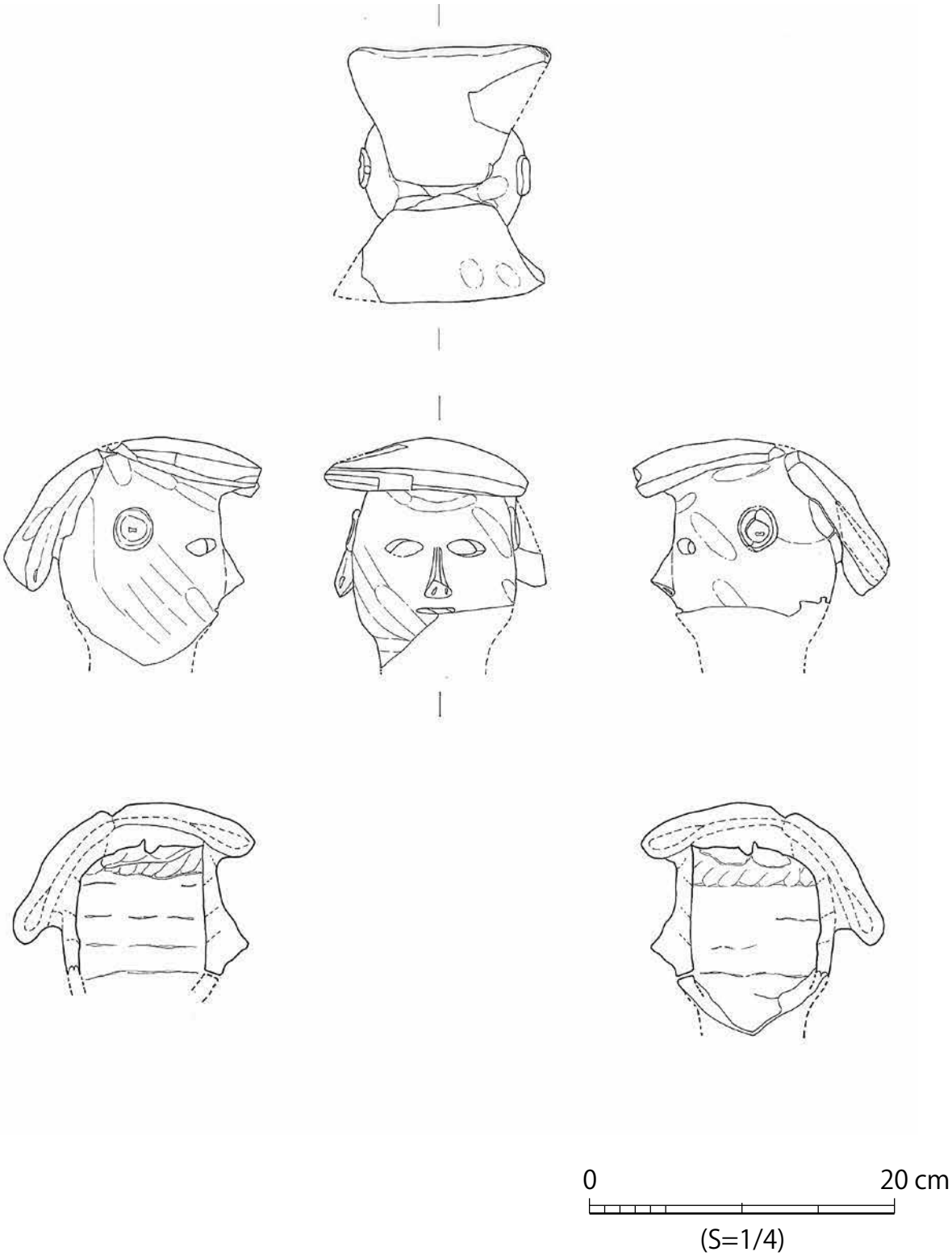


図 5-18　西造出　人物埴輪（巫女頭部）

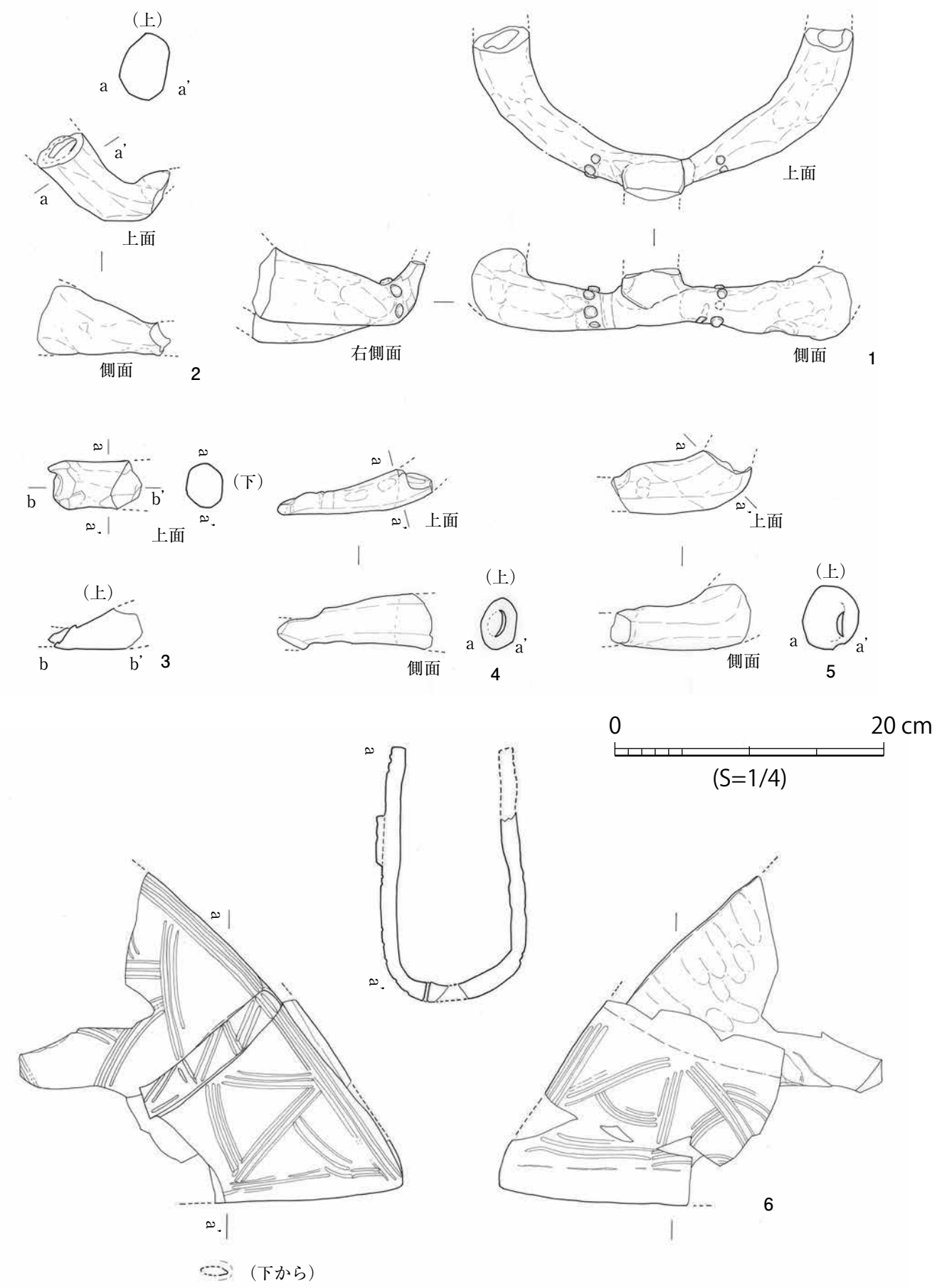


図 5-19　西造出　人物埴輪（巫女）

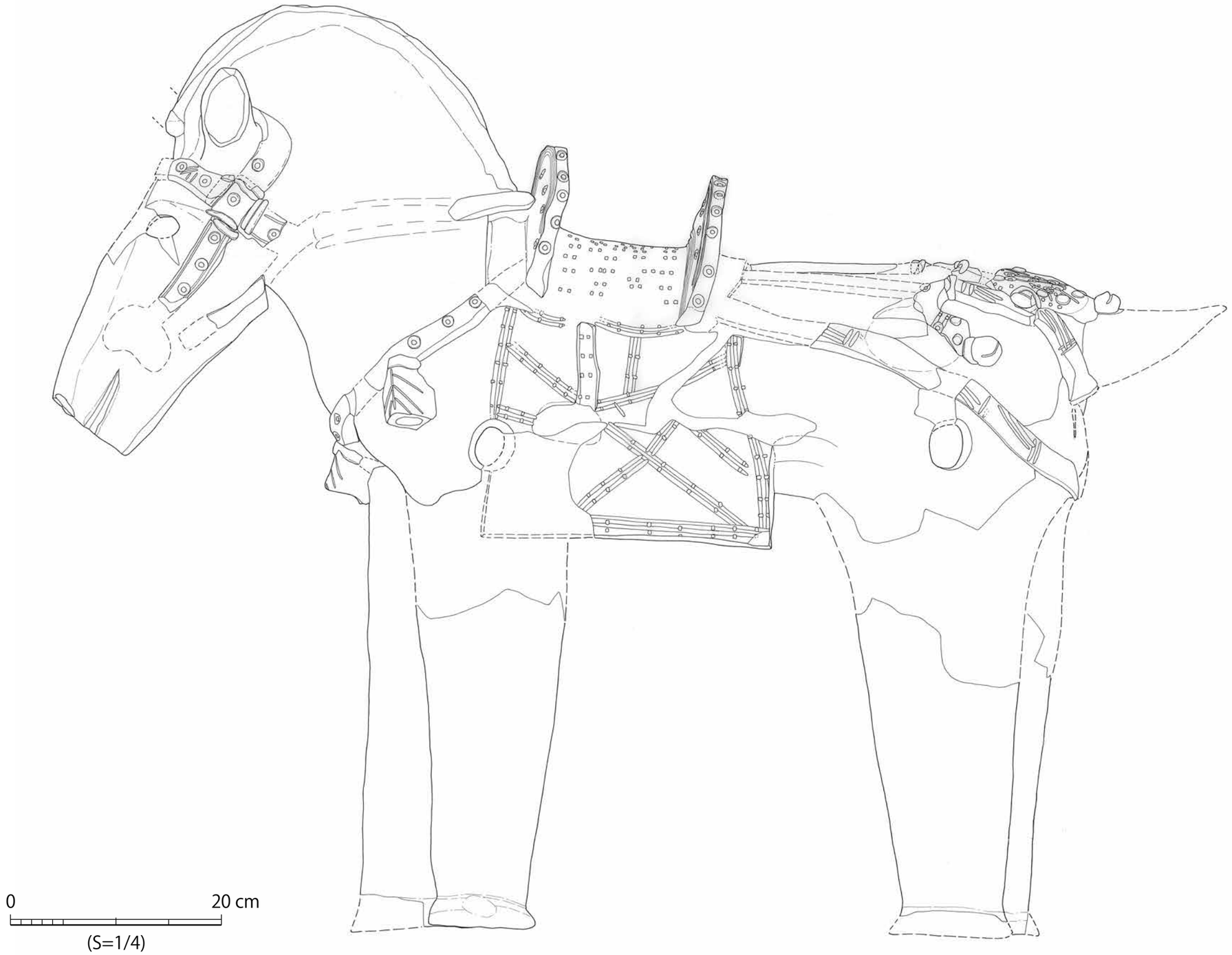


図 5-20　西造出　馬形埴輪 5-1①

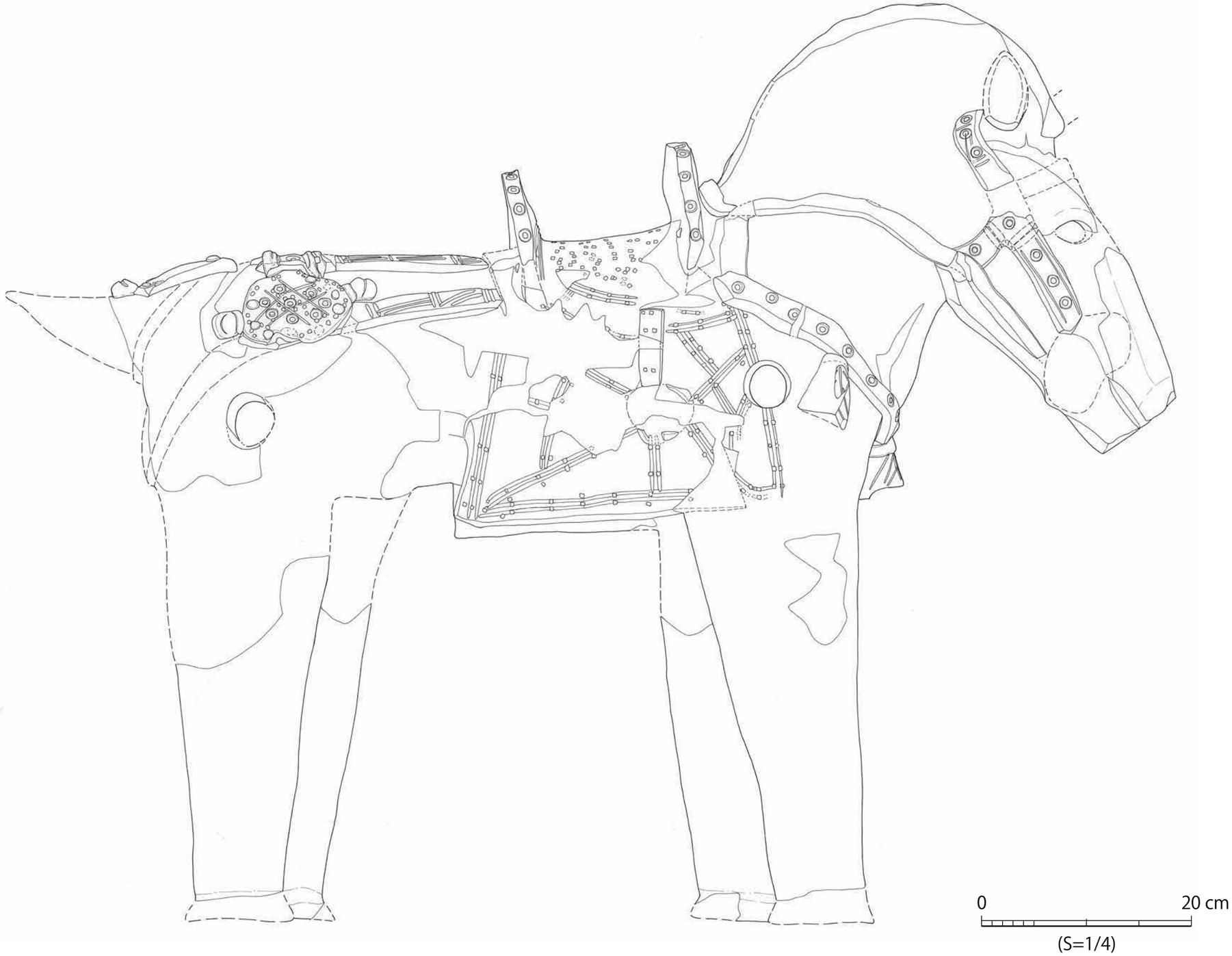
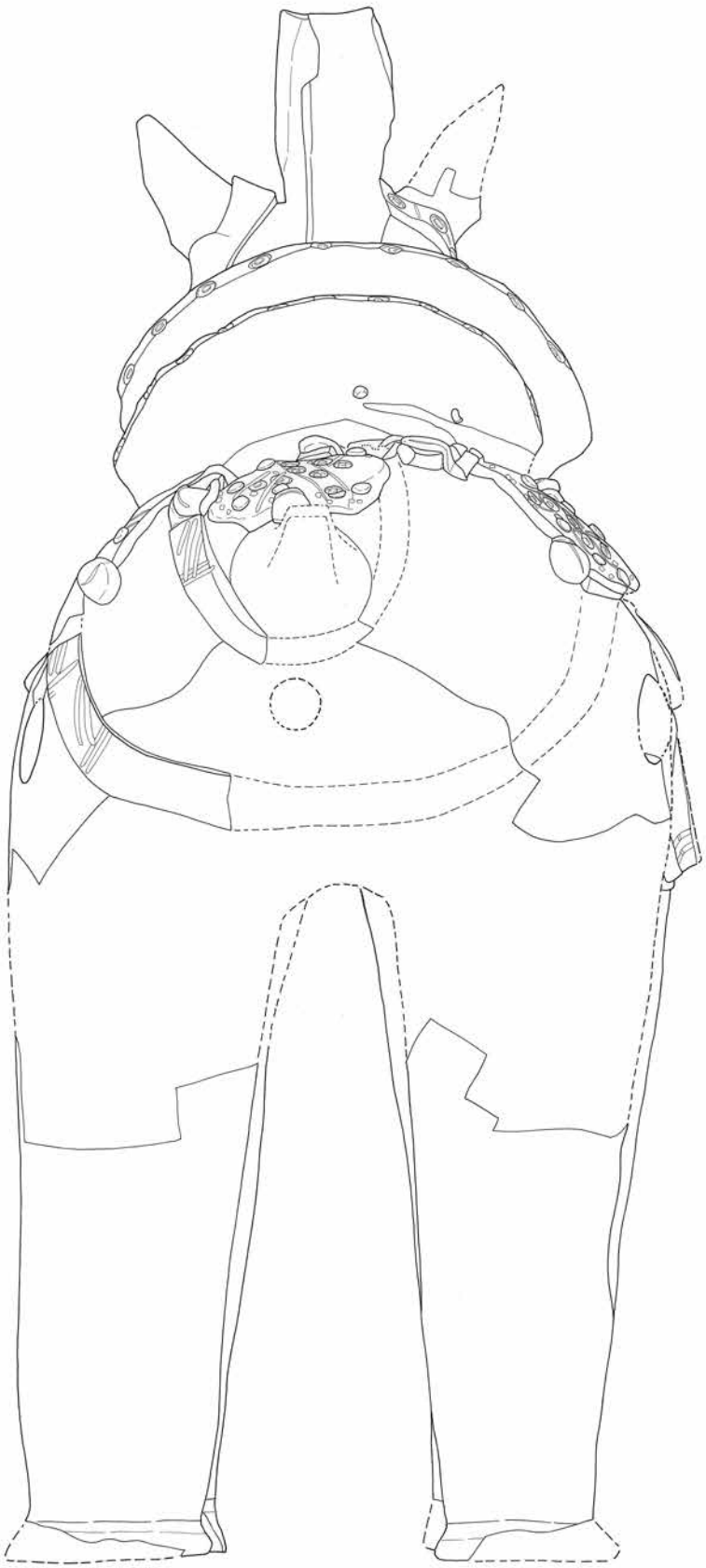


図 5-21　西造出　馬形埴輪 5-1②

0　　20 cm

(S=1/4)

図 5-22　西造出　馬形埴輪 5-1③



0 20 cm

(S=1/4)

図 5-23　西造出　馬形埴輪 5-1④

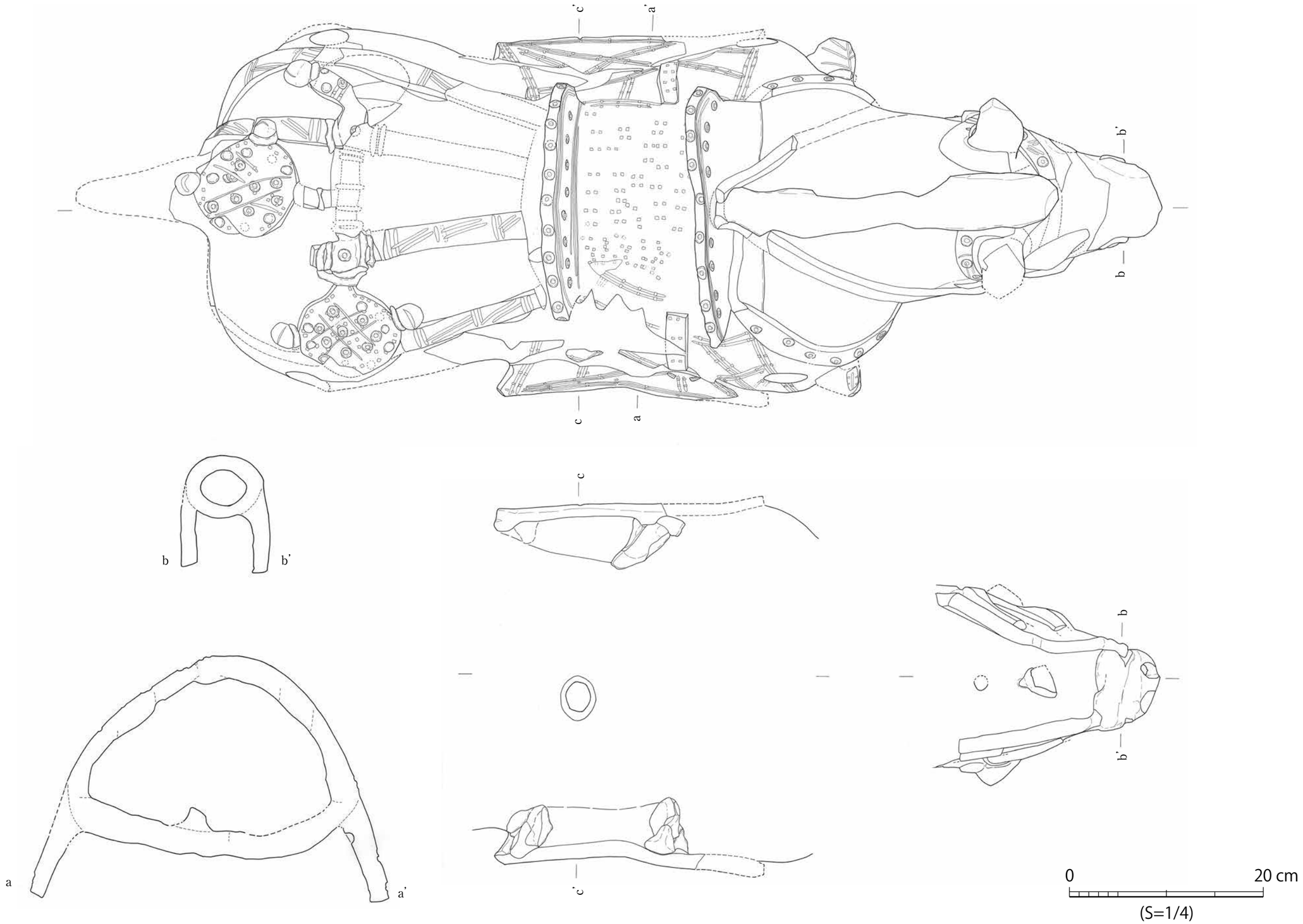


図 5-24　西造出　馬形埴輪 5-1⑤

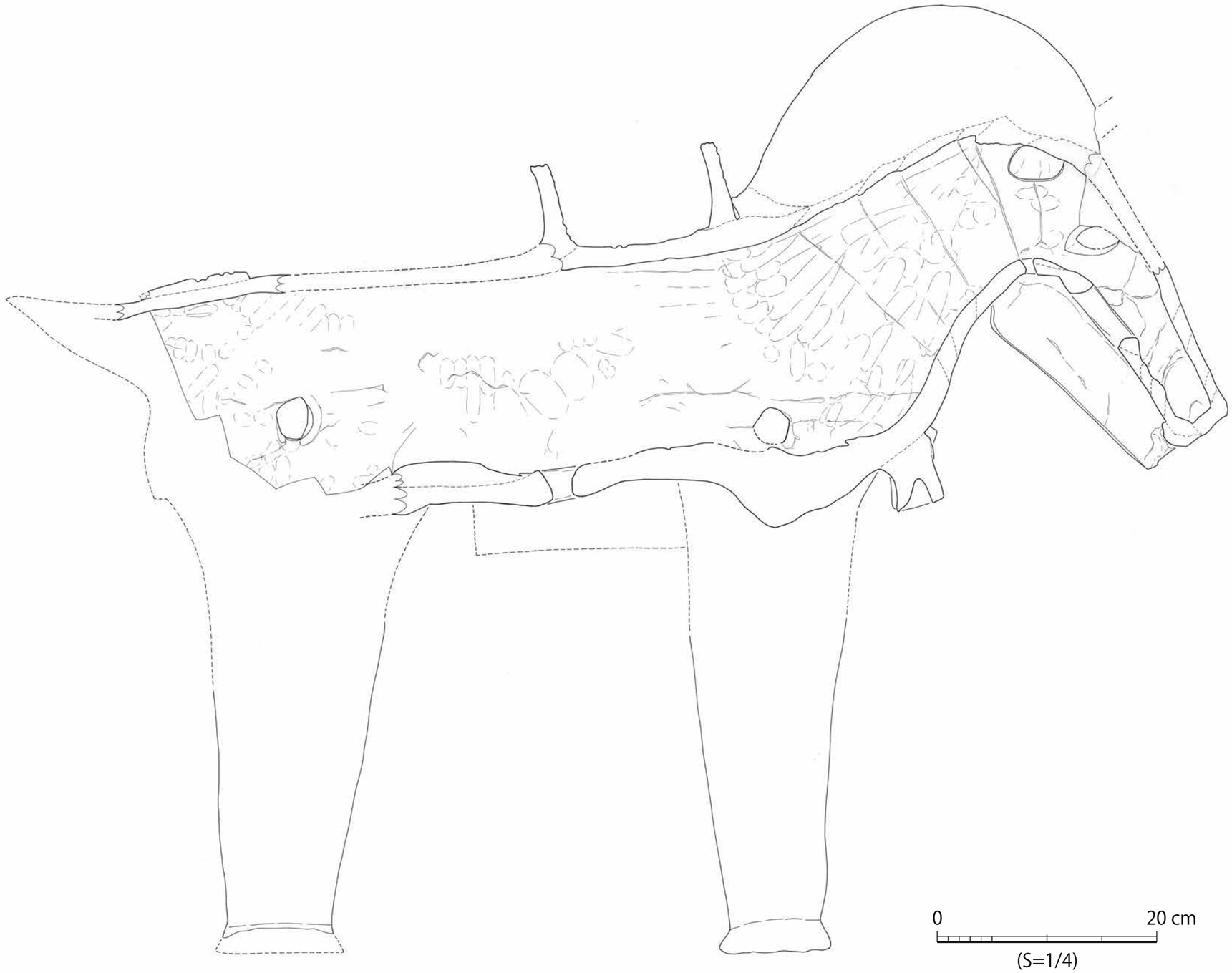
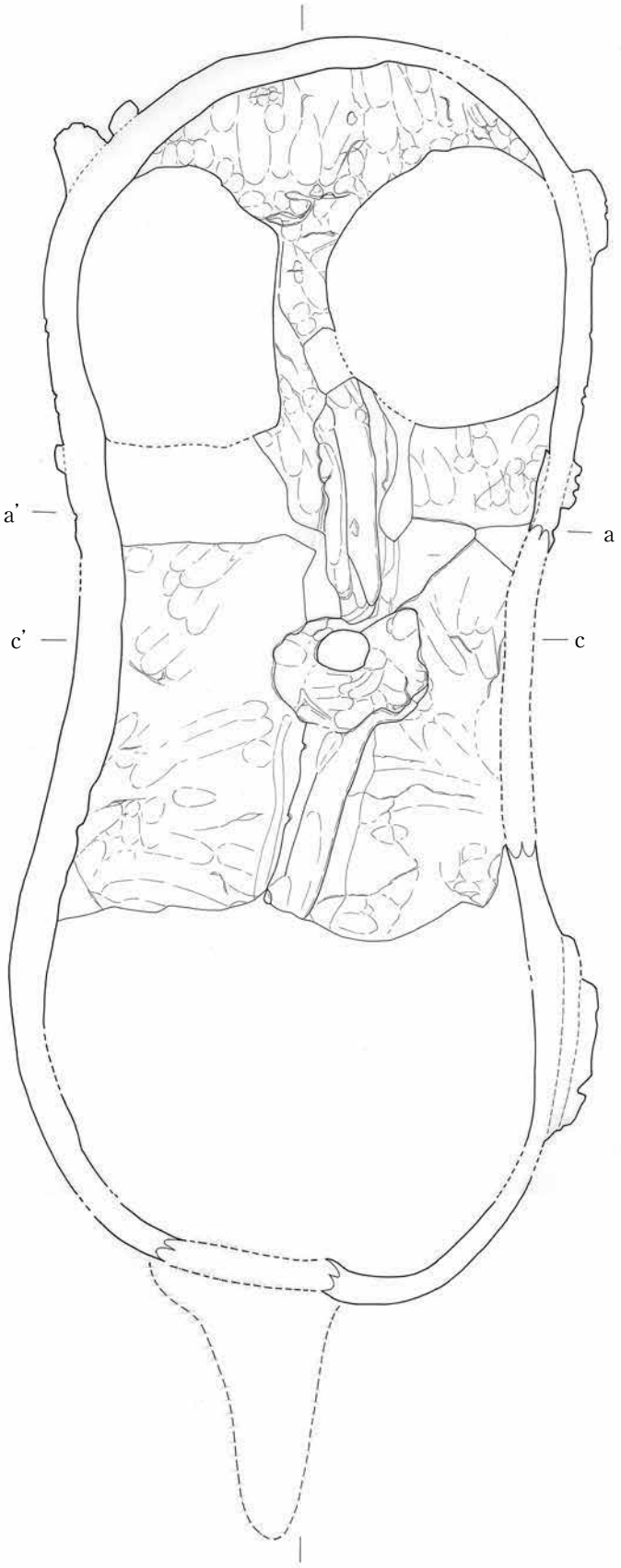


図 5-25　西造出　馬形埴輪 5-1⑥



0 20 cm

(S=1/4)

図 5-26　西造出　馬形埴輪 5-1⑦

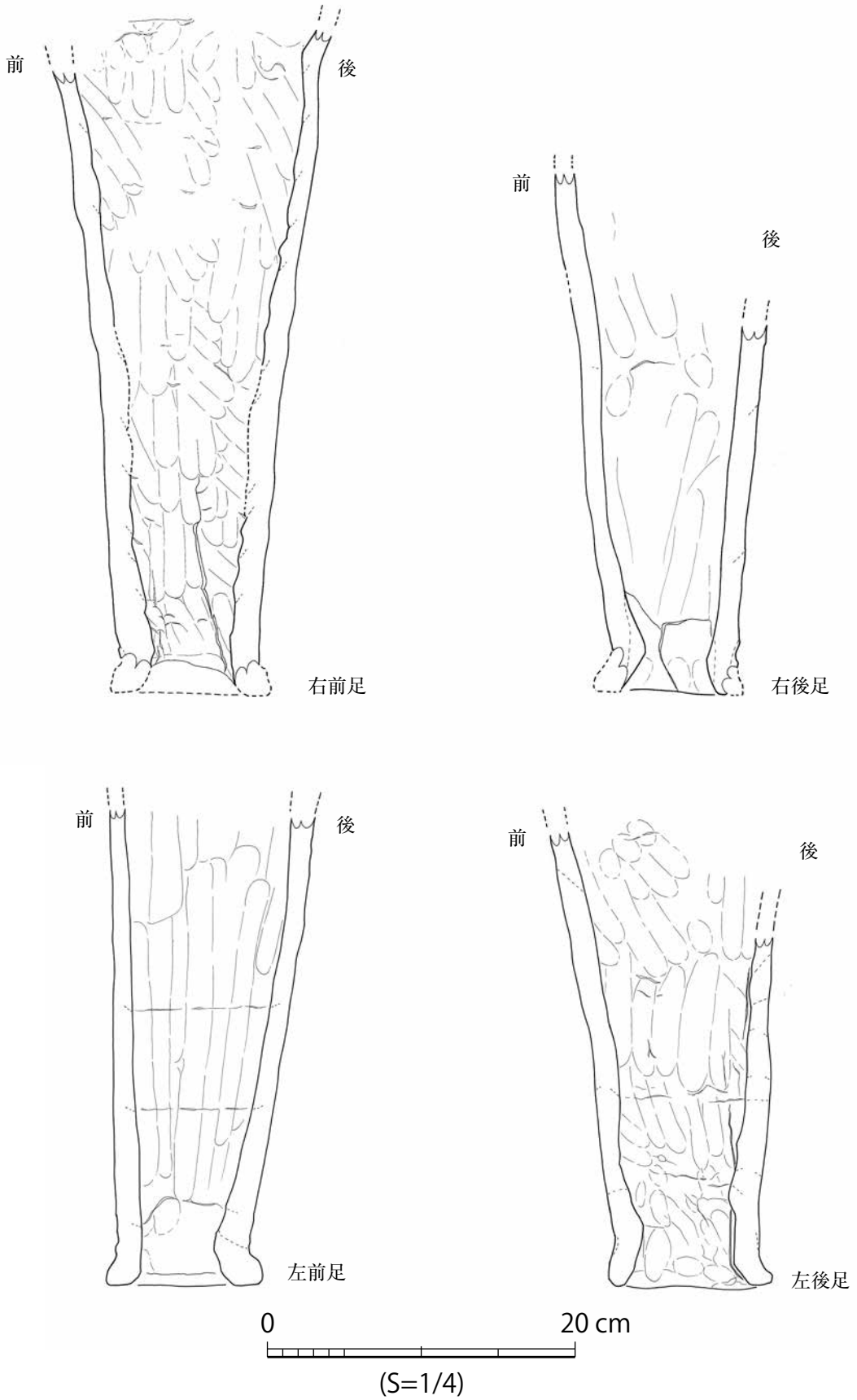


図 5-27　西造出　馬形埴輪 5-1⑧

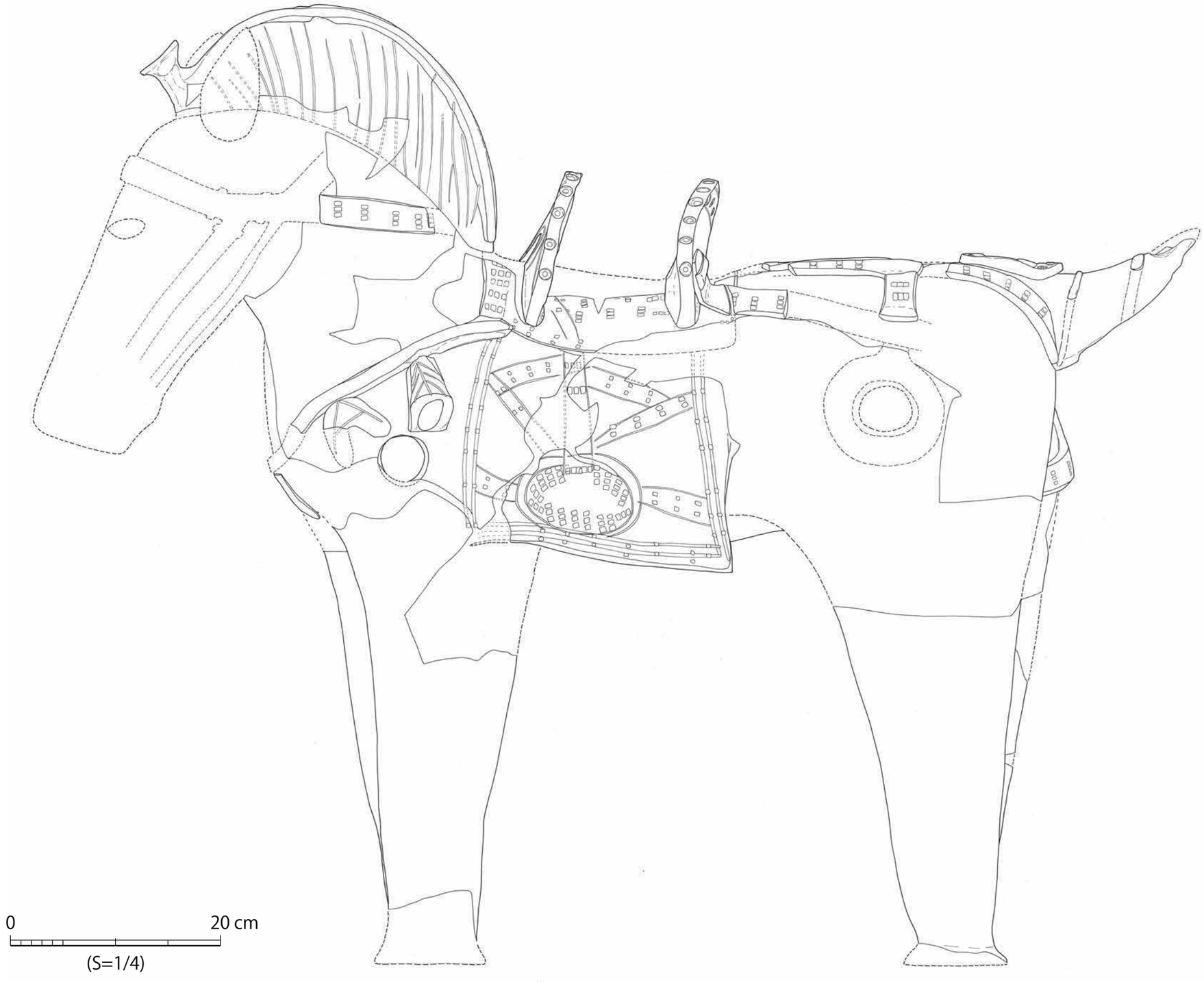


図 5-28　西造出　馬形埴輪 5-2①

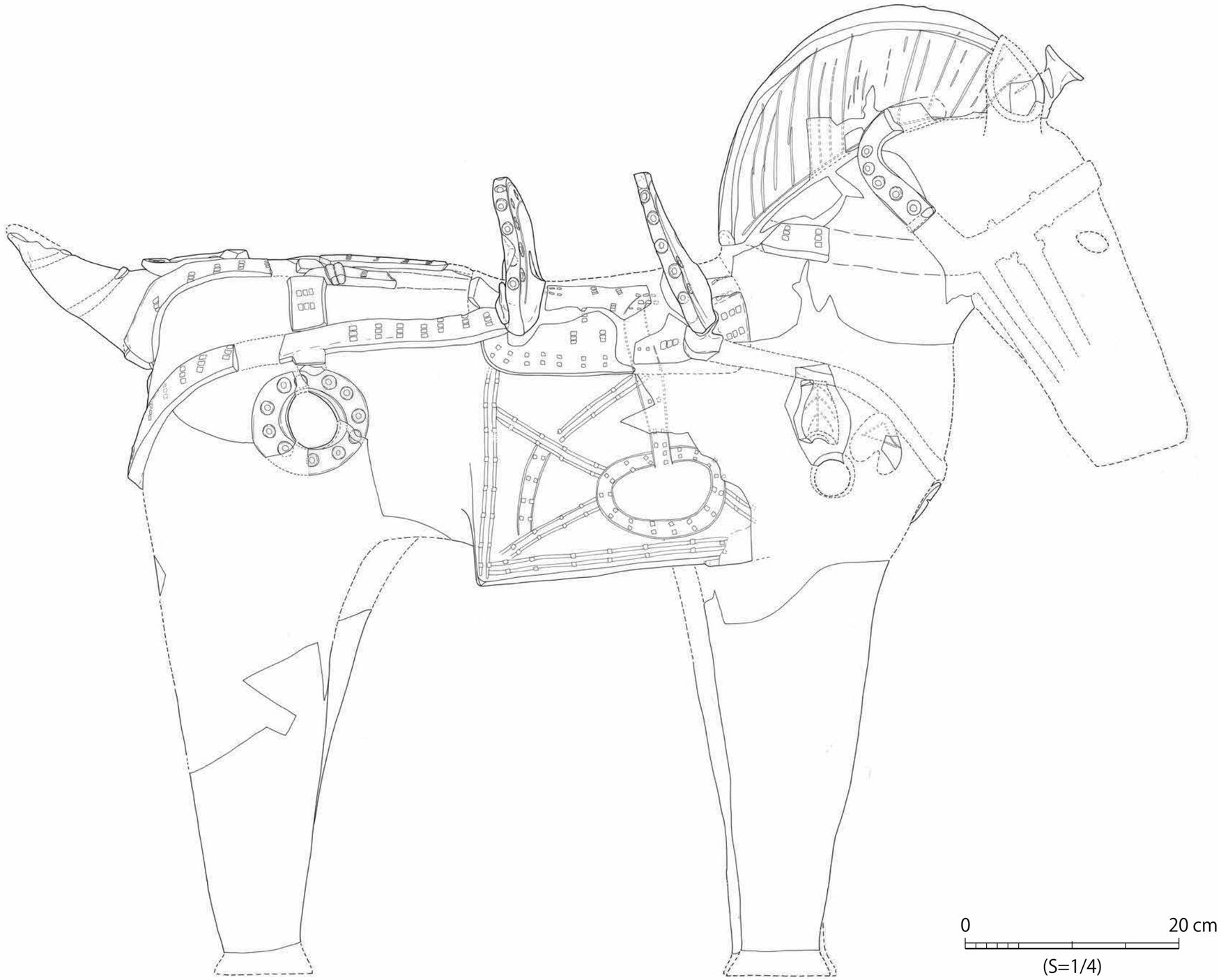
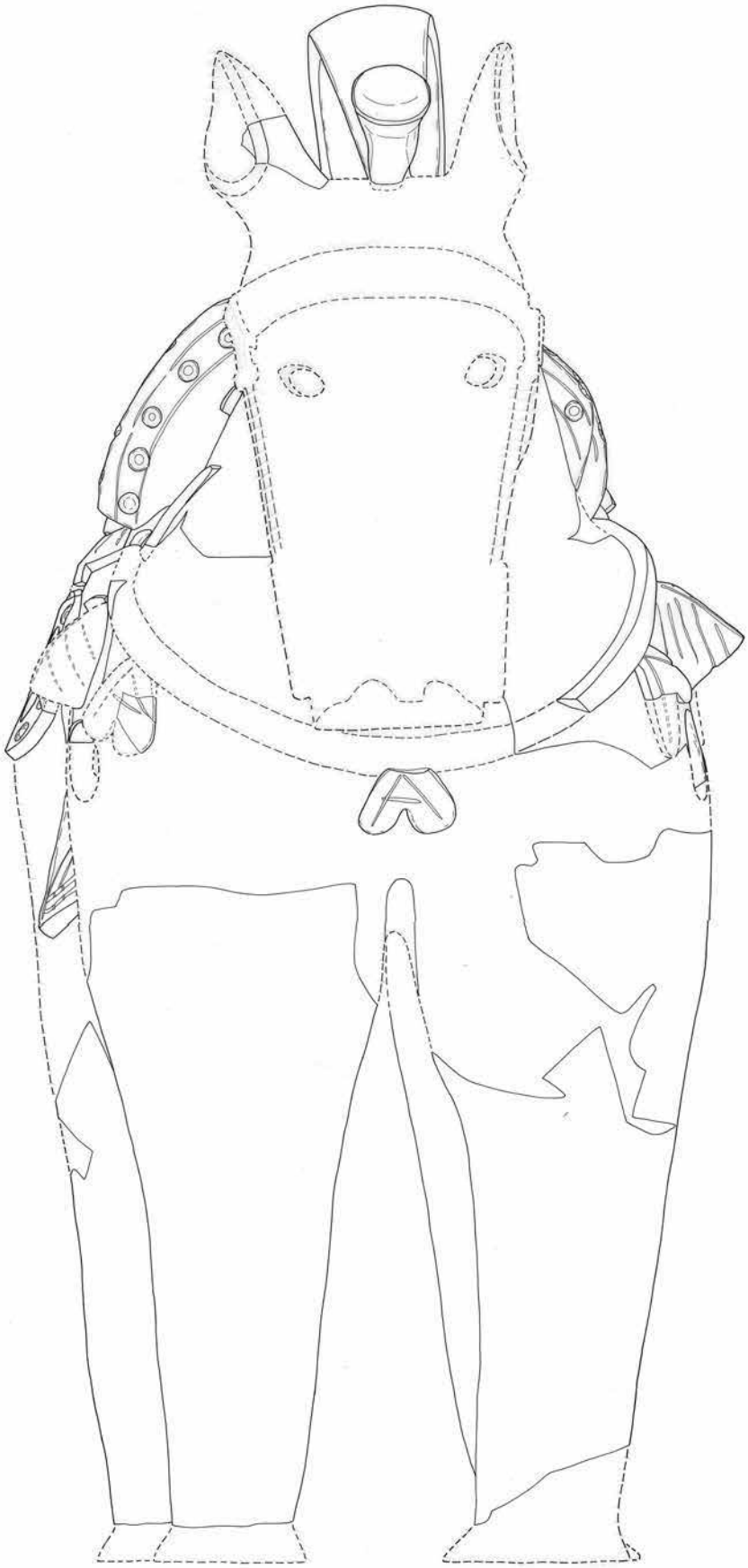


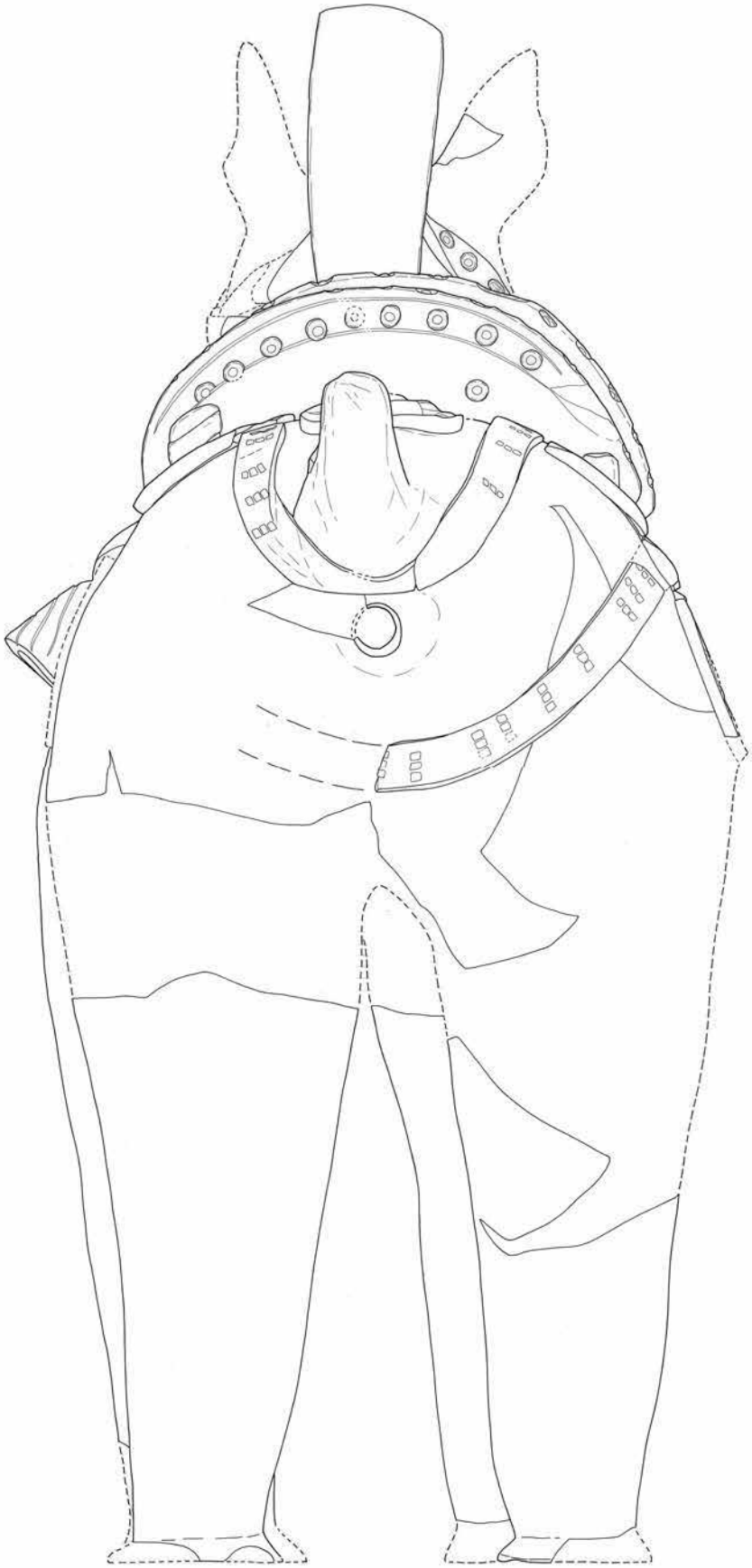
図 5-29　西造出　馬形埴輪 5-2②



0 20 cm

(S=1/4)

図 5-30　西造出　馬形埴輪 5-2③



0 20 cm

(S=1/4)

図 5-31　西造出　馬形埴輪 5-2④

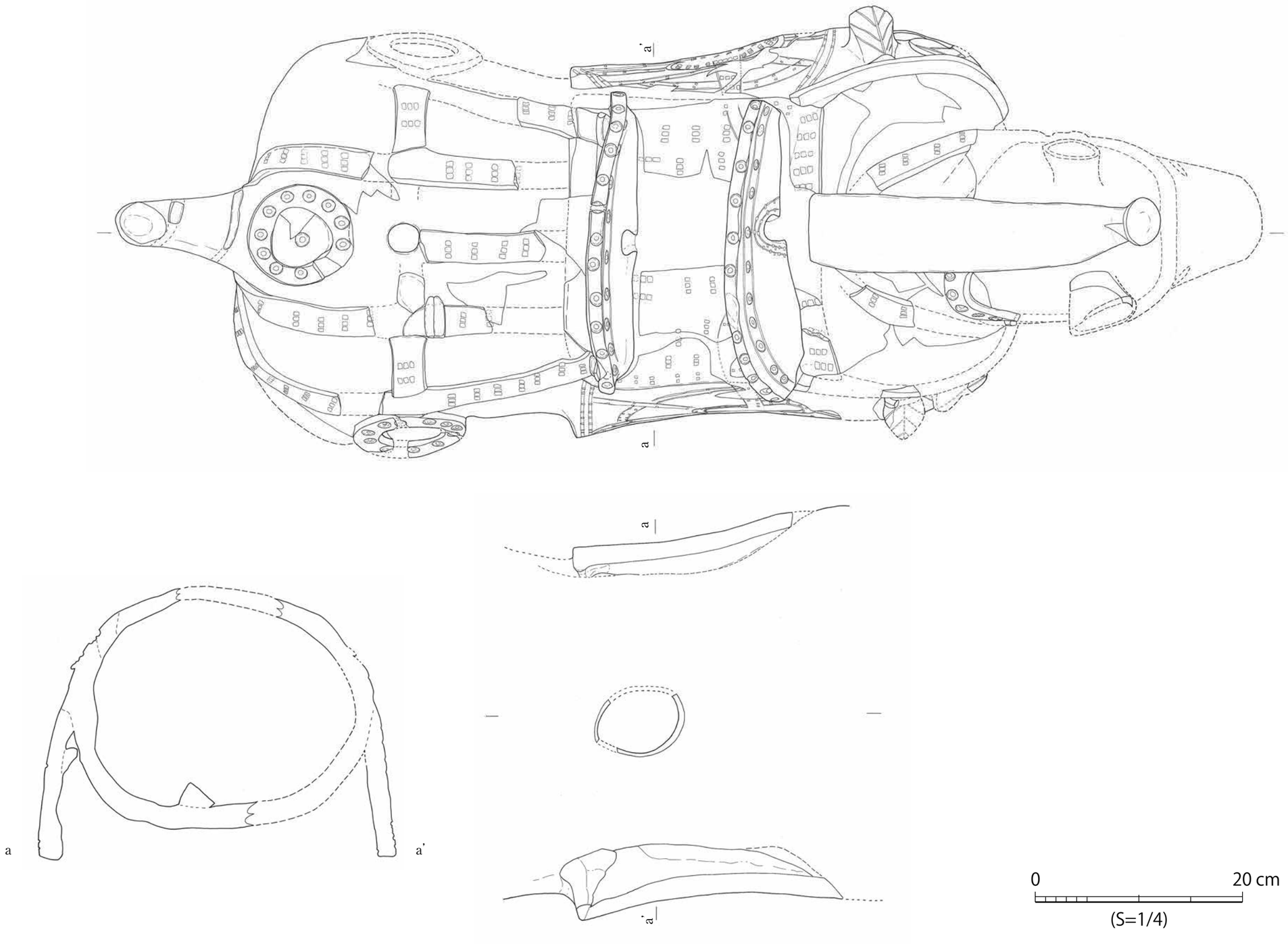


図 5-32　西造出　馬形埴輪 5-2⑤

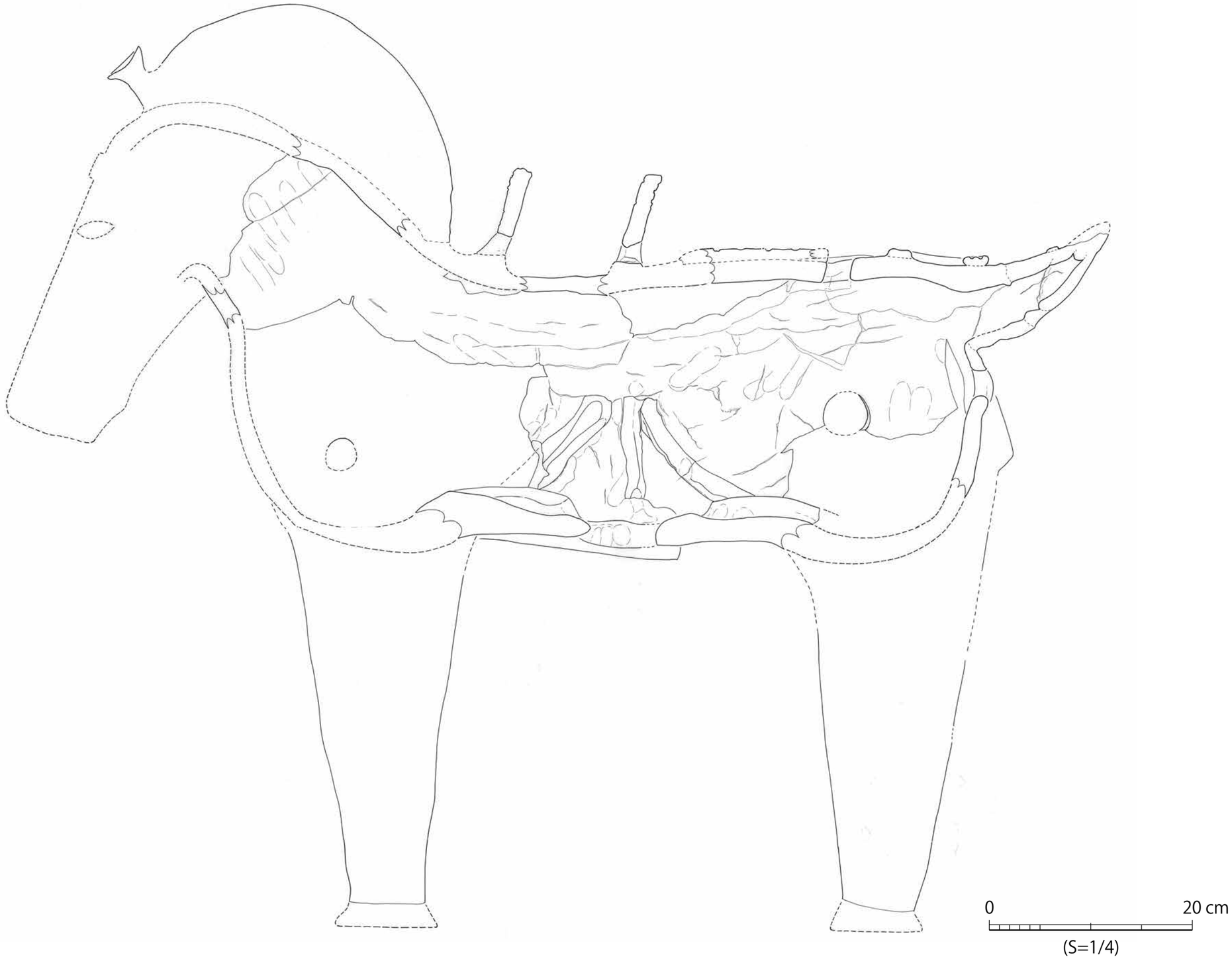


図 5-33　西造出　馬形埴輪 5-2⑥

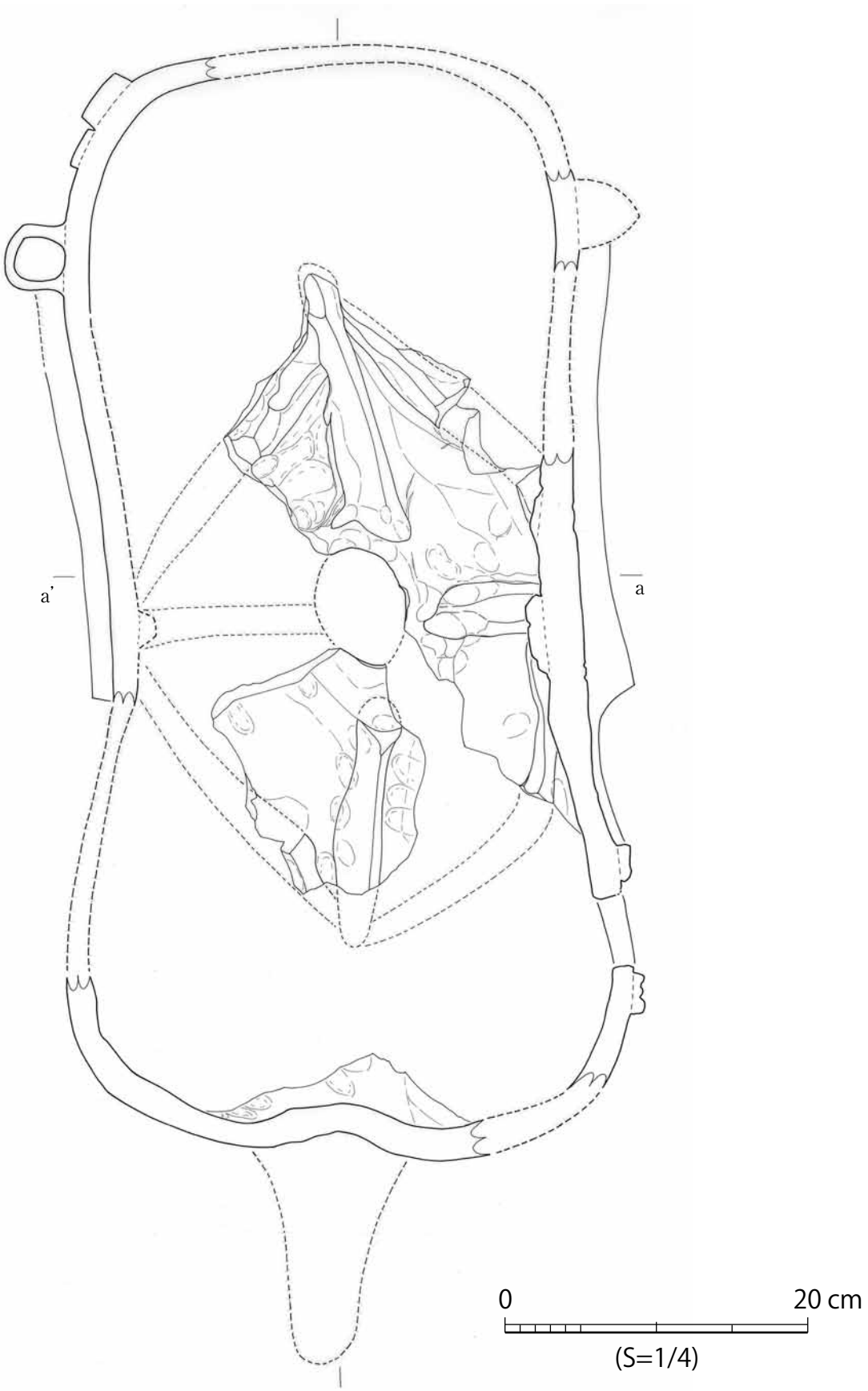


図 5-34　西造出　馬形埴輪 5-2⑦

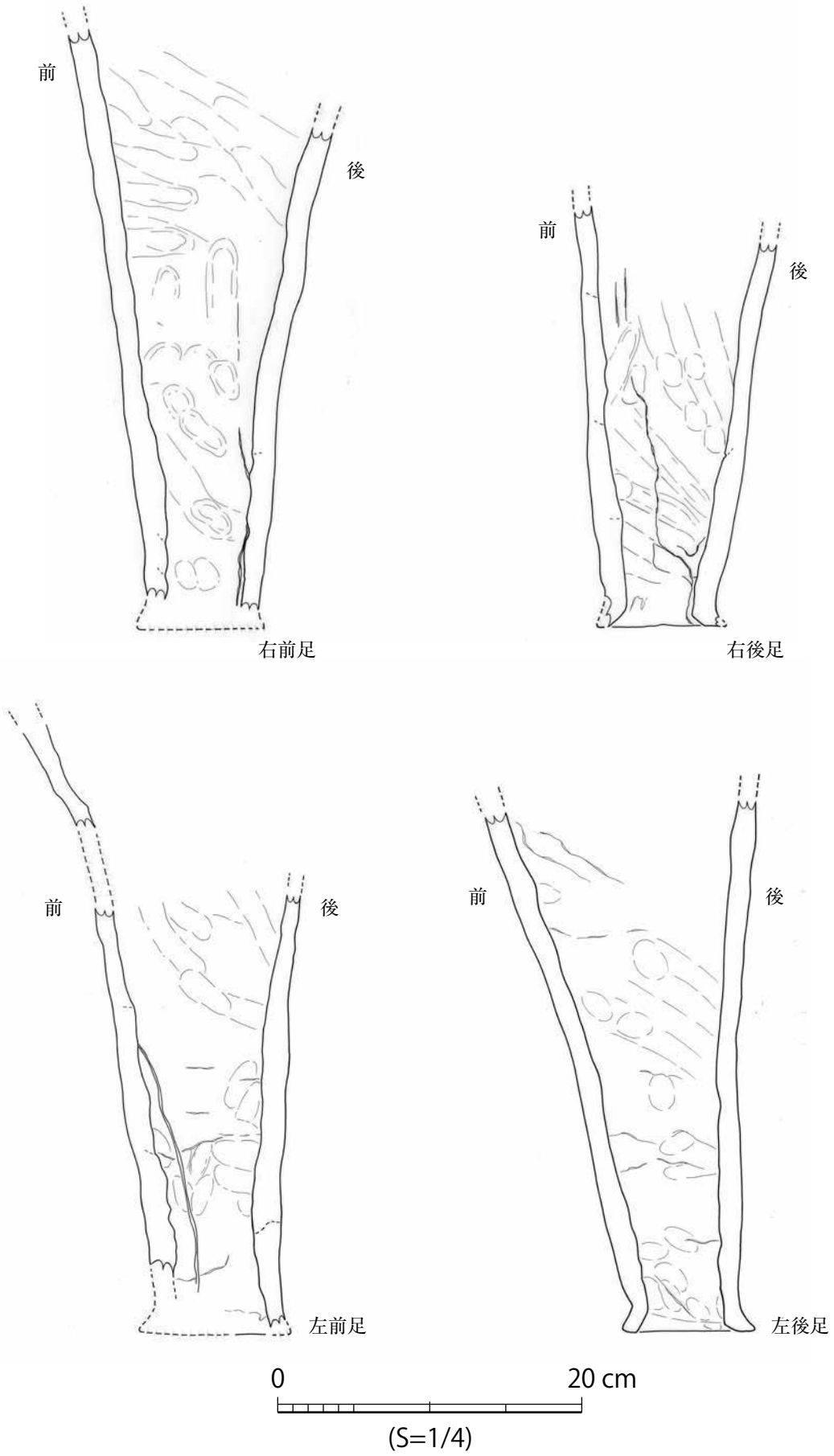


図 5-35　西造出　馬形埴輪 5-2⑧

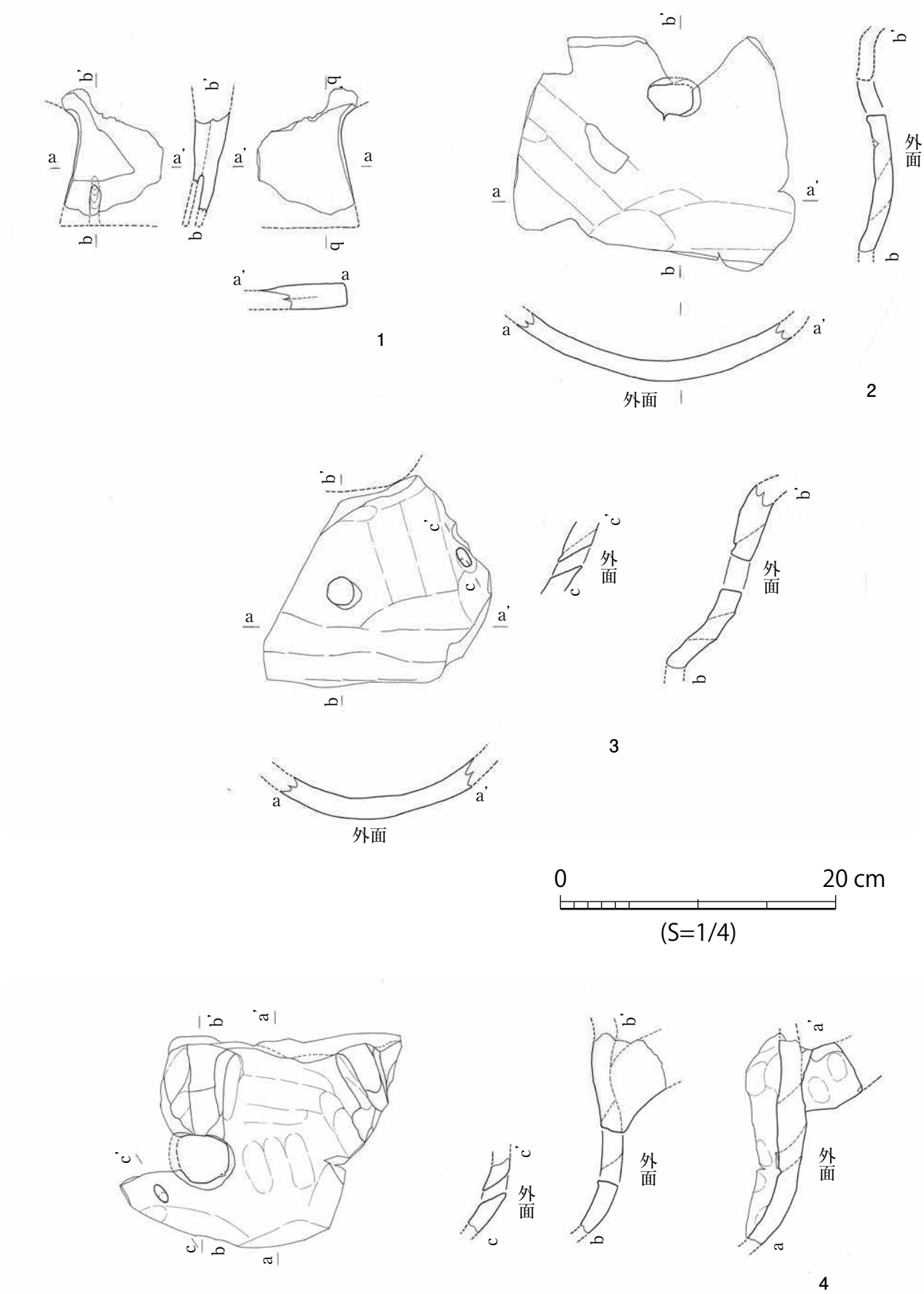


図 5-36　西造出　翼を広げた鳥形埴輪

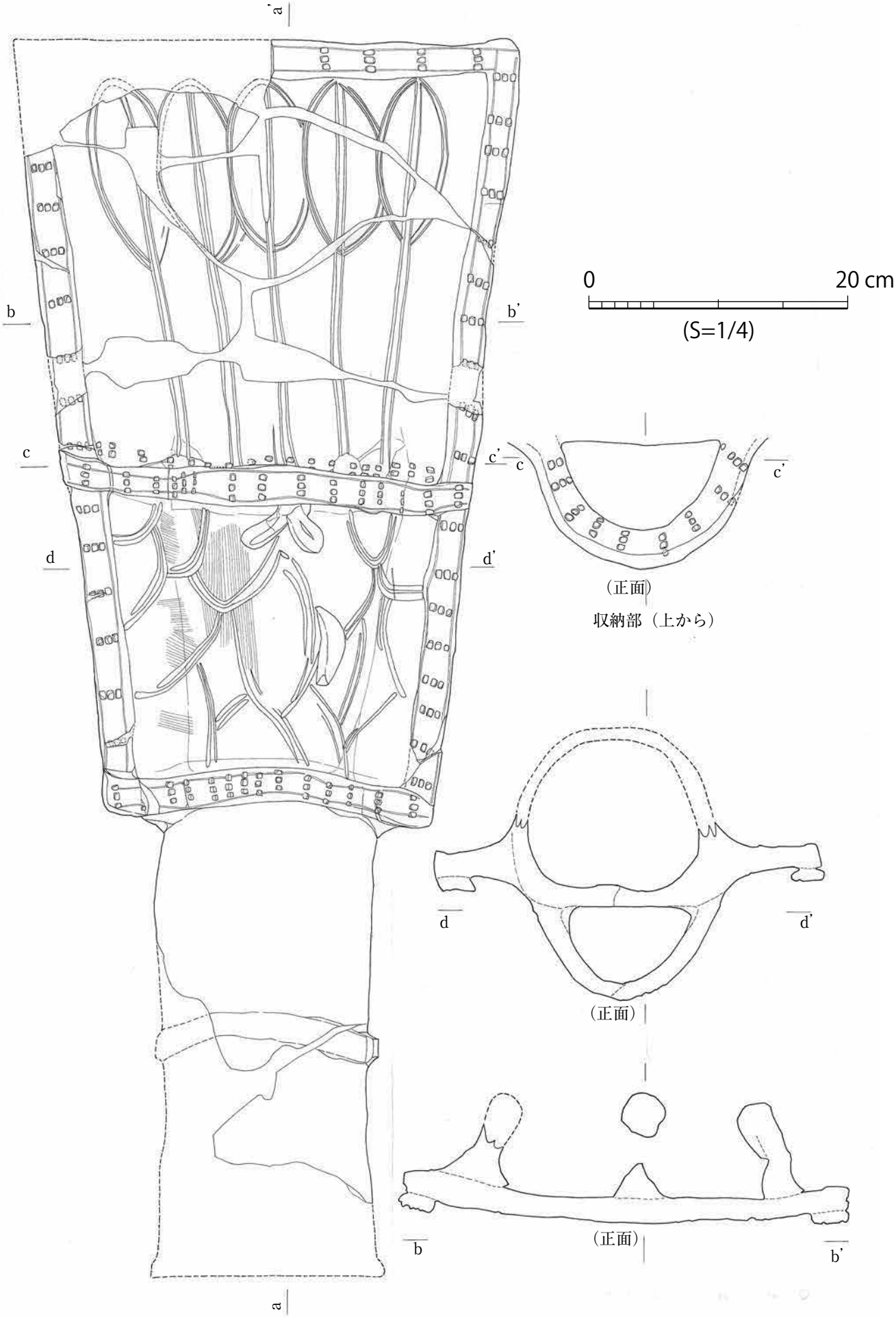


図 5-37　西造出　胡籙形埴輪 5-1①

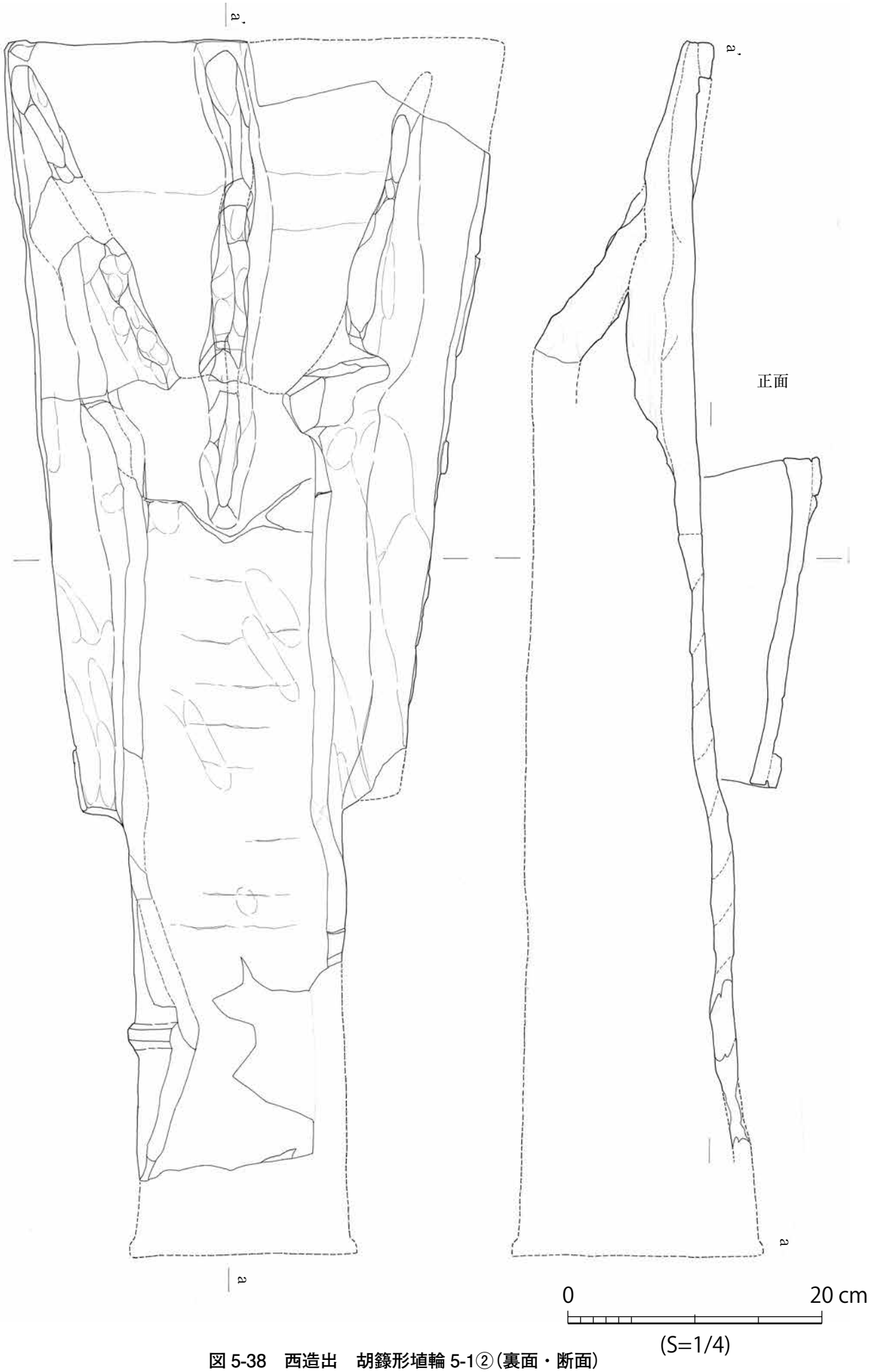


図 5-38　西造出　胡籙形埴輪 5-1②（裏面・断面）

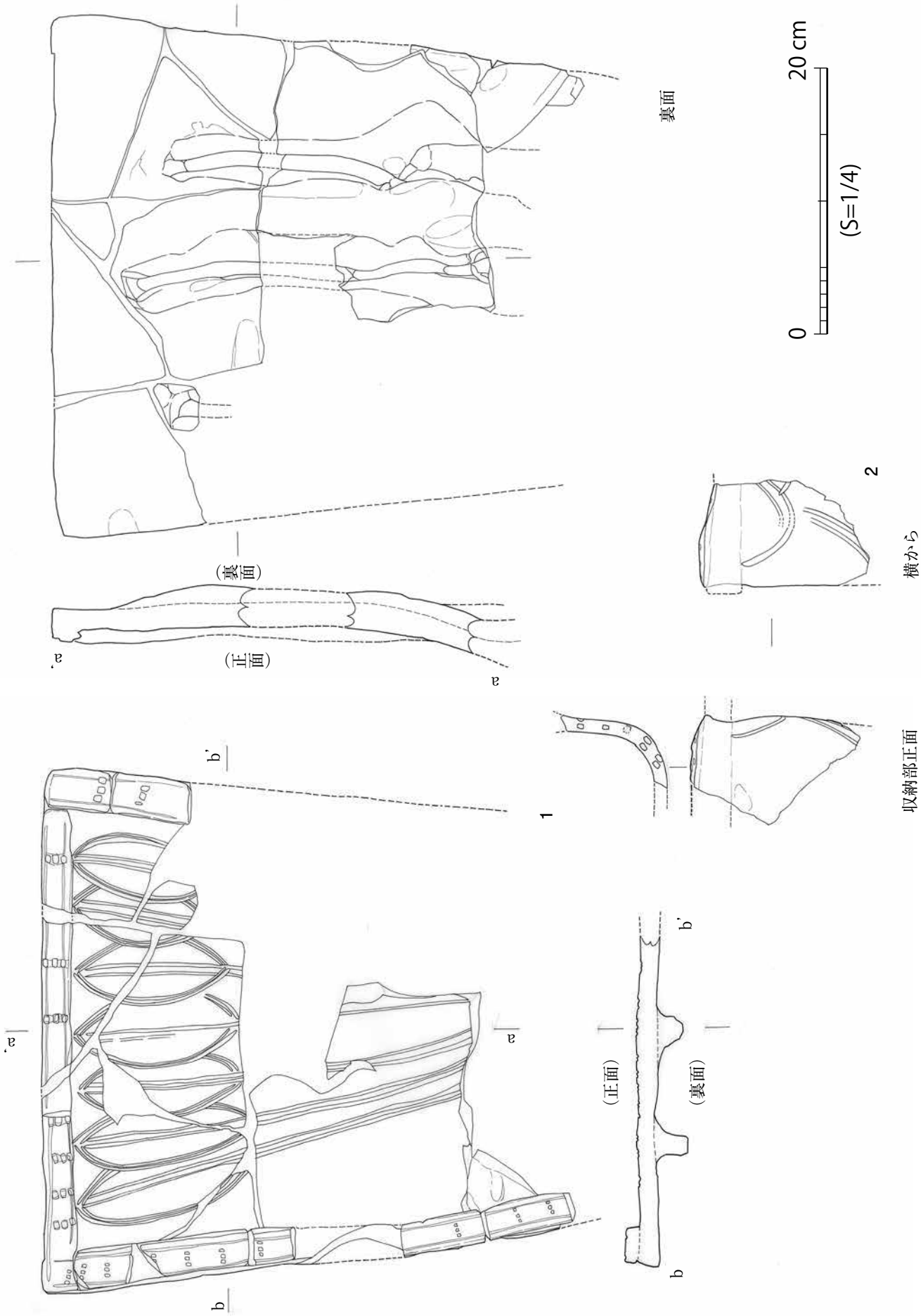


図 5-39　西造出　胡籙形埴輪 5-2

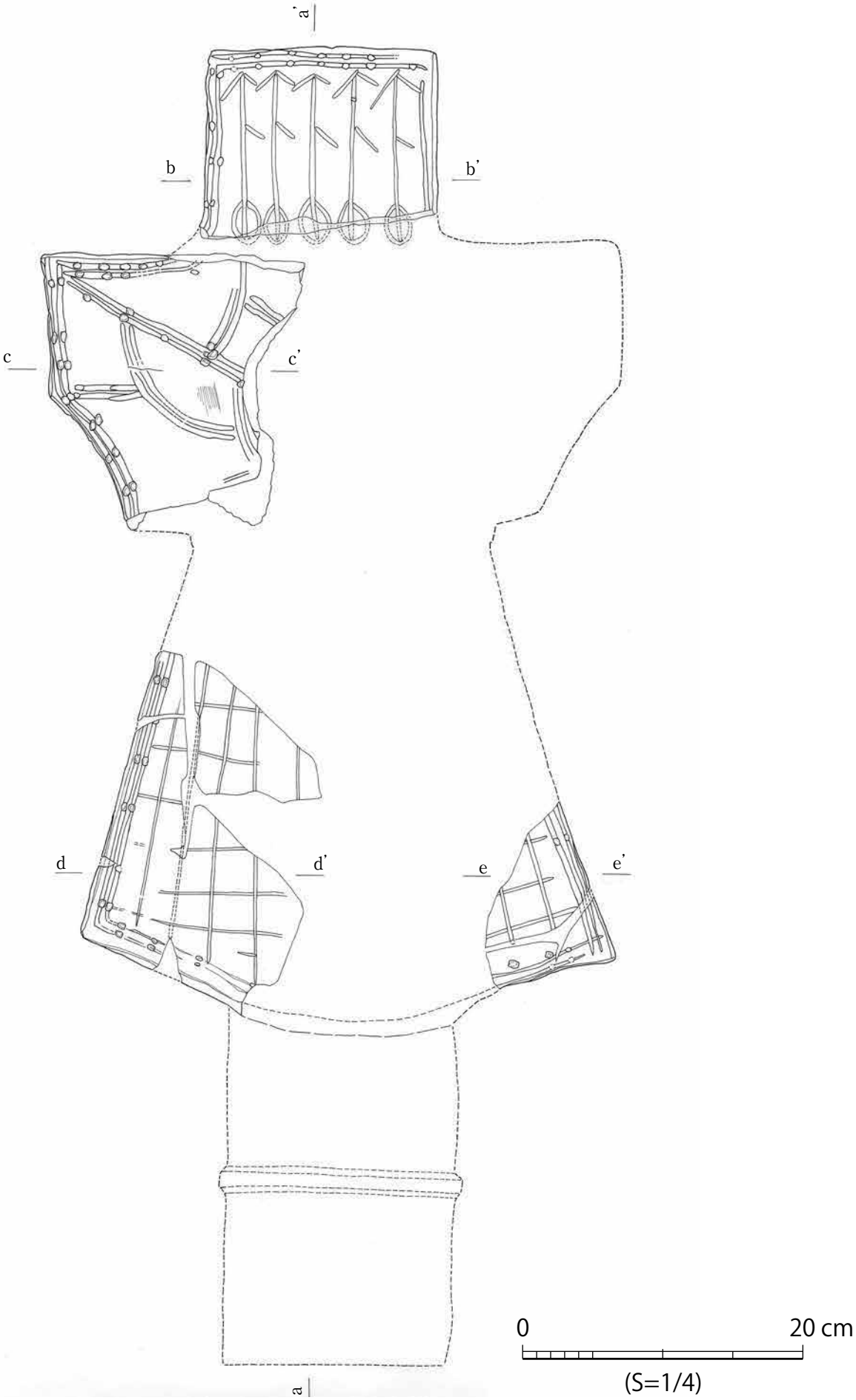


図 5-40　西造出　鞍形埴輪 5-1①

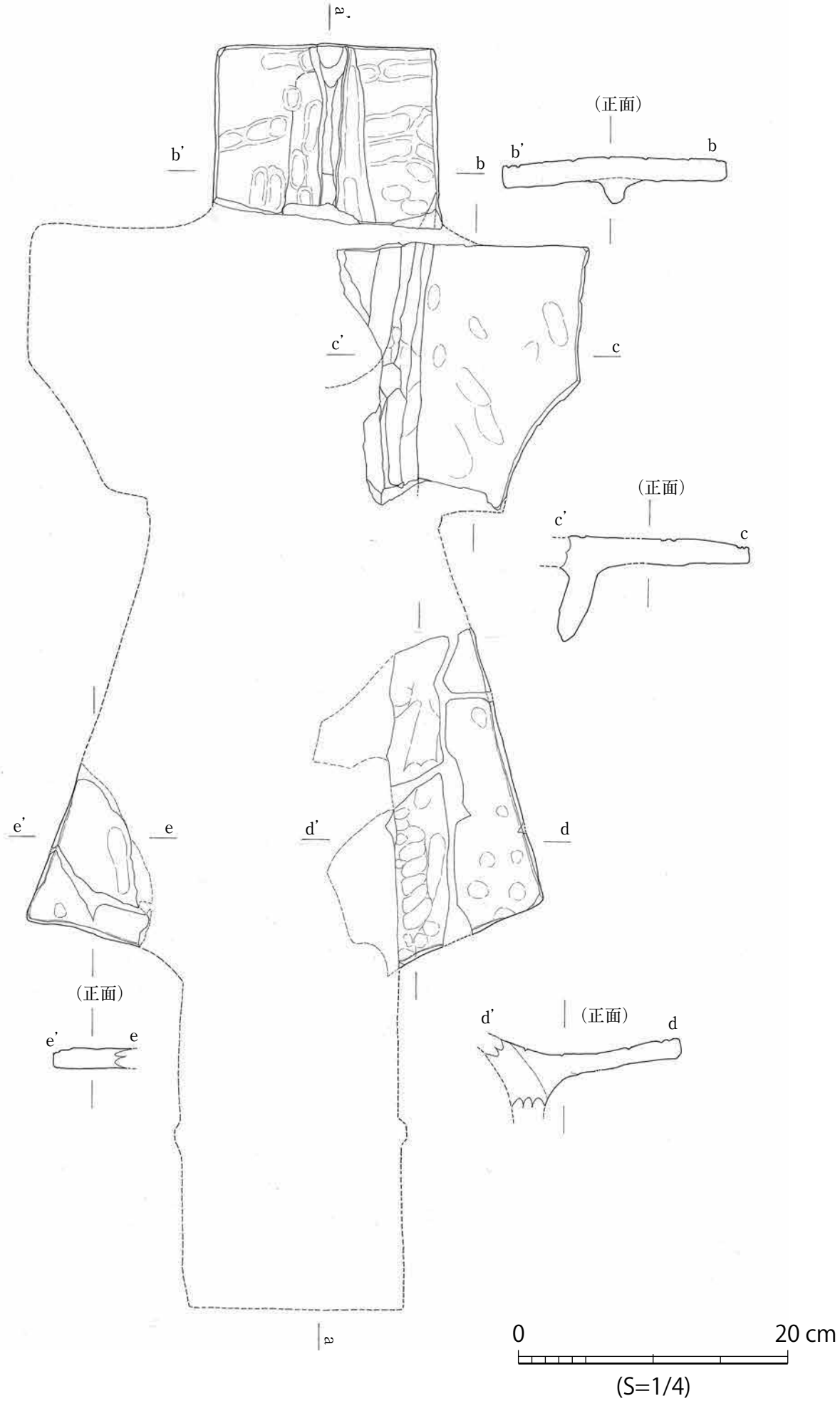


図 5-41　西造出　靫形埴輪 5-1②(裏面)

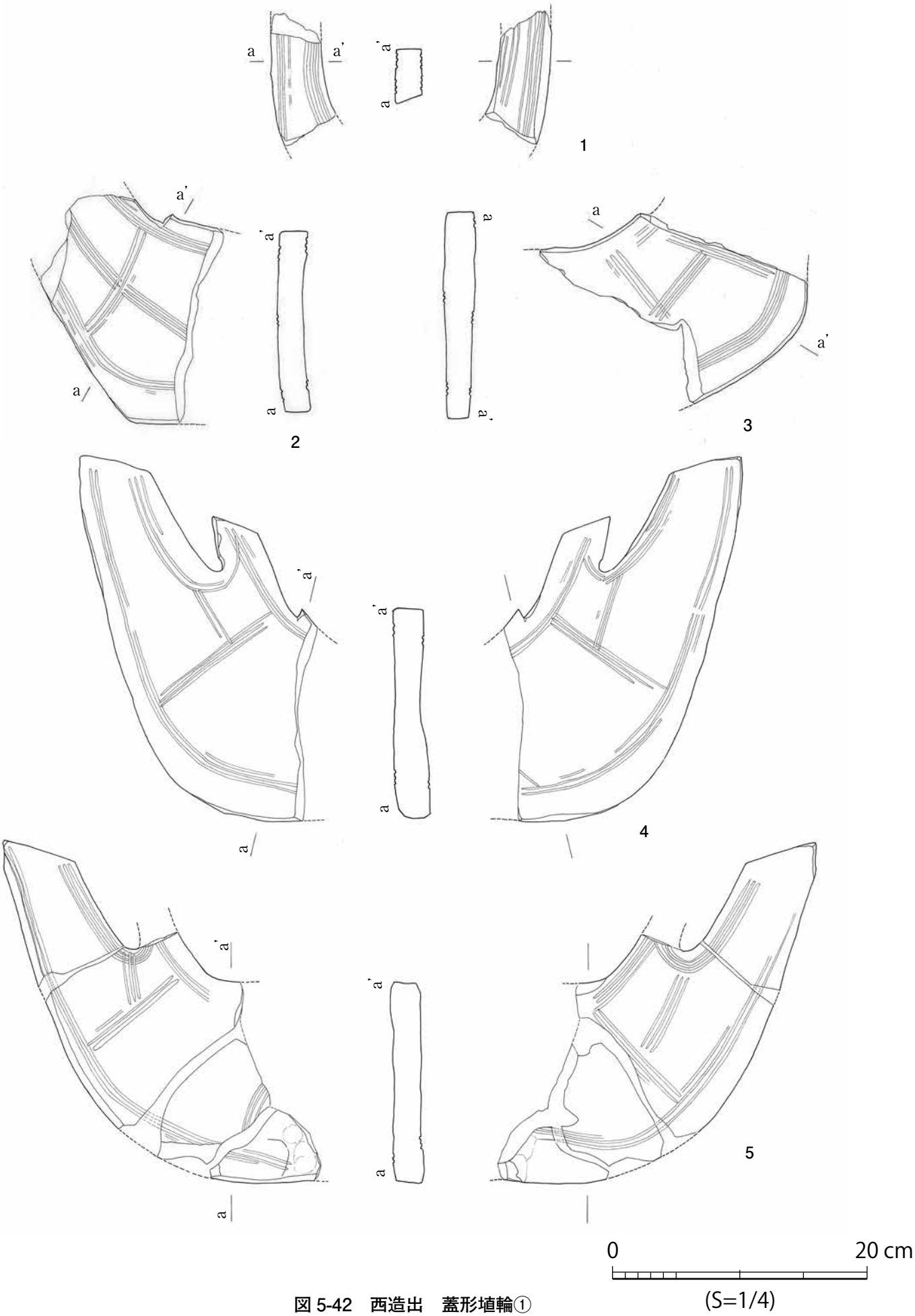


図 5-42　西造出　蓋形埴輪①

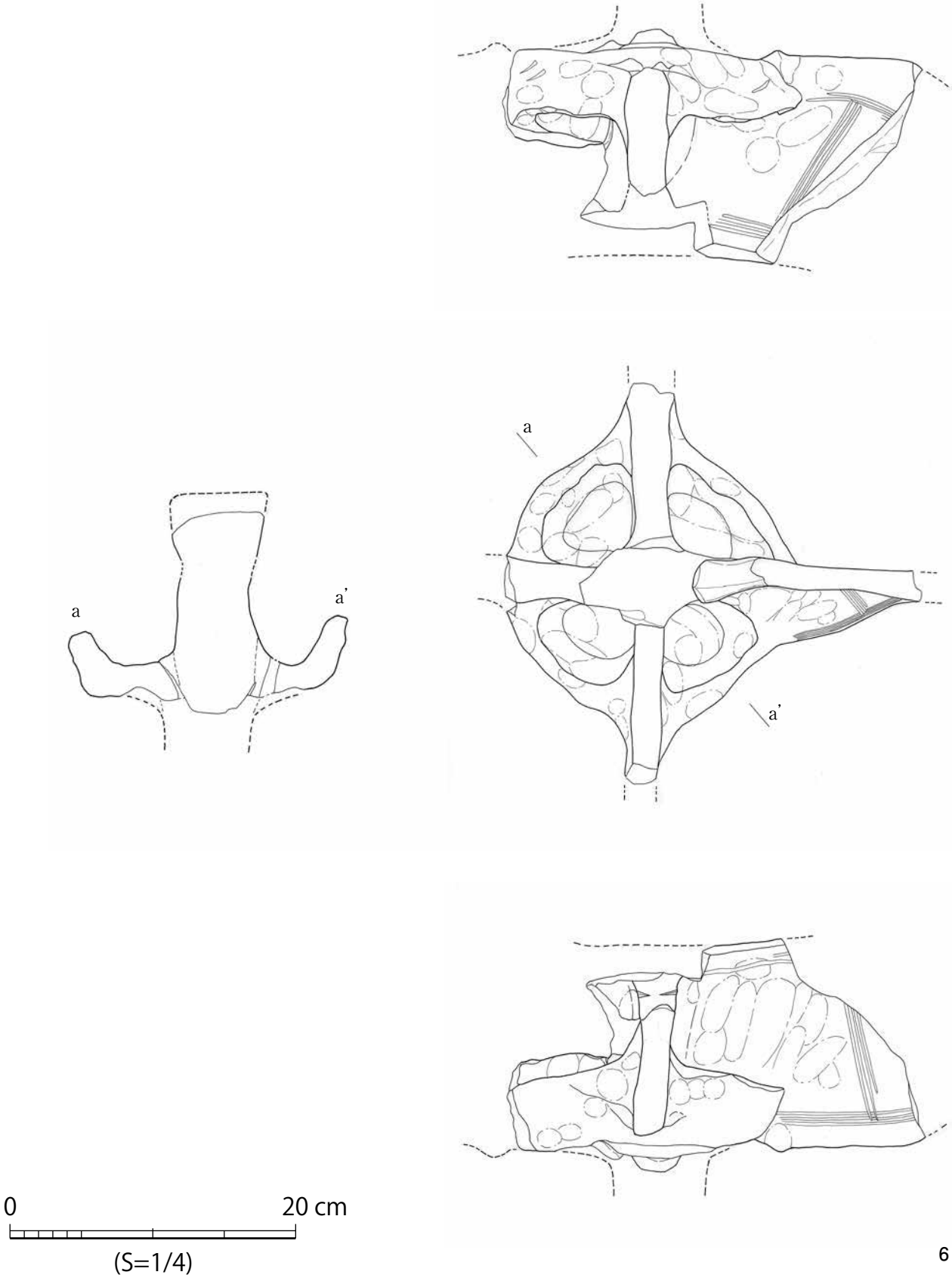


図 5-43　西造出　蓋形埴輪②

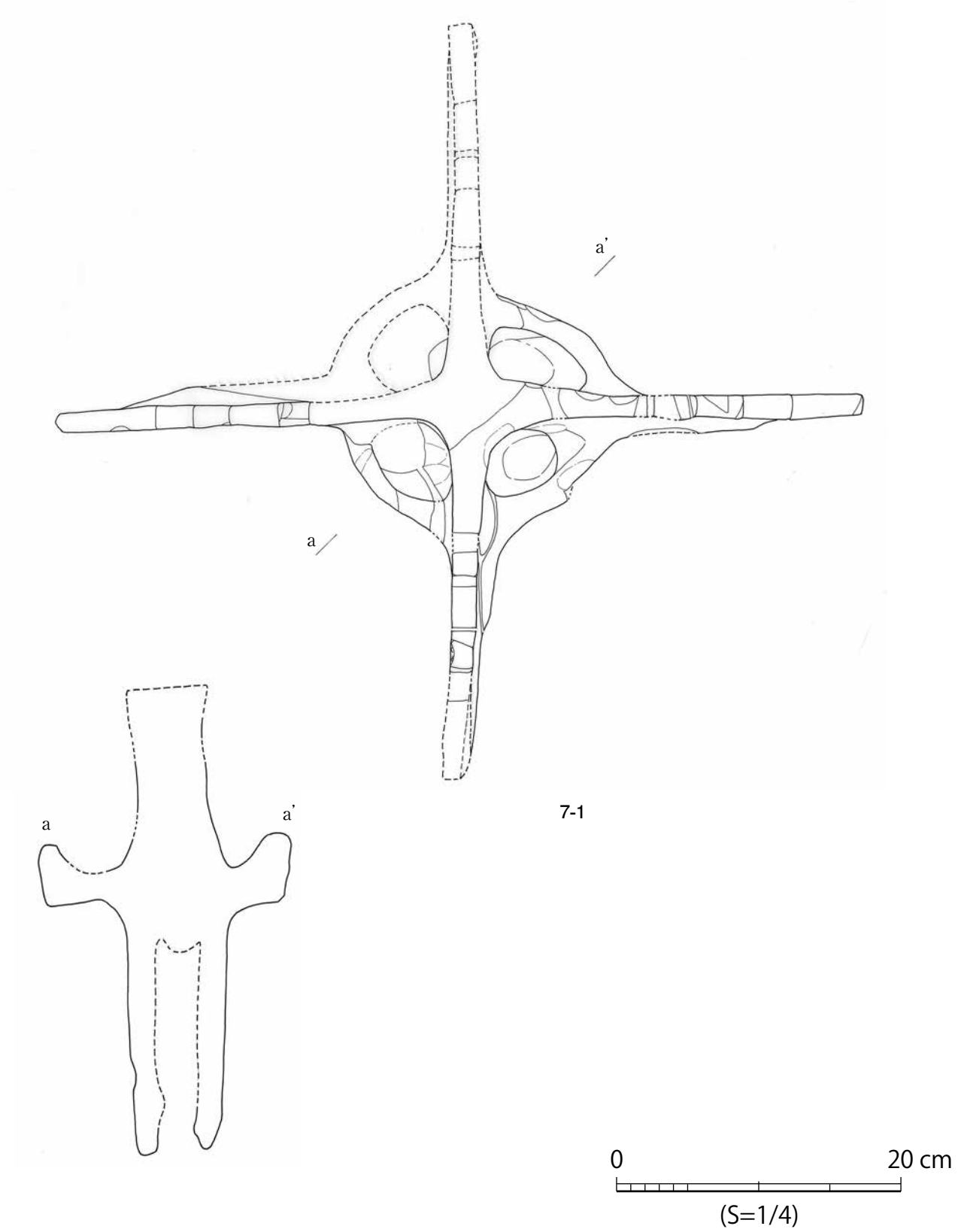
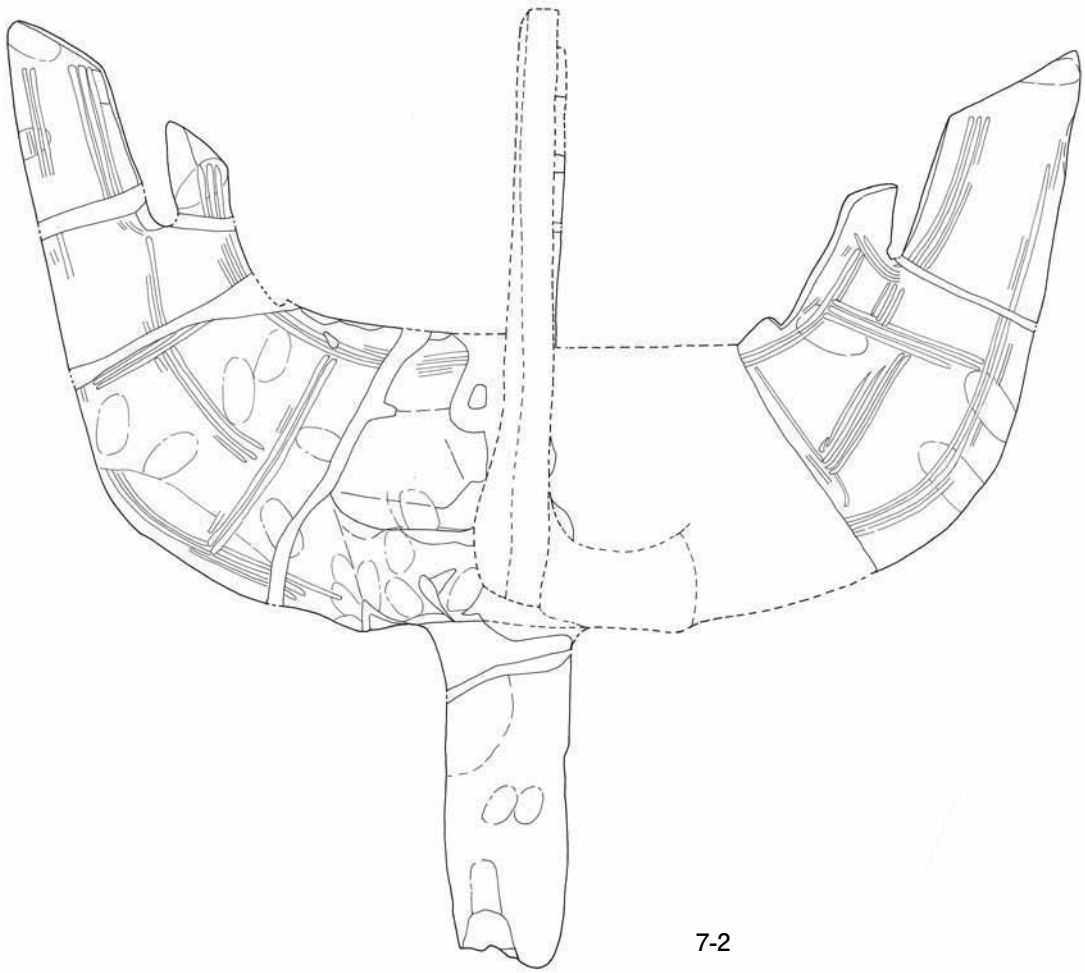
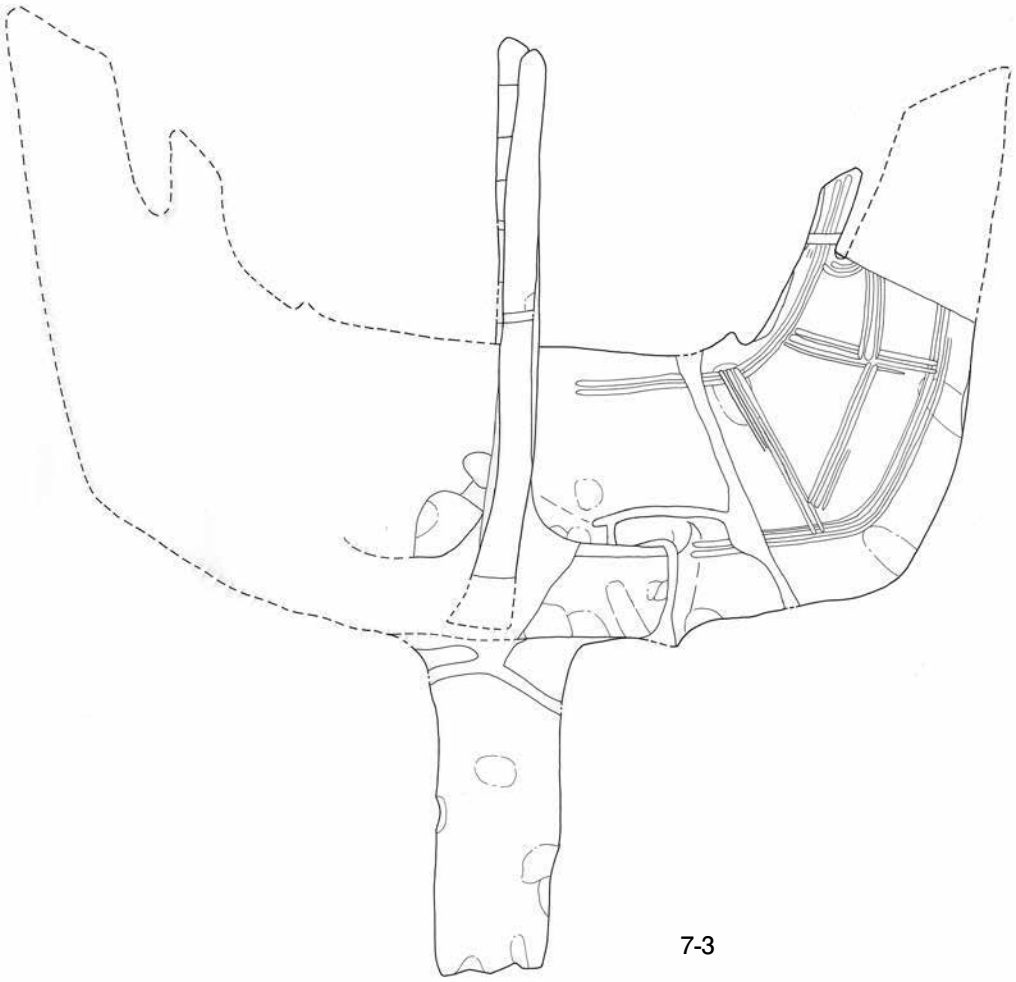


図 5-44　西造出　蓋形埴輪③



0 20 cm
(S=1/4)

図 5-45　西造出　蓋形埴輪④



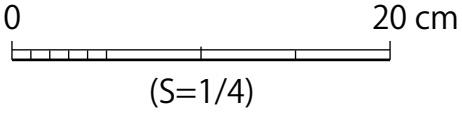
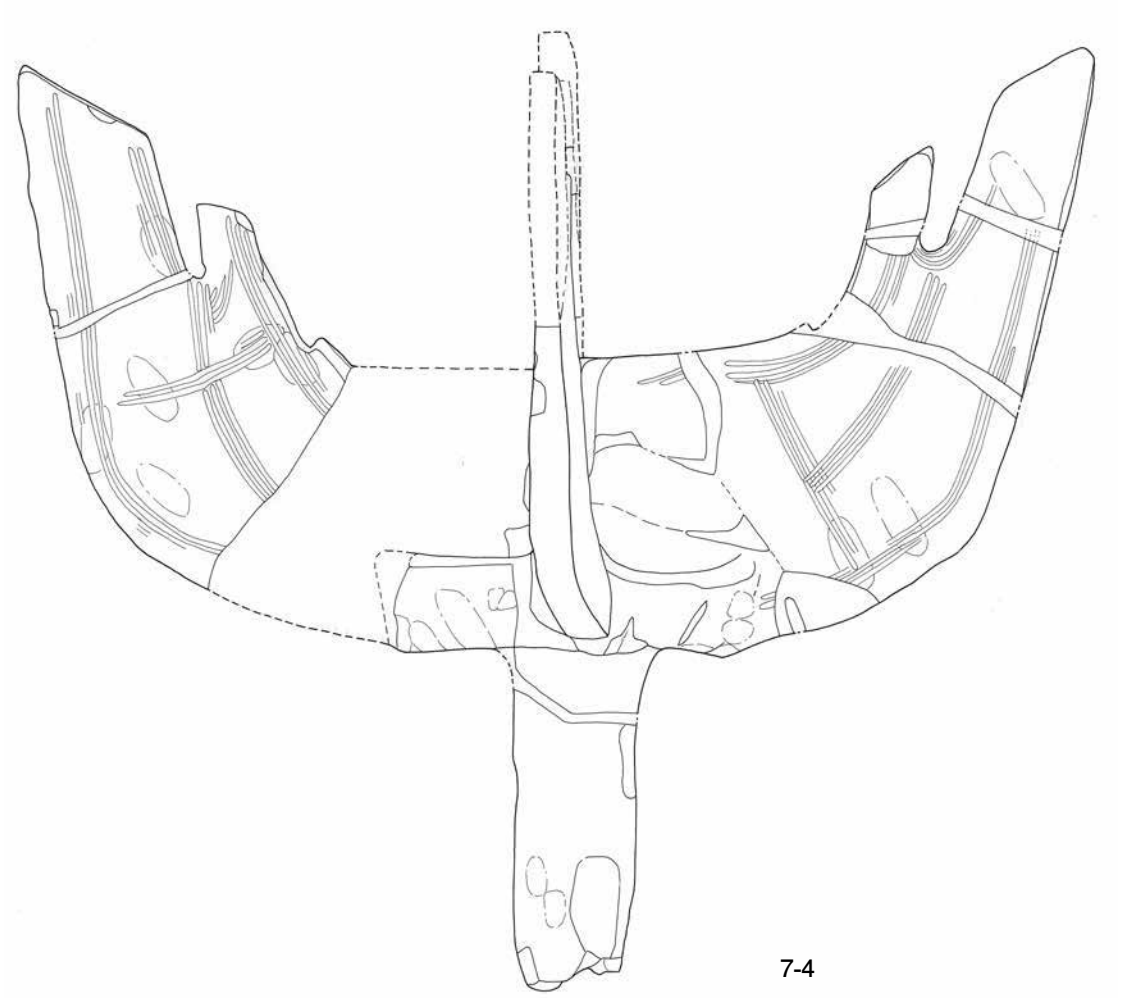


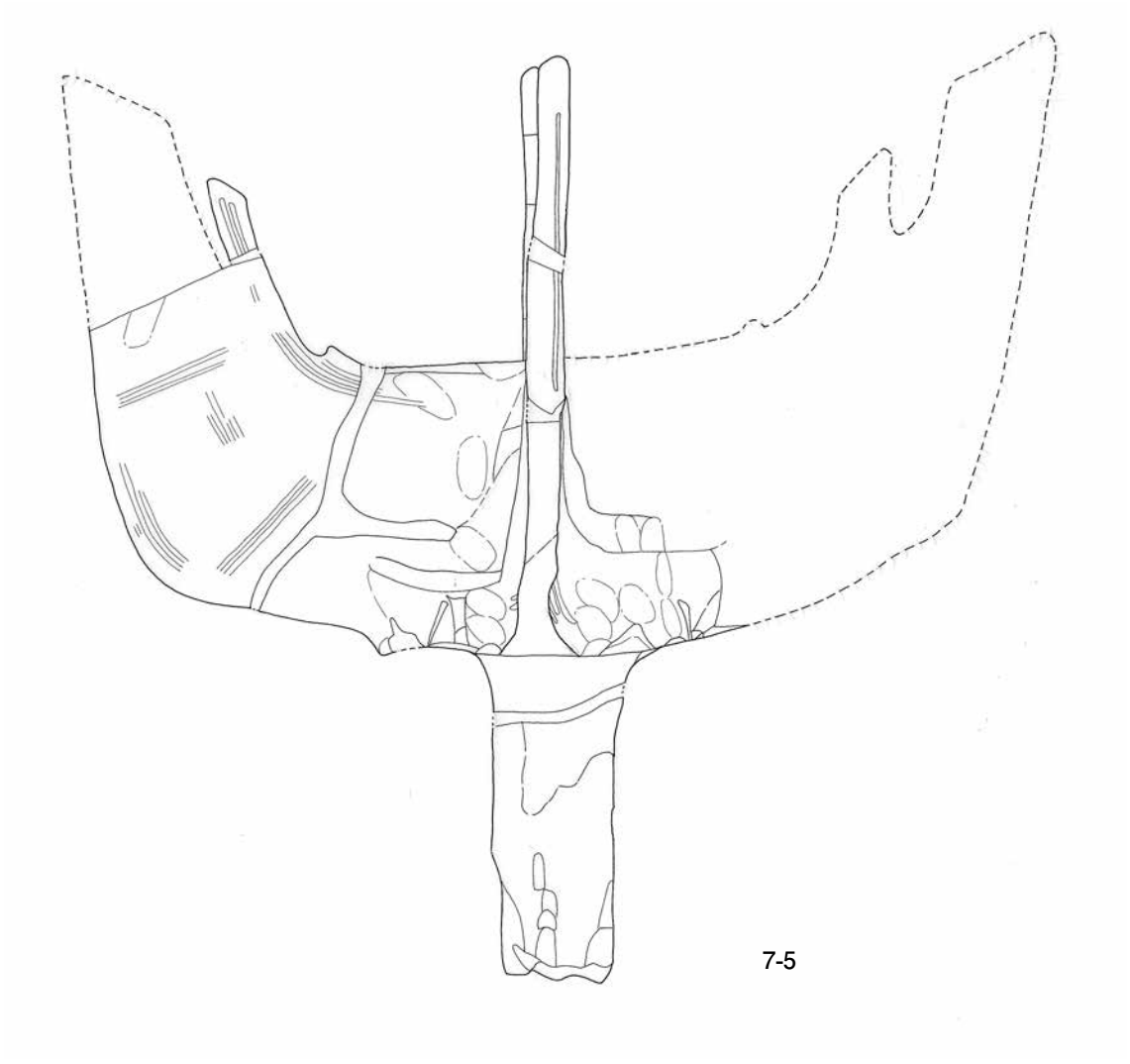
図 5-46　西造出　蓋形埴輪⑤



0 20 cm

(S=1/4)

図 5-47　西造出　蓋形埴輪⑥



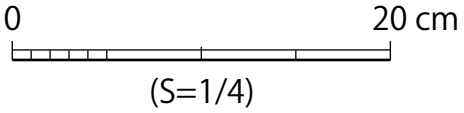


図 5-48　西造出　蓋形埴輪⑦

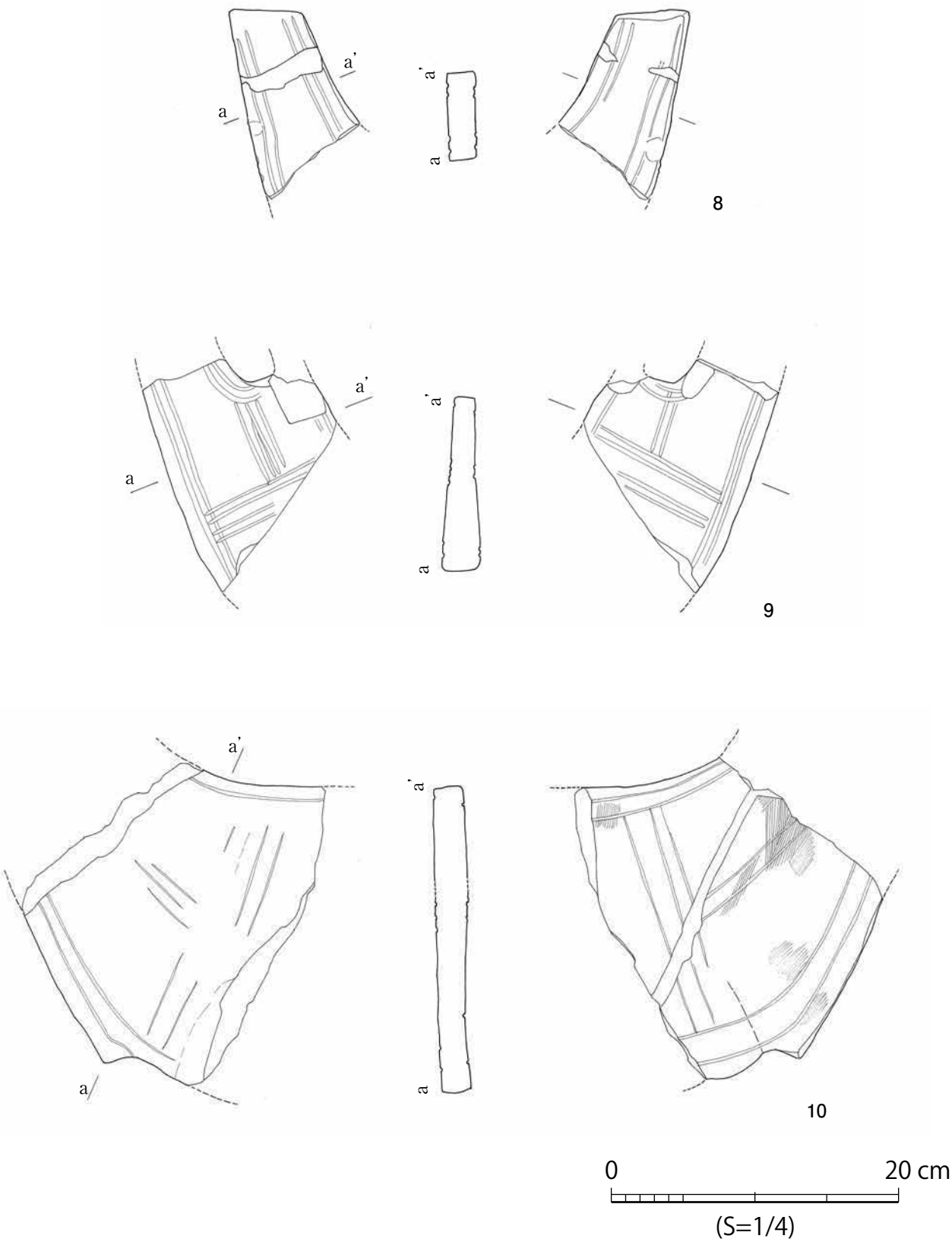


図 5-49　西造出　蓋形埴輪⑧

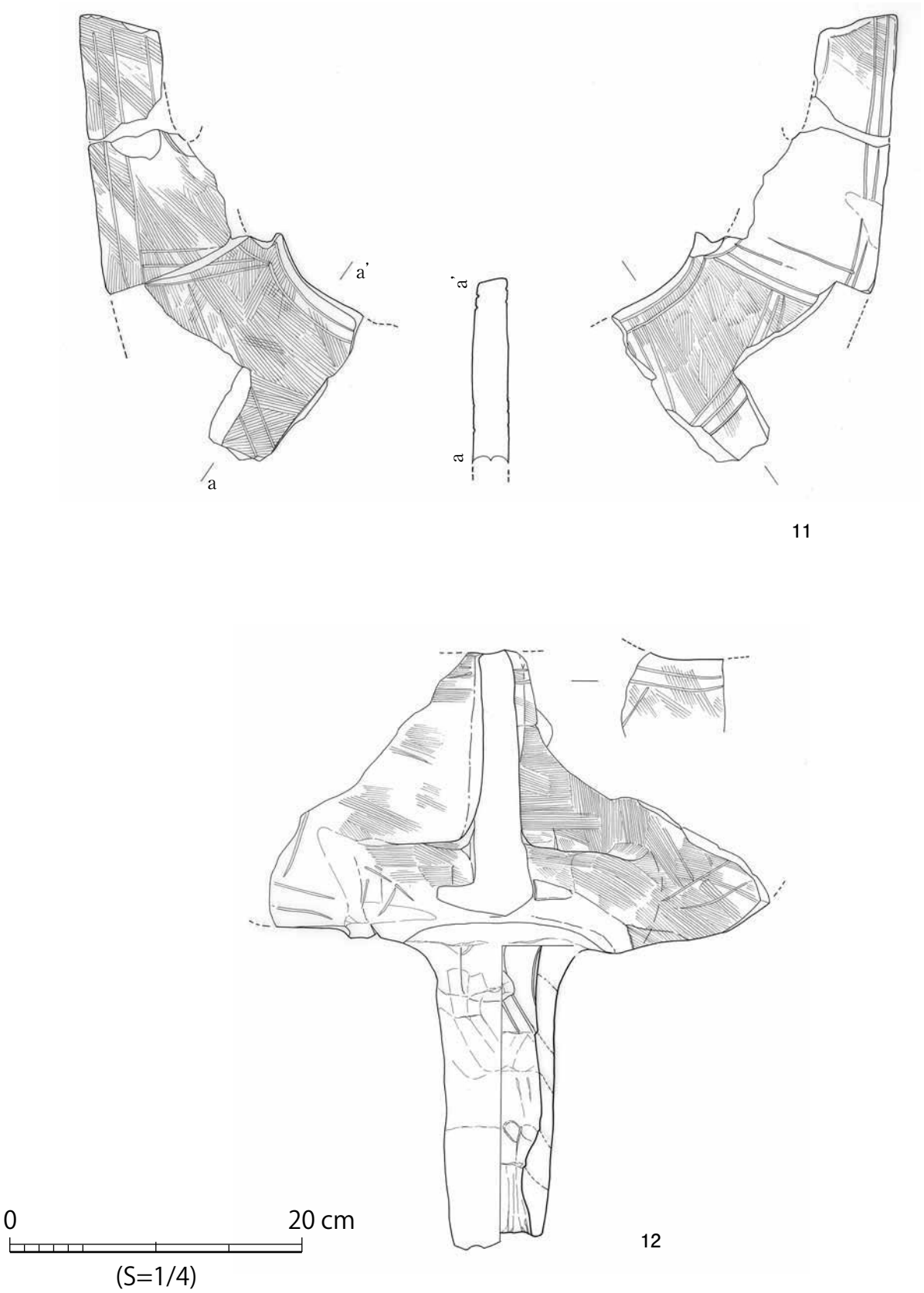


図 5-50　西造出　蓋形埴輪⑨

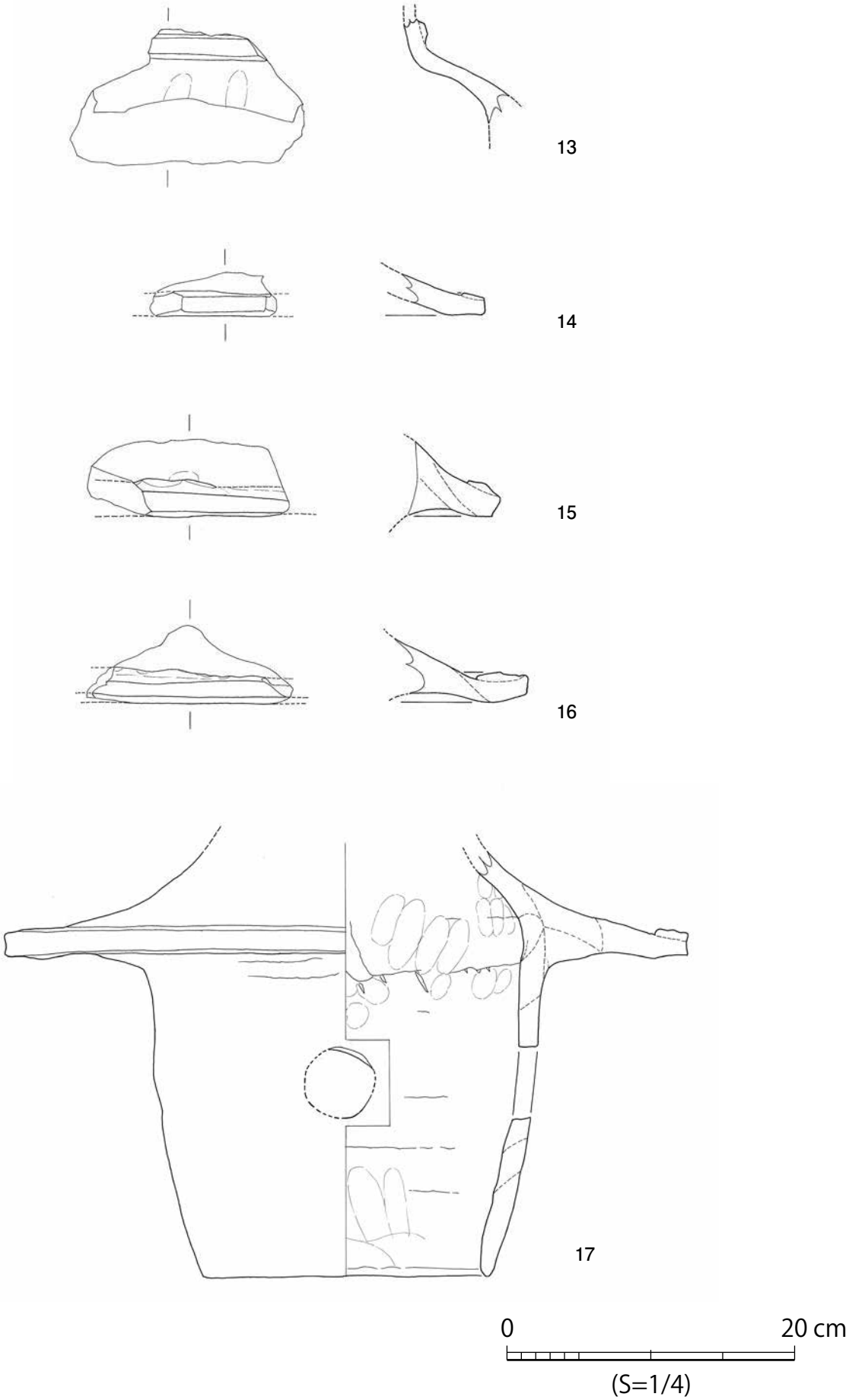
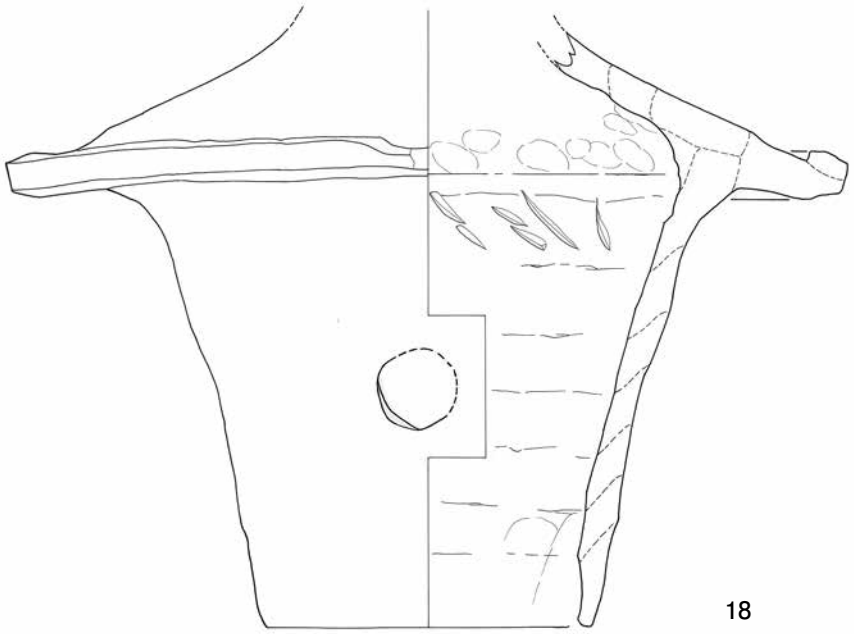
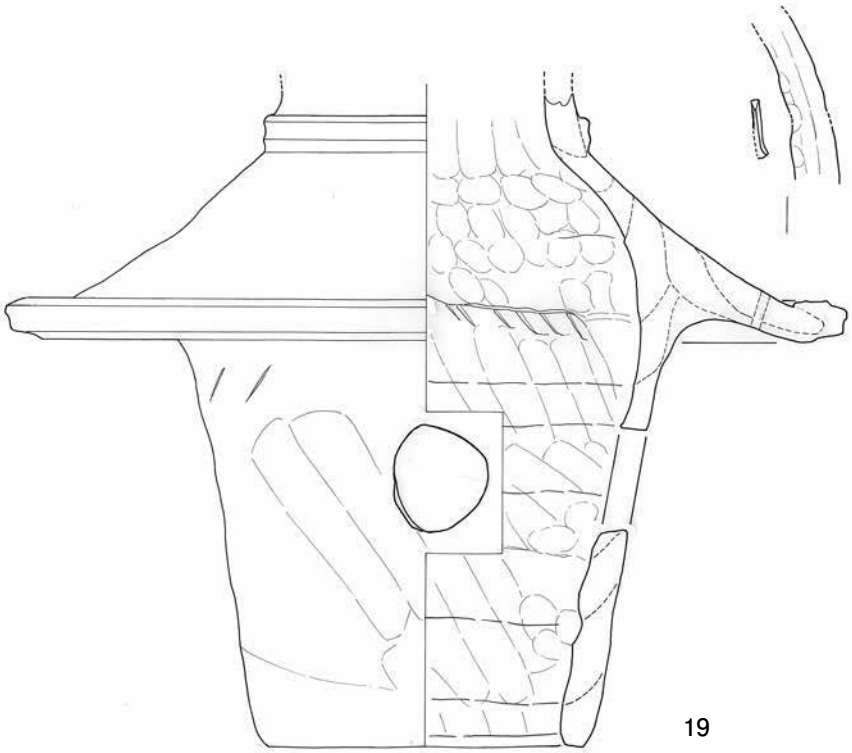


図 5-51　西造出　蓋形埴輪⑩





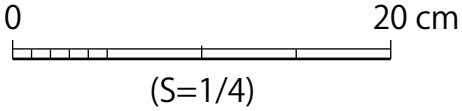


図 5-52　西造出　蓋形埴輪⑪

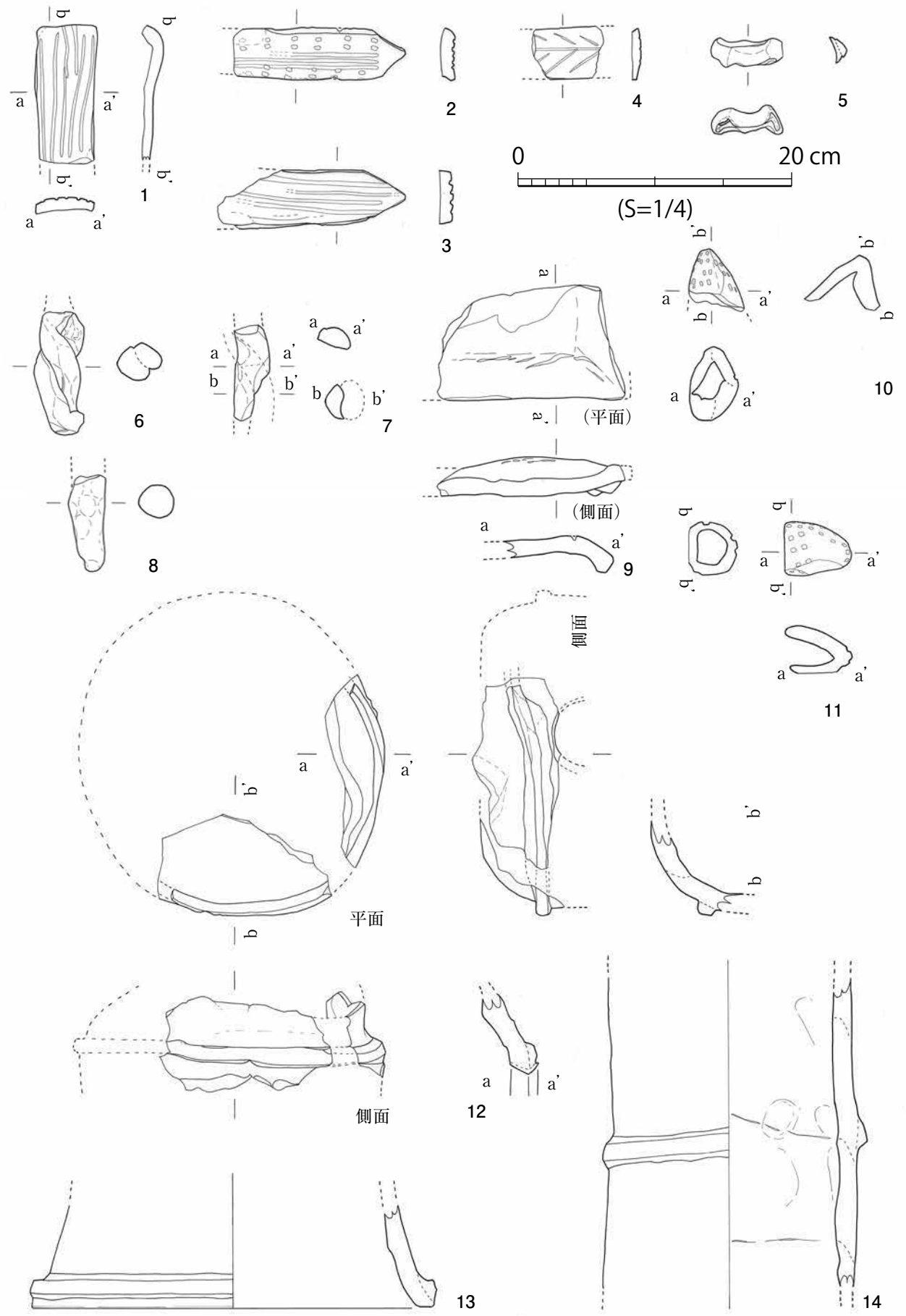


図 5-53　西造出　不明形象埴輪・形象基部

第６章　円筒埴輪・朝顔形埴輪

第１節　円筒埴輪（図 6-1 ～ 6-5）

円筒埴輪は、原位置の基部は限定的にしか取り上げていないため、全体を復元できたのは図 6-4-19 のみである。大日山 35 号墳出土の円筒埴輪は、形態や製作技法、胎土などの違いから大きく２つに分類できる。一方は、２次調整に横ハケを施し、明橙色の胎土で、Ⅳ群系あるいは紀伊型（環畿内型）と称される円筒埴輪である（図 6-1 ～ 6-3）。もう一方は、横ハケ２次調整を施さず、黄褐色の胎土で、Ⅴ群系あるいは畿内型と称される円筒埴輪である（図 6-4・6-5）。

Ⅳ群系円筒埴輪は全体を復元できたものはないが、図 6-1-2 や図 6-2-6 などから４条５段以上であることは確実である。復元できたⅤ群系円筒埴輪の器高は約 60cm で、それと同じ器高を想定すると５条６段に復元できる。ただし口径が大きい図 6-1-1 などは５条６段以上になる可能性も考えられる。スカシ孔は下から２・３段目にあるものがある（図 6-1-4）が、２段目にスカシ孔がなく、３段目以上にあるものもある（図 6-2-9）。上からは２・３段目にあるもの（図 6-2-5・6）と、３・４段目にあるもの（図 6-1-2）がある。突帯は断面が低いM字形で、ほぼ水平に貼り付けられ、突帯の間隔はほぼ一定である。突帯はほとんど剥離していないので確認できないが、突帯設定技法を用いた可能性が高い。Ⅳ群系円筒埴輪は、さらに色調の違いにより、橙色（図 6-1-1 ～ 4）とにぶい橙色（図 6-2-5 ～ 9）を呈するものに分類することができる。ただし、橙色の方がやや口径が大きい傾向にあるものの、段数やスカシ孔の位置など他に大きな違いを見出せず、製作方法などは共通している。Ⅳ群系円筒埴輪は、１段目テラスや造出の円筒埴輪列の大部分に設置されていた。また、２段目斜面からも破片が出土することから、墳丘上にも設置されていた可能性が高い。

Ⅴ群系円筒埴輪は、全体を復元できた図 6-4-19 などから、４条５段で構成されることがわかる。底部高（１段目）が比較的高く、２段目と４段目にスカシ孔がある。突帯貼り付け前の縦ハケ（斜めハケ）１次調整のみで、横ハケ（２次調整）は確認されない。突帯は断面台形で、突帯設定技法は用いておらず、突帯が水平に貼り付けられていない箇所がある。焼成は、土師質のものが多いが、一部は須恵質になっているものがある。底部は板状工具によるナデで調整される。口縁部付近に波状の線刻を有するものがある（図 6-4-19）。Ⅴ群系円筒埴輪は基壇テラスの円筒埴輪列のすべてと、造出や１段目テラスの円筒埴輪列のごく一部に設置されていた。また、２段目斜面からも破片が出土することから、墳丘上にも設置されていた可能性が高い。

第２節　朝顔形埴輪

朝顔形埴輪も円筒埴輪と同様にⅣ群系（図 6-3-17・18）・Ⅴ群系（図 6-5-26・27）が出土している。Ⅳ群系の朝顔形埴輪は、縦ハケ１次調整・横ハケ２次調整が確認でき、明橙色を呈し、突帯の形態も断面が低いM字形である。体部や底部だけでは円筒埴輪と区別できないため、Ⅳ群系朝顔形埴輪の底部は特定できておらず、全体を復元できたものはない。

Ⅴ群系の朝顔形埴輪は、黄渇色を呈し、Ⅴ群系円筒埴輪に類似する形態や特徴を有する。ただし 26・27 は調整が不明瞭でハケ目が観察できないが、おそらく縦ハケ１次調整のみと推測できる。一部欠損するものの全体を復元できたのは図 6-5-27 のみである。

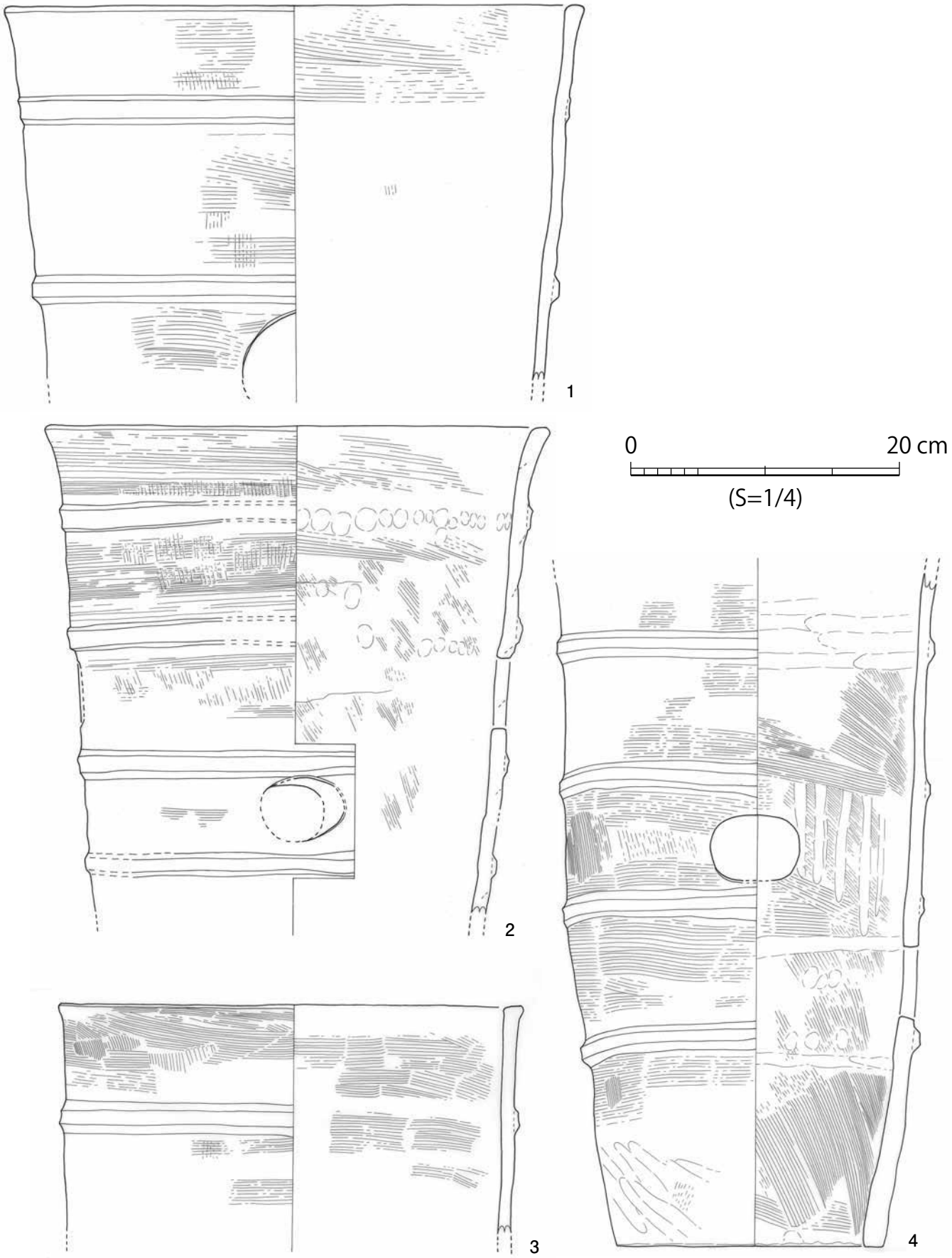


図 6-1　Ⅳ群系円筒埴輪

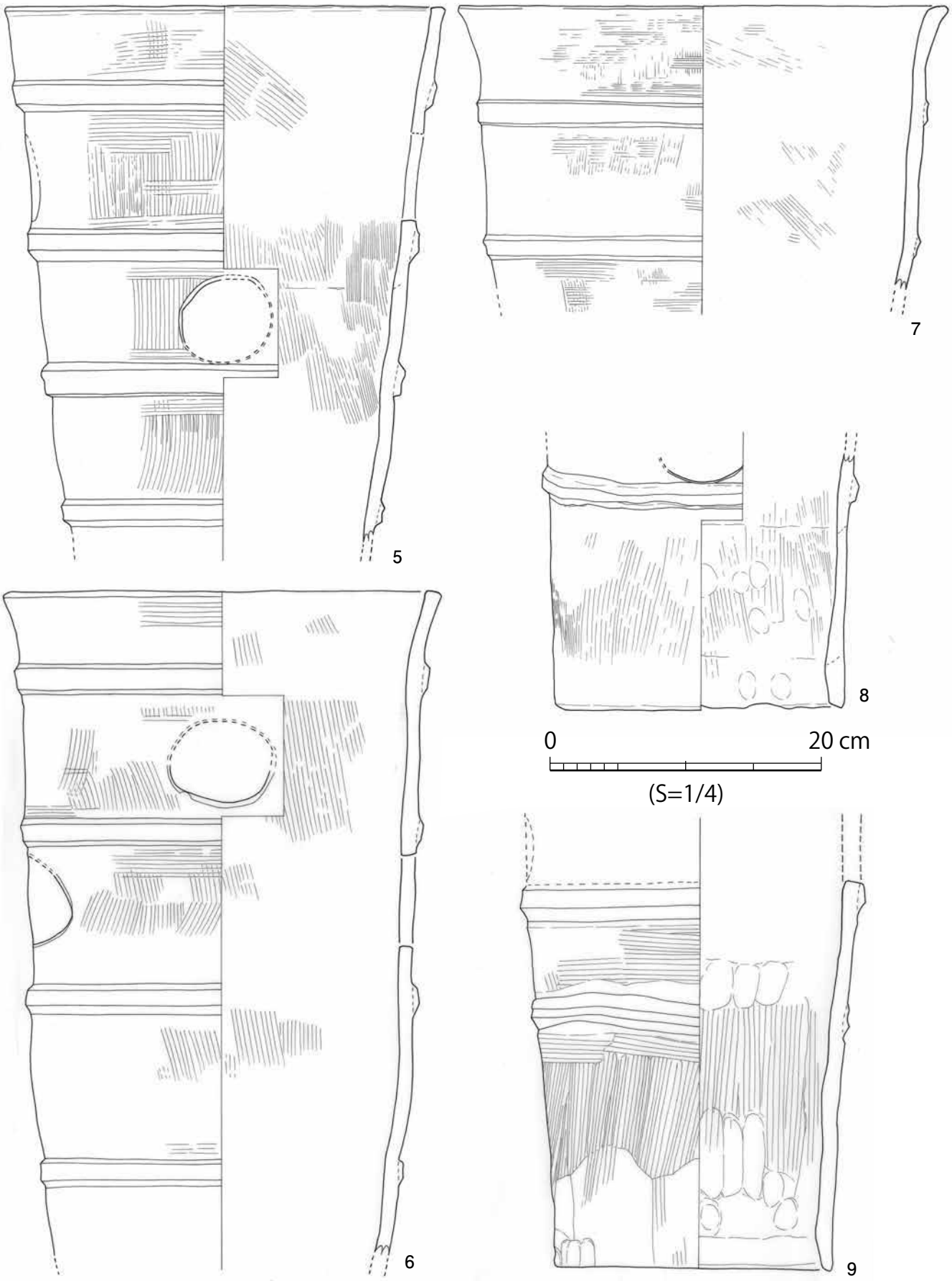


図 6-2　Ⅳ群系円筒埴輪

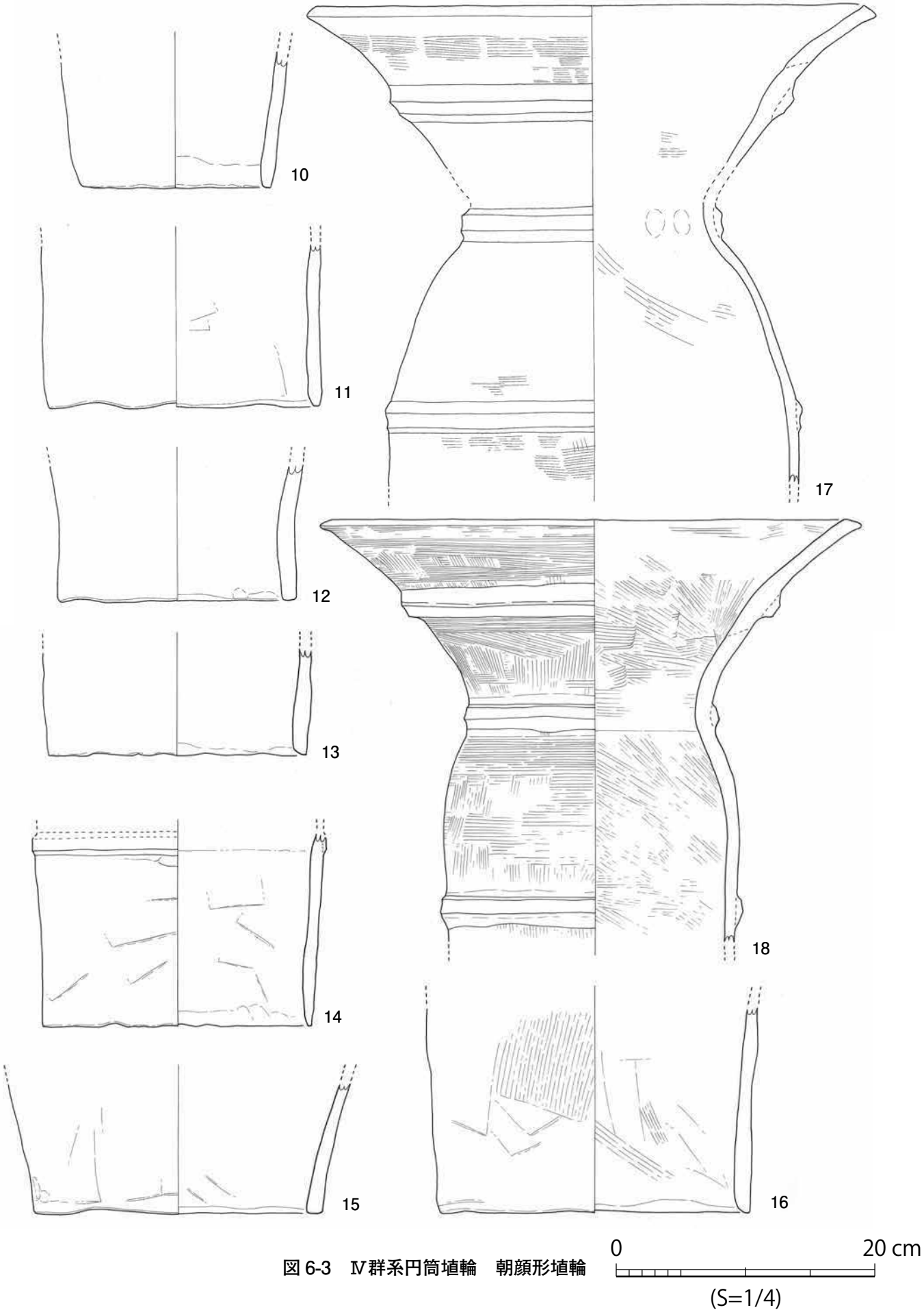


図 6-3　Ⅳ群系円筒埴輪　朝顔形埴輪

図 6-4　Ⅴ群系円筒埴輪

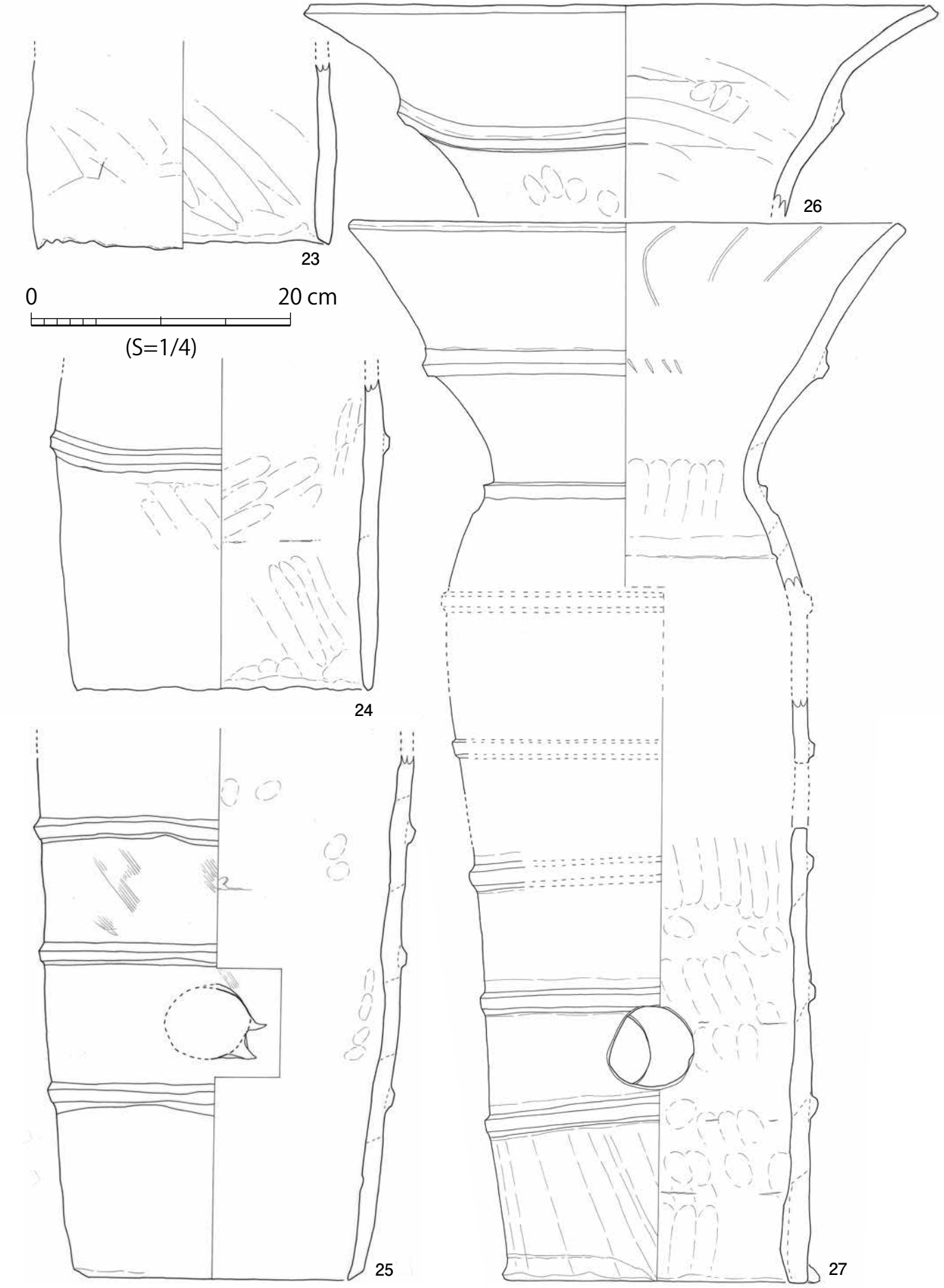


図 6-5　Ⅴ群系円筒埴輪　朝顔形埴輪

第７章　東造出・西造出の須恵器・土師器

第１節　東造出出土の須恵器（図 7-1・2）

１～11・17 は東造出出土の須恵器である。１は壺類かはそうで、肩部に僅かに稜があり自然釉が付着する。２は高杯で３方にスカシを穿つ。３・４は器台杯部で、３は波状文が施文され、下半には平行タタキ、内面にも同心円文タタキが残る。４はカキメの後に波状文が施文され、中位には沈線があり、下位にはタタキ目が残る。５～11 は器台脚部で、２～３条の沈線を境に上下に波状文が施文され、長方形および三角形のスカシが穿たれている。11 は器台脚裾部で、カキメの後に２条沈線と波状文が施文される。17 は大甕で、口頸部上部には２段の沈線と波状文が施される。体部は縦方向の平行タタキで調整され、内部には同心円文タタキが顕著に残る。

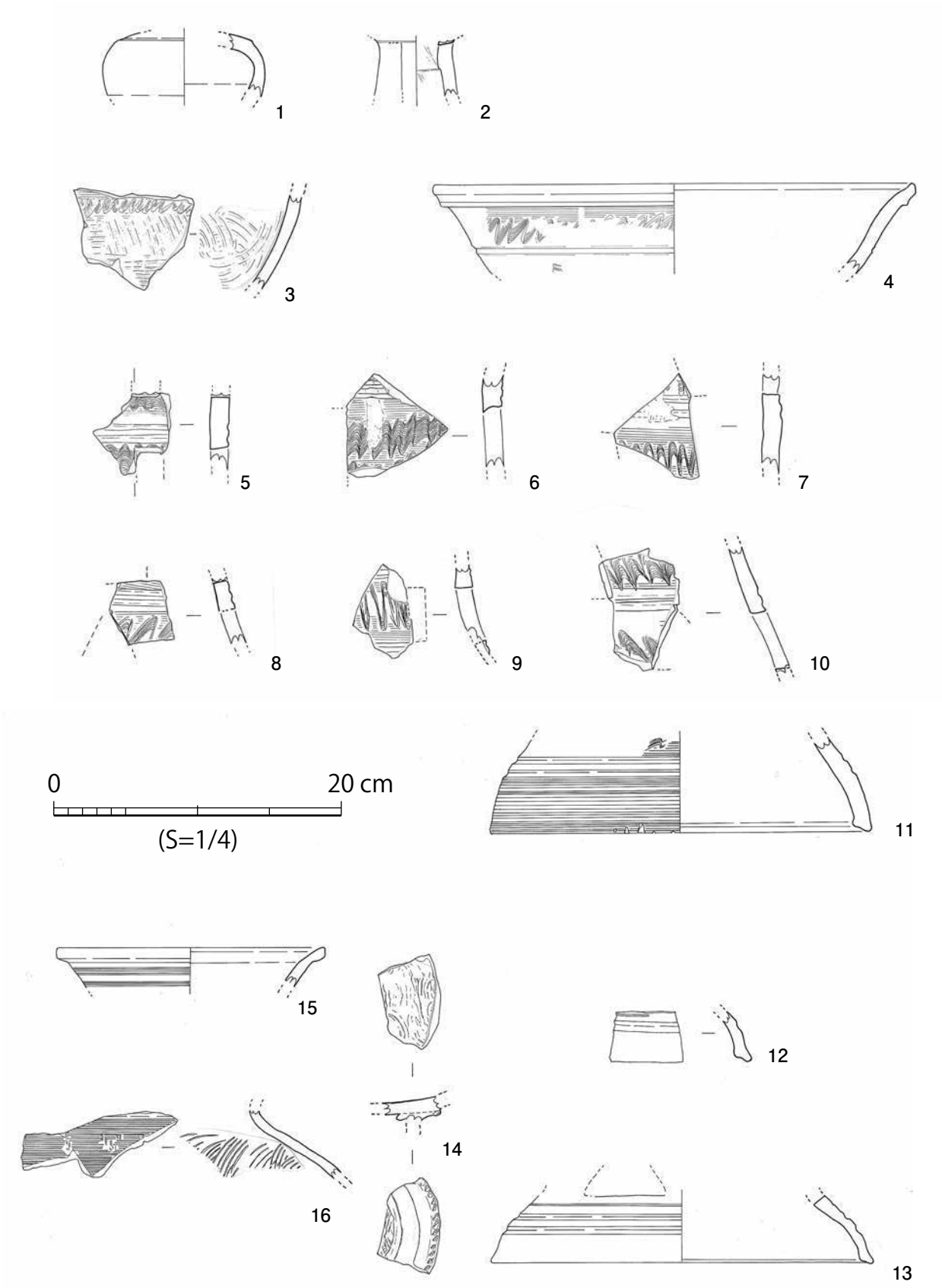
12～16 は東造出側の２段目斜面で出土した須恵器で、墳丘上から転落したものである可能性がある。12・13 は器台裾部で、12 は１条沈線が施されている。13 は３条沈線が施され、上方には三角形スカシが穿たれている。14 は器台の杯部と脚部の接合部で、接合部の貼り付け凸帯端部には刺突文が施文される。15 は壺の口縁部で、頸部に２段のカキメが施される。16 は甕の口頸部の破片で、器面はタタキ調整の後、カキメ調整、内面には同心円文タタキが残る。

第２節　西造出出土の須恵器・土師器（図 7-3～6）

１・３は有蓋高杯の蓋で、つまみ部分が残る。２は壺の蓋の可能性があり、天井部には沈線を挟み刺突文が施文される。天井部と口縁の境には僅かに稜線を残す。６は有蓋高杯の蓋で、天井部と口縁の境の稜はあまい形状を示す。４・５・７～10 は蓋杯の蓋と考えられ、天井部に回転ヘラケズリが確認できる。８・９は、天井部と口縁部の境の稜は沈線風で、９の天井部にはヘラ記号がある。11～14 は杯身で、11 は見込み部には同心円タタキの痕跡が遺存する。12・13 は口縁部を欠損し、12 は推定口径が 12cm 前後。13 は口径が 18.0cm を超える。14 は口縁部の立ち上がりが小さく、高杯の可能性もある。15～34 は高杯の脚部で、15・16 は長脚２段の高杯脚部で、３方に長方形スカシを持つ。17～22・31～34 は形状がほぼ同じタイプである。２段スカシで上方が長方形、22・31～34 には下段に三角形スカシが確認できる。23 は 15・16 に類似する可能性がある。24～27 は法量が類似するが端部の形状がやや異なる。28～30 はやや大形の脚裾部で、28 は三方スカシで長方形と三角形のスカシが認められ、裾部には波状文が施文される。29・30 は三角形のスカシが穿たれる。35・36 は子持ち装飾壺あるいは装飾器台に取り付く小壺で、両者とも体部に長方形スカシがある。37 は器台杯部、38～40 は器台脚柱部、41 は器台裾部で、いずれも波状文が施文される。42 は直口壺か広口壺の頸部である。43～46 は甕で、口径はそれぞれ 18.3cm、19.3cm、22.6cm、45.4cm をはかる。いずれも内面は同心円タタキの痕跡が顕著である。43～45 はタタキの後にカキメで調整されている。46 は口頸部上部に２段の沈線と波状文が施されている。

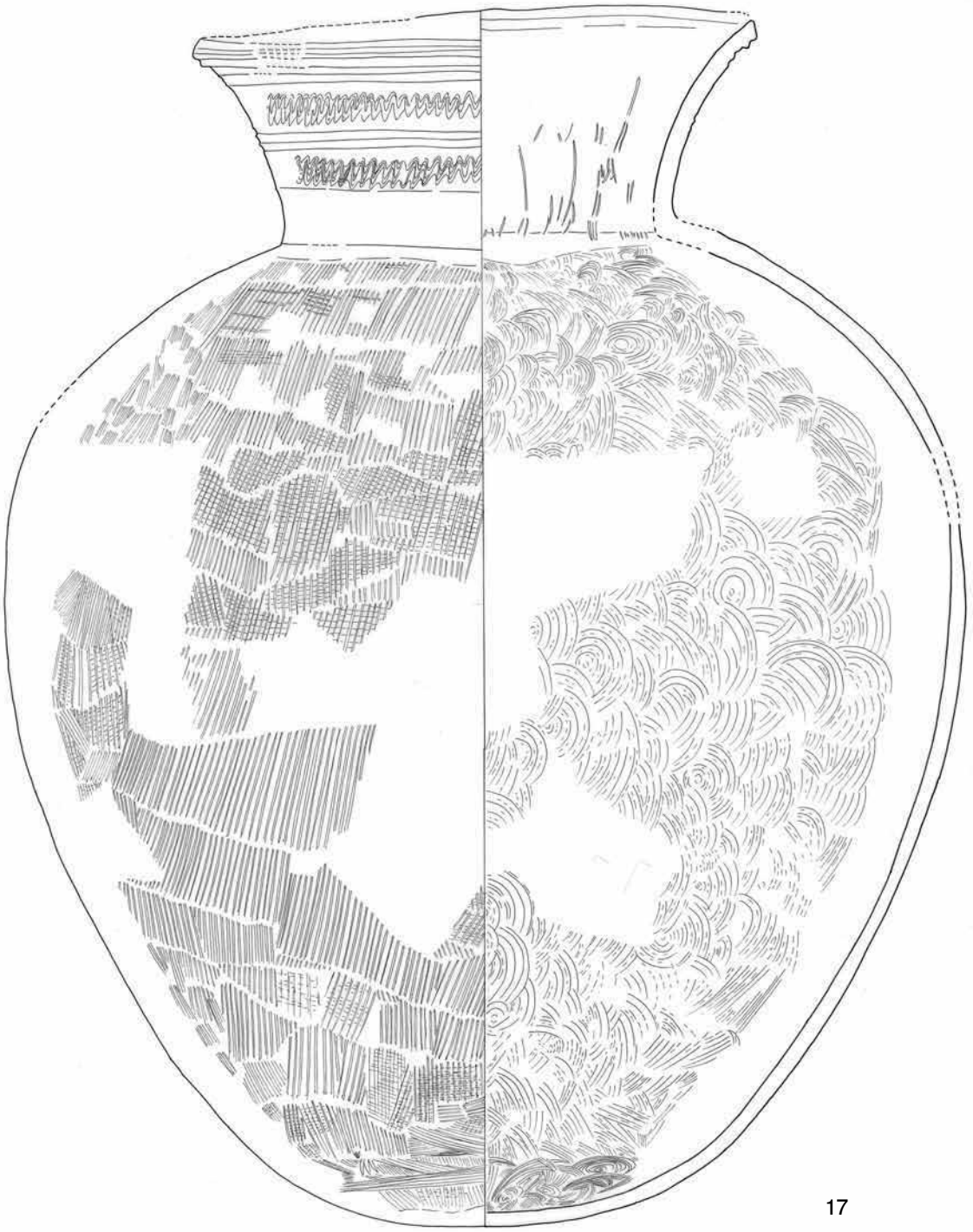
図 7-4- １～７は西造出出土の土師器で、１は椀か高杯の杯部、２～５は高杯の脚部、６は壺の口縁部、７は壺の体部である。

東造出・西造出出土の須恵器の所見としては、高杯及び器台が蓋杯を凌駕する。肉眼観察では、黒色砂粒、片岩を含む個体が多く認められ、岩橋丘陵南側に展開する吉礼砂羅谷窯の製品である蓋然性が高い。吉礼砂羅谷窯の開始が６世紀初頭であることとも矛盾しない。



1～11：東造出出土
12～16：２段目斜面出土

図 7-1　東造出　須恵器①



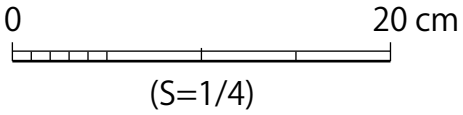


図 7-2　東造出　須恵器②

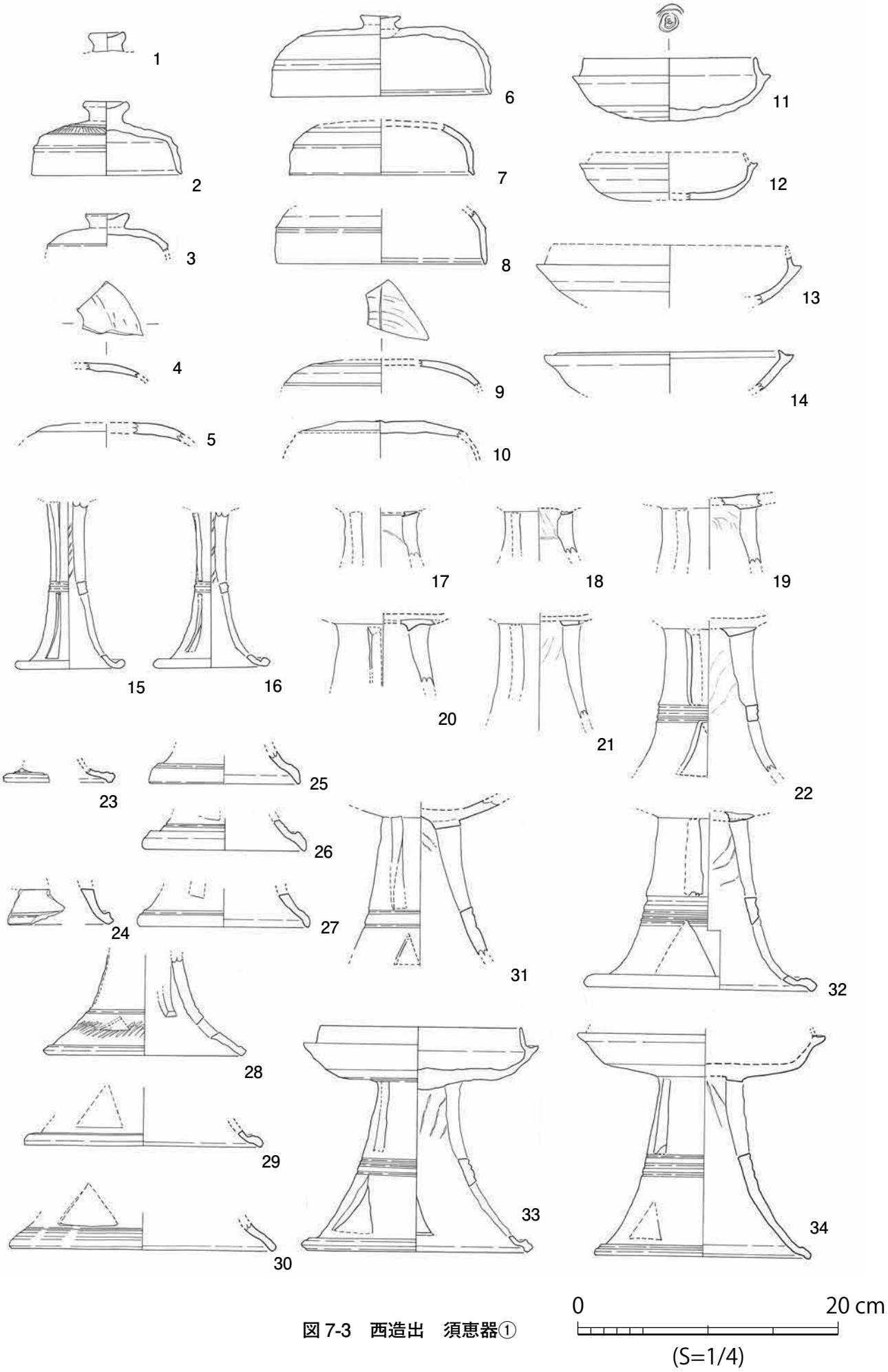
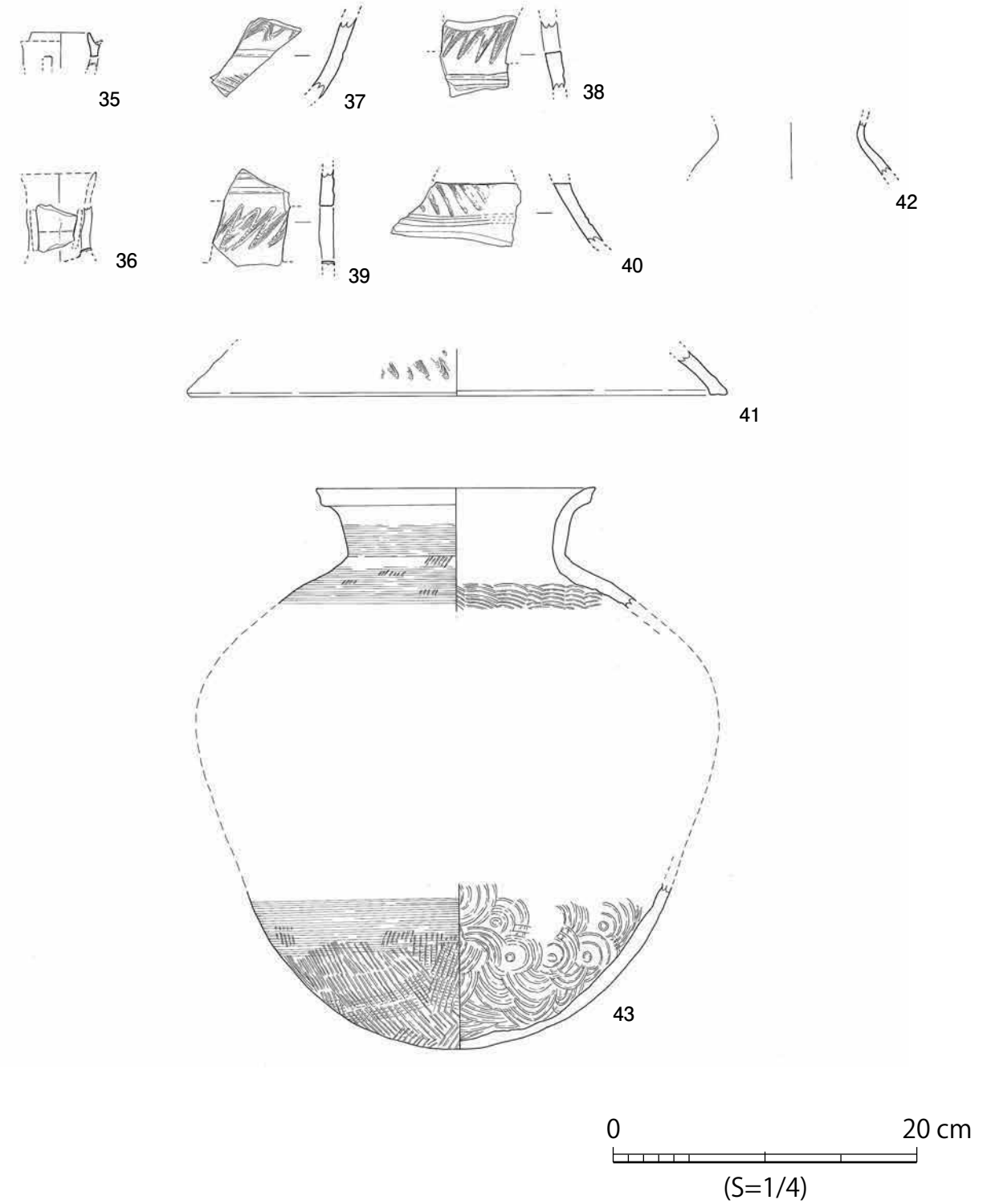

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
0
20 cm
(S=1/4)

図 7-3　西造出　須恵器①



35～43：須恵器
1～7：土師器

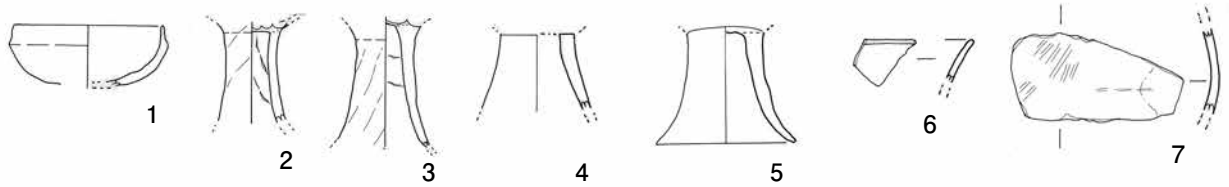
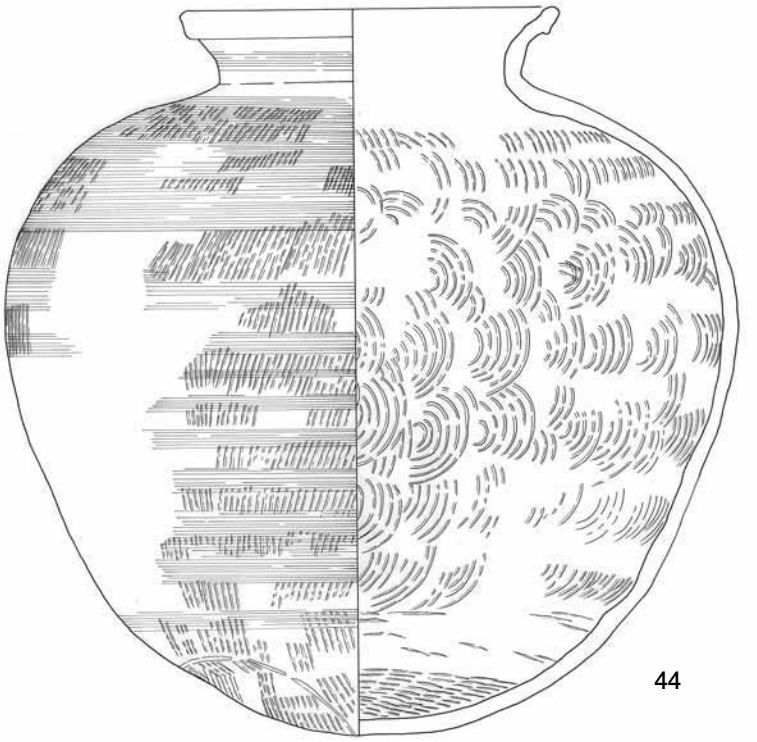
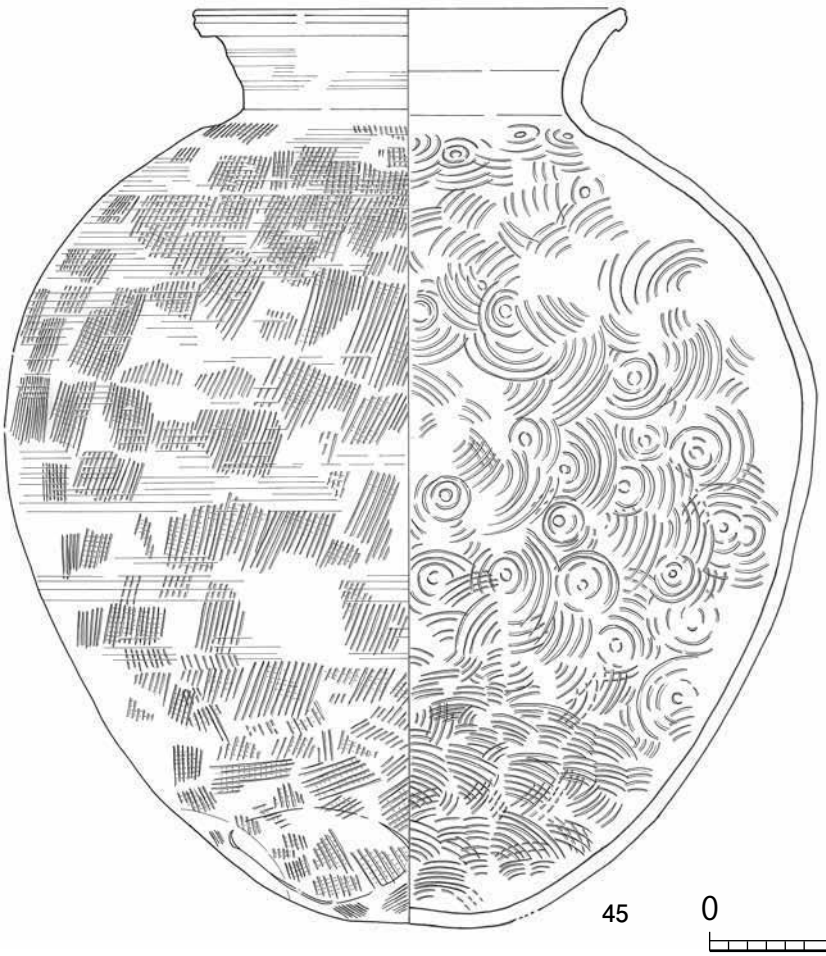


図 7-4　西造出　須恵器②・土師器

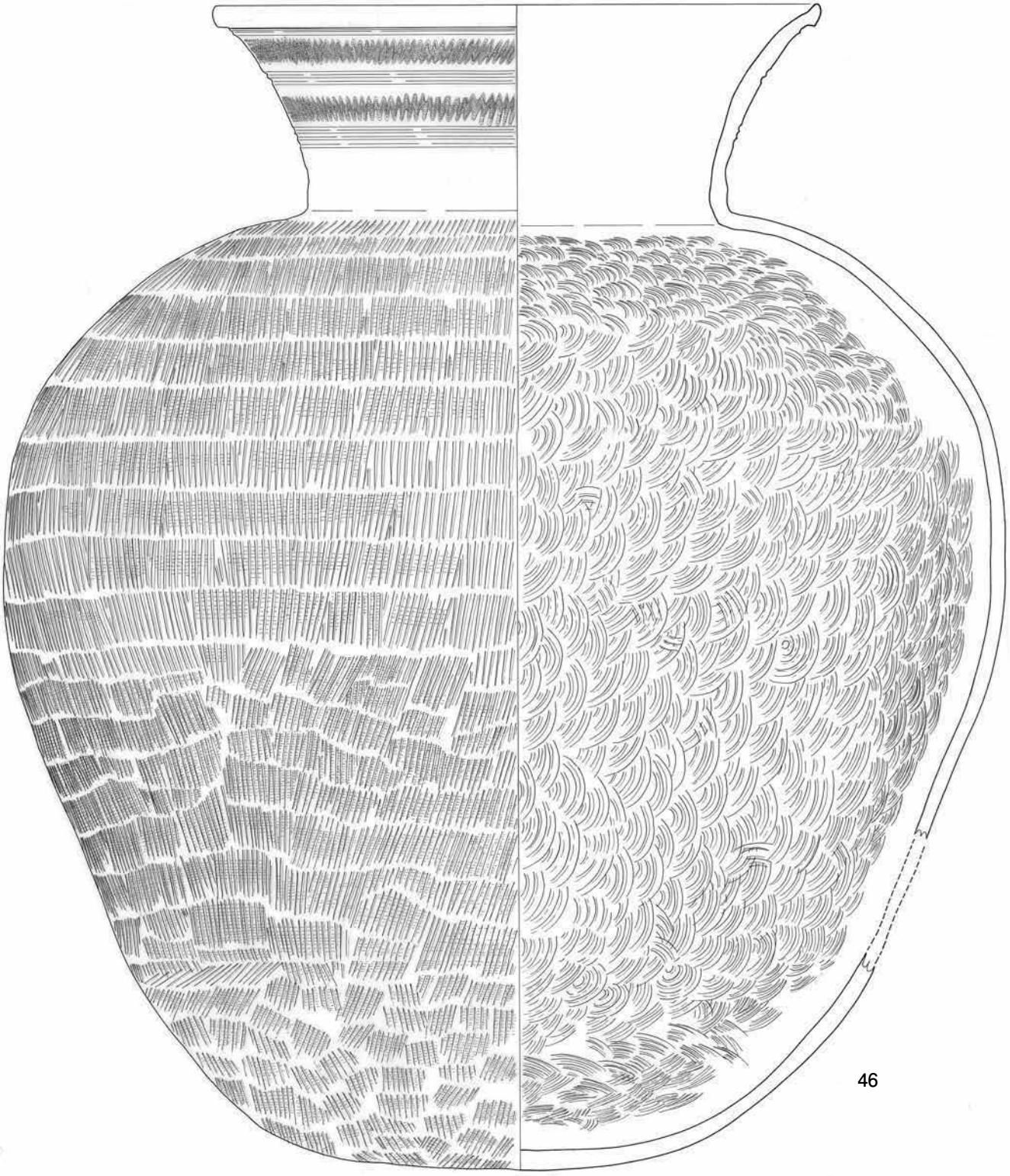




0　20 cm

(S=1/4)

図 7-5　西造出　須恵器③



0　20 cm

(S=1/4)

図 7-6　西造出　須恵器④

第８章　総括

岩橋千塚古墳群中で最大規模の前方後円墳である大日山 35 号墳の墳丘規模や構造を確認する目的で発掘調査を実施した。調査の結果、以下のことが判明した。

①墳丘　墳丘は３段構成となり、最下段は総長約 105 ｍの盾形の基壇で、その上に２段築成で墳長約 86 ｍの前方後円墳形の墳丘を構築している。
②円筒埴輪列　基壇テラスおよび１段目テラス、東西造出で円筒埴輪列を検出した。円筒埴輪は、２次調整に横ハケを施し、明橙色の胎土で製作されたⅣ群系（紀伊型）を称されるものと、横ハケ２次調整を施さず、黄褐色の胎土で製作されたⅤ群系（畿内型）と称されるものが出土し、前者は１段目テラスや造出に多く使用され、後者は基壇テラスに使用されている。両者が１つの古墳で出土するのは県内で唯一の例となる。円筒埴輪列中に５～６本に１本程度朝顔形埴輪が含まれる。朝顔形埴輪にもⅣ群系・Ⅴ群系の２種類が出土している。
③造出　基壇上の墳丘１段目の東西くびれ部に造出が取り付き、両造出から多量の形象埴輪が出土した。東造出では基部が据え付けられた状態で見つかった埴輪はほとんどなく、家形埴輪の屋根などがひっくり返されたような状況で出土し、水鳥や力士の一部が造出外の墳丘側で出土するなど、人の手が加わって大きく動かされたと考えられるものがある。しかし、ある程度まとまりをもって出土する傾向があり、出土地点に近い場所に樹立されていたと推測することができる。東造出中央部には３分割焼成の家形埴輪や盛装男子が、東造出西側には翼を広げた鳥や水鳥、力士などが、東造出北側では犬、猪、牛などが出土している。家形埴輪の一部や巫女などは東造出南東側で集中して出土しているが、本来の樹立地点はもう少し中央部寄りであった可能性がある。基壇テラス付近で馬が出土しているが、東造出内にあったものが転落したと推察している。

西造出では馬や人物の草摺・人物基部など一部で据え付けられた状態を保って出土した埴輪がある。西造出中央部では人物埴輪が集中しており、それを囲むように馬や器財が出土する傾向にある。翼を広げた鳥は西造出西斜面で出土しており、本来は西造出北西部付近に樹立されていた可能性がある。
④形象埴輪　家形埴輪、人物埴輪（盛装男子、武人、力士、巫女ほか）、動物埴輪（馬、牛、猪、犬、水鳥、翼を広げた鳥）、器財（大刀、胡籙、靫、蓋）埴輪が出土した。このうち、両面人物埴輪や翼を広げた鳥形埴輪、胡籙形埴輪は全国初例となる。３分割焼成された高床式入母屋造の家形埴輪は、今城塚古墳（高槻市）に類例がある。水鳥形埴輪はツル・サギ類を模したもので、西日本では初例となる。横座り用の短冊形水平板を取り付けた馬形埴輪は、西日本では音乗谷古墳（木津川市）に次いで２例目となる。牛形埴輪も今城塚古墳や音乗谷古墳などに類例があるが、全国的にも数十例しか確認されていない貴重な発見である。このように今城塚古墳などと共通する要素がある一方で、ここだけのオリジナルな埴輪が出土したことは特筆すべき点である。
⑤須恵器　両造出とも須恵器の甕が据え付けられた状態で出土した。甕のほかに器台や高杯、杯なども出土している。須恵器周辺には埴輪の出土が少ないため、造出には埴輪を樹立する空間とは別に須恵器を置く空間を作り出していたと推測できる。
⑥時期　出土した埴輪や須恵器から大日山 35 号墳は６世紀前半に築造されたと考えられる。

【引用・参考文献】（＊第２章の【岩橋千塚古墳群調査関連報告書】掲載分は省く。発行機関は初出のみ掲載。）
青柳泰介 1995「家形埴輪の製作技法について」『日本の美術 348 家形はにわ』（至文堂）・2004「埴輪配列論」『考古資料大観』10（小学館）･2007「家形埴輪の製作技法について再論」『埴輪論考Ⅰ－円筒埴輪を読み解く－』（大阪大谷大学博物館）、**青柳泰介・小栗明彦** 2003『西日本出土の形象埴輪集成』（1999 ～ 2002 年度文科省科研費（基盤研究 C2、11610430）研究成果報告書）、**一瀬和夫・車崎正彦編** 2004『考古資料大観』4、**稲村繁** 1999『人物埴輪の研究』（同成社）、**井上裕一**「馬形埴輪の研究」『古代探叢Ⅱ』（早稲田大学出版部）、**大野嶺夫** 1986「双脚輪状文形埴輪片の表面採集」『古代学研究』111（古代学研究会）、**小栗明彦** 2007「蓋形埴輪編年論」『埴輪論考Ⅰ』、賀来孝代 2002「埴輪の鳥」『日本考古学』14（日本考古学協会）・2003「鳥の埴輪の雌と雄」『山口大学考古学論集　近藤喬一先生退官記念論文集』・2009「鳥形埴輪の表現」『埴輪研究会誌』13（埴輪研究会）、**加藤俊平** 2010「スイジガイ由来の器財と文様」『考古学研究』57 － 1、**かみつけの里博物館** 2008『力士の考古学』、**鐘方正樹** 1999「２条突帯の円筒埴輪」『埴輪論叢』1（埴輪検討会）･2003「円筒埴輪の地域性と工人の動向」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』（第 52 回埋蔵文化財研究集会実行委員会）、**河内一浩** 1988「古墳時代後期における紀伊の埴輪生産について」『求真能道』（巽三郎先生古稀記念論集刊行会）・1992「紀伊出土の埴輪祭祀覚書」『究班－埋蔵文化財研究会 15 周年記念論文集』（15 周年記念論文集編集委員会）・2001「紀伊における埴輪の受容と拡散」『紀伊考古学研究』4（紀伊考古学研究会）・2002「和歌山県の円筒形埴輪編年素描」『埴輪論叢』3・2003「埴輪にみる後期「岩橋千塚」古墳集団の階層性」『紀伊考古学研究』6・2003「古墳時代後期における円筒形埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』4・2004「紀伊型円筒形埴輪再考」『地域と古文化』（『地域と古文化』刊行会）、**小浜成** 2008「古墳における儀礼の場の変遷過程と倭王権」『埴輪群像の考古学』（青木書店）、**杉山晋作・井上裕一・日高慎** 1997「古墳時代の横坐り乗馬」『古代』103（早稲田大学考古学会）、**鈴木徹** 1999「女子埴輪、袈裟状衣の孔」『埴輪論叢』1、高橋克壽 1992「器財埴輪」『古墳時代の研究』9（雄山閣）・1996『歴史発掘⑨埴輪の世紀』（講談社）・2004「埴輪まつりのうつりかわりと今城塚古墳」『発掘された埴輪群と今城塚古墳』（高槻市立しろあと歴史館）・2005「音乗谷古墳出土埴輪の特質」『奈良山発掘調査報告Ⅰ』（（独）奈良文化財研究所）・2006「埴輪－場から群像に迫る－」『列島の古代史』5（岩波書店）・2008「王権と埴輪生産」『埴輪群像の考古学』、**田中秀和** 2003「畿内における靫形埴輪の検討」『続文化財学論集』（文化財学論集刊行会）、**丹野拓** 2011「岩橋千塚前山Ｂ地区で表採された胡籙形埴輪」『紀伊考古学研究』14、**塚田良道** 1992「「鷹匠」と「馬飼」」『同志社大学考古学シリーズⅤ考古学と生活文化』（同支社大学考古学シリーズ刊行会）・2007『人物埴輪の文化史的研究』（雄山閣）、**辻川哲朗** 1999「円筒埴輪の突帯設定技法の復元」『埴輪論叢』1・2003「突帯－突帯間隔設定技法を中心として－」『埴輪－円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析－』・2010「市尾墓山古墳出土埴輪の再検討」『同志社大学考古学シリーズⅩ考古学は何を語れるか』・2010「井辺八幡山古墳出土「力士埴輪」に関する一考察」『古代史の海』61（「古代史の海」の会）、**服部伊久男** 2003「畿内の大刀形埴輪」『同志社大学考古学シリーズⅧ考古学に学ぶ（Ⅱ）』、**日高慎**「横坐り乗馬再考」『同志社大学考古学シリーズⅨ考古学に学ぶ（Ⅲ）』、**冨加見泰彦** 2008「井辺八幡山古墳出土力士埴輪について」『公開シンポジウム岩陰と古墳』（（財）和歌山県文化財センター）・2009「井辺八幡山古墳出土力士埴輪の再検討」『郵政考古紀要』47（郵政考古学会）、**藤井幸司** 2007「小古墳にみる円筒埴輪生産の具体相」『埴輪論考Ⅰ』・2012「地域の展開　近畿周辺」『古墳時代の考古学』2（同成社）、**藤藪勝則** 2002「岩橋千塚における形象埴輪配列について」『紀伊考古学研究』5・2003「紀伊における円筒形埴輪の編年」『埴輪論叢』4・2006「古墳時代後期における円筒形埴輪の一様相－いわゆる紀伊型埴輪（環畿内南部型）埴輪について－」『紀伊考古学研究』9、**前田真由子** 2009「製作技法からみた家形埴輪の変遷とその画期」『古文化談叢』61（九州古文化研究会）、**松田度** 2010「造り出しにみる埴輪配置の構造Ⅱ－和歌山市井辺八幡山古墳の事例から－」『同志社大学考古学シリーズⅩ』、**宮崎康雄** 2004「今城塚古墳の発掘成果」『発掘された埴輪群と今城塚古墳』・2008「大阪　今城塚古墳」『埴輪群像の考古学』、**望月幹夫** 1995『日本の美術 347 器財はにわ』（至文堂）、**森田克行** 1992「動物埴輪の技法」『古墳時代の研究』9（雄山閣）・2003「今城塚古墳の調査成果」『日本考古学』15・・2008「新・埴輪芸能論」『埴輪群像の考古学』・2011『シリーズ「遺跡を学ぶ」077 よみがえる大王墓　今城塚古墳』（新泉社）、**若狭徹** 2009『もっと知りたい　はにわの世界』（東京美術）、**若松良一** 1992「人物･動物埴輪」『古墳時代の研究』9･1991「双脚輪状文と貴人の帽子」『埼玉県考古学論集－設立 10 周年記念論文集－』（（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団）・2002「埴輪の地域性－紀伊の埴輪のありかたから探る－」『研究紀要』第 17 号（（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団）・2012「井辺八幡山古墳の形象埴輪体系とその解釈」『古代学研究』195

遺物観察表

報告書番号	器種	特徴		登録番号	トレンチ
	法量:幅×奥行×高/厚みcm,(　)内は残存値	胎土(片岩:片,半透明粒:透,白色粒:白,赤色粒:赤,黒色粒:黒,雲母:雲,チャート:チャ)	色調:【色調分類】外面・内面・断面の色調 / 〈焼成〉	地区・層位(取り上げNo.)	出土位置
図4-1～2	家1-1(入母屋造高床建物)	3分割焼成の入母屋造高床建物,破風上部欠損のため千木が取り付くか不明,奥行73.0×復元幅(68.0)×高(127.0)cm →各部位の説明は各項目参照			1トレ 東造出中央部
図4-3～8	家1-1(切妻屋根)	3分割焼成の入母屋造の上屋根(切妻部),やや大形の竪魚木が4箇所のる(中実,3本残存,長約30cm・径約4.0cm),屋根に鰭飾り状の棟覆を格子状に取り付ける,破風・棟覆・竪魚木に未貫通の小孔(一辺0.6cmの方形工具による穿孔,一部貫通),大棟部分・破風上部欠損(千木が取り付くか不明),破風板に突起状の鞭懸および2条一括沈線による線刻,両妻側壁に円形スカシ2箇所ずつ,方形棟持柱は妻側の壁に取り付く(1本残存,中空,下屋根の棟持柱にのる構造,正面に小孔1箇所,正面の縦方向に棟木に取り付く方形の粘土板貼り付け,12本/1cmのハケ目残存),棟持柱の上端に棟木が貼り付いていた剥離面あり(棟木は欠損,方形粘土板上端にも剥離痕),破風幅49.8cm,竪魚木までの高さ35.0cm,整理時は切妻B(家2)		1238,1239,1241,1247,1250,1334,1371,1427,1438/905,913,915,957～959/80,188,209,217,272,309/138	1トレ
	屋根幅33.0×長(62.0)×屋根高28.0	やや密 やや砂粒目立つ ～7mm/片多量,透多量,白中量,赤少量,雲微量,黒(チャか)少量	【橙】 外・内:5YR6/6橙～5YR6/4にぶい橙,断:5YR4/2灰褐 〈良好〉	S12E16G4～6・13・14・21・59(図面20・21)/S12E16G5・6・13～15・62/S12E16(2・3層)/S12E0～4(2層)	東造出中央部
図4-9～12	家1-1(寄棟屋根)	3分割焼成の入母屋造の入母屋下屋根(寄棟屋根),本来は身舎(壁)と一体成形だが直接接合していない(壁上部欠損),屋根上端部は上屋根をのせるため平坦な面を作り出す(上屋根設置部分若干凹む,平坦面上面に刺突工具痕多数あり),棟持柱はこの平坦面作り出した後に貼り付け),妻側の屋根上端部(棟持柱裏)は障泥板状の粘土貼り付け(2条一括沈線による施文,棟持柱裏は施文なし),平側の屋根上部側面に障泥板貼り付け(2条一括沈線・1点刺突による施文),障泥板両端に1辺0.6cmの斜め上方からの小孔(一部未貫通),軒先に帯状粘土貼り付け(2条一括沈線による施文),屋根に1辺0.7cmの小孔(上側と下側の2列),B面の屋根に円形の線刻あり,屋根に方形棟持柱接合(上端は面をもち上屋根に接合している棟持柱をのせる構造),棟持柱は中空(A面側の棟持柱と屋根の間は空間ができる),棟持柱に浅い1条沈線と1点刺突文で盾の文様を線刻(棟持柱正面外郭の縦方向の沈線は鋭い工具で施文),棟持柱正面2箇所と側面1箇所に1辺0.6cm小孔あり(一部未貫通),外面に細かいハケ目残存(12本/1cm),屋根裏面の壁接合部は面(段)を作り出していない,屋根裏面の四隅と中央に補強突帯あり,整理時は寄棟A		1254(主体)/1252,1345,1359～1362/1432/72,307,721,893,901,908,962,971,978,1145	1トレ
	73.0×復元幅68.0×高24.8(棟持柱までの高さ31.2)	やや密 やや大きめの砂粒目立つ ～12mm/片多量,透多量,白多量,赤少量,黒(チャ)少量,雲微量	【橙】 外・内:5YR6/6橙～7.5YR6/4にぶい橙,断:10YR6/2灰黄褐 〈良好〉	S12E16G1・2,S12E12G57・58(図面20)/S12E12G41・42,S12E16G19・20・27・28(図面20・21)/S12E12G50・58,S12E16G1・19・29・35,S8E16G16,S12E16(3層),S12E20(2層)	東造出中央部
図4-13～18	家1-1(身舎　壁)	3分割焼成の入母屋造の身舎部分(壁),入母屋下屋根(寄棟)とは一体成形だが直接接合していない(壁上部欠損),出入口が各壁面に2箇所ずつ(下部に半円状の凹みがある),壁四隅と壁中央に幅広の柱表現(角柱？)の粘土貼り付け(盾状および×字状の文様を2条一括沈線と1点刺突文で施文,剥離面には9本/1cmのハケ目残存),柱部分に斜め上方から小孔(一辺0.6cmの方形工具で穿孔,未貫通),出入口周囲にも2条一括沈線による施文(一部の出入口下側は1条沈線に見える),D面のみ1点刺突文あり),外面ハケ目調整(8本/1cm),内面の四隅と中央に縦方向の補強突帯(柱表現の可能性あり),整理時は家2		1249,1256,1355,1356,1357,1358/1433,1440/188,903,955,963,969,1144	1トレ
	53.8×60.0×高(26.0)	密 やや大きめの砂粒目立つ ～10mm/片中量,透多量,白多量,赤少量,雲微量,黒(チャか)中量	【橙】 外・内:5YR6/6橙,断:5YR5/3にぶい赤褐 〈良好〉	S12E16G3・9・10・19～21(図面20)/S12E16G13・30(図面21・22)/S12E16(2～3層),S12E16G8・11・20・27・60	東造出中央部
図4-19～23	家1-1(高床部)	3分割焼成の入母屋造の高床部(9本柱の円柱),円柱下部欠損(本来は円柱と基部は接合して一体成形,円柱中位の径1.8cmの小孔を中心とみなして高さ想定),床部側面に横方向と縦方向は2条一括沈線と2点一括刺突文(小形正方形刺突)・斜め方向は2条一括沈線と1点刺突文(大形長方形刺突文)による施文(C面は2条一括沈線・2点一括刺突文のみ),床部側面端部は帯状粘土を貼り付け(1条沈線による縦・斜め方向の施文),円柱上端にあたる床部に径2.1～3.0cmの小スカシ孔あり,床部裏面の縁辺部と円柱部の間・円柱部どおしの間にそれぞれ補強突帯あり,円柱部にハケ目残る(7本/1cm),整理時は家2		1365,1366,1368,1433/80,821,972,1615	1トレ
	69.0×68.5×高34.0	密 やや大きめの砂粒目立つ ～10mm/片中量,透多量,白中量,赤少量,雲微量	【黄橙(or黄褐)】 外・内:7.5YR7/4にぶい橙,断:7.5YR5/1褐灰 〈良好〉	S12E16G21・22・29・30(図面20・21)/S12E16(2層),2トレS12E16G30(図面40),2007年度表採	東造出中央部
図4-21～26	家1-1(基部)	3分割焼成の入母屋造高床の基部(高床の円柱の土台となる基部,本来は高床部と一体成形,円柱と接合せず),9本の円柱部(径10.9～13.5cm)とその間に4つのホスカシ孔(径2.5cm)あり,最下部の円柱部は欠損,文様なし,裏面に縁辺部と円柱部をつなぐ補強突帯あり(柱間をつなぐ補強は確認できず),裏面のホスカシ孔周囲は粘土盛り上がる(上面から穿孔),調整はナデと指オサエ,整理時は家2		1365,1368,1373,1375/913,962,964,965,966,972,974,980/80,147,148,188,209,214,309/1,35,386/2/132	1トレ
	68.4×64.9×高(7.0)	密 ～5mm/片中量,透多量,白中量,赤少量,雲微量,黒チャ少量	【橙(or黄褐)】 外・内:5YR6/6橙～10YR7/4にぶい黄橙,断:10YR5/2灰黄褐 〈良好〉	S12E16G22・30(図面20)/S12E16G5・19・22～24・30・32・40/S12E16/S12E20/S12E10～E20/2トレS0～4E-	東造出中央部
図4-27・28	家1-2(切妻屋根)	分割焼成の切妻屋根(入母屋の上屋根か),破風上部欠損(反対側の屋根と・破風も欠損),現状で大棟に竪魚木設置部分が5箇所,屋根表面に格子状の線刻(2条一括沈線を2つ並べて4条の線刻),棟・屋根・破風正面・破風側面に径0.7cmの小孔多数(斜め上方から穿孔,破風側面以外は貫通,沈線の後),破風に突起(鞭懸)2箇所あり(破風に文様なし),妻側の壁一部残存,一部ハケ目あり(7本/1cm),屋根側面中央部の割れ口にスカシ状の部分あり,大棟から屋根の接続部の一部に破断面のない箇所あり(スカシ状？閉塞箇所？),整理時は切妻A(家1)		1345(主体),67,139,380,978	1トレ
	(67.1)×(30.0)×高(30.8)	やや密 やや砂粒目立つ ～5mm/片多量,透多量,白中量,赤少量,雲微量	【黄褐(orにぶい黄橙)】 外・内:10YR7/4にぶい黄橙,断:10YR6/2灰黄褐 〈良好〉	S12E16G26～28・35～37(図面20),S12E24,S12E16,S12E20(図面9),S12E16G35	東造出中央部
図4-29-1	家1-2(屋根)	寄棟の屋根軒先(隅部あり,入母屋下屋根か),軒先に幅2.5cmの帯状の粘土貼り付け(2条一括沈線による縦・斜め方向の施文),屋根に小孔4箇所残存(一辺0.6cm,貫通),内外面調整不明瞭,隅部内面に補強突帯あり,図4-29-2と同一個体か		1345, 1360, 1362	1トレ
	(49.7)×(19.8)×(11.5)	密 大きめ砂粒含む～12mm/片やや多量,透多量,白やや多量,赤中量,雲微量,黒少量	【黄褐】 外・内:7.5YR7/4にぶい橙,断:7.5YR6/1褐灰 〈やや良好〉	S12E16G19・27(図面20)	東造出中央部
図4-29-2	家1-2(屋根)	寄棟の屋根軒先(隅部あり,入母屋下屋根か),軒先に幅2.5cmの帯状の粘土貼り付け(2条一括沈線による縦・斜め方向の施文),屋根に小孔3箇所残存(一辺0.7cm,貫通),外面ハケ調整(9本/1cm),隅部内面に補強突帯あり,図4-29-1と同一個体か		1359, 1361	1トレ
	(34.1)×(21.7)×(11.5)	密 大きめ砂粒含む ～8mm/片中量,透やや多量,白中量, 赤少量,雲微量, 黒少量	【黄褐】 外・内:7.5YR7/4にぶい橙,断:7.5YR6/1褐灰 〈やや良好〉	S12E16G20(図面20)	東造出中央部
図4-30-1	家1-2(竪魚木)	家1-2に取り付く竪魚木(直接接合せず),完形,中実,両小口面から小孔穿孔(やや斜めに穿孔して側面に貫通),側面から小口にむかう穿孔あり(小孔穿孔の失敗か),小口面に未貫通の小孔痕跡あり(径0.3×深0.5cm,穿孔しかけて中止か),屋根の部材に取り付けた際の貼り付け残る(剥離部もあり)		1345, 385	1トレ
	長17.5×幅3.6×4.6	密 やや砂粒目立つ ～5mm/片中量,透中量,白中量, 赤少量,雲微量, 黒微量	【黄褐】 外:7.5YR6/6橙 〈やや良好〉	S12E16G35(図面20),S12E20G10(図面9)	東造出北東部
図4-30-2	家1-2(竪魚木)	家1-2に取り付く竪魚木(直接接合せず),完形,中実,両小口面からそれぞれ小孔穿孔(やや斜めに穿孔して側面に貫通,やや直線的ではない穿孔),屋根の部材に取り付けた際の貼り付け残る		1341	1トレ
	長18.5×幅4.3×4.0	密 やや砂粒目立つ ～5mm/片中量,透多量,白中量,赤少量,雲微量,黒(チャか)中量	【黄褐】 外:7.5YR7/6橙 〈やや良好〉	S12E16G50(図面20)	東造出北東部
図4-30-3	家(障泥板)	家1-2の入母屋下屋根に付属する障泥板(端部)か,端部の上側は半円状にえぐりとった形状,2条一括沈線と1点刺突文で施文,一辺0.7cmの小孔あり(未貫通,深1.4cm),裏面には突帯状の貼り付け2本あり(補強か),内外面調整不明瞭		1345	1トレ
	(12.0)×高8.8/厚2.3	密 やや大きめの砂粒目立つ ～4mm/片中量,透やや多量,白中量,赤中量,雲微量,黒少量	【黄褐(or黄橙)】 外・内:7.5YR7/6橙,断:10YR6/2灰黄褐 〈良好〉	S12E16G26(図面20)	東造出北東部
図4-30-4	家(障泥板)	家1-2の入母屋下屋根に付属する障泥板(端部)か,端部の上側は半円状にえぐりとった形状(えぐり小さい),2条一括沈線と1点刺突文で施文,一辺0.7cmの小孔あり(貫通),内外面調整不明瞭		963	1トレ
	(7.9)×高7.5/厚2.0	密 ～3mm/片中量,透中量,白少量,赤少量,雲微量,黒(チャか)少量	【黄褐(or黄橙)】 外・内:7.5YR7/6橙,断:10YR5/2灰黄褐 〈良好〉	S12E16G20	東造出中央部
図4-30-5	家(障泥板)	家1-2の入母屋下屋根付属の障泥板(端部)か,端部の上側は半円状にえぐりとった形状,2条一括沈線・1点刺突文で施文,一辺0.6cmの小孔(貫通),内外面調整不明瞭		1364	1トレ
	(6.5)×高7.6/厚1.7	密 やや砂粒目立つ ～5mm/片多量,透中量,白少量,赤少量,雲微量,黒少量	【黄褐(or黄橙)】 外・内:5YR6/6橙,断:7.5YR5/2灰褐 〈良好〉	S12E16G21(図面20)	東造出中央部
図4-30-6	家(棟持柱)	家1-2の入母屋下屋根に取り付く棟持柱か(方柱状,中空),下部は屋根に接合するように側面斜めの端部あり(剥離面),上端部～片側の側面欠損,裏側は接合面(剥離面)ではない端部(壁や屋根に直接接合しない部分,壁との間に空間できる),正面は2条一括沈線による×字状文様,正面中央に一辺0.6cmの小孔(斜め上方から貫通),側面にも斜め上方からの未貫通の小孔(一辺0.5×深3.0cm),外面調整不明瞭		1345(主体),859	1トレ
	(10.0)×11.0×(15.0)	密 ～3mm/片やや多量,透中量,白中量,赤少量,雲微量,黒少量	【黄褐(or黄橙)】 外:7.5YR6/4にぶい橙,内:5YR6/6橙,断:10YR6/2灰黄褐 〈良好〉	S12E16G26(図面20),1トレ排土	東造出中央部
図4-30-7	家(棟持柱)	家1-2の入母屋下屋根に取り付く棟持柱か(方柱状,中空),下部は屋根に接合するように側面斜めの端部(剥離面),上部は上屋根の棟持柱をのせる面(側面斜めの端部),上端と裏側と側面の一部欠損,裏側は接合面(剥離面)ではない端部(壁や屋根に直接接合しない部分,壁との間に空間できる),正面は2条一括沈線による×字状文様,正面中央に一辺0.7cmの小孔2箇所(斜め上方から貫通),両側面にも斜め上方からの小孔(貫通1,未貫通1,一辺0.7×深3.2cm),外面ハケ調整(7本/1cm)		140,905,1247/957？,958？,1566？	1トレ
	10.8×9.9×22.0	密 ～5mm/片やや多量,透やや多量,白中量,赤少量,雲微量,黒少量	【黄褐(or黄橙)】 外:2.5YR6/6橙～5YR6/6橙,内:5YR6/6橙,断:7.5YR5/2灰褐～7.5YR6/4にぶい橙 〈良好〉	S12E16(2～3層),S12E12G62,S12E16G5(図面20)/S12E16G13・14,S12E12G54(図面22)	東造出中央部
図4-31～35	家1-3(平屋の身舎)	平屋の身舎(壁)壁上部～屋根部欠損,壁面は1点刺突文と綾杉文風の沈線による施文,A面とC面に出入口部あり(出入口部下側中央は半円形に凹む),壁面中央(縦方向)と出入口部に外周1条ずつの沈線と内側2点一括刺突文(A面は方形刺突・C面は円形刺突で異なる)を施した帯状の粘土貼り付け(剥離部にはハケ残存),隅部は粘土を貼り付けて角を作り出す,屈曲した裾廻突帯あり(裾廻突帯の四隅下側に補強突帯),A面・C面(出入口部)の裾廻突帯上にのみ帯状の粘土貼り付け(貼り付け部の剥離面にハケ目残存),基部外面にハケ目あり(7～9本/1cm),基部に半円形のスカシあり(C面には円形のスカシ2箇所あり),内面の四隅と中央に補強突帯貼り付け(柱表現の可能性もあり),内面の調整はナデ・指オサエ		1432・1437(主体)/1345,1358,1362,1363,1384？/902,955,963,969,1126,307？	1トレ
	67.1×56.5×(29.5)	密 やや大きめの砂粒目立つ ～10mm/片中量,透多量,白中量,赤少量,雲微量,黒色～赤色チャ多量	【橙】 外・内:5YR6/4にぶい橙～7.5YR7/4にぶい橙,断:7.5YR5/2灰褐 〈良好〉	S12E16G19・20・27・28(図面21),S12E16G19・20・27・28・34(図面20),S12E12G59,S12E16G11・20・27,S8E16G40,S20E16(3層)	東造出中央部
図4-36-1	家1-4(寄棟屋根)	寄棟屋根(隅部),粘土を貼り付けて棟覆を表現,径0.9cmの小孔(貫通),文様確認できず,外面調整不明瞭,内面ナデ・指オサエ		1328	1トレ
	(16.3)×(12.9)×(10.3)	密 ～10mm/片中量,透中量,白少量,赤少量,雲微量,黒微量	【橙(or黄橙)】 外:7.5YR7/6橙,内:5YR6/6橙,断:10YR7/3にぶい黄橙 〈やや軟質〉	S16E16G51(図面20)	東造出南東部
図4-36-2	家1-4(壁)	屋根と壁の接合部,壁上端部に屋根をのせる(屋根の接合箇所には小さな平坦面を作る),屋根・壁間には粘土充填による補強,屋根に文様確認できず,調整不明瞭		1331	1トレ
	(15.7)×(10.7)×(10.1)	密 若干大きめの砂粒含む～7mm/片やや多量,透やや多量,白少量,赤中量,雲微量,黒少量	【橙】 外:7.5YR7/6橙,内:5YR6/6橙,断:10YR6/3にぶい黄橙 〈やや軟質〉	S16E16G58(図面20)	東造出南東部
図4-36-3	家1-4(壁)	屋根と壁の接合部,壁上端に屋根をのせる(屋根の接合箇所には小さな平坦面を作る),屋根・壁間には粘土充填による補強,屋根には小孔3箇所あり(1つは径0.8cmで貫通,1つは未貫通で半分欠損,1つは半分欠損で貫通か),屋根には文様確認できず		80,93,986,1063,1064,1165,1331	1トレ
	(43.5)×(8.0)×(13.3)	密 やや大きめの砂粒含む ～10mm/片中量,透やや多量,白中量,赤やや多量,雲微量,黒微量	【橙】 外・内:5YR6/6橙,断:10YR6/3にぶい黄橙 〈良好〉	S12E16(2層),S12E20(2層),S12E16G41・48・55・56,S12E16G47(図面20)	東造出南東部
図4-36-4	家1-4(壁)	壁の隅部,出入口部1箇所あり(平側の壁か,出入口がない方が妻側),隅部は粘土を貼り付けて角を作り出す,横方向の突帯1条あり,3条一括沈線による横・斜め方向の線刻あり,調整不明瞭,天地不明		1332(主体),1166	1トレ
	(15.3)×(7.8)×(23.4)	密 大きめの砂粒目立つ ～5mm/片やや多量,透中量,白中量,赤やや多量,雲微量,黒少量	【橙】 外・内:5YR6/6橙,断:10YR6/2にぶい灰黄褐 〈良好〉	S16E16G58(図面20)/S16E16G42	東造出南東部
図4-37-5	家1-4(壁)	屋根(寄棟の屋根か,軒先欠損)～壁(隅部),推定復元幅48.0cm,壁上端部に屋根をのせて製作か(屋根の接合箇所に小さな平坦面を作る),屋根と壁の間は粘土充填して補強(屋根下に補強材貼り付け1箇所),屋根には小孔2箇所(1つは未貫通・径0.9×深3.6cm,1つは半分欠損),円形スカシ孔2箇所(径約7.0cm,ヘラ状工具痕残る,妻側の壁か),壁隅部あり(粘土を貼り付けて角を作る),横方向の突帯1条(壁の中央か),横・斜め方向の3条一括沈線の施文(綾杉文風),内外面調整不明瞭 整理時は家(新)		1327, 1328, 1332	1トレ
	(31.5)×(21.2)×(46.1)	密 大きめの砂粒あり ～10mm/片やや多量,透やや多量,白やや多量,赤やや多量,雲微量,黒微量	【橙】 外・内:5YR6/6橙,断:10YR6/4にぶい黄橙 〈良好〉	S16E16G2・43・59(図面20)	東造出南東部
図4-37-6	家1-4(壁)	家形埴輪の壁か,円形スカシ孔2箇所あり(径0.7cm程度),家1-4の妻側の壁に類似(同一個体か),天地・表裏不明,表面やや剥離した痕跡,内外面調整不明瞭		923	1トレ
	(16.0)×高(11.0)/2.0	密 ～5mm/片中量,透やや多量,白中量,赤やや多量,雲微量,黒少量	【橙】 外:7.5YR6/3にぶい褐,内:5YR6/6橙,断:10YR6/3にぶい黄橙 〈良好〉	S8E12～E16	東造出

図4-38-7	家1-4(壁)	家形埴輪の壁(図4-38-8の上部か),出入口部1箇所残存,横方向の突帯剥離痕1条あり(壁中央の突帯か),3条一括沈線による施文(横・斜め方向),外面に工具による刺突痕3箇所(末貫通),外面は斜めハケ調整(9本/1cm),内面はナデ・指オサエか,天地逆の可能性もあり		1332	1トレ
	(33.2)×高(20.6)/2.4	密 大きめの砂粒目立つ ～18mm/片やや多量,透やや多量,白中量,赤やや多量,雲微量,黒少量	【橙】 外・内:5YR6/6橙～5YR7/橙,断:10YR6/3にぶい黄橙 〈良好〉	S16E16G57(図面20)	東造出南東部
図4-38-8	家1-4(壁)	家形埴輪の壁,線刻不明瞭(2条一括沈線?),図4-38-7の下部か,出入口1箇所あり,内外面調整不明瞭		1328	1トレ
	(18.8)×高(10.8)/2.0	密 大きめの砂粒目立つ ～10mm/片多量,透多量,白中量,赤やや多量,雲微量,黒微量	【橙】 外・内:5YR6/6橙,断:10YR6/3にぶい黄橙 〈良好〉	S16E16G50(図面20)	東造出南東部
図4-38-9	家1-4(壁)	家形埴輪の壁裾,底部付近に一部剥離痕跡あり(裾廻突帯の可能性あり),底部に面あり(圧痕もしくは工具痕あり),内面はナデ・指オサエ(外面調整不明瞭)		882	1トレ
	(9.3)×高(11.0)/2.0	密 やや砂粒目立つ ～5mm/片やや多量,透中量,白中量,赤中量,雲微量,黒少量	【橙】 外・内:5YR6/6橙,断:7.5YR5/3にぶい褐 〈良好〉	S16E16(機械掘削)	東造出
図4-38-10	家1-4(壁)	家形埴輪の壁裾,底部付近に剥離痕跡(裾廻突帯の剥離か),底部に圧痕もしくは工具痕,内外面とも調整不明瞭(指オサエ多い),他の家1-4に比べて器壁やや薄い		1164	1トレ
	(10.3)×高(10.0)/1.3	密 大きめの砂粒あり ～10mm/片やや多量,透やや多量,白中量,赤やや多量,雲微量,黒微量	【橙】 外・内:5YR6/6橙,断:7.5YR6/3にぶい褐 〈良好〉	S16E16G35・36	東造出南東部
図4-38-11	家1-4(壁)	家形埴輪の壁裾,3条一括沈線による施文,内外面とも調整不明瞭(指オサエあり),裾廻突帯の痕跡確認できず,底部に面あり(圧痕もしくは工具痕あり)		19	1トレ
	(15.7)×高(22.4)/2.2	密 大きめの砂粒目立つ ～13mm/片多量,透多量,白やや多量,赤やや多量,雲微量,黒微量	【橙】 外・内:5YR6/6橙,断:7.5YR6/3にぶい褐 〈良好〉	S12E20(1・2層)	東造出東側斜面
図4-38-12	家1-4(壁)	壁裾(隅部あり),3条一括沈線による横方向の線刻(斜め方向の線刻は現状で1条しか見えない),隅部は粘土を貼り付けて角を作り出す,裾廻突帯なし(底部付近は指オサエ,一部変色箇所あり),内外面調整不明瞭		1457	1トレ
	(26.7)×(4.4)×(19.5)/2.0	密 大きめの砂粒目立つ ～13mm/片多量,透多量,白やや多量,赤やや多量,雲微量,黒微量	【橙】 外・内:5YR6/8橙,断:7.5YR6/4にぶい橙 〈良好〉	S12E20G4(図面32)	東造出東端部
図4-39-1	家1-7(屋根 軒先)	屋根(寄棟の隅部),家1-4に類似するが出土地点が若干違うことから家1-7としておく,軒先に幅4.5cmの帯状粘土の貼り付け(3条一括沈線による施文)		19, 885	1トレ
	(15.5)×(13.7)×(4.8)	密 ～5mm/片やや多量,透やや多量,白中量,雲微量	【橙(or黄橙)】 外・内:7.5YR6/6橙,断:10YR7/4にぶい黄橙 〈やや良好〉	S12E20(1・2層),S12E24	東造出東側斜面
図4-39-2	家1-7(屋根 軒先)	家1-4に類似するが出土地点が若干違うので家1-7とする,小孔2箇所(貫通,径0.7cm・0.6cm),軒先に幅3.5cmの帯状粘土の貼り付け,調整不明瞭,線刻確認できず		5087,No.なし	1トレ
	(27.6)×(12.6)×(5.6)	密 やや砂粒目立つ ～5mm/片やや多量,透やや多量,白中量,赤中量,雲微量,黒微量	【橙】 外・内:5YR6/6橙,断:7.5YR7/4にぶい褐 〈良好〉	表採(1トレ周辺),東造出南側表土(2002年の表採)	東造出東側斜面
図4-39-3	家1-7(屋根 軒先)	屋根(寄棟の隅部か),家1-4に類似するが出土地点が若干違うことから家1-7としておく,貫通する小孔2箇所あり(径0.9cm),軒先に幅3.0cmの帯状粘土の貼り付け(3条一括沈線による線刻)		36, 584	1トレ
	(40.0)×(11.9)×(8.4)	密 やや大きめの砂粒目立つ ～5mm/片中量,透やや多量,白中量,赤中量,雲微量	【橙(or黄橙)】 外:7.5YR6/6橙～7.5YR5/3にぶい褐,内:5YR5/4にぶい赤褐,断:5YR5/3にぶい赤褐 〈やや良好〉	S12E24,S12E24(図面9)	東造出東側斜面
図4-39-4	家1-7(屋根 軒先)	屋根(寄棟の隅部),家1-4に類似するが出土地点が若干違うことから家1-7としておく,貫通する小孔3箇所あり(径0.8cm),軒先に幅3.0cmの帯状粘土の貼り付け(不明瞭だが現状では2条一括沈線による線刻を確認)		35, 350,583	1トレ
	(34.9)×(30.0)×(9.0)	密 ややとぎめの砂粒あり ～5mm/片やや多量,透やや多量,白中量,赤中量,雲微量	【橙】 外・内:2.5YR6/6橙,断:10YR7/4にぶい黄橙 〈良好〉	S12E20,S12E20(図面9),S12E24(図面9)	東造出東側斜面
図4-40-1	家1-5(破風)	破風部分か(やや小形の家か),破風板に1辺0.6cmの小孔あり(貫通),破風側面に半円状のえぐりあり,屋根側面に高さ2.5cmの突帯状の貼り付けあり(棟押さえか?),妻側の壁の一部残存,胎土は図4-40-2に類似(同一個体か)		1110	1トレ
	(6.5)×(14.1)×(19.8)	やや粗い ～5mm/片多量,透やや多量,白やや多量,赤少量,雲微量,黒中量	【桃(or橙)】 外:2.5YR6/6橙,内:2.5YR5/4にぶい赤褐,断:2.5YR5/2灰赤 〈良好〉	S12E12G25(図面11)	1段目テラスより西側
図4-40-2	家1-5(棟木)	中空の棟木(やや小形),中央に径0.5cmの小孔(貫通),内外面調整不明瞭,胎土やや大きさから図4-40-1と組み合う可能性		1207	1トレ
	5.6×8.2×5.0	やや粗い ～3mm/片やや多量,透多量,白やや多量,赤やや多量,雲微量,黒中量	【橙(or桃)】 外・内・断:5YR6/6橙 〈良好〉	S12E20	東造出東側斜面
図4-40-3	家1-6(棟木)	中実の棟木(やや小形),中央に未貫通の小孔(径0.5・深1.5cm),上面・下面とも大きな剥離面(接合面)あり,他の家形埴輪とは違う胎土なので家1-6とする(家1-8や家1-4とはやや似た胎土)		51	1トレ
	5.6×(10.2)×3.8	密 砂粒ほとんどなし ～3mm/片中量,透中量,白少量,赤微量,雲微量,黒微量	【黄橙(or黄橙)】 外:5YR6/6橙,断:10YR7/4にぶい黄橙 〈やや軟質〉	S12E20(1層)	東造出東側斜面
図4-40-4	家か	家形埴輪の破風か?(または器財),家1-8に近い(1-4や1-6の可能性も),斜めからの穿孔あり(径0.5cm),両面ナデ調整か		80	1トレ
	(8.2)×高(15.9)/4.0	密 ～4mm/片中量,透中量,白中量,赤中量,雲微量,黒少量	【黄橙(or黄橙)】 外・内:7.5YR7/4にぶい橙,断:7.5YR6/2灰褐 〈やや軟質〉	S12E16(2層)	東造出
図4-40-5	家1-8(棟覆)	屋根を押さえる棟覆の押縁・笄部分(帯状の押縁に平面円形・断面台形の笄貼り付け),縦4条・横4条の線刻(1条ずつ施文),裏側は剥離面,上下左右不明,胎土は家1-6(図4-40-3)や家1-4に近い		1332	1トレ
	4.7×3.2×(9.9)	密 ～4mm/片中量,透少量,白少量,赤中量,雲微量	【黄橙(or黄橙)】 外:7.5YR6/6橙,断・剥離面:10YR6/2にぶい黄橙 〈やや軟質〉	S16E16G58(図面20,家1-4集中部周辺)	東造出南東部
図4-40-6	家1-8(棟覆)	棟覆の押縁・笄部分(帯状の押縁に平面円形・断面台形の笄貼り付け),縦4条?の線刻(1条ずつ施文),裏側は剥離面,上下左右不明,胎土は家1-6(図4-40-3)や家1-4に近い		1162	1トレ
	4.4×3.2×(8.8)	密 ～5mm/片中量,透少量,白少量,赤中量,雲微量	【黄橙(or黄橙)】 外:7.5YR6/6橙,断・剥離面:10YR6/3にぶい黄橙 〈やや軟質〉	S16E16G25～36	東造出南東部
図4-40-7	家1-8(棟覆)	棟覆の押縁・笄部分(帯状の押縁に平面円形・断面台形の笄貼り付け),縦4条・横4条の線刻(1条ずつ施文),裏側は剥離面,上下左右不明,胎土は家1-6(図4-40-3)や家1-4に近い		80	1トレ
	4.9×3.4×(7.8)	密 ～5mm/片中量,透中量,白少量,赤中量,雲微量	【黄橙(or黄橙)】 外:7.5YR6/6橙,断・剥離面:10YR6/3にぶい黄橙 〈やや軟質〉	S12E16(2層)	東造出
図4-40-8	家1-8(棟覆)	棟覆の押縁・笄部分(帯状の押縁に平面円形・断面台形の笄貼り付け),縦3条・横4条の線刻確認(1条ずつ施文),裏側は剥離面,上下左右不明,胎土は家1-6(図4-40-3)や家1-4に近い		1162	1トレ
	4.9×3.0×(7.2)	密 ～3mm/片中量,透少量,白少量,赤中量,雲微量	【黄橙(or黄橙)】 外:7.5YR6/6橙,断・剥離面:10YR6/3にぶい黄橙 〈やや軟質〉	S16E16G25～36	東造出南東部
図4-40-9	家1-8(屋根?)	屋根または基部の裾廻突帯?,縦と横方向の線刻(1条ずつ施文),表面に縦方向の変色部(貼り付けた部材の剥離痕か),裏面は剥離面,図4-40-10・11と同一個体(胎土は家1-4に近いが家1-4の屋根には線刻なし,家1-2にも胎土近い?),調整不明瞭		210 ,1375	1トレ
	(18.6)×3.5×4.6	密 大きめの砂粒含む ～14mm/片やや多量,透やや多量,白中量,赤やや多量,雲微量,黒少量	【黄橙(or黄橙)】 外:7.5YR7/4にぶい橙,断・剥離面:7.5YR6/2灰褐 〈やや良好〉	S12E12(3層),S12E16G30(図面20,家1-1基部周辺)	東造出中央部～西側
図4-40-10	家1-8(裾廻突帯?)	屋根もしくは基部の裾廻突帯?,5条の横方向の線刻あり(1条ずつ施文),表面に粘土のはみ出しあり(縦方向の貼り付け痕跡か?),径0.6cmの貫通する小孔あり,裏面は剥離面,図4-40-9・10と同一個体(胎土は家1-4に近いが家1-4の屋根には線刻なし,家1-2にも胎土近いか?),調整不明瞭		35	1トレ
	(7.2)×3.2×(5.8)	密 大きめの砂粒あり ～16mm/片やや多量,透中量,白少量,赤少量,雲微量,黒微量	【黄橙(or黄橙)】 外:7.5YR7/4にぶい橙,断・剥離面:7.5YR6/2灰褐 〈やや良好〉	S12E20(1・2層)	東造出東側斜面
図4-40-11	家1-8(裾廻突帯?)	屋根または基部の裾廻突帯?,4条の横方向の線刻(1条ずつ施文),表面に縦方向の変色部(貼り付けた部材の剥離痕か),裏面は剥離面,図4-40-9・10と同一個体(胎土は家1-4に近いが家1-4の屋根には線刻なし,家1-2にも胎土近い?),調整不明瞭		1326	1トレ
	(15.1)×3.1×5.2	密 ～5mm/片やや多量,透中量,白中量,赤やや多量,雲微量,黒少量	【黄橙(or黄橙)】 外:7.5YR7/4にぶい橙,断・剥離面:7.5YR6/2灰褐 〈やや良好〉	S16E16G60(図面20,家1-4集中部周辺)	東造出南東部
図4-40-12	家(壁か)	家の壁裾部か屋根?(家1-8か),沈線3条あり,図4-40-13・14と同一個体か,家1-2・1-4・1-6の可能性もあり		383	1トレ
	(9.3)×高(8.9)/2.0	密 ～8mm/片やや多量,透中量,白少量,赤中量,雲微量,黒少量	【黄褐(or黄橙)】 外・内:7.5YR7/4にぶい橙,断:7.5YR6/2灰褐 〈やや良好〉	S12E20(図面9)	東造出東側斜面
図4-40-13	家(壁か)	家の壁裾部か屋根?(家1-8か),沈線5条あり,図4-40-12・14と同一個体か,家1-2・1-4・1-6の可能性もあり		1162	1トレ
	(8.8)×高(9.4)/2.3	密 ～8mm/片中量,透中量,白中量,赤中量,雲微量,黒微量	【黄褐(or黄橙)】 外・内:7.5YR7/4にぶい橙,断:7.5YR6/2灰褐 〈やや良好〉	S16E16G25～36	東造出南東部
図4-40-14	家(壁か)	家形埴輪の壁裾部か(もしくは屋根)?,表面に5条の線刻あり(1条ずつ施文),調整不明瞭,特徴などは家1-8に近いか,図4-40-12・13と同一個体か		不明(No.1or2or8)	1トレ
	(15.2)×高(13.0)/2.0	密 やや砂粒あり ～4mm/片やや多量,透やや多量,白中量,赤中量,雲微量	【黄褐(or黄橙)】 外・内:7.5YR6/4にぶい橙～5YR6/6橙,断:10YR6/3にぶい黄橙 〈やや軟質〉	注記不明(注記03-01・185-132のみ)	東造出か
図4-41-1	家(千木1-1)	上端部中央に切り込みあり,千木の交差部分には両面とも突起(栓)あり,おそらく千木交差部分は段差なし,両面に施文(いずれの文様も2条一括沈線で施文),表面は外周は2条・内帯横方向は2条・同心円文は2条の沈線,同心円文の中心は径1.2cmの竹管文,上端部付近に鋭利な工具による深い沈線あり(1条ずつ施文),裏面は外周は2条・内帯横方向は4条・斜め方向(若干円弧状)は2条の沈線,両面とも4箇所ずつ斜め上方からの小孔あり(計8箇所,径0.9cm,貫通3・未貫通5,線刻の後に穿孔),不明瞭だが一部ハケ目あり,家1-1あるいは1-2に取り付く可能性があるが同じ文様ではないため不確定,千木幅11.7cm		1248(主体),956,1247	1トレ
	20.7×高(36.0)/3.0	密 やや砂粒目立つ ～10mm/片多量,透中量,白多量,赤少量,雲微量,黒(チャ)少量	【黄橙】 外:7.5YR7/4にぶい橙～2.5YR6/8橙,断:2.5YR5/3にぶい赤褐 〈良好〉	S12E16G12(図面20),S12E16G5(図面20)	東造出中央部
図4-42-2	家(千木1-2)	下半部欠損,上端部中央に切り込みあり,両面に施文(いずれの文様も2条一括沈線で施文),表面は外周は2条・内帯横方向は4条・同心円文は2～4条の沈線,同心円文の中心は径1.2cmの竹管文,上端部付近に鋭利な工具による深い沈線4条あり(1条ずつ施文),裏面は外周は2条・内帯横方向は4条・斜め方向(若干円弧状)は2条の沈線,両面とも2箇所ずつ斜め上方からの小孔あり(計4箇所,径0.9×深2.1cm,未貫通,線刻の後に穿孔),不明瞭だが一部ハケ目あり(8～10本/1cm),家1-1あるいは1-2に取り付く可能性があるが同じ文様ではないため不確定		1433(主体),1354	1トレ
	13.5×高(30.0)/3.2	密 やや砂粒目立つ ～4mm/片多量,透多量,白中量,赤中量,雲微量,黒(チャ)中量	【黄橙】 外:2.5YR6/6橙～7.5YR6/6橙,断:7.5YR5/3にぶい褐 〈良好〉	S12E16G21(図面21),S12E16G28(図面20)	東造出中央部
図4-42-3	家(千木1-3)	下半部欠損,上端部中央に切り込みあり,両面に施文(いずれの文様も2条一括沈線で施文),図4-41-1・図4-42-2と違い表裏面とも同心円文(一面は文様不明瞭だが外周は2条・内帯横方向は4条?・同心円文は2条の沈線,同心円文の中心は径1.2cmの竹管文,上端部付近に鋭利な工具による深い沈線あり(1条ずつ施文,片面は鋭利ではなく他と同じ2条一括沈線による施文),計3箇所の斜め上方からの小孔あり(1箇所は未貫通,線刻の後に穿孔),調整不明瞭,家1-1あるいは1-2に取り付く可能性があるが同じ文様ではないため不確定		1247(主体),956,1370	1トレ
	13.0×高(23.0)/3.3	密 やや砂粒目立つ ～5mm/片多量,透中量,白少量,赤中量,黒中量,雲微量	【黄褐】 外:2.5YR6/6橙～7.5YR6/6橙,断:10YR5/2灰褐色 〈良好〉	S12E16G13(図面20)/S12E16G12(図面20)	東造出中央部
図4-43-1	家(棟木)	中空の棟木か(家1-1か,C面ではなくA面に取り付くか),中央に小孔あり(一辺0.7cm,貫通),下部に板状のものが貼り付いていた痕跡あり,裏面の剥離部には長方形の小形工具痕多数あり(貼り付けのためのキズ?),先端部径7.2cm		1460	1トレ
	10.3×10.0×高12.5	密 ～8mm/片多量,透中量,白中量,赤中量,雲微量,黒(チャか)少量	【橙】 外:2.5YR6/6橙,内・断:2.5YR4/2灰赤 〈良好〉	S12E16G13(図面30)	東造出中央部
図4-43-2	家(棟木)	中空の棟木か(家1-1と同一個体か?),円形の面あり(反対側は剥離面),調整不明瞭		1367	1トレ
	(9.6)×(8.0)×(4.0)	やや粗い ～5mm/片やや多量,透やや多量,白やや多量,赤少量,雲微量,黒少量	【橙】 外:5YR6/6橙,断:7.5YR7/4にぶい橙 〈やや良好〉	S12E16G29(図面20,家1-1基部周辺)	東造出中央部
図4-43-3	家(大棟の部材か)	大棟上の堅魚木をのせる部材か(棟覆いの鰭飾り・棟押さえの可能性もあり),半円形のえぐり部分あり(堅魚木をのせる部分か),下部は本体との剥離面,図4-43-4・5と同一個体か(家1-1あるいは家1-5か)		80	1トレ
	(6.4)×2.5×2.7	密 ～2mm/片中量,透中量,白中量,赤少量,雲微量,黒中量	【橙(or桃)】 外:5YR6/6橙,断・剥離面:5YR5/3にぶい赤褐 〈良好〉	S12E16(2層)	東造出
図4-43-4	家(大棟の部材か)	大棟上の堅魚木をのせる部材か(棟覆いの鰭飾り・棟押さえの可能性もあり),半円形のえぐり部分あり(堅魚木をのせる部分か),下部は本体との剥離面,図4-43-3・5と同一個体か(家1-1あるいは家1-5か)		985	1トレ
	(9.3)×1.8×3.6	密 ～3mm/片中量,透やや多量,白中量,赤少量,雲微量,黒(チャか)中量	【橙(or桃)】 外:5YR6/6橙,断・剥離面:5YR5/3にぶい赤褐 〈良好〉	S12E16G47	東造出中央東側
図4-43-5	家(大棟の部材か)	大棟上の堅魚木をのせる部材か(棟覆いの鰭飾り・棟押さえの可能性もあり),半円形のえぐり部分あり(堅魚木をのせる部分か),下部は本体との剥離面,図4-43-3・4と同一個体か(家1-1あるいは家1-5か)		353	1トレ
	(9.7)×2.0×4.0	密 ～3mm/片中量,透やや多量,白中量,赤少量,雲微量,黒(チャか)中量	【橙(or桃)】 外:5YR6/6橙,断・剥離面:5YR5/3にぶい赤褐 〈良好〉	S12E20(図面9)	東造出東側斜面
図4-43-6	家(屋根大棟?)	屋根頂部(大棟)か,家1-1または家1-5と同一個体の可能性,中央に剥離部(幅狭いが堅魚木がのる部材の剥離か),調整不明瞭		957,913?	1トレ
	(12.0)×(7.2)×(3.0)	密 ～2mm/片少量,透中量,白中量,赤少量,雲微量,黒(チャか)中量	【桃(or橙)】 外・内:2.5YR6/6橙,断・剥離面:2.5YR4/3にぶい赤褐 〈良好〉	S12E16G13,S12E16G5	東造出中央部
図4-43-7	家か(壁か屋根)	端部に面あり(壁裾か屋根端部),縦および横方向の剥離痕跡あり,一部小孔の可能性がある箇所あり(不明瞭),図4-43-10と同じコンテナ収納(同一個体?)		不明(No.1or2or8)	1トレ
	(12.0)×高(12.1)/厚2.2	密 やや大きめの砂粒あり ～5mm/片やや多量,透中量,白少量,赤中量,雲微量	【橙(orにぶい黄橙)】 外・内:5YR6/6橙,断・剥離面:7.5YR5/2にぶい赤褐 〈やや良好〉	注記不明(注記03-01・185-132のみ)	東造出か
図4-43-8	家か(裾廻突帯?)	屈曲部のある個体で端部に若干面あり(壁裾の裾廻り突帯か),裏面に剥離痕(補強突帯か剥離か)		51	1トレ
	(9.1)×(5.5)×(4.1)	やや粗い ～5mm/片中量,透やや多量,白中量,赤少量,雲微量,黒～灰色(チャか)少量	【にぶい黄褐(or黄橙)】 外・内:5YR5/4にぶい赤褐～5YR6/6橙,断・剥離面:7.5YR5/2灰褐 〈良好〉	S12E20(1層)	東造出東側斜面
図4-43-9	不明形象(家?)	家形埴輪の基部の裾?(基部の隅に近い部分?裾廻突帯?),直角に屈曲する個体,上面に突帯貼り付け,側面下部に半円形のえぐり,調整不明瞭(ナデか),他の家形埴輪とは別個体か		35	1トレ
	(12.5)×(7.6)×(4.7)	密(やや粗い) ～5mm/片中量,透やや多量,白中量,赤少量,黒少量,雲微量	【桃(or橙)】 外:2.5YR6/6橙～5YR4/2灰褐,内:2.5YR6/6,断:5YR4/2 〈良好〉	S12E20(1・2層)	東造出東側斜面
図4-43-10	不明形象(家?)	家(基部の裾?大棟?)か,器財?,側面に沈線を施した面(1本ずつ施文),天地不明,図4-43-7と同じコンテナ収納(同一個体?)		不明(No.1or2or8)	1トレ
	(9.4)×(14.0)×(4.8)	密 ～5mm/片中量,透中量,白少量,赤少量,雲微量	【にぶい黄褐】 外・内・断:7.5YR6/6橙 〈やや軟質〉	注記不明(注記03-01・185-132のみ)	東造出か
図4-43-11	不明形象(家 千木?)	両側辺は面あり(若干丸み),U字状のえぐりあり,中央に径0.6cmの小孔(斜め方向から貫通),片面に径0.5cmの未貫通の小孔2箇所(深2.5,深2.8cm),両面ともナデ調整か,形状から千木の可能性があるが出土した他の家形埴輪とは別個体か		35, 860	1トレ
	16.6×高(16.5)/2.8	密 ～5mm/片中量,透やや多量,白少量,赤中量,雲微量,黒少量	【にぶい黄褐(or黄橙)】 外:2.5YR6/6褐～7.5YR6/4にぶい橙,内:7.5YR6/4にぶい橙～10YR5/2灰黄褐,断:10YR5/2灰黄褐 〈良好〉	S12E20(1・2層),1トレ南(表採)	東造出東側斜面

図4-44	人物(盛装男子1-1)	頭部・左腕・下半身欠損,衣服は円形浮文と3条一括沈線を2回重ねた6条沈線で施文,襟部分は段を作り出して右前の衣服を表現(1条沈線で区画して内部上半は3点一括刺突文＝小さい正方形の刺突,下半は2点一括刺突文＝小さい長方形の刺突),手は指を表現して籠手(手甲)を付ける(指は貼り付けか),腰部には2重の帯(無文の帯と2条一括沈線で施文した帯),帯中央の下に帯が垂れ下がる,両脇に円形スカシ孔,襟部分の剥離箇所にハケ目残存(9本/1cm)	1440	1トレ
	(30.2)×17.5×(35.4)	密 ～5mm/片中量,透やや多量,白中量,赤中量,雲微量,黒少量	【黄橙(or橙)】 外・内:5YR6/6橙～7.5YR6/6橙,断:10YR6/3にぶい黄橙 〈良好〉	S12E16G12・13・20・21(図面22)	東造出中央部
図4-45-1	人物(冠)	人物がかぶる二山式冠,全体の1/3残存(復元径13.0cm程度),外面に2条沈線(おそらく1条ずつ施文)と2点一括刺突文で施文,内面には突帯状の貼り付け(人物の頭にかぶせる際の設置点か),調整不明瞭,復元高10.5cm	1207, 367	1トレ
	(12.3)×(6.4)×(9.5)	密 ～8mm/片中量,透中量,白やや多量,赤多量,雲微量,黒少量(チャか)	【黄橙(or橙)】 外:5YR7/6橙,内・断:7.5YR6/6橙 〈良好〉	S12E20,S12E20(図面9)	東造出東側斜面
図4-45-2	人物(鞘か)	ドーナツ状の部材,人物埴輪装着の鞘か,表面に沈線による文様,側面には刺突文(一部沈線あり),内径部分は剥離面か(腕に装着？),調整不明瞭,内径5.0cm	1332	1トレ
	径9.1×(6.4)×3.5	密 砂粒中量 ～5mm/片中量,透中量,白中量,赤少量,雲微量,黒少量(チャか)	【黄橙】 外・内・断:5YR7/6橙 〈良好〉	S12E16G64(図面20)	東造出南東部
図4-45-3	人物(草摺か)	草摺か巫女の衣の端部,沈線による綾杉文か,調整不明瞭,図4-45-4と同一個体か	414	1トレ
	(5.2)×(3.3)×(3.3)	密 ～2mm/片中量,透中量,白中量,赤少量,雲微量,黒微量	【橙】 外・内:5YR5/6明赤褐,断:5YR5/4にぶい赤褐 〈良好〉	S12E24(図面9)	東造出東側斜面
図4-45-4	人物(草摺か)	草摺か巫女の衣,沈線による綾杉文,調整不明瞭,図4-45-3と同一個体か,傾きや天地不明のため平面に置いて図示	446	1トレ
	(6.8)×高(5.6)/1.3	密 ～3mm/片中量,透中量,白中量,赤中量,雲微量,黒少量	【橙】 外・内:5YR5/6明赤褐,断:5YR5/4にぶい赤褐 〈良好〉	S12E24(図面9)	東造出東側斜面
図4-45-5	人物(帯)	人物埴輪の草摺の帯か,沈線による綾杉文(中央に2条の沈線),裏面剥離面,天地不明	1375	1トレ
	長(5.5)×幅4.7/1.0	密 ～2mm/片中量,透少量,白中量,赤中量,雲微量,黒少量	【橙】 外・内:5YR5/6明赤褐,断:10YR6/3にぶい黄橙 〈良好〉	S12E16G29(図面20,家1-1基部付近)	東造出中央部
図4-45-6	人物(大刀部分)	盛装男子に装着する大刀か,盛装男子1-1と同一個体の可能性もあるが接合せず(該当箇所の傾きが違うため別個体を想定,盛装男子1-2とする),大刀は柄頭と鞘の先端欠損(沈線と2点一括刺突文で施文),大刀を吊り下げる帯あり(刺突文),大刀の上に剥離痕跡あり(貼り付け前の沈線状のキズあり,腕が貼り付く？)	1432, 1345	1トレ
	(14.2)×(6.5)×(12.6)	密 ～5mm/片やや多量,透中量,白中量,赤中量,雲微量,黒(チャか)少量	【橙(or黄橙)】 外・内:5YR6/6橙～7.5YR6/6橙,断:7.5YR7/4にぶい橙 〈良好〉	S12E16G27・28(図面21)・G35・36(図面20)	東造出中央部
図4-45-7	人物(巫女 頭部)	巫女の島田まげ部分(後ろ半分),板状の粘土を折り返して製作(空洞部あり),中央に髪をとめる帯あり,下部は頭部との剥離面(貼り付け時の沈線状のキズあり)	581, 697	1トレ
	12.0×(11.0)×(3.5)	密 砂粒ほとんどなし ～3mm/片中量,透少量,白中量,赤少量,黒少量,雲微量	【黄褐(or黄橙)】 外:7.5YR7/6橙,内・剥離面:10YR5/2灰黄褐,断:7.5YR7/6 〈良好〉	S12E24(図面9),S12E24(図面9)	東造出東側斜面
図4-45-8	人物(巫女 袈裟状衣)	断面U字状の形状,3条一括沈線で施文,下部にヘラ状工具による穿孔あり,内外面調整不明瞭	1332	1トレ
	(15.9)×(9.9)×(7.7)	密 砂粒ほとんどなし ～3mm/片中量,透少量,白中量,赤中量,黒微量,雲微量	【橙】 外:2.5YR6/6橙～7.5YR7/6橙,内:5YR6/6橙,断7.5YR6/4にぶい橙 〈やや軟質〉	S16E16G57・58(図面20,家1-4集中部)	東造出南東部
図4-45-9	人物(巫女) 肩)	人物(巫女)の右肩部か,肩部にタスキ(粘土紐貼り付け),首部の剥離部残存	1614	表採
	(12.2)×(4.7)×(15.5)	密 やや砂粒目立つ ～4mm/片中量,透やや多量,白中量,赤中量,黒(チャか)少量,雲微量	【橙】 外:5YR7/6橙,内:5YR6/6橙,断:7.5YR6/3にぶい褐 〈良好〉	東造出 表採	東造出周辺
図4-46-1	人物(巫女 腕1-1)	器を持つ巫女の右腕,手首側は中実(肩付近は中空),手首部分に2連の玉を貼り付け(玉6個残存,計12～14個の玉を想定できる),巫女腕1-3・4・6と同一地点出土だが同一個体ではなさそう	1331, 1070	1トレ
	(22.0)×6.5×5.0	密 全体的に砂粒小さい ～8mm/片少量,透少量,白少量,赤微量,雲微量,黒微量	【黄褐(or黄橙)】 外・内:10YR7/4にぶい黄橙,断:10YR6/3にぶい黄橙 〈やや良好〉	S12E16G55(図面20),S12E16G63	東造出南東部
図4-46-2	人物(巫女 腕1-2)	器を持つ巫女の両腕,中実,ソケット状に接合する箇所で剥離(一部中空部分残る),手首部分に玉の剥離の可能性がある痕跡あり,全体的にナデ調整	1342	1トレ
	(20.5)×4.0×5.2	密 砂粒中量 ～6mm/片中量,透少量,白少量,赤少量,雲微量,黒(チャか)少量	【黄橙】 外:7.5YR6/6橙～5YR6/6橙,断:10YR6/4にぶい黄橙 〈やや良好〉	S12E16G41(図面20)	東造出北東部
図4-46-3	人物(巫女 腕1-3)	器を持つ巫女の右腕,手首側は中実(中空部分とソケット状に接合),手首部分に玉の剥離痕跡あり,図4-46-4と同一地点出土で胎土類似(同一個体か),巫女腕1-6と同一地点出土だが同一個体ではない	1331	1トレ
	(17.2)×5.2×3.7	密 砂粒中量 ～5mm/片中量,透中量,白少量,赤中量,雲微量,黒少量(チャか)	【黄褐】 外:5YR6/6橙,内・断:7.5YR6/4にぶい橙 〈やや良好〉	S12E16G55(図面20)	東造出南東部
図4-46-4	人物(巫女 腕1-4)	巫女の左腕か？,剥離しているがおそらく器を持つ腕,手首側は中実(中空部分とソケット状に接合),手首部分に2連の玉を貼り付け(4個残存,剥離痕跡を合わせると計12～14個の玉を想定できる),巫女腕1-3と同一地点出土で胎土類似(同一個体か)	1331	1トレ
	(15.5)×5.5×4.6	密 砂粒中量 ～8mm/片少量,透中量,白少量,赤少量,雲微量,黒微量(チャか)	【黄褐】 外:5YR6/6橙,内・断:7.5YR6/4にぶい橙 〈良好〉	S12E16G55(図面20)	東造出南東部
図4-46-5	人物(巫女 腕1-5)	巫女の右腕,剥離しているがおそらく器を持つ腕,手首側は中実(中空部分とソケット状に接合),玉の剥離痕跡は確認できない,胎土は巫女腕1-6に近い	1069,1070, 154	1トレ
	(18.2)×6.2×4.8	密 砂粒中量 ～8mm/片少量,透中量,白少量,赤少量,雲微量,黒少量(チャか)	【黄褐】 外・内:5YR6/6橙～7.5YR6/6橙,断:7.5YR6/4にぶい橙 〈やや良好〉	S12E16G62,S12E16G63,S12E16(2～3層)	東造出南東部
図4-46-6	人物(巫女 腕1-6)	巫女の左腕か,剥離しているがおそらく器を持つ腕,手首側は中実(中空部分とソケット状に接合),玉の剥離痕跡は確認できない,胎土は巫女腕1-5に近い,1-3と同一地点出土だが同一個体ではない	1062, 1063, 1331	1トレ
	(15.7)×4.9×3.4	密 砂粒中量 ～10mm/片中量,透中量,白少量,赤中量,雲微量,黒少量(チャか)	【黄橙(or黄褐)】 外:7.5YR7/6橙,内・断:7.5YR6/6橙 〈やや良好〉	S12E16G54,S12E16G55,S12E16G55(図面20)	東造出南東部
図4-46-7	人物(巫女？ 腕1-7)	巫女の右腕か？,玉類などの貼り付け確認できない,中実(ソケット状の差込部分あり),手先端部分欠損	1423	1トレ
	(11.8)×4.0×4.2	密 ～3mm/片中量,透中量,白中量,赤中量,黒少量,雲微量	【黄橙(or橙)】 外:5YR6/6橙,断:7.5YR7/4にぶい褐～7.5YR6/2灰褐 〈良好〉	S12E20	東造出東側斜面
図4-46-8	人物(力士？ 腕)	人物の右腕か(力士の可能性あり),中実(ソケット状の差込部分あり),玉類など装着部品なし,手先端は手のひら状に作り出すが指の表現確認できず,図4-46-9と同一個体か,胎土などから力士1-1と同一個体の可能性あり	1343	1トレ
	(11.3)×3.9×4.2	やや粗 砂粒目立つ ～4mm/片やや多量,透やや多量,白中量,赤中量,黒中量,雲微量	【黄橙(or橙)】 外:5YR6/6橙,断:7.5YR6/4にぶい橙 〈良好〉	S12E16G34(図面20)	東造出(大甕北側)
図4-46-9	人物(力士？ 腕)	人物の左腕か(力士の可能性あり),中実(ソケット状の差込部分あり),玉類など装着部品なし,手先端は手のひら状に作り出すが指の表現確認できず,図4-46-8と同一個体か,胎土などから力士1-1と同一個体の可能性あり	1439	1トレ
	(14.2)×4.7×4.7	やや粗 やや砂粒目立つ ～4mm/片やや多量,透中量,白中量,赤中量,黒少量,雲微量	【黄橙(or橙)】 外:7.5YR7/6橙,断:10YR4/1褐灰 〈良好〉	S12E16G60(図面21)	東造出(力士周辺)
図4-47～50	人物(力士1-1)	まわし貼り付け,左腕をあげる姿勢(頭部・両腕・右脚欠損),胸部に円形の貼り付けでふくらみを出す(上半身裸),左腕に細い帯状の貼り付け(足結いと同様のものか),脚部に突帯1条(紐状の足結いか,側面には逆U字状の結び目を貼り付け),脚部下部に径2cmの円形の剥離痕(玉貼り付け痕か),腕部は板状工具によるナデで若干面取り状になる,脚部は板ナデ後に縦ハケ調整(8本/1cm),両脇下と腹部(径2.2cm)にスカシ孔,脚部下半部の内面に補強突帯あり,胴部幅24.0cm	1439	1トレ
	(39.1)×23.0×(71.3)	密 多量の砂粒目立つ ～10mm/片多量,透多量,白多量,赤中量,雲微量,黒少量(チャか)	【橙】 外・内:5YR6/6橙～7.5YR6/6橙,断:7.5YR6/4にぶい橙 〈良好〉	S12E12G51・52・60,S12E16G4(図面21)	東造出中央部
図4-51-1	人物(力士1-1 脚)	人物脚(ふくらはぎからくるぶし,くるぶし状のふくらみ2箇所あり(くるぶしの位置から左脚か),くるぶし上に足玉貼り付け(2箇所残存,複数個剥離痕跡,一部縦方向にも？),外面ハケか(ごく一部残存,内面もハケか？),内面に補強突帯確認できず,力士1-1(図4-47～50)と胎土類似で同一個体か(図4-51-2と接合か)	1276(主体),1603	1トレ
	11.8×11.8×(20.5)	密 やや砂粒目立つ ～3mm/片中量,透少量,白中量,赤少量,雲微量,黒少量	【橙】 外・内:2.5YR6/8橙,断:2.5YR5/3にぶい赤橙 〈良好〉	S8E12G39(図面20),東造出周辺表採	1段目テラス円筒6・7西側
図4-51-2	人物(力士1-1 脚)	人物脚(足先),指の表現はヘラ状工具で切り込み(素足,左脚),裏面は剥離面(台部との接合面),左側面も剥離面か(台部円筒の突帯に貼り付け？),玉状の表現なし,力士1-1(図4－47～50)と同一の胎土で同一個体か(図4-51-1と接合か)	1276	1トレ
	6.3×(11.5)×(2.0)	密 ～5mm/片中量,透中量,白中量,赤中量,雲微量,黒少量	【橙】 外:5YR6/6橙,剥離面:5YR5/4にぶい赤橙 〈良好〉	S8E12G39(図面20)	1段目テラス円筒6・7西側
図4-51-3	人物(力士1-2 脚)	人物脚(くるぶし部分貼り付け,左脚),足玉貼り付け(3箇所残存,その他貼り付け痕跡2～3箇所),足の甲に続く部分の貼り付け一部残る,台部円筒の突帯あり,内外面ナデと指オサエ,図4-51-4・5と同一個体か(力士1-1と少し違う胎土),脚部径11.0cm	1460 ,912	1トレ
	(14.5)×(9.3)×(12.9)	密 砂粒目立つ ～10mm/片多量,透中量,白中量,赤中量,雲微量,黒中量(チャか)	【橙(or桃)】 外・内:2.5YR6/8橙,断:2.5YR5/4にぶい赤褐 〈やや軟質〉	S12E16G4・5(図面31),S12E16G64	東造出中央部
図4-51-4	人物(力士1-2 脚)	人物脚(足先),指の表現はヘラ状工具で切り込み(素足,右脚か),玉状の突起貼り付け2個残存(剥離痕は4箇所),裏面は剥離面(台部との接合面),図4-51-3・5と同一個体か(力士1-1とは少し違う胎土)	1241	1トレ
	6.5×(11.9)×(4.5)	密 やや砂粒目立つ ～3mm/片中量,透中量,白中量,赤中量,雲少量,黒少量(チャか)	【橙(or桃)】 外・内:5YR6/6橙,剥離面:5YR6/4にぶい橙 〈やや軟質〉	S12E16G5(図面20)	東造出中央部
図4-51-5	人物(力士1-2 脚)	人物脚(足先),指の表現未確認(剥離か),玉状の突起貼り付け1個残存,側面裏側は剥離面(台部との接合面),図4-51-3・4と同一か(力士1-1とは少し違う胎土)	1374	1トレ
	6.2×(5.1)×(4.0)	密 ～5mm/片中量,透少量,白中量,赤少量,黒(チャか)少量,雲微量	【橙(or桃)】 外・内:2.5YR6/6橙,剥離面:2.5YR5/3にぶい赤褐,断:2.5YR4/2灰赤 〈やや軟質〉	S12E16G4(図面20)	東造出中央部
図4-52～56	馬1-1(頭部～体部)	頭部大半欠損(右耳残存),たてがみは断面T字状で前方部には円柱状の結び飾りたてがみ側面に線刻あり),類は板状に作り出す,右側面の障泥上には横座り用の短冊形水平板(水平板上面に2点一括刺突文,鞍上に吊り下げる帯2本あり),左側面は輪鐙貼り付け(2点一括刺突文),鞍は2点一括刺突文,板状の障泥貼り付け(2条一括沈線・2点一括刺突で施文,裏面に補強突帯あり),胸繁の帯は2条一括沈線と2点一括刺突文で施文(胸繁に鈴貼り付け),鞍前輪は円形浮文・竹管文・2点一括刺突文・沈線で施文,後輪は直接接合せず,胴部側面と腹部中央にスカシ孔,胴部内面に補強突帯,尻部(図4-54)と脚部1本(図4-56)は同一個体だが直接接合せず	1064(たてがみ結び飾り)/36,37,49,99,130,483,574～580,587,588,590,594,595,624,626,627,680,684,987(頭部～体部)	1トレ
	41.7×(68.2)×高(60.0)	密 やや砂粒目立つ ～8mm/片やや多量,透多量,白やや多量,赤少量,黒(チャか)少量,雲微量,赤色チャ微量	【黄褐(or黄橙)】 外・内:5YR6/4にぶい橙～7.5YR7/4にぶい橙,断・剥離面:10YR5/2灰黄褐 〈良好〉	S12E16G56/S12E24(図面9)	東造出東側斜面
図4-54	馬1-1(尻部)	体部とは接合せず,尻尾先端欠損(尻尾を巻く帯の貼り付け一部残存),尻尾下にスカシ孔(径3.0cm),上面に杏葉あり(円形浮文・刺突文・竹管文で施文)	578, 588, 595,680	1トレ
	(15.9)×(22.3)×(20.6)	密 やや砂粒目立つ ～8mm/片やや多量,透多量,白やや多量,赤少量,黒(チャか)少量,雲微量,赤色チャ微量	【黄褐(or黄橙)】 外・内:5YR6/4にぶい橙～7.5YR7/4にぶい橙,断・剥離面:10YR5/2灰黄褐 〈良好〉	S12E24(図面9)	東造出東側斜面
図4-56	馬1-1(脚部)	脚部は1本残存(右前脚と想定,体部と接合せず),脚端部はハ字状に開く,脚部内面に縦方向の接合痕(切開再接合技法か),調整不明瞭,脚端部径8.0cm	580(主体)/578,49,36	1トレ
	最大径17.3×高(43.6)	密 やや砂粒目立つ ～8mm/片やや多量,透多量,白やや多量,赤少量,黒(チャか)少量,雲微量,赤色チャ微量	【黄褐(or黄橙)】 外・内:5YR6/4にぶい橙～7.5YR7/4にぶい橙,断・剥離面:10YR5/2灰黄褐 〈良好〉	S12E24(図面9)/S12E24	東造出東側斜面
図4-57～62	牛1-1	目・耳・角の穴あり(現状では両角部が1つにつながるが、間の部分は欠損していて本来はつながっていなかったと想定),目の上端やや盛り上がる,頭部先端欠損,足先欠損(図4-67-4～6は同一個体の可能性あり),差込式の右耳・右角残存,尻尾一部残存(差込式),スカシは側面3箇所と尻部1箇所残存(径4.0cm,本来は5箇所),胴部左側下部(腹部分の側面)に板状粘土の剥離痕あり(形状不明,一部貼り付けた粘土残る,右側面では確認できず),内面の両脚連結部には粘土をかぶせた補強あり(補強下に空洞できる)	1257,1258,1259,1260(主体)/1124,1125,1143,1144,1145,1250	1トレ
	27.0×68.8×(39.0)	密 ～10mm/片多量,透中量,白少量,赤少量,雲微量	【黄褐】 外・内:5YR6/6橙～7.5YR6/8橙,断:10YR6/3にぶい黄橙 〈やや軟質〉	S8E12G63・64,S8E16G7・8(図面20)/S8E12G63・64,S8E16G7・8・16,S12E16G3(図面20)	東造出北西部
図4-63・64	猪1-1	頭部～胴部残存(脚・尻部接合せず),頭部完存,鼻先は平らに整形(製作時に一番最後に閉塞か),鼻はヘラ状工具で突き刺して穿孔,差込式の耳欠損,背中にたてがみの刺離痕跡(馬の可能性もあり),口は沈線状に描き口先はヘラ状工具で切り込む,左側の口の一部に小さな粘土貼り付け(牙？,右頬には剥離した可能性がある凹みあり),頬に板状粘土が剥離した痕跡あり(馬の類と同じ製作方法か),脚部の上にスカシ孔あり(径4.3cm),ナデ調整か(一部板ナデか)	1038(頭部主体),1336(胴部主体)/1142,922,923,960,961,967	1トレ
	(31.0)×25.5×(56.2)	密 やや砂粒目立つ ～15mm/片多量,透多量,白少量,赤中量,雲微量	【黄褐】 外・内:5YR7/6橙～5YR6/6橙,断:10YR6/2灰黄褐 〈軟質〉	S12E12G41(1段目テラス円筒10付近),S12E16G17(図面20,北辺円筒9付近)/S8E12G56,S12E16G17・18・25	東造出北半部
図4-65・66	犬1-1	胴部下半部は接合せず(頭部はほぼ完存),鼻部は平らに作り出す(鼻の穴は径1cm程度の先端が丸い工具で突き刺す),口はヘラ状工具で切り込み(下あご部分は少し切り込みを広げて牙を表現か),耳先端は欠損,脚部上側にスカシ孔1箇所残存,脚端部は突帯状の貼り付け,脚部内面に縦方向の接合痕(切開再接合技法か),両脚の接合部内面は粘土をかぶせるように貼り付け,全体的にナデ調整,図4-67-7(脚部)と同一個体か,脚端部径7.5cm	1249(頭部)/970,1255,1353,1357	1トレ
	20.5×(27.5)×53.8	密 一部大きめの砂粒あり ～10mm/片多量,透中量,白中量,赤少量,雲微量	【橙】 外・内:2.5YR6/6橙,断:2.5YR5/4にぶい赤褐 〈良好〉	S12E16G4(図面20)/S12E16G9・20・28(図面20)	東造出中央部
図4-67-1	動物(耳)	猪か牛の耳？(馬より小さい),牛1-1や猪1-1に比べて焼成はしっかりしている,調整不明瞭(ナデか),表面不明	987	1トレ
	(6.5)×3.1×(2.6)	密 ～5mm/片少量,透中量,白少量,赤中量,雲微量	【黄褐】 外:7.5YR7/6橙,内・断:7.5YR6/4にぶい橙 〈良好〉	S16E16～E20	東造出
図4-67-2	動物(頭部？)	牛の頭部か(牛の頭部なら牛1-1とは別個体),差込式の部品を差し込むスカシが2箇所残る(おそらく耳と角部分,右頬部分か),調整不明瞭,胎土は牛1-1に類似	1335	1トレ
	(6.5)×高(8.5)/1.5	密 ～8mm/片少量,透少量,白少量,赤微量,雲微量	【黄褐】 外・内:7.5YR6/6橙,断:10YR6/2灰黄褐 〈やや軟質〉	S8E16G24(図面20)	東造出北辺円筒9付近
図4-67-3	動物(胴部か)	牛ののど袋か(のど袋なら牛1-1と別個体,四足動物の足のつけ根の可能性もあり),胎土は牛1-1・猪1-1に類似,円筒状部位に半円状の粘土貼り付けか(内部空洞)	357, 358, 400	1トレ
	(15.1)×(8.0)×(7.6)	密 ～12mm/片中量,透中量,白少量,赤少量,雲微量	【黄褐】 外・内:7.5YR6/6橙,断:10YR6/3黄橙 〈良好〉	S12E20(図面9)	東造出東側斜面
図4-67-4	動物(脚部)	四足動物の脚部,脚端部は突帯状に貼り付け,図4-67-5と同一地点出土(同一個体か),胎土は牛1-1と猪1-1に類似,内面の一部に縦方向の接合痕(切開再接合技法か),調整不明瞭,脚端部径6.8cm	1337(主体), 926	1トレ
	8.5×8.5×(17.5)	密 大きめの砂粒が数個あり ～14mm/片中量,透中量,白中量,赤中量,雲微量	【黄褐】 外・内:7.5YR6/6橙,断:10YR6/3にぶい黄橙 〈やや軟質〉	S8E16G40・S12E16G25(図面20),S12E20(3層)	東造出北辺円筒9南東側
図4-67-5	動物(脚部)	四足動物の脚部,脚端部は突帯状に貼り付け,図4-67-4と同一地点出土(同一個体か),胎土は牛1-1と猪1-1に類似,内面の一部に縦方向の接合痕(切開再接合技法か),外面にも一部痕跡残る),調整不明瞭,脚端部復元径7.4cm	1337	1トレ
	10.2×10.2×(25.5)	密 やや大きめの砂粒数個あり ～15mm/片中量,透中量,白中量,赤少量,雲微量	【黄褐】 外・内:7.5YR7/6橙,断:10YR7/4にぶい黄橙 〈やや軟質〉	S8E16G40・S12E16G25(図面20)	東造出北辺円筒9南東側
図4-67-6	動物(脚部)	四足動物の脚部(1本分完存),脚端部は突帯状に貼り付け,,調整不明瞭だが一部ハケ目残る(縦ハケ),胎土は牛1-1と猪1-1に類似,内面は粘土積み上げ痕跡残る,内面一部に縦方向の接合痕(切開再接合技法か),脚端部径7.1cm	1258	1トレ

	10.6×10.6×(30.8)	密 やや大きめの砂粒含む ～12mm/片多量,透多量,白多量,赤少量,雲微量	【黄橙】 外・内:10YR6/6明黄橙～10YR7/6明黄橙,断:10YR6/4にぶい黄橙 〈やや軟質〉	S8E16G8(図面20)	東造出北辺円筒列付近
図4-67-7	動物(脚部)	四足動物の脚部,犬1-1(図4-65・66)と胎土類似(犬1-1の後脚か),脚端部は突帯状に貼り付け,調整は内外面ともナデのみか,内面の一部に縦方向の接合痕(切開再接合技法か),脚端部径6.8cm		1255	1トレ
	8.0×8.0×(20.9)	密 大きめの砂粒目立つ ～10mm/片多量,透中量,白少量,赤多量,雲微量,黒少量(チャか)	【橙】 外・内・断:5YR5/6明赤褐 〈良好〉	S12E16G9(図面20)	東造出中央北側
図4-68～74	翼を広げた鳥形1-1	左羽欠損以外ほぼ完存,羽は広げた状態,尾羽は水平尾,頭部・胴部・羽・尾羽に径約0.7cmの小孔多数あり(頭部・胴部は貫通,頸部のみ未貫通,羽・尾羽側面は未貫通),口はヘラ状工具で切り込み,羽下面に補強突帯3条貼り付け,胴部前面・後面にスカシ孔,羽のごく一部にハケ残存,円筒基部は4段(V群系円筒埴輪に類似,調整不明瞭,底部に突帯1条あり,最下段は押しつぶれて突帯が2条に見える),円筒基部2・3段目にスカシ孔,胴部幅28.8cm,円筒部高61.0cm,体部高25.0cm,円筒底部径26.0cm,調査時は翼を広げた鳥A		1566(頭部)/1244,896(羽)/1566,114(尾)/1566,897,904,905(体部)/1566,896,904,905,913,1236,1240,1242(円筒部)	1トレ
	長51.2×翼復元幅(57.0)×高86.0	密 大きめの砂粒目立つ ～10mm/片多量,透多量,白中量,赤中量,雲微量	【橙】 外・内:5YR6/6橙,断:10YR6/2灰黄褐 〈良好〉	S12E12G54(図面22)/S12E12G53(図面20)/S12E12G54,S12E12(2層)/S12E12G54・61・62/S12E12G53・54・61・62,S12E16G5・6	東造出中央西側
図4-75～82	翼を広げた鳥形1-2	頭部大きく欠損(側面の小孔残存),左羽は左半分欠損,左羽下面に補強突帯の剥離痕2条あり,右羽は中央部欠損,右羽下面に補強突帯1条残存(1条は剥離痕),胴部側には羽下面の補強突帯剥離痕が3条分残る,羽上面～胴部上面に補強突帯や剥離痕あり(2条分確認),胴部前面・後面・両側面にスカシ孔あり(側面やや大きい),頭部・羽・尾羽に径約0.8cmの小孔多数あり(羽・尾羽側面は未貫通),尾は水平尾羽(2枚の粘土板を重ねて製作),胴部上面にハケ目残る(7本/1cm),円筒基部は4段(V群系円筒埴輪に類似,スカシ孔は2・3段目),円筒基部の底部に突帯あり(2条貼り付けか,沈線状の凹みあり),円筒基部外面は8～9本/1cmの縦～斜めハケ1次調整(内面は指オサエ顕著),復元幅64.8×復元長62.0×復元高83.0cm,底部復元径24.8cm,底部復元高18.8cm,突帯間隔11.0～14.0cm,調査時は翼を広げた鳥B		907,1148(頭部)/917,1235(羽)/906,907,917(尾)/114,897,899,904,906,913,950,964,1244(体部)/904,913,1161(円筒部)	1トレ
	(64.8)×(55.0)×(80.0)	密 やや砂粒目立つ ～10mm/片中量,透少量,白中量,赤中量,雲微量,黒微量	【黄褐(or黄橙)】 外・内:2.5YR6/8橙～7.5YR7/6橙,断:10YR7/3にぶい黄橙～10YR5/3にぶい黄褐 〈軟質〉	S12E12G64,S16E12G49(1段目テラス円筒22)/S12E16G8,S16E12G57(図面20)/S12E12G63/S12E12(2層),S12E12G46・54・56・61・63,S12E16G5・22/S12E12G61,S12E16G5,S16E16G1	東造出中央西側
図4-83-1	翼を広げた鳥(頭部)	翼を広げた鳥1-3または1-4の頭部片,右類か(左類の可能性も),径1.2cmの小孔(翼を広げた鳥の頭部側面の小孔か,ヘラ状工具による切り込み(口の切り込みか)		1461	1トレ南サブトレ
	(8.7)×高(4.4)/1.7	やや密 砂粒目立つ ～3mm/片中量,透多量,白多量,赤少量,雲微量,黒(チャか)少量	【黄褐】 外:7.5YR7/6橙,内:5YR6/6橙,断:7.5YR6/4にぶい橙 〈良好〉	S20E16G20(3層南壁)	東造出南側斜面
図4-83-2	翼を広げた鳥1-3(胴部)	翼を広げた鳥の胴部と推定(1-3とする),スカシ孔一部残存(翼を広げた鳥の首の下あるいは尾の下のスカシ孔か),外面一部ハケ目残存(8本/1cm,内面はナデと指オサエ),突帯1条あり(円筒基部と胴部の間の突帯か),胴部径推定22.5cm,図4-83-3・4と同一個体か		1432(主体),969	1トレ
	(20.0)×(8.0)×(22.7)	密 やや砂粒目立つ ～8mm/片多量,透中量,白中量,赤少量,雲微量,黒(チャか)少量	【橙】 外・内:2.5YR6/8橙,断:2.5YR6/8橙～2.5YR5/2赤灰 〈良好〉	S12E16G28(図面21家1-3の内側),S12E16G27	東造出中央部
図4-83-3	翼を広げた鳥(胴部～羽)	胴部上面～羽部分(左右不明),翼を広げた鳥1-3(図4－83－2・4)と同一個体か(図4-83-6と同一個体の可能性),胴部上面は平坦(やや反る,胴部の肩は角張る形態),羽下面に補強突帯の貼り付け痕跡(羽上面には補強突帯なし),前後に羽の側面一部残存(径0.8・深1.2cmの小孔2箇所残存),羽接合部の内面に指オサエ顕著		1235(主体)/881,924	1トレ
	(16.0)×(26.6)×(7.0)	やや密 少し大きめの砂粒目立つ ～10mm/片多量,透中量,白少量,赤少量,雲微量,黒～褐色粒(チャか)中量	【橙】 外:7.5YR7/6橙,内:2.5YR6/6橙,断:2.5YR6/6～10YR6/3にぶい黄橙 〈良好〉	S16E12G57(図面20)/S16E16機械掘削,S16E12	東造出南西部
図4-83-4	翼を広げた鳥(尾羽)	翼を広げた鳥の尾羽か,翼を広げた鳥1-3(図4-83-2・3)と同一個体か,尾羽は2枚の粘土を重ねるように製作(内部に一部空洞あり),中央に貫通する小孔あり(径0.9cm,斜め上方からの穿孔),側面に未貫通の小孔3箇所(径0.8cm・深2.1cm),全体に調整不明瞭		1575	1トレ南サブトレ
	(11.8)×(15.0)/2.0	やや密 やや大きめの砂粒目立つ ～10mm/片やや多量,透中量,白少量,赤少量,雲微量,黒(チャか)中量,砂岩1個	【橙】 外:5YR6/6橙,内:2.5YR6/6橙,断:7.5YR6/3にぶい褐 〈良好〉	1トレ南側サブトレンチ(4b層)	東造出南側斜面
図4-84-5	翼を広げた鳥1-4(右羽)	翼を広げた鳥の右羽(翼を広げた鳥1-1・1-2・1-3とは違う胎土なので1-4とする),羽下面に断面三角形の補強突帯1条,羽上面には未貫通の小孔1箇所,(径0.9cm・深2.2cm,斜め上方から穿孔),羽上面に線刻あるいは工具によるキズ,羽側面に小孔2箇所残存(径0.7・深1.7～2.0cm),胎土が違う部分あり		411	1トレ
	(15.0)×(20.8)/2.7	密 ～10mm/片多量,透多量,白中量,赤少量,雲微量,黒(チャか)中量,非常に細かく密な部分と粗い部分がある	【にぶい黄褐】 外:7.5YR7/4にぶい橙,内:10YR7/4にぶい黄橙,断:10YR6/3にぶい黄橙 〈やや良好〉	S12E24(図面9)	東造出東側斜面
図4-84-6	翼を広げた鳥(羽)	翼を広げた鳥の羽(右羽か？),翼を広げた鳥1-4(図4-84-5)に胎土類似(1-3の可能性もあり),裏面に断面三角形の補強突帯一部残存(上面には補強突帯なし),側面に小孔1個残存(径0.8cm・深1.8cm)		1107, 1573, 1575	1トレ
	(23.6)×(15.0)/3.9	やや密 少し砂粒目立つ ～10mm/片中量,透多量,白中量,赤少量,雲微量,黒・赤チャ中量	【にぶい黄褐】 外:7.5YR7/6橙,内:7.5YR7/6橙,断:10YR5/2灰黄褐 〈やや良好〉	S12E12G26(図面11,1段目テラス円筒埴輪列より西),1トレ南側サブトレンチ(3・4a・4b層)	東造出南側斜面
図4-84-7	翼を広げた鳥(羽か)	翼を広げた鳥の右羽か(左羽や尾羽の可能性もあり,尾羽の場合ほかの個体にない補強突帯が貼り付く尾羽となる),側面に小孔2箇所残存(径0.8cm),下面に補強突帯と推測する剥離痕跡あり,上面にも一部剥離痕跡あり(補強突帯？),翼を広げた鳥1-2に胎土類似(1-2と同一個体かと左羽となる)		916	1トレ
	(8.4)×(9.8)/1.4	密 やや砂粒目立つ ～10mm/片多量,透少量,白中量,赤少量,雲微量,赤チャ微量	【橙】 外:5YR6/6橙,内:7.5YR7/6橙,断:10YR7/3にぶい黄橙,剥離部:10YR6/3にぶい黄橙 〈やや軟質〉	S20E16G7	東造出南西部
図4-85～87	水鳥1-1	くちばし欠損するが根元の形状から丸く尖る水鳥1-3と同形態(ツル・サギ類),目は径0.8cmの竹管で施す,頸部は輪積みで積み上げ,体部・頸部はハケ調整(頸部は若干面取り状),粘土を貼り付けて段差を付けて羽を表現,尾は水平尾羽,円筒基部は3段(V群系円筒埴輪に類似,最下段は欠損,スカシ孔は2段目,8本/1cmの縦～斜め方向のハケもしくは板ナデ),復元長55.7cm,復元高65.0cm,突帯間隔9.0～10.5cm,整理時は水鳥A		1257(頭部)/1144,1254(尾)/1120(円筒部主体)/1108,1109,1111,1112,1115,1117,1118,1119,1126,1206,1456,132	1トレ
	23.5×(47.7)×(55.7)	密 砂粒少し目立つ ～22mm/片多量,透中量,白少量,赤中量,雲微量,黒微量	【橙】 外・内:5YR6/6橙,断:5YR4/3にぶい赤褐 〈良好〉	S8E12G64(図面20)/S8E16G8,S12E16G1(図面.20)/S12E12G17・18・25・26(図面11)/S12E12G17・18・25・26(図面11・30),S8E12G40,S12E12G61・62,2トレS0～4(2-2層)	1段目テラス～東造出中央部
図4-88～90	水鳥1-2	体部大きく欠損(頭部～頸部・尾・円筒基部残存),くちばし欠損するが根元の形状から丸く尖る水鳥1-3と同形態(ツル・サギ類),目は径0.8cmの竹管文,頸部輪積みで積み上げ,頸部外面は板ナデか(ハケの可能性,若干面取り状),尾は水平尾羽,羽は粘土を貼り付けて段差を付け表現,円筒基部は3段(V群系円筒埴輪に類似,3段目に楕円形のスカシ孔,1次調整は6本/1cmの縦～斜めハケか板ナデ),内面は指オサエ多い,底部径20.1cm・底部高約10.0cm・突帯間隔約11.0cm,整理時は水鳥B		1567(主体)/1251(頭部)/567？,900,1120？,1124,1141,1142,1143,1144,1147,1169,1185,1189,1251	1トレ
	20.5×(48.1)×64.2,復元長53.8cm	密 大きめの片岩粒含む ～21mm/片多量,透中量,白少量,赤中量,雲微量	【橙】 外・内:5YR6/6橙,断:7.5YR7/4にぶい橙 〈良好〉	S8E12G54・56,S8E12G49・57(図面23)/S12E16G3(図面20)/S8E12G36・55・56・64,S8E16G7・8・24,S12E24,S12E12G34	東造出北西部
図4-91-1	水鳥1-3(頭部)	水鳥頭部のみ,水鳥1-1・1-2と同形態(くちばしは長く尖る,中実,くちばしの上下の境は沈線で表現,ツル・サギ類),目は竹管であける(径0.8cm・深0.4cm),全面ナデ調整,輪積みで頸部を作る,整理時は水鳥C		900, 911, 1256	1トレ
	(15.2)×(6.0)×(7.2)	密 ～5mm/片多量,透中量,白少量,赤中量,雲微量	【橙】 外:5YR6/6橙,断・内:10YR6/3にぶい黄橙 〈良好〉	S12E12G57,S12E16G3,S12E16G9・10(図面20)	東造出中央部
図4-91-2	水鳥(尾)	水鳥の尾(水平),水鳥1-3(図4-91-1)と同一個体か,水鳥1-1・1-2に形態類似(これらよりやや幅広),上面にハケ目残る(上面の一部剥離で欠損,下面はナデのみ),側面は面あり(3方とも)		1439	1トレ
	13.4×(9.6)×-/2.2	密 やや砂粒目立つ ～8mm/片多量,透少量,白少量,赤中量,雲中量,黒微量	【橙】 外・内:2.5YR6/6橙,断:2.5YR6/4にぶい橙 〈良好〉	S12E12G60(図面21)	東造出中央部西側
図4-91-3	形象円筒部(水鳥か)	形象円筒部(水鳥1-1・1-2の円筒部と同形態,おそらく水鳥1-3),V群系円筒埴輪に類似,突帯2条残存,3段目にスカシ(径5.2cm),底部高8.5cm・突帯間隔11.0～12.0cm,外面は斜め方向の板ナデ(内面は斜め方向のナデか)底部は重みで若干ひずむ,側面に幅1cmの工具痕5箇所あり,整理時は水鳥D		1454	1トレ
	底部径18.3×高(27.7)	密 ～14mm/片多量,透中量,白少量,赤中量,雲微量	【橙】 外・内:5YR6/6橙,断:5YR5/3にぶい赤褐 〈良好〉	S12E16G3・4(図面22)	東造出中央部西側
図4-92-6	大刀(盾部)	大刀形埴輪の右側盾部,中央に斜め上方からの小孔(径0.8cm,貫通),外周は2条一括沈線と1点ずつの刺突文,内側は2条一括沈線で直弧文風に施文		360	1トレ
	幅(14.2)×高(26.5)/3.7	密 やや砂粒目立つ ～3mm/片多量,透多量,白中量,赤中量,黒色チャ少量,雲微量	【橙(or黄橙)】 表・裏・断:7.5YR7/6橙～2.5YR6/6橙 〈良好〉	S12E20(図面9)	東造出東側斜面
図4-92-7	大刀(盾部)	大刀形埴輪の左側盾部,中央に斜め上方からの小孔(径0.8cm,貫通),外周はおそらく2条一括沈線と1点ずつの刺突文,内側は2条一括沈線で直弧文風に施文,外面の一部に縦ハケあり(不明瞭)		572	1トレ
	幅(10.8)×高(20.5)/4.0	やや密 やや砂粒目立つ ～5mm/片少量,透中量,白中量,赤中量,雲微量	【橙(or黄橙)】 表・裏:2.5YR6/6橙,断:7.5YR6/4にぶい橙 〈良好〉	S12E24(図面9)	東造出東側斜面
図4-92-8	靫1-1	靫の左鰭部,外周は2条一括沈線と2点一括刺突文で施文,内側は2条一括沈線(一部2点一括刺突文)で直弧文風の施文,裏側に円筒部へ続く補強突帯あり,ナデ調整か(不明瞭)		427, 438, 573	1トレ
	幅(19.1)×高(16.2)/5.9	やや密 少し大きめの砂粒あり ～8mm/片多量,透中量,白少量,赤多量,雲微量	【黄橙(or橙)】 表:7.5YR7/6橙,裏:5YR6/6橙,断:10YR5/3にぶい黄褐 〈良好〉	S12E24(図面9)	東造出東側斜面
図4-92-9	大刀か靫	大刀右側盾部か靫右鰭部,2条一括沈線と2点一括刺突で施文,胎土は靫1-2(図4-92-12・13)に近い		1057	1トレ
	幅(7.0)×高(8.8)/1.8	密 砂粒目立つ ～4mm/片中量,透中量,白少量,赤少量,雲微量,赤色チャ少量,砂岩1点	【橙】 表・裏:5YR6/6橙,断:7.5YR6/3にぶい褐 〈良好〉	S12E16G49	東造出北東部
図4-92-10	大刀か靫	おそらく大刀の盾部(左側),靫の可能性もあり,2条一括沈線と1点ずつの刺突文(正方形の刺突)で施文,ハケ調整(6本/1cm)		82, 334	1トレ
	幅(8.5)×高(11.7)/1.6	やや密 やや砂粒目立つ ～4mm/片多量,透中量,白中量,赤少量,黒微量,雲微量	【橙】 表・裏:5YR6/6橙,断:10YR5/3にぶい黄褐 〈良好〉	S12E24,S12E20(図面9)	東造出東側斜面
図4-92-11	靫	靫の右鰭部か,靫1-1(図4-92-8)と同一個体か,2条一括沈線と2点一括刺突で施文,調整不明瞭		209	1トレ
	幅(6.5)×高(8.0)/1.4	密 ～5mm/片中量,透中量,赤少量,雲微量,砂岩1点	【黄橙】 表・裏:5YR6/6橙,断:10YR6/2灰黄褐 〈やや軟質〉	S12E16(3層)	東造出
図4-92-12	靫1-2	靫の左鰭部分か,2条一括沈線と2点一括刺突で施文,胎土は図4-92-9・13に近い		37	1トレ
	幅(5.6)×高(8.2)/1.7	密 ～5mm/片多量,透多量,白少量,赤少量,黒色チャ中量,雲微量	【橙】 表・裏:5YR5/6明赤褐,断:7.5YR5/2灰褐 〈良好〉	S12E28(2層,馬形埴輪周辺)	東造出東側斜面
図4-92-13	靫か	靫の一部か,盾の可能性もあり,2条一括沈線・2点一括刺突で施文,弧状を描く沈線あり,横断面がやや円弧状,胎土は図4-92-12(靫1-2)や図4-92-9に近い		1058	1トレ
	幅(6.7)×高(7.4)/1.9	密 ～5mm/片中量,透中量,白少量,赤中量,黒色チャ少量,雲微量	【橙】 表・裏:5YR6/6橙,断:7.5YR5/3にぶい褐 〈良好〉	S12E16G50	東造出北東部
図4-93-1	大刀(柄頭部)	側面外周は細い2条沈線と2点一括刺突文,内側は弧状の沈線で施文,護拳部欠損(護拳部の剥離部には沈線状のキズ多数,沈線と同じ工具か),断面は台形状で上端が開く		1131, 1261	1トレ
	幅7.7×長(20.8)×高(6.6)	密 ～2mm/片少量,透中量,白中量,赤少量,雲微量	【黄橙(or黄褐)】 外・内:7.5YR7/4にぶい橙 〈良好〉	S8E12G46,S8E12G62(図面20)	東造出
図4-93-2	大刀(柄部～鞘口部)	柄部は6条の細い沈線によるX字状の文様と横方向の3条沈線(一部5条,すべて3条一括沈線か),鞘口(柄口)部は2条沈線による鋸歯文風の文様(一部沈線状のキズが付けられた護拳部が剥離した痕跡あり),調整不明瞭		921, 1261, 1137	1トレ
	復元径13.9×高(26.0)	密 ～3mm/片少量,透多量,白中量,赤中量,雲微量,黒微量	【橙(or黄橙)】 外:7.5YR7/6橙 〈良好〉	S8E12,S8E12G54(図面20),S8E12G52	東造出北西部
図4-93-3	大刀(護拳部)	外周は2条沈線(1条ずつ施文)とやや大きめの刺突,内部は3条沈線と小さい刺突(2点一括刺突),側面にも小さい刺突(2点一括刺突),断面台形状の貼り付け2箇所あり(中央に竹管文),裏面は本体から剥離した痕跡あり,天地不明		362, 363	1トレ
	幅(9.2)×高(14.1)/3.5	密 大きめの砂粒あり ～10mm/片多量,透多量,白中量,赤少量,黒(チャか)微量,雲微量	【黄橙】 外・内:7.5YR7/4にぶい橙,断:7.5YR7/4～10YR6/2灰黄褐 〈良好〉	S12E20(図面9)	東造出東側斜面
図4-93-4	大刀(鞘部)	縦にやや大い2条沈線(1条ずつ施文)と3点一括刺突文(小さい円形刺突文),X字状に細い6条沈線で施文(3条一括沈線×2重か,刺突と同一の工具か？)		1261, 1341	1トレ
	径13.4×高(18.0)	密 やや砂粒目立つ ～2mm/片中量,透多量,白中量,赤中量,雲微量,黒少量	【橙(or黄橙)】 外:5YR6/6橙～7.5YR6/4にぶい橙 〈良好〉	S8E12G54,S12E16G50(図面20)	東造出北東部・北西部
図4-93-5	大刀(円筒部)	円筒部の突帯と円形スカシあり,2条一括沈線と1点ずつの刺突文(大刀盾部の施文に類似),大刀の左盾部が剥離した痕跡,復元径22.2cm		523	1トレ
	幅(15.8)×高(12.8)	密 やや砂粒目立つ ～10mm/片多量,透中量,白中量,赤少量,雲微量	【橙】 外・内:5YR6/6橙,断:10YR7/3にぶい黄橙 〈良好〉	S12E24(図面9)	東造出東側斜面
図4-94-1	蓋1-1(立飾部)	立飾部の先端,3条一括沈線で施文,調整不明瞭		—	表採
	(7.5)×高(8.4)/2.0	密 ～5mm/片中量,透中量,白多量,雲微量,黒色チャ少量	【黄褐】 外:7.5YR7/6橙,断:10YR6/3にぶい黄橙 〈やや軟質〉	昭和47年2月表採	東くびれ部
図4-94-2	蓋1-2(立飾部)	現状では施文は2条一括沈線,立飾部先端付近が(施文・胎土など他の蓋と異なるため別の形象埴輪の可能性あり),調整不明瞭		979	1トレ
	(7.3)×高(5.4)/2.1	密 ～10mm/透中量,赤少量,雲微量,白少量,片少量,灰色チャ少量,黒微量	【桃(or橙)】 外:5YR7/6橙,断:7.5YR6/3にぶい褐 〈良好〉	S12E16G37	東造出中央
図4-94-3	蓋1-3(立飾部)	立飾部の先端,3条一括沈線で施文(用形文か？),蓋1-5と同一地点出土		1458	1トレ
	(12.3)×高(19.5)/2.5	密 やや砂粒多い ～5mm/透多量,白中量,片中量,赤少量,黒微量,雲微量	【黄褐】 外:7.5YR7/6橙～7.5YR6/8橙,断:10YR5/1褐灰 〈良好〉	S12E24(図面32)	東造出斜面～基壇テラス
図4-94-4	蓋1-4(立飾部)	3条一括沈線で施文(用形文か),調整不明瞭		1099	1トレ

	(13.4)×高(8.4)/2.1	密 砂粒やや多い ～7mm/片中量,白少量,赤少量,透中量,雲微量,黒(チャ?)少量,赤色チャ少量,砂岩1個	【橙(or黄橙)】 外:5YR6/6橙～7.5YR6/6橙,断:7.5YR6/3にぶい褐 〈良好〉	S12E12(図面11)	2段目斜面
図4-94-5	蓋1-5(立飾部)	3条一括沈線(用形文),蓋1-3と同一地点出土		487, 604, 1458	1トレ
	(13.9)×高(27.5)/2.5	密 砂粒やや多い ～8mm/片中量,透中量,白少量,赤少量,雲微量,黒微量,砂岩少量	【黄褐】 外:7.5YR7/6橙～7.5YR6/6橙,断:10YR6/2灰黄褐 〈良好〉	S12E24(図面9),S12E24,基壇テラス(図面32)	東造出斜面～基壇テラス
図4-95-6	蓋1-6(立飾部)	飾板は1枚のみ一部残存,軸部一部残存,3条一括沈線,調整不明瞭		1235, 881, 917	1トレ
	(30.1)×(26.8)×(20.5)	密 ～10mm/片やや多量,透やや多量,白少量,灰色チャ少量,赤微量,雲微量	【黄橙】 外・内:7.5YR6/6橙～5YR6/8橙,断:10YR6/1褐灰 〈やや軟質〉	S16E12G57～S16E16G7(図面20),S16E12機械掘削,S12E16G8	東造出1段目テラス円筒22東側
図4-96-7	蓋1-7(立飾部)	沈線は1条ずつ施文(外周は2条,内帯は3条か),内帯の沈線が弧状の箇所あり(直弧文系文様か)		1335, 1262	1トレ
	(19.0)×高(31.8)/1.8	密 ～8mm/片中量,白少量,透中量,赤中量,褐・灰チャ少量,雲微量,黒微量	【橙(or桃)】 外:5YR7/4にぶい橙～5YR6/6橙,断:10YR6/2灰黄褐 〈良好〉	S8E16G24・32,S8E16G16	東造出北辺円筒8南側
図4-96-8	蓋1-8(立飾部)	沈線は1条ずつ施文(2条沈線,用形文か),調整不明瞭		1612	表採
	(9.5)×高(12.8)/2.2	密 ～12mm/片多量,透中量,白中量,赤少量,雲微量	【黄褐】 外・内:7.5YR6/6橙～10YR7/4にぶい黄褐,断:10YR6/2灰黄褐 〈良好〉	2007年度表採	東造出北裾付近
図4-96-9	蓋1-9(立飾部)	沈線は1条ずつ施文(外周2条・内帯3～4条,用形文,外周は内帯より深く施文),ハケ調整(8本/1cm)		1089	1トレ
	(21.3)×高(15.5)/2.5	密 やや砂粒多い ～8mm/片中量,透中量,白少量,赤少量,雲微量,黒少量(チャか)	【黄橙(or橙)】 外:7.5YR6/6橙～7.5YR7/4にぶい橙,断:10YR6/2灰黄褐 〈良好〉	S12E8(図面11)	2段目斜面
図4-97-10	蓋1-10(立飾部)	沈線は1条ずつ施文(2条沈線,用形文？),調整不明瞭		987	1トレ
	(11.8)×高(8.8)/3.1	密 ～5mm/片中量,白少量,赤少量,透中量,雲微量,黒微量	【黄橙(or黄褐)】 外:7.5YR7/6橙,断:10YR6/4にぶい黄褐 〈やや良好〉	S16E16・E20	東造出南側
図4-97-11	蓋1-11(立飾部)	沈線は1条ずつ施文(外周2条・内帯2～3条,用形文,外周は内帯より深く施文),ハケ調整(8本/1cm)		34	1トレ
	(25.3)×高(21.0)/2.0	密 ～10mm/片中量,透中量,白少量,赤微量,黒微量	【橙(or黄橙)】 外:7.5YR7/6橙,断:10YR6/2灰黄褐 〈良好〉	S12E8(2層)	2段目斜面
図4-97-12	蓋1-12(立飾部)	沈線は1条ずつ施文(外周2条・内帯3～4条,用形文),ハケ調整(8本/1cm)		1093	1トレ
	(10.6)×高(20.1)/2.4	密 砂粒やや多い ～5mm/片中量,白少量,赤少量,透中量,雲微量,灰色チャ少量	【橙(or黄褐)】 外:7.5YR7/6橙～7.5YR6/6橙,断:10YR6/2灰黄褐 〈良好〉	S12E12(図面11)	2段目斜面
図4-98・99・13	蓋1-13(立飾部)	飾板3枚残存,沈線は1条ずつ施文(外周2条・内帯3～4条,用形文),ハケ調整(8～9本/1cm)		1567, 988, 923, 891	1トレ
	(50.3)×(38.3)×(26.3)	密 ～3mm/片中量,赤中量,透中量,白中量,黒微量,雲微量,黒色チャ少量	【黄橙(or橙)】 外:5YR6/6橙～10YR6/4にぶい黄橙,断:10YR6/2灰黄褐 〈良好〉	SE12E12G49～S8E12G56(図面23),S12E12G49,S8E12～E16,表採	東造出北西部
図4-100・101・14	蓋1-14(立飾部・軸部)	飾板2枚残存,沈線は1条ずつ施文(外周2条,内帯3条,用形文か),内帯の沈線が弧状の箇所あり(直弧文系文様？),軸部完存(中空),軸部内面に飾板貼り付け前の沈線状の刻み目あり,調整不明瞭,飾板受部径20.4cm,軸部長20.7cm,軸部径7.5cm		1335	1トレ
	(28.7)×(35.5)×(44.8)	密 ～5mm/片中量,透中量,白中量,赤少量,黒少量,灰色チャ微量,雲微量	【桃(or橙)】 外:2.5YR6/6橙～7.5YR7/4にぶい橙,内:2.5YR6/6～5YR5/3にぶい赤褐,断:5YR5/3～10YR6/3にぶい黄橙 〈良好〉	S8E16(図面20)	東造出北辺円筒8・9南側
図4-102-15	蓋1-15(笠部軸受部口縁)	口縁部に突帯なし,外面は板状工具による斜め方法のナデ,蓋1-4・1-9・1-11・1-12・1-19・1-22と同一地点出土(19・22と同一個体の可能性あり),形象埴輪基部の可能性あり,口縁残存25%(反転復元)		1098	1トレ
	口径18.3×高(7.9)	密 砂粒やや多い ～3mm/片少量,透中量,白中量,赤少量,雲微量,黒微量	【黄橙(or黄褐)】 外・内:7.5YR7/6にぶい橙,断:7.5YR6/4にぶい橙 〈良好〉	S12E12(図面11)	2段目斜面
図4-102-16	蓋1-16(笠部軸受部)	口縁端部のやや下がった部分と軸受部下端部に突帯,外面の一部にハケか(不明瞭),口縁部残存80%(一部反転復元)		592, 593, 596, 675	1トレ
	口径17.0×高(22.6)	密 ～5mm/片中量,透中量,白少量,赤少量,雲微量,黒微量	【黄褐】 外:7.5YR7/4にぶい橙,内:2.5YR6/6橙～7.5YR 7/4,断:7.5YR5/2灰褐 〈良好〉	S8E24(図面9)	基壇テラス中央
図4-102-17	蓋1-17(笠部台部)	スカシ一部残存,内外面は斜め方向の強いナデ,底面は面あり(やや丸み),底部残存50%(反転復元)		1352, 910, 955	1トレ
	底径20.0×高(15.0)	密 砂粒多い ～10mm/片やや多量,透やや多量,白中量,赤中量,雲微量,砂岩少量,黒少量(チャか)	【黄褐】 外・内:5YR6/6橙,断:10YR6/4にぶい黄橙 〈良好〉	S12E16(図面20),S12E16G2,S12E16G11	東造出中央部
図4-102-18	蓋1-18(笠部笠縁部)	笠縁部の端部は肥厚(突帯貼り付け？),蓋1-7・1-14と組み合う笠部か		1335	1トレ
	(17.4)×(7.0)×(4.5)/(2.8)	密 ～8mm/片中量,白少量,透中量,赤少量,雲微量,黒少量	【橙(or桃)】 外:5YR6/6橙,断:5YR5/4にぶい赤褐 〈良好〉	S8E16G24・32(図面20)	東造出北辺円筒8・9南側
図4-102-19	蓋1-19(笠部笠縁部)	笠縁部肥厚(突帯状ではない),蓋1-4・1-9・1-11・1-12・1-22と同一地点出土,1-15・1-22と同一個体の可能性		1100	1トレ
	(11.6)×(6.6)×(4.3)/(2.3)	密 砂粒やや多い ～5mm/片中量,透中量,白中量,赤少量,雲微量	【黄橙】 外:7.5YR6/6橙～5YR6/6橙,断:7.5YR6/6橙 〈やや軟質〉	S12E12(図面11)	2段目斜面
図4-102-20	蓋1-20(笠部笠縁部)	笠縁部に突帯状の貼り付け,蓋1-6(立飾部)と同一地点出土		1235, 114	1トレ
	(19.7)×(7.5)×(4.8)/(4.5)	密 砂粒中量 ～8mm/片中量,透中量,白少量,赤少量,雲微量,黒微量	【黄橙】 笠上面:7.5YR7/6橙, 笠下面5YR6/6橙,断:5YR6/2橙～10YR6/2灰黄褐 〈やや軟質〉	S16E12G57(図面20),S12E12(2層)	1段目テラス円筒22東側
図4-102-21	蓋1-21(笠部笠縁部)	笠縁部に突帯状の貼り付け,蓋1-16と同一個体？		631	1トレ
	(23.9)×(8.3)×(5.0)×/(3.0)	密 砂粒中量 ～5mm/片中量,透中量,白少量,赤中量,雲微量,黒微量	【にぶい黄橙】 外:7.5YR6/4にぶい橙,断:10YR6/4にぶい黄橙 〈良好〉	S12E28(図面9)	東造出斜面～基壇テラス
図4-102-22	蓋1-22(笠部笠縁部)	笠縁部肥厚(突帯状の貼り付けかしら),蓋1-15・1-19と同一個体の可能性,蓋1-4・1-9・1-11・1-12・1-19と同一地点出土		1092	1トレ
	(27.4)×(11.1)×(5.9)×/(4.8)	密 砂粒やや多い ～10mm/片やや多量,透中量,白中量,赤やや多量,雲微量	【橙(or桃)】 外:7.5YR6/4にぶい橙～5YR6/8橙,断:10YR6/6明黄褐～10YR6/4にぶい黄橙 〈良好〉	S12E12～S12E8(図面11)	2段目斜面
図4-103-1	不明形象(力士？)	力士のまげ？(人物部材や器財,動物たてがみなどの可能性も),表面に弧状の沈線1条(裏面は沈線？),下部は接合面で剥離		1061	1トレ
	(10.4)×高(4.6)/1.8	密 ～3mm/片少量,透中量,白中量,赤中量,雲微量	【橙】 表:5YR6/6橙,裏:5YR7/6橙,断:5YR7/6橙 〈良好〉	S12E16G53	東造出東半部
図4-103-2	不明形象(力士？)	力士のまげ？(人物部材や器財,動物たてがみなどの可能性も),両面とも弧状の沈線1条,下部は接合面で剥離		1062	1トレ
	(7.9)×高(4.5)/2.3	密 ～5mm/片多量,透中量,赤少量,雲微量	【橙(or黄橙)】 表:5YR6/6橙,裏:7.5YR7/6橙,断:7.5YR7/6橙 〈良好〉	S12E16G54	東造出東半部
図4-103-3	不明形象(人物？)	人物服か馬障泥か器財？,3条一括沈線・2点一括刺突文で施文,幅1.7cmの帯の貼り付け痕跡,調整不明瞭,貼り付け剥離部にハケ目残る(8本/1cm),天地不明		148, 1331	1トレ
	(14.3)×高(9.7)/1.8	密 砂粒細かい ～2mm/片少量,透やや多量,白中量,赤中量,黒微量,雲微量	【黄橙(or橙)】 外・内:5YR7/6橙,裏:10YR6/2灰黄褐 〈良好〉	S12E16(2～3層),S12E16G64(図面20)	東造出南東部
図4-103-4	不明形象(人物？)	人物服か馬障泥か器財？,2条一括沈線と2点一括刺突文で施文,天地不明		1064, 1070	1トレ
	(10.9)×高(9.6)/1.6	密 砂粒細かい ～4mm/片中量,透少量,白中量,赤少量,黒微量,雲微量	【黄橙(or橙)】 外・内:5YR6/6橙,断:10YR6/3にぶい黄橙 〈やや良好〉	S12E16G56,S12E16G63	東造出東半部
図4-103-5	不明形象(人物？)	人物服か馬障泥か器財？,3条一括沈線で施文,天地不明,調整不明瞭		985	1トレ
	(10.8)×高(8.0)/1.4	密 砂粒目立たない ～3mm/片少量,透中量,白少量,赤やや多量,黒微量,雲微量	【黄褐(or黄橙)】 外・内:7.5YR7/6橙,断:7.5YR6/3にぶい褐 〈やや良好〉	S12E16G47	東造出東半部
図4-103-6	不明形象(人物？)	人物服か馬障泥か器財？,幅1cm程度の帯貼り付け,2条一括沈線と2点一括刺突文で施文,天地不明		965	1トレ
	(9.0)×高(5.4)/1.8	密 ～5mm/片やや多量,透中量,白中量,赤少量,黒微量,雲微量,砂岩1点	【黄褐(or黄橙)】 外・内:7.5YR7/6橙,断:2.5YR7/2灰黄 〈やや軟質〉	S12E16G23	東造出中央部
図4-103-7	不明形象(人物？)	人物の足(胡坐人物のかかと)か？,(人物腕や鳥の頭部の可能性も),片面のみ線刻あり(沈線3条分,片面には文様なし)		1331	1トレ
	(9.0)×(5.0)×(6.2)	密 ～4mm/片中量,透少量,白少量,赤中量,黒少量,雲微量	【橙】 外:5YR6/6橙,断:7.5YR5/2灰褐 〈良好〉	S12E16G55(図面20)	東造出南東部
図4-103-8	不明形象(人物？)	人物(巫女)の服(スカート部分)か,文様なし,調整不明瞭,接合しないが同一個体片多数あり		1330	1トレ
	(9.3)×(6.3)×(7.5)	密 砂粒目立つ ～2mm/片やや多量,透中量,白やや多量,赤微量,黒少量,雲微量	【橙】 外・内:2.5YR6/6橙,断:5YR5/3にぶい赤褐 〈やや良好〉	S12E16G40・48(図面20)	東造出南東部
図4-103-9	不明形象(小円板)	小円板(埴輪片転用),縁辺部は円形に整形か(自然に摩滅した可能性もあり),外面に沈線残る		122	1トレ
	3.1×2.9×2.0	密 ～2mm/片多量,透中量,白少量,赤中量,雲微量	【橙】 外・内:5YR7/6橙,断:10YR6/2灰黄褐 〈良好〉	S12E12(2～3層)	東造出
図4-103-10	不明形象(小円板)	小円板(埴輪片転用),縁辺部は円形に整形か(自然に摩滅した可能性もあり)		122	1トレ
	3.3×3.0×2.1	密 ～2mm/片やや多量,透少量,白少量,赤少量,雲微量	【黄褐】 外:7.5YR7/8黄褐,内:7.5YR7/4にぶい橙,断:2.5Y6/2灰黄 〈やや良好〉	S12E12(2～3層)	東造出
図4-103-11	不明形象(小円板)	小円板(埴輪片転用),縁辺部は円形に整形か(自然に摩滅した可能性もあり)		892	1トレ
	3.6×3.3×1.5	密 ～3mm/片やや多量,透少量,白中量,赤微量,雲微量,黒微量	【黄橙】 外・内:7.5YR7/8黄橙,断:2.5Y6/2灰黄 〈やや良好〉	S12E12G49	東造出北西部
図4-103-12	不明形象(小円板)	小円板(埴輪片転用),縁辺部は円形に整形か(自然に摩滅した可能性もあり)		1253	1トレ
	3.1×3.1×1.8	密 やや砂粒目立つ ～3mm/片やや多量,透中量,白やや多量,赤微量,雲微量	【黄褐】 外・内:7.5YR8/4浅黄橙,断:10Y5/2灰黄褐 〈良好〉	S12E16G50(図面20)	1段目テラス円筒11東側
図4-103-13	鈴	馬1-1装着の鈴より小さい,別の馬もしくは人物の鈴か,裏側は剥離面,巫女腕図4-46-2周辺から出土		1342	1トレ
	3.3×2.8×1.7	密 ～4mm/片やや多量,透中量,白中量,赤少量,黒(チャ？)少量,雲微量	【橙】 外:5YR6/6橙,剥離面:7.5YR6/4にぶい褐 〈良好〉	S12E16G41・42(図面20)	東造出北東部
図4-103-14	鈴	馬1-1装着の鈴より小さい,別の馬もしくは人物の鈴か,裏側は剥離面,巫女腕図4-46-1・3・4・6周辺から出土		1331	1トレ
	3.0×2.8×1.8	密 ～2mm/片やや多量,透中量,白中量,赤少量,黒微量,雲微量,褐色チャ1点	【橙】 外:5YR6/6橙,剥離面:7.5YR6/4にぶい褐 〈良好〉	S12E16G47・55・56(図面20)	東造出南東部
図4-103-15	形象埴輪基部	形象埴輪円筒基部,底部に突帯,外面一部ハケ目残存(不明瞭),内面指オサエと粘土紐接合痕確認,底部残存30%(反転復元)		1333	1トレ
	底部径23.0×高(12.7)	密 大きめの砂粒目立つ ～7mm/片多量,透多量,白中量,赤少量,黒微量,雲微量	【橙】 外・内:2.5YR6/4にぶい橙,断:5YR6/2灰褐 〈良好〉	S12E16G53(図面20)	東造出中央東側
図4-103-16	形象埴輪基部	形象埴輪円筒基部,底部付近に突帯,周辺に大刀や鞆の破片が出土しているためこれらの基部か？,調整不明瞭,底部残存20%(反転復元),倒立技法か		884	1トレ
	復元底部径26.0×高(12.3)	密 大きめの砂粒目立つ ～5mm/片中量,透やや多量,白やや多量,赤やや多量,黒少量,雲微量	【黄褐(or黄橙)】 外・内:7.5YR7/4にぶい橙,断:10YR6/3にぶい黄橙 〈良好〉	S12E20(実測図下層)	東造出東側斜面
図4-103-17	形象埴輪基部	人物か器財の円筒部か,細い円筒部の上部に板状の貼り付け(段ができる)		1332	1トレ
	円筒部径18.3×幅(17.9)×高(25.0)	密 ～5mm/片やや多量,透中量,白やや多量,赤やや多量,黒(チャか)中量,雲微量	【橙】 外:2.5YR6/8橙,内:2.5YR5/6明赤褐,断:2.5YR5/4にぶい赤褐 〈良好〉	S16E16G57・58(図面20)	東造出南東部
図5-1～4	家5-1(切妻屋根)	分割焼成の上屋根(切妻屋根,入母屋の上屋根か),反対側の破風欠損,妻側の壁一部残存,断面円形の棟木接合(中空,2条一括沈線による同心円状の線刻,中央に径0.9cmの貫通する小孔),破風に鞭懸状の突起3箇所あり,破風に同心円状線刻(2条一括沈線,中央に深0.7cmの未貫通の方形刺突),屋根は格子状の線刻(棟覆表現？)網代表現？,2条一括沈線で横帯2条・縦帯4条,施文は破風裏側に及ぶ),屋根や破風に斜め上方からの貫通する小孔多数(一辺0.6cm),大棟に大きな棟飾り取り付く(2条一括沈線による施文,未貫通の小孔あり),一部ハケ目残る(7本/1cm),破風復元幅41.8cm		3214,3215,3217,3218,3219/3229,3230,3235,3169	5トレ
	長(53.8)×屋根幅26.9×高44.6	やや密 やや砂粒目立つ ～5mm/片多量,透多量,白中量,赤中量,雲微量,黒チャ中量	【桃】 外・内:7.5YR7/3にぶい橙～7.5YR6/3にぶい褐～5YR6/6橙,断:7.5YR5/3にぶい褐 〈良好〉	S16W16G19・20・27・28・35(No.111不明G)/S16W16G18・26・27・33・34(No.102・113)	西造出南西部
図5-2	家5-1(棟飾り)	家5-1と接合しないが同一個体,家5-1の残存する破風とは反対側の破風側に取り付く棟飾りか,下部は大棟との接合面,2条一括沈線で施文,両面とも斜め上方から一辺0.6cmの方形工具による小孔あり(深2.8cm,1.0cm)		3024	5トレ
	(10.2)×高(7.5)/2.0	密 ～3mm/片中量,透多量,白多量,赤少量,雲微量,黒チャ少量	【桃】 外:5YR6/4にぶい、,断:7.5YR6/2灰褐 〈良好〉	S12W16G40(No.11,2b層)	西造出南西部
図5-2	家5-1(棟持柱)	上屋根に取り付く方形棟持柱か(中空,天地逆で下屋根の可能性もあり),家5-1と接合しないが同一個体の可能性大,下部は下屋根の棟持柱の上端に接地する面,側面に斜格子状の文様(正面か,文様がない面は側面か),調整不明瞭		3217	5トレ
	(4.3)×(7.0)×(15.2)	密 やや砂粒目立つ ～10mm/片中量,透多量,白多量,赤中量,雲微量,黒チャ少量	【桃】 外:5YR6/4にぶい橙,内:2.5YR5/3にぶい赤褐,断:5YR5/3にぶい赤褐 〈良好〉	S16W16G27(No.111)	西造出南西部
図5-5-1	家5-4(障泥板)	入母屋下屋根に取り付く障泥板(家5-4か,家5-1の下屋根になる可能性も),胎土は家5-2に近い,上端隅部に半円状のえぐり,施文は2条一括沈線,調整不明瞭		3510	5トレ
	(5.4)×高6.8/2.0	密 ～3mm/片やや多量,透少量,白少量,赤中量,雲微量,黒微量	【黄褐(or黄橙)】 外・内:5YR6/6橙～7.5YR7/4にぶい橙,断:10YR6/2灰黄褐 〈やや良好〉	S16W16G27(3a層)	西造出南西部
図5-5-2	家5-4(屋根軒先)	入母屋下屋根の軒先か(寄棟の可能性もあり),軒先端部に帯状の貼り付け(2条一括沈線の施文),家5-2と同一個体の可能性		4717	5トレ
	(3.9)×(3.9)×(3.4)	密 ～3mm/片中量,透少量,白少量,赤微量,雲微量,黒微量	【黄褐(orにぶい黄褐)】 外:10YR7/4にぶい黄橙,内・断:10YR6/3にぶい黄橙 〈良好〉	S12W20(埋戻土)	西造出西側斜面
図5-5-3	家5-4(屋根軒先)	入母屋下屋根の軒先か(寄棟の可能性もあり),軒先端部に帯状の貼り付け(2条一括沈線の施文),家5-2と同一個体の可能性		3099, 4709	5トレ
	(11.4)×(5.3)×(3.2)	密 ～8mm/片中量,透やや多量,白中量,赤少量,雲微量,黒微量	【黄褐(or黄橙)】 外・内:7.5YR7/4にぶい橙,断:10YR6/2灰黄褐 〈やや軟質〉	S16W12G63(No.77),S16W16(埋戻土)	西造出南側斜面
図5-5-4	家5-4(屋根軒先)	入母屋下屋根の軒先か(寄棟の可能性もあり),軒先端部に帯状の貼り付け(2条一括沈線による施文),縦方向に板状粘土の貼り付け(棟覆？),軒先の線刻の後に貼り付け),貼り付け上に方形小孔(一辺0.6cm・深1.7cm),外面調整不明瞭・内面ナデ調整か,家5-2と同一個体の可能性あり		203, 797	5トレ
	(15.2)×(5.8)×(4.5)	密 ～5mm/片中量,透やや多量,白中量,雲微量,黒少量	【黄褐(or黄橙)】 外・内:7.5YR7/4にぶい橙～10YR7/4にぶい黄橙,断:2.5Y7/2灰黄 〈やや軟質〉	S16W16(1～3層)	西造出南西部
図5-5-5	家5-4(屋根軒先)	屋根軒先(寄棟屋根の隅部),入母屋下屋根か(寄棟の可能性も),軒先端部に帯状の貼り付け(2条一括沈線による施文),屋根に小孔残存(貫通),裏面に補強突帯		3230, 225	5トレ
	(13.1)×(12.7)×(5.3)	密 ～5mm/片やや多量,透中量,白中量,赤微量,雲微量,黒微量	【黄褐(or黄橙)】 外:7.5YR6/4にぶい橙,内:10YR7/4にぶい黄橙,断:10YR6/3にぶい黄橙 〈やや軟質〉	S16W16G26(No.113,3a層),S16W16(3層)	西造出南西部
図5-5-6	家5-2(身舎 壁)	家5-2の身舎の壁,出入口部1箇所,外面に沈線で横・斜め方向の線刻,天地不明,外面ハケ調整(9本/1cm)・内面調整不明瞭		3230	5トレ

	(9.8)×高(6.6)/1.9	密 ～5mm/片やや多量,透やや多量,白やや多量,赤少量,雲微量,黒少量	【黄褐(orにぶい黄褐)】 外:10YR7/4にぶい黄橙,内:10YR7/6明黄褐,断:10YR7/2にぶい黄橙 〈やや軟質〉	S16W16G26(No.113,3a層)	西造出南西部
図5-5-7	家5-2(身舎　壁)	身舎壁(隅部),隅部はゆるやかに曲がる,出入口部1箇所,外面に沈線で縦・横方向の線刻,線刻交点に方形刺突,外面ハケ調整(不明瞭)・内面ナデ調整か		3232	5トレ
	(15.2)×(6.3)×(14.8)	密 ～5mm/片中量,透中量,白少量,赤少量,雲微量,黒微量	【黄褐(orにぶい黄褐)】 外:7.5YR7/6橙,内:10YR6/4にぶい黄橙,断:2.5Y7/2灰黄 〈やや軟質〉	S16W16G27(No.113,3a層)	西造出南西部
図5-5-8	家5-2(身舎　壁)	身舎壁(隅部付近),出入口部1箇所,外面に横・斜め方向の線刻,線刻交点に方形刺突(0.4×0.2cm・深0.6cm),外面ハケ調整(9本/1cm)・内面ナデか,天地不明		3235/797,4689	5トレ
	(16.4)×(3.8)×(15.4)	密 ～5mm/片やや多量,透やや多量,白やや多量,赤少量,雲微量,黒中量	【黄褐(orにぶい黄褐)】 外:内:7.5YR7/6橙,断:10YR6/3にぶい黄橙 〈やや良好〉	S16W16G33(No.113,3a層)/S16W16(1～3層),S12W16～S16W16(南畦畔,2b層)	西造出南西部
図5-5-9	家5-2(身舎　壁)	身舎壁(隅部・基部付近),平屋の壁あるいは東造出家1-1のような分割焼成の高床部にのる身舎の壁,出入口部1箇所あり,外面に沈線で縦・斜め方向の線刻(もう一方の面は摩滅のため文様不明瞭),線刻交点に方形刺突(0.4×0.2cm・深0.4cm),出入口部下側にも沈線,外面ハケ調整(6～9本/1cm),基部は剥離か(接合部での割れ,わざと打ち欠いた可能性もあり),家5-4と同一個体の可能性あり(家5-1・5-3とは胎土違う)		3230,3231,3233/3164,3169,4622	5トレ
	(31.5)×(16.0)×(23.7)	密　～5mm/片やや多量,透やや多量,白やや多量,赤微量,雲微量,黒少量	【黄褐(orにぶい黄褐)】 外:10YR7/4にぶい黄橙～7.5YR7/6橙,内:7.5YR7/6橙,断:7.5YR6/3にぶい褐 〈やや軟質〉	S16W16G26・27(No.113,据付坑)/S12W16G16(No.99),S16W16G26・27・33・34(No.102),S16W16G27(3a層)	西造出南西部
図5-6-1	家5-3(棟覆)	屋根を押さえる棟覆の押縁・笄部分(帯状の押縁に平面円形・断面台形の笄貼り付け),縦3条・横3条の沈線確認(1条ずつ施文),裏側は剥離面,上下左右不明,家5-1・2・4とは別個体		3028	5トレ
	5.5×3.7×(5.4)	密 砂粒やや目立つ ～5mm/片やや多量,透少量,白少量,赤少量,雲微量,黒少量	【橙】 外:5YR6/6橙,剥離面:7.5YR6/4にぶい橙,断:7.5YR5/2灰褐 〈良好〉	S8W20G55(No.15,3c層)	西造出西側斜面
図5-6-2	家5-3(棟覆)	屋根を押さえる棟覆の押縁・笄部分(帯状の押縁に平面円形・断面台形の笄貼り付け),沈線1条のみ確認,裏側は剥離面,上下左右不明,家5-1・2・4とは別個体		3029	5トレ
	5.0×3.4×(4.4)	密 ～5mm/片多量,透多量,白少量,赤やや多量,雲微量,黒少量	【橙】 外:5YR6/6橙,剥離面・断:5YR5/3にぶい赤褐 〈良好〉	S8W20G64(No.16,3c層)	西造出西側斜面
図5-6-3	家5-3(棟覆)	棟覆の押縁・笄部分(帯状の押縁に平面円形・断面台形の笄貼り付け),沈線1条のみ確認,裏側は剥離面,上下左右不明,家5-1・2・4とは別個体		3030	5トレ
	5.5×3.9×(4.4)	密 ～2mm/片中量,透やや多量,白中量,赤中量,雲微量,黒少量	【橙】 外:5YR6/6橙,剥離面・断:5YR5/3にぶい赤褐 〈良好〉	S12W20G33(No.17,3c層)	西造出西側斜面
図5-6-4	家5-3(棟覆)	棟覆の押縁・笄部分(帯状の押縁に平面円形・断面台形の笄貼り付け),沈線2条のみ確認,裏側は剥離面,剥離面にやや粗いハケ目残る(6本/1cm,接合部に施されたハケか),上下左右不明,家5-1・2・4とは別個体		4188	5トレ
	6.4×3.8×(4.8)	密 ～7mm/片やや多量,透多量,白少量,赤少量,雲微量,黒少量	【橙】 外:5YR6/6橙,剥離面・断:5YR4/3にぶい赤褐 〈良好〉	S12W20G57(2d層)	西造出西側斜面
図5-6-5	家5-3(棟覆)	棟覆の押縁・笄部分(帯状の押縁に平面円形・断面台形の笄貼り付け),沈線3条確認,裏側は剥離面,上下左右不明,家5-1・2・4とは別個体		4188	5トレ
	4.4×4.8×(7.0)	密 ～3mm/片中量,透中量,白少量,赤少量,雲微量,黒少量	【橙】 外:5YR6/6橙,剥離面:5YR5/2灰褐,断:5YR4/2灰褐 〈良好〉	S12W20G57(2d層)	西造出西側斜面
図5-6-6	家5-3(棟覆)	棟覆の押縁・笄部分(帯状の押縁に平面円形・断面台形の笄貼り付け),沈線2条のみ確認,裏側は剥離面,上下左右不明,家5-1・2・4とは別個体		3043	5トレ
	4.0×2.7×(3.7)	密 ～7mm/片多量,透中量,白少量,赤中量,雲微量,黒少量	【橙】 外:5YR6/6橙,剥離面・断:5YR5/4にぶい赤褐 〈良好〉	S12W16G52(No.31,2b層)	西造出北西部
図5-6-7	家5-3(棟覆)	棟覆の押縁・笄部分(帯状の押縁に平面円形・断面台形の笄貼り付け)縦2条・横1条ずつの,沈線確認,裏側は剥離面,上下左右不明,家5-1・2・4とは別個体		764	5トレ
	5.0×4.0×(4.8)	密 ～5mm/片多量,透中量,白少量,赤中量,雲微量,黒少量	【橙】 外:5YR6/6橙,剥離面・断:5YR6/4にぶい橙 〈良好〉	S12W16(2～3層)	西造出北西部
図5-6-8	家5-3(屋根軒先)	屋根軒先(入母屋下屋根か,胎土から家5-3か),軒先端部に帯状の貼り付け(不明瞭だが2条一括沈線の施文),内外面ナデ調整か		3097	5トレ
	(11.2)×(5.8)×(4.4)	密 ～14mm/片やや多量,透中量,白中量,赤中量,雲微量,黒微量	【橙】 外・内:5YR6/6橙,断:10YR5/3にぶい黄褐 〈やや良好〉	S12W16G10(No.75,3a層)	西造出北西部
図5-6-9	家5-3(裾廻突帯？)	裾廻突帯か屋根？,縦方向と横方向の線刻あり,中央縦方向に剥離痕(貼り付け前につけられた沈線状のキズと6～7本/1cmのハケあり),側面の裏は剥離面(貼り付け部に施されていたハケ目残る),図5-6-10と同一個体(11とも同一か)		3075	5トレ
	(9.5)×(4.2)×(3.9)	密 大きめの砂粒含む ～5mm/片やや多量,透少量,白中量,赤中量,雲微量,黒少量	【橙】 外:5YR6/6橙,剥離面・断:7.5YR5/2灰褐 〈やや良好〉	S8W12G14(No.57,3b層)	1段目テラス円筒7周辺
図5-6-10	家5-3(裾廻突帯？)	裾廻突帯か屋根？,横方向5条の線刻あり(1条ずつ施文),側面の裏は剥離面,図5-6-9と同一個体(11とも,同一か)		764	5トレ
	(7.5)×(4.1)×(4.3)	密 大きめの砂粒含む ～5mm/片中量,透多量,白やや多量,赤やや多量,雲微量,黒少量	【橙】 外・内:5YR6/6橙,断・剥離面:7.5YR5/2灰褐 〈やや良好〉	S12W16(2～3層)	西造出北西部
図5-6-11	家5-3(身舎　壁)	壁裾(底部に面あり,屋根の可能性もあるがおそらく壁),外面裾部分に剥離痕(裾廻突帯か),上部にも剥離痕(変色,何を貼り付けていたか不明),沈線4条あり(1条ずつ線刻,文様か),図5-6-1～10・12～18と胎土が近いので家5-3の可能性が高い,調整不明瞭		764	5トレ
	(14.2)×高(11.6)/2.2	密 大きめの砂粒含む ～5mm/片多量,透やや多量,白中量,赤やや多量,雲微量,黒少量	【橙】 外:内:5YR6/6橙,断・剥離面:7.5YR5/2灰褐 〈やや良好〉	S12W16(2～3層)	西造出北西部
図5-6-12	家5-3(円柱)	高床部基部の円柱か(断面円弧状),底部は面あり(接地面か),胎土などが図5-6-1～11に類似するため家5-3の可能性が高い,内外面ナデ調整		752	5トレ
	(8.4)×(3.5)×(5.7)	密 大きめの砂粒含む ～10mm/片多量,透少量,白少量,赤中量,雲微量,黒少量	【橙】 外・内:2.5YR6/6橙,断:2.5YR5/3にぶい赤褐 〈やや良好〉	S12W16(撹乱)	西造出北西部
図5-6-13	家5-3(基部)	高床部基部か(側面端部に面あり),円形のスカシ部分は円柱部か(剥離面になっている),下面は指オサエで少し凹凸できる,図5-6-12・14～18と同一個体か,胎土などが図5-6-1～11に類似するため家5-3の可能性が高い,内外面ナデ調整		205	5トレ
	(6.0)×(8.9)×3.6	密 大きめの砂粒含む ～8mm/片中量,透多量,白中量,赤多量,雲微量,黒少量	【橙】 外・内:2.5YR6/6橙,断:7.5YR5/3にぶい褐 〈やや良好〉	S12W16～W20(3層)	西造出北西部～西側斜面
図5-6-14	家5-3(基部)	高床部基部か(側面端部に面あり),円形のスカシ部分は円柱部か(剥離面になっている),図5-6-12・13・15～18と同一個体か,胎土などが図5-6-1～11に類似するため家5-3の可能性が高い,内外面ナデ調整か		764	5トレ
	(6.0)×(9.9)×4.5	密 大きめの砂粒含む ～5mm/片多量,透少量,白少量,赤中量,雲微量,黒微量	【橙】 外:5YR6/6橙,内・断・剥離面:5YR5/4にぶい赤褐 〈やや軟質〉	S12W16(2～3層)	西造出北西部
図5-6-15	家5-3(基部)	高床部基部か(底部に面あり),円形のスカシ部分は円柱部か(剥離面になっている,段差部分は円柱をのせるためか),図5-6-12～14・16～18と同一個体か,胎土などが図5-6-1～11に類似するため家5-3の可能性が高い,内外面ナデ調整か		764	5トレ
	(6.2)×(12.8)×8.0	密 ～4mm/片中量,透中量,白少量,赤中量,雲微量,黒微量	【橙】 外・内:5YR6/6橙,断・剥離面:7.5YR5/3にぶい褐 〈やや軟質〉	S12W16(2～3層)	西造出北西部
図5-6-16	家5-3(基部)	高床部基部か,円形のスカシ部分は円柱部か(剥離面になっている,下面に補強突帯貼り付け,図5-6-12～15・17・18と同一個体か,胎土などが図5-6-1～11に類似するため家5-3の可能性が高い,内外面ナデ調整か		764	5トレ
	(6.8)×(9.8)×5.1	密 大きめの砂粒含む ～8mm/片多量,透少量,白中量,赤やや多量,雲微量,黒微量	【橙】 外・内・剥離面:5YR6/6橙,断:7.5YR5/3にぶい褐 〈やや軟質〉	S12W16(2～3層)	西造出北西部
図5-6-17	家5-3(高床部か基部)	円柱ほど大きくない径5.3cmの円形スカシ孔あり(高床部の円柱上面のスカシ孔あるいは基部の円柱間のスカシ孔か),,図5-6-12～16・18と同一個体か,胎土などが図5-6-1～11に類似するため家5-3の可能性が高い,内外面ナデ調整か(上面は平らにナデ,下面はほとんどナデ調整なし,凹凸残る)		3441	5トレ
	(7.5)×(10.1)×2.2	密 大きめの砂粒含む ～13mm/片やや多量,透少量,白やや多量,赤やや多量,雲微量,黒少量	【橙】 外・内・断:5YR6/6橙 〈やや軟質〉	S12W16G10(3a層)	西造出北西部
図5-6-18	家5-3(高床部か基部)	やや小形の径3.6cmの円形スカシ孔(高床部の円柱上面のスカシ孔または基部の円柱間のスカシ孔か),図5-6-12～17と同一個体か,胎土などが図5-6-1～11に類似し家5-3の可能性が高い,内外面ナデ調整か(上面は平らにナデ,下面はほぼナデ調整なし)		764	5トレ
	(5.4)×(5.7)×2.1	密 ～3mm/片やや多量,透少量,白中量,赤中量,雲微量,黒微量	【橙】 外・内:5YR6/6橙,断:7.5YR7/4にぶい橙 〈やや軟質〉	S12W16(2～3層)	西造出北西部
図5-6-19	家5-5(屋根軒先)	屋根寄棟部の軒先(隅部),家5-3の可能性もあるが色調などが違うため家5-5とする,軒先端部に帯状の貼り付け(不明瞭だが3条一括沈線による施文か),調整不明瞭,図5-6-20と同一個体		764	5トレ
	(4.8)×(5.3)×(5.1)	密 ～5mm/片やや多量,透中量,白少量,雲微量,黒少量	【にぶい黄褐(or黄橙)】 外:7.5YR7/4にぶい橙,内:5YR7/6橙,断:10Y6/3にぶい黄橙 〈やや軟質〉	S12W16(2～3層)	西造出北西部
図5-6-20	家5-5(屋根軒先)	屋根寄棟部の軒先,家5-3の可能性もあるが色調などが違うため家5-5とする,軒先端部に帯状の貼り付け(不明瞭だが2条一括沈線による施文か,一部4条になる),調整不明瞭,図5-6-19と同一個体		764	5トレ
	(8.8)×(4.6)×(3.7)	密 ～7mm/片やや多量,透中量,白中量,雲微量,黒少量	【にぶい黄褐(or黄橙)】 外:7.5YR7/4にぶい橙,内:5YR7/6橙,断:10Y6/3にぶい黄橙 〈やや軟質〉	S12W16(2～3層)	西造出北西部
図5-7	双脚輪状文形冠帽をかぶった人物5-1	頭部に双脚輪状文形の冠帽をかぶる(双脚部欠損),頭部ほぼ完存(体部欠損),冠帽は外周と内側円形・それを結ぶ放射状に2条平行沈線による施文(1条ずつ施文),鼻の穴は工具により刺突(未貫通),口は大きく欠損するが貫通,美豆良2本残存(×字状の線刻は髪を束ねる紐を表現か),美豆良に粘土の貼り付けあり(髪を束ねる紐の結び目か),垂髪は線刻なし,5-2よりやや小形		3455,3463,3475,3482,4691(冠帽)/3140,3141,3147,3345,3388,3397,3470,3482,3484,3487,4691,5099	5トレ
	冠帽幅16.3×冠帽奥行(13.8)×高(19.5)	密 ～5mm/片やや多量,白少量,赤やや多量,透少量,雲微量	【橙】 外・内・断:5YR6/6橙 〈良好〉	S12W12G47・56(3a層),S16W12G49・57・61(3a層)/S16W16G1(No.97),S16W12G51・58(No173・.97),S12W16G1・64(No.140・180),S12W12G64(3a層)	西造出中央部
図5-8	双脚輪状文形冠帽をかぶった人物5-2	頭部に双脚輪状文形の冠帽をかぶる,冠帽は2条一括沈線と2点一括刺突文で外周と内側円形・それを結ぶ放射状に施文(1点刺突に見える箇所もあるがおそらくすべて2点一括,沈線は1条ずつの可能性もあり),側面に刺突文(おそらく2点一括),顔・頭頂部欠損,美豆良2本残存(×字状の線刻は髪を束ねる紐を表現か),美豆良に粘土の貼り付けあり(髪を束ねる紐の結び目か),垂髪に沈線7条で髪を表現(美豆良に比べ幅広で深い沈線),5-1より全体的にやや大きい		3195,3361,3501(冠帽)/3362,3507,3510(垂髪・美豆良)	5トレ
	冠帽幅19.1×冠帽奥行21.6×高(31.2)	密 ～5mm/片やや多量,赤中量,透中量,白少量,雲微量,黒色(チャ)やや多量	【橙】 外・内・断:5YR6/6橙 〈良好〉	S16W16G19(No.109・156),S16W16G11(3a層)/S16W16G19・27(No.157,3a層)	西造出南半部
図5-9	両面人物	頭部の両面に顔がある人物(体部以下欠損),頭頂部は線刻や貼り付けなどの装飾なし(帽子などを被る可能性もあるが剥離痕観察できず),片方の頬には矢羽根・もう片方には矢尻の線刻(左頬の矢尻は独立片逆刺鏃か),両方の額にも線刻あり,矢尻側の口は上部に切り込みが入る(両面とも口は貫通),鼻の穴は工具による刺突(未貫通),美豆良は両面で共有		3346,3434(主体)/3340,3353,3358,3444,3456,4595	5トレ
	14.0×16.4×19.5	密 ～5mm/片中量,透少量,白中量,赤中量,黒少量,雲微量	【黄橙(or黄褐)】 外・内:5YR6/6橙～7.5YR7/4にぶい橙,断:7.5YR5/3にぶい橙 〈良好〉	S12W16G7(No.141),S16W12G53(No.207)/S16W12G49(No.138),S12W12G56・64(No.149・153),S12W16G14(3a層),S12W12G48(3a層),S16W16(3a層)	西造出中央部
図5-10	人物(武人　頭部)	武人の頭部(ほぼ完存,頭部以下欠損),眉庇と衝角付冑の両方の特徴をもつ(鍔あり,鍔端部は波状の形状,鍔上面に細い沈線1条,冑の前方は少し尖って稜線あり),頭頂部にスカシ状の穴(何か差し込んでいた可能性あり),頭頂部は2条一括沈線と円形浮文で施文(線刻後に浮文貼り付け),下半部は横方向に3条一括沈線で施文(正面と下部の縁には円形浮文),横方向の幅1.3cmの帯状の貼り付け(円形浮文貼り付け),冑と頭部分(あご部分)の間に補強突帯,鼻の穴は径0.6cmの円形の工具で刺突(未貫通),口はヘラ状工具で貫通,頭頂部内面は上方への強いナデ,整理時は武人A(頭部)		3372(頭部主体)/3371,3373,3239,3479,3514,4355,4514	5トレ
	19.9×19.8×27.0	密 ～5mm/片中量,透中量,白中量,赤少量,黒微量,雲微量	【黄橙】 外・内:7.5YR6/6橙～5YR6/6橙,断:10YR7/4にぶい黄褐 〈良好〉	S16W12G52(No.164武人頭部,3a層)/S16W12G18・51・52・58(No.116・164),S12W12(3a層)	西造出南半部
図5-11-1	人物(盛装男子　頭部～肩部)	盛装男子の頸部～肩部,襟部に段差を作り沈線と2条一括刺突文による施文(左前の衣服か),図5-11-2・3と同一個体か(図5-11-2の左腕と同一個体なら接合しないため右肩の可能性大),右肩から頭部にかけて横方向の帯貼り付け(2点一括刺突文),左肩部から頭部にも縦方向の帯貼り付け(2点一括刺突文),整理時は武人B		3365, 3501, 4606	5トレ
	(19.2)×(10.0)×(10.8)	密 大きめの砂粒目立つ ～4mm/片やや多量,透やや多量,白中量,赤中量,黒少量,雲微量	【橙】 外:5YR6/8橙,内:5YR6/6橙,断:10YR5/2灰黄褐 〈良好〉	S16W16G11(No.160,3a層)	西造出南半部
図5-11-2	人物(盛装男子　腕)	盛装男子の左腕(あるいは武人),腕中位から肩は中空・手先部分は中実(差込部分あり),手の甲に指貼り付け(親指の形状わかる,一部剥離),手のひら若干凹む,手の甲から手首に籠手(手甲)貼り付け,腕中位に帯状の剥離あり(帯か籠手の一部・もしくは鞆の剥離),一部凹形の浮文残る,脇付近に沈線4条あり(2条一括沈線か),図5-11-1・3と同一個体か,調査時は腕H・腕J(接合)		3185 ,3363, 3365, 3366, 3506	5トレ
	8.1×20.0×6.5	密 大きめの砂粒目立つ ～5mm/片多量,透中量,白やや多量,赤少量,黒少量,雲微量	【橙】 外:2.5YR6/8橙,内:5YR6/6橙,断:5YR5/3にぶい赤褐 〈良好〉	S16W16G10・11・18・19(No.109・158・160・161,3a層)	西造出南半部
図5-11-3	人物(盛装男子　腕)	盛装男子の腕(あるいは武人),右手か(親指の形状あり),中実,接合部での割れ(差込部分残る),指貼り付け2本残存(残りは剥離),手の甲に籠手(手甲)貼り付け,腕中位に帯状の剥離痕あり(帯もしくは籠手の貼り付け),手のひら少し凹む,図5-11-1・2と同一個体か,整理時は武人C右手		3442	5トレ
	(10.3)×5.1×3.2	密 ～4mm/片やや多量,透中量,白やや多量,赤中量,黒微量,雲微量	【橙】 外:5YR6/6橙～2.5YR6/8橙,断:7.5YR5/3にぶい褐 〈良好〉	S12W16G11(3a層) ＊S16W16の間違いか	西造出北西部

図5-11-4	人物の大刀	人物に装着する大刀(盛装男子か武人),先端欠損,柄口(鞘口)部欠損か,中実,柄頭部は十字に深い溝を作り縦・横方向の沈線を施す,柄部と鞘部に沈線による直弧文風の文様,鞘部先端側は1条ずつの沈線2条と長方形工具による2点一括刺突文で施文,鞘部の鞘口側は1条ずつの沈線2条と小形の工具(ヘラ状工具?)による1点ずつの刺突文で施文,中央付近に帯状の剥離痕2箇所(剥離部には文様なし,文様は貼り付け後),側面に人物体部との剥離痕,草摺(図5-13)周辺で出土		3507, 3180	5トレ
	長25.6以上×幅4.0	密 ～2mm/片中量,透やや多量,白やや多量,赤中量,黒(チャか)少量,雲微量	【橙】 外:2.5YR5/6橙,断:5YR5/4にぶい赤褐 〈良好〉	S16W16G19(3a層),S16W16G19(No.108草摺,3a層)	西造出南西部
図5-12-1	人物(武人 甲)	武人の胴部(甲),上部と裾部欠損,前後不確定,縦方向に2条一括沈線・横方向に1条ずつ弧状の沈線・交点に2点一括刺突文(弧状の沈線はほとんど上向きだが一部下向きあり),脇にスカシ孔あり,腰部分に断面三角形の突帯状の貼り付け(線刻より前),図5-12-2と同一個体か,整理時は武人F(小札)		3120,3121,3123,3124,3125/3402/3455,3456	5トレ
	18.1×14.1×(17.8)	密 ～5mm/片中量,透中量,白中量,赤少量,黒微量,雲微量	【橙】 外・内:5YR6/6橙,断:10YR6/3にぶい黄橙 〈良好〉	S12W12G54～56・63・64(No.88小札,3a層)/S12W12G47(No.183)/S12W12G47・48(3a層)	西造出中央部
図5-12-2	人物(武人 甲)	武人の甲(あるいは草摺)の裾部,縦方向の直線は2条一括沈線・横方向の弧状は1条ずつの沈線で施文,裾部と沈線の交点に2点一括刺突文,全体的に表面がやや凹む形状,図5-12-1と同一個体の裾部か(文様構成同じ,ただし弧状の沈線は下向きで5-12-1とは向きが違う)		3140	5トレ
	(15.8)×高(7.2)/1.4	密 ～2mm/片中量,透中量,白中量,赤中量,黒少量(チャか),雲微量	【橙】 外・内:5YR6/6橙,断:10YR6/3にぶい黄橙 〈良好〉	S16W16G1(No.97,3a層)	西造出中央部
図5-12-3	人物(武人 草摺5-2)	武人の草摺か,図5-12-3-1と5-12-3-2は同一個体と考えられるが直接接合しない(他に同一個体片多数あり),横方向に沈線を施した後に綾杉文状に沈線を施す,上部外面は稜線を有し細い沈線で施文する,上部内面は剥離痕(胴部に接合する箇所か),整理時は武人E		12-3-1:3370,3487,3367,3136,3514/12-3-2:3493,3138	5トレ
	3-1:(21.2)×(10.0)×(17.5),3-2:(16.0)×(5.5)×(8.9)	密 やや細かい砂粒目立つ ～5mm/片多量,透中量,白やや多量,赤中量,黒微量,雲微量	【橙(or黄橙)】 外:2.5YR6/6橙,内上部:7.5YR75/2灰褐,内下部:2.5YR5/6明赤褐,断:7.5YR5/2灰褐 〈やや良好〉	S16W12G51・58・59・61(No.162・163,3a層),S16W16G2(No.95)/S16W16G3(3a層),S16W12G61(No.95)	西造出南半部
図5-12-4	人物(巫女の裳?)	巫女の裳か(あるいは男性の服・草摺の可能性もあり),上部に沈線あり(現状で3条確認,その他は文様なし),上部は接合部での割れ,同一個体片多数あり,調整不明瞭,調査時は不明形象F(巫女か)・整理時は人物その他L		3220(主体)/3223,3224,4621	5トレ
	(35.8)×(8.6)×(18.1),復元径55.0cm	密 やや大きめの砂粒含む ～3mm/片多量,透やや多量,白中量,赤やや多量,黒少量,雲微量	【橙】 外:2.5YR6/6橙,内:2.5YR6/6橙,断:7.5YR5/2灰褐 〈やや良好〉	S16W16G17(No.112不明形象F,3a層)/,S16W16G17・18(No.112),S16W16G26(3a層)	西造出南西部
図5-13	人物(武人 草摺5-1)	草摺部分ほぼ完存,3条一括沈線と2点一括刺突文で格子状に施文,上部は粘土貼り付け(段差作る,胴部か,横方向の2条一括沈線と2点一括刺突文・縦と斜め方向の3条一括沈線と2点一括刺突文による施文),方形貼り付け部あり(粘土板を重ねて貼り付け,一部は粘土折り曲げか,粘土板の隙間に一部空洞できる,貼り付け部の下には貼り付け時のキザミ目あり,2点一括刺突文と×字・弧状の沈線で施文),上部内面は剥離痕(胴部に接合する箇所),外面調整不明瞭・内面は板ナデ 整理時は武人D		3181,3182,3185,3186,3188～3190,3192,3194～3196(主体)/3180(貼り付け部)/225,3216,3506,4153,4154,4613	5トレ
	長径47.3×短径42.2×高19.6	密 ～5mm/片中量,透中量,白やや多量,赤中量,黒少量,雲微量	【橙】 外・内:2.5YR6/6橙,断:5YR5/2灰褐 〈良好〉	S16W16G11・19(No.109草摺,3a層)/S16W16G19(No.108)/S16W16(3層),S16W16G18・19・27(No.111,2c・3a層)	西造出南西部
図5-14・15	人物埴輪基部	人物埴輪の基部(椅子の可能性もあり),前方両側に板状の張り出し(側面にスカシ孔あり),前方上部に庇状の張り出しあり,裾部と上部に突帯2条,円筒台部側面にもスカシ孔あり,スカシ孔の まわりに粘土貼り付け(突帯貼り付け後か),板状張り出しとあわせてスカシ孔は計4箇所,後面右側に棒状の貼り付けあり(かかとの形状,細い帯状の剥離痕あり,かかとであればひざまづく形態),草摺5-1(図5-13)の下層より出土(この基部上に草摺5-1が組み合う可能性あり,ただし草摺の形態からひざまづく姿というより座位の可能性もあり),外面ハケ調整(7本/1cm),整理時は形象円筒部D(草摺の台円筒),井辺八幡山古墳に類例あり		3203(主体)/3183,3185,3187,3197,3198,3200,3201,3202	5トレ
	29.5×38.6×(20.0)	密 ～5mm/片やや多量,透中量,白中量,赤少量,黒微量,雲微量	【橙】 外・内:5YR6/6橙,断:2.5YR5/3にぶい赤褐 〈良好〉	S16W16G19(No.109草摺の台円筒)/S16W16G11・19(No.109)	西造出南西部
図5-16・17	両手をあげる人物	両腕をあげる形態(頭部・両腕・両脚先欠損,脚部の形状は力士に似る),粘土を貼り付けて段差を作り右前の衣服を表現(紐状の結び目2箇所,文様のない比較的簡素な衣服),胸中央に未貫通の刺突あり,右ふとも,脇に紐状の貼り付け,左ふともちには竹管状の工具による未貫通の刺突2箇所あり,ふともも上半に段差作る(衣服の裾部か),腰に帯1条貼り付け(3条一括沈線で縦・斜めの線刻,一部4条に見える箇所あり,背面側は剥離,帯正面に下方に続くと推定できる横・縦方向の線刻あり),帯正面下方(ふともも上部)に大きな剥離部あり(下方に垂らす帯端部か),右脚接合後に左脚接合,内面はナデ調整,両脇にスカシ孔(径3.2cm),頭部や手を欠損するため職掌不明(両脚を作り出し文様のない服装から鷹匠などが想定可能),整理時は人物その他C		3132(主体)/3117,3128,3129,3131,3394,3482/3117(帯破片)	5トレ
	30.4×15.5×(52.6)	密 ～10mm/片やや多量,透少量,白多量,赤中量,黒微量,雲微量	【橙】 外・内:5YR6/6橙,断:5YR5/2灰褐 〈良好〉	S16W12G51(No.91,3a層)/S16W12G43・50・51・57(No.91・176)/S12W12G38・46・47(No.87)	西造出中央部
図5-18	人物(巫女 頭部)	体部以下欠損,頭頂部は粘土をなでつけた後にキザミ目をつけて島田まげ状の髪を貼り付け(頭頂部内面は粘土充填して強い指オサエ),島田まげ状の髪は粘土板を折り曲げて製作(前方と後方に空洞できる),島田まげ状の髪の中央に横方向の剥離痕(髪どめの帯),口・目は貫通,鼻の穴は細い工具で刺突,耳は内側を凹ませた円板状の粘土貼り付け(中央に刺突),頭部幅10.7cm,頭部奥行12.1cm,整理時は巫女A		3369,3370(主体)/,3137,3140～3142,3145,3478,3496～3498	5トレ
	14.5×16.5×(15.0)	密 砂粒細かい ～8mm/片少量,白少量,赤少量	【にぶい黄橙】 外・内・断:10YR6/4にぶい黄橙 〈良好〉	S16W12G51(No.162巫女頭部,3a層)/S16W12G51・60(No.95,3a層),S16W16G1・2・9・10(No.97)	西造出南半部
図5-19-1	人物(巫女 腕5-1)	巫女の両腕,うすい板状のものを持つ(大きく欠損するため種類不明),指の表現なし,玉貼り付け(左右とも4個ずつ残存),手首の玉より手先側に細い帯状の貼り付けと剥離痕跡(腕輪状のもの?),腕部中空・手先中実,全体的に丁寧にナデ調整,調査時は腕I・腕G,整理時は巫女B		3366,3080(左腕)/3359(右腕)	5トレ
	(28.0)×(12.9)×6.0	密 ～5mm/白少量,赤少量,片少量,雲微量,透微量,黒微量	【にぶい黄橙(or黄橙)】 外・内・断:7.5YR6/4にぶい橙～5YR6/6橙 〈良好〉	S16W16G18(No.161腕I,3層),S12W16G32(No.62)/S16W16G1(No.154腕G)	西造出中央部
図5-19-2	人物(巫女 腕5-2)	巫女の右腕,中実(接合部での割れか,断面に差込部分の割れあり),手首やや折れ曲がる,手先に何か剥離した痕跡あり(器か棒状のものか不明),玉の痕跡確認できず,整理時は人物その他E		764	5トレ
	(9.8)×4.1×5.1	密 やや砂粒目立つ ～5mm/片多量,透中量,白中量,赤やや多量,黒少量,雲微量	【黄褐(or黄橙)】 外:7.5YR7/4にぶい橙,断:10YR6/3にぶい黄橙 〈良好〉	S12W16(2～3層)	西造出北西部
図5-19-3	人物(巫女 腕5-3)	巫女の腕(左右どちらか不明),中実(接合部での割れ,差込部分残る),手のひら凹む(器の剥離痕),玉の痕跡確認できず,調査時は腕C・整理時は人物その他G		3354	5トレ
	(5.9)×3.6×3.0	密 砂粒細かい ～3mm/片中量,透中量,白中量,赤やや多量,黒微量,雲微量	【橙】 外・5YR6/6橙,断:7.5YR7/4にぶい橙 〈良好〉	S12W12G56(No.149腕C)	西造出中央部
図5-19-4	人物(巫女 腕5-4)	巫女の左腕(中実),手先に器をのせていた痕跡,接合部付近での割れ(断面で差込部分を観察),玉の痕跡確認できず,調査時は腕A・整理時は人物その他F		3,351,727	5トレ
	(11.4)×4.1×2.6	密 砂粒細かい ～4mm/片中量,透中量,白中量,赤やや多量,黒微量,雲微量	【橙(or黄橙)】 外:5YR6/6橙,断:10YR6/3にぶい黄橙 〈良好〉	S12W12G40(No.146,3a層),S8W12(3層)	西造出中央部
図5-19-5	人物(巫女 腕5-5)	巫女の左腕か,中実(一部空洞あり),手先付近一部回む,玉剥離の可能性がある変色部あり,整理時は人物その他D		171	5トレ
	(10.3)×4.7×4.9	密 やや大きめの砂粒目立つ ～7mm/片多量,透やや多量,白やや多量,赤やや多量,黒(チャか)少量,雲微量	【橙】 外:5YR6/6橙,断:10YR5/3にぶい黄褐 〈良好〉	S20W12～W20	西造出南側斜面
図5-19-6	人物(巫女 袈裟状衣)	巫女の袈裟状衣(意須比)の左下側部分,断面U字形,下面にヘラ状工具による幅0.6cmの穿孔あり,3条一括沈線による施文(外周および内側の文様),幅2.6cmの帯貼り付け(2条一括沈線による施文,裏面側は帯剥離),内外面ナデ調整か,調査時は不明形象E・整理時は巫女C(帯は巫女D)		3141,3142,3143,3144,3146,3147(主体)/3137,3502	5トレ
	(28.5)×10.6×(24.5)	密 ～3mm/片中量,透中量,白少量,赤中量,黒少量,雲微量	【橙】 外・内:5YR7/6橙,断:10YR7/2にぶい黄橙 〈やや軟質〉	S16W16G1・2・9,S16W12G57・58(No.97不明形象E,3a層)/S16W16G11(3a層),S16W12G60(No.95)	西造出中央部
図5-20～27	馬5-1	ほぼ全身完存(尾部欠損),たてがみは断面T字形(側面にたてがみを表現した線刻は確認できず,たてがみ前方の結び飾り欠損),口はヘラ状工具で切り込み,鼻は右穴は貫通・左穴は未貫通,鏡板欠損(剥離部からP字形の可能性),頬部は板状,面繋は竹管文と沈線で施文(頬部分は細い沈線で外側のみ,耳部分から額部分はやや太い2条一括沈線で内側のみ),胸繋は竹管文で施文,胸繋に馬鐸3個(細い沈線で綾杉文風線刻),尻繋は2条一括沈線で施文(太い沈線),手綱は無文,スカシ孔は胴部側面4箇所・頭部下側のど部2箇所(径5.5cm・径1.8cm)・胴部下側中央(腹部)1箇所(径2.5cm),鞍は粘土を貼り付けて体部と少しだけ段差をつける,鞍上面に2点一括刺突文による施文(一辺0.35cm正方形工具),鞍前輪・後輪は竹管文と2条一括沈線による施文(側面と前面のみ施文,裏面には浮文貼り付け),尻部に杏葉3箇所(円形浮文・竹管文・細い沈線・太い沈線・2点一括刺突文で施文,鈴貼り付け),障泥は板状(2条一括沈線と2点一括刺突文で施文,左側面の障泥だけ鞍や右側障泥と違う長方形の小さい刺突工具使用,裏面に補強突帯あり),障泥上に鐙の剥離痕(剥離痕小さく壺鐙か,図5-53-11が取り付く可能性),鐙を吊り下げる帯貼り付け(2点一括刺突文,鞍と同じ正方形工具),脚部内面に縦方向の接合痕(切開再接合技法),脚端部はハ字状に広がる形態,胴部内面に補強突帯あり,整理時は馬B・南馬(顔あり)		3138,3139,3174,3186,3195,3215,3237～3240,3250,3255～3261,3263～3275,3277～3282,3284,3336,3372,3394,3395,3472,3474,3479,3487,3493,3514,4706	5トレ
	(101.5)×39.1×高88.0,復元長111.5	密 ～5mm/片多量,透多量,白中量,赤多量,黒(チャ)中量,雲微量	【黄褐】 外・内:10YR6/4にぶい黄橙(～一部5YR6/4にぶい橙),断:10YR6/2灰黄褐 〈良好〉	S16W12G25・28・35・42～45・50～53・57～59・61(No.120南馬主体・95・114～117・136・164・177・179),S16W16G2～4・11・19・20(No.95・96・105・109・111・119)	西造出南東部
図5-28～35	馬5-2	ほぼ全体復元(頭部欠損),たてがみは断面T字形(側面は線刻でたてがみを表現),たてがみ前方に柱状の結び飾りあり,障泥は板状(裏面に補強突帯),障泥外周は太い2条一括沈線と2点一括刺突文・内側は細い1条ずつの平行沈線と2点一括刺突文,障泥に細い沈線で輪鐙を表現(貼り付けでない,右側面の鐙は2点一括刺突文・左側面の鐙は3点一括刺突文で施文,鐙の沈線後に障泥外周の沈線),尾を巻く細い帯あり,胸繋は無文,面繋は竹管文で施文,尻繋は3点一括刺突文で施文,胸繋に馬鐸2個(綾杉文風線刻)と逆V字形の取り付け3個(A字状の線刻),尻繋に環状の杏葉取り付け(竹管文で施文,側面の杏葉中央は胴部側面のスカシ孔兼ねる,上面の杏葉中央は竹管文),鞍は粘土を貼り付けて体部と少し段差をつける(鞍は3点一括刺突文で施文),鞍前輪・後輪中央にスカシ孔あり(前輪・後輪は竹管文と細い沈線で施文,側面・前面・後面とも施文,前輪前面のみスカシ部分に細い沈線と2点一括刺突文の施文あり),スカシ孔は胴部側面4箇所(1箇所欠損)・胴部下側(腹部)中央1箇所(径7.0cm)・背部1箇所(径3.0cm)・尻部1箇所(径2.5cm),脚部内面に縦方向の接合痕(切開再接合技法),脚端部はハ字状に広がる形態,胴部内面に補強突帯あり,整理時は馬A・北馬(顔なし)		S16W12G12・33・34・41～43・48～51・53・57(No.121北馬主体・113・114・135・138・142・152・171),S12W12G27・40・47・48・55・56・63・64(No.88・89・125・147・170・184・185),S12W16G6・7(No.143),S16W16G4・9・11・17・18・25(No.112・159),S20W16G57(No.40),S8W12(3層),S12W20(2層)	西造出中央部
図5-36-1	翼を広げた鳥(尾羽か	弧状を描く側面あり(形状から翼を広げた鳥の尾羽の可能性大),側面に小孔あり(径0.6×深残2.8cm),2枚の粘土を貼り合わせて製作,ナデ調整か,天地不明,図5-36-2・3・4と同一個体か(同一地点出土)		3059	5トレ
	(7.1)×(9.1)/2.5	密 やや砂粒目立つ ～8mm/片中量,透中量,白中量,赤中量,雲微量	【にぶい黄褐】 外・内:7.5YR6/4にぶい橙,断:10YR6/4にぶい黄褐 〈やや軟質〉	S8W20G45・46・53・54・61(No.45,3c層)	西造出西側斜面
図5-36-2	翼を広げた鳥(胴部)	丸くふくらむ形態から翼を広げた鳥の胴部の可能性大(前後不明だが尻部か),径3.8cmのスカシ孔,下部ははおそらく円筒基部との接合部,外面板ナデか・内面粗いナデ調整,図5-36-3・4と同一個体か(図5-36-1・3・4と同一地点出土),整理時は飛ぶ鳥C		785, 3059, 4714	5トレ
	(10.3)×(5.0)×(17.0)	密 やや砂粒目立つ ～5mm/片多量,透中量,白中量,赤中量,雲微量,黒少量(チャか)	【橙(orにぶい黄褐)】 外:7.5YR6/4にぶい橙,内:2.5YR6/6橙,断5YR5/3にぶい赤褐 〈やや良好〉	S8W16(1・2層),S8W20G45・46・53・54・61(No.45,3c層),S8W20理戻土	西造出西側斜面
図5-36-3	翼を広げた鳥(胴部)	丸くふくらむ形態から翼を広げた鳥の胴部の可能性大(前後不明だが頭部の下か),上部は頭部の剥離痕か,下部は円筒基部との接合部か,径2.5cmのスカシ孔,斜め上方からの小孔(径0.9cm,貫通),外面板ナデ?・内面ナデ調整(一部接合痕残る),図5-36-2・4と同一個体か(図5-36-1・2・4と同一地点出土),整理時は飛ぶ鳥B		3059	5トレ
	(16.6)×(7.6)×(15.3)	密 砂粒目立つ ～8mm/片多量,透中量,白中量,赤多量,雲微量,黒少量(チャか)	【橙】 外・内:2.5YR6/6橙,断:2.5YR5/3にぶい赤褐 〈やや良好〉	S8W20G45・46・53・54・61(No.45,3c層)	西造出西側斜面
図5-36-4	翼を広げた鳥(胴部)	翼を広げた鳥の胴部側面(丸くふくらむ形態),翼下側に貼り付ける補強突帯2本残存(翼は欠損),径4.0cmのスカシ孔あり(補強突帯より前に穿孔),斜め上方からの小孔あり(径0.8cm,貫通),図5-36-2・3と同一個体か(図5-36-1・2・3と同一地点出土),整理時は飛ぶ鳥A		3059, 1447	5トレ
	(20.4)×(8.5)×(15.4)	密 ～10mm/片多量,透多量,白少量,赤中量,雲微量,黒少量	【にぶい黄橙(or橙)】 外:2.5YR6/6橙～7.5YR7/4にぶい橙,内:2.5YR6/6橙,断10YR5/2灰黄褐 〈良好〉	S8W20G45・46・53・54・61(No.45,3c層),5トレ排土	西造出西側斜面

図5-37･38	胡籙5-1	矢5本線刻(やや太い2条一括沈線,矢羽根は杏仁形に描く),外周に帯状の貼り付け(外側を1条ずつの細く鋭い沈線と3点一括刺突文で施文,貼り付け後に矢を線刻),下半部は断面半円状の収納部を貼り付け(収納部底は空洞,外面は2条一括沈線による直弧文風の弧状の文様,6本/1cmのハケ目残存),収納部外面に紐状の結び目と勾玉状金具貼り付け(勾玉状金具は1箇所欠損),収納部上端は帯状の貼り付け(3点一括刺突文と1条ずつの沈線,上端面も3点一括刺突文),収納部上端部の奥に横方向の2点一括刺突文による施文,裏面上半に縦方向の補強突帯3本(両端は円筒部につながる),中央補強突帯から円筒部へつながる棒状の補強あり),円筒基部は2段で復元(V群系円筒埴輪に類似,スカシ孔不明,裏面～底部欠損),整理時は胡籙A		751,764,3148～3153,3155,3156,3158～3161,3445,3485,3489(主体)/3381	5トレ
	40.0×17.3×復元高(96.0)	密 やや砂粒目立つ ～5mm/片多量,透中量,白中量,赤少量,黒(チャか)微量,雲微量	【橙】 外・内・断:2.5YR5/6明赤褐～一部7.5YR6/6橙 〈良好〉	S12W16G7･8･15･16･23,S16W16G1,S16W12G59,S12W12G64(No.98主体)/S12W16G15(No.169)	西造出中央部
図5-39	胡籙5-2	胡籙5-1と同形・同大,上半部のみ(円筒基部欠損),矢7本線刻(やや太い2条一括沈線,矢羽根は杏仁形に描く),外周に帯状の貼り付け(外側を1条ずつの細い沈線と3点一括刺突文,上端～左側は大きい刺突工具・右側は小さい刺突工具),裏面に縦方向の補強突帯3本(両端は円筒基部に続く補強突帯),整理時は胡籙B		3177,3179(主体)/203,225,3173,3178,3497,3498,3500,3501	5トレ
	39.5×(5.0)×高(40.0)	やや密 砂粒目立つ ～5mm/片多量,透中量,白中量,赤中量,灰(チャか)少量,雲微量	【黄橙(or橙)】 外・内:7.5YR6/6橙～7.5YR6/4にぶい橙,断:10YR6/3にぶい黄橙 〈やや良好〉	S16W16G10･18(No.108,3a層)/S16W16G9～11(No.104･108)	西造出南西部
図5-39	胡籙5-2(収納部)	胡籙5-2の収納部(直接接合せず),2条一括沈線による施文(直弧文風,5-1に類似),上端面に2点一括刺突文による施文,表面中央に不明瞭だが剥離痕(5-1同様の紐状結び目？),調整不明瞭		3496	5トレ
	(8.2)×(8.0)×高(12.8)	密 やや砂粒目立つ ～4mm/片多量,透中量,白中量,赤少量,赤色チャ1点,雲微量	【黄橙(or橙)】 外・内:5YR6/6橙～10YR6/4にぶい黄橙,断:10YR5/2灰黄褐 〈良好〉	S16W16G9(3a層)	西造出南西部
図5-40･41	靫5-1	奴凧形の靫,基部・体部大きく欠損,2条一括沈線と2点一括刺突文で外周を施文,上半内側は直弧状文風・下半内側は格子状に施文(格子の施文工具はやや細い),上端部に矢5本線刻(独立片逆刺鏃を表現,矢尻は矢印形・矢羽根は杏仁形・逆刺部を線刻,両面人物の線刻に類似),上端部裏面に補強突帯あり,不明瞭だが一部ハケ目残存,調査時は不明形象B・整理時は靫A		203 ,3175,3212,3245,3247,3376.3503,4164	5トレ
	復元幅(41.5)×復元奥行(16.0)×復元高(94.3)	やや密 やや砂粒目立つ ～10mm/片多量,透多量,白中量,赤中量,赤色チャ微量,雲微量	【橙】 外:5YR5/6明赤褐～7.5YR6/6橙,断:7.5YR6/6橙 〈やや良好〉	S16W16G4･11･12･20(No.119主体･106･110･166)	西造出南西部
図5-42-1	蓋5-1(立飾部)	立飾部上端付近,3条一括沈線(しっかり深い沈線),蓋5-2(立飾部)･5-19(笠部)とほぼ同一地点出土		4083	5トレ
	(5.0)×高(10.3)/2.1	密 ～3mm/片多量,透中量,白中量,赤少量,雲微量	【橙】 外:7.5YR6/6にぶい橙,断:5YR6/6橙 〈良好〉	S8W8G39(3d層)	2段目斜面
図5-42-2	蓋5-2(立飾部)	用形文・3条一括沈線,蓋5-19(笠部)・5-1(立飾部)と同一地点出土,蓋5-4・5-5に胎土類似するが出土地点違う,調整不明瞭		3062	5トレ
	(14.4)×高(18.1)/2.5	やや密 大きめの砂粒目立つ ～5mm/片多量,透多量,白多量,赤中量,雲微量,黒チャ少量	【橙】 外:5YR6/6橙,断:10YR6/2灰黄褐 〈良好〉	S8W8G48(No.48)	2段目斜面
図5-42-3	蓋5-3(立飾部)	用形文・3条一括沈線,調整不明瞭,蓋5-7(立飾部)と同一地点出土		3168, 3476	5トレ
	(21.0)×高(15.0)/2.5	やや密 少し大きめの砂粒目立つ ～5mm/片中量,透多量,白中量,赤中量,雲微量,黒チャ少量	【橙】 外:5YR6/6橙,断:7.5YR5/3にぶい褐 〈良好〉	S16W16G11(No.101),S16W12G50	西造出南半部
図5-42-4	蓋5-4(立飾部)	用形文・3条一括沈線,飾板内側の鰭部はヘラ状工具で鋭く切り込む,蓋5-5(立飾部)に類似		3003, 3004	5トレ
	(19.7)×高(28.7)/2.7	やや密 やや砂粒目立つ ～5mm/片多量,透多量,白多量,赤多量,雲微量	【橙】 外:5YR6/6橙,断:10Y5/1褐灰 〈良好〉	S12W20(No.3･4,埋戻土)	西造出西側斜面
図5-42-5	蓋5-5(立飾部)	用形文・3条一括沈線,蓋5-4(立飾部)に類似,蓋5-6(立飾部)と同一地点出土		3058	5トレ
	(24.0)×高(27.0)/2.2	やや密 やや砂粒目立つ ～4mm/片多量,透中量,白多量,赤中量,雲微量,黒(チャか)少量	【橙】 外:5YR6/6橙,断:10Y5/2灰黄 〈良好〉	S12W20G59･60～S12W24G3･4･12(No.44)	西造出西側斜面
図5-43-6	蓋5-6(立飾部)	飾板受部完存(飾板は大きく欠損,軸部欠損),用形文・3条一括沈線,飾板受部外面にヘラ状のキズ,蓋5-5(立飾部)と同一地点出土,整理時は:蓋軸部B		3037, 3058	5トレ
	(24.2)×(28.0)×(17.3)	密 ～3mm/片中量,透中量,白中量,赤中量,雲微量,赤色チャ微量	【橙(or黄橙)】 外:5YR6/6橙～10YR7/4にぶい黄橙,断:10Y5/2灰黄褐～5YR5/2灰褐 〈やや良好〉	S12W20G53(No.24,3c層),S12W20G59･60～S12W24G3･4･12(No.44)	西造出西側斜面
図5-44～48-7	蓋5-7(立飾部)	一部欠損するが立飾部全体復元(軸部完存),用形文・3条一括沈線(3条のうち1本細い),調整不明瞭,飾板受部径17.8cm,軸部径6.8cm,軸部長18.0cm,整理時は蓋軸部A,蓋5-3と同一地点出土		3167,3168(主体)/3324,3326,3478,3488,3519	5トレ
	56.9×(53.0)×48.7	密 砂粒やや多い ～8mm/片やや多量,透中量,白やや多量,赤中量,雲微量,黒(チャか)少量	【橙(or黄橙)】 外:5YR6/6橙,断:2.5YR5/4にぶい赤褐 〈良好〉	S16W16G11(No.101主体,3a層)/S16W12G51･52･58･61(No.128･130,3a層),S8W12G15(3b層)	西造出南半部
図5-49-8	蓋5-8(立飾部)	立飾部上端,2条一括沈線(他に2条一括沈線は5-9だけ,同一個体か),3条一括沈線の個体と胎土違う(1条ずつ施文するグループに近い),調整不明瞭		195 ,3829	5トレ
	(9.1)×高(13.2)/1.9	密 ～5mm/片中量,透多量,白中量,赤少量,雲微量	【黄橙】 外:7.5YR7/4にぶい橙～10YR7/4にぶい黄橙,断:10YR6/1灰黄褐 〈良好〉	S12W8(表土),S12W16(2･3層)	2段目斜面か
図5-49-9	蓋5-9(立飾部)	用形文・外周2条一括沈線・内郭4線帯(2条一括沈線を2段),3条一括沈線の個体とは胎土違う(1条ずつ施文するグループに近い),他に2条一括沈線は5-8だけ(蓋5-8と同一個体か),調整不明瞭		3321	5トレ
	(15.1)×高(12.2)/2.7	密 やや砂粒多い ～3mm/片中量,透中量,白中量,赤中量,雲微量	【黄橙】 外:7.5YR7/6橙,断:10YR6/3にぶい黄橙 〈良好〉	S16W12G20(No.126,3a層)	1段目テラス円筒5-29西側
図5-49-10	蓋5-10(立飾部)	用形文・沈線は1条ずつ施文(外周2線帯・内郭2～4線帯),沈線の前にハケ調整(9本/1cm)		3067, 222	5トレ
	(20.0)×高(22.3)/2.4	密 ～5mm/片中量,透多量,白中量,赤少量,雲微量,黒チャ少量	【黄橙】 外:7.5YR6/6橙,断:2.5Y6/2灰黄 〈やや軟質〉	S16W8G33(No.50,3b層),S16･S20W12(3層)	2段目斜面
図5-50-11	蓋5-11(立飾部)	用形文・沈線は1条ずつ施文(外周2線帯・内郭2～4線帯),沈線の前にハケ調整(9本/1cm),蓋5-12(立飾部)と同一個体か		3063, 193, 837	5トレ
	(12.6)×高(30.3)/2.4	密 ～5mm/片中量,透多量,白中量,赤少量,雲微量	【黄橙】 外・内:7.5YR6/6橙,断:2.5Y6/2灰黄 〈良好〉	S8W8G51(No.47,3b層),S16W16(3層),5トレ排土	2段目斜面
図5-50-12	蓋5-12(立飾部)	用形文・沈線は1条ずつ施文(2線帯のみ確認),沈線の前にハケ調整(8～9本/1cm),軸部内面と飾板受部外面にヘラ状工具によるキザミ目(キズ)をつける,軸部は内面の観察から外傾接合か,飾板受部径20.0cm,軸部径最大9.6cm・最小5.0cm,軸部長21.0cm,整理時は蓋軸部C,蓋5-11(立飾部)と同一個体か		3066	5トレ
	(34.4)×高(41.1)	密 ～3mm/片少量,透中量,白中量,赤中量,雲微量	【黄橙(or橙)】 外:7.5YR7/8黄橙～7.5YR6/6橙,内:10YR7/4にぶい黄橙,断:10YR7/2にぶい黄橙 〈やや良好〉	S12W12G1･2(No.49,3b層)	1段目テラス円筒5-12東側
図5-51-13	蓋5-13(笠部)	軸受部下部,貼り付け突帯あり,外面ナデ・内面ナデ・指オサエか,蓋5-16(笠部)に胎土類似		3242	5トレ
	(16.3)×(7.5)×(9.4)	やや密 大きい砂粒目立つ ～15mm/片多量,透中量,白中量,赤中量,雲微量,赤色チャ1個	【橙】 外・内:5YR6/6橙,断:7.5YR6/3にぶい褐 〈良好〉	S16W12G37(No.118)	西造出南東部
図5-51-14	蓋5-14(笠部)	笠部端部に突帯状の貼り付け(やや低く小さい),全体に他の笠部に比べて薄くやや小さい,調整不明瞭		3328	5トレ
	(8.7)×(5.9)×(3.0)	密 ～5mm/片多量,透中量,白多量,赤少量,雲微量	【黄橙】 外・内:7.5YR6/6橙,断:2.5Y6/3にぶい黄 〈やや軟質〉	S12W12G59･S12W16G3(No.132,須恵器北側大甕付近)	西造出北半部
図5-51-15	蓋5-15(笠部)	笠部端部に突帯状の貼り付け(指オサエにより中央に稜線できる),調整不明瞭		3118	5トレ
	(13.9)×(5.4)×(5.4)	密 やや砂粒目立つ ～3mm/片多量,透多量,白多量,赤少量,雲微量	【黄橙】 外・内:7.5YR6/6橙～7.5YR7/6橙,断:10YR7/3にぶい黄橙 〈やや軟質〉	S12W12G21(No.88)	西造出北東部
図5-51-16	蓋5-16(笠部)	笠部端部に突帯状の貼り付け(薄く扁平で幅広な貼り付け,指オサエで中央に稜線),蓋5-13(笠部)に胎土類似,調整不明瞭		3165	5トレ
	(15.0)×(9.0)×(5.4)	密 ～3mm/片中量,透多量,白中量,赤中量,雲微量,黒(チャか)少量	【橙(or黄橙)】 外・内:5YR6/4にぶい橙,断:7.5YR5/3にぶい褐 〈良好〉	S16W16G10(No.100)	西造出南半部
図5-51-17	蓋5-17(笠部)	軸受部欠損,笠部端部に帯状の貼り付け,径5.0cmのスカシ孔あり,内面上半に笠部貼り付けの際のキザミ目(工具痕,一部外面貼り付け部にもキザミ目),笠部外面ナデ調整(台部外面調整不明瞭),全体残存25%(底部残存25%),反転復元,整理時は蓋台部C		3053, 3054	5トレ
	笠部径47.2×底部径19.8×高(29.6)	やや密 やや砂粒目立つ ～10mm/片多量,透中量,白多量,赤多量,雲微量	【黄橙(or黄橙)】 外:7.5YR6/6橙,内:7.5YR6/8橙,断:10YR6/2灰黄褐 〈やや軟質〉	S20W16G49･57～S16W16G64～S20W20G1(No.40)	西造出南側斜面
図5-52-18	蓋5-18(笠部)	軸受部欠損,笠部端部に帯状の貼り付け(指オサエのため稜線できる),径4.4cmのスカシ孔あり,内面に笠部貼り付けの際のキザミ目(工具痕),笠部外面ナデ調整(台部外面調整不明瞭),全体残存40%(底部残存50%),整理時は蓋台部B		3103,3104(主体)/3100,205,727	5トレ
	笠部径44.0×底部径17.0×高(31.4)	密 やや大きめの砂粒目立つ ～10mm/片多量,透多量,白中量,赤中量,雲微量,黒(チャか)少量	【黄橙(or橙)】 外・内:7.5YR7/6橙～7.5YR6/4にぶい橙,断:10YR7/4にぶい黄橙 〈やや軟質〉	S12W12G32･40(No.81,3a層)/S20W12G58(No.78),S12W16～20(3層),S8W12(3層)	西造出東半部
図5-52-19	蓋5-19(笠部)	軸受部欠損,頸部に突帯1条貼り付け,径5.0cmのスカシ孔2箇所(対面),笠部端部に帯状の貼り付け(指オサエのため稜線できる),笠部上に3.1×0.5cmの長方形の穴あり(焼成前),台部外面・内面にキザミ目(ヘラ状の工具痕,笠部貼り付け時のキズか),外面調整不明瞭(斜めの強いナデか)・内面強いナデと指オサエ,蓋5-1・2(立飾部)と同一地点出土,整理時は蓋台部A		3061, 4082, 4083	5トレ
	笠部径44.1×底部径16.6×高(34.8)	密 大きめの砂粒あり ～8mm/片やや多量,透中量,白中量,赤少量,雲微量,黒(チャか)微量	【黄橙】 外・内・断:7.5YR7/4にぶい橙～7.5YR7/6橙 〈良好〉	S8W8G38･39･48(No.48,3d層)	2段目斜面
図5-53-1	不明形象(人物？)	人物の垂髪か(帯の可能性もあり),胆曲部があるので垂髪の形状に近い,5～6条の襞刻(2条一括沈線か),裏面は剥離面		3182	5トレ
	4.5×(10.0)/1.1	密 ～3mm/片やや多量,透やや多量,白中量,赤中量,雲微量,黒少量	【橙】 外・内・断・剥離面:5YR6/6橙 〈良好〉	S16W16G11(No.109,3a層,草摺周辺)	西造出南西部
図5-53-2	不明形象(帯)	人物の帯か,片方の端部は三角形状になる(帯の端部),3条一括沈線と2点一括刺突文で施文,裏面は剥離面,上下左右不明,同一個体片複数あり		3476	5トレ
	3.8×(12.4)/1.0	密 ～3mm/片中量,透中量,白やや多量,赤中量,雲微量,黒微量	【橙】 外:2.5YR6/6橙,剥離面:7.5YR4/2灰褐 〈良好〉	S16W12G50(3a層,両手をあげる人物周辺)	西造出南半部
図5-53-3	不明形象(帯)	人物の帯か,片方の端部は三角形状(帯の端部),4～5条の線刻(2条一括沈線の可能性大),裏面は剥離,上下左右不明,同一個体片多数(図5-3-1に似る)		3187	5トレ
	4.4×(13.7)/1.0	密 ～2mm/片やや多量,透中量,白やや多量,赤少量,雲微量,黒微量	【橙】 外:2.5YR6/6橙,剥離面:5YR5/6明赤褐 〈良好〉	S16W16G19(No.109,3a層,草摺周辺)	西造出南西部
図5-53-4	不明形象(帯)	人物の帯か(馬の可能性もあり),1条ずつの沈線で綾杉文を施文,裏面は剥離面,上下左右不明,同一個体片複数あり		3136	5トレ
	3.9×(5.2)×0.6	密 ～2mm/片中量,透中量,白中量,赤微量,雲微量,黒微量	【橙】 外:5YR6/6橙,剥離面:7.5YR5/2灰褐 〈良好〉	S16W16G2(No.95,3a層)	西造出南西部
図5-53-5	不明形象(馬の部品？)	馬あるいは人物の部品,細い帯状の粘土で輪を作り押しつぶして製作,この部品は完存		3400	5トレ
	5.2×2.1/2.1	密 砂粒細かい ～2mm/片少量,透少量,白中量,赤少量,雲微量,黒少量	【黄橙(or黄橙)】 外:7.5YR7/6橙 〈良好〉	S12W12G48(No.182,3a層)	西造出中央部
図5-53-6	不明形象(美豆良？)	人物の美豆良か,2本の粘土紐をねじって製作,裏表不明(何かに貼り付いていたような平らな部分があるがはっきりとした剥離面には見えない),図5-53-7と同一個体か(同一地点出土,反対側の美豆良か),整理時は人物その他J		3349	5トレ
	3.3×(9.0)×2.7	密 やや砂粒目立つ ～3mm/片中量,透やや多量,白やや多量,赤中量,雲微量,黒少量	【黄橙(or黄褐)】 外・断:7.5YR7/6橙 〈良好〉	S12W12G56(No.144,3a層)	西造出中央部
図5-53-7	不明形象(美豆良？)	人物の美豆良か(先端部欠損),2本の粘土紐をねじって製作(うち1本の粘土紐欠損),裏表不明(何かに貼り付いていたような平らな部分があるがはっきりとした剥離面には見えない),図5-53-6と同一個体か(同一地点出土,反対側の美豆良か),整理時は人物その他J		3349	5トレ
	2.6×(7.0)×2.6	密 やや砂粒目立つ ～3mm/片中量,透やや多量,白中量,赤やや多量,雲微量	【黄橙(or黄褐)】 外・断:7.5YR7/4にぶい橙 〈良好〉	S12W12G56(No.144,3a層)	西造出中央部
図5-53-8	不明形象(美豆良？)	人物の美豆良か(中実),側面の一部に剥離痕あり,少しねじりながら指オサエで調整,特徴があまりないので美豆良とは決めがたい,図5-53-6・7とは違う形態		764	5トレ
	2.7×(7.0)×2.3	密 ～2mm/片少量,透やや多量,白中量,赤微量,雲微量	【黄橙(or黄褐)】 外:7.5YR7/4にぶい橙,断・剥離面:10YR7/2にぶい黄橙 〈やや軟質〉	S12W16(2～3層)	西造出北西部
図5-53-9	不明形象(家？)	家の基部か(高床の基部か),家基部なら隅部付近にあたる(隅部の稜線あり),家5-1と同一地点出土(家5-1に胎土似る,同一個体の可能性),調整不明瞭		3217	5トレ
	(13.6)×(8.5)×2.6	やや粗い ～4mm/片多量,透多量,白中量,赤中量,雲微量,黒(チャか)少量	【桃(or橙)】 外:2.5YR6/6橙,内:2.5YR5/6明赤褐,断:2.5YR5/2灰赤 〈良好〉	S16W16G27(No.111不明形象G家,3a層)	西造出南西部
図5-53-10	不明形象(人物？)	不明形象(人物の帽子の頂部？),内側空洞,2点一括刺突文で縦方向に3列施文(正面に施文,裏面には施文なし)		3140	5トレ
	(4.1)×(5.4)×(4.6)	密 砂粒ほとんどなし ～2mm/片中量,透少量,白中量,赤少量,雲微量,黒少量	【橙】 外:5YR6/6橙,内:2.5YR5/4にぶい赤褐 〈良好〉	S16W16G1(No.97,3a層)	西造出中央部
図5-53-11	不明形象(馬　壺鐙か)	馬5-1の壺鐙か(この部品は完存),裏面は平坦な剥離面,2点一括刺突文で施文(縦方向1列・横方向1列,一方の側面には施文なし,ほぼ正方形の刺突工具),壺鐙とすると刺突の施文位置から右側面に取り付くか		3396	5トレ
	4.0×4.9×3.5	密 ～4mm/片少量,透やや多量,白やや多量,赤微量,雲微量,黒微量	【にぶい黄褐(or黄褐)】 外・内:7.5YR6/4にぶい橙 〈良好〉	S16W12G44(No.179,3a層,馬5-1周辺)	西造出南東部
図5-53-12	形象埴輪基部5-1(人物)	人物埴輪の基部,据付坑出土だが底部片接合できず,上面はドーム状になる形態(上面に脚部の剥離痕),突帯1条,円形スカシ孔,調査時は不明形象台円筒J		3425	5トレ
	復元径24.0×高(6.7)	密 ～3mm/片中量,透少量,白中量,赤中量,雲微量,黒少量	【にぶい橙(or橙)】 外・内・断:5YR5/4にぶい赤褐 〈やや軟質〉	S16W16G3(No.201形象基部据付坑)	西造出南半部
図5-53-13	形象埴輪基部5-2	形象円筒基部(上部欠損のため種類不明),底部に突帯1条,内外面ナデ調整か,底部残存30%,一部反転復元,調査時は不明形象台円筒C,据付坑内出土		3341～3343	5トレ
	底部径29.0×高(7.4)	密 ～5mm/片中量,透少量,白中量,赤中量,雲微量,黒少量	【橙】 外・内:5YR5/6明赤褐,断:5YR5/3にぶい赤褐 〈良好〉	S16W12G49(No.138形象基部据付坑)	西造出中央部
図5-53-14	形象埴輪基部5-3	形象埴輪の円筒基部(V群系円筒埴輪に類似),上部欠損のため種類不明(周囲に靫5-1が出土しており靫の可能性),底部接合できず,突帯1条残存,天地不明(突帯の状況でこの向きに実測,突帯上面はきれいにナデ・下面はナデ不十分,接合痕から倒立技法か),調整不明瞭,一部反転復元,調査時は不明形象台円筒B		3247,3248,3251(主体)/3252,3253	5トレ
	最大幅20.0×高(23.7)	密 やや大きめの砂粒含む ～7mm/片少量,透中量,白やや多量,赤中量,雲微量,黒(チャか)少量,砂岩？少量	【橙】 外・内:2.5YR6/6橙,断:5YR5/4にぶい赤褐 〈やや良好〉	S16W16G4･5(No.119,3a層)/S16W12G60(No.119据付坑)	西造出南半部
図6-1-1	Ⅳ群系円筒埴輪(紀伊型)	口縁部,上から3段目・突帯2条分残存(低いM字形,上から1条目はかなり低い),上から3段目にスカシ孔(やや不明瞭,上から1・2段目にはスカシ孔なし),外面は縦ハケ1次調整・横ハケ2次調整(4本/1cm),内面は口縁部に横ハケ(部分的に縦ハケか,不明瞭),口縁部の一部が黒班状,口縁部高7.7cm,突帯間13.4cm,反転復元		893, 894, 919, 1001, 1169	1トレ

	口径42.2×高(25.9)	密 やや大きめの砂粒目立つ ～14mm/片多量,透少量,白中量,赤微量,黒微量,雲微量	【橙】 外・内・断:5YR6/8橙 〈やや良好〉	S12E12G34・35・42・50・51/1段目テラス円筒12	1段目テラス円筒1-12(東造出側)
図6-1-2	Ⅳ群系円筒埴輪(紀伊型)	口縁部,上から5段目・突帯4条分残存(下半部欠損),上から3・4段目にスカシ孔,外面は縦ハケ1次調整・横ハケ2次調整,内面は縦～斜めハケ(口縁部内面は横ハケ,4本/1cm),突帯貼り付け部内面に指オサエ・ナデ(突帯貼り付け時か),口縁部高7.0cm,突帯間8.8・9.2・7.5cm(上から),口縁部残存90%		1270,1272(主体)/1137,1269	1トレ
	口径37.0×高(41.0)	密 ～5mm/片やや多量,透中量,白やや多量,赤少量,黒微量,雲微量	【橙】 外・内・断:5YR6/8橙～5YR5/8明赤褐 〈良好〉	S8E12G44・45・52(図面20,1段目テラス円筒2・北辺円筒1の間・1段目テラス円筒3)/S8E12G52,S8E12G53(図面20,北辺円筒1)	1段目テラス円筒1-3か(東造出側)
図6-1-3	Ⅳ群系円筒埴輪(紀伊型)	口縁部,上から2段目・突帯1条分残存,スカシ孔確認できず,外面は縦ハケ1次調整・横ハケ2次調整,内面は横ハケ(5～6本/1cm),口縁部高8.5cm,口縁部残存50%,反転復元		1311, 1319, 1320, 1323, 1325	10トレ
	口径35.0×高(17.3)	密 ～5mm/片やや多量,透中量,白やや多量,赤微量,黒(チャか)微量,雲微量	【橙】 外・内:5YR6/8橙,断:7.5YR5/3にぶい褐～5YR6/8橙 〈良好〉	S36E20～S36E24(図面73)	1段目テラス円筒か
図6-1-4	Ⅳ群系円筒埴輪(紀伊型)	底部,下から5段目・突帯4条分残存(ほぼ縦半分残存),下から2・3段目にスカシ孔,底部面あり,外面は縦ハケ1次調整・横ハケ2次調整(5本/1cm,底部付近に強い斜めナデ,一部板ナデか),内面は底部斜めハケ・中位横ハケ(中位にハケ後の縦ナデあり,上位に横ナデ？,突帯貼り付け部内面に横方向のナデあり),最大径(28.0)cm,底部高15.5cm,突帯間(下から)10.0・10.0・10.0cm,底部残存50%		172～177,185	2トレ
	底部径19.8×高(50.0)	やや密 やや砂粒多い ～10mm/片多量,透中量,白多量,赤微量,黒微量,雲微量	【橙】 外・内:5YR6/8橙～10YR5/2灰黄褐,断:5YR5/6明赤褐 〈良好〉	S0E24,S0E24(5層)	1段目斜面～基壇テラス(東造出側)
図6-2-5	Ⅳ群系円筒埴輪(紀伊型)	口縁部,上から5段目・突帯4条分残存,(体部ほぼ縦半分残存),上から2・3段目にスカシ孔,外面は縦ハケ1次調整・横ハケ2次調整(4本/1cm,横ハケは粗く縦ハケよく残る),内面は縦ハケ(口縁付近は斜めハケ),口縁部高6.5cm,突帯間10.8・10.5・9.5cm(上から),口縁部残存20%,反転復元		1151, 1226	1トレ
	口径31.8×高(39.4)	やや粗い 細かい砂粒目立つ ～5mm/片多量,透多量,白やや多量,赤少量,黒微量,雲微量	【にぶい橙】 外:5YR6/6橙～5YR6/4にぶい橙,内:5YR6/6橙～7.5YR6/6橙,断:10YR6/4にぶい黄橙 〈良好〉	S16E12(1段目テラス円筒25)	1段目テラス円筒1-25(東造出側)
図6-2-6	Ⅳ群系円筒埴輪(紀伊型)	口縁部,上から5段目・突帯4条分残存(体部30%残存),上から2・3段目にスカシ孔,外面縦ハケ1次調整・横ハケ2次調整(4本/1cm,横ハケ粗く縦ハケよく残る),内面縦ハケ,口縁部高6.5cm,突帯間11.3・12.2・12.8cm(上から),口縁残存10%,反転復元		898, 951	1トレ
	口径32.0×高(49.0)	やや粗い 細かい砂粒多い ～8mm/片多量,透やや多量,白やや多量,赤少量,黒微量,雲微量	【にぶい橙】 外:7.5YR6/6橙,内:7.5YR6/6橙～7.5YR5/4にぶい褐,断:5YR6/8橙～7.5YR6/6橙 〈良好〉	S12E12G55,S12E12(1段目テラス円筒19)	1段目テラス円筒1-19(東造出側)
図6-2-7	Ⅳ群系円筒埴輪(紀伊型)	口縁部,上から3段目・突帯2条分残存,スカシ孔確認できず(上から2段目にはない可能性大),外面は縦ハケ1次調整・横ハケ2次調整(5本/1cm),内面は斜めハケ(口縁部付近に横ハケあり),口縁部付近一部が黒斑状になる,口縁部高8.0cm,突帯間9.8cm,口縁部残存60%,反転復元		948	1トレ
	口径35.6×高(20.8)	やや蜜 やや細かい砂粒含む ～2mm/片やや多量,透少量,白中量,黒微量,雲微量	【にぶい橙】 外・内:5YR6/6橙,断:7.5YR6/4にぶい橙 〈良好〉	S12E12(1段目テラス円筒15)	1段目テラス円筒1-14か(東造出側)
図6-2-8	Ⅳ群系円筒埴輪(紀伊型)	底部,下から2段目・突帯1条分残存(突帯一部上に上がる),下から2段目にスカシ孔(わずかに残存),底部面あり,外面は縦ハケ1次調整(4本/1cm,2段目以上欠損のため横ハケは確認できず),内面は縦ハケ(指オサエあり),底部高15.5cm,最大径(23.6)cm,底部残存100%		3575(主体),3726	5トレ
	底部径20.2×高(18.8)	やや粗い 細かい砂粒多い ～20mm/片多量,透多量,白やや多量,赤やや多量,黒微量,雲微量	【にぶい橙】 外・内・断:7.5YR5/4にぶい褐～5YR5/6明赤褐 〈良好〉	S12W12G25(北辺円筒4据付坑)	西造出北辺円筒5-北4
図6-2-9	Ⅳ群系円筒埴輪(紀伊型)	底部,下から2段目・突帯2条分残存,不明瞭だが下から3段目にスカシ孔の可能性あり(2段目にはスカシ孔入らない),底部若干面あり,外面は縦ハケ1次調整・横ハケ2次調整(4本/1cm,底部板ナデ？),内面は縦ハケ(指オサエあり),底部付近一部が黒斑状になる,底部高18.5cm,最大径(25.3)cm,突帯間9.0cm,底部残存100%		3567, 3620, 4361, 4377	2トレ
	底部径20.2×高(28.5)	やや粗い 細かい砂粒目立つ ～10mm/片多量,透やや多量,白やや多量,赤少量,黒微量,雲微量	【にぶい橙】 外・内:7.5YR6/4にぶい橙,断:7.5YR7/6橙 〈やや軟質〉	S12W12G10(東列13据付坑),S12W12G2・10(3a層,3b層)	1段目テラス円筒5-13(西造出側)
図6-3-10	Ⅳ群系円筒埴輪(紀伊型)	底部,1段目のみ(突帯確認できず),底部径がかなり小さく蓋形埴輪の笠部基部の可能性も,ただしⅣ群系の胎土の蓋形埴輪は他に確認できていない),底部あまり面を持たず丸みあり,調整不明瞭(ハケなしか,内面の底部付近は強いナデと指オサエ),最大径(17.5)cm,底部残存60%		1403	7トレ
	底部径14.7×高(10.5)	密 ～5mm/片中量,透中量,白中量,赤多量,雲微量	【橙】 外・内:5YR6/8橙,断:7.5YR5/2灰褐～5YR6/8橙 〈良好〉	S24W24(図面60)	基壇テラス円筒7-2
図6-3-11	Ⅳ群系円筒埴輪(紀伊型)	底部,1段目のみ(突帯確認できず),底部若干面あり(やや丸み,底部に圧痕あり),外面は調整不明瞭・内面は板ナデか(不明瞭),最大径(21.6)cm,3個体にわかれそれぞれ接合しないが合わせると底部残存90%,一部反転復元		4805, 4802	15トレ
	底部径20.8×高(12.5)	やや密 砂粒目立つ ～2mm/片やや多量,透中量,白やや多量,赤微量,黒少量,雲微量	【橙(orにぶい橙)】 外・内:5YR6/8橙～5YR6/6橙,断:10YR5/3にぶい黄褐 〈やや軟質〉	N12W12G38(1段目テラス円筒3据付溝),N12W12G38(1段目テラス円筒2,2b層)	1段目テラス円筒15-3
図6-3-12	Ⅳ群系円筒埴輪(紀伊型)	底部,1段目のみ(突帯確認できず),底部面あり(やや丸み,底部に圧痕あり),外面は調整不明瞭・内面は不明瞭(一部指オサエ),最大径(19.5)cm,底部残存40%,反転復元,図6-3-13と同形態(同一個体の可能性もあり)		4811, 4812, 4814	15トレ
	底部径18.4×高(10.5)	やや粗い 細かい砂粒多い ～5mm/片多量,透やや多量,白やや多量,赤中量,黒微量,雲微量	【にぶい橙(or橙)】 外:7.5YR6/6橙,内:5YR6/8橙,断:10YR6/3にぶい黄橙 〈良好〉	N12W12G31(1段目テラス円筒5据付溝)	1段目テラス円筒15-5
図6-3-13	Ⅳ群系円筒埴輪(紀伊型)	底部,1段目のみ(突帯確認できず),底部斜めに面あり(底部に圧痕あり),内外面は調整不明瞭,最大径(20.8)cm,底部残存30%,反転復元,図6-3-12と同形態(同一個体の可能性もあり)		4815, 4817, 4814	15トレ
	底部径20.0×高(8.5)	やや粗い 細かい砂粒多い ～3mm/片多量,透やや多量,白多量,赤中量,黒少量,雲微量	【にぶい橙(or橙)】 外・内・断:7.5YR6/6橙 〈やや良好〉	N12W12G32(1段目テラス円筒6据付溝),N12W12G31(1段目テラス円筒5付近)	1段目テラス円筒15-6
図6-3-14	Ⅳ群系円筒埴輪(紀伊型)	底部,下から1段目・突帯1条分残存,底部丸み(一部幅0.8cmの面あり),内外面は板ナデ(不明瞭,内面底部付近には指オサエ),突帯貼り付け部の内面には横方向のナデあり,最大径(22.6)cm,底部高14.3cm,底部残存100%,一部反転復元		4809(主体),4804,4808	15トレ
	底部径20.8×高(15.5)	密 やや大きめの砂粒目立つ ～10mm/片中量,透やや多量,白やや多量,赤中量,黒微量,雲微量	【橙】 外・内:5YR6/8橙,断:10YR6/2灰黄褐 〈やや良好〉	N12W12G39(1段目テラス円筒4据付溝),N12W12G38・39(1段目テラス円筒3・4,2b層)	1段目テラス円筒15-4
図6-3-15	Ⅳ群系円筒埴輪(紀伊型)	底部,1段目のみ(突帯確認できず),底部面あり(若干重みで肥厚する,一部圧痕あり),内外面は板ナデ(不明瞭,外面底部付近に一部指オサエ),最大径(26.8)cm,底部残存60%,反転復元,周囲に朝顔形埴輪片出土(胎土が近いので15-2は朝顔形埴輪の基部の可能性あり)		4803	15トレ
	底部径21.8×高(10.5)	やや粗い 砂粒目立つ ～10mm/片多量,透中量,白やや多量,赤微量,黒(チャか)少量,雲微量	【にぶい橙(or橙)】 外・内:5YR6/6橙,断:7.5YR6/4にぶい橙 〈良好〉	N12W12G37(1段目テラス円筒2据付溝)	1段目テラス円筒15-2
図6-3-16	Ⅳ群系円筒埴輪(紀伊型)	底部,下から1段目のみ(突帯確認できず),底部面あり(若干重みで押しつぶされる),内外面は板ナデ後に縦～斜めハケ(ハケ不明瞭,5本/1cm),最大径(25.4)cm,底部残存50%,一部反転復元		180, 181	2トレ
	底部径23.8×高(16.8)	やや粗い 細かい砂粒多い ～10mm/片多量,透中量,白やや多量,赤やや多量,黒(チャか)少量,雲微量,砂岩1点	【にぶい橙(or橙)】 外・内:5YR6/6橙,断:5YR5/3にぶい赤褐 〈良好〉	S0E28	基壇テラス～基壇斜面
図6-3-17	Ⅳ群系朝顔形埴輪(紀伊型)	口縁部,上から4段目・突帯3条残存,外面は縦ハケ1次調整・横ハケ2次調整(5本/1cm),内面は横～斜めハケ(不明瞭,頸部内面に指オサエ),円筒部径31.6cm,頸部径19.8cm,口縁部高7.8cm,突帯間9.0・15.4cm(上から),ほとんど個別の破片を図上復元		1278/918,1038,1039/999,123	1トレ
	口径42.0×高(37.2)	やや粗い 細かい砂粒多い ～5mm/片やや多量,透やや多量,白やや多量,赤微量,黒微量量,雲微量	【橙】 外:5YR6/8橙,内:5YR6/8橙～7.5YR6/6橙,断:10YR 7/4にぶい黄橙 〈やや良好〉	1段目テラス円筒10(S12E12G33・34・41・42,図面20)/S12E12G41・42(1段目テラス円筒9・10・11)/S12E12G33・41	1段目テラス円筒1-10(東造出側)
図6-3-18	Ⅳ群系朝顔形埴輪(紀伊型)	口縁部,外面は縦ハケ1次調整・横ハケ2次調整,内面は横～斜めハケ(5本/1cm),頸部径19.0cm,円筒部径21.8cm,口縁部高7.6cm,突帯間8.0・15.0cm(上から),口縁部の一部が若干黒斑状になる,口縁部残存50%,墳丘東側の1段目テラス(2段目斜面側)で出土(1段目テラス円筒埴輪列より西側, 墳丘上からの転落か)		1459(主体),1087	1トレ
	口径41.5×高(32.7)	密 ～10mm/片やや多量,白多量,赤少量,透少量,雲微量	【にぶい橙(or橙)】 外:5YR6/6橙,内:7.5YR6/6橙,断:5YR6/6～7.5YR6/6 〈良好〉	S12E10(図面11)	1段目テラスの2段目斜面側(東造出側)
図6-4-19	Ⅴ群系円筒埴輪(畿内型)	ほぼ完存(80%残存),4条5段,須恵質(下半一部焼成やや不十分),下から2・4段目にスカシ孔,外面口縁部に波状のヘラ記号,底部面あり(一部ヘラで削る),外面は縦～斜めハケ1次調整(6本/1cm,口縁部付近は8か～9本/1cm),底部外面は板ナデ(一部面取り状),内面は縦ナデ・指オサエ,口縁部高11.0cm,底部高17.7cm,突帯間10.5・10.5・13.5cm,口縁部残存80%・底部残存100%		3317(口縁主体)/3568,3569(底部)/3312～3316,3318,3570～3573,3642,4018	5トレ
	口径29.5×底部径25.6×高63.2	密 ～11mm/片中量,透少量,白中量,黒少量,雲微量	【灰】 外上半・内・断:2.5Y6/2灰黄,外下半:2.5Y6/3にぶい黄～2.5Y5/1黄灰 〈良好・硬質〉	S12W8G59(No.123)/S8W12G15・16(東列9据付坑)/S8W12G15・16・23・24・43(東列9,No.123)	1段目テラス円筒5-9(西造出側)
図6-4-20	Ⅴ群系円筒埴輪(畿内型)	口縁部,上から4段目・突帯3条残存(体部は外周の30%残存),上から2・4段目にスカシ孔,外面は縦～斜めハケ1次調整(8本/1cm),内面は縦ナデ(口縁部付近は横方向の板ナデ,口縁部高9.8cm,突帯貼り付け部内面には横方向のナデ),突帯間11.0・10.5cm(上から),口縁部残存10%,反転復元		1412～1415,69	11トレ
	口径35.4×高(37.8)	密 ～5mm/片やや多量,透少量,白少量,黒微量,雲微量	【桃】 外・内:5YR7/4にぶい橙～2.5Y7/6橙,断:10YR5/2灰黄褐 〈良好〉	S20E32～S24E32(図面78),S24E28(3層か)	基壇斜面(基壇テラス円筒か)
図6-4-21	Ⅴ群系円筒埴輪(畿内型)	底部,須恵質,下から2段目・突帯1条分残存,外面は縦～斜めハケ1次調整(7本/1cm),内面は斜めナデ,底部外面は板ナデ,底部面なし(尖りぎみ),最大径(28.6)cm,底部高20.5cm,底部残存100%,一部反転復元		4820～4823,4835,4840	15トレ
	底部径24.2×高(25.0)	密 ～5mm/片やや多量,透中量,白中量,赤微量,黒少量,雲微量	【灰】 外・内:2.5Y6/2灰黄,断:10YR7/2にぶい黄褐 〈良好・硬質〉	N20W16G57・58～N20W20G1・2(基壇テラス円筒1据付坑),基壇テラス付近表採,N20W16表土	基壇テラス円筒15-1
図6-4-22	Ⅴ群系円筒埴輪(畿内型)	底部,下から3段目・突帯2条残存(3条目の貼り付け痕わずかに残る),突帯間11.0cm,外面は縦～斜めハケ1次調整(調整不明瞭,6～7本/1cm),内面は縦ナデ(1条面の突帯貼り付け部内面に指オサエ),底部ほとんど面なし(底部に圧痕あり),最大径(24.6)cm,底部高17.0cm,底部残存100%,一部反転復元		826, 827, 1455	2トレ
	底部径22.0×高(39.5)	密 やや大きめの砂粒含む ～15mm/片中量,透やや多量,白中量,赤中量,雲微量	【黄褐(or桃)】 外:7.5YR7/6橙～2.5Y6/2灰黄,内:7.5YR7/6,断:2.5Y6/2 〈やや軟質〉	S0E28(図面40・図面48)	基壇テラス円筒2-1
図6-5-23	Ⅴ群系円筒埴輪(畿内型)	底部,1段目のみ(突帯確認できず),焼成は土師質,外面は斜めの板ナデ(不明瞭),内面は斜めナデ(一部板ナデか),底部斜めの面あり,最大径(23.8)cm,底部残存60%,一部反転復元		4831, 4832, 4840	15トレ
	底部径22.5×高(15.2)	密 やや大きめの砂粒あり ～8mm/片中量,透多量,白中量,赤やや多量,黒少量,雲微量	【桃】 外・内:5YR6/4にぶい橙,断:5YR5/3にぶい赤褐 〈やや良好〉	N20W16G52・53(基壇テラス円筒3据付坑),N20W16表土	基壇テラス円筒15-3
図6-5-24	Ⅴ群系円筒埴輪(畿内型)	底部,下から2段目・突帯1条残存,現状ではスカシ孔確認できず,外面は調整不明瞭(一部斜めハケか),内面は縦～斜めハケ(底部付近は指オサエ),底部面なし(少し尖る),最大径(25.0)cm,底部高18.0cm,底部残存75%		766, 767,1398,1399,1402	7トレ
	底部径22.5×高(24.0)	密 やや大きめの砂粒目立つ ～10mm/片多量,透やや多量,白少量,赤多量,雲微量	【桃】 外・内:7.5YR7/4にぶい橙,断:10YR5/2灰黄褐 〈やや良好〉	S24W28・W32(2層),S24W24・S24W32(図面60・61)	基壇テラス円筒7-1か
図6-5-25	Ⅴ群系円筒埴輪(畿内型)	底部,下から4段目・突帯3条残存(体部は外周の30%残存),下から2段目にスカシ孔,外面は調整不明瞭(一部斜めハケ残存),内面は調整不明瞭(指オサエあり),最大径(29.3)cm,底部高14.0cm、突帯間9.7・10.8cm(上から),Ⅴ群系円筒埴輪だがⅣ群系に類似する褐色の胎土,底部面なし(尖る),底部残存10%		1422	1トレ
	底部径20.0×高(41.2)	密 ～5mm/片やや多量,透中量,白少量,赤中量,雲微量	【橙】 外上部・内:5YR6/8橙,外下部:7.5YR7/6橙,断:10YR6/2灰黄褐 〈やや軟質〉	S12E8(図面29)	2段目斜面
図6-5-26	Ⅴ群系朝顔形埴輪(畿内型)	口縁部～頸部,上から2段目・突帯1条残存,口縁部高10.6cm,外面は調整不明瞭(指オサエあり),内面は斜め～横ナデか,口縁部残存20%,一部反転復元		3529, 3531,3533,3537,3538,3541,3542,4368,4381,4393	5トレ
	口径47.7×高(16.4)	密 大きめの砂粒目立つ ～20mm/片多量,透やや多量,白少量,黒微量,雲微量	【桃】 外・内:5YR6/4にぶい橙,断:5YR6/3にぶい赤褐 〈良好〉	S12W12G5・6・14・31・37・62(東列19),S12W12G12・21(3a層)	1段目テラス円筒5-19(西造出側)
図6-5-27	Ⅴ群系朝顔形埴輪(畿内型)	全身復元(円筒部の上半欠損あり,全体80%残存),円筒部5条6段,下から2・4段目にスカシ孔,外面は調整不明瞭・底部は強い斜めナデ(板ナデか),内面は縦ナデ・指オサエ,底部は少し重みによりつぶれる,口縁部内面にヘラ状工具による沈線？,口縁部突帯貼り付け部内面にはキザミ目状の工具痕あり,底部径23.2cm,口縁部高11.0cm,底部高13.5cm,突帯間8.8・10.0・9.0・(11.0)・8.6・10.0cm(下から),頸部径11.0cm,口縁部・底部ほぼ100%残存		3517～3519,3522～3528,3530,3566/3541,4218,4229,4373	5トレ
	口径41.9×高81.3	密 やや大きめの砂粒含む ～28mm/片やや多量,透中量,白少量,赤やや多量,黒微量,雲微量	【桃】 外・内・断:5YR6/4にぶい橙～5YR6/6橙 〈やや良好〉	S8W12G14・15・16・23・24(東列8)/S8W12G23・31(3a層),S12W12G9・62(3a層)	1段目テラス円筒5-8(西造出側)
図7-1-1	須恵器 瓶類(体部)	壺またはほそうの体部,一部自然釉あり,内外面は回転ナデ,全体残存10%以下(反転復元)		923	1トレ
	体部径11.2×高(4.4)	密 ～1mm/黒少量	外:2.5Y5/1黄灰,自然釉:2.5Y7/4浅黄,内・断:2.5Y6/2灰黄 〈良好〉	S8E12～E16	東造出
図7-1-2	須恵器 高杯(脚部)	内外面には回転ナデ,内面にしぼり痕,方形スカシ2箇所残存(3方スカシか),全体残存10%以下(反転復元)		92	1トレ
	脚部上端径5.2×高(3.9)	密 ～2mm/おそらく片ごく少量,透微量,白少量,赤微量,黒微量	外:2.5Y6/2灰黄(一部5Y4/1灰),内:2.5Y6/2,断:5YR6/6橙 〈軟質(生焼け)〉	S12E12(2層)	東造出

図7-1-3	須恵器 器台(杯部)	内面は同心円文タタキ(タタキ後回転ナデ),外面はタタキ後にカキ目,カキ目後に波状文,全体残存10%以下		354	1トレ
	幅(8.4),残存高(7.2)	密 ～1mm/片少量,透微量	外:7.5YR4/1褐灰,内:5Y5/1灰,断:5YR5/3にぶい赤褐 〈やや軟質〉	S12E20(図面9)	東造出東側斜面
図7-1-4	須恵器 器台(杯部)	外面にカキ目(12本/1cm),沈線1条,波状文(カキ目後),内外面回転ナデ,外面こく一部タタキ痕,口縁25%残存(反転復元)		19,80,101,1345,2033	1トレ,13トレ
	口径33.6×高(6.3)	密 ～1mm/白少量,黒微量	外:2.5Y4/1黄灰,内:2.5Y5/2暗灰黄,断:2.5Y6/2灰黄～5YR4/2灰褐 〈良好〉	S12E20(1～2層)/S12E16(2層)/S8E12(1層)/1トレ S12E16G27(図面20)/13トレG区(3層)	東造出中央～北西部
図7-1-5	須恵器 器台(脚部)	外面カキ目(8本/1cm)後に波状文(10本/1cm),沈線2条,波状文後に方形スカシ(2箇所),内外面回転ナデ,全体残存10%以下		147	1トレ
	幅(5.3)×高(5.7)	密 ～3mm/おそらく片少量,透少量,白少量,黒少量,灰色チャ2個	外:5Y7/1灰白,内:10YR8/2灰白,断:2.5Y8/3淡黄 〈やや良好〉	S12E16(2～3層)	東造出
図7-1-6	須恵器 器台(脚部)	筒状器台脚部か,外面カキ目後に波状文,沈線3条,方形スカシ残存,内面回転ナデ,天地逆の可能性,全体残存10%以下		107	1トレ
	幅(6.9)×高(7.3)	密 ～3mm/おそらく片微量,透微量,白少量,黒中量	外:10YR6/1褐灰,内・断:10YR7/2にぶい黄橙 〈やや良好〉	S12E12(2・3層)	東造出
図7-1-7	須恵器 器台(脚部)	カキ目(5本/1cm)の後に波状文,沈線2条,スカシ2箇所残存,内面は回転ナデ,天地逆の可能性あり,全体残存10%以下		923	1トレ
	幅(6.0)×高(7.5)	密 ～2mm/白中量	外・内・断:2.5Y6/1黄灰 〈良好〉	S8E12～E16	東造出
図7-1-8	須恵器 器台(脚部)	カキ目あり,カキ目後に沈線2条,スカシ2箇所残存(三角形スカシか,波状文の後),内面は回転ナデ,全体残存10%以下		80	1トレ
	幅(4.5)×高(4.5)	密 ～1mm/白少量,黒微量	外:2.5Y6/1黄灰,内:2.5Y7/2灰黄,断:10YR7/3にぶい黄橙～5/2灰黄褐 〈やや良好〉	S12E16(2層)	東造出
図7-1-9	須恵器 器台(脚部)	沈線計4条残存,カキ目後に波状文,方形スカシ一部残存,内面回転ナデ,一部自然釉(2.5Y3/1黒褐),全体残存10%以下		67	1トレ
	幅(4.1)×高(6.5)	密 ～1mm/白少量,黒微量	外:2.5Y6/2灰黄,内:2.5Y6/1黄灰,断:7.5YR4/1褐灰 〈良好〉	S12E24(2層)	東造出東側斜面
図7-1-10	須恵器 器台(脚部)	内外面は回転ナデ,カキ目後に沈線,沈線後に波状文,スカシ2箇所残存(三角形スカシか,波状文の後),全体残存10%以下		923	1トレ
	幅(5.6)×高(8.5)	密 ～1mm/おそらく片微量,透微量,白中量,黒少量	外・内:2.5Y6/1黄灰,断:2.5Y6/2灰黄 〈良好〉	S8E12～E16	東造出
図7-1-11	須恵器 器台(脚端部)	外面にカキ目(5本/1cm),沈線2条,波状文(カキ目後),内外面回転ナデ,脚端部に工具痕,脚端部10%残存(反転復元)		8	1トレ
	脚部径26.6×高(6.5)	密 ～2mm/透少量,黒少量	外・内・断:10YR8/2灰白 〈軟質(生焼け)〉	S12E20(表採)	東造出東側斜面
図7-1-12	須恵器 器台(脚端部)	沈線1条(もしくは2条),内外面は回転ナデ,図7-1-13と同一個体の可能性あり,全体残存10%以下		134	1トレ
	幅(5.5)×高(3.5)	密 ～2mm/白少量,黒微量,(片あり？)	外・断:2.5Y6/2灰黄,内:2.5Y7/2灰黄 〈やや軟質〉	S12E0(1～2層)	2段目斜面
図7-1-13	須恵器 器台(脚端部)	外面に沈線3条(うち1条は細い),スカシ一部残存(三角形か),内外面は回転ナデ,脚端部残存10%以下(反転復元)		134	1トレ
	脚部径26.8×高(4.6)	密 ～1mm/おそらく片微量,白少量,黒微量	外・内・断:2.5Y8/3淡黄 〈軟質(生焼け)〉	S12E0(1～2層)	2段目斜面
図7-1-14	須恵器 器台(杯部)	杯部と脚部の接合部,杯部内面に同心円文タタキ痕(杯部外面の脚部貼り付け部にもタタキ痕),外面に突帯貼り付け(刻み目),全体残存10%以下		134	1トレ
	幅(6.5)×高(1.7)	密 ～1mm/白少量,黒微量	外:2.5Y6/1黄灰,内:2.5Y6/2灰黄,断:5YR4/1褐灰 〈良好〉	S12E0(1～2層)	2段目斜面
図7-1-15	須恵器 壺(口縁)	外面にカキ目(10～12本/1cm),内外面は回転ナデ,口縁15%残存(反転復元)		138, 162	1トレ
	口径18.8×高(2.8)	密 ～3mm/おそらく片少量,黒微量	外:N5/0灰,内:2.5Y6/1黄灰,断:2.5Y7/1灰白 〈良好〉	S12E0～E4(2層)/S12E0(2・3層)	2段目斜面
図7-1-16	須恵器 壷(頸部)	内面は同心円文タタキ,外面はタタキ後にカキ目,全体残存10%以下		134, 155	1トレ
	幅(10.8)×高(4.5)	密 ～1mm/白微量,黒微量	外・断:2.5Y6/2灰黄,内:N5/0灰 〈やや良好〉	S12E0(1～2層)/S12E0～E4(2～3層)	2段目斜面
図7-2-17	須恵器 大甕	頸部径24.3cm,体部最大径58.75cm,外面はタタキ後にカキ目,内面は同心円文タタキ,頸部内外面は回転ナデ,頸部外面には波状文,2条沈線が2組(計4条あり),頸部内面の一部に沈線状の擦痕あり,ほぼ全体残存		1431・1436主体 /66,147,163,356,436,721,884,894,911,921,922,957,962,967,971,977,983,984,1057～1060,1062,1066,1067,1339,1340,1342,1344,1345,1369,1377,1386,1423,1435	1トレ
	口径33.7×高74.2	密 ～10mm/片中量,透少量,白少量	外・内:10Y5/1灰～4/1灰,断:2.5YR3/4暗赤褐 〈やや良好〉	S12E16G43・51(図面24)/S12E16G3・13・19・25・27～29・34～36・41～44・49～52・54・59・60,S12E12・20・24,S8E12・E16	東造出中央部
図7-3-1	須恵器 杯蓋(つまみ)	つまみのみ残存(つまみは完存),上面やや凹む,高杯の蓋か,整理時は杯蓋A		3082	5トレ
	つまみ径2.9×高1.5	密 ～5mm/片中量,白少量,赤微量	外:2.5Y5/2暗灰黄,断:2.5Y5/2～7.5YR6/6橙 〈やや軟質〉	S8W16G24・32(No.64,3a層,北辺埴輪列付近)	西造出北西部
図7-3-2	須恵器 杯蓋	径3.6cmのつまみあり(上面凹む),天井部に2条の沈線を施しその間に櫛状工具による列点文,内外面回転ナデ,高杯の蓋か,全体残存70%(口縁残存10%),口縁部の一部反転復元,整理時は杯蓋M		267, 727,3086	5トレ
	口径11.4×高5.6	密 ～1mm/白少量,黒少量	外:N3/0暗灰,内・断:7.5Y7/1灰白 〈良好・硬質〉	S12W12,S8W12,S16W12G29・31・32・40・55(No.67,3層)	西造出東半部
図7-3-3	須恵器 杯蓋	径3.3cmのつまみ完存(上面凹む),口縁部欠損,天井部は回転ヘラケズリ(内面は回転ナデ),肩部段あり,外面に自然釉,ロクロ右回り,一部反転復元,全体残存25%,整理時は杯蓋B		4798	5トレ
	残存径(8.3)×高(2.9)	密 ～1mm/白微量,赤微量	外:5Y6/2灰オリーブ,内・断:2.5Y7/2灰黄 〈良好〉	S20W24G52	基壇テラス
図7-3-4	須恵器 杯蓋か	有蓋高杯の蓋か？(杯身の可能性もあり),外面ヘラケズリ・内面回転ナデ,ロクロ左回り,他の器種と異なる色調・胎土(黄白色),整理時はヘラ削りF		3432	5トレ
	(5.2)×(4.2)×高(1.1)	密 ～1mm/白少量,黒少量	外:2.5Y7/4浅黄,内・断:2.5Y7/2灰黄 〈良好〉	S12W24G60(No.205),基壇埴輪西列3(204据付坑内)	基壇テラス
図7-3-5	須恵器 杯蓋か	蓋か(杯身の可能性も,あり),口縁部欠損,外面回転ヘラケズリ・内面回転ナデ(内面中心部不定方向のナデ),ロクロ左回り,全体残存10%以下,反転復元,整理時はヘラ削りH		4762	5トレ
	(4.0)×高(1.4)	密 やや砂粒目立つ ～3mm/おそらく片微量,透少量,白少量	外・断:2.5Y6/1黄灰,内:2.5Y5/1黄灰 〈良好〉	S16W12G10(3b層,1段目テラス円筒埴輪25周辺)	西造出南東部
図7-3-6	須恵器 杯蓋	高杯の蓋か,径3.1cmのつまみあり(上面凹む),天井部回転ヘラケズリ(内外面回転ナデ),全体残存70%(口縁残存40%),整理時は杯蓋L		764, 796	5トレ
	口径16.8×高6.1	やや粗い ～5mm/片微量,透少量,白微量,赤中量,黒少量	外:10Y6/1灰,内:2.5Y7/1灰白,断:5YR6/6橙 〈軟質・やや生焼け〉	S12W16(2～3層),S12W16(1～3層)	西造出北西部
図7-3-7	須恵器 杯蓋	天井部欠損,内外面回転ナデ(天井部の一部回転ヘラケズリ残る),全体残存10%以下(口縁残存10%),反転復元,整理時は杯蓋F		5097	5トレ
	口径14.0×高(3.3)	密 ～1mm/白少量	外:7.5Y6/1灰,内:7.5Y5/1灰 〈良好〉	5トレンチ周辺 排土	西造出か
図7-3-8	須恵器杯蓋	天井部欠損,肩部沈線状になる,内外面回転ナデ,全体残存5%(口縁残存10%以下),反転復元,整理時は杯蓋C		751, 764	5トレ
	口径16.0×高(4.2)	密 ～3mm/片少量,透少量,白微量,赤微量	外・内:10YR5/2灰黄褐,断:7.5YR5/6明褐 〈軟質(生焼け)〉	S12W16(3層),S12W16(2～3層)	西造出北西部
図7-3-9	須恵器 杯蓋	口縁部欠損,同一個体4片にわかれ接合せず,天井部にヘラ記号(直線のみ確認),肩部沈線状になる,外面回転ヘラケズリ・回転ナデ(内面回転ナデ),ロクロ右回り,全体残存20%,反転復元,整理時はヘラ削りA		3085～3087,3692	5トレ
	推定口径15.6×高(2.0)	密 ～1mm/白少量,黒中量(片おそらくあり)	外:2.5Y3/1黒褐～2.5Y4/1黄灰,内:2.5Y5/1黄灰,断:2.5Y6/2灰黄 〈良好〉	S16W12G28・29・31・32・36・40・55(No.67,3a層),S16W12G23(東列33内)	西造出南東部
図7-3-10	須恵器 杯蓋	口縁部欠損,天井部回転ヘラケズリ(中心部ヘラケズリ及ばず粘土盛り上がる),天井部の一部にハケ状工具痕),内面回転ナデ(内面中央は平行ナデ),ロクロ左回り,全体残存50%,反転復元,整理時はヘラ削りI		5095	5トレ
	復元口径15.0×高(0.7)	密 ～2mm/透微量,白少量	外・断:2.5Y6/1黄灰,内:N5/1灰 〈良好〉	5トレンチ 排土	西造出か
図7-3-11	須恵器 杯身	受部径15.2cm,内外面回転ナデ・底部外面回転ヘラケズリ,内面中央に同心円文タタキあり,口縁部の端面明瞭でない,全体残存80%(口縁残存70%),整理時は杯身J		764,3109～3114	5トレ
	口径13.2×高4.8	密 ～3mm/透少量,白微量(おそらく片微量)	外・内:N5/0灰 〈良好・硬質〉	S12W16G1・7～9・15・16,S12W12G62(No.85,3a層)＊G1・G9はS16W16の間違いか	西造出中央部
図7-3-12	須恵器 杯身	口縁部欠損,受部径13.7cm,内外面回転ナデ・底部回転ヘラケズリ,ロクロ左回り,全体残存30%,反転復元,整理時は杯身I(ヘラ削りE)		1450, 4711, 5201, 5203	5トレ
	推定口径11.6×高(2.9)	密 ～2mm/片少量,透微量,白少量,黒チャ1点	外:10YR8/2灰白,内:2.5Y7/2灰黄,断:10YR7/3にぶい黄橙 〈軟質(生焼け)〉	5トレンチ排土,S12W16,表採,西造出周辺表採	西造出北西部
図7-3-13	須恵器 杯身(高杯か)	口径の大きさからおそらく高杯の杯部,受部径20.4cm,同一個体4片あり(接合せず),内外面回転ナデ・底部回転ヘラケズリ,杯部全体残存20%(受部残存40%),反転復元,整理時は杯身D		3052,3086, 222,4356, 224, 202	5トレ
	推定口径18.0×高(3.7)	密 ～3mm/透微量,白少量,赤微量,黒微量	外:2.5Y4/1黄灰,内・断:2.5Y6/1黄灰 〈良好〉	S20W16G57・S16W16G56(No.39),S16W12G29(No.67),S16～S20W12(3層),S12W12(3a層),S16W20(3層),S16W12(3層)	西造出南東部
図7-3-14	須恵器 杯身(高杯か)	高杯の杯部か,口縁部の立ち上がりが小さい,受部径19.2cm,内外面回転ナデ,全体残存10%以下(口縁残存5%),反転復元,整理時は杯F		225	5トレ
	口径17.0×高(3.1)	密 ～2mm/片微量,白少量	外:2.5Y5/2暗灰黄,内:2.5Y6/1黄灰,断:2.5Y6/1～一部5YR5/6暗赤褐 〈良好〉	S16W16(3層)	西造出南西部
図7-3-15	須恵器 高杯(脚部)	小形,長脚2段長方形スカシ(3方),スカシ間に2条沈線,杯部欠損,脚部上端径3.0cm,内外面回転ナデ,脚部内面上半にしぼり痕,一部自然釉,脚部残存90%(脚端部残存80%),整理時は高杯脚部T		3105, 3106, 3114, 3401, 3403	5トレ
	脚端部径8.4×高(12.8)	密 ～2mm/おそらく片微量,透少量,白少量	外・内:N4/1灰,断:5R4/1暗赤灰 〈良好・硬質〉	S12W12G40・48・56・62(No.82・85・182・184,B1),S16W12G25・33(No.82)	西造出中央部
図7-3-16	須恵器 高杯(脚部)	小形,長脚2段長方形スカシ(3方),スカシ間に2条沈線,杯部欠損,脚部上端径2.8cm,内外面回転ナデ,脚部内面上半にしぼり痕,一部自然釉脚部残存80%(脚端部残存95%),一部反転復元,整理時は高杯脚部U		3106, 3135, 3350, 3360, 3412, 3413	5トレ
	脚端部径8.3×高(11.9)	密 ～3mm/おそらく片微量,白中量,赤微量,黒微量	外・内:N4/0灰,断:5R4/2灰褐 〈良好・硬質〉	S12W12G40・48(No.82),S16W12G25・33・41・50・52・58(No.82・93・145・155・193,pit5・193,200の据付坑)	西造出中央部
図7-3-17	須恵器 高杯(脚部)	高杯(大形)の脚部,杯部・脚端部欠損(上面に杯部との剥離面あり),脚部上端径5.8cm,一部スカシ残存(おそらく3方長方形スカシ),内外面回転ナデ(内面にしぼり痕),全体残存10%以下,反転復元,図7-3-26と同一地点出土だが別個体,整理時は脚部B		3052	5トレ
	復元脚柱部幅(6.0)×高(3.5)	密 ～3mm/片少量,透少量,白少量	外:5Y5/1灰,内:N5/0灰,断:7.5YR5/4にぶい橙 〈良好〉	S20W16G57・S16W16G56(No.39)	西造出南側斜面
図7-3-18	須恵器 高杯(脚部)	高杯(大形)の脚部,杯部・脚端部欠損,脚部上端径5.2cm,一部スカシ残存(おそらく3方長方形スカシ),内外面回転ナデ(内面にしぼり痕),全体残存10%以下,反転復元,図7-3-25と同一個体の可能性あり,整理時は脚部A		225	5トレ
	幅(5.8)×高(3.1)	密 ～1mm/おそらく片少量,白微量,赤少量	外:2.5Y5/2暗灰黄,内:2.5Y6/2灰黄,断:7.5YR6/6橙 〈やや軟質(やや生焼け)〉	S16W16(3層)	西造出南西部
図7-3-19	須恵器 高杯(脚部)	高杯(大形)の脚部,杯部の一部残存(ナデ調整),脚端部欠損,脚部上端径7.4cm,脚部内外面回転ナデ(内面にしぼり痕),一部スカシ2方残存(おそらく3方長方形スカシ),全体残存10%以下,反転復元,整理時は脚部C		224, 225	5トレ
	復元脚柱幅(8.0)×高(5.2)	密 ～1mm/おそらく片少量,白少量,赤微量	外:2.5Y5/1黄灰,内:2.5Y5/2暗灰黄,断:10YR6/3にぶい黄橙～7.5YR5/4にぶい褐 〈良好〉	S16W20(3層),S16W16(3層)	西造出南西部～南側斜面
図7-3-20	須恵器 高杯(脚部)	高杯(大形)の脚部,杯部・脚端部欠損(杯部との剥離面あり),脚部上端径7.3cm,一部スカシ2方残存(おそらく3方長方形スカシ),内外面回転ナデ,一部黒斑のような自然釉あり,全体残存10%以下,反転復元,整理時は脚部E		4722	5トレ
	復元脚柱幅(8.0)×高(5.2)	密 ～2mm/おそらく片少量,白少量,赤微量	外:2.5Y4/1黄灰(自然釉)～2.5Y5/2暗灰黄,内:2.5Y5/2暗灰黄,断:5YR5/4にぶい赤褐～2.5Y5/2暗灰黄 〈良好〉	S12W20(埋め戻し土)	西造出西側斜面
図7-3-21	須恵器 高杯(脚部)	高杯(大形)の脚部,杯部・脚端部欠損(杯部との剥離面あり),脚部上端幅6.0cm,一部スカシ2方残存(おそらく3方長方形スカシ),内外面回転ナデ(内面にしぼり痕),一部黒斑のような自然釉あり,全体残存10%以下,反転復元,整理時は脚部F		194	5トレ
	復元脚柱幅(7.6)×高(7.5)	密 ～4mm/おそらく片少量,白少量	外:10YR6/2灰黄褐～2.5Y4/1黄灰(自然釉),内:10YR4/1褐灰,断:5YR5/4にぶい赤褐～10YR6/2灰黄褐 〈良好〉	S16～S20 W12～W20(2～3層)	西造出南半部
図7-3-22	須恵器 高杯(脚部)	高杯(大形)の脚部,杯部・脚端部欠損(杯部との剥離面あり),脚部上端径6.6cm,一部スカシ2方残存(おそらく3方スカシ),上半は長方形スカシ・下半は三角形スカシ(スカシ間に3条沈線),内外面回転ナデ(内面にしぼり痕),一部黒斑のような自然釉あり,,全体残存20%,反転復元,整理時は脚部G		3108	5トレ
	復元脚柱幅(10.5)×高(11.0)	密 ～3mm/片少量,白少量,赤微量	外:10YR4/1褐灰(自然釉)～2.5Y6/2灰黄,内:5Y5/1灰,断:7.5YR5/4にぶい褐 〈良好〉	S16W12G57(No.84,3a層)	西造出中央部
図7-3-23	須恵器 高杯(脚部)	高杯(小形)の脚部か(器壁は薄い),脚端部推定径19.0cm,脚端部肥厚部の上面は沈線状になる,内外面回転ナデ,全体残存10%以下,整理時は脚底部J		2068	5トレ
	(3.5)×(2.3)×高(1.0)	密 ～2mm/おそらく片少量,透少量,白少量	外:2.5Y4/1黄灰,内・断:2.5Y5/1黄灰 〈良好〉	2003年度 西造出表採(現場打ち合わせ時)	西造出か

図7-3-24	須恵器 高杯(脚部)	高杯脚部(中形か),同一個体2片,脚端部推定径18.0cm,一部スカシ残存(三角形か),全体残存10%以下,整理時は脚底部I		171, 205	5トレ
	(4.3)×(2.5)×高(2.8)	密 ～3mm/片少量,白少量,黒微量	外:10YR4/1褐灰,内・断:10YR5/2灰黄褐 〈良好〉	S20W12～W20,S12W16～W20(3層)	西造出か
図7-3-25	須恵器 高杯(脚部)	高杯(中形か)の脚部,内外面回転ナデ,スカシ確認できず,脚端部上部は沈線状になる,全体残存10%以下(脚端部残存25%),反転復元,整理時は脚底部A		3048, 3049, 3092	5トレ
	脚端部径11.4×高(2.4)	密 ～2mm/片少量,透少量,白少量,赤少量	外:5Y5/2灰オリーブ,内:5Y6/2灰オリーブ,断:7.5YR5/6明褐 〈やや軟質(やや生焼け)〉	S16W16G29・37・38(No.36),S16W16G35(No.70,3a層,南辺円筒17周辺)	西造出南西部
図7-3-26	須恵器 高杯(脚部)	高杯(中形か)の脚部,スカシ一部残存(長方形か三角形),スカシ下に沈線1条,内外面回転ナデ,一部自然釉あり,全体残存10%以下(脚端部残存10%),反転復元,図7-3-17と同一地点出土だが別個体,整理時は脚底部C		203 ,3052	5トレ
	脚端部径12.3×高(2.4)	密 ～2mm/片少量,白中量,透微量,赤微量	外:N4/0灰～N2/0黒(自然釉),内・断:10Y6/1灰 〈良好・硬質〉	S16W16(3層),S20W16G57・S16W16G56(No.39)	西造出南側斜面
図7-3-27	須恵器 高杯(脚部)	高杯(中形か)の脚部,スカシ一部残存(長方形スカシか),脚端部肥厚部上端は沈線状になる,内外面回転ナデ,全体残存10%以下(脚端部残存30%),反転復元,整理時は脚底部B		223 ,3049	5トレ
	脚端部径12.8×高(2.6)	密 ～1mm/片少量,透少量,白微量,赤微量	外・内:7.5Y5/1灰,断:5YR5/4にぶい赤褐 〈良好〉	S16・20W16(3層),S16W16G37・38(No.36)	西造出南西部～南側斜面
図7-3-28	須恵器 高杯(脚部)	高杯(大形)の脚部(他の高杯と異なり脚裾部が広がる形態),杯部と脚上半部欠損,上段長方形スカシ・下段三角形スカシ(3方スカシ),スカシ間に沈線1条,脚裾部に波状文(波状文後にスカシ),内外面回転ナデ,脚部残存40%(脚端部残存90%),一部反転復元,整理時は高杯脚部V		764, 751, 796, 4151	5トレ
	脚端部径15.0×高(7.8)	密 ～3mm/おそらく片微量,白少量,黒(チャか)少量	外:N4/0灰,内:2.5Y7/2灰黄,断:2.5Y5/1黄灰 〈良好・硬質〉	S12W16(1～3層,3a層)	西造出西半部
図7-3-29	須恵器高杯(脚部)	高杯(大形)の脚部,一部スカシ残存(三角形スカシか),脚端部肥厚部上端は沈線状になる,内外面回転ナデ,全体残存10%以下(脚端部残存10%),反転復元,整理時は脚底部F		224, 268	5トレ
	脚端部径18.0×高(1.4)	密 ～1mm/白微量	外:5Y5/1灰,内・断:5Y6/1灰 〈良好〉	S16W20(3層),S16W12(3層)	西造出南半部
図7-3-30	須恵器 高杯(脚部)	高杯(大形)の脚部,一部スカシ残存(三角形スカシか),脚端部はほとんど肥厚しない(5条ほど沈線状になる),全体残存10%以下(脚端部残存10%),反転復元,整理時は脚底部E		4742, 4743	5トレ
	脚端部径20.0×高(2.1)	密 ～4mm/片少量,透中量,白微量,赤少量,黒微量	外・内:5Y5/2灰オリーブ,断:7.5YR5/6明褐 〈軟質〉	S12W12G57(西造出北辺円筒埴輪10,据付坑)	西造出北辺埴輪列
図7-3-31	須恵器 高杯(脚部～杯部)	高杯(大形)の脚部～杯部,口縁部・脚端部欠損,脚部上端径6.0cm,上段長方形スカシ・下段三角形スカシ(3方スカシ),スカシ間に沈線2条,脚部内外面回転ナデ(内面にしぼり痕),杯部外面は回転ヘラケズリ,全体残存60%,図7-3-34に似るが別個体,整理時は脚部I・スカシO・ヘラ削りB		3057(主体)/4779,4767,764	5トレ
	(10.5)×高(11.6)	やや粗い やや砂粒目立つ ～5mm/片中量,透中量,白少量,赤中量	外・内:2.5Y6/3にぶい黄,断:5YR6/8橙 〈軟質・生焼け〉	S12W24G20・21・28・36(No.43,3c層)/S12W24G27,S12W16(2～3層)	西造出西半部
図7-3-32	須恵器 高杯(脚部)	高杯(大形)の脚部～杯部,杯部の大半欠損,脚部上端径6.8cm,上段に長方形スカシ・下段に三角形スカシ(3方スカシ),スカシ間に3条沈線,脚端部肥厚部上端は沈線状になる,内外面回転ナデ(内面にしぼり痕),脚部残存40%(脚端部残存30%),一部反転復元,図7-3-33と似るが別個体,整理時は高杯脚部H		751, 764, 3076	5トレ
	脚端部径17.2×高(13.7)	密 ～4mm/片少量,透少量,白中量,黒微量	外・内:N4/0灰～5Y5/1灰,断:5Y5/1灰～7.5YR5/4にぶい褐 〈良好〉	S12W16(3層),S12W16(2～3層),S12W16G28(No.58,3a層)	西造出北西部
図7-3-33	須恵器 高杯	高杯(大形,ほぼ完存),脚部上端径6.2cm,脚部上段は長方形スカシ・下段は三角形スカシ(3方スカシ),スカシ間に3条沈線,杯部底部は回転ヘラケズリ(その他内外面回転ナデ,内面にしぼり痕),脚端部肥厚部は沈線状に凹む,一部自然釉,全体80%残存(口縁部20%・脚端部80%),口縁の一部反転復元,図7-3-32と似るが別個体,整理時は高杯脚部S		764(主体)/751,796,3076,3077,3089,4151,4759,4761	5トレ
	口径15.3×脚部径16.9×高17.4,受部径18.0	密 ～2mm/片少量,透少量,白少量	外・断:N4/0灰,内:N5/0灰 〈良好・硬質〉	S12W16(2～3層)/S12W16G28(No.58)・G34(No.59,3a層),S16W16G9(No.68,3a層),S16W12G57(3a層),S12W16(2c層)	西造出中央～西部
図7-3-34	須恵器 高杯(脚部～杯部)	高杯(大形)の脚部～杯部(口縁部欠損),脚部上端径6.4cm,脚部上段は長方形スカシ・下段は三角形スカシ(3方),スカシ間に3条沈線,脚端部肥厚部は沈線状になる,内外面回転ナデ(杯部底部回転ヘラケズリ・内面にしぼり痕),図7-3-31に似るが別個体,全体残存60%(脚端部残存20%),一部反転復元,整理時は高杯脚部D・脚底部D		751, 764, 4151, 3089, 3090	5トレ
	脚端部径16.6×高(17.2),受部径19.1	密 ～3mm/片少量,透中量,白少量,赤少量,黒微量	外:2.5Y7/2灰黄,内:2.5Y6/2灰黄,断:2.5Y6/2灰黄～7.5YR7/6橙 〈軟質・生焼け〉	S12W16(3層・2～3層・2c層),S16W16G9(No.68),S12W16G9(No.68)＊S20W16G1(No.68)の間違いか	西造出南側斜面か
図7-4-35	須恵器 子持ち壺(小壺)	子持ち壺あるいは子持ち器台に伴う小壺の口縁部分(小杯や小蓋の可能性もあり),口縁部が受け口状,体部には長方形スカシ残存(全体で4方スカシか),体部外面および内面・スカシ部分に自然釉(受け口部には自然釉付着せず→蓋があった可能性),内外面回転ナデ,小壺残存30%,反転復元,整理時は器種不明E		3914	5トレ
	口径3.6×高(2.3)	密 ～1mm/透微量,黒微量	外:2.5Y6/3にぶい黄～2.5Y5/1黄灰(自然釉2.5Y3/1黒褐),内:2.5Y5/1黄灰,断:2.5Y6/1黄灰 〈良好〉	S16W8(2b層上面精査時)	2段目斜面
図7-4-36	須恵器 子持ち壺(小壺)	子持ち壺あるいは子持ち器台に伴う小壺の体部(口縁欠損),長方形スカシ2箇所残存(全体で6方スカシか),下部は本体との接合面の可能性あり,内外面回転ナデ,一部自然釉あり(外面・内面・スカシ部),天地逆の可能性あり,最大径4.4cm,小壺残存30%,反転復元,整理時は器種不明F		3091	5トレ
	幅(2.8)×高(3.3)	密 ～1mm/白少量	外・内・断:2.5Y5/1黄灰(自然釉2.5Y3/1黒褐) 〈良好〉	S16W16G5(No.69,3a層,南辺埴輪10周辺)	西造出南半部
図7-4-37	須恵器 器台(杯部)	器台の杯部(台付壺の壺部の可能性もあり),波状文・沈線1条あり,,下部にタタキ目残る,内外面回転ナデ,全体残存10%以下,図7-4-38～41と同一個体の可能性あり(少し胎土違う,40・41とは同一地点出土),整理時は器台A		4097	5トレ
	(6.0)×(3.0)×高(5.3)	密 ～1mm/白微量,黒微量	外・内:2.5Y5/1黄灰,断:2.5Y4/1黄灰 〈良好〉	S8W8G54(3d層)	2段目斜面
図7-4-38	須恵器 器台(脚部)	器台の脚部(筒状の形態か),波状文・沈線2条あり,スカシ2箇所残存(長方形と三角形？),内外面回転ナデ,天地逆の可能性あり,全体残存10%以下,図7-4-39と同一個体か(37・40・41とも可能性あり),整理時は器台B		3039	5トレ
	(4.8)×(1.6)×高(5.3)	密 ～3mm/おそらく片少量,白中量,黒(チャか)微量	外:2.5Y5/1黄灰～7.5YR5/3にぶい褐,内:2.5Y5/1,断:7.5YR5/3 〈良好〉	S12W20G54(No.26,3c層)	西造出西側斜面
図7-4-39	須恵器 器台(脚部)	器台の脚部(筒状の形態か),沈線2条・波状文あり,スカシ2箇所残存(長方形スカシか),内外面回転ナデ,天地逆の可能性あり,全体残存10%以下,図7-4-38と同一個体か(37・40・41とも可能性あり),整理時は器台B		2068	5トレ
	(5.0)×(1.0)×高(6.3)	密 ～3mm/おそらく片微量,透少量,白中量,赤微量,黒微量	外:2.5Y6/1黄灰～10YR5/2灰黄褐,内:N4/0灰,断:7.5YR6/4にぶい橙 〈良好〉	西造出表採(2003年度現場打ち合わせ時)	西造出か
図7-4-40	須恵器 器台(脚部)	器台の脚部(脚裾に近い部分),波状文・沈線2条あり(波状文は沈線の後),一部スカシ残存(三角形スカシか),内面回転ナデ,全体残存10%以下,図7-4-41と同一個体か(37～39とも可能性あり,37・41とは同一地点出土),整理時は器台C		4091	5トレ
	(8.6)×(3.4)×高(4.0)	密 ～3mm/白少量,透微量,黒微量	外:2.5Y7/1灰白,内:2.5Y6/1黄灰,断:10YR7/2にぶい黄橙 〈良好〉	S8W8G48(北畦畔,3d層)	2段目斜面
図7-4-41	須恵器 器台(脚端部)	器台の脚端部か(口縁部の可能性もあり),波状文あり,内外面回転ナデ,全体残存10%以下,反転復元,図7-4-40と同一個体か(37～39とも可能性あり,37・40とは同一地点出土),整理時は器台C		3319	5トレ
	脚端部径35.4×高(3.0)	密 ～2mm/白少量,透微量,片微量	外・内・断:N6/0灰 〈良好〉	S8W8G48(No.124,3b層)	2段目斜面
図7-4-42	須恵器 壺(頸部)	壺頸部(直口壺か広口壺か,短頸壺の可能性も),内外面回転ナデ,頸部復元径9.6cm,全体残存10%以下,反転復元,整理時は短頸壺A		4717	5トレ
	(13.3)×高(3.7)	密(緻密) ～1mm/白微量	外:2.5Y6/2灰黄,内・断:2.5Y7/3浅黄 〈やや軟質〉	S12W20(埋め戻し土)	西造出西側斜面
図7-4-43	須恵器 甕5-4	大甕で一番小さい,口縁部～肩部と底部残存(体部接合せず,破片多数あり),頸部～肩部と胴部外面にカキ目(14本/1cm,タタキ消される,頸部内外面回転ナデ),底部外面はタタキよく残る,体部内面は同心円文タタキ,全体残存15%(口縁残存50%),反転復元		3048,3068,3069,3115,3116,3375,3391,3409,3826,4027,4028,4036～4038,4064,4066,4738,4739,4761,4762	5トレ
	口径18.3×推定幅(34.6)×推定器高37.0	密 ～6mm/透微量,白少量,赤(チャか)微量	外・内・断:2.5Y6/2灰黄～2.5Y6/1黄灰 〈良好〉	S12W8G48・55・56,S12W12G16,S16W8G34・56・58・59(No.51・52),S16W12G10・22・27・29・30・45・52・57(No.86・165・174・190),S16W16G29(No.36)	2段目斜面～西造出南東部
図7-5-44	須恵器 甕5-3	ほぼ完存,大甕で3番目の大きさ,頸部～胴部にかけてカキ目(6本/1cm,タタキ後にカキ目,タタキを消すがカキ目に間隔があるのでタタキ残る),内面は同心円文タタキ,口縁部回転ナデ,口縁部～肩部付近に自然釉,底部付近に円形の焼き台の痕跡3箇所(径12.0cm前後,須恵器杯を利用か,焼き台痕跡内側は焼成不十分),大甕5-1・5-2据付坑の西側でまとまって出土しているが据付坑確認できず		205,751,764,4151,4313,4670,4735,4745,4751～4758,4761	5トレ
	口径19.3×高38.5,胴部最大径39.0	密 ～5mm/片中量,白微量,黒微量	外:口縁N3/0灰～4/0灰・肩部2.5YR4/1赤灰・体部N4/0・底部5Y7/1灰白,内:口縁N6/0灰・体部2.5Y6/1黄灰・底部N4/0,断:5R4/1暗赤灰 〈良好・硬質〉	S12W16G5・12・13・19～22(甕5-1・5-2据付坑の西側),S8W20・S12W20(2層),S12W16～20(2c・3層)	西造出中央部
図7-5-45	須恵器 甕5-2	ほぼ完存,大甕で2番目の大きさ,頸部～胴部にかけてカキ目(タタキ後にカキ目,タタキを消すがカキ目が不十分のためタタキ残る),内面は同心円文タタキ,口縁部回転ナデ,底部付近に円形の焼き台の痕跡3箇所(不明瞭,須恵器杯を利用か,若干回む箇所あり),大甕5-1の北側に据付坑,整理時は北大甕		266,751,764,2068,3328,3329,3377,3378,4142,4321,4354,4554,4595,4731～4733,4740～4744,4748～4751	5トレ
	口径22.6×高48.2,胴部最大径42.8	密 ～2mm/白少量	外・内:10YR6/2灰黄褐～10YR3/1黒褐,断:5YR5/2灰褐 〈良好〉	S12W12G51・58～60(No.132・167北大甕),S12W16G2～4・10～12(No.132・167北大甕),S8W12,S8W16G16,S12W12(3a層),S12W16(2～3層),S16W16(3a層),西造出表採	西造出中央部
図7-5-46	須恵器 甕5-1	ほぼ完存,大甕で1番大きい,口縁部は波状文2帯とその間に2～3条の沈線,胴部外面タタキ(カキ目なし),内面同心円文タタキ,口縁部回転ナデ,肩部に若干自然釉,底部付近に凹み2箇所あり(焼き台の痕跡か),大甕5-2の南側に据付坑,整理時は南大甕		3331(口縁主体)/727,3084,3330,3332～3334,3377,3379,3380,3734,3736,4435,4545,4708,4730,4734,4735,4737,4743,4745,4746,4751,4755,4760	5トレ
	口径45.4×高80.6,胴部最大径68.9	密 やや砂粒目立つ ～10mm/片中量,透少量,白中量	外:上半5YR5/2灰褐～10YR4/1褐灰,下半10YR3/1黒褐,内:口縁部10YR5/2灰黄褐,断:5YR5/2灰褐 〈良好〉	S12W12G61(No.133南大甕)/S12W12G10・11・17・18(No.65:1段目テラス円筒14付近),S12W12G49・52～54・56・59～62(No.133南大甕・167・168),S12W16G3～6・12・21・54(No.167),S16W12G36,S8W12(3層)	西造出中央部
図7-4-1	土師器 椀か｡高杯	椀底部欠損のため椀か･高杯か判別できず,口縁部は須恵器杯のような形状(口径小さい),外面回転ナデか？,椀部残存40%(口縁部残存10%),図7-4-2と同一個体の可能性あり,反転復元		3410	5トレ
	径7.8×高3.2	密 砂粒ほとんどなし ～2mm/片微量,透微量,白微量	【橙】 外・内・断:7.5YR6/6橙 〈やや軟質〉	S16W12G43(No.191,pitB4,3a層)	西造出南東部
図7-4-2	土師器 高杯(脚部)	杯ほとんど欠損(底部一部残存),脚端部欠損(脚柱部ほぼ完存),外面にねじったような斜めの稜線あり(しぼり痕か),内面にしぼり痕,調整不明瞭,全体残存30%,図7-4-1と同一個体の可能性あり		3392	5トレ
	径(3.6)×高(5.4)	密 砂粒ほとんどなし ～1mm/片微量,透微量,白微量,赤微量,雲微量	【橙】 外:7.5YR6/8橙,内・断:2.5Y6/2灰黄 〈やや軟質〉	S16W12G52(No.175,3a層)	西造出南東部
図7-4-3	土師器 高杯(脚部)	杯部・脚端部欠損(脚柱部完存),外面にねじった斜めの稜線(しぼり痕か),内面に粘土接合痕,調整不明瞭,全体残存40%		3095	5トレ
	径(4.8)×高(7.0)	密 砂粒ほとんどなし ～2mm/片微量,透少量,白微量,赤微量,雲微量	【にぶい黄褐】 外・内・断:10YR7/6明黄褐 〈やや軟質〉	S12W16G22(No.73,3a層)	西造出中央部
図7-4-4	土師器 高杯(脚部)	杯部・脚端部欠損,杯部接合部で剥離,調整不明瞭,全体残存10%以下,反転復元		4151, 764	5トレ
	径(5.0)×高(4.0)	密 砂粒ほとんどなし ～5mm/片少量,透少量,赤微量,雲微量	【にぶい黄褐】 外・内・断:7.5YR8/6浅黄橙 〈良好〉	S12W16(2層),S12W16(2～3層)	西造出北西部
図7-4-5	土師器 高杯(脚部)	杯部欠損,摩滅のため調整不明瞭,全体残存40%(脚部残存70%,脚端部残存20%)		3093	5トレ
	脚部径7.3×高(6.2)	やや粗い 砂粒多く目立つ ～5mm/片多量,透中量,白少量,赤微量,雲微量,黒微量	【にぶい黄褐】 外・内・断:10YR7/4にぶい黄橙 〈やや軟質〉	S12W16G14(No.71,3a層)	西造出中央部
図7-4-6	土師器 壺(口縁部)	外面横ナデ・内面調整不明瞭,全体残存10%以下(口縁部残存10%以下),図7-4-7と同一個体の可能性がある破片出土場所と隣接地点で出土(本来墳丘に置かれたものか)		3841	5トレ
	3.3×1.5×(2.4)	密 砂粒ほとんどなし ～1mm/片微量,透少量,赤少量,雲微量	【にぶい黄褐or橙】 外:5YR7/6橙,内:10YR8/3浅黄橙色,断:7.5YR6/4にぶい橙 〈良好〉	S8W8G36(2b層)	2段目斜面
図7-4-7	土師器 壺(体部)	外面ミガキ調製・内面調整不明瞭,一部黒斑か,横方向の沈線状の工具キズあり,全体残存10%以下,同一個体の可能性がある破片(No3845)は2段目斜面から出土(図7-4-6の出土地点隣接地)		3834, 752	5トレ
	(9.0)×(1.0)×(4.5)	密 砂粒ほとんど含まない ～2mm/片少量,透少量,赤微量	【にぶい黄褐】 外:10YR8/3浅黄橙～5YR6/6橙,内・断:10YR8/3浅黄橙 〈やや良好〉	S8W12・S12W12北畦畔(1層),S12W16撹乱	2段目斜面～西造出